



Title	日本統治下台湾における歌舞伎・浄瑠璃を中心とする 諸芸能興行研究
Author(s)	中尾, 薫
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104306
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本統治下台湾における 歌舞伎・浄瑠璃を中心とする諸芸能興行研究

課題番号 23K00117

2023 年度 ～ 2025 年度

基盤研究（C）研究成果報告書

2026 年 3 月

研究代表者 中尾 薫（大阪大学大学院人文学研究科）

目次

まえがき

口絵

I 論文集

1 日本統治期台湾演劇の概要――旧劇・新劇・皇民化劇――

岩澤 侑生子

一、日本統治期初期の台湾演劇

二、一九二〇年代～一九三〇年代前半の新劇

三、皇民化政策

四、一九三〇年代後半の新劇

五、旧劇への弾圧

六、一九四〇年代の台湾演劇――「青年劇」

七、演劇挺身隊・台湾演劇協会・厚生演劇研究会

1

7

14

16

16

19

20

21

22

25

30

2 日本統治下の台湾における大衆芸能の興行 ―タカマチとしての博覧会―

蘭田 郁

一、はじめに

二、台湾のタカマチ興行

三、タカマチ興行と博覧会

四、台湾博覧会のタカマチ興行 ―女相撲と活動人形―

五、おわりに

3 日本統治期台湾における浄瑠璃文化 ―『台湾日日新報』記事調査を主軸として―

川下 俊文

一、はじめに

二、浄瑠璃文化の諸相 ―人形浄瑠璃・女義太夫・義太夫芸妓・素人義太夫―

三、人形浄瑠璃諸座の台湾巡業

四、女義太夫と素人義太夫

37 37 41 45 47 49 51 53 59

五、台北花柳界と浄瑠璃文化

63

六、むすびにかえて — 昭和期の台湾浄瑠璃界 —

65

4 台湾に渡った歌舞伎役者たち — 「台北役者評判記」による —

日置 貴之

72

一、はじめに

72

二、「台北役者評判記」連載の経緯

72

三、「台北役者評判記」に取り上げられた役者

76

(1) 芸風・容姿等

76

(2) 来台時期

77

(3) 内地での芸歴等

78

(4) 私生活等

80

四、おわりに

80

5 日本統治下台湾における新演劇興行の推移―高松豊次郎参入以前の動向を中心に―

中尾 薫

一、はじめに

84

二、高松豊次郎の履歴と台湾での活動

86

三、高松豊次郎演劇界参入の動機

92

四、演劇改良運動との関係

97

五、高松豊次郎渡台以前の新演劇興行

100

六、本島人向け劇場への方角転換

107

七、まとめ

112

6 日本統治下台湾における能楽

王 冬蘭

一、はじめに

115

二、前半期における主な指導者と社中（一九一〇年代後半）

116

（1） 觀世流（台北）	116
（2） 觀世流（台南）	119
（3） 喜多流（台北）	122
三、 後半期における主な指導者（一九一〇年代後半～一九四五）	124
（1） 觀世流	124
（2） 喜多流	125
四、 著名人における能楽指導者	127
五、 台湾における鷺流狂言の伝承	128
六、 まとめ	130

II 資料編

川下 俊文

1 日本統治下台湾における浄瑠璃・義太夫関係記事

(1) 明治

(2) 大正

(3) 昭和

2 記事一覧

(1) 明治

(2) 大正

(3) 昭和

あとがき

著者紹介

451 449 434 407 383 383 282 216 135 134 133

まえがき

中尾 薫

本書はJSPS科研費23K00117「日本統治下台湾における歌舞伎・浄瑠璃を中心とする諸芸能興行研究」(2023～2025年度、基盤研究C)の研究成果報告書である。ただし、本研究の前身であるJSPS科研費18K00234「日本統治下の台湾における歌舞伎・浄瑠璃史の構築―現地資料に基づく基礎研究と考察」(2018～2023年度、基盤研究C)の研究成果報告をも兼ねるものである。研究構成員は以下の通りである。所属肩書は二〇二六年三月現在。

研究代表者：中尾 薫(大阪大学人文学研究科教授)

研究分担者(18K00234) ↓ 研究協力者(23K00117)：日置貴之(明治大学教授)

研究分担者(18K00234) ↓ 研究協力者(23K00117)：王冬蘭(帝塚山大学元教授)

研究協力者：川下俊文(日本大学・明星大学非常勤講師)

本書の執筆者は右の四名に加えて、「日本統治下の台湾における歌舞伎・浄瑠璃史の構築―現地資料に基づく

基礎研究と考察」(18K00234)の際に開催したオンライン公開講演会で報告していただいた内容に基づいて、岩澤侑生子氏(俳優、司会、中日翻訳家)と、藺田郁氏(大阪大学中之島芸術センター特任研究員)にご寄稿いただき、多角的な視点から本課題を考察するための概要を示すことを試みた。

これまでの主な研究

日本統治下台湾における演劇・芸能については、台湾演劇史研究の成果として進展しており、また近年では台湾(本島)で日本本土(内地)からの移植者によって様々な文化活動が行われていたことが明らかになっている。台湾で活動がみとめられる演劇・芸能を大まかにジャンル分けすると、

- ① 壮士劇・新演劇・正劇などの近代劇
- ② 映画
- ③ 寄席演芸
- ④ 邦楽(レコードを含む)
- ⑤ 能楽
- ⑥ 旧劇(歌舞伎)

であり、その詳細については各専門分野において多彩な研究成果が構築されつつある。本研究はこのうち、旧劇(歌舞伎)、義太夫・浄瑠璃に関する基礎資料の構築と考察を行い、特に同時代における演劇興行の実態を加盟す

る一助となることを目指している。以下では、①～⑥の先行研究の状況について、不十分ながらも整理しておきたい。

① 壮士劇・新演劇・正劇などの近代劇に関しては、台湾人知識層による新劇運動と結びついたこともあって、日台双方の近現代演劇研究者によって研究が展開されている。台湾においては、邱坤良『旧劇與新劇日治時期臺灣戲劇之研究（一八九五～一九四五）』（自立晚報社文化出版部、一九九二年）、楊渡『日捩時期台湾新劇運動（一九二三～一九三六）』（時報文化出版企業有限公司、一九九四年八月）を嚆矢として、二〇〇〇年代には石婉舜が際立った研究論文を複数発表している。また石婉舜、賴品蓉によるプロジェクト研究「台湾早期戲院普及研究（1895-1945）ⅠⅡ」では、植民地時代にあった劇場の概要や場所をデジタルマッピングした「台湾老戲院文史地図1895-1945」(<http://mapnet.tw/theater/>)を公開している。この地図には、日治時代に建設された劇場の場所が示されており、有益である。

いっぽうで、日本では、近代文学の枠組みで研究が展開されていた。成果として中島利郎・河原功・下村作次郎『台湾戯曲・脚本集』1～6（日本統治期台湾文学集成 1～30、二〇〇二～二〇〇七年、緑蔭書房）をあげておきたい。演劇研究においては、二〇〇〇年代になって、主に台湾における新劇運動の発端として位置づけられる明治四四年（一九一）の川上音二郎一座の台湾公演を中心に研究されるようになった。成果としては井上理恵「日本統治で生まれた川上の演劇「台湾鬼退治」、「オセロ」、生蕃討伐」——（『吉備国際大学研究紀要 社会学部』一九、二〇〇九年）がある。なお、井上氏の川上音二郎研究は、井上理恵『川上音二郎と貞奴——明治の演劇はじまる』（社会評論社、二〇一五年）、『川上音二郎と貞奴Ⅱ——世界を巡演する』（同、二〇一六年）『川上音二郎と貞奴Ⅲ——ストリートプレイ登場する』（同、二〇一八年）にまとめられている。

ほか、李宛儒「日本統治下における台湾近代劇の生成と発展―植民地知識人の演劇活動の系譜を中心に―」（二〇一二年、名古屋大学提出博士論文）等、博士論文の論題としてとりあげられる例も多く、今なお研究は進んでいる。また、新劇運動は大東亜戦争の局面が激化すると皇民化運動という形で制限される。これについては文化政策という面から分析された論考に、陳怡如『日本統治下の台湾総督府による文化政策の構築過程とその特質に関する研究―一八九五年―一九三六年の「表演芸術」に対する諸施策からの考察』（二〇一九年博士論文、神戸大学）もある。

②映画に関する研究も多い。呂訴上『台湾電影戲劇史』（銀華出版部、一九六一年九月）は、上述の新劇運動研究においても基本書として参照されるが、研究書ではないため、近年見直しの対象ともなっている。台湾では、呂龍彦『日治時期台湾電影史』（台北・玉山社、一九九八年）、日本では笹田慶子『近代アジアの映画産業』（青弓社、二〇一八年）の第5章「帝国キネマ演芸と台湾」、三澤真美恵『帝国』と「祖国」のはざま―植民地台湾映画人の交渉と越境』（岩波書店、二〇一九年）、川瀬健一『日本統治下の台湾映画史』（東洋思想研究所、二〇二二年）なども出版されている。なお、主に①②の研究題材を総合的に扱った国際シンポジウム「日本演劇・映画人の台湾時代―植民地舞台にみる文化的交錯―」（早稲田大学演劇博物館、二〇一九年十一月一三日）が開催され、予稿集が出されている。

③の寄席演劇については、台湾統治下の演芸のみを中心に取った研究は管見ではないが、倉田喜弘編『明治の演芸』（一）～（七）、（国立劇場調査養成部芸能調査室、一九八〇年～一九八七年）では、『台湾日日新報』の記事も取り扱われている。

④邦楽と⑤能楽は入植者自身による余暇芸能活動（邦楽・茶の湯・いけ花なども含む）に関わり、これも研究

が進められてきた。小林善帆「植民地台湾の女学校といけ花・茶の湯」(『芸能史研究』一八九号、二〇一〇年四月)では、女学校にて花・茶の湯教育が行われてきたことを紹介する。王冬蘭「日本統治下の台湾における能楽活動の基礎研究―資料に基づく台湾能楽史の構築をめざして」(『基盤研究C』二〇一六―二〇一九年度、16K02385)の成果として、日本統治下台湾での能楽活動について指導者の立場にあった人物の履歴や活動場所、流派について明らかにした論考がある(本書王冬蘭氏論考参照)。劉麟玉『日本伝統音楽の越境―植民地台湾における「邦楽」の伝承―』(二〇一八年三月、二〇一五―二〇一七年度、基盤研究(C) 15K02112報告書)では音楽学の立場から、台湾における邦楽伝承、学校教育における受容について明らかにしている。また、近年刊行された劉麟玉、福岡正太編著『音盤を通してみる声の近代―日本、上海、朝鮮、台湾』(スタイルノート、二〇二四年)ではレコードというメディアを軸に諸論考が掲載される。

また、李思漢「日本統治期台湾における義太夫節の上演に関する基礎的調査研究」(研究活動スタート支援、二〇一九―二〇二一年度、19K20780)、韓京子「植民地朝鮮・台湾・満州における文楽(義太夫)享受の諸相に関する調査・研究」(研究活動スタート支援、二〇一九―二〇二二年度、19K23082)は、浄瑠璃・義太夫節を嗜む移植者の活動について調査しており、両氏による研究成果は本研究にも大いに参考になる。

いっぽうで、⑥歌舞伎(旧劇)については、ほとんど研究は着手されておらず、本研究課題の前身「日本統治下の台湾における歌舞伎・浄瑠璃史の構築―現地資料に基づく基礎研究と考察―」(前掲)での研究成果、日置貴之「明治三十六年「台北役者評判記」(一)(二)」『明治大学教養論集』五五七、五六〇、二〇二一年九月、一二月)が初めての研究であった。ここでは、日本人が経営する商業劇場「台北座」「栄座」は歌舞伎役者と契約し、多くの役者はいわゆる大歌舞伎の役者ではないことを明らかにしている。

本報告書の構成

以上のような先行研究の状況を踏まえ、本研究の最終的な目的は、台湾における歌舞伎・浄瑠璃興行には、どのような興行師が関わり、どのような商業的運用がなされていたのかを解き明かすことにある。各劇場の経営者は、内地興行と関わっていたのか。関わっていたとすればどのようなルートがあったのか。関わっていないとすればどのような独自の運用がなされていたのか。日本統治下という特殊な状況におかれた台湾という限定された時期・場所に焦点を絞り、商業劇場界における歌舞伎・浄瑠璃を中心とした諸興行の仕組みはどのようなものだったのか。劇場に関する法制度や経済・政治とも連動するだろう。たとえば、研究協力者の川下俊文は、大正二年に台湾巡業中に客死した三世竹本隅太夫の興行には料理屋組合や台北花柳界が関わっていた可能性を指摘している（シンポジウム「日本統治下台湾の能・歌舞伎・浄瑠璃興行をひもとく」（民族芸術学会第一五九回研究例会、二〇二一年三月一四日での口頭報告）。料理屋組合や台北花柳界の関与は、芝居茶屋の制度と関わると予測されるが、同時期の内地の芸能興行のありようと連動するのだろうか。

将来的にこの問題をひもとくために、本報告書では歌舞伎・浄瑠璃に限らず、演劇芸能における興行（公演）の概要について、各氏に原稿を寄せていただいた。まず、岩澤侑生子氏には、台湾人（本島人）による演劇活動の概要についてまとめていただいた。藺田郁氏には、大衆芸能興行や博覧会での興行についてまとめていただいた。いずれも本研究の前身課題（前掲）にて開催したオンライン研究会での口頭発表のテープ起こし原稿をもとに、両氏に編集しなおしていただいた。両氏の口頭発表時のタイトルと発表日は以下の通りである。

岩澤侑生子「日本統治期台湾演劇をめぐって」（二〇二二年六月一九日）

藺田郁「日本統治下の台湾における大衆演芸の興行」（二〇二二年八月三十一日）

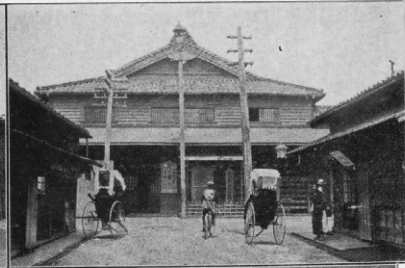
また、日置貴之氏には『台湾日日新報』に掲載された「台北役者評判記」をもとに、台湾で歌舞伎を演じた役者の素性についてまとめていただいた。中尾は、興行師高松豊次郎に着目し、台湾演劇興行界の推移について述べた。王冬蘭氏には、能楽の指導者と流派の推移についてまとめていただいた。能楽は演劇興行とは無関係ではあるが、義太夫、浄瑠璃にも商業的な興行と、移植者自身による遊興活動の二面性があり、その比較対象となるだろう。王氏の論考も、もともとは「日本統治下台湾における能楽」のタイトルで、民族芸術学会第一五九回例会（二〇二一年三月十四日、大阪大学）にて口頭発表された際の発表資料をもとに、再編集いただいたものである。また、資料編として、川下俊文氏によって翻刻された『台湾日日新報』から浄瑠璃・義太夫記事を掲載した。

本冊子が、日治台湾における芸能興行の実態説明だけでなく、充分に明らかになっていない同時期の日本国内における芸能興行の実態説明の一端にもなれば幸いである。

Yeshinotei a variety hall. (街横起新) 亭野芳席寄



Sakseza (a theater) (街外門西) 座榮場劇



Chinese Theater (街聚府臺下) 館戲水淡場劇那支



Asahiza (a theater) (街臺橋) 座日朝場劇

口絵 1 村崎長昶 著『台北写真帖』、新高堂書店、一九一三年十月、
国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1908263> (参照 2026-02-16)

I

論文集

1 日本統治期台湾演劇の概要 — 旧劇・新劇・皇民化劇 —

岩澤 侑生子

一、日本統治期初期の台湾演劇

台湾には日本統治期以前より、中国大陸からの移民と共に伝来した、民間の様々な劇が存在していた。それらは風俗や祭事に強く結びついており、結婚式や葬式などで上演され、台湾社会の中に深く浸透し、民衆の日常生活の一部となっていた。日本統治時代の演劇研究家、竹内治は「台湾演劇誌」（一九四三）で、日本統治時代の

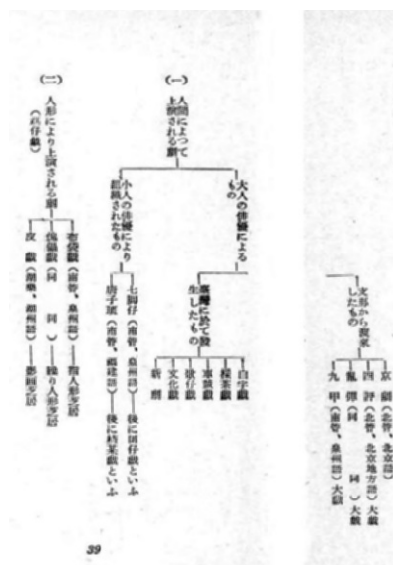


図 1

台湾演劇について図1のように分類している。なお、劇それぞれの読み方は、主に竹内（一九四三）の文中に記されている台湾語仮名を引用している。

まず、大陸から伝来したものとして、京劇がある。竹内（一九四三）によると、当時台湾では京劇のことを「正音戲」と呼び、北管音楽と北京官話を用いて上演されていた。次に四評、それから乱弾がある。これらは大戲、老戲とも呼ばれ、北京京劇の流れを含む地方劇であるが、北管音楽と北京の地方の言葉を用いられており、北京地

方劇と称されるものだったようだ。「みだらに弾く」という意味から、「乱弾」という名がついたという説がある。また、九甲^{カウカ}は、泉州地方で発達した劇で、南管音楽を使用する。竹内によると、あまりこの劇は人気がなく、後に台湾では白字戲^{ページヒ}と呼ばれるようになったという。

子供が演じた劇として、まず戲仔^{ヒア}と呼ばれる一二歳から一七、八歳の少年たちが演じる劇があった。こちらは南管音楽、それから泉州語を使用していた。次に唐子班^{タンフーバン}²、こちらは二〇歳前後の少女たち七名によって結成される劇で、北京語を使用していたと記されている。

人形劇では、現在も台湾で広く上演されている布袋戲^{ボグテ}がある。布袋戲は、当時は手のひらサイズの人形を使って上演されていた。原則として泉州語を使い、南管音楽を使用する。布袋戲の人形は時代によって変化し、大きなサイズのものも登場して、現在は寺廟の前や街角のみならず、テレビでも上映され、専用チャンネルも存在する。糸を使った操り人形を使用する傀儡戲^{カイレ}も泉州語と南管音楽を使用するが、もともとは寺院の建立時に厄祓いや魔除けのために上演され、一般人、特に妊婦は見ることを禁止されていたという。現代においても傀儡戲を観られる機会は少ない。続いて、皮戲^{ボエヒ}は影絵芝居である。牛の皮を使った影絵芝居で、起源については諸説ある。中国の唐代から五代のあいだに始まり台湾に伝わったとするもの³、あるいは竹内が記すようにジャワ地方のワヤン・クリに起源を発し、中国南部を経て台湾に伝わったとされるもの、更に台湾の原住民族にも古くから伝わっていたと記録されている。

台湾では当時、演劇は見るものというよりも聞くものとして、音楽性を重視されていた。演劇が娯楽として大衆に広がっていくにつれ、劇に付随する音楽もまた、親しまれるようになっていた。新竹地方で生まれ、大陸由来の民謡に台湾の音律を加えた音楽は、茶摘み歌（茶歌）として普及していた。そこから男女の掛け合いの演劇



図2

形式に発展したものが採茶戲サチアヒと呼ばれ、客家人の部落で上演されていた。その他にも車鼓戲チャコヒと呼ばれる、主に祭事などで巡行する山車に加わり上演する劇もあった。そして最も大衆に親しまれ、現在も台湾のいたるところで上演されている歌仔戲コアヒが、一九〇〇年代前後に宜蘭で誕生した。竹内（一九四三）は、この台湾の歌仔戲と中国大陆の演劇を比較し「在来の支那劇が假に歌劇（オペラ）であると假定するならば、歌仔戲はレヴューといふ處である。」と評している。中国大陆の劇は「歌と演技が完全に融合して、日本の能を彷彿とさせるものがある」とし、それに対し「歌仔戲は（中略）演技と歌曲とが互に遊離している。これはやはり支那劇が變形したと見るより、臺灣に於て發生した茶歌、相褒等の民謡が、支那劇の脚本を得て、演劇的な演出法を施されたと見る方が適切である。」⁴と、台湾独自の演劇としての歌仔戲の特徴をあげている。

図2は日本統治期時代の歌仔戲と布袋戲の上演の様子である。大勢の民衆が劇を見るために集まっている様子が伺える。このような祭典の時に、外の臨時舞台で演じられるものは野台戲ヤグイヒと呼ばれ、劇場で演じられるものは内台戲ウチグイヒと呼ばれていた。

日本の統治者たちは、当初、祭事に必要な儀式として上演される劇に対して、尊重する意思を表明し、研究の対象としていたが、これらの劇には中国大陆の文化の影響が強く表れており、やがて低俗なもの、風紀を乱すものとして見られるようになる。そしてこれらは、日本統治時代後期には、一九二〇年代に生まれた文化劇や新劇と比べて、旧劇と呼ば

れるようになるのである。

二、一九二〇年代～一九三〇年代前半の新劇

台湾のいわゆる新劇運動は大きく二つの時期に分けて考察される。最初の新劇運動は、一九二〇年代前半に台湾文化協会が、日本の統治に対し文化運動によって抵抗しようとしたことから始まる。それらは当時世界中で流行していた民族運動とも結びついて、文化劇と呼ばれた。

台湾文化協会は、日本の資本家たちによって抑圧・搾取されていた労働者階級を啓蒙した。各地で農民組合が続々と誕生し、演劇運動もそれに伴い活発化する。しかし、無政府主義者や左翼思想の青年たちが加入したことにより、協会内部で分裂が起こる。文化劇はプロパガンダ派とも呼ばれ、社会制度批判や民族意識を高めるような内容だったため、警察当局の取り締まりを受ける。当時の新劇運動は文化劇のプロパガンダ派と、星光劇団などの芸術派に分かれていた。これらは旧劇に対して、文化劇も含め新しい劇という意味で新劇と呼ばれた。

この時期、日本に演劇留学をしていた張維賢の活躍や、台北高校の記念祭での演劇公演も注目すべき出来事である。台湾のエリート学校、台北高等学校の記念祭で演劇が上演されたが、御真影の前でゴリーキーの『どん底』を上演したことが問題視され、当時の台北高等学校の校長であった三沢校長は、辞職に追い込まれるまでの事態となった。台北高校の演劇活動は他の高校にも影響を与え、日本人青年を中心とする劇団も誕生した。また、この時期、上海の文明劇団による上演もあった。台湾で巡回公演が行われ、文明劇という言葉が一般化した。

張維賢は、台湾新劇運動の第一人者と呼ばれている。明治三十八年（一九〇五）に生まれ、昭和五二（一九七七）に亡くなった。台北で栄えた旧市街の一つ、大稻埕の生まれである。芸術派の星光劇団は、大正一三年（一九二四）

に張維賢が組織した劇団で、解散するまで毎年公演を行い、観客の入りも上々で評判も良かったが、人手不足と資金調達が困難となり、昭和三年（一九二八）に永楽座での十日間の連続上演を最後に解散した。この頃の星光劇団の演目として、『金色夜叉』以外はほとんど中国の新劇作品や劇団の創作と思われるものが中心となっていた。これは他の同時期の文化劇団とも共通している。その後、彼が新しく設立した宜蘭民烽劇団も、資金不足や人手不足といった同じ理由で解散する。

そして張維賢は、昭和三年（一九二八）に演劇を学ぶため、日本に留学をする。そこで日本の新劇に触れ、築地小劇場並びに新築地などの劇場や坪内逍遙の演劇図書館で、寝る間も惜しんで演劇を学んだという。昭和五年（一九三〇）一月に帰国後、張は再び民烽劇団を設立。昭和八年（一九三三年）永楽座でイプセンの『民衆の敵』や『原始人の夢』などの翻訳劇を上演する。また、日本人劇団と合同で新劇祭も開催している。当時の文化人たちにも、張の新劇活動は高く評価された。

三、皇民化政策

一九三〇年代に入り日中戦争が勃発すると、台湾人を日本人化、天皇の民とするための皇民化政策が推進される。皇民化政策は、日本の敗戦に至るまで、さまざまな取り組みが行われた。まず、国語運動である。新聞の漢文欄の廃止や、中国語雑誌の停刊など、国語（日本語）の使用が強要された。「国語家庭」に認定されると、配給や税の上での様々な優遇があった。それから改名である。台湾本島人の名前から日本語の名前に改名するには、国語常用家庭であること、日本精神を理解していることなど、条件があった。次に宗教や風俗である。日本の神道の受け入れや神社への参拝、「寺廟整理」と「正庁改善」運動の推進、旧暦の正月に行われる春聯などの風習

や大陸由来の伝統行事が禁止されるなど、生活と密接に関係するあらゆるものが日本式へと変えられた。後述するが、こうした皇民化政策のなかで、台湾演劇も当然あおりを受け、歌仔戲、布袋戲、皮戲、傀儡戲などの旧劇が、従来の形式での上演を禁止される憂き目にあった。さらに昭和一七年（一九四二）には陸軍特別志願兵制度が導入、昭和二〇年（一九四五）には徴兵制度が全面的に実施された。こうした志願兵や徴兵制度を取りあげる戯曲も、この時期に度々登場する。教育面では、漢書房という私塾の強制廃止が行われ、公学校では選択科目である漢文科の廃止が決定された。「内台一如」「台湾人の皇民化」「台湾工業化」「南進政策」をキーワードにした皇民化政策は、実際には総督府の統一した指導があったというわけではなく、各地で独自に推進された、様々な活動の総称と言えるものだったとされている⁵。

四、一九三〇年代後半の新劇

二度目の新劇運動は、昭和一二年（一九三七）以降の皇民化運動と密接に関わりがある。第一七代台湾総督の小林躋造は「皇民化、工業化、南進基地化」をスローガンに、皇民化政策を推進した。台湾の人々に日本精神を植えつけ、地方の風俗や民間宗教の風習を日本式に変えさせた。日中戦争が勃発すると、台湾総督府は国民精神総動員本部を設置し、文化芸術に対する取り締まりを厳格化した。

先述のとおり、旧劇の上演が原則として禁止されたため、多くの職業劇団が廃業していった。劇団を運営し続けていくためには、当局の意向に沿った演劇を上演するほかに道はなかった。劇団側は存続を賭け、劇団の名前の中に「新劇」や「皇民化劇団」といった名称を入れ、衣装、音楽、舞台装置を近代化した「改良劇」が登場する。しかし、その実情は衣装や役名などが日本風に変えられただけで、警察の取り締まりがないときには従来と



図3

変わらない形式で上演されたと言われている。図3は、「皇民化布袋戯」の人形である。この皇民化布袋戯で演じられた演目は、歌舞伎などでもおなじみの『国性爺合戦』や『月形半平太』『水戸黄門 江戸の巻』などである。布袋戯デジタル博物館のウェブサイトに、皇民化布袋戯を再現した映像が掲載されている（二〇二五年一〇月現在視聴不可）。それによると、人形が日本の時代劇の衣装を着て、活弁士が日本語で劇を解説する内容だった。

一九三〇年代後半以降、旧劇は改良が必要とされ、日本風に対応しないと上演することができなかったのだが、後述のように、旧劇の上演の禁止後も当時と変わらない歌仔戯の上演がたびたび摘発されていることを報道する記事が散見される。

一九二〇年代から三〇年代の張維賢らによる新劇運動は、特に旧劇に対する新しい形の演劇として確立し、社会運動にも結びつき、芸術志向の演劇が生まれるなど、日本の新劇運動との相違点も多い。しかし昭和一二（一九三七）以降は、新劇という用語を使っているものの、最初の新劇運動とは全く異なるものと考えられる。この時期に職業劇団が掲げていた「新劇」は、皇民化政策を推進する総督府の目をごまかすための、単なる免罪符のようなものに過ぎなかったと言えるだろう。

五、旧劇への弾圧

演劇指導者の竹内治は、当時上演されていた台湾の「新劇」に対し、批判を込めてこのように記している。な

お、本島人とは台湾人を意味する。

本島人企業家は、之等これらの怪しげな新劇を真似し、和服と紋付、下駄履きと日本刀をひつさげ、台湾語を以て会話する支那劇とも日本劇ともつかない新台湾劇を造り上げてしまったのである。之等の劇団は、表面上如何にも日本化され、登場人物の総ては、和服を着用し、草履、下駄等と皇民化された様であるが、その実之等の衣裳の蔭に隠れて、従来より一層低俗な劇が公々然と横行していたのである。更に台湾統治上見逃すべからざる事は、当時、支那事変の勃発当初として、未だ旧思想に囚はれ、時局への認識を欠く不逞分子等が、演劇の大衆性と台湾語の利便の下に隠れて、不穩なるデマ宣伝をさへ鼓吹して歩く者さえあつた事である。

〔台湾演劇誌〕九六頁

昭和十三年（一九三八）の『台湾日日新報』には「改良劇を加えねば開演を許さぬ／演劇にも皇民化運動」という記事が掲載されている。ここでは、「本島人大衆皇民化運動の一助として」こういった「改良劇」を上演したと、そして「今後知識水準の低い一般大衆には直接眼から皇民化運動の趣旨を徹底せしめるのが効果的であるとして今後本島人劇場では必ず一つは改良劇を加へなければ開演を許可せぬ事に決定した」「用語も容易いものは成るべく国語を用ひしめ、漸次全部を国語に改めて国語普及の一端にも」働かせようとしている。同時に脚本の検閲もあり、先述のように衣装も内地人（日本人）の服に改め、さらに専属劇団の他に内地人俳優を加えようとした運動もあつた。

昭和十四年（一九三九）、同じく『台湾日日新報』には、「台湾に於ける歌仔戲の定評は言ふまでもなく演出す

る歌詞や動作表情等が非常に卑劣で煽情的であるため全島各地では既にその興行を絶対禁止している程である」と強調される。歌仔戲に関しては「一部無知の男女を喜ばせてゐる」と、統治者たちが旧劇を見る本島人への差別的な目線を感じることができると述べている。

昭和十五年（一九四〇）の『台湾日日新報』では、「歌仔戲嚴禁／田舎者の觀衆戸迷ひ」という記事に、旧正月で歌仔戲の上演をしようとしたところ禁止されたが、旧正月だから歌仔戲はやつてゐるだろうと「各部落から雪崩を打つて押駈けた男女の群は不意打を喰つて右往左往してゐる」とある。また昭和十五年（一九四〇）三月三日の記事には「偽つて歌仔戲上演」と題し「皇民化劇だと警察当局を誤魔化し許可を受け」たが、実際のところ「支那式の歌仔戲を上演してゐた」ことが報道されている。

一九四〇年代には『台湾日日新報』の記事で、非常に強い口調で歌仔戲に対して攻撃している印象を受ける。例えば「歌仔戲を撃滅せよ」では、皇民化運動を阻害し、社会的に害悪を及ぼす台湾芝居を撃滅せよと、いよいよ台湾中部のあたりにある嘉義市の委員から火蓋が切られたことが報じられている。「特に旧時代の遺物として芸術的にも一顧の価値なき台湾芝居が今猶存続して本島各地の劇場に上演され民衆の嗜好に根強く喰込んでゐる事は本島人の文化向上を阻止し又皇民化運動にも却つて逆効果を齎す傾向が益々濃厚であるので」「これを血祭に挙げて高尚、健全なる新劇を創設して本島人劇界の新体制を確立すべきと言ふ建前から」、嘉義の委員たちが憤然決起をしていると記されている。

昭和十六年（一九四一）の記事「歌仔戲類似行為の売薬行商等を検挙」では、歌仔戲の俳優が失職して売薬商人に転職をしたものの、様々な僻地の部落を巡回しているなかで「売薬宣伝だと称し人形芝居で歌仔戲類似の卑猥なる言動をなしてゐたこと」を、警察によって嗅ぎつけられ、検挙取り調べ中という報道もある。

このように歌仔戲などの旧劇は、昭和十二年（一九三七）以降、総督府やメディアの弾圧を受け、原則として上演を禁止されたものの、統治者の目をかいくぐりながら上演を続けていたことが確認できる。そのため、現代にも歌仔戲を伝えることができたのかもしれない。

六、一九四〇年代の台湾演劇——「青年劇」

昭和十六年（一九四一）四月、台湾の大政翼賛会の母体となる「皇民奉公会」が発足する。その下に、島民娯楽を審議する組織として「娯楽委員会」が同年七月に設置された。農村地での娯楽を提供するため、演劇分野では、新劇（ここでは旧劇を日本人風に改良した劇、皇民化劇として改良した劇）と青年劇が育成助長するべき「健全娯楽」として認定される。そして最も大衆の娯楽として支持を得ていた歌仔戲は、昭和十二年（一九三七）に「不健全娯楽」として原則禁止となる。青年劇では「青年劇演劇挺身隊」が発足し、さらにそこから「健全娯楽指導班」が発足する。新劇の方では「台湾演劇協会」が発足、移動劇団の「演劇挺身隊」が昭和十七年（一九四二）に組織される。この演劇挺身隊は、プロの俳優による本島人劇団の「南進座」と「高砂劇団」が中心となり、台湾各地で上演を行なった。

青年劇は、一九三〇年代、台湾各地に存在した青年団が日本語促進を目的として始めたとされる素人劇である。青年団は主に公学校を卒業した台湾人青年たちからなる地方団体で、年齢は一二歳以上二五歳以下の男女で結成されていた。青年団主催の催しでは、演劇の他に運動会や国語演習会、研究発表会、音楽会などが頻繁に開催されており、その様子は『台湾日日新報』の報道で確認できる。

大正三年（一九一四）に、花蓮港の吉野村にて第一号となる青年団が成立し、その後、昭和五年（一九三〇）

に「台湾青年団訓令」が公布されてから、青年団の設立は全台湾に広がっていった。そして昭和十三年（一九三八）に「台湾総合青年団設置旨趣」が発表され、青年団は皇民化運動の教化団体としての意味合いを深めていった。皇民化政策期の青年劇について『台湾日日新報』の報道を確認してみよう。

昭和十二年（一九三七）十一月二二日の記事「総合青年団大会 南門小に開かる／青年劇等もあり盛会」には、台南の南門小学校講堂での青年団大会の催しの一環として青年劇が上演されたとある。この総合青年団大会は「青年団としての戦時体制下に於ける滅私奉公の観念をいやが上にも振作昂揚」するようなもので、青年劇の内容もそれに応じた内容だったと考えられる。昭和十三年（一九三八）十一月二〇日「州国演で青年劇」では、台北市老松公学校で開催された国語演習会において、青年劇『日の丸行進曲』が好評を博したと報道されている。上演中の舞台の写真が大きく掲載され、白い幕を背景に、祭壇が舞台中央寄りに置かれ、右側の垂れ幕には「国語ノ光ニ伸ヒ行ク台湾」と書かれている。

昭和十五年（一九四〇）四月二〇日の記事「市民へ正しい娯楽／青年劇研究会を組織」によると、嘉義市教育当局によるこの組織は、従来の台湾娯楽を調査し改善または淘汰をも加えたとともに「民衆娯楽青年劇研究会」を開催し、皇民化運動の促進に努めることなどを目的とした組織を作ったと報じている。同年八月三十一「健全なる国民娯楽として」では、「皇民化の精神を多分に盛った青年劇と音楽を指導」し、九月に大会が行われるという記事も掲載される。

また、一九四〇年には「奉祝青年劇」という見出しで、紀元二六〇〇年を祝う青年劇や音楽劇、舞踊が青年団によって催されたとある。台南の大会では「皇民化の誇りも高く盛大に開催され」、『愛国行進曲』などの音楽など、多くのプログラムが喝采を博したと報道されている。この頃、総督府の意向に沿った優良な青年劇を上演し

た青年団には、奨励金なども交付された。こうした地方での青年団の大会公演の他に、傷ついた兵士を慰問する公演なども行われていた。

昭和一六年（一九四一）一二月に真珠湾攻撃で太平洋戦争が開戦されてからも、青年劇・皇民化劇の報道は続き、高雄での講習会の様子や、皇民奉公会による青年劇脚本の公募も報道されている。昭和一七年（一九四二）七月二五日の記事では「素人ばなれた熱技を演じ大好評を博し観衆に非常な感銘を与えた」と、スパイの素人劇が大変盛況で、観客たちに受け入れられたとある。

青年劇は、戦争の長期化や旧劇の禁止により、特に農村地での民衆娯楽が欠如したとされ、それを補う目的と、皇民化運動の一環としての位置づけがある。青年劇を上演することによって、国語促進や、情操教育、教化性、娯楽の自給化が期待されたのである。その流れで、青年劇指導班の結成や、青年劇指導者の講習会の開催なども頻繁に行われていた。台北州総務部長の井田憲次が、州下の娯楽対策としての移動演劇を台湾演劇指導者の中山侑に依頼し、中山は「勤行報国青年隊」の活動を参考に「青年演劇挺身隊」を提案する。これをうけて昭和一六年（一九四一）九月頃、青年演劇挺身隊が発足した。勤行報国青年隊とは、総督府の連携機関である。農村から青年を集め、二、三ヶ月の勤労奉仕生活を過ごし、日本精神を体得した後、各自の農村へ戻る。農村を率いるリーダーを養成するための機関である。

中山侑が発足した青年演劇挺身隊は、皇民奉公運動の一環として結成された、無報酬奉仕の青年移動演劇隊である。当時は「善良な青年に役役者の真似をさせるのは」「本来の農業作業に支障をきたす」などといった否定的な意見も見られた。しかし、中山侑は、昭和二年（一九三七）以降の戦争の特色は文化の破壊ではなく文化の建設を目的としたもので、国策としての文化政策が促進されていると主張する。この青年演劇挺身隊の根本理

念にあったのは、日本精神の再認識、在来の資本主義、個人主義、自由主義への否定があったと述べている。その後、士林演劇挺身隊や新莊演劇挺身隊の成功を受けて、台北州皇奉支部では「健全娛樂指導班」が作られ、各地で青年たちによる挺身隊が結成されていく。

羅東街演劇挺身隊では、当時大政翼賛会の文化部長だった岸田國士の『かへらじと』等を上演していたという記事もある。中山侑は、青年演劇挺身隊を組織する上での難点について、「青年演劇運動」のなかで次のような点を挙げている。まず言葉の問題である。何語で演じるのか。本島語（福建語ないし台湾語）、それとも国語（日本語）なのか。昭和一六年（一九四一）四月末の段階で、本島人の国語理解率は五七・〇二%であった。国語理解のレベルも同一ではなかったため、検討の結果、方針として国語を使用するが、言葉を減らし身振りを増やすなどといった対策が取られた。しかし、青年劇の演劇の指導者（公学校の教師や、本島人の演劇人が青年劇の指導にあたっていた）が日本語を話せなかったというような記事もあり、実際の上演がどのようなものだったかは想像するしかない。

さらに青年劇への理解について、中山は「青年劇活動は単なる遊びではなく、農村の仕事と同等の役割を持つことを理解させる必要がある」と述べている。青年劇の内容に関しては「あまり難しい理屈や政治性を持たせるよりも、一つの文化運動として考え、娛樂性を持たせる」ことを念頭に置いていたという。しかし、実際に青年団に配られた青年劇の脚本を見る限り、政治性と娛樂性のバランスが取れているのかどうかは、時代背景なども含め、甚だ首を傾げざるを得ない。

青年劇の脚本に関して、昭和九年（一九三四）に『台湾日日新報』などに、台湾教育会による「青年劇脚本公募」の告知があった。公募の目的としては「本島在来の演劇は其の内容形式共に遺憾の点が多いので之を革新す

るため青年劇脚本を左記により公募した」とある。応募条件の中では題材は任意としながらも、内容に関しては「面白味豊なるものにして国民精神の涵養、国語普及、郷土振興、生活改善等を取入れたるもの」と指定がある。このことから、昭和十二年（一九三七）以降の国民精神総動員本部が設置される以前より、単なる国語普及や情操の涵養にとどまらず、日本国民としての精神を養うことを目的とした青年劇の創作が望まれていたと考えられる。

この青年劇の脚本を公募した「台湾教育会」は、当時台湾の学校教育と社会教育をサポートしていた社団法人で、総督府と密接なつながりがあった。『国光』『黎明』『薰風』など台湾教育会が刊行した雑誌には、青年劇の脚本が附録についていた。付録に掲載された青年劇の脚本には、農村でひたむきに働く本島人青年や、聘金制度（聘金は、女性が嫁ぐ際に、相手方の男性が女性の実家に払う金）に反対する若い本島人女性や、非科学的な医療を薦める母親、金儲けのことばかり考えて日本語を学ぼうとしない本島人の資産家に「日本国民として国語を知らないことを恥とは思いませんか」と説教するような、日本語学習に熱心な本島人青年が登場する。一九三〇年代に創作された青年劇は、現行の風習を否定し、日本語教育促進や日本精神を啓蒙する教化劇としての特徴が強い。

日中戦争以降は「銃後の本島人」、「皇民化」、「軍夫」、「志願兵」をテーマにした作品が多く見られるようになる。例えば昭和十六年（一九四一）、台湾総督府情報部から出版された『手軽にできる青少年劇脚本集 第一輯』の中には、日本統治時代に活躍した作家の西川満による『青毛獅子』が掲載されている。『青毛獅子』は「西遊記」をもとにしている。物語の最後には「天竺にお経を取りに行けるのも、日本の軍人さんたちが戦っているおかげだ」という孫悟空の台詞がある。このように、よく知られる昔話を皇民劇化したものがある。そのほか、同脚本

集に掲載されている川平朝申の『蓖麻^{ひま}は茂れり』は、実際のできごとを元に創作された脚本とされている。当時蓖麻の種子から採れるヒマシ油は、戦闘機の潤滑油として使用されていた。蓖麻を育てる台湾人少年が病気になる、死ぬ間際まで蓖麻の心配をするような報国精神を持つ少年の話が、美談として描かれている。また、青年劇ではないが、この時期には李香蘭こと山口淑子が主演した映画で有名な『サヨンの鐘』も、実際に起った事件を物語化し、ラジオドラマや紙芝居など様々な媒体で展開していた。

昭和十七年（一九四二）に、皇民奉公会台北州支部健全娛樂指導班が『青年演劇脚本集（第一輯）』を出版する。これは青年演劇挺身隊を組織した中山侑による脚本集である。例えばこの中の浜田秀三郎『征く朝』（一幕もの）では、出奔した青年が、海軍特別攻撃隊、いわゆる特攻隊の報道を聞き、志願兵になるべく実家に戻ってくる話である。根室千秋『土』（二幕もの）では、先祖代々の土地を守る百姓の姿が描かれてる。作者の根室は「土、土、——しつかり故郷の土を踏みしめて起ち上る農民の尊い姿こそ増産日本の新しい力である」と作者あとがきに記している。名和栄一『蜜柑』（一幕二場もの）は、村一番のならず者が、護郷兵だった先生や幼馴染の少女の姿に心を打たれ、改心する物語が描かれる。この護郷兵とは、日本統治時代初期に日本軍に協力し、「匪賊」と呼ばれる日本統治に反抗する勢力と戦った人々のことである。昭和十九年（一九四四）には作家の吉村敏が台湾原住民の卑南族^{ブユマ}の頭目をモデルにした長編戯曲『護郷兵』を発表している。実際に起った事件や人々を取材して統治者に都合のいい物語に仕立て上げることとはよく見られた。

七、演劇挺身隊・台湾演劇協会・厚生演劇研究会

最後に、プロの劇団による演劇挺身隊の活動について見ていこう。

昭和一七年（一九四二）一月に「皇民奉公会指定演劇挺身隊」が組織された。この挺身隊の前身は「南進座」と「高砂劇団」という本島人俳優が所属する劇団である。南進座は台北州、新竹州、台中州、高雄州、台東庁、花蓮港庁で巡回公演を行い、一月に結成されてから九月三〇日までの一七四日間にわたり二八六回の上演、観客動員数は二九万八八四〇人に及んだ。高砂劇団は台北州、新竹州、台中州、高雄州で一五七日間、二二七回の上演、二九万二二〇〇名を動員した。

これらの劇団が上演したのは、総督府情報部提供作品の『志願兵』、竹内治作の『童叟何処へ行く』である。童叟とは台湾のシャーマンで、宗教上重要な役割を持っていた。しかし日本統治時代になり、その役割を失う姿が作品のなかで描かれる。また、先述した『サヨンの鐘』も演劇挺身隊によって上演された。

南進座の舞台監督の林金龍の日記には、当時の巡回公演の記録が残されている。過酷なスケジュールで僻地まで行き、演劇を上演するが、当時流行していたマリアなどで役者たちが倒れ、幕間に注射を打ってなんとか舞台に立たせたなど、克明な記録が記されている。なお、第一八代台湾総督・長谷川清から、演劇挺身隊宛に直筆入りの旗が送られている。「軍旗に非ずともこの旗の下で」と、芸能奉公に励むことを誓う挺身隊の様子も報道されている。

昭和一七年（一九四二）には、皇民奉公会の指導のもと「台湾演劇協会」が誕生し、日本から松居桃楼という演劇人が招聘される。松居の父は、劇作家で演出家の松居松葉の息子であり、松居自身も演劇の道へ進み、松竹演芸演劇会委員を務めていた。彼は昭和一七年（一九四二）に台湾に招聘され、青年劇や皇民化劇をさらに推し進めた。その時期、演劇の脚本検閲制度が改新され、これまでそれぞれの州ごとに行われてきた検閲は、台湾総督府保安課の管轄となり、脚本提出の前に、この松居桃楼が主事を務める台湾演劇協会の審査を経なければなら

なくなつた。台湾演劇協会は、こういった指導や審査の他に、時局に合わない演劇を上演する劇団に対し解散を命じるなど、台湾の演劇に対して強い権力を持った組織であつた。

更に松居桃楼は昭和一八年（一九四三）に「芸能文化研究会」も設立する。松居は『興南新聞』の中で「演劇は武装せざる兵器舞台としての利害性」があり「この貴き兵器を活用して国家的に役立たせることは、われらの急務の一つである」と述べている。松居は「大東亜演劇は台湾に於いて確立しなければならない」と、大東亜演劇確立の理想に燃えていた。日本人が中心となつて組織された台湾演劇協会は、これまでの台湾演劇の流れを否定し、「日本」を軸とした大東亜演劇の確立を目指した。その影響もあつて、反対に台湾人が中心となつて組織された「厚生演劇研究会」が同年誕生した。昭和一八年（一九四三）四月二十九日に大稲埕の料亭「山水亭」にて、「厚生演劇研究会」の発表会が行われた。この厚生演劇研究会は、主に雑誌『台湾文芸』のメンバーが中心となつて成立した演劇グループで、大稲埕の料亭「山水亭」の経営者であり、活動の資金提供をしていた、王井泉が責任者であつた。会員は林博秋、張文環、謝火爐などの文士たちが活動の中心メンバーであつた。研究生は、桃園・士林・新莊・三重などから集まつた男子二一五名、女子一〇名、合計三三五名の知識人の青年たちだつた。

彼らは同年九月三日に、台北の永楽座で『山から見える町の灯』、『閨雛』、『高砂館』、『地熱』などを上演した。日本語での上演だつたが、彼らが目指したのは、一九二〇年代の新劇運動の流れを汲んだ台湾本土の演劇を追求することだつた。

永楽座での公演は大好評を博した。その様子は『台湾日日新報』でも報道されている。特に『閨雛』の中で台湾民謡が歌われ、立ち見する場所もなくなるほど超満員だつたらしい。しかし、台湾を色濃く表現した演劇はすぐに、当局の取り締まりを受け、厚生演劇研究会の上演はこの永楽座の公演のみとなつてしまつた。



図4



図5

図4は当時の『閨雛』の舞台写真である。『閨雛』は張文環の小説をもとに林博秋が戯曲化したもので、大正七年（一九一八）の台湾南部が舞台である。タイトルの「閨雛」は去勢された鶏のことである。写真から分かるように、日本的な要素はなく、むしろ漢民族の雰囲気がある。『閨雛』は戦後も上演され、最近では台南人劇団が二〇〇八年に上演している。

図5は『高砂館』の舞台写真である。これも林博秋の作品で、日中戦争が始まってすぐの基隆の港にある旅籠屋が舞台である。未来に対して希望を持ってない、戦争に対してネガティブなイメージを持つ人々の姿を描いた作品である。こちらも二〇〇八年に歓喜扮戯団が上演している⁷⁾。

日本統治下の台湾では、土着性の強い旧劇が強い抑圧を受けていたが、大衆の支持

はなくなることがなく、現在も歌仔戲や布袋戲は上演され続けている。日中戦争以降、盛んに「健全な娯楽」としての青年劇が推し進められたが、皇民化を目的とした青年劇や皇民化劇の戯曲は完成度が低く、言語の問題もあり、実際のところほとんど上演されなかったようだ。それらの脚本を読むと浮かび上るのは、日本人が理想とする被植民者の姿である。それに対し、一九二〇年代の台湾新劇の流れをくみ、台湾の独自性を主張しようとした厚生演劇研究会の取り組みは、彼らが上演した『閨雛』や『高砂館』が二〇〇〇年代にも上演されているように、現代にも訴えかける力を持っている。

厚生演劇研究会は、一九二〇年代の新劇運動の流れを汲み、永楽座での公演で当時の台湾人の心情を十分に表したといえるだろう。その精神は、台湾独自の演劇を追求する現代の台湾演劇シーンにも受け継がれているのかもしれない。

参考文献

『台湾日日新報』

末光欣也『台湾歴史日本統治時代の台湾（中文版）』致良出版社、二〇二二年

王育徳『翔風』第二期「台湾演劇の今昔」一九四一年

藤井省三・黄英哲・垂水千恵編『台湾の「大東亜戦争」文学・メディア・文化』石婉舜「台湾新演劇運動の黎明」二〇〇二年

中島利郎・河原功・下村作次郎監修『台湾戯曲・脚本集一〜五』（日本統治期台湾文学集成）緑蔭書房、二〇〇三年

楊渡『日據時期台湾新劇運動（一九二三〜一九三六）』時報出版、一九九四年

邱坤良『舊劇與新劇：日治時期臺灣戲劇之研究（一九四五〜一九四五）』自立晚報社文化出版部、一九九二年

論文

- 石婉舜「一九四三年台灣「厚生演劇研究會」研究」台灣大學戲劇學碩士論文、二〇〇二年
- 李宛儒「日本統治下の台湾演劇―総督府が奨励した青年劇と皇民化劇をみる―『言葉と文化』八、二〇〇七年三月
- 李宛儒「植民地台湾の新劇発展と張維賢―日本留学の影響をめぐって―」『演劇学論集 日本演劇学会紀要』四七、二〇〇八年一〇月
- 簡秀珍「太平洋戦争後臺灣の新劇活動…以地方青年業餘演劇與中央指定演劇挺身隊為討論中心」『戲劇學刊』八、二〇〇八年七月
- 石婉舜・近藤光雄訳「植民地における演劇と観衆…台湾語通俗演劇の興起を中心に」『言語社会』七、二〇一三年三月
- 邱坤良「從星光到鐘聲…張維賢新劇生涯及其困境」『戲劇研究第二十期』Journal of Theater Studies』二〇一七年七月

インターネット資料：

- 國家電影及視聽文化中心 <https://tf.openmuseum.tw/>
- 布袋戲數位博物館「皇民化布袋戲」http://folkartist2-e-lib.nctu.edu.tw/collection/palm_drama/pdl/history/Inside4.asp
- 台灣現代戲劇暨表演演影音資料庫 闖雞 <https://www.eti-tw.com/work/zlix2PE6P439INLki>
- 台灣現代戲劇暨表演演影音資料庫 高砂館 <https://www.eti-tw.com/work/j97sDWnT7Jh5Bvrx>
- 國立臺灣藝術教育館 臺灣傳統戲曲皮影戲 <https://web.arte.gov.tw/traditionalopera/2/c/c2/c2.htm>
- 図1 浜田秀三郎 編『台湾演劇の現状』、丹青書房、昭和一八年、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/1125547>（参照 2025.12.04）
- 図2（上）「臺灣芝居開演中の光景」『高雄港勢展覽會誌』一九三一年高雄港勢展覽會、國立臺灣大學圖書館、臺灣舊照片資料庫、（下）「臺中學資料庫」《市街之味…臺中第二市場的百年風味》『輔順將軍廟布袋戲演出』
- 図3 皇民化布袋戲偶／創作者：拍攝：雲林縣政府文化處／數位物件授權：CC BY-NC 3.0 TW +／建檔單位：雲林縣政府文化觀光處 © 國家文化記憶庫 https://tcm.b.culture.tw/zh-tw/detail?indexCode=Culture_Object&id=622710

図4：1943年舞台劇《鬧雞（前篇）》演出一景。典藏者：林嘉義。數位物件典藏者：國家電影及視聽文化中心。創用CC姓名標示・非商業性・禁止改作 3.0台灣 (CC BY-NC-ND 3.0 TW)。發佈於《台灣影視聽數位博物館》[https://tai.openmuseum.tw/muse/digi_object/8b77ddb20a57becf3b9d1c20ded71#11321] (2025/12/10閲覧)。

図5：1943年舞台劇《高砂館》演出一景。典藏者：林嘉義。數位物件典藏者：國家電影及視聽文化中心。創用CC姓名標示・非商業性・禁止改作 3.0台灣 (CC BY-NC-ND 3.0 TW)。發佈於《台灣影視聽數位博物館》[https://tai.openmuseum.tw/muse/digi_object/f0a7296bec816800ee856c6b808da8#11161] (2025/12/10閲覧)。

¹ 小梨園、七子班、七脚仔とも称される。

² 嬪某戲（サボリー）とも称す。

³ 参考文献：國立臺灣藝術教育館 臺灣傳統戲曲皮影戲 (2025/09/30最終閲覧) <https://web.arte.gov.tw/traditionalopera/2/c/c2/c2.htm>

⁴ 竹内治 (1943) 「台湾演劇誌」 p74-75

⁵ 参照：吳密察監修 (2016) 『台湾史小事典 第三版』 p218-219

⁶ <https://www.eti-tw.com/work/zix2PE6Pd39INLki>

⁷ 公演情報： <https://www.eti-tw.com/work/j97sDWnrTjh5Bvrx>

付記 本論文は二〇二三年に台湾・淡江大学へ提出した修士論文『日本統治期台湾における青年劇の研究』をベースにしている。

2 日本統治下の台湾における大衆芸能の興行

―タカマチとしての博覧会―

蘭田 郁

一、はじめに

近代日本において大衆向けの語り芸――たとえば、浪花節（浪曲）や、説経祭文、説経源氏節（源氏節）などが、芝居や踊りと結びついたことは、その芸能の諸形態に注目することと同時に、興行的側面にも目を向けることに繋がる、という点で重要である。

これまで芸能の近代的展開を語る際にしばしば関心が寄せられたのは、マスメディアとの関連においてであった。たとえば浪花節においては、レコードやラジオといった媒体によって拡がりを見せた点が強調される。しかし一方で、これらメディアによる拡散と並行して、寄席や芝居小屋といった実演の場は、依然として重要な役割を果たし続けていた。このような現場からの視点もまた、近代大衆芸能の全体像を捉え直す上で不可欠である。レコードやラジオといった媒体に乗りにくく、踊りや芝居と語り芸が融合して舞台化する形で展開した芸能には、先に述べた浪花節における節劇、あるいはそれ以前の時代でいえば、源氏節における女芝居（源氏節女芝居）などがある。これらがどのような動きの中で拡がってきたのかを検討することで、近代日本の大衆芸能全体の動向の中に新たな視点が浮かび上がってくる。そのうちの重要な論点の一つが、地域的広がりにおける芸能興行の問題である。

たとえば、上記以外での例として、以下で扱う活動人形もそのうちの一つに挙げられる。活動人形は東北地方を拠点に、東京や大阪といった大都市を含む全国へと野外で行われる仮設興行を拡げていった。このように地域発の芸能が全国規模で展開されていくプロセスは、従来とは異なる見方から大衆芸能の領域を理解する手掛かりとなる。特に興行の拡張という点でいえば次の二つが焦点となるだろう。第一に、芸能興行の地域的な活動範囲が従来よりも大きく拡大したこと、第二に、興行の形態自体が拡張・変容し、寄席や演芸場といった定型的な興行場所以外に、博覧会のような空間が新たな舞台として浮上してくるという点である。とりわけ、後に取り上げる、外地における博覧会で行われた興行は、上記二点を含む事象であり、また単なる娯楽を超えた、近代特有の政治的意味合いを伴う複雑な状況を帯びた事象としても注目できる。

当時、浪花節の隆盛を支えた主たる興行場所は寄席や演芸場であった。しかし、それらとは異なり、より不特定多数の観客（大衆）を対象とした興行形態として重要な役割を果たしたのが、「タカマチ（高町）」「タカモノ（高物）」と呼ばれる興行である（以下、「タカマチ」に統一して記述する）。タカマチとは、神社や寺院の境内を一時的に利用し、仮設の芝居小屋を建てて野外で芸能を上演する形式の興行である。その性質上、見世物興行、あるいは単に「見世物」とも呼ばれる。こうした形式は前近代から存在していたが、近代化と都市化の進行に伴い、規模が拡大し、都市部で頻繁に実施されるようになった。

「見世物」は東京では靖国神社や明治神宮の祭礼に合わせて開催され、大阪では千日前などでも仮設興行が行われ、また、大都市のみならず地方都市でも見られた。たとえば、昭和初期の岩手県盛岡市・盛岡八幡宮の大祭の様子が地元の新聞に記載されており、その記事では、多様な見世物が披露されていたことが確認できる。

子供ばかりでない大人も心待ちにまった県社八幡宮の祭典だ。肴町、生姜町、八幡町通りは祭典第一日の十四日朝来から実におびただしい雑踏振りである（中略）八幡町坂上を登りつめるとモウお祭り気分がざわついて来る様だ。大鳥居をくぐると左側には拳闘、曲馬団などがしめっぽいクラリネットやラッパ太鼓などで客引きに余念なく、右側には水中美人、電気応用操り人形、その他教育資料何々といった出鱈目な毒々しい色彩の看板で客の目を奪ってしまふ。」（『岩手日報』、一九二九年九月十五日付け、第二面）

こうしたタカマチ興行は、全国各地に出現することで、広域の興行ネットワークを形成していく。タカマチ興行が近代において一層の隆盛を見せた背景には、都市と、物と人の横断的な交流を可能にした社会的な構造の変化がある。それらを土台にして、下記に述べるような地方を拠点とした巡業興行を主体とする芸能集団が数多く現れ、そうした存在が主体となりうるタカマチ興行の拡張は、やがて外地での興行や、博覧会という新たな場への展開へと繋がっていく。以下では、その具体的事例として、台湾におけるタカマチ興行と博覧会の実態について概説していく。

二、台湾のタカマチ興行

まずは、台湾のタカマチ興行の例として、台湾に建てられた日本の神社で行われた行事の余興・見世物として登場した芸能について見ていく。台湾の神社は、日本の統治機能として大きな役割を担っており、その中で催される行事も、当然日本のやり方に則っていた。なかでも台湾神社は、明治三四年（一九〇一）に台北市に建てられた神社で、毎年一〇月末に大きな祭りが行われ、新聞にもその様子が大きく取り上げられている。以下、台湾

神社を事例にした調査研究報告「台湾日日新報 台湾神社余興の関連記事」（劉 二〇一八）から、戦前の台湾神社の祭りにおいて具体的にどのような芸能が上演されていたのかをみてみよう。報告書では、多くの芸能記事が取り上げられているが、ここでは大衆芸能が言及された部分のみをいくつか抜き出すと、たとえば大正七年（一九一八）一〇月二七日は「雷雀一座の軽口、喜劇、奇術、海上軒浪丸の浪花節」、大正九年（一九二〇）一〇月二十二日「落語、手踊り、名古屋漫才、手品、軽口、二輪加」、大正一四年（一九二五）一〇月二五日「安来節、浪花節の素人演芸」と、様々な大衆芸能が神社の祭礼の中で行われていることがわかる。

台湾神社以外にも、台南・台中・高雄市などでも日本の神社が建てられ、そこで祭りが行われていることが見出せる。記事の密度も異なるが、ここでは一例として新竹神社の祭典に関する『台湾日日新報』（昭和九年（一九三四）一〇月二八日）の記事を挙げておく。

二十七日夜の御旅所前舞台では六時より、舞踊、手踊り、唄、浪花節、芝居などで市民総出の如き景気をもせていた、また本島人方面では（中略）奉納の人形芝居、御旅所前では同日三時より素人演芸を出すなど街内至る所お祭り気分でざわめいていた。

たいへんな賑わいの様子が分かるとともに、浪花節がその他の様々な芸能、演芸に交じって行われていたことが見て取れる。この記事では台湾本島人の参加が確認できるが、台湾神社でも台北市の街の多くの部分を巻き込み、演者として台湾本島人が参加している様子が窺える。祭りの行列の様子を見ると、着飾って歩く練り物や、余興として台湾の芸妓芝居や台湾の芝居が披露されたこともわかる。もともと他の記事では、台湾と日本の演し

物とは別々な形で行われており、同じ祭りの中で、台湾の演し物の多くは台湾本島人の演者、その聴衆はほぼすべて台湾の人々であったと指摘されている。祭りという一つの賑わいの中にも、このように参加者が分けられていた部分があったことは、留意する必要があるだろう。

三、タカマチ興行と博覧会

台湾のタカマチ興行については、上記のような数日間には渡って開催される神社の規模よりも長い期間で、かつ、より広い場所で興行が可能だった形がある。それが博覧会である。博覧会は、近代以降に始まった催しで、その基本的な方針は、博覧会の主催者である日本の立場でいえば、産業・工業を通じた近代化や帝国主義のアピールの場であったと言えるだろう。台湾の博覧会について述べる前に、日本が開催した博覧会にもごく簡単に触れておきたい。

日本国内で博覧会が開催されたのは、明治四年（一八七二）の京都博覧会が初めてで、内容は主に物産展と産業振興であった。しかし、翌年の明治五年（一八七二）に開催された同じ名称の第一回京都博覧会では、今や日本の伝統文化のステレオタイプの一つとして認識されている芸妓の踊り、「都をどり」が余興として登場する。芸妓の踊りは、その後も博覧会の中に受け継がれ、日本の博覧会で余興の中心的な演し物であり続ける。ちなみに同じような女性の舞台芸術として、宝塚少女歌劇も、やはり婚礼博覧会の余興として扱われていた。その後、明治後期以降、大規模な博覧会がどんどん開催され、芸能・音楽だけではなく、サーカス、あるいは水族館といった、いわゆる見世物に近いものも登場するようになる。展示の見せ方が変化し、物産の展示から、娯楽・祝祭的な要素が強くなる。明治期の博覧会は比較的国内向けの産業振興の場として開催されてはいるものの、たとえば

明治三十六年（一九〇三）に開催された第五回の内国勸業博覧会では、ロシアの馬乗りサーカス（曲馬）の一団や、中国の芝居、ウォータースライダーのアトラクションといった見世物が出てくるようになる。なお、日本の博覧会については、『日本の博覧会』（橋爪 二〇〇五）が詳しい。

博覧会において当初はあくまで付け足しに過ぎなかった余興だが、できるだけ多くの人を集めることが博覧会の成功の一つの指標にもなってきた状況を受けて、規模や中身も変化し、博覧会の集客として大きな役割を担う存在になった。そうした変化のなかでも、常に政治的な意味合いが求められた博覧会は、日本だけでなく、当時植民地となっていた台湾、朝鮮、あるいは満洲という地域でも開催されることになる（山路 二〇〇八）。

名称	開催地	開催時期
朝鮮物産共進会	京城	1915 年
台湾勸業共進会	台北	1916 年
大連勸業博覧会	大連	1925 年
朝鮮博覧会	京城	1929 年
満州大博覧会	大連	1933 年
台湾博覧会	台北	1935 年

表 1 外地（東アジア地域）における主な博覧会

名称	開催地	開催時期
台湾勸業共進会	台北	1916 年
中部勸業共進会	台中	1926 年
高雄港勢博覧会	高雄	1931 年
台湾博覧会	台北	1935 年

表 2 日本統治下の台湾における主な博覧会

日本統治下で開催された博覧会に目をむけると、東アジアおよび台湾で開催された主な博覧会は下記（表 1, 2）のとおりである。ここでは特に台湾で開催された博覧会のうち、「台湾勸業共進会」と、最後の「台湾博覧会」に絞って見ていきたい。タカマチの興行は、資料として残りにくい。博覧会については比較的残っている。博覧会を開催した主催者が報告書を作っており、そこに詳細な内容が記載されている（臺灣勸業共進會協賛會 一九一六、林恵玉 二〇一二）。

まず、台湾勸業共進会に目を向けてみたい。開

催期間は、大正五年（一九一六）年の四月から五月までの約一ヶ月である。開催地は台北で、日本統治二十周年を記念して開催された。二つの会場があり、第一会場には台湾の生産品と、日本各地の様々な分野のものを出品展示した。そして第二会場にもいくつかの展示館・施設が設けられ、そのうちの一つに、芸能に関わるものとして演芸館が建てられた。共進会で具体的にどのような演芸や音楽として何が行われたかは、報告書に「余興」としてまとめられており、奏楽（西洋音楽の演奏）、そして中国の音楽が演奏されたことが記載されている。またその他に花火、福引や臨時の催し物が行われたとある。演芸館での芸能としては台北検査による芸妓の手踊り（ただし、これは日本からやってきた芸妓ではなく、台北の芸妓のグループ）が披露された。それから支那劇、そして連鎖劇は、二つのグループが合同で公演している。また名前は記載されていないが、家庭劇及びお伽劇も合同で開催されている。さらに松旭齋天勝の奇術も確認できる。以上の五つが、開催期間中に上演期間を区切って交代で披露された。

上演の様子についても記載されており、芸妓はこれまで他の場所でいろいろ披露されていたため、あまり人気がなかったとあるが、その他の演し物に関しては、満員で賑わったと記されている。なかでも天勝の奇術は非常に人気があったため、予定の日数を伸ばして上演が行われたことが記されている。すなわち、「主として本島人観覧者のために計画せらるるものなれば、本島人はもちろん、内地人にも適する天勝一座を継続興行することに決し」、公演日数を伸ばした。

天勝一座の人気の理由は、この一座がこれまでどのように興行していたかということが関係している。実は天勝は台湾にたびたび訪れていた。天勝は師匠にあたる天一とともに台湾に訪れており、さらに天勝が座長公演として訪れたものだけを抽出しても、明治四二年（一九〇九）から昭和一三年（一九三八）の間に台湾に一四回訪

れている。博覧会の前後は、明治四四年（一九一〇）、大正二年（一九一三）、大正五年（一九一六）、大正一〇年（一九二一）年に台湾を訪問し、それぞれ平均して滞在期間が約一か月あり（簡秀易 二〇一七）、共進会が開催される前からかなり人気があったことは想像がつく。また共進会の事務局のメンバーには、台湾において興行師として広く活動していた高松豊次郎が天勝の引受人にもなっている。共進会での天勝の人気も自然な流れであった。

では続いて台湾博覧会をみてみよう。台湾博覧会は植民地化に伴う日本政府による始政四十周年を記念して、昭和一〇年（一九三五）一〇月一〇日から一月二八日まで、五〇日間にわたって台北市で行われた。この博覧会が独自に発表していた「台湾の博覧会ニュース」では、五〇日間のうち、四六日目までの入場者が二四万人と非常に賑わっており、大変成功だったと記されている。博覧会の規模もそれまでと比べてもかなり大きく、主要な施設だけでも四〇の展示施設があったという。芸能・音楽に関わるものとしては、音楽堂、演芸館、子供向けの娯楽として「こどもの国」があった。演芸館は、本館と分館と二箇所に作られた。また演芸としては、この二つの建物以外の場所でも興行が設けられていた。

大衆芸能のジャンルについて、どのような芸能が参加したのかというと、演芸館の中心的な催し物としては、芸妓の踊りがやはり披露されていたが、それと入れ替わるようにして吉本興業による様々な演芸が、演芸館のメインの出し物として出されるようになっていた。ジャズ、奇術、音曲競技、高級漫才などの演し物が並んだ。高級漫才では音曲漫才で当時人気のあった浪花家市松・芳子が出演している。演芸館の夜間興行もあり、筑前琵琶、童謡、それから大衆芸能に関しては落語、漫才、曲芸、講談、そして中国の明清楽の清楽の演奏もあった。その他、日本の三曲合奏、箏曲もあった。

台湾原住民の踊り（アミ族）もここで披露されていたが、日本の演し物に関しては、台北市内のアマチュアが参加していた。童謡や児童劇では大学生、高校生も参加している。また、台北市在住の芸人が参加している。様々な人が演者としても参加していたことが、夜間興行から見える。

四、台湾博覧会のタカマチ興行 ―女相撲と活動人形―

台湾博覧会では、演芸館以外の場合でタカマチ的な見世物の芸能が少なからず興行されていた（『台湾日日新報』昭和一〇年（一九三五）一〇月二四日広告）。お化屋敷、奇術、曲芸、動物を使った曲芸などである（『台湾日日新報』昭和一〇年（一九三五）一〇月二三日）。博覧会会場の南門から出たところに見世物街ができ、軒を並べた見世物小屋で客を呼び込む様子が新聞にも掲載されている。新聞の広告によれば、たとえば、動物による曲芸は「お猿さん芸」として「式三番」、「カルカヤ道心」、「忠臣蔵」などが演じられ、また「吉田菊五郎」による「国宝的至芸」（水芸）が確認できる。以下ではこれらの見世物の中から二つ、「女相撲 石山興業部」と「電気応用活動人形」を取り上げたい。

女相撲は、明治以前から存在していた芸能であるが、ここで取り上げる石山興業は、明治前半に興行として女相撲を始めている。女相撲は、文字通り女性が相撲を取るという内容であるが、その他に重い物を持ち上げて力自慢を見せたり、相撲甚句や流行り唄を歌ったり、踊りも披露する。相撲以外にも様々なものを見せるのが女相撲の興行の実態であった。

博覧会における石山興業の女相撲は比較的注目を浴びていたようで、新聞にも何度か単独で登場している（『台湾日日新報』昭和一〇年（一九三五）一〇月一二、一四、二一日）。たとえば記事の一つでは、「臺博観物中の一異

彩「女相撲来る」と特集され、相撲を取るだけではなく、歌を披露することにも触れており、新聞の挿絵にも使われている。『女相撲民俗誌』（亀井、二〇一二年）によると、女相撲の興行は、博覧会以外にも、当時日本の統治下にあった外地を巡業し、朝鮮、満洲、樺太、南洋諸島、ハワイにも出向いている。そして台湾も博覧会と別の時期に興行に来ていた。こうした状況は、先述の松旭斎天勝の奇術の巡業のあり方と類似する部分である。

「電気応用活動人形」は現在東北地方にいくつか残されている人形芝居と同系統のものである。明治半ばに東北で創始されたと言われており、当時は活動人形と呼ばれることが多かった。主に秋田、山形あたりを拠点にして数十座が明治の半ば以降から活動した。座によって活動の規模は様々であるが、そのうちの一部の座が全国的に興行活動を展開していた。『国劇要覧』（昭和七年（一九三二）の「活動人形」の項には「名のある神社の祭礼にはたいして毎年出るので、東京でも明治神宮とか靖国神社とかいふ大きな祭りには、景気のよいときには、この団体が二組も三組も出るから知つてゐる人も多いかと思ふ」と書かれており、全国的に展開していることが窺える。

先述した台湾日日新聞の広告に出ている「電気応用活動人形」は櫻武商会という興行主の吉田京楽という人物が一座の座長を務めていた。吉田京楽の素性については断片的な情報しかわからないが、東北の人形芝居の資料などを見ると、「櫻武商会」の名前が入った幟や幕が見つかっており、おそらく人形芝居の上演とともに、各地で、他の座の興行を手配するような組織を動かしていたことが想像できる。

また吉田京楽自身もサーカス団を率いていたことが分かっている。『サーカスの歴史』（阿久根）の末尾に付されたサーカスの年表中に、昭和一六年（一九四一）から二三年（一九四八）に「吉田京楽」という名前が確認でき、サーカス団として活動していたことがわかる。ただ、具体的な活動状況は不明である。活動人形自体について

は、石山興業のように、外地で台湾で巡業していたかどうかの記録は見出せていないが、活動人形自体は、満洲で行われた博覧会（「満洲大博覧会」昭和八年（一九三三）開催）にも記載があり、外地に向けた興行活動も行っていたのではないかと想像できる。

五、おわりに

近代における芸能興行の実態は、浪花節などの大衆芸能が寄席や演芸場を中心として大きな役割を果たしていたが、ここで取り上げてきた祭礼や博覧会といった野外での興行も少なからず役割を果たしていたことがわかる。なかでも外地の博覧会はその特徴が端的に表れていた。女相撲の興行と活動人形を通じて見出せるのは、「見世物として大変面白いものではあるけども、少し時代遅れで頹廢的なものである」という見方である。この見方は大正から昭和へと時代を下るほどより一層表われてくる。博覧会は「近代化」を前に出すことが表の看板としてあるが、そういう中で、当時としては少し時代遅れなのが博覧会の中に入り、注目され共存していたことは、「何でもアリ」の博覧会の見世物興行が拡張していく奇妙な状況として見出せる。

また「地域から最前線まで」という点にも興行の特徴が表れている。この点については特に活動人形の例に顕著である。実は活動人形を創始した人物や関係者の出身地を辿ると、秋田市などの都会ではなく鳥海山の麓から出てきて活動し始めたことがわかる。それが最終的には、地域を拡大して日本の当時の最前線にあたるようなところで開催された博覧会で興行をしている。このような活動の範囲の拡がりも、台湾博覧会での見世物興行の特徴として見出せる。

博覧会というものを、タカマチという視点で捉えると、それまでには見られなかった、より開かれたもの、拡

がりが見えてくる。それは実際どういうふうを受け止められたのだろうか。表面的には「博覧会が多くの人に歓迎されていた」という見方が可能であるが、内実は、主催者、演者、参加者にも様々な立場の人が関わり、様々な興行物が集まった博覧会という大きな場には、複数の見方（価値観）が混在していただろう。近代の芸能興行史を相対化させるという点で、博覧会は興味深い対象であるといえる。

参考・引用文献

亀井好恵 二〇二二 『女相撲民俗誌』慶友社。

簡秀易 二〇一七 『両地を参照してみる―初代松旭齋天勝一座の台湾及び大阪における公演について』細井尚子編『近代日本』空間下の東アジア大衆演劇 論文集、立教大学アジア地域研究所。

臺灣勸業共進會協賛會編纂 一九一六 『臺灣勸業共進會協賛會報告書』臺灣勸業共進會協賛會。

橋爪紳也監修 二〇〇五 『日本の博覧会…寺下勅コレクション』（別冊太陽、平凡社）。

林恵玉編・解説 二〇二二 『始政四十周年記念台湾博覧会協賛会誌博覧会』（復刻版近代日本博覧会資料集成 植民地博覧会 第二巻）、国書刊行会。

山路勝彦 二〇〇八 『近代日本の植民地博覧会』、風響社。

劉麟玉 二〇一八 『日本伝統音楽の越境…植民地台湾における「邦楽」の伝承』科学研究費助成事業基盤研究（C）、平成二七年度―二九年度 研究成果報告書。

3 日本統治期台湾における浄瑠璃文化

——『台湾日日新報』記事調査を主軸として——

川下 俊文

一、はじめに

台北きつての繁華街、西門町の一角に、台北西門威秀影城という映画館がある。ユニクロやABCマートも入居する、この賑やかな高層ビルの建つ場所には、かつて栄座という劇場があった。それは日本統治期のことである。明治二八年（一八九五）、日清戦争の結果として清国から割譲された台湾に、日本人は統治者として続々と乗り込んでいった。明治四五年（一九一二）には大陸で清国が滅亡して中華民国が成立したが、それを横目に台湾では日本の総督府による統治が続き、歌舞伎・浄瑠璃・落語・講談などの大衆芸能が日本人官民を喜ばせていた。栄座は、もっぱら歌舞伎の劇場として使用されていた。

まさにその同年にあたる大正元年（一九一二）十一月、栄座に掲げられた看板には「全島素人義太夫大会」と銘打たれていた。舞台上には高座が据えられて、中央に座するのは中年がらみの男、隣には三味線を抱えた女師匠。デンと弾き出す太棹に、男は自信たっぷりの大口を開け、それでいて哀しげな高音を振り絞りながら、うたい出す。——「夢が浮世か、浮世が夢か、夢てふ里に住みながら」——義太夫節屈指の人気曲『壺坂靈驗記』の始まりだ。

看板には「素人」とある。まさに彼は素人である。彼はかりでなく、二六日から二八日までの三日間、のべ

四三人ものアマチュアがかわるがわる高座に昇つては、師匠の太棹三味線に助けられて存分にうなりを聴かせたのだった。そして一部の演者については新聞紙上で芸評も残され、拙ければ「今一息の修業が肝心」、巧みならば「艷麗大喝采」などと報じられている。

それからおよそ七ヶ月が経って、大正二年（一九一三）七月初め、再び榮座に『壺坂靈驗記』の浄瑠璃が響き渡った。今回の演者は素人ではない。それどころか、『壺坂靈驗記』を人氣曲に押し上げた第一人者たる三代目竹本大隅太夫の来演である。義太夫節の本来本元と目される大阪の人形芝居で長きにわたって紋下（人形芝居における座長格の太夫）を務め、情味あふれる写實的な芸風を押し立てた当代の名人が、どうして外地の台湾にまでやって来たのか。——大隅太夫が四年ほど前から中風を病んで声量が落ち、明治天皇崩御の諒闇による不景氣も重なって、ついに紋下を務める近松座から引退を宣告されてしまった^三、その苦境をしのぐ旅稼ぎであることは、台北の浄瑠璃好きの間ではそれなりに知られていたであろう。実際に台北の日刊紙『台湾日日新報』（以下、『台日』と略記）を見ても、大隅太夫の芸の衰えは明らかに聞き取られている。しかし衰えたりといえども真に迫った語り口を、新聞記者は感動的に報じた。

調子は低くもあれ音声が枯れて居ても、語る処は依然として遠^{さす}がは大隅である。言葉は殆んど地で行き盲目の病人たる母親を髣髴させ立派な久作を現出する点に至つては無類と云ふべく、「…」この淋^{ママ}びし一段の中に多くの聴き処がある事を認めねばならぬ^四。

ここに榮座で語られた二つの『壺坂靈驗記』を挙げたのは、それらが、台湾の日本人社会における義太夫節浄

瑠璃（以下では文脈に応じて、義太夫節／義太夫／浄瑠璃の語を併用する）の諸相をよく象徴しているからである。すなわち、台北の人々が内地（大阪）から来た大隅太夫の巡業を熱烈に歓迎し、その芸力を味わう土壌があったのは、義太夫稽古に熱中する素人衆と、彼ら素人に稽古をつける師匠の存在があったからこそだった。

この、素人衆すなわちアマチュアという周縁的な存在がプロの浄瑠璃演者の公演を支えるという構造は、内地の状況に全く等しい。ただし違う点を挙げるならば、それは大隅太夫のような人形芝居に所属する演者の来演する機会が、内地に比べると著しく乏しかったことである。『台日』紙上の浄瑠璃関係記事を網羅的に調べてみると、台湾の浄瑠璃界は、一に素人義太夫、二に女義太夫、三に義太夫芸妓の存在によって支えられていたといってい。それだからこそ、たまさかに浄瑠璃の本来本元としての権威を帯びた大阪の人形芝居に属する男性演者が来演すると、彼らは熱烈に歓迎されたのである。

台湾にこのような状況が定着したことについて、李思漢氏による網羅的かつ要を得た先行研究があり^五、本科研においても李氏による研究発表を開催した^六。また、植民地朝鮮や外地としての満洲における素人義太夫についても、韓京子氏が研究に着手されている^七。本稿ではそれらの学恩に導かれつつ、まずは前提として浄瑠璃文化の諸相を概説したうえで、『台湾日日新報』記事の調査^八を主軸として、台湾における浄瑠璃文化のありかたを素描する。

二、浄瑠璃文化の諸相 —— 人形浄瑠璃・女義太夫・義太夫芸妓・素人義太夫 ——

そもそも義太夫節は近世の大坂（大阪）で発祥した語り物音楽であり、その発祥の当初から、人形芝居の伴奏音楽として興行されていた。竹本義太夫により開かれた竹本座と、豊竹若太夫により開かれた豊竹座の競争を通

じて、義太夫節人形芝居は芸術的完成をみたのである。そうした経緯により、義太夫節演奏の裾野が大きく広がったのちも、現在の文楽に連なる大阪の人形浄瑠璃に属する演者こそが本家本元とみなされた。彼らはすべて男性であり、「竹本（または豊竹）○太夫」という形式の芸名を名乗る。

しかし浄瑠璃自体は音曲であるから、劇場空間を離れた芸能として独立することは自然な成り行きである。人形なしで浄瑠璃だけを語ることが「素浄瑠璃」といい、寄席の演目、素人の稽古事、そして花柳界の芸事として広く普及した。先述した人形芝居の演者が男性に限られるのと異なり、寄席芸人としての義太夫節演者には女性もいて、これを特に「女義太夫」（略称は「女義」という。特に近世・近代の用語としては、若い女性演者を含意する「娘義太夫」の方が一般的であり、若い女性の技芸よりも容色を愛でる芸能という偏見を受けた。明治二〇から三〇年代にかけて、書生（すなわち青年男性）による女義太夫の追っかけが過熱し、「どうする連」と呼ばれたことはよく知られている。

一方、花柳界に属する芸妓で義太夫を芸とする者もいて、本稿ではそれらの芸妓を「義太夫芸妓」と呼称する。彼女たちは女義太夫と近い存在にも見えるが、専業としての浄瑠璃演者ではなく、あくまでも検番や料亭に所属する芸妓である。したがって、女義太夫の出演場所は寄席、義太夫芸妓の出演場所は料亭という区別がある。演芸会や祭礼余興などでは女義と芸妓が共演することもあるが、新聞報道を見ると、芸妓の名には所属料亭名や検番名を冠することで女義との区別を明確にしている。女義太夫は竹本・豊竹姓を名乗るが、芸妓はそれらの姓を名乗ることはなく無姓であり、必要に応じて料亭名や検番名を冠称する、ということになる。

そして、人形芝居・寄席を問わず、プロの芸人たちの重要な収入源となったのが、彼女たち芸妓や、一般人の素人を相手とする稽古だった。

近世より、浄瑠璃は旦那芸のひとつとして盛んに稽古が行われており、特に明治時代において最盛期を迎えたといつてよいだろう。この素人による稽古の営みを「素人浄瑠璃」または「素人義太夫」といい、後者を略して「素義」と称する。彼ら素人衆は、鼻を高くして技芸を自慢することから「天狗」とあだ名された。「まだ青き 素（白）人浄瑠璃 玄（黒）人がり 赤い顔して 黄な声を出す」という狂歌は、五色を詠み込みつつ、彼ら「天狗」たちの自慢ぶりを諷したものである。彼らは芸名を持っているが、やはり竹本・豊竹の姓を名乗ることはなく、強いて姓名を記す場合には本姓＋芸名というかたちになる。

素人浄瑠璃は個人で完結する趣味ではなく、稽古を要するので、必然的にプロの芸人との師弟関係を結ぶことになる。それが発展すると、それぞれの師匠を推戴する弟子たちの派閥が形成され、組織化に至る。この組織を「連中」といい、たいていは「○○連」という団体名を称していた。素人を「天狗」と呼ぶことから、素人連は「天狗連」とあだ名された。

以上に挙げた浄瑠璃界の成員を整理すると、①人形浄瑠璃および寄席の男太夫（職業芸人・男性）、②寄席の女義太夫（職業芸人・女性）、③花柳界の義太夫芸妓（職業ではあるが芸人ではない・女性）、④素人義太夫（アマチュア・男女（主に男性））、の四つに分かれるわけである。そこで本稿でも、これら四つを項目として立てながら、特に台湾における浄瑠璃文化の全盛期というる、明治・大正時代を中心にしてその様相を述べたい。

三、人形浄瑠璃諸座の台湾巡業

日本が台湾領有を開始した明治二八年（一八九五）時点の人形浄瑠璃は、大阪にある文楽座・稲荷座という二つの劇場が人気を競っていた。文楽座は、現在でもその名を人形浄瑠璃の代名詞として使われるように、近現代

を通じて存続した代表的な劇場である。それに比べると稲荷座は、もともと彦六座と名乗っていたものが改組して成立し、その後も明楽座・堀江座・近松座へと短期間の改組を繰り返しながら、それでも大正初年まで文楽座に対抗して奮闘を続けた劇場である。文献によっては「非文楽系諸座」とも「彦六系」とも呼ばれるが、本稿では後者を用いることにする。文楽座を率いる三代目竹本越路太夫（明治三十六年「一九〇三」に受領して竹本撰津大掾と改名）、彦六系を率いる三代目竹本大隅太夫は、これまた対照的な芸風で知られた名人であり、二人の競争が劇場の競争を象徴するかのとき観があった。

これらの両座は大阪以外の地域へも巡業したが、それはおおむね人形なしの素浄瑠璃の形態をとった。台湾における巡業実績は以下の通りで、昭和一三年の竹本南部太夫一行に乙女文楽が合同したことを除けば、いずれも素浄瑠璃である^九。

竹本大島太夫	近松座	明治四〇年（一九〇七）六月	台北・朝日座
竹本津国太夫	文楽座	明治四五年（一九一二）三月	台北・朝日座（↓四月、基隆へ巡業）
三代目竹本大隅太夫	近松座	大正二年（一九一三）七月	台北・栄座（↓台中・台南へ巡業）
四代目竹本大隅太夫	文楽座	昭和四年（一九二九）二月	台北・共楽座（↓嘉義・屏東・基隆へ巡業）
竹本越名太夫	文楽座	昭和四年（一九二九）九月	台北・楽々園（↓新竹・高雄へ巡業）
竹本南部太夫	新義座	昭和二年（一九三七）七月	台北・栄座
同	同	昭和十三年（一九三八）四月	台北・栄座（乙女文楽と合同興行）

このうち、竹本越名太夫は南部太夫の前名（昭和五年「一九三〇」に四代目南部太夫を襲名）なので、彼は三回にわたって渡台を行ったことになる。新義座とは文楽座員の一部が昭和十一年（一九三六）に脱退して立ち上げ、昭和十四年（一九三九）の解散まで短期間存在した一座である。この新義座の幹部であり、一座旗揚げの前後にかけて度重なる渡台を敢行した南部太夫の存在はきわめて興味深いが、今回は紙幅の都合により後考を期して割愛する。本節では、大正二年（一九一三）の三代目竹本大隅太夫の巡業を日本統治期台湾における浄瑠璃文化の画期点と位置づけ、その前史にあたる大島太夫の渡台から筆を起す。

竹本大島太夫は三代目大隅太夫の弟子で、大阪の人形芝居の座員として初めての台湾巡業を行った太夫である。もともと台湾総督府による始政記念会（六月一七日）の余興のために招聘されたもので、台湾総督官邸で開催された同会では、師匠の得意とした『勧進帳』を掛合で語った。弁慶はもちろん大島太夫が務め、立三味線は大島の相方の鶴沢仲助、富樫は竹本山城太夫、そして義経は竹本津葉芽太夫、すなわち若き日の豊竹山城少掾であった。

のちに山城少掾は、この渡台が東京の素人義太夫の巨魁・杉山茂丸（其日庵）と、杉山の親友・後藤猛太郎（後藤象二郎の子、伯爵）の斡旋によるものだったと回顧している^{一〇}。在野の政治活動家であった杉山は、児玉源太郎・後藤新平といった台湾総督府首脳陣と親交を結び、台湾の政財界へも隠然たる影響力を及ぼした人物であるから^{一一}、その杉山が最員の浄瑠璃演者たちの渡台を斡旋することは、大いにあり得る。特に鶴沢仲助は杉山の浄瑠璃稽古の師匠を務め、杉山の著書『浄瑠璃素人講釈』^{一二}においてその親交がたびたび描かれている間柄であった。一方で大島太夫は、同書において一度しか言及されず^{一三}、仲助に比べれば、さほど杉山と親しかったとは思われない。したがってこの渡台は、台湾総督府と杉山、杉山と仲助との、それぞれ親密な関係から実現

したものであろうと推測しておく^{一四}。

すでに台北には女義や素義を中心とした浄瑠璃文化が根づいていたものの、本場の太夫の初めての来台とあって、「久しく太棹^{ふと}に渴^あして居た処へ大隅太夫に垂^つぐ大島がやつて来たといふ評判は船がまだ基隆棧橋へ著かぬ前から人々の口に伝へられて居たので当夜参会の面々は固唾を呑み呼吸^{いき}を殺して聞惚れて居たのも無理はない〔…〕其の幕となつた時の如きはさしも物事に騒がぬ紳士連も此時ばかりは殆ど狂喜の態で拍手喝采漸く止んだかと思ふと後はアアといふ感嘆の声暫くは動揺^{どうぶ}めき亘つた」^{一五}と報じられる大好評を収めた。

この好評に対して、「此儘に帰すを遺憾として当地の吾妻、魚金、日本亭の三大料亭が請元となり」^{一六}、大島太夫の朝日座公演が実現した。始政記念会の翌日、六月一日から二二日までの五日間の日程で、大島の演題は堀川（『近頃河原達引』）、壺坂（『壺坂靈驗記』）、酒屋（『艷容女舞衣』）、桂川（『桂川連理柵』）といった、師匠ゆずりの世話物が揃っている。始政記念会での手放しの好評とは異なり、一般向けの興行には聴衆にも聴き巧者がいたと見えて、大島は艶物ばかり出しているがむしろ時代物に挑むべきだとか、津葉芽の技量は確かだが咽喉を痛めていて聞き苦しいなどと批評されている^{一七}。しかし批評は手厳しくとも公演は盛況を呈したようで、六月二三日には台北倶楽部で隘勇線前進隊慰問義捐の浄瑠璃会を催し、一〇〇円もの寄附集めに成功した^{一八}。

大島太夫の渡台は杉山其日庵と台湾総督府との人脈に端を発したと思われるが、台湾の日本人社会においては、料亭が請元になり、花柳界が全面的に興行を後援するという構図の原型をなしたといえるだろう。請元となつた料亭の吾妻・魚金・日本亭は、それぞれ義太夫芸妓を抱えていたし、特に日本亭の主人は素人義太夫としても名を馳せた旦那であつた（詳しくは後述する）。吾妻は請元としての出資だけでなく、朝日座での『勸進帳』掛け合いに際して、抱えの芸妓を鳴り物担当として出演させてすらいる^{一九}。このように、内地からの巡業のために

は現地の花柳界による後援が密接にかかわっていた。

それから五年後に来台した竹本津国太夫は、明治四五年（一九一二）三月二十八日から三〇日までの三日間、同じ朝日座で興行している。初めての来台として注目を集めた大島太夫に比べると、津国太夫は若手だったこともあってか、新聞報道の扱いは大きくなく、劇場も大入りとはいかなかった^{二〇}。しかし義太夫愛好家の間では「尠からず医渴の思ひで歓迎され」^{二一}、熱心に聴かれたとも報じられている。

その翌年の大正二年（一九一三）七月に実現した三代目竹本大隅太夫の来台は、明治期浄瑠璃界の黄金期を牽引した大立者による初めての外地巡業であり、しかも大隅太夫の急病による客死という悲劇に終わったこともあって、浄瑠璃史に特筆される事件となった。

すでに記した通り、大隅が渡台に踏み切った背景には、近松座から同年四月に引退を強いられるという苦境があった。李思漢氏は、大隅の弟子にあたる大島太夫による台湾巡業の成功が、外地巡業によって苦境を乗り切ることを大隅に決意させた動機になった可能性を指摘している^{二二}。その一方で、大隅の渡台を実現させるにあたっては、彼自身の内的動機だけでなく、大島太夫の際と同様に日本・台湾両方の協力者を要したことと思われる。大隅太夫は先述の杉山其日庵にとつて最も親密な輩員の太夫であったが、大隅の渡台に杉山が関与した形跡は、意外にも、管見の限り見出すことができない。『台日』の記事を根拠にすると、むしろ、台北の花柳界による熱心な誘致と、舞台を提供した栄座の興行戦略とが相まって実現した鳴り物入りの興行だった実態が見えてくる。

台北花柳界にあつて大隅太夫の招聘を主導したのは、台北・新起街の温泉兼料亭だった丸中温泉の店主、三谷新八である。『台日』では「丸中の三谷老人大奮発にて斯道〔引用注・義太夫界〕 同好者の為にと態々人を立てて大隅太夫一行の渡台を交渉せしめ」^{二三}たと報じられている。丸中温泉は日治初期の明治三〇年（一八九七）

夏に開業し、低廉な価格設定と奇抜な趣向で評判を呼んで^{二四}、大隅太夫来台の時点でも台北屈指の宴会場として知られていた^{二五}。店主の三谷新八は大正二年（一九一三）時点で台北料理屋組合正取締を務め^{二六}、台北花柳界を率いる立場にあった。その三谷が大隅太夫招聘を実現させるや、「各料理屋連中は丸中の為に力を入れ大に斡旋の勞を取り仲居芸妓をして札売りを為さしむる事となり」^{二七}、大隅一行の台北到着を「料理屋組合及び検番員芸妓等総出にて旗を押し立て」^{二八}て迎えるなど、盛大な歓迎をもって老名人を遇した。

一方で、これまでに大島太夫・津国太夫が出演した朝日座と異なり、今回の劇場は榮座であった。当時の朝日座と榮座は、前者が座主・高松豊次郎^{二九}の辣腕により「兎も角も金穴を探して来て大物を招聘する」積極的な興行を展開したのに比べて、後者は「平凡なる田舎廻りの一座を迎へて年中一定の木戸錢を以て押し通して居る」保守的な経営で、要するに安上がりで地味な興行ぶりだったと報じられている^{三〇}。しかし今回の大隅太夫の来演に関しては、三谷を筆頭とする台北花柳界による強力な後援を受けたために、榮座はさほどの負担を要さずに華々しい興行を打ち、地味な印象を払拭することができたのではないだろうか。何しろ、大隅の興行の劇場内装は「棧敷廻りに藤棚の造り花を回らし欄干には波模様の幕に金銀の人氣玉を水玉に擬して吊り並らべ紅ぼかしやら水色ぼかしの岐阜提灯にズラリと電灯を入れ柱は紅白或は白と浅黄の段だら巻き「…」という「念の入り過ぎた程濃厚とした舞台の造り方」で、初日の客席は「検番の美人連」と「民間の大人連」、すなわち芸妓と旦那衆によってほとんど埋められるという、まさに「請元が丸中で後援が料理屋組合、思ひ切つて派手に行くのは当然の事だ」と評されるにふさわしい晴れ舞台であった^{三一}。

この初日興行では、「官吏側のお歴々は余り見受け」なかったという。このことは、大島太夫の来台が、杉山其日庵から台湾総督府という（裏口ではあるが）官界ルートといいうる経緯で実現したのと対照的に、大隅太夫

の來台が花柳界およびその顧客たる紳士連という民間ルートでもたらされたことを反映しているのだろう。

大隅の台北公演（七月一―七日）は、冒頭に引用したように高い評価を受けた。その後、大隅一行は台中（九―一四日）、台南（一五―一八日）へ巡業し、その先々で大歓迎を受けたことは『台日』に逐一報じられている。この台南で病を得た大隅は、七月三日に同地で客死するという痛恨事に至った。しかし、この大がかりな興行の成功は、台湾における浄瑠璃文化の普及の広さと、そこに花柳界の存在が大きくかわっていたことを証する事例といえるのである^{三二}。

四、女義太夫と素人義太夫

台湾における浄瑠璃文化の広がりをもたらした功労者は、もっぱら女義太夫である。李思漢氏によれば、明治二八年（一八九五）の台湾領有開始後、早くから芸妓や女義太夫が渡台し、料理屋での接客、日本人官僚の社交場「淡水館」での余興、寄席・劇場への出演と、さまざまな場で活動していた。それは明治二〇―三〇年代の内地における娘義太夫ブームの余波とも位置づけられる。また、台湾へ進出した女義の多くが関西地方（京阪神）出身であることも知られている。

加えて李氏は『台日』の記事を調査し、これらの女義太夫を師匠として素人浄瑠璃連中が結成され始めた様子を報告している。早い事例としては竹本八重松門下の「都連」、竹本大吉門下の「若松連」を挙げている。また男性師匠としては竹本東太夫^{三三}がおり、その門下を「東寧連」という。これらはいずれも台北で結成されたが、明治四〇年代になると台中・嘉義・台南・打狗（高雄）などでも素人連の結成が進んだと李氏は述べている。本

稿冒頭に紹介した「全島素人義太夫大会」は、まさにそうした素人連の広がりの実績といえる。

『台日』紙上で女義太夫の興行情報を拾うと、明治二九年（一八九六）七月に台北・北門街の一龍亭で行われた「阿波の娘浄瑠璃」の来演^{三四}が最も早い。明治三一年（一八九八）一月、台北・幸亭での竹本鐘龍の公演に対する芸評^{三五}は、同紙上初の女義太夫評である。そして同年六月からは、台北の十字館や淡水館を主な舞台として、竹本八重吉一座による月例興行が始まった。鐘龍や八重吉は、台北に定住して興行および素人連の稽古に努めた、台湾浄瑠璃界の草創期の功労者といえよう。

明治三六年（一九〇三）一〇月二〇日より二二日にかけて、『台日』に「台北の義太夫界（上中下）」と題する雑報が連載された。このような記事が連載されること自体が、台北における浄瑠璃人気の台頭を反映しているわけだが、その記述の大部分が素人義太夫によって占められている。

同記事にて「台北四天王」に位置づけられる素人義太夫は、十三（日本亭亭主・足利利兵衛^{三六}、すなわち竹本大島太夫台北公演の請元の一人）、相生（「大工の黒田公」、詳細不明）、柳枝（「台北座主笠松の弟」、寿楽（「道楽屋の斎藤別当」、詳細不明）の四名で、これに都雀（「民報社の大番頭」・田中重助）を加えて五天王ともいう、と報じられている。その後の素人義太夫会の活動を見ると、寿楽の活動はさほどでないが、十三・相生・柳枝・都雀については長きにわたって精力的な出演を見出せる。また、同記事で報じられた浄瑠璃師匠には、女性では竹本八重吉、竹本八重松、竹本鐘龍、野澤常子など、男性では竹本時太夫、竹本東太夫、野澤庄吉がいる。うち、時太夫は台北座、東太夫は栄座にそれぞれ所属したと記載されているので、彼らは歌舞伎竹本との兼業だったことがわかる^{三七}。

また、その翌月の十一月三日の記事「黄菊白菊」では、台湾の演芸各界の代表的人物を紹介しているが、その

中で女義からは竹本八重吉、素義からは十三（足利利兵衛）が拔擢されている。

竹本八重吉は明治三十一年（一八九八）六月に渡台し、その船中で共楽会塚本幹事の知遇を得たことから同会に出演^{三八}、これが月例公演への足掛かりになったものと思われる。同年一〇月の雑報では、多くの演芸が下流向けであるのに対して竹本八重吉だけが上流から下流まですべての階級の客を集めていると賞賛されている^{三九}。師匠としては「鞍馬連」^{四〇}を率い、大正四年（一九一五）まで素人浄瑠璃会の三味線方として参加が見られる。また、竹本鐘龍は「互友連」^{四一}の師匠で、昭和八年（一九三三）十一月の引退公演まで長きにわたって活躍した。活動期間の長さと、寄席および素人浄瑠璃会への出演歴の幅広さからいえば、鐘龍こそ台湾浄瑠璃界の最大の功労者といつてよい^{四二}。

「台北の義太夫界」よりも後年の女義太夫の中で主だった演者を挙げると、竹本国芳は義太夫定席・芳野亭を開業した点で特筆される。『台日』紙上における彼女の初出は明治四二年（一九〇九）九月一六日の朝日座への出演であるが^{四三}、その翌年に夫の弁護士某が一万円余りを抛出して、台北・新起横街に芳野亭を開業したと報じられている^{四四}。国芳自身もこの寄席に女義太夫として出演する一方、明治四五年（一九一二）三月には内地へ渡り、京阪神地域から「名のある娘義太夫の若手連数名」を選んで芳野亭へ出演させており^{四五}、演者と経営者の二足の草鞋を履いた活躍ぶりを見て取れる。

この時に台北へ渡り、芳野亭に出演した女義太夫のひとり・竹本勝玉^{四六}は、浄瑠璃師匠として「勝玉連」を率い、『台日』紙上で確認できる限りでは昭和一二年（一九三七）までの長きにわたって数多くの素人浄瑠璃会に出演している^{四七}。

一方、彼女たちの弟子にあたる素人義太夫の活動を見てみると、先に挙げた台北四天王の筆頭・足利利兵衛（芸

名「十三」の存在は大きく、「黄菊白菊」でも「義太夫界の素人連中大天狗中天狗小天狗数ある中に嶄然一頭地を抜くものを十三太夫と云ふ」^{四八}と評される。その活動期間は明治三三年（一九〇〇）から^{四九}大正一五年（一九二六）まで^{五〇}の長きにわたるが、彼は本業においても明治三九年（一九〇六）に三谷新八とともに台北料理屋組合副取締に選出されており^{五一}、日本亭では店主だけでなく従業員たちまでが似たような芸名を名乗って義太夫を稽古していた^{五二}。

ちなみに基隆にも同名の料亭「日本亭」があるが、そちらの主人は同じ足利姓の足利藤吉である。藤吉は明治二八年（一八九五）の台湾領有開始後まもなく渡台した最古参の日本人の一人で、大正一五年（一九二六）に基隆料理屋組合長在任のまま五五歳で病死するまで^{五三}、長く基隆料理屋組合の重役を務めた^{五四}。彼らが同じ一家だとすれば、足利家は台湾花柳界の実力者一族といえる^{五五}。

これら女義太夫・素人義太夫によって支えられた浄瑠璃文化のひとつの達成点として、冒頭に紹介した大正二年（一九一三）十一月の「全島素人義太夫大会」を位置づけることができよう。『壺坂靈驗記』を語ったのは一声という素人で、彼も昭和十一年（一九三六）に死去するまで息の長い活動を続けた巨頭である^{五六}。十三こと足利利兵衛は、一声に続いて道春館（『玉藻前臆怯』を語った。師匠が担当する三味線については演目ごとではなく、記事の最後にまとめて記載されるのが通例であるため、どの師匠がどの弟子に就いたか判明しないが、竹本八重吉・竹本鐘龍・豊竹三玉という女義太夫たちが分担している。

このように、女義太夫は演者と師匠という二つの顔を持って浄瑠璃文化の立役者となり、浄瑠璃の愛好家はその聴衆として芸能を消費するだけでなく、素人連として半ば演者側に立った。こうした状況は内地でも同様ではあったが、台湾には人形浄瑠璃が根づかなかったために、この両者の活動が大部分を占めたことを特徴とするの

である。

五、台北花柳界と浄瑠璃文化

第三節にて、竹本大島太夫および大隅太夫の巡業に花柳界の後援が大きく関与していたことを述べた。もとより浄瑠璃は音曲芸能である以上、花柳界との関係が深いことは当然に想定される。当時の台北では台北検番・高砂検番が芸妓を管轄し、料亭の同業者組合としては台北料理屋組合が結成され、それとは別に艀舁遊廓を対象とする艀舁検番が存在した。これらの芸妓たちの一芸として浄瑠璃があったので、彼女たちに浄瑠璃を教えることは、素人連の指導と並んで、義太夫師匠の主要な生業となった。

『台日』から一例を挙げると、女義太夫・竹本八重松が「久しく艀舁の女義太界に牛耳を執りたりしはね馬事竹本八重松」^{五七}と評されていることから、彼女が艀舁遊廓の芸妓に対して浄瑠璃の稽古をつけていたことが推察される。一方で彼女は素人連の師匠としては「都連」を率いており、その門下には素人義太夫の「台北四天王」に数えられた十三や都雀がいる^{五八}。八重松はもともと竹本八重吉一座の二番手として出演していたのが『台日』紙上での初出であるが^{五九}、それが台北に定住して艀舁芸妓および素人連への稽古で生計を立て、結果として台湾における浄瑠璃文化の広がり貢献したといえるだろう。明治三七年（一九〇四）一〇月に内地へ引き揚げの予定と報じられた^{六〇}のが、同紙上で確認される八重松の活動の最後である。

このように師匠から稽古を受けた義太夫芸妓は、先述のように寄席出演の女義太夫とは異なり、検番や料亭所属の芸妓として活動した。例えば竹本大島太夫の台北公演を支援した料亭のひとつ・日本亭では、小勇・小福・小吉・小仙という四人の芸妓が、台北における名高い義太夫芸妓としてまとめて新聞記事に採り上げられた^{六一}。

その他、素人義太夫会や演芸会の記事では、新喜楽・竹の家・吾妻といった料亭の芸妓が出演していることが確認できる。芸妓のみ出演の浄瑠璃温習会も明治三十三年（一九〇〇）一二月に台北・淡水館で開かれているが^{六三}、これはまれな事例で、多くは素人やその他の音曲との合同出演であった。

こうした義太夫芸妓の存在と活動は台北の花柳界において最も盛んだったことと思われるが、それ以外の地方都市における状況も『台日』紙上に散見する。たとえば台南では、明治四〇年（一九〇七）年六月一五―一七日に台南座で開催された隘勇線前進隊義捐演芸大会に、遊廓検査・台南検査に所属する芸妓が出演し、遊廓検査による三浦別れ（『鎌倉三代記』）や一力茶屋（『仮名手本忠臣蔵』）が披露された^{六三}。阿緞では、「近來花柳界に義太夫の流行日を逐うて盛んにして魚虎の女将千歳の門下生のみを以てするも十有余名を数ふ」^{六四}という状況を背景に、明治四四年（一九一一）十一月一一・一二日に阿緞座で芸妓による浄瑠璃会が開催された。他には基隆^{六五}や打狗^{六六}でも義太夫芸妓の浄瑠璃会出演を確認できる。

義太夫芸妓の活動に加えて見逃せないのは、料亭の主人の趣味、すなわち旦那芸としての素人浄瑠璃愛好である。すでに詳しく記した通り、その代表格というべき日本亭主人の足利利兵衛は、十三という芸名で「台北四天王」の筆頭に数えられる大物だったし、同店の板場や帳場からも主人に似た芸名の素義が出ているのも、主人の影響とみて違いあるまい。彼ら男性だけでなく、女性としては松の江・幾久・だるまといった料亭の女将が「我劣らじと鼻高々」^{六七}の素人連中として報じられている。

上述のような花柳界における音曲文化の広がりには、そこに師匠として関与する女義太夫、客として集う男たち（素人義太夫）とともに一種の演芸界（『台日』が「台北の義太夫界」と称したところの、演芸を介した同好者空間）を形成した。それが、前節で述べた日本からの演者の巡業に際しても有力な後援者の群れとなっていたとい

えるだろう。

六、むすびにかえて ―― 昭和期の台湾浄瑠璃界 ――

本稿では『台日』記事調査を主軸として、明治・大正期を中心とした日本統治期台湾における浄瑠璃文化の様相を素描した。冒頭に紹介した大正元年（一九一二）の全島素人義太夫大会と、翌年の三代目竹本大隅太夫の来演は、ともに台湾における浄瑠璃文化の最高潮として位置づけることができよう。そして、その背景には師匠と演者の二足の草鞋を履いた女義太夫たちや、浄瑠璃興行を物質的にも後援した花柳界の存在があったのである。

こうした構図そのものは、おそらく昭和二〇年（一九四五）の敗戦による日本統治の終焉に至るまで持続したと思われるが、一方で昭和期の浄瑠璃文化のかたちには大きな変化が生じた。そのひとつは活動写真の普及によって寄席における浄瑠璃の上演機会が減ったことであり^{六八}、もうひとつは昭和三年（一九二八）に台湾でラジオ放送が始まって芸能空間の外でも音曲を享受することができるようになったことである。ラジオでは、かつては巡業を待たなければならなかった内地芸人（大阪・文楽座の太夫や、東京・大阪両地の女義太夫）の技芸を生中継で聴くことができるようになった。しかし、すでに予定の紙数を超過したため、これらの論点についてはいずれ稿を改めて記述する機会を待ちたい。

なお、大隅の名跡を継いだ四代目竹本大隅太夫は、先代の一七回忌にあたる昭和四年（一九二九）に渡台し、台北・楽々園での追善義太夫大会（二月四―七日）に参加したのち、嘉義（嘉義座）・屏東（料亭井筒）・台北（共楽座）・基隆（基隆座）へと巡業した。それはすなわち、台湾におけるラジオ放送開始の翌年のことである。

この追善義太夫大会には台北の素人義太夫が多数参加し、嘉義巡業は「嘉義街内同好者」の主催により実現、

そして基隆では三代目大隅太夫および基隆素人義太夫を慰霊する「浄瑠璃塚」の除幕式を開催、という具合に、この四代目の巡業は台湾各地の素人義太夫の熱意によって実現したといつてよいだろう（詳細を省くが、このような義太夫会への出演を主眼とする来台は、同年九月の越名太夫の場合も同様である）。また、共楽座での義太夫会は台北市社会事業助成会の基金募集のため奉仕的に出演したもので、同会による主催、台北市社会課および台北市方面委員による後援となっており、つまり官界による公益事業の色合いが強い。

こうした経緯には素人義太夫の熱意が表れているが、三代目の渡台時における花柳界の強力な後援は見られず、むしろ官界による明らかな関与を受けているところに、時代の変化を見ないわけにいかない。屏東では料亭が会場とされているが、これは当地の劇場が空いていないため料亭主人が「義侠的に」会場を提供したものにすぎず、かつての花柳界による積極的支援とはかけ離れていた。その後も竹本南部太夫（越名太夫）の来台があり、大阪文楽の巡業に対する需要と、それを誘致する台湾の素人義太夫の実力が持続していたことは確かである。しかし、先に略述した、芸能空間における浄瑠璃の存在が退潮した現象とあいまって、浄瑠璃興行と花柳界との共存共栄はすでに見られなくなっていた。その意味においても、三代目大隅太夫の来台は、確かに台湾における浄瑠璃文化の最高潮をなしたのである。

今回の調査において確認できた『台日』紙上の浄瑠璃関係記事は昭和十五年（一九四〇）までに限られる。本稿にて言及した女義太夫・素人義太夫については、興行出演時に名前が報じられるのみで、女義太夫ひとりひとりがどのような経緯をたどって台湾へ来たのか、また素人義太夫に至ってはその素性さえも、判明するのはごくまれである。本稿ではそのまれな事例を手がかりとして、台湾の浄瑠璃文化の様相を素描したが、今後もさらなる調査の進展に期待したい。

一 「全島素人義太夫会」、「台湾日日新報」明治四五年（一九一二）十一月二六日。以下、同紙記事の出典表記は「記事名」（台日、和暦年・月・日）と略記する。

二 「栄座の義太夫大会」（台日、明治四五・二・二八）

三 祐田善雄「人形浄るり芝居の変遷」、文楽協会「編」『義太夫年表大正篇』義太夫年表大正篇刊行会、昭和四五年（一九七〇）、八一―一〇頁

四 「大隅の初日を聴く」（台日、大正二・七・三三）。ただし残念ながら新聞紙上に大隅の『壺坂』に対する芸評は見いだせず、ここに引用したのは大隅が初日（七月一日）に勤めた『新版歌祭文』野崎村への芸評である。

五 李思漢「中国・日本・台湾における伝統演劇の越境と受容——演劇史周縁からみた諸相——」（京都大学博士論文、甲第二二九〇一号、令和三年「二〇二二」）第四章「日本統治下台湾における義太夫節浄瑠璃」

六 李思漢「日本統治下台湾における義太夫節について」（令和三年「二〇二二」九月一七日、オンライン開催）

七 韓京子「植民地朝鮮・台湾・満洲における文楽（義太夫）享受の諸相に関する調査・研究」（日本学術振興会科学研究費助成事業、課題番号19K52083）。同氏の論考としては「植民地朝鮮における素人義太夫の活動」（『青山語文』五三、令和五年「二〇二三」、七三―九一頁）、「植民地朝鮮における芸妓歌舞伎と幫間歌舞伎公演」（『青山語文』五四、令和六年「二〇二四」、一〇二―一一五頁）がある。

八 本科研では、「漢珍電子商城」（<https://tbncx.tbmc.com.tw/>）の提供するデータベース「漢珍知識網報紙篇（台湾日日新報＋漢文日日新報）」を利用し、「義太夫」「浄瑠璃」「花柳界」というキーワードにより全文検索を行った。そのため、原紙による悉皆調査には至らなかったことをお断りする。

九 台湾で上演された、素浄瑠璃ではない人形浄瑠璃芝居には、二つの系統がある。淡路人形浄瑠璃の上村（源之丞）一座（明治四五年「一九一二」三―四月、台北「芳野亭・朝日座」および基隆）と、女義太夫の人形入り公演（一例として、明治二九年「一八九六」八月、台北「一龍亭」）である。

一〇 茶谷半次郎『山城少掾問書』和敬書店、昭和二四年（一九四九）、一五一頁

一一 其日庵こと杉山茂丸（元治元「一八六四」―昭和一〇「一九三五」）と台湾総督府との繋がりについては、彼自身の著書『百魔』（大日本雄弁会講談社、大正一五「一九二六」―昭和二「一九二七」・『俗戦国策』（大日本雄弁会講談社、昭和四「一九二九」）に喧伝されているが、内容は虚実混淆しており、近年では坂上知之による文献批判がなされた（『杉山茂丸論「国土」の自画像と実像』、三省堂書店・創英社、令和六

年「二〇二四」。また、公文書・書簡類を用いた実証的研究が試みられつつある（馬場宏恵「杉山茂丸の台湾茶業への献策―セントルイス万国博覧会の時代」、『民ヲ親ニス』『夢野久作と杉山3代研究会』会報七、令和二年「二〇二〇」、六二―七一頁など）。

三 杉山其日庵『浄瑠璃素人講釈』黒白発行所、大正一五年（一九二六）。内山美紀子・桜井弘「編」『浄瑠璃素人講釈（上下）』岩波書店、岩波文庫、平成一六年（二〇〇四）。

三三 同書「五五 桜鐔恨鮫鞘 お妻八郎兵衛 鰻谷の段」、岩波文庫（下）五二頁

三四 この渡台メンバーに加わった津葉芽太夫（山城少掾も、杉山から一貫して恩顧を受けていたことは、前掲『山城少掾開書』に詳しい）。

三五 「夜会の余興」（台日、明治四〇・六・一九）

三六 「朝日座の浄瑠璃」（台日、明治四〇・六・一九）

三七 「大島一座を聞く」および「十把一束」（台日、明治四〇・六・二二）。「十把一束」は投書欄。

三八 「台北倶楽部の義金浄瑠璃」（台日、明治四〇・六・二二）、「義捐義太夫会決算」（台日、明治四〇・八・九）。隘勇線は、日本統治に服さない台湾原住民を封じ込めるために画定された境界線をさす。このように、台湾における芸能興行の収益は、時として台湾総督府の理蕃政策（台湾原住民に対する同化政策）に利用された。

一九 前掲「大島一座を聞く」

二〇 「朝日座の浄瑠璃」（台日、明治四五・三・二九）

二一 「津国太夫を聴く」（台日、明治四五・三・三一）

二二 李、前掲博士論文、二七頁

二三 「大隅太夫の渡台」▲一日から栄座で開演」（台日、大正二・六・一九）

三四 小川定明「台湾島観風（六）」（『東京朝日新聞』、明治三〇・一〇・九）に「近頃新起街に開店したる丸中の温泉に往くもの多く朝より夜中まで押掛け押掛け非常の繁昌なり（…）席料等も台湾にしては至極廉にて（…）此家より外に三四円にて終日遊び暮すことを得る場所は絶えてなし」とある。

三五 「東西南北」▲台北の料理店」（台日、大正二・六・二〇）に「宴会を専門にする家は梅屋敷を第一として丸中、魚金、江戸長」と挙げられる。

三六 前掲「東西南北」▲台北の料理店」

三七 「大隅一行の乗船」（台日、大正二・六・二六）

三八 「大隅の一行来る」▲時ならぬ駅頭の花」（台日、大正二・六・二九）

三九 高松豊次郎（明治五「一八七二」―昭和二七「一九五二」、名は「豊治郎」とも）は労働演芸家から興行師・映画プロデューサーへ転じた

人物で、伊藤博文の肝煎りで渡台し、朝日座に留まらず、台湾各地の劇場経営や活動写真興行を担った。

三〇「東西南北 ▲劇場と寄席(下)」(台日、大正二・六・一六)

三一「栄座の大隅」(台日、大正二・七・三)

三二 昭和四年「一九二九」に行われた四代目大隅太夫の渡台については、この三代目大隅の巡業とは様相を異にするため、第六節に譲る。

三三 なお、前掲『義太夫年表大正篇』には明治四〇年「一九〇七」に大阪・堀江座へ入座した同名の竹本東太夫の活動が記録されているが、台北の東太夫と同一とは判定しがたい。

三四「女義太夫」(台日、明治二九・七・一六)

三五「鍾龍の娘義太夫評」(台日、明治三一・一・一六)。「鍾龍面は二の町殊に鶯鳴かせた時代を通り越した様なれば娘義太の主眼目的としては鍾龍落第することならんか其芸にかけては兎に角ゑら者なり」と、当時の女義太夫に対する容貌第一という偏見を前提としながら、技芸に対しては肯定的評価を与えている。

三六 ただし記事中では「足利藤兵衛」と誤記されている。

三七 歌舞伎竹本はその名の通り、歌舞伎の伴奏としての義太夫節を担当する演者をさし、人形芝居の演者とは区別されるが、性別としては同じく男性に限られた。

三八「共楽会」(台日、明治三一・六・七)。「塚本幹事」については未調査。

三九 雀の丞「台北の諸興業物(つゞき)」(台日、明治三一・一〇・二一)

四〇 初出は「追善浄瑠璃会」(台日、明治三七・八・二〇)。明治四五年「一九一二」までの紙上に所見。

四一 ただし所見は「互友連浄瑠璃会」(台日、明治四一・一・一二)の一例のみで、むしろ他の素人連への共演が鍾龍の主要な活動だったと見られる。

四二「竹本鍾龍師引退の慰安義太夫会」(台日、昭和八・一・一)では「竹本鍾龍師は渡台以来三十余年間義太夫界に尽し今回引退することとなつた」と、彼女の多年にわたる貢献が報じられた。

四三「演芸雑俎」(台日、明治四二・九・一八)。ただし「国芳は以前とは違ひ場数をこなした丈けあつて若いに似合はず喉も出来調子も好く語口に余裕が出た丈け修業が積んだ証拠此分で行けば将来有望」と評されていることから、管見にからなかったものの、台北での活動はこれ以前から行われていたと思われる。

四四「芳野座建築由来記」(台日、明治四三・五・一)

四五「娘義太夫」(台日、明治四五・三・六)。なお、同月一八日の記事「芳野亭」では、国芳自身および新加入の竹本団加津が人気を集めたこと

が報じられている。

四六「芳野亭の娘義太夫」(台日、明治四五・四・一三)に報じられた、国芳の招きにより渡台した「阪神娘義太夫」一座への出演が初出。

四七「今日の催し △素人浄瑠璃会」(台日、昭和一二・三・六)。引退記事ではないので、この後も活動を続けた可能性はある。

四八「黄菊白菊」(台日、明治三六・一・一三)

四九「吉川亭浄瑠璃」(台日、明治三三・一・一・九)。十三は本蔵下屋敷(増補忠臣蔵)を語る。

五〇「義太夫大会」二十日基隆で(台日、大正一五・五・二九)。十三は志度寺(『花上野誉石碑』)を語ったほか、本蔵下屋敷の掛合に出演。

五一 前掲「台北料理屋組合役員改選」(台日、明治三九・二・二二)。なお、三谷新八の正取締選出の際には、足利利兵衛は正副とも選に漏れている。

五二「台北の義太夫界(中)」(台日、明治三六・一〇・二二)に「十四太夫は日本亭の帳場で先づ御主人十三太夫のお弟子分ながら曲節なしで文句を喰ふのが好き十一は同亭の板場」とある。

五三「基隆日本亭主人永眠」(台日、大正一五・三・二七)。なお、藤吉死後の組合長の後任には、藤吉の妻と思われる日本亭女将の足利ハツが選出されており、基隆花柳界における足利家の存在感の大きさを知るに足る。「基隆巷塵／料理屋組合臨時総会」(台日、大正一五・四・二二)。

五四 明治四四年(一九一一)時点で組合副取締、大正一四年(一九二五)時点で組合長として所見。「珍妙懇親会」(台日、明治四四・一・二・四)、「料理屋組合の総見」(台日、大正一四・二・一一)。

五五 ちなみに台北料理屋組合所属料亭「まねき」の主人も同姓の足利庄兵衛である。「料理屋組合の新役員選挙」(台日、大正一一・九・二五)。

五六 昭和一年(一九三六)十一月一八・一九日に「丹羽一声氏追善義太夫会」が台北・理容会館で開催された。「追善義太夫会」(台日、昭和一一・一一・一八)。

五七「艣舳の義太夫温習会」(台日、明治三五・六・八)

五八「台北の義太夫界(上)」(台日、明治三六・一〇・二〇)

五九「共楽会」(台日、明治三一・六・四)

六〇「送別義太夫会」(台日、明治三七・一〇・八)

六一「台北の義太夫界(下)」(台日、明治三六・一〇・二二)

六二「淡水館浄瑠璃会一口評」(台日、明治三三・一二・一二)および「浄瑠璃温習会一口評」(一二・一二・一三)。なお、前者記事中の「オチヨボならぬ口から嫺々なまよほどほし進る声之れが常盤津なら猶よからうと思はる併し芸妓げいしの浄瑠璃としては別段批難しがたも致難からむか」という一文は、義太夫芸妓の芸風を知るための参考となるだろう。

^{六三}「台南の義捐演芸大会」（台日、明治四〇・六・一九）。これらは歌舞伎芝居とも考えられるが、その竹本まで芸妓たちが自ら担当したとすれば、義太夫芸妓の活動に位置づけることができる。

^{六四}「阿綴雑信（十二日）」（台日、明治四四・一一・一七）

^{六五}「浄瑠璃大会」（台日、大正二・三・三一）、「義太夫大会／二十日基隆で」（大正一五・五・一九）

^{六六}「地方近事／打狗／浄瑠璃大会」（台日、大正七・八・八）

^{六七}前掲「台北の義太夫界（下）」（台日、明治三六・一〇・二三）

^{六八}ちなみに「愛国婦人会活動写真」（台日、明治四二・九・二八）では、愛国婦人会主催の活動写真上映（台北演芸場）において、旧劇ものの映写の前後に義太夫を挿入したことが報じられている。このように活動写真登場初期には互いに寄席芸能としての共存が見られた事例もあって興味深い。

^{六九}「屏東から」（台日、昭和四二・一〇）

4 台湾に渡った歌舞伎役者たち ——「台北役者評判記」による——

日置 貴之

一、はじめに

日本による台湾の統治は、明治二八年（一八九五）四月一七日から昭和二〇年（一九四五）一〇月二五日まで約五十年に及んだ。この時期の台湾における演劇については、石婉舜氏、李宛儒氏、陳怡如氏、間ふさ子氏らによって、近代劇の成立や台湾総督府の文化政策などの観点から論じられている¹。日本古典演劇・芸能の台湾における受容という観点では、王冬蘭氏が日本統治下の台湾における能楽の受容について論じ、当時台湾に居住した日本人たちが能楽を愛好したことを明らかにしている²。台湾に渡った人々によって親しまれたのは、能楽だけではなく歌舞伎もまた、日本による台湾統治開始後、間もない時期から、台北などの都市で興行されていた。本稿では、新たな劇場が誕生するなど、台北における歌舞伎が隆盛を迎えた明治三六年（一九〇三）に、現地紙『台湾日日新報』に連載された「台北役者評判記」³に注目し、当時の台湾で歌舞伎を演じたのはどういった役者たちであったかを見ていきたい。

二、「台北役者評判記」連載の経緯

『台湾日日新報』は、『台湾新報』『台湾日報』が合併して、明治三十一年（一八九八）五月に創刊された日本語

紙であり、台湾総督府による出資を受けた実質的な機関紙であった。昭和一九年（一九四四）に他紙と統合され、『台湾新報』となるまで、日本統治時代の大部分にわたって刊行された、日本統治期台湾最大の新聞である。

同紙には、台湾における演劇の記事も少なからず見え、そこには劇評も含まれる。管見の限りでは、『台湾日日新報』に掲載された本格的な劇評としてもっとも早いものは、明治三十三年（一九〇〇）七月一五日の「十字館の劇評」である。その後、同紙における劇評記事は、明治三五年（一九〇二）後半以降に目立って増加し、三六年（一九〇三）一月二日から二月十八日まで、観劇団体「陸連」に關係したと思われる八人の評者の合評という形式⁴の「台北役者評判記」が連載される。これには、台北における劇場の充実と役者の新規来台が影響している。そうした事情は、「台北役者評判記」の第一回「はしがき」において説明されている。少々長くなるが、以下に引用しておく（傍線は引用者による）。

●台北役者評判記（一）

はしがき 眼兵衛

栄座 台北座

台北に芝居と云ふものが出来たのは随分早い時分で其頃はホンの一時の蕤張小屋でガタヒシ演つた事もあつたが^①卅年の冬に西門外街の魚市場の辺に台北座と云ふ一寸小屋らしいものが初めて出来成駒一座愛沢一座杯で打つた事もあつたけれどもまだ其頃は軍政が民政に改つて間も無い時分で名は演劇であるが宛然で田舎の神事に一夜興行する素人芝居同様全で見られたものでは無かつた^②其後興行小屋の十字屋が十字館と改め鈍帳にもしろ九州役者を輸入して少しく芝居らしくなり夫れが追々進歩して相当な役者が来る様にな

り一昨年今の台北座が建築せられた後は双方共に一時に面目を改め互ひに競争をして役者を買ひ込み去年一月の初芝居の如きは十字館に紅粉助、瀧三郎（今のは別人）吉太郎あり台北座には竹三郎、雷次郎、他之助などにて時々同一の世界を出して各々得意の腕を磨き湾的好劇家の咽を鳴らさせ橋五郎、彦三郎等の来て弥々其価値を上げ台湾の芝居などと余り馬鹿にして呉れるなど威張つた事もあつたが今から思へば実にお耻しい次第であつた処が③十字館は劇場取締規則の為に倒れ暫時は台北座の独舞台であつた処爰に榮座と云ふ大劇場が出来し我久蔵、雀之丞、彦三郎等の外に台北座の橋五郎を買収して一揉に台北座を圧倒せんと試みたので台北座は之れに反抗し非常な奮発を以て瀧之助を聘んで江戸風の旗幟を翻へし反つて榮座を倒さんとするの氣勢を見せ双方競争の態度となり今春よりは榮座に瀧三郎一派の数名を増して益々上方風の嗜好に客を引かんとすれば台北座は更に多賀之丞、卯多三郎等を加へて其向ふを張り競争は弥々劇烈となつたと共に劇界の進歩は驚く可き速度を以て進み之を過去一年の去年の一月と比較すれば恰も丹波ヒヨツポコ谷から一時に都会に飛び出した様な餓がある左れば④今春以来の芝居熱と云ふものは台北市中の人氣を此一方に引寄せ為めに花街や料理屋までが影響を蒙つたと云ふ浮かされ方は実に前古未曾有と云つても不可なしである「後略」

（眼兵衛「台北役者評判記（一）はしがき」明治三十六年一月二十一日）

この記事によれば、明治二八年（一八九五）四月一七日の台湾割譲後、①三〇年（一八九七）冬に「西門外街の魚市場」付近に台北座という劇場が開場し、歌舞伎興行が始まった（それ以前にも仮設劇場による興行は行われていたようである）。②その後、先の劇評で取り上げられていた十字館が歌舞伎興行を始め、九州方面を中心

に内地から役者が渡台するようになり、その質も向上していった。そして、台北座が新築開場すると、台北座・十字館の対抗時代となった。③しかし、十字館が劇場取締規則による取り締まりで興行を継続できなくなり、台北座の一人勝ち状態となったところへ新たに栄座が開場し、栄座は上方（関西）風、台北座は江戸（東京）風を打ち出している競争が繰り広げられた。④そして、その結果、三六年（一九〇三）に入るころには、花街や料亭をも巻き込んだ歌舞伎への熱狂状態が発生したという。

当時の新聞記事、しかも、おそらく劇界に強く肩入れした人物による投稿であることを考慮すれば、多少の誇張はあると思われるが、それでも日本による台湾統治開始以来、あるいはこれ以降、昭和二〇年（一九四五）の日本による統治の終了までを見ても、この明治三六年（一九〇三）という年が、台湾における歌舞伎がもつとも盛り上がりを見せた年であったことは事実であろう。

なお、右で触れた劇場の所在地、開場時期について、「臺灣老戲院文史地圖（1895-1945）」⁵⁶および『台湾日日新報』の記事等の情報に基づいて簡単に補足しておく。台北座は現在の台北市萬華区内江街六三番地付近に所在、明治三〇年一二月開場、三四年に新築開場。十字館は現在の台北市中正区博愛路七七番地付近で、当初は十字屋として演芸興行等をおこなっていた。栄座は現在の台北市萬華区漢中街五二番地（UNIQLO西門店）付近で、三五年（一九〇二）一〇月に開場した。

『台湾日日新報』にも開場直後から栄座の興行に関する記事が多数掲載されており、「台北役者評判記」はこうした流れを踏まえ、年が明けた三六年（一九〇三）一月に連載を始めたのである。「眼兵衛」という人物の筆による「はしがき」をさらに見ていくと、台北座・栄座の競合により芝居熱が高まる中で、特に芝居を好む仲間内で、「何なんと一番此連中で役者評判記を作らうちやないかと出来心で云いつたが実ものになり此奴は奇妙な趣

向^{かう}だと追々賛成者の数^{かず}が増えて以上^{いじやう}八人^{はんにん}思^{おも}つた存分^{ぞんぶん}四辺^{しへん}あたり構^{かま}はずの云^いひ体^{たい}三昧^{まい}八人^{はんにん}八色^{はつしき}の評判^{ひやうはん}記^き弥々^{いよく}明^み日^{にち}の紙上^{しじやう}より読者^{どくしや}にお目^め通^{とほ}りする事^{こと}となつた。そして、台北・栄の両座^{りやうざ}から特に十名^{じゅうめい}ずつの役者^{やくしや}を選び、一人ひとりに評^{ひやう}を加えていくこととしたのである。

三、「台北役者評判記」に取り上げられた役者

「台北役者評判記」で取り上げられた役者の出演劇場、評の内容からわかる来台時期等を掲載日順に示すと表のようになる。役者に関する評文からわかることをいくつか見ていきたい（なお、役者には掲載順に番号を振った）。

（1）芸風・容姿等

『台北役者評判記』の役者評では、

（九老人）色立^{いろたち}役^{やく}としては色気^{いろけ}乏^{とほ}しく、心棒^{しんぼう}立^{たち}役^{やく}にしては軽^{かる}し、先づ適^{はま}り役^{やく}は帯屋^{おびや}の長右衛門^{ちやうゑもん}、研屋才^{ときやさい}一郎^{いちろう}と云^いふあたりでムリませう、左^{ひだり}れば先達^{さきだつ}ての三浦^{うら}の助^{すけ}杯^{など}は善^よく出来^{でき}ました、兎^とに角旅^{かくたび}役者^{やくしや}としては重宝^{ちゆうぼう}な仁^{ひと}です、前髪^{まへがみ}ものや女形^{おんながた}杯^{など}はとても柄^{がら}にはムいません、台詞^{せりふ}の言^いひ廻^{まは}しに何役^{なにやく}を勤^{つと}めても少しも変化^{へんくわ}の無^ないは大^{おほ}いなる欠点^{けつてん}でムませう

（①嵐彦三郎評）

（手爾波^{てにば}）厭味^{いやみ}といふものは頭^{あたま}の螺旋^{つむじ}から足^{あし}の爪^{つま}先^{さき}まで無^ない役者^{やくしや}なれど、口跡^{こうせき}は入歯^{いれば}の為^{せい}か咽喉^{のど}の奥^{おく}から出^で

て来るやうで、聞くからにオホンと一ツ痰が取つてやりたい気がする、殊に本業の足渉りは乱舞の力が与かつて居る故か、男はちいさいが舞台が大きい、〔後略〕

（②阪東竹三郎評）

といった評に端的に表れている通り、まず歌舞伎の伝統的な役柄の類型に対する適性、台詞回しや口跡といった要素に対する言及が非常に目立つ。歌舞伎役者に対する評価の仕方としては、非常に伝統的な態度といえよう。

また、

（百文字屋）目立つ程のデボチンではあるが、年の若い故で顔が艶々して居る処へ、白粉附きが至極宜しいから、震ひつく程奇麗な事く、〔後略〕

（③中村吉十郎評）

（黙庵）片眼が義眼だそうなが気の毒なものでござ眼が利かぬのは尤もく、是で眼が利いたらウント引立つでがしよう、〔後略〕

（⑬阪東五郎評）

といった評のように役者の具体的な身体的特徴に関する言及が見られるのも、一人ひとりの役者に対する具体的な印象を喚起するものとして興味深い。

（2）来台時期

取り上げられた二〇名の役者のうち一三名について、来台時期に関する記述があることは特徴的である。役者

と同様に、基本的には割譲後に内地から渡台した人々であったと考えられる観客たちにとって、役者の来台時期は興味を惹く情報だったのであろうか。

また、「十字館時代」には相応に見られ、随分提灯持を仕てやつた事もあつたが、栄座へ入つてからは舞台負がしてサツパリ物に成らず、義理にも褒められない」(①嵐徳三郎評)、「十字館台北座時代とは打つて変つて、何処で修業をせられたやら、栄座へ出てからメツキリ器量を上げられました、其上見る度く上達して居るのは優斗りでゝいます」(⑨中村岡之助評)、「近来滅切り白詞廻しも改め、又訛りも次第に脱けて、もと十字館へ来た当時とは宛然別人物になつたやうだ」(⑩臺家薔花評)といった評からは、いまだ台北における歌舞伎興行が開始されて七、八年といったこの時期にすでに継続的に役者の芸を鑑賞し、その変化を論じるような観客の共同体が生まれつつあったことが窺える。

(3) 内地での芸歴等

演劇史的な観点でいえば、「台北役者評判記」でもっとも目を引くのは、台北の劇場に出演している役者たちが内地ではどのような位置付けであつたかを、ある程度知ることができるといふ点であろう。彼らの多くは、「優は古い頃中島座にて見た事がありました、其後は旅廻りのみして居つたものならん」(⑬阪東五郎評)というように、大都市の格としてはそれほど高くない劇場(中島座は小芝居を前身とする東京の劇場)や旅芝居に出演していた役者とみられ、「未だ大阪を知らない」と云ふ(⑩臺家薔花評)、すなわち旅芝居専門の者も含まれた。地域的には、「九州一の三枚目と云ふ振れ込み」であつたという⑭片岡扇平のように、関西から九州方面で活動していた者が多いようである。

もちろん、中には内地でもある程度の活躍を見せていたと思われる役者もあり、

(黙庵) 何しろ年齢が七十四と云ふのだから驚きやす、能く台湾まで来たものがすよ、此人は三四年前であつたらう、大阪で一生のお名残を演つた事があると覚えてる、其時は早天王寺か何処か其辺へ隠居して居つたのであるが、再びお名残狂言の為に道頓堀で花を咲かせた、其時代我輩今程芝居狂で無かつた上、大阪に居なかつたので、何を演つたか能く覚えては居やせんが、其人ならば其時の新聞の評は余程良かった様に頭に残つて居る、夫は大阪でも有名なものです、〔後略〕

(④中村駒右衛門評)

といった評からはそのことが窺える。特に、②市川瀧之助は、名優初代市川左團次の門弟として厚遇されていた様子が窺え、⑬片岡我久蔵も「大松島屋」(一代目片岡仁左衛門か)の高弟という触れ込みで期待されていたらしい。

その瀧之助の評には、「左團次の弟子だけに万事が高島屋張り、思ひ入れに口跡など能く似て居る、〔中略〕大舞台で見たいが、台湾では台北座より外は師匠から封じられて居るといふ話」とあるが、これは師の目の届かない外地で、芸が荒れることを案じての制約であろう。こうした例とは逆に、⑪尾上多賀之丞の場合は、「原の名是多賀次郎、台湾では尾上多賀之丞と名乗る丈の腕前はたしかにある」とあり、台湾限定で多賀之丞を名乗つたようにも読める。現在二代目とされる多賀之丞は明治三二年(一八九九)に没しており、三代目は市川鬼丸が昭和二年(一九二七)に襲名する。二代目と三代目の間にも「多賀之丞」が存在したようである。坂東竹三郎も幕末の名優五代目彦三郎の前名であるが、②阪東竹三郎はそれを正式に襲名したわけでも、血縁や芸系の上で

の強い関係があるわけでもない。こうした「地域限定」での名乗りや怪しげな「襲名」を、今日の視点から単純に「偽物」と切り捨ててではなく、地方や外地の観客がどのように歌舞伎を楽しんだのかという観点から検討していくことが必要であろう。

(4) 私生活等

そうした意味では、「台北役者評判記」にしばしば役者の私生活に関する言及が見られることも興味深い。「特に注意して遣りたいのは、向ッ齒が一本抜けて居る事で、是が非常の眼障りになつてならぬ、少し艸舩通ひを止めて義齒をするがよい、商売の元入れた」(⑦中村駒之丞評、「艸舩」には当時遊廓が立地)といったお節介や、「聞けば二三日前から病気で台北医院へ入院せられたとやら」、「吾妻から送つた引幕の肩に贈と云ふ印が書いてあるが」(⑱市川瀧三郎)といった評からは、役者の一挙手一投足に注目し、単に観劇をするだけでなく引幕を贈呈するなど(吾妻は当時台北駅前にあつた料亭・旅館)、積極的に芝居に関わっていく観客の姿が浮かび上がってくる。

四、おわりに

以上、『台北役者評判記』からわかる、明治三六年(一九〇三)当時の台北で歌舞伎を演じていた歌舞伎役者たちに関する情報を簡単に見てきた。台北座と栄座の競合の中で、内地において一流とは言えないまでも、それなりの力を持った役者たちが新たに台湾に渡り、また台湾における歌舞伎興行の最初期から台湾に根付いていた役者たちも活動を続けていた。観客はそうした役者の一人ひとりに注目し、継続的に舞台を追いかけるだけでな

く、その私生活にも関心を向けていた。

もつとも、こうした歌舞伎に対する熱狂は長くは続かなかった。明治三七年以降は、歌舞伎よりも新派の興行が目立つようになるのであり、その後は内地における旅興行同様に、一座が短期間滞在して、次々と演目を変えながら興行をしていく形態が基本になっていく。その結果、大正二年（一九一三）の一五代目市村羽左衛門、昭和期の二代目市川右團次、七代目澤村宗十郎、中村扇雀（二代目鴈治郎）など、東京や大阪でも一流の役者の來台も実現するのであるが、彼らはあくまでも「旅」にやってきたスターなのであって、「早く内地へ帰つて怠らず勉強が肝要ですが、こんな処でヤレ甘いとか、エライとか言のを嬉しがつて鼻に掛る様では到底駄目」（③中村吉十郎評）などというようなやや屈折した愛着の対象となり得る存在ではなかっただろう。

「台北役者評判記」については、本来であれば、評を寄せた評者たちについても言及すべきであるし、台湾における歌舞伎興行の歴史の全貌についても明らかにしていく必要があるが、それらについては今後の課題としていく。

表 「台北役者評判記」掲載俳優一覧

掲載日	役者	劇場	來台時期	備考
1月22日	①嵐彦三郎	栄座	十時館時代	
1月23日	②阪東竹三郎	台北座	十時館時代	現在代数外。
1月24日	③中村吉十郎	栄座	明治36年初め	①9市川瀧三郎の子。
1月25日	④中村駒右衛門	台北座		

2月27日	⑤実川百々蔵	栄座	明治36年初め	
1月28日	⑥阪東のし蔵	台北座	明治36年初め	
1月29日	⑦中村駒之丞	栄座	明治35年後半	
1月30日	⑧中村扇三郎	台北座	明治36年初め	
2月1日	⑨中村岡之助	栄座	十時館時代	「栄座の連中では此文が一番当地への古参」。
2月3日	⑩臺家薔花	台北座	十時館時代	「未だ大阪を知らない」と云ふ役者にしては感心でござす」とあり、内地では旅回り専門か。
2月4日	⑪尾上多賀之丞	台北座		現在代数外。二代目多賀之丞門下か。「原の名は多賀次郎。台湾では尾上多賀之丞と名乗る」。
2月5日	⑫嵐雀之丞	栄座		
2月6日	⑬実川八百七	台北座	明治35年	「昨年八百三郎等一派と共に乗り込んで来た今台北座での老人株」。
2月8日	⑭片岡扇平	栄座		「九州一の三枚目と云ふ触れ込み丈けに今栄座の福の神」。
2月10日	⑮山下三勝	台北座		「台北座では随分久しい以前からのお馴染」。
2月11日	⑯阪東五郎	栄座		「栄座では老人株の一人」「優は古い頃中島座にて見た事がありました。其後は旅廻りのみして居つたものならん」。
2月14日	⑰尾上卯多三郎	台北座		「丈は大阪角の芝居辺にて生れた人だそうだが」「聞けば金城の末広座とやらで好ひ顔で有つたさうな」「阪東簀助座頭で書出しを永らく演て居た」。
2月15日	⑱片岡我久蔵	栄座	明治35年後半	十一代目仁左衛門（当時、我當）門下か。

2月17日	①9市川瀧三郎	栄座	明治36年初め	吾妻（台北駅前料亭）から引幕が贈られたという。「生粋の上方役者今栄座の座頭として足元差出しまで許されて居ると云ふ大立者」。
2月18日	②0市川瀧之助	台北座	明治35年後半	初代市川左團次門下。「台北座よりほかは師匠から封じられている」。

¹ 石婉舜「台湾新演劇運動の黎明」の到来——1943年、厚生演劇研究会の設立と公演」（藤井省三ほか編『台湾の「大東亜戦争」』東京大学出版会、二〇〇二年）、李宛儒「日本統治下の台湾における演劇取締制度および近代劇の出現」（伊藤裕夫・藤井慎太郎編『芸術と環境 劇場制度・国際交流・文化政策』論創社、二〇〇二年）、陳怡如「台湾における興行取締規則の制定と実施——皇民化運動期以前の大衆演劇活動からの考察——」（『文化政策研究』二二、二〇一八年）、間ふさ子「戦時下台湾における近代演劇」（神山彰編『戦時下の演劇 国策劇・外地・収容所』森話社、二〇一三年）など。

² 王冬蘭「日本統治下台湾における能舞台」（『藝能史研究』二二七、二〇一九年十月）、桂六平と能楽雑誌『能海』 植民地台湾における能楽の一考察」（『演劇学論叢』一九、二〇二〇年三月）。

³ 全文の翻刻は拙稿「明治三十六年「台北役者評判記」（一・二）」（『明治大学教養論集』五五七・五六〇号、二〇二一年九・一二月に紹介している。
⁴ 合評形式は江戸時代の役者評判記以来の伝統であるが、架空の評者ではなく実在の観客からの投稿をも募りつつ、観劇団体が編集をおこなうというスタイルは、明治一〇年代に東京で刊行された六二連の『俳優評判記』に做ったものといえる。

⁵ 中央研究院人社中心GIS專題中心暨國立清華大學臺灣文學研究所石婉舜研究室「臺灣老戲院文史地圖 (1895-1945)」<http://mapnet.tw/theater/>（二〇一五年十二月一〇日アクセス）。

⁶ ただし、この評で触れられている駒右衛門の大阪での舞台については特定できていない。

⁷ 国立劇場調査記録課編『歌舞伎俳優名跡便覧「第五次修訂版」』（日本芸術文化振興会、二〇二〇年）では、二代目と三代目の間に二名「代敷外」の多賀之丞を記載しているが、「台北役者評判記」に見える多賀之丞はこの二人とも別人であると思われる。

5 日本統治下台湾における新演劇興行の推移

―高松豊次郎参入以前の動向を中心に―

中尾 薫

一、はじめに

日本統治下台湾における壮士劇・新演劇・正劇（本論文では主に「新演劇」の呼称に代表させる）は、台湾人（本島人）知識層による新劇活動との関連で、日台双方の研究者によって活発に研究がなされている。関連する主要研究には以下のようなものがある。

- ・ 邱坤良『旧劇與新劇日治時期臺灣戲劇之研究（二八九五―一九四五）』（自立晚報社文化出版部、一九九二年）
- ・ 楊渡『日坵時期台湾新劇運動（一九二三―一九三六）』（時報文化出版企業有限公司、一九九四年八月）
- ・ 井上理恵「日本統治で生まれた川上の演劇「台湾鬼退治」、「オセロ」、生蕃討伐―」（『吉備国際大学研究紀要 社会学部』一九、二〇〇九年）
- ・ 石婉舜「搬演『台湾』…日治時期的台湾劇場、現代化与主題型構」、国立台北芸術大学戲劇学院戲劇系博士学位論文、二〇一〇年）
- ・ 李宛儒「日本統治下における台湾近代劇の生成と発展―植民地知識人の演劇活動の系譜を中心に―」

(二〇二二年、名古屋大学提出博士論文)

・陳怡如『日本統治下の台湾総督府による文化政策の構築過程とその特質に関する研究——一八九五年——一九三六年の「表演芸術」に対する諸施策からの考察』(二〇一九年博士論文、神戸大学)

・間ふさ子「戦時下台湾における近代演劇」(神山彰編『戦時下の演劇——国策劇・外地・収容所』(森話社、二〇二三年)

このうち台湾での新劇運動の仕掛人として、映画産業で成功を収めた興行師高松豊次郎の存在があり、彼の演劇に関する活動については後述する石婉舜氏などによって注目されてきた¹⁾。高松の台湾での演劇界への参入については、その後皇民化運動や、演劇への弾圧が激化することもあるが、台湾人(本島人)の抵抗と台湾独自の演劇文化の形成への動きに対して、いわば、反面教師的な貢献をもたらした。いっぽうで高松の参入と演劇活動の意味は、それまでの台湾における演劇事情との対比においてより明確になると考えられるが、明治三十年(二八九七)頃から台北市街地や基隆を中心に、壮士芝居、書生芝居が上演されていたことが知られているものの(陳怡如(二〇一九)、それらは移植者である日本人(内地人)が、内地の演劇を内地人のための娯楽として移入していたに過ぎず、また著名な演劇人の活躍も見られないことから、多くの検討はなされてこなかった²⁾。また、高松の演劇に対する働きかけと、台湾人による新劇活動との関係についても、まだ検討の余地が残されている。そのために、まずは高松参入以前の台湾における演劇事情について、より緻密な実態把握が不可欠である³⁾と考える。

本論文ではこの視点にたって、まずは高松自身の言葉から演劇界参入の意図を確認したうえで、それ以前、特

に明治三〇年（一八九七）代々四〇年（一九〇七）代初頭の台湾における劇場と「新演劇」興行の実態との関連について検討する。

なお、本論文は、日本植民地研究会（二〇二二年一月六日、於京都大学）にて口頭発表した内容、およびその際にコメンテーターをお引き受けいただいた徐禎完先生に事前に提出した論文に基づき、徐禎完先生はじめ、植民地研究会の各氏にいただいたご意見や、その後の調査をふまえて改稿したものである。また、以下の引用資料は、旧字体を新字体に改め、傍線、句読点を加え、場合によっては傍線も補っている。

二、高松豊次郎の履歴と台湾での活動

高松豊次郎（一八七二―一九五二）の履歴については、松本克平『日本社会主義演劇史 明治大正編』（一九七五年、筑摩書房）が詳しい。同書は各記述の典拠が充分に示されていない問題もあるが、まずは松本の文章を要約することで、高松豊次郎の履歴と台湾へ至る経緯について概観する。

松本は「明治革命劇に情熱を注ぎながら挫折転向して行った人々」の代表的な人物のひとりとして「活動写真屋高松豊次郎」をあげる。松本によれば、高松は明治五年（一八七二）、福島にある飯坂温泉の旅館高松屋の長男として生まれ、一九歳でメキシコに留学し、その後アメリカに移民として渡る計画をするが、いずれも計画段階で挫折する。アメリカ行きの渡航費を貯めるために鐘ヶ淵紡績に就職し、危険手当のつく打綿工業に従事した際、機械によって左腕を切断したことで、進路を再考することとなる。高松は、危険手当以上の手当を受けられなかったことで、労働者の保護に無関心の産業界や政府のありかたに憤りを覚え、仕事を辞めて明治法律学校（明治大学の前身）に入学するのである。この時、総理大臣であった伊藤博文は明治法律学校の顧問で、苦学生であっ

た高松を「愛した」という。また、落語家三遊亭円遊の弟子として落語・講談を習い、これが労働運動の出発点になった。

高松は、明治法律学校卒業後に帰郷し、そこで片山潜の遊説に感銘をうけ、労働運動に接近していく。当初は片山潜らが結成した「労働組合期成会」の活動に協力して、落語や講談の話術を取り入れて職工に語りかけるという関わり方だったが、明治三十三年（一九〇〇）三月治安警察法によって労働運動が困難となったのをきっかけに、許可が簡単における活動写真を労働者啓蒙の手段とすることを思い起こす。松本によれば、伊藤博文に呼ばれて赤坂の料亭で活動写真を映写したことが台湾行のきっかけとなった。松本は以下のように描写している。

その伊藤博文が高松豊次郎に白羽の矢を立てたのであった。日本に併合された台湾の治安はまだ平靜ではなかった。彼は伊藤博文に台湾の宣撫工作与娯楽界の開拓を兼ねて渡台するように口説かれた。「少しくらい社会主義の演説をやってもかまわん。わしが後援するから台湾を巡業してくれ」と口説かれ、明治三十四年台湾に渡り、準備を整えて、同三十七年春、日露の風雲急を告げている最中から高松は腰を据えて、島民の教化と内地人の慰安のため奮闘したのであった。伊藤のお声がかかりで専売局長の後藤新平も後楯になってくれ、楽隊で街頭宣伝をしておいて活動写真の興行をやって廻った。彼が社会主義の演説をやりながら弾圧もされず名士扱いされていたのは、伊藤博文のお声がかかりのお陰であった。もともと労資協調のキリスト教社会主義を、伊藤はそれほど危険なものとは見ていなかったらしい。

ここで、伊藤博文が台湾の「宣撫工作」「娯楽の開拓」という目的を述べたのが、どこから得た情報なのか未

詳であるが、高松渡台の目的は台湾に対する統制への協力にあり、伊藤博文の後援があつたもので、純粹な興行でも、営利目的でもなかつたことになる。松本は、『台湾商工人名録』（明治四五年二月、台北同人名録発行所刊）の以下の項目を紹介する。

○演芸興行界

台湾同仁会 台北撫台前街 電話三四二

高松豊次郎

營業興行物ノ供給設備

朝日座 台北 電話一六六

基隆座 基隆 電話一三二

竹塹俱樂部 新竹

嘉義座 電話一一六

打狗座 電話三二

屏東座 阿緱 電話三九

台中劇場株式会社 台中電話二〇九

社長 樋口仁三郎

取締役高松豊次郎

右によれば、高松は「台湾同仁会」として計六つの興行設備と、台中では、台中株式会社の取締役をつとめていた。このほかにも台南の南座も経営していたことが知られており、計八か所を構えていたことになる。高松は大正三年（一九一四）に帰国し、国会議員になるために福島県から立候補するが落選し、大正七年（一九一八）に台湾事業を後継者に譲って台湾を引き揚げる。

以上が、松本克平『日本社会主義演劇史 明治大正編』で解説される高松豊次郎の履歴と台湾での活動の概略である。台湾での活動について、大園市蔵編『台湾人物誌』（大正五年「一九一六」、谷沢書店）の高松豊次郎の項から補足をする、「君は其後（中尾注…日本で改良演芸師として人気を博したあと）三十四年一万尺のフィルムを携ひて渡台し、当時の警視総長大島久満次氏の賛助を得」て「蕃人」の協力のもと、七ヶ月にたつて「蕃界」を撮影し、さらには「蕃人」に内地を観光させる映画をとって成功させたとあるように、得意の活動写真が最初の台湾での事業であった。その後、再渡台し、演芸をもつて「母国同胞を慰安すると共に劇の感化力偉大なるを利用し本島人の精神的感化に資せんと」、全島に七ヶ所^{（マヤマ）}の劇場を所有した。高松が台湾に呼んだ演者として羽左衛門、門之助、村田正夫、酒井政俊、川上音二郎、貞奴、澤村訥子、天勝、雲入道、若丸の名があげられ、「内地随一の芸人を引張り出すのは高松君でなければ出来ない芸当」と評されている。大正二年（一九一三）、民政長官の求めに依り、領台以来の台湾の開化発達された様子を活動写真に撮り、東京、横浜で、商業会議所、東洋協会、各代議士を招待して供覧に付したという。また同年一月には、台北円山間乗合自動車の営業も開始しており、娯楽産業以外にも手をひろげていた³。

右では高松の興行師としての一面しか示されていないが、近年、台湾における演劇教習所との関わりについて

論じられている。まず、呂訴上『臺灣電影戲劇史』⁴は「川上音二郎率團來臺公演影響在臺日人高松豊次郎組織臺語改良戲劇團」（川上音次郎が一座を率いて台湾で公演した影響をうけ、日本人の高松豊次郎が台湾で改良演劇団を組織した）と、明治四四年（一九一一）の川上音二郎一座の台湾公演がきっかけに、高松は台湾で改良演劇団を組織したと言及している。川上音二郎を招いたのは高松豊次郎の経営する「台湾同仁会」である。しかし、その後石婉舜が、高松が組織した改良演劇団の詳細を検討し、明治四二年（一九〇九）～四三年（一九一〇）にかけて、すでに「臺灣正劇練習所」を組織していたことを明らかにしている（石婉舜「殖民地版新派劇の創成―『臺灣正劇』的美學與政治」）。石が紹介するように、高松は『台湾日日新報』（明治四二年（一九〇九）五月一日）に寄せた「娯樂供給に關する予の抱負」（後掲）で、様々な嗜好を持つ本島人に適するような演劇として、本島人が出演し、台湾での出来事を題材とした演劇を上演することを目指し、「其演劇を為すべき人を集め稽古をさす」ための「台湾正劇練習所」の設立への豊富を述べている。上記の抱負が掲載された半年後、明治四二年（一九〇九）二月一九日付『台湾日日新報』によれば、「過日其筋へ許可を願出たとの事で毎日午後七時から十時まで稽古をして居るそうである」と報じられ、実際に「台湾正劇練習所」が始動した。同記事には「内地における新派正劇に則り、本島人中素行の正しい品性の高潔な有志者」を募り、「本島の人情風俗を参酌し正義人道に合する処を根拠として劇を仕組む一般本島人に通俗に勧善懲惡の觀念を与へ漸次に我帝國固有の美風良俗に感化させる目的」で、二〇余名の練習生に対して演劇の稽古を行なったとする。修了生には、同仁社から一〇円以上百円以下の月給、もしくは四〇銭以上四円以下の日給を与えらるゝとも報じられている。高松が明治四四年（一九一一）に川上音二郎を招聘したのは、正劇に関する事業を展開するなかで、御本家の劇を、研究生をはじめ台湾に住むものにみせるといふ意図があっただろう。

台湾正劇練習所の運営や成果の実態については、石婉舜が詳細に検討しているため本論文ではこれ以上扱わないが、大正八年（一九一九）八月から大正九年（一九二〇）四月までのあいだに活動を停止したとみられ、およそ一〇年間の活動であった。石婉舜は高松の「台湾正劇練習所」の意味について以下のようにまとめている（中尾訳）。

政治レベルでは、一九一〇年代、漢民族の日本に対する武力抵抗が後退し、日本が山間部の原住民を武力で弾圧すると同時に、近代化が進むなかで、「全島一体感」の共同体意識が植民地社会に熟成され、「正劇」劇場はこの歴史的過程に直接参与した。「正劇」に登場する現代の「個人」（主人公たち）は、科学的知識と法治観念が軸となる世界にあって、新旧、進歩するものと後退するもの、光明と暗黒両方がある社会を区別し、植民地の価値観によって定められた新しい社会階層を暗示し、観客の自己同一性（＝「我々」）を形成した。「正劇」はこのように、統治下におかれた者の精神的側面を、植民者が主導して植民地化するものだった。日本の新派劇が起った時日本の近代的な「国民」意識の出現を相互補完したように、「正劇」は美学上だけでなく、政治的にも日本新派劇の経験の複製で、まさに「植民地版新派劇」である⁵。

ここである「植民者が主導して植民地化する」「植民地版新派劇」であるという評価は、先に言及した高松豊次郎「娯楽供給に関する予の抱負」（『台湾日日新報』明治四二年（一九〇九）五月一六日）をみると、より明らかとなる。高松自身の言葉で書かれた演劇界参入の動機を知る記事であるので、長大にはなるが、次節ではその全文を引用しながら確認する。

三、高松豊次郎演劇界参入の動機

高松豊次郎「娯樂供給に關する予の抱負」の冒頭は以下のように始まる。

社会の發達と個人の幸福とは何に依りて増進することであらうか。物は觀察の仕方によりて異なるが、最も広く且つ大なるものは同化の二字であらうと思ふ。同化を得なかつたならば人類は生存する事難く、随て社会の存在を見る事が出来ない事と信ずる。家庭の団樂も同化より来り、個人の交際も同化より来る。人生行動の一切万事は一つとして此同化の支配を受けないものはない故に、同化は國家及社会を組織し、且つ之を維持する連鎖であつて亦發達の元素であるから人類生活上、日常行動の原則とすべき事は論を待たない事である。今や本島に於ける百般の制度は能く其緒に就き、殖産・興業、交通、衛生、教育等の事業は敏速なる改良發達を遂げ、著々其効を収め、又安寧秩序の整然たるを見るに至つたのは、之れ皆同化を緯とし開發を経とせる督府統治の方針其宜しきを得たる結果と云はねばならぬ。我々内地人たる者は、此領土台湾に臨むに當つては、宜しく督府施政の方針に則り、其根本に於て母国人たるに耻ぢざる所の高潔なる品性を具へ、指導開發の先驅として範を、本島人撫育の上に示さなければならぬ事は勿論である。

右では、個人・社会双方にとつて「同化」が重要であるという原理を述べたうえで、総督府における同化政策の成果を肯定的にとらえ、その方針に則つて行動することの是を強調している。内地人たる「我々」は総督府の方針に則り、母国人として恥じない高潔なる品性をもつて、本島人を撫育しなければならないとの決意を表明しているのである。ここは、伊藤博文が、台湾の「宣撫工作」「娯樂の開拓」という目的のために、高松に渡台を

勧めたとする松本（一九七五）の記述の真実味がより増す記述である。続いては、台湾で娯楽供給に邁進した経緯を述べる。

余は多年本島に在て娯楽の供給を以て業と為し、世の同情を得つゝあるを幸ひ、娯楽物の選択に依りて大に本島人の同化開発に努むると同時に在内地人全般の慰謝を計らん事を期せんとし、場屋の必要を認め昨年三月より基隆、台北、新竹、台中、嘉義、台南、打狗、阿緞の八箇所に多数人を容るゝに足るべき場屋を建設し、著々内地演芸物を誘引して各地を巡業せしめたのであつた。

右では、高松がこれまで手掛けていた「娯楽共有」すなわち演芸興行を、台湾で展開してきたのは、娯楽・慰謝を提供することで、同化開発につながるのと考えがあつたことを述べる。松本（二七六五）が紹介したように、高松は、落語家三遊亭円遊の弟子として落語・講談を習い、この話術でもつて職工たちに演説をしていた。台湾ではそのキャリアを活かして事業を展開していたことが知られる。続く文章では、以下のように、台湾への演芸の招聘が困難の連続であつた苦勞話が展開される。

併し是れは単に余の希望の一端を行つたに過ぎない。此後は猶進んで各種の演芸物を本島に招き、其需要に応ずると同時に余の目的を貫徹したい考である。併し此の演芸物は、操縦は中々困難な事業で内地に於てすら都合能く行かない。まして台湾であるから困難の度の一層甚だしい事は当然である。夫れは兎も角、もう少し趣味に富んだ面白い演芸物を移入して、一般の娯楽に供したい考である。夫れにしても其演芸を為すべ

き場所と、其演芸を引受けて巡業なさしむべき受元なる者がなければならぬ。余は今ではどうやら当初の希望の如く種々なる演芸物を呼び迎へる事が出来る事となつたので、先づ試みに東京落語も呼び天一も呼び喜劇バック会も呼んだ。尚此度もドシドシと呼ぶ計画であるが、茲に困つた事は内地芸人は船が怖いと云ふので女義太夫の如きは話が纏りかけて幾度も破れた。男の芸人とても同じ事で自然金に飽かせて納得せると云ふ風で、結局高価のものとなる天一の如きも、今日まで台湾へ来なかつたのは算盤が持てぬので手を出す者がなかつた為で、實際算盤を目的とした考では到底當時此事業は不可能である。

ここでは、船にて台湾に向かうことに抵抗を示す芸人がいたこと、台湾での興行が高価な費用が必要で算盤を目的とした考え、すなわち損得勘定ではできない事業であると述べている。台湾での興行の実態を垣間見る証言として興味深く、伊藤博文の後援なども考えられるが、高松の事業の経済的事情については後考を俟ちたい。続いて、演芸物に本島人と内地人では好みが違う、台湾では場所によって、諸国人によって趣向が異なるため、提供する演芸の選択が難しいことを述べる。

又演芸物に就ても本島人に向くものと内地人のみに向くものと、又両方へ向くものとあつて、夫れを加減して当て嵌めねばならず、又内地人向のものとしても台北の如き人口の多い所と人口の少ない地方とで選択の使が、其上内地なれば其地方々々で風俗人情習慣等が殆ど同一で、又嗜好も自然一致して居るが、台湾は諸国人混居して居るので甚だ行き憎い。如何なる趣味の演芸が適するかは供給者の大に苦心する所であつて、又頗る骨の折れる所である。併し余は其主義目的の爲めには如何なる困難でも決して辞する所でない。

い。是からは尚ほ進んで時機に適した娯楽物をも組織して本島人の同化開発の料に供すると同時に在内地人各位の嗜好を満たし感謝の一助たらん事を期して居る。

つまり、本島人の「同化・開発」ともなり、内地人の嗜好を満たす娯楽をさらに提供し続ける意思が示され、ここに至って、演芸から演劇界へ進出する計画が語られるのである。

而して先づ其目的実行の第一著として台湾劇を組織したいと思ふ。元来本島人は劇と云ふ事に趣味を持つて居るので、能く支那の演劇を観る。併し観る事は観るが言語が少しも通じない。唯だ其動作に依つて想像する位に過ぎないと云ふ有様で、到底其嗜好を満たすに足りないのである。故に若し本島人の嗜好に適するような演劇を組織して在来の支那劇の欠点を補ひ、舞台上背景を見せ総て道具を作り、台湾人が舞台上に現はれ、台湾語で台湾に在つた事実や出来事を脚色して見せたならば何程平民文学的で又通俗教育になるか知れぬと思ふ。

石婉舜によれば、この記事中の「本島人」は、当時台湾の総人口三〇〇万人のうち約八割を占めていた「閩裔漢人族群」（ミン族系の漢民族）のことである。本島人は劇を好むので、本島人の嗜好に適した演劇を組織しようという高松の言説からは、台湾人の独立した演劇の創始を目指しているようにも読めるが、根底にあるのは「同化」という思想であり、欠点ある「支那劇」を改良し、内地人として撫育するという優越的な立場からの認識があったことは石が述べる通りである。

殊に旧来の支那劇や大道で掛け舞台の上で演じて居る本島人の演劇様の物でもこれを見るときは実に許すべからざる欠点がある。それは外でもない。大抵の演劇の骨子は謀反を仕組んで臣下が主君を殺逆するか、或は暴臣、土匪、強盜又は姦通と云ふが如き、実に忌はしい物計りで世道人心を陶冶する上よりすれば甚だ危険である。又一般の風俗上よりするも宜しくない。厳格に云へば安寧秩序を害すべきものが多いので、本島開発の上より見るときは実に寒心に堪へ得ない。故に是非其台湾劇を改良する必要があると思ふ。併し是れを改良と云ふよりは寧ろ創設するので、広い意味に於ける社会改良の大業であるから、実に容易の事ではない。之を為すには最も慎重の考慮を要するので目下種々腐心中であるが、兎も角此企画に対しては何うか世の賛同を得て、夫れぐ有力な人々に能く協定して貰ひ、余は専ら其実行の側に立ちたいのである。要は一の研究会を起し討議の結果を実現して見たい考である。

既に各地方に劇場も出来てあるし、其演劇を為すべき人を集め、稽古をさす位の事は即時に出来るまでの準備は付いて居る。母国人たる立場よりして是非此事業に同情を寄せて成功せしめらる、様、切望に堪へない次第である。(同仁社々主高松豊次郎)

右によれば、高松が「台湾劇を改良する必要がある」と考えたのは、本島人の演劇が「安寧秩序を害するべきものが多い」という欠点があることをみて発案したとする(傍線部)。ここで高松が考える「支那劇」の難点に關する文言は、明治政府がかつて歌舞伎(旧劇)に対して述べていた表現と重なる部分が多いことに気づくだらう。

四、演劇改良運動との関係

明治政府の演劇（歌舞伎のこと）に対する考え方について確認しておくと、明治五年（一八七二）二月、江戸猿若三座座元を東京府に呼び出し、「このごろ貴婦人及び外国人も追々見物に相成り候については、淫奔の媒となり、親子相對して見るに忍びざる等の事を禁じ、全く教えの一端ともなるべき筋を取り組み申すべきよう」と諭した（明治五年二月二二日付『東京日日新聞』）。明治政府は同年三月に教部省教導職を新設し、芸人・俳優を監督下におく。四月には、狂言作者を第一大区役所に呼び出し、「抑演劇ノ儀ハ勸懲ヲ旨トナスベキハ勿論ナガラ、亦後全ク狂言綺語ト云ル言ヲ廢スベシ」などと再度注意し、六月には教部省から座元に上演前には仕組台帳を提出し、上演許可を求めるよう通達している。

このような政府の歌舞伎に対する見解は、明治一九年（一八八六）八月に発足された「演劇改良会」に結集される。演劇改良会の発起人は、井上馨、森有礼、柴沢栄一、箕作麟祥、重野安繹、依田百川、高木兼寛、外山正市、菊池大麓、穂積伸重、和田垣謙三、矢田部良吉、桜井錠二、箕作佳吉、末松謙澄、斎藤修一郎、福地源一郎、矢野文雄、藤田茂吉、中上川彦次郎で、賛成員としては、伊藤博文、大隈重信ら、政治家や財界人が名を連ねている。その「演劇改良会趣意書」（『朝日新聞』明治一九年（一八八六）八月一〇日）には、

今や我邦の演劇は猥褻野鄙にして紳士淑女の眼に触る可らざるもの極めて多し。蓋し旧習に拘泥し猥褻野鄙にあらざれば観者の耳目を樂しましむるに足らずと妄想し、世と共に変遷するを知らざるに因れり。宜しく之をして高尚なるも人情に遠からず閑雅なるも世態に背かず優美を快活と兼備へ樂しんで淫せず、和して流れず上等社会の觀に供して恥る所なきの域に達せしむべし。是れ本会の目的とする所なり。

とあり、やはり演劇を猥褻野鄙のものととらえており、改良によって高尚で「和して流れず上等社会の観に供して恥る所なきの域」にするとの決意が述べられている。

この演劇改良運動について、毛利三彌は「演劇改良会の結成は、条約改正交渉を有利に進めようとする伊藤内閣が対外的に誇示できる演劇を求めたことと結び付けられるのが通常」と指摘する⁶。毛利の整理によれば、明治十一年（一八七八）二月、外務卿寺島宗則が関税自主権回復を目的とする条約改正の交渉をヨーロッパ諸国と始めた時と、伊藤博文が歌舞伎改良論議を行った時期が重なる。その声にこたえて守田勘彌は西洋風建築の歌舞伎劇場新富座を再築し、市川団十郎は活歴劇の上演に踏み切っている。明治十九年（一八八六）の演劇改良会結成前後は、外務大臣井上馨が清国との修好条約改正の提議にむけて動いていた。翌明治二〇年（一八八七）歌舞伎の天覧が実現する。明治二十二年（一八八九）十一月、外務大臣大隈重信がメキシコと対等条約を締結し、翌二二年（一八八九）にアメリカ、ドイツ、イギリスとの条約締結を実現した時期は、演劇改良会が自然消滅し、演劇矯風会、日本演劇協会と組織替えされていく。もつとも毛利は、政府が演劇改良を裏から操っていたというより、「世間の演劇意識と法意識とが、無自覚にも関連していることを示唆する」とする。

ここで留意したいのは、一連の演劇改良に、伊藤博文が関わっていたことである。毛利も指摘するように、もつとも真摯に演劇改良の実行案を考えた末松謙澄のちに伊藤博文の娘婿になっている。演劇の改良について同じ理想を共有していたとも考えられよう。高松豊次郎に視点を戻すと、何度も触れているように、高松が台湾行きを決意したきっかけは「伊藤博文に『台湾の宣撫工作と娯楽界の開拓を兼ねて渡台するように口説かれた』（松本（一九七五））とされていた。

台湾参入当初、高松が台湾興行を実現させた「天一」は、奇術劇で著名な魔術の女王・松旭斎天一のことである。天一は高松と契約を結び、明治四二年（一九〇九）二月―三月に台湾を訪れ、スパンコールを付けた衣装に回転フィルターで七彩の照明をあてた『胡蝶の舞』などを披露している。この公演について考察した近藤弘幸は、やはり伊藤博文の「差し金」があつた可能性を指摘している⁷⁾。天一は、台湾の前に、当時珍しい欧米興行を實現させているが、そのアメリカ巡業中に伊藤博文もその地におり、「折からその地に立ち寄った伊藤博文を日本人移民一同が歓迎する会に招かれ得意の手工品を披露」し、天一は伊藤から書を贈られている（村松梢風『魔術の女王』⁸⁾）。天一の公演は「台北以外の各地は総督府の買切りで、目星い台湾人に頭割で切符を売付、土人には無料で招待券を出し、宣伝と宣撫を兼ねた興行方法だった」（村松（一九五七）、七九頁）のである。一介の興行主の事業が、台湾総督府の後援を得ることは異例と思われるが、伊藤博文の存在があれば納得されるところである。

また、高松豊次郎が「台湾正劇練習所」設立以後に台湾で興行させた川上音二郎は、明治三六年一月五日から一五日の明治座公演の狂言の世界を台湾にすることとし、前年の一月「早々台湾に渡航し、実地を撮影し来り」（『朝日新聞』明治三五年（一九〇二）一〇月二六日）とあり、高松のいる台湾へ取材に向かったと報じられている。実際は二月に初演された『オセロ』（江見水蔭翻案）の上演のための下準備である。川上が台湾を題材とするのはこれが最初ではないが、今回は台湾の澎湖島のうち吉貝島をキプロスに置き換えた。毛利三彌の考察によれば¹⁰⁾、もともと自由民権運動から派生した壮士芝居の代表的演劇人である川上音二郎は、明治二四年（一八九二）六月の東京中村座公演以後、「政治性より舞台と俳優の品位向上」に意義を見出す。自身的一座に制法を定め、「普通演劇の弊害を矯正し専ら活劇を旨とすべし（第一条）」こと、「座員は品行を方正にし礼儀信義を専一となし社会教育に先導者を以て任ずべし（第二条）」などを目指すようになった。この指針は、「演劇改良

運動」と方向性を同じくするもので、彼が体制側の意向に賛同したことを示すといってよい。川上音二郎は、これを「新演劇」と呼んだ。明治二六年（一八九三）、川上音二郎は最初の渡仏を果たすが、これには同郷の福岡藩士で、伊藤博文の秘書官であった金子賢太郎の援助があったことは知られており、あわせて四回の海外公演を実現させたのも、伊藤博文の後援があったと考えられる¹¹。川上音二郎の妻貞奴のパトロンが伊藤博文だったことや、音二郎が理想の劇場として大阪北浜に建設した帝国座が、伊藤博文、金子健太郎の提案を受けて建設されたことなども指摘されている。

ようするに、高松豊次郎が台湾に赴いたきっかけだけでなく、「台湾正劇練習所」の設立、川上音二郎の台湾招へい、いずれもが伊藤博文の意向にそったものだったことが想定しうる。日本演劇史においては、当初政府役人も関わっていた「演劇改良運動」は、民間の財界人や演劇人らによつて舵を変えて進められるが、そのうち政府関係者の意向に近い余波を、日本においては川上音二郎が、台湾においては高松豊次郎が引き継いだと言える。少なくとも、台湾における高松豊次郎の演劇活動は、為政者の意向を色濃く反映したものだ。

高松豊次郎が台湾に渡ったとする明治三四年の政治的な動きとしては、日英同盟協約（明治三五年一月三〇日調印）があるが、そのための政府の動きとは別に、井上馨、伊藤博文ら元老は日露協商を目指していたことが知られる。伊藤博文がもともと予定していたアメリカ、パリへの外遊に乗じてロシアを訪問しその働きかけをしたが、結局日英同盟が採用された¹²。その背景にはロシアの極東政策の脅威への対応があり、領する台湾について、日本の統治を安定させたいという思惑があったのかもしれない。

五、高松豊次郎渡台以前の演劇興行

ところで、日本統治下台湾では、高松参入以前の明治三〇年（一八九八）頃から、台北市街地や基隆を中心に、壮士芝居、書生芝居が上演されていたことが指摘されているが、おおよそ素人役者や無名の役者によるとの言及にとどまっている¹³。

『台湾日日新報』で確認できる限り、台湾における最初の新演劇団による興行は、明治三十一年（一八九八）四月三日に台北座で開場した『思ひきや親子の再開』（『台湾日日新報』同年同月五日「壮士役者の芝居」）である。役者は、愛澤哲夫、西田義任、酒井正之、市川常太、時山春樹、村田一二、大藤數見、小川健治、吾妻孝二、品川太郎、大西和雄、松本緑郎、大和一樹、小松民男、村瀬實、愛澤鶴治が名を連ねる。彼らは、メンバーの入れ替わりをへながら、「愛澤一派」、「正義團」という名で十字館、栄座にも出演していることが確認される。愛澤一派の素性は十分に詳らかにしていないが、愛澤哲夫の名は後述する角藤定憲筋の彰義隊一団とともに再渡台する旨の記事が確認できる。別の一派の例であるが、明治三十三年（一九〇〇）九月二八日付『台湾日日新報』「台北座の壮士演劇」では、「台北座にては此たび新たに組織したる大成団一座の壮士演劇を今廿八日より開演するよしなるが東京より態々呼寄せたる俳優もありて座中一同車輪となり働くとのことなり」とある。これは台北座が主体となつて、種々の役者を呼び集め「大成団」という名で興行をさせていた例で、愛澤一派も演者の入れ替わりがあつたことからして、同様に台北座の求めに応じて個別に契約した役者たちが成した一団であつた可能性もあろう。また、このころ台北座、栄座ともに、旧劇（歌舞伎）の役者と座付契約もしており¹⁴、時には新演劇（壮士芝居）俳優と混じつて興行がなされることもあつた。

台湾における内地演劇の濫觴とされる十字館（城内北門街一丁目）は、統治後すぐの明治二十八年（一八九五）より営業していた料亭十字屋を前身として、後に芝居披露を行う十字館へとつながる。たとえば、『台湾日日新報』

の明治三二年（一八九九）三月四日付紙面に「十字館の新演劇 本日より萩の家米若、桂月彦等が真打となり、強盗判事六幕を演ずるよし」云々とあり、掲載されている役者の名前から判断するに、これはこれまで料亭等で余興芸を披露していた芸妓や芸人たちによるもので、壮士俳優による興行ではない。このように、斯道のものではない素人が、余興として新演劇を披露していた例もある。

明治三六年（一九〇三）二月二日付『台湾日日新報』『梨園雜俎』に、台北座座主の笠松が二月一〇日からの初日に、壮士俳優を呼ぶことを検討したという記事がみえる。明治三六年（一九〇三）二月四日付『台湾日日新報』には、台北座では壮士俳優として著名な角藤定憲一座の興行を十日から始めることを公式に決定した。明治三六年（一九〇三）二月四日付『台湾日日新報』によれば、座長、角藤定憲以下一九名に加えて、この内地に帰国していたらしい愛澤哲夫ら数名が同行する予定となっている。しかし、結局角藤は渡台せず、松尾龍座長、中村敏太郎連隊長ら「彰義隊」が、明治三六年二月一日より台北座で興行を始めた。一団は、「是れまで、岡山にて興行中なりし所、先月中にて打上げ、明四日馬関より西京丸に乗船する筈なれば来る七日当地着」とあり（『台湾日日新報』明治三六年（一九〇三）二月四日）、国内での旅興行に引き続いての興行だったことが知られる。

「彰義隊」は台北座座付として、その後およそ一年間興行を続け、台北だけでなく基隆など台湾各地の劇場での巡演、さらには明治三七年（一九〇四）七月には香港公演にも赴いている。もともと、「彰義隊」は、度々素行の悪さが報じられるようになる。たとえば、明治三七年（一九〇四）一月一日付『台湾日日新報』『梨園雜俎』には以下のように報じられている。

一昨々夜台北座では佐々木力雄と中村敏太郎とが酒機嫌の大気焰から一寸活劇を演じたが、一時間余幕明きが遅れたのみで無事に演了したが、二人とも意趣があるでも何でも無く、ほんの酒の上の事として醒めて見れば何でも無く全く佐々木が悪かつたのだと本人大に閉口をして居るとサ▼何しろ天下の書生が学業を遣り損ねて俳優となつたのだから是れ位の元気が無くてはならぬドシ／＼遣るべしだ、併し夫れが為め舞台に影響を及ぼして看客に不快を感じしめたりすることだけは固く慎むが宜からう。(中略)▼事の序でぢやから尚う少し憎まれ口を利用して置こう。名は気の毒だから指さぬが確かに二三人だけは此頃大分風儀が崩れ出して来たやうで面白からぬ風説が時々耳にへ這入る。座主も既に其筋から注意まで受て居るのだから充分の取締を為し座長も能く注意するが好からう。▼風儀の点から云へば榮座の若手連中も亦大分崩れ出して青年会組織当時の勇氣は何処へや رفتて了つて、先づ舞台を粗末にし不勉強至極で女に関係をつける杯と来てはモウ駄目だ。緊乎禪を締めてかゝらぬと人氣に関はるぞよ。

記事中の佐々木力雄と中村敏太郎は、「彰義隊」の俳優で、酒に乗じた喧嘩で開幕が遅れたらしい。「何しろ天下の書生が学業を遣り損ねて俳優となつたのだから」という文言から、当時の壮士芝居に対する世間の評価が垣間見られる。また、同年一〇月一六日付『台湾日日新報』「彰義隊の風紀紊亂」でも、九月下旬より基隆の福楽座で興行中の「壮士俳優彰義隊」の一座が「台北に居りし頃より猥らなる挙動」があり、興行先の基隆でも「尚此弊風」を改めず、むしろ一層甚だしくなっている、そこに「日吉亭の酌婦富川しほ」が、情夫を捨てて「俳優の一人なる中村敏太郎に現を抜かし、更らに又同じく仲間の小池三郎に乗替へて是見よがしに浮かれ居る」としていたというゴシップ記事が載る。

それでも新演劇の一団は続々と台湾に渡っており、ほかに、東京での公演のあと台湾に乘込んだという花井露友一座（『朝日新聞』（明治三十七年（一九〇四）三月一六日）、大阪で人気だったという小神富雄一座（『台湾日日新聞』明治三十七年（一九〇四）四月二四日）など、続々と内地から新演劇の俳優一座が台湾に渡っていたことが確認できる。

こうした台湾における新演劇の「隆盛」の背景には、劇場経営に関する攻防があった。以下の「台北座の廃業」『台湾日日新報』「台北座の廃業」（明治三十八年（一九〇五）一〇月五日）が参考になろう。

台湾にて演劇場らしきもの、初めて建築されしものは、台北新起横街の台北座にして遊ぶ事に困める台北の人士は翫然として台北座に集り、雷次郎・雷花を演劇の神の如く難有がり、日夜の大繁昌を極めたるより紅粉助雁師等が踏張りも其甲斐なく十字館は憐れ無残の最期を告ぐるに至り、コ、台北座の独り舞台として全盛を極めたるが、其後榮座の開業するありて、唯一押に台北座を押潰さんと試みたれども、台北座も去る者として忽ち競争の態度を採り、今までは九州一方に限られし俳優の範圍を擴め、或は名古屋種、東京種を輸入すれば、榮座は京都大阪種を以て対抗し、互ひに火花を散らして戦ひたる結果は、双方共に少なからぬ傷を負ひ、遂に合併するに至りたれど、不自然なる合併は永続せず。束の間に再び元の仇敵となり、以前に増したる大競争を始め遂には壮士演劇を輸入して、最後の大競争を為す事となりしが、両虎の争ひは獵夫の利となり、見物は安くて好い芝居が見らるゝと喜べど、戦ふものは傷つきて両座共に頗る困しき地位に立つの止むを得ざるに至りたり。茲に本年の春、榮座の金主側なる柵瀬其他の紳士間にて台北座を買ひ潰し、榮座の獨舞台になさんとの議起り台北座主と交渉する所ありしも相談纏まらず遂に泣寝入りとなりしが、近頃

またくうざばいしう
又々同座買取の議起り屢々交渉を重ねたる結果、土橋仙之助氏が三千五百円にて買取の議纏まり既に登記までも済ましたれば、台北座は全く笠松の手を離れて土橋の有となり一昨日より興行を停止したりとぞ。

右によれば、台北座と栄座は、当初旧劇にて勝負していたが「双方共に少なからぬ傷を負ひ」一時合併するも再び対抗するようになり、「壮士演劇を輸入」することで「最後の戦い」を繰り広げていた。台北座は当初九州の座ばかりだったところ、東京、名古屋の役者を呼ぶようになり、栄座はそれに対抗して京都・大阪の役者を呼んでいたというものである。台北座は明治三十一年（一八九八）二月二〇日、「大阪演劇の興行で開場」（同年同月一日）『台湾日日新報』「台北座」しており、「栄座は明治三十五年（一九〇二）一〇月二五日に開場」（同年日月）『台湾日日新報』「栄座の開上」である。両座の合併については、明治三十六年（一九〇三）から計画があったらしく、合併して「台北演劇株式会社」とすることが披露されたが（『台湾日日新報』明治三十六年（一九〇三）三月二八日「台北演劇株式会社」、その後「何等の進行を見ざるのみか殆ど立消の光景」となっており、その原因として株主を名乗りでるものはいても「一銭の金をも出さず」などと報じられていた（『台湾日日新報』明治三十六年（一九〇三）四月五日「劇場合併談の成行」）。その後、栄座が優位な形で、台北座が笠松から土橋仙三郎に譲渡され、栄座が優位な形の合資会社「台北劇場合資会社栄座」の設立となったのである。『官報』（明治三十八年「一九〇五」一〇月三〇日）には以下のように登記されている¹⁵⁾。

合資会社設立登記

一商号

台北劇場合資会社栄座

一本店 大加納堡艦舦西門外街二丁目三十六番戸

一目的 劇場貸貸演劇興行及其他ノ興行ヲ営ム

一設立ノ年月日 明治三十八年十月十五日

一社員ノ氏名住所出仕ノ種類価格及責任

一金二万七千円	無限	大加納堡艦舦西門外街二丁目三十六番戸	小林 竹蔵

一金九千円	有限	同堡同街一丁目四十五番戸	森田 廣

一金六千円	有限	同堡台北城内北門街二丁目十一番戸	土橋仙三郎

一金六千円	有限	同堡艦舦西門外街二丁目六十四番戸	荒井 泰治

一金六千円	有限	同堡台北城内府中街一丁目三十八番戸	金子 圭介

一金六千円	有限	同堡台北城内府中街三丁目四十三番戸	柵瀬軍之佐

一存立ノ時期 十五箇年

右明治三十八年十月十八日登記ス

相次ぐ壮士演劇の渡台の背景には、こうした劇場間での争いがあり、契約する新演劇（壮士芝居）の善し悪しは劇場経営の手腕の評価と連動したものとみられていたようである。これは当時の内地における新演劇の流行の影響にあるといえよう。しかし、台湾にやってきた役者の素行の悪さや芝居の不出来も手伝ってか、結局大入りとはならず、台北座は栄座側の経営陣によって買いつぶされ廃業となるなど、劇場の明暗をわける原因ともなった。なお、台北座座付の役者は、内地に帰るものもあれば、台南座座付になったものもいた。もともと、台南で

も素行問題が起こり、客入りも不振となり、地方に巡業に繰り出し、離散しながら自然消滅したとみられる¹⁶。

六、本島人向け劇場への方向転換

その後、劇場はある意味、新演劇に見切りをつけたように見える。たとえば、台南の例であるが、『台湾日日新報』明治三十九年（一九〇六）三月六日には、彰義隊の残党である佐々木力雄、高野潤次郎らが、「素行あるより其筋の嚴命下りて営業鑑札を引き揚げ」られたあと、元台北座付役者の旧劇俳優による興行が始まる。そして「昨今は台北の演劇株式会社よりも講談師燕林一座と朝鮮人侏儒を伴ひ来たりて数日間打ち続け居る」ところ「相当の賑わい」「従来台南に來たりたる芸人中には類なき好評」となり、稀にみる大入りとなったという。この興行については、『台湾日日新報』明治三十九年（一九〇六）二月九日に詳細が、以下のように報じられている。

● 桃川燕林一座 今度榮座より桃川燕林の一桃川燕林を聘し、既に一昨日の便船にて渡台したれば、本日（初日として）台北座に於て興行する筈にて、其顔触は主任月遊軒桃川燕林、同雀林、落語家として三遊亭笑朝、朝鮮演芸師、姜鎮川、金元基等なるが、此姜鎮川は年齢二十二歳、身の丈二尺二寸、又金元基は五十二歳にて身の丈二尺といふ奇人にて、孰れも各国の語に通じ、東京に於て頗る持囃された人物なりと。扱今晚からの出し物は、第一席かけ芝居（惣連中）、第二席滑稽落語（月遊亭雀林）、第三席義士銘々伝（桃川燕林）、第四席朝鮮奇術（姜鎮川）、第五席滑稽落語諸芸物真似（三遊亭笑朝）、餘興手踊（金元基、姜鎮川）、第七席家庭新講談乳姉妹（桃川燕林）、第八席余興喜劇景色入茶番（惣連中）

また、明治四〇年（一九〇七）初頭の台北・台中・台南の演劇興行を報じる「三都の春興行」（『台湾日日新報』明治四〇年（一九〇七）一月一日）は台北座、台中座、台南座ともに、旧劇（歌舞伎）が興行して大入りだったようである。そして、同記事によれば台南の水仙宮廟では、水芸手品が興行され、

過半以上は本島人の観客にて是れ又た人氣ありしが、本島人を目的の興行としては木戸銭をとり場代を取ることの評判悪く、之れは追ひ込みに限る如し。為に幾分の客を減じたる氣味ありしも十日迄打続き十一日より鳳山地方に移りたる筈なり。

と、観客の半分は本島人であったと報じられている。木戸銭をとったことが評判が悪かったのは、本島人にとって演劇は祭事の仮設舞台で安価でみるものであって、劇場での商業演劇は受け入れがたいものであったという意識もあつたかもしれない。そして、明治四一年（一九〇八）六月、台北座では「我楽部戲園」による「大賜福」「摘桜会」「落花園」「飛波鳧」「探陰山」「宝林招親」「大報仇」（明治四一年（一九〇八）六月一日）『漢文台湾日日新報』「梨園齣題」、六月二四日から同じく「大賜福」「征北海」「戰太平」「新安駅」「盤腸大戰」「刺王僚」「海潮珠」（明治四一年（一九〇八）六月二四日）『漢文台湾日日新報』「梨園齣題」という中国劇が上演されており、本島人向けの芝居に興行の重点を置く姿勢がみえる。そんななか、明治四一年（一九〇八）九月一日付『台湾日日新報』には、「本島人向けの劇場」を建設する計画について記されている。

当地金子圭介、荒井泰治、柵瀬軍之佐、高石忠慥、森田廣、土橋仙三郎等五氏の發起に係る本島人向きの大

劇場、新築の計画は設計既に成り、其の筋へ願出中なりしが、いよく昨日、廳長より工事に就ては総て台北廳の指揮監督を受くべき事を条件として許可せられたるが、其の場所は大稻埕詔安厝街五十九、六十兩番地、建坪三百四十八坪一合、外二階坪二百七十一坪一合、正面葺卸家四十九坪、背面葺卸家二十八坪、看客席は階上四十八坪、階下百五坪にして看客定員は九百十八人なりと。尚ほ落成に至るまでに今後五箇月を要する由。

この計画は前々年の明治三十九年（一九〇七）一月二十五日『台湾日日新報』『支那劇場の建設願』で榮座劇場合資会社の株主連によって認可願いが出されたことが報じられている。翌年一月一三日には、「土橋仙三郎、林樹本」の両氏のほか、大稻埕の王明月、北門外街の高蘭がそれぞれ出願する事となり、警務課に呼びだされて協議の上、全員合同にて劇場を建設すべきとの注意をうけて、本島人と内地人との合同で建設を目指すことになった。

明治四二年（一九〇九）一月二〇日付『台湾日日新報』によると三万余円の予算にて来月初旬より起工が決まる。途中、建設中の事故にて一四名の負傷者を出すなどして（同年六月六日『台湾日日新報』）、明治四二年九月に「淡水戲館」の名で落成する。四二年（一九〇九）三月十一日の『官報 第七七〇九号』（大蔵省印刷局）には、以下のように登記されたことが記される¹⁷。

支配人選任登記

一、支配人ノ住所氏名

大加納堡艦艀西門外街一丁目百六十六番戸

森田 廣

一、主人ノ住所氏名

大加納艫艫大稻埕下奎府聚街五十九番地

淡水戲館合資会社

一、支配人ヲ置きたる場所

大加納艫艫大稻埕下奎府聚街五十九番地

右明治四十二年二月一二月登記ス

台北地方法院

九月二〇日の開館式には、上海から一〇八名的一座が上海から乗込み（同年九月一五日『台湾日日新報』、「大賜福」「解珠寶」「双獅図」「翠風樓大開張王府」を上演した（同年同月二二日『台湾日日新報』）。

留意すべきなのは、「淡水戲館」の建設の時期が、先にみてきた高松豊次郎の「台湾正劇練習所」の計画時と重なる点である。本島人の娯楽共有のために建設された「淡水戲館」は一見、高松豊次郎がいうような「同化政策」に同調する動きのようにも見える。しかし、本島人向けの劇場の建設を計画するに至った背景は、明治四二年（一九〇九）三月三日『台湾日日新報』が淡水戲館の設立を報じる記事中に「台北に於ける内地人の娯楽機^{ぐわくき}関^{かん}は近來著^{はつてん}しく発展^{はつてん}し行くに反^{はん}し、本島人唯一^{ほんとうじんゆゑ}の娯楽^{ぐわく}なる支那演劇場^{しなえんげきやう}は市区改正^{しきくかいせい}の爲台北座^{たいはいざ}が壊^{こわ}されてより一頓挫^{とんざ}を來^{きた}し寂寞^{せきばく}の感^{かん}ありし」という言から推察するに、本島人向けの演劇興行の必要性に意識が向かっていたことが原因と言ったほうがよいように思われる。これは、劇場経営の戦略として、新演劇輸入という最後の切り札がうまくゆかず、区画整理もあつて廃業となつた台北座の新しい経営陣、すなわち榮座を中心とした株主連たちが、本島人向けの演劇・芸能が面白く、集客がよいことに気付いたという経営上の理由が大きかつたのではないだろうか。

高松豊次郎が、渡台したのは、こうした既存の劇場間の攻防が繰り広げられ、その提供される劇にも大きな変化が生じたところであつたとみられる。演芸界での活動をしながら、新演劇役者の不始末や、「支那劇」の上演が

多くなるといふ、演劇興行界の傾向をみて、演劇界への参入を決意したという経緯があつたと推測される。余談ながら、明治四三年（一九〇一）二月二二日付『台湾日日新報』には、高松豊次郎が本島人開発のための新俳優養成所「新派臺灣正劇」の振り付け担当として高野潤次郎の名があげられている。高野は、先に少し触れたが、素行不良により営業鑑札が取り消された元彰義隊の一員と同姓同名である。同一人物であるとすれば、少々皮肉な人選であつたようにも思われる。いずれにせよ、演劇人の教育機関の設立の背景には、台湾に招へいされる俳優らの素行についての内省も少しはあつたのかもしれない。

その後、大正元年（一九一二）、高松が経営する朝日座と、栄座の合併案「台北劇場株式会社」計画が提示される。『台湾日日新報』同年九月二十九日には、

朝日座及び栄座の合併案は、屢々当事者に計画されたりしも、負債の処理に付、不調に帰したる儘なりしが、高松豊次郎氏は、上京中合同の協議を進めたる由にて資本金三十万円の株式会社を組織して、台北各劇場全部を合同せんと運動したる結果、略ぼ各座主の承諾を得たれば不日、荒井、柵瀬氏等の重なる関係者の帰台を待ち、創立計画を発表し、発起人引受け株を定めたる上、不足株を一般募集に付する筈なりと

と報じられたことから知られるように、実質、既存の劇場が高松の会社へ合併吸収される。こうして、台湾の劇場の多くが高松の傘下に入るといふ局面を迎える。高松の演劇界の参入は、台湾演劇界にとって大きな画期であつたといえよう。

七、まとめ

以上、明治三〇年代～四〇年代初頭の台湾における劇場と「新演劇」興行の動向を確認してきた。まず、明治三〇年代に興行していた新演劇は、高松豊次郎が招へいた川上音二郎や、「台湾正劇練習所」の趣旨とはまったく異なるものであったと言える。内地人むけの娯楽に供する目的であり、むしろ劇場経営の健全化や他座への対抗意識のために、興行としての新規性に着目した選択であった。また呼ばれた俳優は、政治的な意図や演劇に対する信念は希薄だったと言わざるを得ない。明治四二年になって、高松豊次郎は本島人向けの俳優養成所「台湾正劇練習所」を企画し、本島人のために演劇の「教育」を始めるが、そこでは「支那劇」に対する蔑視と、内地思想の押し付けがあった。これに対して、旧来の劇場主は、同じ頃に本島人向けの興業を試行しており、「淡水戯館」では、興行的な利益の観点からか、「支那劇」をむしろ歓迎した。新演劇の動向、本島人向けの演劇活動という点では、ややもすれば同じ線上の事象と見えるかもしれないが、高松豊次郎の活動と、それ以前の劇場主の興行の在り方は、まったく異なるものであった。

この両者の対応は、植民地における同化・教化・慣習・文化の尊重という問題、あるいは古典劇と近代化という問題を考えるために、多くの材料をあたえてくれる¹⁸。しかしその議論の前に、高松豊次郎が、本島人の「教育」のために用いた「正劇」は、川上音二郎の掲げる理想と一致し、かつ伊藤博文ら政治家の考える演劇の姿であったために、それは同化政策への協力という側面が多分にあるが、高松に政治家に組した移植者の姿だけを重ね合わせて考えて良いかについても検討の余地があるようにも思われる。

たとえばさらに視点を変えて、日本の大阪で、江戸時代から続く芝居小屋の仕組みが崩壊し、ほとんどの劇場が、松竹の傘下に入る時期と、高松による台湾劇場の掌握が重なるのを、ただの偶然と考えて良いだろうか。そ

ここには明治維新以来、演劇興行界をめぐる仕組みが時代に適應できなくなったための変化が急激に顕在化した時期でもあった。高松の政治的な一面だけでなく、興行師としての手腕、旧来の興行との違いなど、多角的な視点から今後検討する必要がある。

¹ 笹川慶子「帝国日本の映画配給―台北の帝国キネマ演芸と西日本―」（関西大学　なにわ大阪研究センター『近代大阪文化の多角的研究―文学・言語・映画・国際事情』、二〇一七年三月二日）

² 拙稿「日本統治下台湾における新演劇興行の実態―明治三十八年台南座蜻蛉会の芝居番付より」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』六三号、二〇一三年三月、<https://doi.org/10.18910/91250>）

³ 大園市蔵編『台湾人物誌（一名台湾人名辞書）』（一九一六年、谷沢書店）「八九〇頁、同書『台湾年鑑』七〇頁。

⁴ 呂訴上『臺灣電影戲劇史』（一九六一年、銀華出版部）

⁵ 石婉舜「殖民地版新派劇の創成―『臺灣正劇』的美學與政治」『戲劇學刊』一二、二〇一〇年。原文「就政治層面來看，一九一〇年代，在漢人武裝抗日勢力消退以及日人武力鎮壓山地原住民的同時，隨著現代化建設的展開，『全島一體感』的共同體意識正在殖民地社會醞釀，『正劇』劇場直接參與了這個歷史過程。那一個個在『正劇』舞臺上登場的現代『個人』（主人公們），他們身處的世界以科學知識與法治觀念為運行中樞，區分社會為新與舊，進步與落後，光明與黑暗的兩邊，隱含一個依殖民者價值標準設定的新社會階序，形塑觀眾的自我認同（即『我們』）。『正劇』因而是一個由殖民者主導，從受殖者的精神面施予殖民地化的工程。另外，一如日本新派劇在興起的過程之中，與日本現代『國民』意識相輔相成，『正劇』不僅在美學上，也在政治上延伸、複製新派劇的經驗，實為不折不扣的『殖民地版新派劇』」

⁶ 毛利三彌「イプセン以前―明治期の演劇近代化をめぐる問題（二）―」『美学美術史論集』六、一九八七年七月）

⁷ 近藤弘幸「魔術の女王の『テンペスト』―松旭斎天一・天勝と〈奇術劇〉の展開―」（『中央大学人文科学研究所』第一〇三号、二〇一二年九月）

⁸ 村松梢風『魔術の女王』新潮社、一九五七年

- 9 井上理恵「日本統治で生まれた川上の演劇『台湾鬼退治』、『オセロ』、生蕃討伐」——『吉備国際大学研究紀要 社会学部』一九、二〇〇九年。
- 10 毛利三彌「イブセン以前（承前・川上音二郎のこと）——明治期の演劇近代化をめぐる問題（二）」『美学美術史論集』七、一九八八年二月
- 11 李応寿「玄界灘を渡った川上音二郎」『日本研究』二二、国際日本文化研究センター紀要、二〇〇〇年一〇月
- 12 外務省百年史編纂委員会編『外務省の百年 上巻』（原書房、一九六九年、四一四～四三六頁）
- 13 陳怡如「台湾における興行取締規則の制定と実施——皇民化運動期以前の大衆演劇活動からの考察——」『文化政策研究』第二二号、二〇一八年
- 14 日置貴之「明治三十六年「台北役者評判記」（一）（二）」『明治大学教養論集』五五七、五六〇、二〇二一年九月、一二月）
- 15 大蔵省印刷局編『官報』一九〇五年三月三〇日、日本マイクログ写真、明治三十八年、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2950036>（参照 2026-01-13）
- 16 注8と同く
- 17 大蔵省印刷局編『官報』一九〇九年三月一日、日本マイクログ写真、明治四十二年、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2951059>（参照 2026-01-13）
- 18 たとえば、邱昱翔「太平洋戦争期の布袋劇」（『中国学志』三三卷、二〇一七年十二月）では、当時の植民統治政策と演劇統制の果たした役割を布袋劇の例から論じており参考になる。

6 日本統治下台湾における能楽

王 冬 蘭

一、はじめに

日本植民地統治時代の台湾において、能楽は日本人社会で展開された。例えば、能楽上演が行われ、能舞台も作られ、能楽社中も数多く組織されて、絶えず稽古が行われていた。また、『能海』という能楽雑誌も現地で刊行された。

台湾における能楽についての研究はそれほど多くはないが、以下のような論考がある。関屋俊彦「雑誌『能海』の行方」(二〇〇七)や竹内淳は、台湾で刊行された『能海』二冊の発見経緯や雑誌の構成について紹介した(二〇〇七)⁽¹⁾。齋藤裕一「台湾における能楽の初演について」(二〇〇九)は、明治三十八年(一九〇五)の台湾における最初の能楽公演について詳述した⁽²⁾。

また筆者は、これまで以下のような四本の論考を発表し、主に能舞台と能楽師のふたつの視点から台湾における能楽の諸相を明らかにしてきた。

王冬蘭「日本統治下台湾における「能楽第一人者」小川尚義について」(二〇一九)⁽³⁾

王冬蘭「日本統治下台湾における能舞台」(二〇一九)⁽⁴⁾

王冬蘭「桂六平と能楽雑誌『能海』」(二〇二〇)⁽⁵⁾

王冬蘭「日治時期台北大村武能舞台研究」(二〇二一) (6)

ここでは、これらの既発表論文と本科研で開催された研究会、および芸能史研究会例会(二〇二〇年十月)で発表した口頭発表の内容に基づき、台湾能楽の展開に大きな役割を果たした各流の主な指導者の活動地域、時期、各流の主な社中などから、日本植民地時代台湾の能楽の諸相を概説する。

なお、台湾における能楽の展開は、観世流、喜多流、宝生流という三流があったが、金春流、金剛流の活動はほとんどなかった。指導者の移動や各地の能楽展開状況等により、台湾における能楽を前半期と後半期を分けて考察を進める。なお引用する『台湾日日新報』記事は、読みやすさの便宜をはかるため、新字体とし句読点を補っている。

二、前半期における主な指導者と社中(一八九一〇年代後半)

(1) 観世流(台北)

『台湾日日新報』明治四一年(一九〇八)七月一日「台北の謡曲界」には以下のようにある。

観世流は嘗て杉原謙氏が頻りに吹聴せしが多くは浪人的集合団にて鼻突合ひに過ぎざりし。然るに喜多流の桂氏が渡台後、澤井氏渡台し観世流の発展に力を尽したる結果、観諷会なるものを起したるが未だ一般を風靡とするの勢力なく杉原氏時代に比して稍活気を帯びたる計りなりしが、此澤井氏も亦病気の為、去十日郷里へ帰り、再び同派は師匠を失ひたり。されど観世流には古くより温聲会なる会合あり。高雄氏これが牛耳を執り官民の浪人天狗連素養ある人多く概して喜多流よりも巧者勝ちなれど統一するものなければ

観世の流れを汲みながらも仕舞などは喜多流の八戸氏が門に教を乞ふものあり斯くの如き状態なれば、今後同派に適當の師匠を有せざる限りは自然喜多流に赴くもの多きを加ふるに到らんか。(以下略)

観世流の謡曲指導者が現れたのは、他の植民地にさきがけて台湾が一足先だった。例えば、杉原謙という人物は早い時期に謡曲指導者として活動を行った。杉原謙の謡曲師範した時期は「杉原氏時代」と言われる。恐らくこの「杉原氏時代」とは、台湾における謡曲師範が指導した社中が活動を開始した時期である。もともと、杉原謙は台湾で謡曲指導の先手を打ち、愛好者の「集合団」が出来たが、謡曲社中として稽古の質を高めることが出来なかったようだ。

杉原謙の後、明治三十六年（一九〇三）に観世流の澤井政秀が渡台して、「観諷会」という社中を起し、「杉原氏時代に比して稍活気を帯びたる」と評価された。澤井氏は、明治三十八年（一九〇五）七月に観世流謡曲同好者を団結して新起街一丁目八十七番戸に設置された「観世倶楽部」の常任幹事となり、志望者の指南をする

指導者	社中名	所在地	活動時期	備考
	温声会	台北	1900 前	
杉原謙		台北	1899 ? ~ 1900、1901 頃	観世清之に師事ワキ方春藤流の鍋木祚胤に入門
澤井政秀	観諷会	台北	1903 ~ 1908	
田中基次	観世倶楽部	台北	1909 秋 ~ 1912 秋	自称「五軒家素謡宗家」
笠原健	晴雪会	台北	1909 前 ~	宗家から免許
清水	鉄道部内の社中	台北	~	梅若派
加藤秀明		台南	1907 前	(名古屋) 観世流松浦に師事
鈴木重義	高砂観世会	台南	1909 前 ~	

表 1 台湾における観世流の指導者・社中一覧（前半期）

こととなった（『台湾日日新報』明治三八年（一九〇五）七月二十六日「觀世俱樂部」）。しかし、病氣の為、明治四一年（一九〇八）七月ごろ日本に帰り、「再び同派は師匠を失ひたり」という状態になった（前掲『台湾日日新報』明治四一年（一九〇八）七月一五日「台北の謡曲界」）。

その後、田中基次が觀世流謡曲師範として招聘され、明治四二年（一九〇九）秋に台北へ渡り、明治四五年（一九一二）秋まで三年間台湾に滞在した。田中基次は、京都における觀世流謡曲素謡の大家であり、かつて「五軒家素謡宗家」と自称、明治三〇年代から、京都で社中を主宰し、活躍した人物である。台北に「觀世俱樂部」が出来たため、田中基次氏を招聘したようである（『台湾日日新報』「觀世俱樂部と師匠」明治四二年（一九〇九）十一月一六日「田中基次氏披露會」、「同」明治四二年（一九〇九）十一月二日「觀世流の素謡」）。觀世俱樂部は喜謡俱樂部に対抗するような趣旨で成立されたものである。彼が指導した觀世俱樂部の会員は数十名になった時期もあった。

笠原健は日本銀行台湾銀行を仕事としていたが、宗家から免許を得て、「晴雪会」という社中を主宰し、指導した。『台湾日日新報』大正三年（一九一四）四月八日には、以下のような記事がある。

觀世・謡曲・晴雪会　台北の觀世流謡曲界に知られたる笠原健氏は昨夏上京して觀世宗家に就き修業し、今回指南免許状を得て再び渡台し、府前街四丁目二十二番戸に於て晴雪會の門標を掲げて普ねく同好の士に謡曲を教授するに至り、已に十数名の門弟ありと。

笠原健の指導は「節の細かい叮嚀な教へ方」であつたそうで、「晴雪会」の弟子は、三十名前後の時期もあつた。

現存の能楽雑誌『能海』（第一年第一号）には「晴雪会」の印章がおされており（図1）、「晴雪会」の活躍を物語っている。

以上のほかに清水という苗字の梅若派の謡曲師範が鉄道部における社中を指導したが、長く続かなかった。

（2）観世流（台南）

台南の謡曲界については「台南の謡曲界」『台湾日日新報』明治四〇年（一九〇七）七月二五日に次のようにある。



図1 『能海』第一年第一号表紙、
大正4年（1915）6月1日

台南では観世一点張り（たいなんくわんぜてんぱ）で、宝生（ほうしやう）と喜多（きた）は殆ど姿を見せない縦令（よし）。あつた処（ところ）でこの流派（りうは）だと取立（とりた）て云ふべき程（ほど）の者は無論（もちろん）ないから金剛（こんがう）とか金春（こんばる）とかに至（いた）つては皆無（かいむ）といつてもよい。扱（さく）て観世（くわんぜ）の内（うち）で頭角（とうかく）を現（あら）はして居（あ）るの
は、櫻庭氏（あうばし）（法院長（ほういんちやう））で氏は名古屋（なごや）屋敷（やしき）奉職（ほうしやく）時代に彼（か）の松浦九郎（まつうら くら）右衛門（ゑもん）
（俳名（はいめい）、羽洲（うしう））に就（つ）いて正式（せいしき）の稽古（けいこ）を遂（と）げた一人（ひとり）である。松浦（まつうら）と云（い）へば先代（せんだい）観世（くわんぜ）（清孝（きやうかう））の五天王（ごてんわう）と云（い）はれた梅若実（うめわかみのる）（とうきやうくわんぜてつ）のじよう
（同上（どうじやう））同清之（どうじやう）（同上（どうじやう））生一（きいち）佐兵衛（さへゑ）（おほさか）などの一人（ひとり）で二百番位（にひゃくばんぐら）
は無本（むほん）で遣（や）り通（とほ）す程（ほど）の先生（せんせい）だから、従（したが）つて其（その）稽古（けいこ）を受（う）けた櫻庭（あうば）も地方（ちかた）は
可成（かなり）に稽古（けいこ）が積（た）んで居（あ）るらしい。併（しか）し仕舞（しまひ）や能（のう）は得意（とくい）ではあるまい。
氏（し）に亞（あ）げる謡（うた）ひ手（て）は橋仔頭（けうしなう）製糖（せいとう）会社（かいしゃ）の日比氏（ひびし）で、是（こ）は大阪（おおさか）大西（おほにし）閑斎（かんさい）
の弟子（でし）として銘（めい）を打（う）つたゞけあつて南部（なんぶ）ではオーソリティー（おほさかおほにし）の一人（ひとり）と数（かず）

へられる。されど同じ観世でも東国と西国とは自ら謡振りが異なるので東仕立の人々とは一寸間が合はないらしい。台南でも一兩年前までは観世に高雄（専売局の）氏あり。寶生に山形（修人）松井（栄莚）等の諸氏あつて折々謡曲会を開かれたとがあつたが、今では此催しも絶体に類れて了まつたが、先達から加藤秀明と云ふ斯道の師範が来て、今では数名の門弟も出来稽古を始める事となつた。氏は岐阜の生れで仕込みは名古屋観世松浦門の出で櫻庭氏とは同門の人である。氏は仕舞もやれば又能もやる。年齢はたしか二十五六の青年だが、咽はたしかなものである。此外に口羽、竹内など云ふ面々もあるが至て初歩の方で今となつては稽古すると云ふよりも寧ろ稽古して貰うと云ふ側であらう。

台南には明治四〇年（一九〇七）前、加藤秀明という仕舞も能もできる指導者がいたが、長く続かなかつたやうである。その代わり、鈴木重義の指導した「高砂観世会」は存在感が強かつた。鈴木重義がいつ台南に渡つたかについてまだ確認できていないが、明治四二年（一九〇九）の可能性が高いと考えられる。『能海』第一号、一九一五年六月一日（四五―四八頁）によれば、鈴木重義の明治四二年十月の社中として、以下の名簿が掲載されている。

●台南に於ける観世流免状下附氏名

台南 鈴木重義

左記の内退会、転住又は黄泉の客となりし惜しむべき人もあるが別に省かず年月順により記載す

（イロハ順）

明治四十二年十月

一、直第 九番習謠

一、同 上

一、同 上

一、同 上

一、同 上

一、同 上

一、同 上

一、同 上

一、同 上

一、同 上

一、同 上

一、同 上

一、同 上

明治四十三年二月

一、直第 九番習謠

一、同 上

一、同 上

林 久三君

大西 道生君

高橋 常吉君

竹本 桃吉君

津國 百松君

黒田菊太郎君

朽木 義春君

矢野 進君

古山 聖君

幕内菊太郎君

越川半五郎君

松本 猪熊君

朝倉政次郎君

(以下次第不同)

岸 隆欽君

半田徳之助君

朽木 義重君

指導者	社中名	所在地	稽古場所	活動時期	備考
桂六平	一音会	台北	会員の家	1902 ～ 1915	一度喜多六平太方に寄寓して学び
	喜謡倶楽部	台北	会員の家 喜謡倶楽部稽古場	1906 ～ 1915	
八戸岩三郎	喜謡倶楽部	台北	会員の家 喜謡倶楽部稽古場	1906 ～ 1915	喜多六平太門下
坂安彌	台北喜謡倶楽部 喜多流地拍子研究会	台北		1915 年頃?	

表2 台湾（台北）における喜多流の指導者・社中一覧（前半期）

一、同	上	鳥居	勝治君
一、同	上	尾形	瀧郎君
一、同	上	古田	力松君
一、同	上	永野	耕夫君
一、同	上	柳下	甚蔵君
一、同	上	吉松	秀彦君
一、同	上	小松	繁吉君
一、同	上	竹内壽衛馬君	
一、同	上	木本	梅吉君
(以下略)			

台北における観世流の指導者は変動が大きく、長く指導した者が少なかったが、台南は観世流「一点張り」と言われ、観世流の存在感が強かった。(表1参照)

(3) 喜多流(台北)

喜多流の場合は、主な指導者の活動展開は観世流より遅かったが、長く継続的に指導した者がいた事が特徴である。『台湾日日新報』明治四二年(一九〇九)三月三十一日「台北の「会」喜謠俱樂部」によると、

指導者	社中名	所在地	活動時期	備考
笠原健	晴雪会	台北		1925年の能楽上演に参加
伊藤六三	台北、屏東、高雄市高等女子学校（倶楽部）、蘆葉会、三井観世会、台鉄観世会、高雄観世会、郵船観世会、海軍羽衣会、清香会（婦人会）、扇友会（仕舞）	高雄（台北など出張指導）	1914～	山階徳次郎門下 自宅に能舞台あり
弘誓較一	鉄道同好会、九阜会、重陽会	台北（基隆、台中など出張指導）	1928～	観世喜之門下
相澤喜三郎	観世会支部（台北）観世会支部（新竹支部）	台北（台中など出張指導）	1929年10月～	
鈴木重義	高砂観世会	台南		

表3 台湾における観世流の指導者・社中一覧（後半期）

台北謡曲界の団体中最も優勢なるは西門外街一丁目（たいほくくわいぎょうのだんたいちゅうぐわい）の喜謡倶楽部なり。八戸、桂の二師匠が専ら教授の任に當り、荒井・金子・小松・木下・柵瀬・松村・松本・安田・長野・高橋（親）・村田・一の瀬・濱口・高石・土屋・松本（眞）等の官民紳士を網羅し、毎月一回月例会を開き、尚他流合同の謡曲会をも時々催すなり。

最初の指導者である桂六平は明治三五年（一九〇二）に台湾に渡り、兼業として「一音会」を組織、指導したが、明治三七年（一九〇四）に総督府の本職を辞職し、「謡曲指南専門」になった。一度東京の家元喜多六平太方に寄寓して学び、明治三六年（一九〇六）に台北に戻り、後に、八戸岩三郎と共に「喜謡倶楽部」を主宰、指導した。台湾喜多流元老でもあり、台湾で発行された能楽雑誌『能海』の発行者、編集者でもあり、台湾能楽の「先駆者」だと言われた。「喜謡倶楽部」は「台北謡曲界の団体中最も優勢なる」といわれた社中だった。

続く、八戸岩三郎は、喜多六平太門下、台湾喜多流元老、喜謡俱樂部等指導、台湾能謡界の「先駆者」だと言われた。

三、後半期における主な指導者（一九一〇年代後半～一九四五）

（1）観世流

伊藤六三（高雄）は、『能楽年鑑』（昭和一〇年（一九三四）版）によれば、明治一八年四月二〇日生まれ。故山階徳次郎門下で、「稽古は台北州四ヶ所、台南州一ヶ所、高雄洲九ヶ所、自宅月四回、特別稽古八回、其他出稽古」にあたり、自宅は高雄市壽町九であった。大正三年（一九一四）台糖（台湾製糖株式会社）の観世流の松諷会に招かれ台湾に渡った。それから三〇年間前後高雄に滞在し、高雄を拠点にして、台北などまで多数の都市で謡曲指導を行い、伊藤六三が指導した名前が分かった社中は「蘆葉会」等十数個がある。また屏東市、高雄市、台北第一高等女学校の倶楽部などの指導も行った。大正一三年（一九二四）に自宅に能舞台造った。

弘誓較一は、『能楽年鑑』昭和一〇年版、（一九三四）によれば、明治一六年七月二八日生まれ。観世喜之門下で、「台湾九皇会を指導。稽古は自宅にて一週二回。月曜木曜」で自宅住所は、台北市大和町三ノ一であった。いつ台北に渡ったかについてまだ確認することが出来ないが、鉄道部同好会は「昭和三年より今の弘誓先生を招聘すること、なり以降、謡曲熱も盛んとなりその謡振りも堅實味を発揮して来た。現在同好会謡

指導者	社中名	所在地	活動時期	備考
大村武	喜多会、喜多会婦人会、台北第一高等女子学校、台北第二高等女子学校（倶楽部）	台北	1922～1945 （台中等出張指導）	喜多六平太門下 自宅に正式能舞台あり

表4 台湾における喜多流の指導者・社中一覧（後半期）



図2 「同好会謡曲秋季大会」『台湾鉄道』
昭和6年（1931）12月より



図3 大村武能舞台、立っている役者は
大村武である

曲部の会員は殆ど四十名を超えんとし」（『台湾鉄道』「同好会謡曲部春季大会記」 昭和七年六月一日、三七～四〇頁）、彼の指導した鉄道部同好会の活動写真がよく報道された。また、彼が九臯会を主宰、指導した。九臯会は当時「昭和時期台湾観世流の代表的な社中」と言われた。当時九臯会の稽古場所は彼の台北における自宅だった。台北のほかに基隆、台中等出張指導も行った。また、弘誓較一の謡曲「鞍馬天狗」が、昭和十二年（一九三七）八月三十一夜に台北から放送されたことから（『台湾日日新報』昭和十二年（一九三七）四月五日）、この時まだ台北にいたことが分かる。（表3、図2参照）

（2）喜多流

大村武は一〇代から台北で喜多流の謡曲指導者である八戸岩三郎について能楽の稽古を開始したが、一七歳の時に東京の喜多六平太に入門し、八年間習い、大正十一年（一九二二）二十五歳の頃台湾に戻り、台北喜多会、同婦人会等を指導、台中等も出張指導した。大正十三年（一九二四）に、台北の自宅に正式な能舞台を設けた。大村武については、拙稿「日治時期台北大村武能舞台研究」（二〇二二）にて詳しく考察した。なお、この自宅跡は、現在「大村武」という名の居酒屋となっており観光名所となっている。台北喜多会

は、大村武が以前の桂六平、八戸岩三郎が指導した喜謡倶楽部と三雲会を喜多会に統合した会である。(図3参照)

四、著名人における能楽指導者

『台湾日日新報』明治四二年(一九〇九年四月二七日)「台北の謡曲界(十)」には、宝生流について「紫雲会」という団体があり、台北に会員三〇余名があったという。また他流と違い、官吏の出が多かったという。

また、観世流・喜多流・宝生流の各流派には、能楽の専門指導者ではないが、能楽指南も行う著名人がいた。まず、下掛宝生流の小川尚義である。

小川尚義氏 何といつても斯道の大家、全島謡曲界に於ては先づ御師匠株は別として氏の右に出づるものはあるまいとは公評である。特に偉い事は謡曲全般に涉つて通曉せられる事と繁忙中後進の誘導指導に熱心なる事で流石の評者も悪口をいふ隙間がないが、由来褒めちぎる事の出来ぬ筆法一ツ難をいふなら前歯が如何かなつて居るのか「サ」の音と「タ」の音が頼

名前	著名分野	能楽における流派	能楽指導分野	在台期間	備考
小川尚義	言語学者 言語研究	下掛宝生流 葛野流大鼓 の達人	謡曲、囃子を指導	1896 ~ 1936	台湾の謡曲界 の「第一人者」 と言われた。
石川欽一郎	画家 西洋画	観世流	謡曲指導	1907 ~ 1916 1924 ~ 1932	
武部竹令 (本名: 竹次郎)	画家 東洋画	喜多流 狂言鶯流	謡曲指導	~ 1940 年	

表5 著名人の能楽指導者

時間	場所	会名	上演曲名	掲示新聞名
1913 年 10 月 27 日	台北 台湾神社	台湾神社大祭	禰宜山伏	「台日」10 月 25 日 『大正の能楽』
1913 年 10 月 31 日	台北	天長節奉祝能楽	早漆	「台日」10 月 31 日
1914 年 6 月 9 日	台北	能狂言会		
1916 年 9 月 24 日	台北 圓山臨濟寺	伊藤氏追悼能楽	間（能八島）	「台日」9 月 23 日
1919 年 10 月 27 日	台北 新公園	祭典余興能楽	昆布買	「台日」10 月 24 日
1924 年 11 月	台北 喜多能舞台	鷺流狂言会発会		「台日」11 月 15 日
1925 年 6 月 10 日	台北 本願寺	鷺流狂言大会	素襖落など	「台日」6 月 9 日
1925 年 11 月 15 日	台北 喜多能舞台	鷺流狂言大会 （狂言秋季大会）	太刀奪、文荷、 骨皮	「台日」11 月 11 日
1927 年 4 月 17 日	台北 喜多能舞台	鷺流狂言大会 （狂言春季大会）		「台日」4 月 16 日
1929 年 4 月 30 日	台北 建功神社武 徳殿	三流大合同奉納 能楽	不毒、禰宜山 伏	「台日」11 月 11 日
1931 年 12 月 6 日		能狂言会		

表6 永久春水の上演、活動記事（「台日」＝『台湾日々新報』）

りなく「候ふ」が「つを
うろう」に聞えるのと無
暗に押へる気味があるの
で苦しそうだ。

と、紹介される小川尚義は明治二九年（一八九六）一〇月に台北に渡り、台湾総督府学務部に勤務、後に台北帝大文学部教授になった人物で、著名な言語学者である。下掛宝生流、葛野流の大鼓の達人でもあった。「小川君は台湾各流の謡曲家を通じての第一人者であるのみならず、東京へ出て同輩では有数の豪傑である」（『台湾の謡曲界』『新台湾』大正三年（一九一四）

一二月一六日）と言われる。

石川欽一郎は著名な「画伯」であり、台湾に在る間に、観世流の行事に参加するのみならず、指導者としても活躍した。台湾の能楽専門雑誌『能海』の第一年第一号に、「能海」の発刊を祝しての文章を寄せている。

小川氏は下掛宝生流、石川氏の観世流と異なる流派であるが、『能海』第二年第三号「台湾能楽界▽台北△」（大正五年（一九一六）三月一〇日）に、

▽喜多流小会 二月十三日撫台街高石忠健氏宅に於て、同流有志及び小川尚義氏、石川欽一郎氏の両氏等集会素謡及囃子等ありたる由なり。

とあるように、喜多流の催しに呼ばれることもあった。

武部竹令は画家であるが、喜多流能楽指導者でもある。野々村戒三『能の今昔』（木耳社、一九六七年）では、京都の堀池社中に「稀に見えた」画家で、「竹内家の人だとかあるいはその縁者であるとか言われていた」（九三、一四二頁）などと記されている。謡曲を巡回教授したこともある上に、台湾で「竹令能画会」を主宰したようである。昭和二年（一九二七）の第一回台湾美術展覧会に「翁」「猩々」という二枚（一对）の能画が展覧、能画「鉢木」が翌年の台湾美術展覧会に展覧された（7）。

五、台湾における鷺流狂言の伝承

鷺流狂言は、明治中期には中央の能楽界から姿を消し、佐賀県佐渡などに残り、山口県山口市に伝えている人

がある事は周知のことである。しかし、日本統治下台湾には、鷺流狂言を伝えていた人がおり、名前は永久春水である。『台湾日々新報』などの記事によれば、彼が一九一〇年代から一九三〇年代の間に鷺流狂言を上演、「鷺流狂言会」を組織、「鷺流狂言大会」の開催を行った。鷺流狂言会のメンバーが数人もおり、前述の武部竹令もメンバーの一人である。鷺流狂言の台湾で伝承されたことは鷺流狂言の伝承史にも加えるべきことだと考えられる。

『台湾日日新報』（大正一三年（一九二四）一月一日）に「鷺流狂言会発会」記事があり、

今回、鷺流狂言師永久春水老の指導になれる同会は、十五日午後正六時より、西門會事務所に於て愈々發会する事となつた。一般の觀覽を希望すと（但し無料）番組左の如し。

末広（北村寒月、永久春水、白石淡水）、神鳴（大村岳水、白石淡水）、因幡堂（永久春水、北村寒月）清水（武部竹令、永久春水）蟹山伏（新田穰一、永久春水、白石淡水）瓜盗人（菅卜石、北村寒月）佐渡狐（藤田天教、菅卜石、永久春水）小舞、仕舞、祝言（福神小舞）

第二回は翌年六月十日午後六時より新起町本願寺樹心館に於て開催され、「觀覽券は新起町一丁目新田東陽堂にて発売す」にあり、有料で開催された（『台湾日日新報』大正一四年（一九二五）六月九日）。同『台湾日日新報』記事に、掲載された予定番組は以下の通りである。

素襖落（永久春水、北村寒月、大村淡水）いろは（新田穰一、北村寒月）痺れ（仁田北水、永久春水）寝音

曲（武部竹令、北村寒月） 芥川（藤田天教、菅卜石） 悪太郎（北村寒月、世良南門、永久春水） 仁王（西村茶園、北村寒月、永久春水） 舞囃子、仕舞、小舞数番。

『台湾日日新報』大正一四年（一九二五）一月一日の第三回「鷺流狂言大会」記事は以下のようである。

来る十五日（日曜日）午後一時より台北市築地町三丁目喜多舞台に於て鷺流狂言秋季大会開催、其番組左の如し。

鼻取相撲（北村寒月、柳井南聲、三木勝水） 太刀奪（谷口波鼓、永久春水、西村茶園）、栗焼（武部竹令、北村寒月） 文荷（永久春水、谷口波鼓、橋本南水） 骨皮（西村茶園、永久春水、谷口波鼓、三木勝水、柳井南聲）

仕舞 竹生島（世良保次郎） 田村（三木勝水）、湯谷（大村武）、殺生石（武部竹令）

『台湾日日新報』大正一六年（一九二七）四月一六日の報道によると、大正一六年（一九二七）四月一七日も喜多舞台で「鷺流狂言大会」が開催された。（表6参照）

六、まとめ

三流派の專業指導者の所在地により、流派の態勢が違う傾向がある。南部、中部は観世流が優勢だったが、北部は喜多流の存在感が強かった。宝生流には專業指導者がいなかったようであるが、社中が存在した。

三派、すなわち観世流、喜多流、宝生流三流が頻繁に連合して行事を行った。たとえば、台湾現地の人々上演した能楽の上演会は、すべて三流派連合して行った。これは一つの流派だけでは役を揃えることができなかったため、これは植民地における能謡界の共通点であった。

注

- (1) 関屋俊彦「雑誌『能海』の行方」『関西大学視聴覚教育』三〇、二〇〇七年三月、六三～六五頁。なお、この関屋論考は、二〇〇五年十二月に関西の能楽研究会「六麓会例会」にて、口頭発表した内容に基づく。また、竹内淳は、二〇〇七年十二月に六麓会例会での口頭発表「雑誌『能海』と小川尚義」で『能海』創刊号が熊本県立図書館に保存されていることを指摘している。
- (2) 齋藤裕一「台湾における能楽の初演について」日中人文社会科学学会編『知性と創造（日中学者の思考）』（二〇一〇年、七七～八四頁。二〇〇九年五月二二日「語言・文学・文化交流と国際交流」国際検討会（会場、台湾新竹市）での口頭報告「台湾における能楽の初演（一九〇五年）について」に基づく。
- (3) 王冬蘭「日本統治下台湾における「能楽第一人者」小川尚義について」『帝塚山経済・経営論集』第二七巻、二〇一九年三月、一一七～一二二頁。
- (4) 王冬蘭「日本統治下台湾における能舞台」『藝能史研究』第二二七号、二〇一九年十月、一二～三八頁。
- (5) 王冬蘭「桂六平と能楽雑誌『能海』」『演劇学論叢』第十九号、二〇二〇年三月、一～十四頁。
- (6) 王冬蘭「日治時期台北大村武能舞台研究」『戲劇学刊』第三四期、二〇二一年七月三五～五九頁。
- (7) 「猩々」「翁」財団法人陳澄波文化基金会 ホームページ <https://caifute.com/>（最終閲覧二〇二五年一月九日、識別号 CA01_009_P004_149_e.tif「三輪」「日本人物」「国立歴史博物館」「典藏資料検索」による）

II
資料編

川下
俊文

1 日本統治下台湾における淨瑠璃・義太夫関係記事

【凡例】

一、本編は、『台湾日日新報』『漢文台湾日日新報』から、淨瑠璃、義太夫関連の記事を編年体集成・編集したものである。各記事の概要や、分類については末尾の記事一覧を参照されたい。

一、『台湾日日新報』は、明治二十九年（一八九六）六月一七日に『台湾新報』として創刊したあと、その後身として、明治三〇（一八九七）年創刊の『台湾日報』と合併し、明治三二年（一八八〇）より『台湾日日新報』として創刊。昭和一二（一九三七）四月一日まで発行された。『漢文台湾日日新報』は明治三八年（一九〇五）～明治四四年（一九一一）発行である。一、新聞は、台湾国立図書館の端末でのみ閲覧、ダウンロードできる検索システムより収集したPDFデータに基づき、国立国会図書館蔵のマイクロフィルム、有料電子コンテンツ「漢珍知識網・報紙篇（台湾日日新報＋漢文日日新報）」（漢珍数位図書 <https://www.tbmc.com.tw/>）を補助として用いた。

一、新聞記事の翻刻にあたっては、次の要領でおこなった。

（1）改行、字空け、仮名遣いは原文の通りとした。

（2）字体は新字体に統一した。

（3）ルビ、ルビの不統一、誤植は原文通りとした。

例…北門街 正しくは北門街

例…娘義太夫 娘義太夫 娘義太夫

仮名遣いは原文通りとした。

（4）読みやすさの便宜上、句読点、作品名に「『、セリフ等には「」」を補った。原文に付されていた句読点、「」等もこの基準にしたがって変更した箇所がある。なお作品名は、略称と段名を含めて一括して『』に入れた場合がある。

（5）踊り字（、、、々）は、正則に則して改めた。

例…あ、エ、色々

（6）二字以上の踊り字は開いて翻刻した。

例…それぞれ、大きい大きい

（7）記事の主題と副題の間は基本的に／でつないだ。

（8）編集者の注記は※または（ ）内に記した。

（9）印刷の不鮮明、版面外の記事等の理由で、確認できない箇所がある。難読字は■とした。また記事の一部が確認できない、あるいは一部が確認できない可能性がある場合は、（版面切のため不可読）とした。

一、記事取集にあたっては、台湾国立図書館の端末内データベース

スの検索システムに「義太夫」「浄瑠璃」のワードで検索し、抽出された記事を中心としている。

一、翻刻は川下俊文が行い、中尾薫が句読点を補い『「」を変更するなどの体裁を整えるための編集を加えた。

一、不鮮明で判読不能な箇所も少なからずあり、本冊子編集に際する誤りなどがある可能性がある。使用に際しては必ず原典を確認いただきたい。

(1) 明治

〔明治28年 (1895-11-8) 日本による台湾統治が開始〕

□明治29 (1896-07-16) 『台湾新報』

●女義太夫 北門街「龍亭の阿波の娘浄瑠璃は中々大入りなり

□明治29 (1896-08-16) 『台湾新報』

●娘浄瑠璃 竹本一座は去十一日夜より、又々北門街「龍亭に興行人形入りにて景気好し

□明治30 (1897-07-15) 『台湾新報』

●素人浄瑠璃会 一昨日午後府前街丸三商行に於て、天狗連の浄瑠璃会ありたり。語り物は『鎌倉三代記』(喜楽)、『大功記尼ヶ崎』(友魚)、『亦助住家』(語る勇)、『千両幟』(松楽)、『合邦辻』(可水)、『寺子屋』梅枝等にして最と好評なりき

□明治31 (1898-01-16) 『台湾新報』

●鍾龍の娘義太夫評 何日聴ても聴飽きせぬは浄瑠璃なり鍾龍といふは大阪清津橋辺の娘義太夫席に出たとか。慥かに呂昇をしのぐの腕はあるべし。鍾龍面は二の町殊に鶯鳴かせた時代を通り越した様なれば、娘義太の主眼目的としては鍾龍落第することならんか。其芸にかけては兎に角、ゑら者なり。此人余りに顔を振り廻はすの癖あり。張紙の虎の如しとの評あり。元より仕憎き語物を出して無難に遣つてのけんと云ふ謀反なれど、每晚の出し物、皆それぞれの瑕ある様なり。併し、そこは女の難有さ。何がなんでも大受なり。此頃幸亭にて、同人の『阿漕浦』を聞きたるが、これは十八番には非ざる様子。思ひきつて声を出すこと、愛嬌此上なし。偕て『平治住家の段』の中程より、「かゝる嘆の中へ庄屋を案内に打連れて」に始ま

り「次郎造門口から」は俄に調子荒なる所今一きわなり。「傷持つ足の」より如何にも平治の胸中左もあらんと思はる、

「顔打眺め」より調強くなり「成程こなあじや」よりの道化はたしかにこたへたり。平治の「アコアコア人違ひでござんか」

より奔流の岩に激するが如く「そりや、だうあつても、あの知らぬか」より「屋さがし」のところまでよし。「柄に手をかけ」

より次郎造の「ウハウハウハ」の笑ひ声大きい大きい。「互の切先上段下段」の所最少しと思ふなり。「自業自得とあきらめて」より「たのまれてまで」まで泣かせさうなり。凡て

次郎造が名乗合をなしてより、次郎造の詞の変調、それより庄屋の来りて後、俄に又元の語調に変はりしところ、故意なら

ず。此浄瑠璃は一体茲処と云ふ間場なく、次郎造が身変りにたつのなれば、只平治が次郎造に頼む所で一泣かせする所なれど

も、鍾龍には寧ろ悲と云ふより他の喜と云ふ方の出し物がよからうと思ふ。只語る内途中で三行か四行飛ばして仕舞ひしは

不都合なり（はなふさ）

●明治31（1898-03-31）『台湾新報』

●台北のもろもろ △義太夫語り 流してあるく義太夫語り

呼び来んで一番呻らせんとせは、一段一円をはづも事覚悟せざ

るべからず。一段一円の義太夫さへ、ハシオツテ満足には語らず。テン普拉クイタイ、即ち新内は一だん五十銭なり

●明治31（1898-05-08）『台湾日日新報』

●新竹通信（五月六日報） ▲寄席 城内後車路の元榮亭といふ料理店跡へ寄席を設け、昨五日より女義太夫、加留口、昔噺し、新内音曲噺の諸芸を演せり

●明治31（1898-06-07）『台湾日日新報』

●共楽会 共楽会は去る土曜日の夜、同会場に催されたり。例に依つて立食の饗応あり。余興には竹本八重吉一座の女浄瑠璃と、桂寿、吉川虎丸の落語講談ありて、午后十時十分散会したり。此会は従来になく寂寥しかりしかど、竹本八重吉一座の女浄瑠璃にて頗る景気好かりき。梅虎の『千代萩の御殿』と八重吉の『お駒才三白木屋の段』は申すまでもなく、八重吉の『おしゆん伝兵衛堀川の段』、さるまわしは妙々といふの外なし。聞く処によれば同一一座は此度の台南丸にて渡台したるよしにて、船中偶然共楽会の塚本幹事に知られ、今開始めて同会に出席したるなりとぞ。道は幹事殿のお眼鏡、天晴と申す外なし

【明治31 (1898-07-17)】『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃温習会 昨日午後六時より、府直街阪友亭に於て、梅四、可水、友魚などといへる素人浄瑠璃の温習会ありたり

【明治31 (1898-09-13)】『台湾日日新報』

●十字館の替狂言 本日は俄『平和の仇討』『捕へて見れば主人なり』、浄瑠璃『松王館の段』(梅虎)、『幡随院長兵衛』(八重松)、『千本桜すしやの段』(八重吉)

【明治31 (1898-09-17)】『台湾日日新報』

●本日の共楽会 本日午後六時より淡水館にて開会する共楽会は、軽口(正子、米恭)、落語(朝遊、文字助)、手躍(忍夜恋の曲者)、吹寄(福助、綾子、地方金八)、音曲清元(吾妻おゑん)、義太夫(玉すし鈴八)、琴(内藤モト)。尚ほ申す大寄なれば、家族携帯の上出席ありたしとなん

●小嶋屋の座敷落成 水災の爲め大破損を生じたりし六館街小嶋屋は、去日来修繕中の処漸く工事落成し、旧の如く営業する由

●十字館本日の芸題 新作道化俄『無銭遊興』、同浄瑠璃『おしゅん伝兵衛堀川の段』、浄瑠璃は『蝶花形八ッ目』(梅虎)、

『彦山権現六助住家の段』(八重吉)、『三十三間堂平太郎住家の段』(八重吉)

【明治31 (1898-10-14)】『台湾日日新報』

●淡水館に於ける上長官送別会 既記の如新任西部都督参謀長楠瀬大佐、同第四師团附池田大佐、同教導团长小畑大佐、同大阪砲兵工廠附南部少佐、松山衛戍病院長に転ぜし松本軍医正、熊本兵器支廠長となりし大野少佐、及び同歩兵第三十九聯隊第一大隊長中村少佐、歩兵第四十二聯隊第三大隊長に転ぜし田辺少佐、其他尾上、弘岡、島等の各少佐等の爲めに官民一致して催ふしたる送別会は、予定の如く一昨日午後五時より淡水館に開かれぬ。会員は四時過ぎより続々来会し、四時半に至り虎丸、誠玉等の講談あり(このあと記念撮影・開会式・送別挨拶あり、翻刻省略) 夫れより宴に移り献酬談笑し、八重吉の浄瑠璃等ありて、一同歛を尽して散せしは午後七時過ぎなり。此日は児玉総督始め立見、木越の両將軍以下陸海軍將校、其他文官民間紳士、約二百名来会し、大倉組の寄付せるすし店には、吾妻の芸妓仲居等周旋し、文武廟街恵良氏は写真の撮影を寄付したりと。

□明治31 (1898.10.20) 『台湾日日新報』

●本日(ほんじつ)の十字館(じくわん) 新作(しんさく)道化(だくわ)俄(が)『交際(かうさい)家(か)の大失敗(おほしくじり)』

新作(しんさく)音曲(おんきょく)俄(が)『打(う)つや太鼓(たいこ)越路(えちろ)の獅(し)々舞(まひ)』、女浄瑠璃(おんなじやうるり)『菅原(すがはら)四段目(よんだん)寺子屋(てらこや)の段(だん)』(梅虎(ばいこ)、盛衰(せいせき)記(き)三段目(さんだん)逆櫓(さかど)の段(だん)) (八重吉(やえきち))

□明治31 (1898.10.21) 『台湾日日新報』

●台北(たいはい)の諸興行物(しよきやうぶつ)(つゞき) 之(これ)より三十年(さんねん)五月(ごがつ)、即ち予(すは)の

稱(しょう)して在(ざい)台北(たいはい)内地人(ないちじん)が永住(えいちゅう)的思想(しきそう)の稍々萌(も)じたる当時(たんにじ)より今日(こんにち)に至(いた)るまでの諸興行物(しよきやうぶつ)を列挙(れいこ)するに先(さ)だち、興行(きやうぎやう)の舞台(ぶたい)として同年(どうねん)十二月(じふにがつ)西門外(せいもんがい)街魚市場(がいぎよしちやう)に台北座(たいはいざ)建築(けんちく)せられ、文武廟街(ぶんぶくでうがい)にも今の幸亭(さいてい)の設(しやう)けられ、越(こ)えて本年(ほんねん)の四月(ごがつ)過般(くわはん)暴風雨(ぼうふうう)の砌(せき)破壊(はくわい)したる台北座(たいはいざ)の棟上(むねあ)げあり。是(これ)と前後(ぜんご)して北門街(ほくもんがい)に十字屋(じふじやうい)なるもの専ら興行物(きやうぶつ)の席(せき)に充(み)てられたりき。而(しか)して如何(いか)なる種類の外題(げだいい) 又は出物(だしもの)が公衆(こうしゆ)を娛(たの)しめたるかを見るに、前の台北座(たいはいざ)には成駒(なりこま)一座(いざ)の演劇(えんげき)あり。后(あと)の台北座(たいはいざ)には愛沢(あいさく)一座(いざ)の演劇(えんげき)を興行(きやうぎやう)し、幸亭(さいてい)には落語(らくご) 浄瑠璃(じやうるり) 又は清元(きよもと) 常磐津(とこはづ)なるものあり。其他(そなた)右(みぎ)の興行(きやうぎやう)に前後(ぜんご)して、艫舦(かぶつ)に成駒(なりこま)が乗込(のりこ)み、淡水楼(たんすいろう)の傍(そば)に一芝居(いしげ)打(う)ちて、大(おほ)に九州拔天(しゅうしゅうはつてん)の魂胆(こんだん)を寒(さ)からしめ、新起街(しんきがい)には輕業足芸(かるわざあそび)の小屋掛(こやがけ)を為(な)して、内地人(ないちじん)は勿論(もちろん) 土人(どじん)に

も大(おほ)に当込(あてこ)みたるもの等(とう)、夫(そ)れ相応(さうおう)に人々(ひとびと)に娯樂(ごらく)を与(あた)へし。然(しか)れども、当初(たうしゆ)舞台(ぶたい)寄席(きせき)の出来(でき)たりしときは面白(おもしろ)半分興(はんぶんきやう)が、りつ、木戸口(きどぐち)を潜(ひそ)りし者(もの)にして、扱(さて)は引幕(ひきまく)の一つも相談(さうだん)せられ、花びら鎮(はなびらちん)の輕(かる)い重(おも)いの詮義(せんぎ)するやうに成(な)りて、衆人(しゆじん)の耳目(じもく)大(おほ)に贅沢(ぜいたく)を生(せい)し、琉球(りゅうきゅう)菰(こ)の敷物(しきもの)は赤毛布(あかけと)と成(な)り、棧敷(げんき)の欄(らん)にも赤物(あかもの)尽(つく)し、誰(たれ)さんゑ某(な)某(な)よりと進上(しんじやう)されては出鱈目(でたらめ)の捨台詞(すてせりふ)や昔噺(むかしばなし)の落(おち)で笑ぬやうになり、次第(しだい)次第(しだい)と研究(けんきう)に研究(けんきう)を積(つ)みて漸(やうやう)く今(いま)の情勢(じやうせい)と成(な)りたり。即ち八重吉(やえきち)一座(いざ)の女義太夫(おんなぎだいふ)が六七月(ごわつしちがつ)に幸亭(さいてい)に頭(めづ)はれてより、万緑叢中紅(ばんりくそうちゆうかう)一点際立(いっけんさいたつ)つこと滅法界(めつぽうかい)となりしより、幸亭(さいてい)に行(い)はれつ、ありし文字助(もじすけ)一派(いぱ)の落語(らくご)なるもの、府前街(ふぜんがい)の浮れ節(うくれせつ)を初め台北座(たいはいざ)の壮士(さうし)、遽(さうし)に転(うた)た顔色(がんしよく)なきまでに立至(たちいた)りき。而(しか)して台北座(たいはいざ)倒(たふ)れたる前後(ぜんご)に俄師正光(がしせいこう)、米茶(まいちや)の一派(いぱ)が京都下(きやうとくだ)りを名(な)として十字館(じくわん)に御機嫌(ごきげん)相伺(あひうか)ひて、八重吉(やえきち) 朝遊(てういう) 湾十郎(わんじちろう)、文字助(もじすけ)も亦(また)これに加(くは)はりて、今日(こんにち)にては台北市中(たいはいしちゆう)興行物(きやうぶつ)としての真価(しんか)、悉(しよ)く十字館(じくわん)に蠟集(ろうしふ)せる者の如(ごと)し。以上(いじやう)上述(じよ)ぶる處(ところ)を以(もつ)て見るに、城(しろ)の内外(ないがい)に依(よ)つて大(おほ)に其興行物(きやうぶつ)の性質(せいしやう)を異(こと)になしつ、あるは事實(じじつ)にして其発達(はつたつ)の程度(ていど)も亦(また)同じく、城(しろ)の内外(ないがい)に拠(よ)つて其度(そのど)を異(こと)にせるものなきにあらず。然(しか)り極言(ごくげん)すれば城内(じやうじん)は城内(じやうじん)にして、新起街(しんきがい)艫舦(かぶつ)は新起街(しんきがい)艫舦(かぶつ)らしく何れも興行(きやうぎやう)其者(そのもの)の趣(おもむき)を存(ぞん)せざるなし。而(しか)して其興行(きやうぎやう)もの、客筋(きやくぎん)は

如何。上流か中流か將た又下流社会に迎へられたるか。八重吉の淨瑠璃を除く外は上流は愚か中流社会の人衆にすら表木戸を素通りさるゝの有様あり。是れ芸に堪能なきが第一の原因にして、第二は劇場、又は寄席夫のものが不潔なりしとに依れるものなり。然らば下流社会にのみ容れられたるかと云ふに、是も亦少し其道に堪能なるものは只馬鹿鹿として鼻の先で笑ふのみなれども中には一概にも參らずして、見馴れ聞馴れの眞面目が度重なるにつけて、即ち今日の御客となれるものを知らは芸人たるものも誠に心細き次第ならずや。然り台北にして尚ほ如此發達の程度にては実に残念の次第なるが、中には台北在住の内地人なるものは、全国より種々の人物の落ち合ひ來れるをも覺らで、只上方風か、若くは九州流を以て客を取扱へる傾あるは実に舞台上のもの、尤も注意すべきものなるべし。ひとり幸にして夫の共樂會が四月に起りしより、其余興として種々の演芸を演ぜらるゝが故場所柄と云ひ幾分芸人の勉勵する所より兎も角中流以上の娛樂場(尚同會にも希望は数限りなきも)たるを得しこと此上もなき幸なりけれ。因つて思ふ、中以上は共樂會以下は現今の寄席に出掛る様にして、後日種々の名人が渡合し來るの日にあらずんば、何すれぞ快呼するを得んや。終りに臨みて斯道の有志に望ましきは、夫の台北座を再び

建築して芝居、手踊、其他諸種演芸の舞台たらしむことにこそ

(雀の丞)

●丸中温泉の増築披露 新起街の池畔に数寄を悉くして建築したる丸中温泉は、今度又々広間小間等の数棟を増築し、來る二十三日落成式をなす由にて、当日は平生の顧客を招待し園遊會、及び芸妓手踊等を催ふして興を添ふべしとなり。相変らず繁け繁け御運びあらまほしく、主人に代りて斯くなん

●本日(今日)の十字館 新作道化俄『疑心暗鬼を生ず』、音曲俄

『打つや太鼓越路の獅々舞』、女淨瑠璃は『一の谷三段目熊谷物語りの段』(梅虎)、『金比羅御利生記百度平住家』(八重松)、『三日太平記 松下嘉平治住家の段』(八重吉)

□明治31(1898.10.26)『台湾日日新報』

●共樂會の余興 今夜 淡水館に開かるべき共樂會 余興は

輕口(正光、米茶、清元、吾妻の君子)、手踊(同上)、淨瑠璃(艇檢の小高)、落語(灣十郎)、蓄音機(前島雜貨店)より寄付、福引等なりと聞く。例に依つて家族は勿論、知己の人々をも同伴せられたしとの事なり

●今晚の十字館 新作道化俄『高山國雜徒のぼんちえ』大芝居五ツ幕、新作人情俄『美人の薄命』一幕『仙台萩御殿場』(梅虎)、

色娘昔八丈 白木屋の段』（八重松）、『二の谷熊谷陣家』（八重吉）

明治31（1898.10.28）『台湾日日新報』

●共楽会 一昨夜を以て淡水館に開きたる共楽会は雨天にも拘はらず頗る盛会にして、来会者無慮百名に達し、就中艦檢及城内檢の顔揃ひとて、錦上更に花を添え、殊にまた前島雜貨店の蓄音器、及最後の福引などは近來になき大喝采なりき。各歓を尽して散会したるは十一時にして、例よりも舞台の面白かりければ、雀の丞が物したる一口評を左に

▲共楽会余興評（雀之丞）

共楽会もおひおひと進歩して、舞台上に上る連中も一方ならず勉強すること感すべし。殊に今回の余興に至りては、何れも先づ近來になき上出来なりと云ふも可なり。今雀の丞が目撃したる処を大ザツパに評せんに、最初正子、米茶の道化、両国川開き遊山ぶね、十字館で平常見る両人とは打つて変つての出来はえ。難を云へば江戸弁に難はあれども、落も好く体度も可かりし。次に艦檢の小高の淨瑠璃『三十三間堂棟の由来 平太郎住家より木遣音頭まで』、無事に勤めし追は舞台馴た天晴れさと申すと増長するから、一つ二つ批難せむに、第一腹のたよりなき。第二に優長すぎて氣拔の

する個処あり。尤とも両三日前まで病氣の身体を無理に勤めたよしなれば是非もなし。『木遣音頭』の落着加減は氣に入りましてぞ。次には城内檢の君子（前号に吾妻としたるは誤り）が清元『四君子引抜きむつの玉川』、上調子同じ檢番の小升、三味線清元寿助、初めからの美音に加えて美しくさ。「ドウだえ君」と鼻高うした二三の紳士もありたる筈。「桜かざして」から「風のまにまに」あたりの嬌音さ。三味線も「雪されて」から「さらす」の前後の妙に練へし腕前は、追に三浦屋の大將と申します。其次に朝遊改め灣十郎の落語、殊の外奮発したから一段人を笑はせぬ。此調子にていつも遣つて貰ひたし。又其次には君子、拍子の舞「しのお夜」、黒助、小吉の地にして一通りなりし。扇の手も無難なりき。此拍子近來おひおひ上品になり、総ての素振が上りたるやうに思はるゝが、折角勉強が第一。その跡は残夢庵窓雨の趣向にかゝる福引となつて、百人首の上の句に因みたる下の句の景品、面白面白。高幕もらつて赤面する紳士あれば、三度笠いたゞいて笑ふ白拍子など御愛嬌たつぷりも、皆幹事奔走の功德かや。嬉しく一夜を楽みたり

●共楽会の余興評「食物見立」

いざ吾れも意地穢なき食物見立てに共楽会の余興を評せん。

素人評の一筆を刺身のつまとも見玉へかし

二和加 薯沢山の薩摩汁「ドブロク」、あるは腰掛的に升酒

の肴には結構ならん

小高の淨瑠璃 淡泊とや称せん。甘ひとも不甘とも評しやう

なき「刺身の妻」

君子の清元 玻璃皿に盛り水菓子になん見立て侍らんか

同三浦やの三味線 浣澌として磐上に躍り出でんする鯉の

「生造り」のことし

湾十郎の語落 薯だいの「さんとな」とも見んか。女小児

は健においしいよと賞美せん

蓄音器 洋食後の菓物、結構でがす (はまのや)

●本日の寄席 十字館は新作道化「女房の一心」一幕、いぬ

芝居五幕、女上るり「忠臣蔵八ッ日本蔵下屋敷」(梅虎)「お染

久松野崎村の段」(八重松)「玉藻前二ッ目道春館の段」(八重吉)

幸亭は「忠臣蔵六ッ目」(才吉)「伊勢音頭」(小文字)「三勝半

七酒屋の段」(春登代)人情噺(しん喬)「梅川二の口村(歳八

重)「若旦那遊山話(万朝)「忠臣蔵三ッ目」(鐘龍 懸取万才(文

字助)さか様踊(正玉)

□明治32 (1899-02-07)『台湾日日新報』

●基隆通信(二月四日発) ▲寄席の大入 当地寄席たる五

光亭に於ては、去廿九日より向ふ十五日間、引続き講談、

義太夫、新内、淨瑠璃の興行中なるが、就中松林伯寿の講談、

金蝶の義太夫等は好評判。毎夜大入りなりと云ふ

□明治32 (1899-02-10)『台湾日日新報』

●今晚の十字館 新作道化俄「三笠山」同人情俄「浮世の輕

業」浄るり「千本桜すしやの段」(梅虎)「伊勢音頭油屋の段」(八

重松)「古手屋八郎兵衛古手屋の段」(八重吉)

□明治32 (1899-05-09)『台湾日日新報』

●淡水館の例月会は既記の如く、去る六日同館の二階にて催さ

れたるが、定刻より官民の縉士は令夫人、令息、令嬢を携えて

参会し。左しに宏き楼上、立錫の地なく、其数無慮、

二百五十余名と註せられぬ。余興三遊亭万朝の滑稽咄は、日頃

白き齒も見せざる厳めしき顔を解かしめ、西川とく、西川楽丸

の清元「種蒔三番」は老鶯の春を惜む風情あり。西檢の流行ッ

妓、お艶が北州の舞は其綺麗なるに、一同を酔はしめ、ヒーロ

の箱にてマチを摺る紳士あるを見受けぬ。加代、春助の歌、

愛吉、雛助の三味線いづれも日頃の腕前を現はし、「とんぼの

浦島は花やかにうつ、白浪」といふ処より鼓這入りて、一層興を添え、かよ、愛吉の唄、春助 雛助の三味線 流暢波の調に通へり。染分の社杯、唄見台等は、今回の余興の爲めに新調せるらし。美根登の源氏ぶし、『葛の葉の子別』は関東人の耳に新らしく、竹本清登太夫の浄瑠璃『梅忠』は非常の喝采。助六、金八、あや子、福助、金丸の五人女、流石に当夜の見物なり。小半、愛吉の地方手馴たもの。楽丸、とくの歌浄るり、苦勞人を泣かせぬ。午後十一時散会せり。因に記す。同日より、西洋料理明治楼は淡水館内の酒保を開業し、御手輕に廉価に客の需めに應ずるよし

●裏口からの淡水館余興評

万朝人情話は東京語に相違な

い言葉尻に「ナカイテンデ」といふのが語落口調に外れて、如何にも台湾落語家然たり。清元は麒麟も於て驚馬に及ばずとやら、声のつゝかざるは是非もなし。西川師匠の三味線、小憎いほど鮮かなりき。北州は三味線可成御苦労。語りは大阪清元と聞受候。踊りは先づ無難。しかし色気沢山の処商売柄なれば是もよしとすべし。浦島三味線も語りも長唄に清元をこねまぜた様で、是が矢ッ張り芸者咽喉といふ処ならん。踊りは先甘い方だ。面冠る処少し間が抜けたけれど、それからの芸で差引すれば、兎に角上々吉とまで行かぬも上吉上吉。義太夫、

老功骨折つたものなり。五人女は何と評せんか。先づ大阪千日前、東京浅草公園の見世物小屋にて見物せし心地す。それから暮合の囃しは手品か軽業の様な心持がする。序にいふが芸者は芸のある者斗り始終引張り出して、演せるよりは芸のない者を舞台へ出して、少々恥をかいて貰ふと将来芸者の改良、つまり奨励になるから、此献策は何麼であらうかえ。(娼法芸者 反対老人)

□明治33 (1900-03-27) 『台湾日日新報』

●淡水館月例会余興評 去る廿四日同館に催ふしたる月例会

の余興を短評すれば、最初に定まりの(万朝)の落語は、席亭などにて演ずるよりは入念に勤め、次は『種蒔三番叟』引抜き雀踊りにて、(小石)の翁は台湾へ来てから九四年初めての踊とてどうやら人目を惹き、(若清)の三番叟、式の如く、(小政)の千載は儲け役のところにコテと塗り立たれば、いつもの小政とは思はれず、引抜き雀踊りの奴姿は意気なりき。但し奴姿の小石の首は抜けあがつた様で異様の感ありし。(長吉)の唄、義太夫声まがりて嬉しく、(君勇)(延とし)の三味線一人は師匠一人は腕自慢、悪るからう筈なく、(光作)(愛菊)(石次)(政蝶)の鳴物、又よし。次は(竹本大枝)の浄る『大功記

十段目、是れは大枝が十八番又ありて八重吉に劣らぬ処あり。其次は出替り引拔『花岡山』。(石次)と(小奴)の壮士踊り

大喝采にて、看客より最う一ツと所望され、石次は再び

『日清談判』を演じぬ。之にて幕となり次は(岡本亀鶴)の

新内『東海道膝栗毛』、諸諺滑稽の内にも妙味も失はず。次は

『不老門』、是れは昨年月例会に舞はせんとて、内地から衣裳

等も取り寄せ、(愛玉)(政蝶)等に舞はさんとせしに、一は

死亡し、一は入院せし折とて、其儘となりしを今回出したるに

て、曠衣裳、能舞台のかき割りに(小政)の王本行の足どり

感心感心。(若朝)の鶴、(政蝶)の亀、綺麗とより外なく、(長

吉)の唄、謡ひ声立ちしも寂に乏しく、(若清)の三味線難なく、

(石次)(光作)(延とし)の鳴物達したるものなり。(玉田誠玉

が講談よく喋りつゞけ、『子の日』『引拔玉兎』は(愛菊)(小

せい)(石次)(若石)にて何れも派出所に賑はしく、兎となつて

舞台より飛出で、やがて餅搗くところ可笑しく、白の中より

手巾を出して看客に呈したるなど、愛嬌ありし。此夜は男の

看客少なかりしも、令夫人令嬢をはじめ婦人の来会者八部通り

を占め、十時十分、散会せり

●浄瑠璃温習会 昨日前十一時より艸艸○源座に於て

竹本八重松の会主にて、艸艸各楼の芸娼妓、及び素人浄るりの

温習会を催したりと

□明治33(1900.09.28)『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会 基隆及び当地の天狗連は、今回浄瑠璃

温習会といふを催はし、府前街の吉川亭にて一昨二十六日より

開会中なるが、来る三十日までは木戸銭入らずなりと云ふ

●新起亭今夜の語物 『御祝儀』(入登太夫、『荳札掛』(豊

鶴、『日高川』(若玉)、滑稽落語(竹馬)、『小(四字不明)心

中』(亀鶴)、講談『馬術三幅対』(誠玉)、『国分寺三庄太夫』(小

若、音曲落語(文字助)

□明治33(1900.10.05)『台湾日日新報』

●新起亭の語物 『御祝儀』(入登太夫)、『お品福助』(豊鶴)、

『五右衛門』(若玉)、落語(竹馬)、『鏡山尾上館』(亀鶴)、新

作噺(文字助)、『かさね土橋』(小若、講談『義士銘々伝』(誠

玉)

□明治33(1900.11.09)『台湾日日新報』

●吉川亭浄瑠璃 本日より五日間興行するよしにて、今晚の

語物は、『菅原伝授手習鑑四ツ目』(錦石)、『三十三間堂棟木由

来（柳枝）、『加古川本蔵下屋敷』（十三）、『伽羅先代萩』（相生）、

『忠臣蔵六ツ目』（竹本二三五太夫）

●今晚の新起亭

『御祝儀』（入登太夫）、『白石囃』（豊鶴）、『浦里託住居』（若玉）、『三日太平記』（大枝）、『千両幟続き』（誠玉）、

『由井浜千軒長者』（小若）、落語（文字助）

□明治33（1900-12-12）『台湾日日新報』

●淡水館浄瑠璃会一口評（秀八）の太十声が三絃の蔭に隠れ、姿が簾の蔭にかくれて、見とれぬと聞取れぬ処、却て難有

く、露払の任務を立派にしてやられしは御苦労千万に存する。（春路）の『三浦別れ』押しも無ければ張りもなく、地声の一

本筋、譬へば飴を引きのぼしたるごとく。御座敷で好ちやんに聞かしてもせよなら、この甘たるさ、乳呑み声も愛嬌あれど

舞台の上では何んとやら、乳母が入りさうなり。定めて御師匠さんの御骨が折れた事であらう。（歌吉）の『平太郎住家』ツ、

しりとして、見台に向ふての語り口、随分目眦を垂下た客もありし様見受けしが、兎角の評を試みるは大人気無き心地ぞする。

（綾子）の『三十三間堂』の下巻、御師匠さんと阿母さんの御丹精、中々に好味もの。慥に義太夫として聴き取られたり。

（留吉）の『琴責』さして評する迄もなし。「当時鎌倉の厳命に

随ひ」ト天井を瞰んだオチヨボの眼に似ず、オチヨボならぬ口

から囁々迸る声、之れが常磐津なら猶よからうと思はる。併

し芸妓の浄瑠璃としては別段批難も致難からむか。（つや）の

琴、胡弓は何時もながら精華々々。（幾久）の『利生記』、流石

は場数の巧者だけに喉も慥かなれば語り廻しもよし。憂も慥に

受け取られ、自分にも大層氣取つて居たりし。（小勇）の

『判官切腹』、流石は義太夫を呼びものにするだけ、夫れだけどつ

しりとして聴き答ありたり。見台に向ふて悪恐もせず落着き払

つての語り出し、芸者の温習とは見へず。「苦ふない近ふ近ふ」といふべきを余りに急込むで、「近ふない近ふ近ふ」とやられ

しは由良の助が戸迷ひさうなり。兎に角是れなら木戸銭取つても余り不人氣は見ざるべし。大切り（惣掛合）の『忠臣蔵茶屋場』、

人形箱打開けし様にて奇麗なり。兎角の評すれば役割役不足の論が持ちあがる故、先づ初日はこんな事にして明日の紙上に

二日目の評を書かう

□明治33（1900-12-13）『台湾日日新報』

●浄瑠璃温習会一口評 初日の評をしたから行菟り上二日目の評をせねばならぬ訳となつて、台所の味噌桶は勿論頭の脳味噌にも防腐剤をふり撒いて、出掛けて見たらイヤハヤ非常の大入

で満場は煙草飲む隙間もなし。初日の残りとして二日目へ廻つた花吉、蔑しんだ割合に甘く狐火に聞き人までを迷はせたり。只平たき口から平打の声が行義よく繰り出るため、高低緩急に乏しい難あり。市六の『新吉原』は大坂ものの、奥州訛り、物の本を読んで居るやうな心地す。為八の『鈴が森』、引かれもの、小唄の如し。おえんの『千代萩 御殿場』、最もはまり役。彼れ位ひ語られるなら病院を自由退院しても夫れ丈の埋合せはつくべし。住二の『蝶花形』言葉のまづい割合にさはりの所は非常によかつた。小半の『梅忠』意気に過ぎ、ヤアー新内と声かけたるは適評ならん。か代の『二度目』、言葉凡てかよはし。されど之れといふ難なく、三味線老梅八、殆ど御腕前御見上げ申候。夫れ丈の腕を持つてこそ大勢の妓が引ませ申すべし。成駒の『三日太平記』、初の内は声ふるひ、何となく耳に蒐りしが、中程からはズント落ち付き、惜しい惜しいの声沸きしも冷評斗りにあらず。しかし極甘い処ると極まづい処あるは是非なし。住栄の『六助住家』、四畳半の浄瑠璃だとケナして居たが中々以て然らず。既に浄るりの態に成つて居て骨があつて寂があつて悔りがたし。すゞめの『紙治』艶物には大き過ぎる位の声ありしも、惜い事には朗読的になつて居る。大切の『油屋』に成駒の万野が住二のおこんを呼ぶ時、何を思つて居

たか住二がぬかつて居るを成駒は五六度続けさまに呼び、住二に目配せしたは返つて実際に近かりしなり。とにかく俄稽古にしては凡て上出来とほめて置くべし

□明治34(1901-01-13)『台湾日日新報』

●義太夫の行旅病人 イヤもうお尋に預つて面目次第もない。今身の上、『朝顔』の『宿屋』ではふりませぬが私も腹からの非人ではなく、以前は矢ツ張り伊予の松山で人に知られた釀酒家でふりましたが、下手の横好きとやら申す通り、糸にも乗らぬ浄るりが飯より好きにて、三味線弾を家へ呼び明けても暮れても唸統けて店の商売は泰公人任せにしておいた為に、さしも手堅い身代を滅茶滅茶に潰して退けたが尚浄るりの熱がさめず、ナアー二店の金は一文なしになつても是丈浄るりが語られたらば、何処へ行つても飯は喰へると一廉語れる積りで、我から和歌太夫と名乗つて黒人の仲間入をせうと思つた処、一段聴いて皆が吹出し、これや和歌太夫ではなうて馬鹿太夫ちやと冷かされ、住みなれた松山に居る事も出来ず僅の家財を売代なして、世にある時は蒔絵したる見台の上で調子を取つた張扇も、今は骨斗りと瘦せほうけて台湾へ渡り、台中に知己のあるを幸ひ興行にでも出る積りで来た処が、来るや否咽喉炎を煩ひ

肝腎の商売道具を台なしにした上、搗て、加えて麻刺里亜に罹り、漸く台北へ流れ来て咽喉から血を吐く憂き艱難、食べる餉もない始末に病氣は益々つのる許り。遂に艋舺支署の御厄介となつて行旅病人へ入れて貰つた始末。何と馬鹿げて居るでは有りませんか

御当地でも随分浄るりや清元が流行する様子ですが、此私をよい手本。余り御素人が芸事に凝りますと下世話に申す芸が身を助けるほどの不仕合せ。それも私のやうに病氣に罹つては頓と法がつかませぬ。入らぬお世話ながら我身につまされ蔭ながら御案じ申ますと鼻つまらせての述懐談を行旅病人を見舞に往つた人から転話

□明治34 (1901-02-19) 『台湾日日新報』

●基隆の素人浄瑠璃會 去十六日の夜基隆福楽座にて雀連の素人浄瑠璃會の催あり。近來稀れる大人にて何れも美音を弄し大喝采なりしと

●新起亭の大奇 本日より落語、新内、源氏節、浄るり等の

大寄を興行する由にて、其顔触れは落語（小芝楽）、新内（豊鶴）、落語（文字助）、新内（若玉）、素はなし（福三）、新内（飛鶴）、新作落語（権兵衛）、源氏節（若仲）、義太夫（大枝）、即席（光

芝、新内（小若）、人情講談（誠玉）、大切娘連中手踊狂言にて、木戸共二十銭。火鉢、下足、布団■■■■■■■■■■との事なり

□明治34 (1901-02-27) 『台湾日日新報』

●台北座の義太夫 台北の天狗連と基隆の雀連との催にかゝる素人義太夫は錢要らずの事とて、毎夜毎夜の大人なるが、一昨夜の如きは西檢の小勇姉妹を初め金龍、はね馬等も客員として舞台に登り、又西檢のおつや、頓子等の飛入もありて、大に人氣を添へたるが、昨夜も又芸妓連中の飛入あり。尚続々飛入の申込あるとの事なり

●今晚の新起亭 『忠臣蔵三段目』（小八重）、『地獄道中』（小

芝楽）、新内『白石咄新吉原』（豊鶴）、『浮れの稽古屋』（文字助）、『元犬』（喬三）、『弥次喜太赤坂』（若玉）、『船弁慶』（権兵衛）、『御所桜弁慶上使』（大枝）、『即席落語』（小芝楽）、『恋娘歌掛橋』（光芝）、『阿古屋三曲』（小若）、『明治白浪つゞき』（艶玉）、『千両轅大鼓場』（若仲）

□明治34 (1901-03-29) 『台湾日日新報』

●雀連の素人浄瑠璃 一昨夜、基隆福楽座に於て雀連の素人浄瑠璃會の催しあり。満場立錐の余地なき大入りなりしが、

前回に比すれば頗る進歩せしやうに聞受けられたり

明治34 (1901-10-16) 『台湾日日新報』

●頼子の義太夫 下手な淨るりで近所界隈の味噌を腐らせ、漬物の味を酔つぱくするはまだしもなれど、夫れが為め亭主を逃げ出させるに至つては、淨瑠璃の害も又あなごるべからず

茲に西檢の頼子、拍子といふは口八丁に手八丁、合せて十六、島田齧の頃より遊芸にかけては是れ知らぬといふものなく、殊に鳴物と舞とは最得意とする処なるが、其代りに至つて声が不甘く、横面の三日月形と共に之れを玉に疵だと評しあへりき然然るに此程より朋輩等に勧められ竹本八重吉を師匠として淨るりの稽古を初めた処、師匠がた追従に其処のさはりは全で淨るりに似て居りますから、最う十年も稽古なさつたらものになりかけませう杯と油をかけるので、頼子はグツと乗地になり、毎夜お坐敷から貰つて屋形へ帰ると、口三味線で此程あがつた『二度目の清書』のお喋へを憶面なしに呻るので、聴される亭主も大きに弱り、「其妙な声丈は廃して呉れ」と屢歎願に及べど、「ナニ貴郎、心配には及びませぬ、お言葉無理とは思はねど、妾しの咽喉をも聞いて御覧、葉になる」と一向すまし切つて呻りつづけられ、物堅い亭主は大きに避易し、真平だ真平

だ頭から布団を引つ被れど尚狼の遠吠の如く、又は豚を締めるやうにも聞へるので殆ど閉口し、宿世如何なる因果で斯んな事を聞かされるのかと顚顚を拳骨で押へ乍ら鬱ぎ込むを見て、「そんなに妾の三の切が悲しう聞へますか。身に染みて聞いて貰ふは有繋に夫婦の情合で有難う存じます。イヤお嬉しう思ひます」と益呻り立てられる事毎夜なるより、亭主いよいよ持て余し、「足を伸して安きに寝やうと思ふ我家で斯んなに悩まされては迎も生命が続きさうもない故、寧ろ晩丈は余所に止宿る事に仕やうか、それとも断念淨るりを廃めて呉れるか。サア二ツ一ツの返答せよ」と詰めかけられ、流石の頼子もシヨゲ返り、良人の言葉を用ひねば五行本の道に還る道理。さりとして夫れを用ひては淨るりの五行本に還る訳と、思案投げ首をふところ埋めたが、扱其投げ首を横にふるか堅にふるかは未だ決せず

●淡水館月例会余興(つゞき) 扱其次は常磐津にて出しものは『戻り橋』。(喜楽)の声も先般とは違ひ最も引き立ち殊に台詞の処は音羽屋と高島屋との仮声かとも聞かれたり。(歳悦)の三味線は師匠丈あつて今更褒めるも野暮なれば略し、其跡が道化二〇加にて例の(万朝)と(一朝)なり。先月の月例会に『七段目』を出して大うけに受けた血がつき、今度も

『忠臣蔵』の五段目を出して、定九郎の刀に血をつけんとするべし。相変らず人氣もの、(万朝)、喝采を博して幕を引かれ、大切としては西檢の双雄ともいふべき(頓子)と(留吉)の『橋弁慶』なり。浄るりは牛若丸が(か代)で弁慶が(染八)とは其声より割出したものなるべし。三味線は(おちか)(八重吉)の弾き分けにて、眼覚しき程なりし。曹子の粉装大尼髪に緋緘の鎧。好み通りの短袴には鳥居を描き、笹龍胆を影抜きしたる軍袍から被衣申分なく、殊に顔こしらへ威あつて猛からぬ秀貌。あれなら浄瑠璃姫も皆鶴姫もデレリとなりさうなり。花道出の処合の手を略したのは態と抜いたといふ事だが、折角のものが物足らず思はる。弁慶の出は(染八)が破れ鐘の如き浄るりに一層大きく見へたるが、何をいふも舞台が狭く、大長刀が幕へかゝりさうなやら蠟燭を引かけさうなやらで、余程苦心せる様子なりし。「我身ながらもたのもしく手にたつものは」といふ語りは、最う少し滑稽に出ねば弁慶が自負の笑ひを洩す事能はず。立廻りは随分はげしかりしが「片足立」といふ処、後見が一寸台を据へる事を後れた為め間が悪るかつた。慾には宙釣りにしたかりし。「此弁慶に大汗か、するは何奴なるぞ」「我は源牛若丸」「シタリ」といふ処、弁慶が笑つては行かず。怒つては行かず。「さてこそナ」といふ思入れが欲し

かりし。弁慶の着附に於ては申分なきも、顔の紅隈が余り多いのと眉毛の垂れ過ぎて居るのは何となく弁慶が弱く見へて不本意なりし。彼れこれいふものの、『橋弁慶』の頓子とまで異名を取つた丈、近來の見物、天晴れ天晴れ

●今晚の新起亭

糸操り人形芝居並に語り物は『千両幟 猪名川内の段』(竹本小八重)、『碁太平記白石噺 新吉原揚屋の段』(竹本若栄)、『奥州安達原 祭文の段』(竹本時松)、『壇の浦兜軍記 阿古屋琴責の段』(竹本若花)、『東獅子の一曲』(山本三之助)、大切新内『夕霧伊左衛門廓文章』(岡本宮司)

□明治35(1902.01.29)『台湾日日新報』

●十把一東

▲丸中が無代価の玉代は他の玉代を買はしむる良策にて、玉は当つても当らないでも客には大当りだ(コシン生)▲台北の芸妓で容貌のよいのは一力の千代。腕のあるは西檢のか代。酒の強いが東のおむら。踊りの甘いが西の留吉。鳴物なら頓子。客を逃さぬは東のお秀。舞の上手なは日本亭の小勇。慾の深いは西檢のとんぼ。優しいは東の村路、風流なは西の笑蝶。無心の上手は西のすゞめ。むしんの下手なは西のぼんた。口八丁は一力の君勇。手八丁が一力の小政。義太夫の旨いは西

の染八。声のよいのは東のおえん（爰等亭有幸）「一頂略」
▲十字館は紅粉助が座元となつてから楽屋の意気込が違つて
非常に人気が出たが、素財藤の頃に出した半額札を今に持つて
来る人が多いには閉口して居る（肩入連）

明治35（19020531）『台湾日日新報』

●女義太夫鶴澤重八

台湾芸界の振はぬは今に初めぬ事な
るか、殊にあつても宜さ、うな義太夫の如きは、素人淨瑠璃
乃至芸妓の太棹位にて纔かに賑かし居る此頃、本色の太夫の
新来と聞いては我人ともに聊か人意を強うするに足るでは無か
らうか

太夫生国は備後にて幼い時より大阪播重席の主人に養はれ、芸
を磨くこと数年なりしが後、文楽座の守太夫、鶴澤重造の門に
入り、十六の齡、既に播重席の三四枚目を語り、浪花番附の六
枚目までに貼出さるゝに至り、連れ人氣を繊弱き双肩に荷ひて、
例も高座に見はるゝ時は流石は売出しの花形、満場破れるばか
りの拍手と共に「ヨイシヨ待つてました」の懸声に迎へられ盛
えて居りしが、明治三十一年の頃江戸の中央は魚河岸兄いの
鼻負に引立てられて、席持ち真打の一枚看板を掲げ、他席の二
つ三つまで掛け持ちして自用車を走らせたる盛りの花も、漸く

姥桜の眺となりたる。近年にては芸は愈々進んで真に老巧の境
に入りたりしが、太夫の最も得意とする所は『熊谷陣屋』、
『大功記十段目』などの中もなりとか、幾十名の弟子中、名を
譲りたるものも二十余名もある事、東京、大阪の粋人は疾に
御承知ならんか、京阪の鼻負連より贈られたる幕も四十幾張り
の多きに達し、美術家内藤翠香氏は自ら刻める精巧の見台を贈
り、巖谷一六居士も太夫のために光綫地に唐詩を書いて与へら
れたる位にて、現に此春も例の魚河岸連より切に引留めらるゝ
袂を払ひて渡台したる次第なるが、台北は父兄の商業し居る地
なれば、席に出づるを羞ちて辞退するも有志の勧めによりて、
頃日石防街たるま寿司の二階にて語りたる『壺坂靈驗記』の一
段の如きは、妙音神に入つて聴く者を泣かしめしも、惜しい事
には前歯の磨滅に音声の少し洩れるが玉に瑕なりといふ。太夫
は此の後も宴席の余興などの招聘に應ずる筈なりといふ

明治35（19020608）『台湾日日新報』

●艋舺の義太夫温習会

久しく艋舺の女義太界に牛耳を執り
たりしはね馬事、竹本八重松は今度帰国するに付き、門人社中
の温習会を昨日午後一時より大溪口街の河原に催せしが、基隆
の素人連も助として出演し、中々の盛会なりし由。尚ほ本日も

先づ梵語を述べます前に、少しばかり此浄瑠璃の起源を申上げて置かねばならぬが、然し此事は随分と著書がありまして、既に人口に膾炙して居りますが、まづ普通伝へます所に依れば、昔織田信長の侍女に小野のお通といへる才女が、或る時平家物語の故事を材料として、その初三河の国矢矧の駅に兼高長者と云へる人が児のない所から、之を憂ひて浄瑠璃薬師に祈りて、其御蔭で一女を設けた、ソコで之を浄瑠璃姫と名づけ、其女が後に源の牛若丸と赤縁を結んだと云ふ事柄を、つくりて、之れに節をつけて歌つたので、浄瑠璃節と称へたと云ふ事である。

□明治36 (1903.02.27) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃本中の梵語 (二)

尚浄瑠璃の起源に就ては、これと殆んど大同小異の説がある、天明文化の頃柳雅と云ふ人の著書江戸節根本記の上巻に、かういふことが書てある

「信長公の侍女小野のお通は、秀吉公の侍女の女なり、後秀吉公の簾中に仕ふ、参州矢矧浄瑠璃姫が事をつくる、峯の薬師の申子ゆゑ浄瑠璃姫と名を附くるなり、十二神をかたどりて十二段とし浄瑠璃物語といふ」

それから、延享の人菊岡沾涼の近世事談の第三巻にも、かういふことがある、

「信長公の侍女小野のお通は秀才の女也、後に秀吉の簾中に仕ふ、参州矢矧浄瑠璃女が事をつくる、薬師の瑠璃光の緑十二神を象り、十二段とし浄瑠璃物語といふ」

又、文政の八源興清の三絃考の中にも、

「昔々物語に曰く、織田信長公の侍女小野のお通、三河国矢矧浄瑠璃御前のことを、薬師の十二神将に象り十二段の物語に作りしを、丹後七左衛門、橋本筑後に命じて節をつけさせ、城玄勾当、角都勾当、三絃に合せて、之を浄瑠璃曲といふ」

此外に望海毎段にも同様の記事があり、諸説紛々として定まらぬが、まづ小町お通が其浄瑠璃の作者であるといふことになつて居る、ソコデ前申しました通り、浄瑠璃曲中に仏語の多く交り居るは謡曲が室町以来、将門の式楽として、武門の事蹟、若しくは菩提の心を演じ、説教は叡山の僧澄憲に濫觴し、仏の縁起を唱へたるものであつて、浄瑠璃曲が自然、此謡曲と説教とに依つて資するところ多きだけ、知らず知らず仏語も這入つて居るし、亦其浄瑠璃の作が自然に仏教の因果を顕はしてある、此事は私の申す迄もなく、諸君は浄瑠璃本を御覧なされて、能く御了解あること、存じます。

淨瑠璃じやうるりに関する起源きげんはこの位くらゐで措をきまして、梵語ぼんごを引用いんようしたることを申まを上げませう、さて此淨瑠璃じやうるりと申まをしまする題目だいいの瑠璃るりの二字ふたごは、仏教ぶつぎょう經典きんげん中七宝しちほうの一ひとでありまして、其經典そのきんげんに書かいてある所ところは区々くくに涉わたつてあります、「吠瑠璃はいるり」「毘瑠璃びるり」「琉璃るり」「毘頭黎びづり」「毘頭黎びづり」と斯様かやうにいろいろ書かいてありますが、此毘頭黎びづりの語ごは何なにから起おこりましたかと云いふと、始め印度いんどの教典けうてんが東漸とうぜんするに及およんで、支那しなの學者がくやが此教典このけうてんを翻訳ほんやくするときに、可成なるべく其原音そのげんおんに近ちかい様やうな字句じくを撰えらんだのであつて、此瑠璃るりも梵語ぼんごヴァイヰウルвайиульとあるのを、之これに當あてめて其原語そのげんごの意い及お音を失うはぬ様やうに、毘頭黎びづりと訳やくしたのである、翻訳ほんやく名義集中なぎしちゆうに、此事このことに關くわんして載のせてあります、

焉やん応おん法師はふし云「或加吠字、或加毘字、或言毘頭黎、從山為名、乃遠山宝也、遠山即須弥山也、此宝青色、一切宝比不可壞、亦非煙焰所能溶鑄、唯鬼神有通力者能破壞、即此梵語ぼんごヴァイヰウルвайиульは、殊ことの外勝ほかすぐれたる名玉なぎよくのことであつて、さてこそ瑠璃るりといふ名称めいしやうを附ふしたものであらう、畢竟ひつきやう瑠璃るりは、言語げんご學者がくしやのいふ、記音文字きおんもんじであつて字義じぎは無い、外国語がいこくごの正音せいおんを写うつすに止とどまつてある、右みぎの様な起源きげんであつて、我淨瑠璃わがじやうるりの題目だいいが此梵語このぼんごより出いでたことが了解れいかいされる、唯奇妙たみきめうなことは、此瑠璃このるりといふ語ごが時代じだいを異ことにして且かつ所ところを異ことにして、

我國わがくにに這入はいつて來たことである、即ちそれは、一は昔經典ききんより支那人しなじんを経て這入はいつたこと、一は西班牙人しぱんやじんによつて物品ぶつひんの名として輸入わがくにせられたのである、而して我國わがくにの固定名詞こていめいしとなつて一は瑠璃るり（水晶すゐしやうの類）一はビードロ（硝子がらす）である、ソコデ此毘頭黎びづりは葡萄牙語ポルトガル語はヴァイイレオ、伊太利語イタリア語はヴァイトロ、西班牙語スペイン語ヴァイドレオ、拉丁ラテンヴァイトリウムと云ふのである、皆拉丁語ラテン語の動詞「見る」といふヴァイドレより起おこつてある如く、梵語ぼんごの毘頭黎びづりは、亦「見る」といふ動詞どうしより起おこつたのである。

訂正 前号淨瑠璃句中愛別あいべつは哀別あいべつ、法の倉はらのくらは法の座はのゐの誤植ごに付訂正す

□明治36（1903.02.28）『台灣日日新報』

●淨瑠璃本中の梵語（三）

淨瑠璃じやうるりの中に「ふだらく」と云ふ文字もじがある、此この「ふだらく」は即ち梵語ぼんごであり、今此文字いまこのもじを引用いんようしたる一二の例れいをあげると、

「ふだらくや岸打波きしつなみは、三熊野みくまのの那智なちのおやまの詮議せんぎとは」（『梅

川忠兵衛新口村の段』）

「誓ちかひは重おもき観世音くんぜおん、ふだらくや岸打波きしつなみの御熊野みくまののなちの御山みやまに響ひびく滝津瀬たきつせ」（『順礼阿波鳴戸』）

此「ふだらく」は、漢字の補陀落、或は補陀落迦であつて、此ふだらくは如何なる意味につかつて居るかと云ふに、西域記と云ふ本に依ると、

「梵語普陀落迦、云孤絶處、觀世音所居元山、在南海中、」

又大槻氏の言海には、左の如く書いてある、

「フダラクは、梵語海島の義、今觀世音の一名、文德帝、齊衡日本僧惠諤、唐の浙江明門の一海島（今の寧波府の補陀山）を開き、觀世音を祈り、遂に其島客となるに起る」

此の如く、淨瑠璃中の「ふだらく」の意味は觀世音と云ふことになつて居るが、何れも牽強付合の説である。此補陀落一名補陀落迦は、インダス河口の港名であつて、ボダラ港に關して、印度古代より觀世音に属する神話伝説あり、而して同港に觀世音を祀つてありしことを傳播して、其事が我國に伝はりて「ふだらく」は終に觀音の枕語となつたのであらうと思ふ。

それから魔と云ふその字が、淨瑠璃の中に沢山使つてある。されば私が例を引くまでもないが、

「傾城といふ摩がさして、人の金を盗むやうで」（『梅川忠兵衛

新口村の段』）

「二人の中へわけて入、隔の垣と身をなせば邪魔な女と引退る」

（『阿漕の浦』）

「大金にする大仕事、邪魔ひろぐな」（『二本桜酢屋の段』）

此魔と云ふ字は、後世になつて麻の下に鬼と云ふ字になつたので、大阪鹿島屋の古板にかゝる丸本には、摩と云ふ字になつて居る、されば大に理由のあることで、其元が梵語から胚胎して來ている故である、梵語ではマールと云ひ、惡魔と云ふ意味であつて、パイプルの恰もサタンと云ふのと同じ意味であつて、此語は初は吠陀梵語のマラ、即ち死と云ふ語に起源して、殺す、滅す、害す、妨ぐ、攻むると云ふ様な殘忍刻薄なることを表す動詞となり、それが遂に惡魔と云ふ非人間的の名詞に變じて仕舞つた、康熙字典には、魔は音を摩とし其意を鬼としてある、然しながら始よりかやうな字が支那にあつたのではない、仏教の支那に伝はりしとき、印度經典の翻譯をなしたが、前にも申したごとく訳者が幾分が其原音を保持して、且原語の意義を失はない様に苦心した結果、此新字を發明したのであつて、恰も福沢先生の著書の中に、西洋の金貨と云ふ字を寫して弗と用ゐ、英学者が○を岳に訳したと同一の類である。正字通に依れば、始は磨と云ふ字であつたらしい。

「訳経論曰、魔古从石作磨、確省也、梁武帝改从魔」

淨瑠璃の磨は、即ち心を乱す靈邪神、外道と云ふ意味で、凡て念想の障礙を現はしてある。尚此魔の文字に就て、余程可笑し

く感ぜらるゝことがある、我國俗間に男根のことを「まら」と云ふて居る、これが梵語の「マラ」から転化して来たのであります、何故悪魔のことが我國の男根と云ふ言葉になつたかと申しますと、ソコにはいろいろ理由のあつたこと、思はれます。成程梵語「マラ」は悪魔、外道、邪神のことであるが、印度の僧侶は此語に邪慾、色情等の意味をもたせて、終には恋愛の神様としたのである、ソコデ印度の僧侶が猥褻淫靡なる言葉を弄するは、大に慎しむべきところであるから、此「マラ」をかの男女の交合、若しくは淫情、情慾等を顯はす所の隠語としたのである。畢竟僧侶間の暗語であつたのが、日本に伝來して男根を「マラ」と云つたのである、或は「マラ」の梵字が男根の形に能く似てゐるから、印度の僧侶がさうしたのであるとも傳へて居る、何れとしても言語の起源を研究してみると、実に此の如く意外なる転化を見ることがあるのです。

□明治36 (1903-03-04) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃本中の梵語 (四)

それから菩薩と云ふ文字が浄瑠璃の中にある「廓の中は万灯歌舞の菩薩の色揃ひ」(『白石嘶新吉原』)

「六道の地藏菩薩に取絶り」(『彦山権現六助住家の段』)

「普門品陀誦誦の聲は自ら即身菩薩の變化なり」(『出世景清』)
 此「ばさつ」又は「ばさち」と云ふ語は梵語の臭味があるが純粹の梵語ではないのです。原語菩提薩(ボデイサトワ)と申しまして、其意味は覺有情大衆生、即ち大心ありて正に仏道に入るの形、言葉を換へて申しますと、仏の次位に立つ尊号であつて、それで浄瑠璃中には此語を美人のシノニムに用ゐて居るのでございます。恰ど外面如菩薩、内心女夜叉等と謂つたやうなもので、何も觀世音菩薩の画像から出て居るのでございませう。

次に旦那といふ文字がございます。即ち

「跡先思はず旦那寺へ駈けこうで」(『碁太平記白石嘶新吉原の段』)

「若旦那、勝五郎様ではごはりませぬか」(『覽り錢別の段』)

「これ申し尾上様、旦那様と呼べど答も涙より」(『加賀見山』)

「旦那様めつそうな」(『伊賀越道中双六六ツ目』)

とありますが、この旦那の用法は

一、宗教上 所謂神靈上の恩恵を授ける場所、換言すれば我が

帰依する寺

一、単に主人

一、下級の者が上級の者を呼ぶ称号、即ち尊公の義

一、下級の者が上級の者を呼ぶ称号、即ち尊公の義

などでありますが、今はこの神聖な梵語も、愈々墮落して丁つて「旦つく」「だん的」「馬鹿旦那」などと謂ふ世の中になりました。

旦那はまた檀那とも書きます。祖庭事苑に

「旦那此云施者」

とありますが、釈氏要覽には

「施者——梵語陀那鉢底今称檀那者即訛陀為檀去鉢底留那故也」とありまして、畢竟旦那は原語ダナターの略で、ダーは与ふるの義でございます。

また歐洲の語の中で、ダーといふ語が与ふるといふ意義を示して居るのが多うございますが Donation などはその一例でございます、又拉丁語の Date は to give から来て居り、パチーは至と訳すべきでございます。

要するに本来施主といふ旦那の語は、現今に於ては単に普通の尊称となりました。

それから娑婆といふ語がございます。

「うるさの娑婆に残らんより孫と一所に死出の三途」(『大功記 尼ヶ崎の段』)

「娑婆の名残につこりと笑うて息は絶にけり」(『八陣守護城 朝清本城』)

娑のジャは素訶と発音します。自誓三昧經には

沙訶謨に言ふ忍或堪忍

といひ仏教經典には

娑婆は三千大千国土の総称、即ち現世蓋忍土、即ち衆生の三毒諸煩惱を忍受するの地とあります。

サは根語 Sa v Savat 即ち圧綬で奈落に對するの句、即ち獄中にあるもの、通語でございます

浄瑠璃中の梵語はまだまだ尽きませんが、他日また諸君に拝顔の榮を得た時、更めて清聴を汚し、高教を仰ぐことに致しませう。(完)

●素人浄瑠璃 大会 今四日及び明五日の二日間 北門街北門亭に於て竹本八重松が発起となり、素人浄瑠璃温習会を催す由にて傍聴無料。随意飛入を許す趣きなるが、本日の芸題は左の如く。午後正六時より開会するといふ

『御祝儀』、『八陣本城』(小八重)、『合邦住家』(宮本)、『忠臣蔵三段目』(鶴子)、『毛谷村六助住家』(白鳳)、『明烏山名屋』(繁六)、『梅忠二の口村』(花笑)、『時雨炬燵紙治内』(助六)、『鏡見山又助住家』(可蝶)、『三十三間堂柳』(瓢)、『太閤記十』(梅枝)、『弁慶上使』(德勢)、『惣五郎子別れ』(都雀)、『安達原三』

（喜楽）、『本蔵下屋敷』（十三）、三味線（八重松、大吉、常子）

□明治36（1903-04-24）『台湾日日新報』

●南龍の夫定め 抑女義太夫といへば、先肝腎の淨るりよりも舞台面のよいのが大当りで、寧ろ聴客といはんより看客といふ方が多い奴だが、爰に先達まで北門街の北門亭に居て見台で頻りに足掻、いつも中処から髪ふりさばく竹本南龍といふがあら。一寸目を惹くに足る美的とて随つて経師屋連中も多かつき纏ひ、サア何程だらう。十両じやアウンといふめへぜ、二十両ともいふだらうか、サアどの位だ、何両だ何両だといふ処より、南龍の名も鳴り響きしが何か都合がありて、先々月より基隆へ行き同地の福祿座で興行中。爰に同地雀連の新参者にピカ一と綽名する息子あり。淨るり芸題に譬ふれば、さしあたり『御所桜』『千本桜』、『蝶花形』の優男と南龍おぞくも恋風に誘はれ身に染み染みと、其人の面影が忘れず、『菅原伝授』のいろはにあらぬ、恋のいろはを覚えそめ、『お駒才三』の心の駒も三味線の駒諸共に狂ひ出しては女の一念『矢口の渡し』ある夜ひそかにピカ一の袂を、そつと『布引の滝』なす涙をふりはらひ、四十八手の手管は知らねど、『八陣』は語つて知る『朝顔日記』の朝貌の露の情を汲み玉へと、からみついたる

『桂川』、ぬしと『妹背山』になるならば『千代萩』の御殿場の腹が減つてもひもじうない、『兜軍記』の琴責も水責火責も思かな事、『石川五右衛門』が釜責でも厭ひはせぬ、妾が命『玉藻の前』、御所望ならば進ぜますと『彦山権現』、『壺阪寺』、金毘羅へ願かけてこの『御利生記』が届かねば、妾しは緑りの髪を切り『尼が崎』となりますると名題尽しで口説き立られたので、ピカ一も自惚鼻を『鏡山』に掛け、それほど私を慕ふなら、この世は愚か『二代鏡』、『鎌倉三代記』と生を替えても『妹背の門松』『野崎村』、もしこの言葉に偽りあらば『四段目の判官切腹』、併し浮世は『盛衰記逆櫓』にたちし其時は『梅忠の二の口村』、『お俊伝兵衛の堀川』と共に命を捨撥と堅い約束してからといふものは、南龍一抱えもある腰越状が舞台に斗りは据らずして、狂ひまはればピカ一も其通り此兩人のありさまは宛然『二ツ蝶々』の如くなりと

□明治36（1903-07-14）『台湾日日新報』 欄外記事

●土橋商店の淨瑠璃会 一昨日午後一時より北門街土橋商店にて煙草「花月」売弘め祝の為め淨瑠璃

□明治36（1903-10-16）『台湾日日新報』 欄外記事

●素人浄瑠璃会 今明両夜、北門街北門亭に於て素人浄瑠璃会を催す由にて其番組は左の如しと

十六日 『宝入船』(福来)、『彦山丸』(松光)、『賢女鑑』(小柳)、

『一の谷陣屋』(都二)、『大功記十段目』(美笑)、『おちよ半兵衛』

(都)、『安達原三段目奥切』(梅枝)、『忠臣蔵本蔵下屋敷』(都雀)、
中入後、『累物語土橋』(南木)、『天網』

□明治36 (1903.10.20) 『台湾日日新報』

●台北の義太夫界(上)

今春以来、メツキリ勃興し出した台北の義太夫界、厳めしい玄関先の卓仔に、鬼髯の壮士が肩胛張つて奏者然と扣えて居る奥の間には、嬌治かしいサワリ文句の黄色い声がするかと思へば、又いろは仮名に何号と銘打つた長家の内、丸鬚の妻君を相方に何うも貴様の二は何時もチツト高過ぎるので語り難い杯と妻君の課業以外の課業に御託を吐いて鼻を高めらるゝ、何級俵殿もありと云ふ現況にて、一時は今日(けふ)は都連、明日は倶楽間連、イヤ何連、彼連と毎日のやうにお弁当、菓子附の義太夫会引も切らざりしが、夫れもホンの一時で演劇熱に圧倒されたか、但しは炎暑に我から辟易したのか、暫時打絶えました所、此の頃(ころ)又もやポツポツ素天の会がある様子に、偶と思ひ

附いたは台北の義太夫界、何んな化物の集合か、天狗の性体洗上げて見るも、夜長の一興ならずやと云つた一言に賛成者が出来、引にひかれぬ場合となつたので罪深い業とは知りつゝも、天狗殿の仮面慮外ながら引剥いて御覧に入れん

先づ素天の方から撮み出さんに、誰が附けたか四天王と云ふのが此天狗界の大王とやら、其随一の十三太夫は世界に羽を延す日本亭の御亭主、足利藤兵衛殿節は細かけれど、小さいのが残念。次ぎに扣えたは大工の黒田公節も調子も相に相生太夫様々なれど御自分単独で語る癖ありと云ふ。又柳枝太夫と云ふ芝居の出語りにでも、御存知の筈。台北座主笠松の弟御、恐ろしい美声なれど其美声に任せて節に無い節を語らるゝ由。寿楽と云ふは道楽屋の斎藤別当生国は武蔵の長井ぢや無い。だゝあがまあ奥州育ちの癖脱けず。鉄(訛る事を云ふ)も鉄も大鉄殿と承はる、此四天王に都連の都雀を加へて五天王と云ふ新熟語は何時かの民報紙上でお目に掛つたが、四天か五天か知らないが、時々調子が外れて六天位になる太夫様。都雀とは仮りの名実(なじつ)は民報社の大番頭、田中重助君と申奉つて都連の首領、其幕下にはお粥啜の名人(めいじん)都太夫、実は広告掛り宮本君、都柳と云ふも同じく広告掛の村田先生、其他都一と云ふも同社の藤林某、都八太夫と云ふも同じく民報山の太夫なりとかや。

総じて此都連と云ふは、師匠竹本八重松の連中にて柳枝十三、相生などの強将を生擒にして居た大吉師匠が、親子三人連れで道行を実地に演じた後は、此若松連は四裂八裂、柳枝は庄吉に相生は鐘龍に師匠変をして、後は十三太夫、此都連にかはり、一段連中の調子が高まり、其上お粥啜りにかけては随一の名人松鶴太夫、西門外街の質屋鈴木君杯もパリパリの連中とやら

官吏側では鉄道部の馬渡殿、少し鉄気はあれど、お箱の柳が旨いとかで、如柳と名乗り、松香太夫と申すも同部の楽馬君。まだまだある筈なれど官紀何とかで宿舎と風呂屋の外は語らぬと極めて居らる、連中が多いさうで、承はつた事なければ詮方なし

商人側から行けば、株商の冬木太夫、御当人は京都人丈けに大の鞍馬流なれど、マア義太夫が何か聴衆には判らず。併し今京都で御勉強の最中なれば何う変化したか判らず、此家の番頭、武内一声太夫も先づ旦那の番頭位か。西門外街提灯屋の吉川梅枝様は、顔相応に語りが永いと申します

明治 36 (1903-10-21) 『台湾日日新報』

●台北の義太夫界 (中)

提灯屋の八光様は新起街児島検のお隣家丈けあつて、万事が清元流で誤魔化され、西門外の三味線屋、花笑は人気沢山と云ふと好けれど、御当人何時も笑ふ癖のかず、同街踏切の金庫屋、南木太夫天晴お山の大將気取なれど、他からは左程に思ふものなし。暇遊は其昔台北検の流行妓弥次拍子、本名おと殿の御亭主深見君にて、震ひ声の白鳳は西門街近江屋の弟殿なり。其お隣の印判屋は栄旭とか申すよし。大倉組の藤岡不二太夫は稽古丈けは確かに古いが、上手か下手かは沙汰の限りに非らず。都公は八重松の御亭、平茶は山幸と云ふ西門の雑貨屋で、三日月は堂号を其ま、用ひた芭蕉館の本舗、可笑と寿玉は古道具屋で、白牡丹土橋の松坂君は都山太夫の御事にて、寿山は専売局の守衛先生、錦石と云ふはお菜売、美笑は馬床の職工、一鳳は船大工、栄と云ふのは御用商人の北川どん、十四太夫は日本亭の帳場で、先づ御主人十三太夫のお弟子分ながら、曲節なしで文句を喰ふのが好き。十一は同亭の板場にて、寿の寿太夫、高等待合はていの主人。春香太夫は大長で有名なり。徳永商店の塚本小柳太夫は柳枝の弟子にて叩きで稽古をした丈けあつて三味線無しで語るが上手とかや

倍此次ぎは鞍馬一流天狗揃ひの弁護先生、先づ第一に鼻と共に甲声の高い一重太夫。器用な艶物語の本地を尋ね奉れば、

新民法の校長、弁護士中村啓次郎君を推さざるべからずと云へば、イヤイヤ一重太夫よりも正七位古亭太夫の方が稽古が古くて一枚上だと横槍が出たれど、夫んな事は何方でも好し。ソモ此古亭太夫は藪之内の弁護士、服部甲子造君にて五年か、つて五段習つたと云ふ強者。夫れに引かへて大川弁護士の『太閤記十段目』を一度習つて鯛と名乗るのは滑稽で面白い。二葉太夫とは是れも弁護、花田正何位殿、浄瑠璃と云ふよりも話と云ふ方が近いとは、定めて誰かの悪口なるべし。鬼笑とは高原繁造君、春山は太田重助先生の仮りの名にて、松鳳は多分伊藤欣蔵君の事であらう。寺松勇次郎君が一三三と云ふ名も、何か鯛二流の古事来歴がありさうなり。又鹿重と云ふ皮肉屋殿は一重太夫の手の剛の者と承はりぬ。いでやさらば是れより女天狗の方に風向きを変へんか

明治36 (1903-10-22) 『台湾日日新報』

●台北の義太夫界 (下)

妻君連中では回漕屋、土勝のが秀八。之れを筆頭として次ぎは花田二葉太夫の細君花蝶、高室と云ふは高原繁蔵君の内室と云ふ所から附けた名なるべし。続いては崎陽商会米杵太夫の御内室崎広嬢、此亭主の米杵丈も中々の天狗なりとかや。

道具屋松鶴太夫の内室も亭主の好きな赤烏帽子とかで唸る、由、権の守では古亭太夫が御寵愛の古ひささま、昔の名はだるまと申しける元西検のおかよ、今では永井君の思ひ者軽蔑るべき口つきならずとかや。さて又女将連中を窺へば、第一は児島検の女将おちか太夫、台湾一と大天狗の鼻を高々と延ばす足下から、待つた待つたと松之江の女将が小六の手を引き、一昨晩淡水館の腕並御覽うじたかと駆け登る後から、幾久の女将、昔の名は助六、後に引添ふは西洋料理店たるまの女将、実は繁六も我劣らじと鼻高々

斯かる所へお噂はん達待ちなはれ、瘦ても枯れても呂太夫の娘政吉、是にありと現はれ出れば、妾かて萬更義太夫に縁のない者でおまへぬと、京言葉で園香が飛出すと、住栄、留吉の兩人、余り馬鹿にしんさるなど名古屋言葉で其上手へムツと座り込むとお茶良、奴、お染の面々居并んだが、まだ義太夫と唄との区別のつかぬ連中もあるなるべし。高砂検では村八と滝尾位にて、日本亭では小勇を旗頭にしてお小福、小吉、小仙等もチツト宛は唸る由なり。艫舦の方は縁が遠くて少しも判らねば省いて置く。併し富士見楼の鶴子とは大概な大天狗にも負けまじい口つき。姉の松子も少しは語るとの事。花屋の娘の鹿の子、西門街床屋の叶も物になるべし

芸妓が出た序に俳優を引張り出さうなれば、台北座の三司は物忘れする名人、八百七、鶴三郎も少し唸れば、栄座の方では五郎が第一との事。ツヒ此程の『二十四孝』のチヨボでお手並拝見、イヤ拝聴致したり。駒之丞、扇平、岡之助、百々蔵、梅二、眼之助等で、家幸の子の小金は魁とか云ふ名で頻りと寺子屋の稽古に余念なし

さてお黒人の方は如何と云ふに、之れは鼻眞鼻眞で順序も評も一切抜きとして、女では八重吉に八重松、鐘龍とは森梅の細君にて、鍛冶屋の細君常子は野澤連のお師匠株、米八の駒八、六助の玉六など、今では少し素人仲間へ足を入れ掛けて居るが、八重松の義弟子の小八重は未来のお師匠になる熱心、恐しく東京新下りと銘打った政重は面の方が別品なりとの評あり。男では台北座の時太夫を推せど、矢張チヨボ語りにて、栄座の東太夫も、の連中、野澤庄吉は何処までも三味線弾と云ふ側なるべし。先づ是れでお了ひ。チヨンチヨン

□明治36 (1903.11.03) 『台湾日日新報』

●黄菊白菊 台北の樂園培ひよきにか、技芸の花もくさくさ麗はしく咲きほこれるを、そが中より一枝つ、手折りて、けふの祝ひの余興とはなしぬ。されど枝葉繁き為め鉢みあやまれるも

多かるめり。又外に採り残せしも数あれど、元は再び摘む日あるべし。只文学にか、つらへる向はわざと省きて載せず

〔以下、技芸と人名のみすべて摘記し、浄瑠璃関係のみ全文筆写〕

●弓術 西野福吉

●写真 岡田義行

●西川派の舞 台北検 留吉

●宝生流謡曲 岩田以貞

●藤八拳 笠井小六

●薩摩琵琶 田原嘉吉

●鳳囀流生花 大谷平吉

●笛 吾妻ちか

●馬術 佐々木平助

●新内 岡本龜鶴

●能 坂東竹三郎

●女義太夫 竹本八重吉

笑ひを買ふ木の下花、すでに老い眉を描く窓前月、猶残れり。四十の上を五ツ六ツ、喰出したる年輩義太夫には脂肪の乗った処、其西京にありて既に一と呼ばれし八重吉、遂に未だ台北に比肩するものを見ず

●松尾流茶道 松尾宗幽

- 俳優女形 坂東吾妻
- 自転車 若松金之助
- 長唄 芳村孝十郎
- 尺八 久芳古山
- クリツケツト 児玉総督
- 講談 玉田誠玉
- 井上流の舞 日本亭 小勇
- 池の坊生花 中村八重
- 料理 吉田寅之助
- 鼓 高砂検 とんぼ
- 撃剣 西尾可行
- 生田流琴曲 白井てる
- 囲碁 中村栄藏
- テニス 高橋辰次郎
- 清元 高砂検 繁之助
- 洋楽 村上宗海
- 落語 台北検 権平
- 玉突 鈴木芳造
- 地唄 台北検 さく
- 盆景 高桑好石軒

- 素人義太夫 足利利兵衛
- 義太夫界の素人連 中太夫、中天狗、小天狗、数ある中に、然一頭地を抜くものを十三太夫と云ふ。初めは若松連の重鎮たりしが、今は竹本八重松の門に在りて僧正坊と号す十三太夫、実は大稲埕日本亭の主人
- 将碁 加藤覚三郎
- 煎茶 数見鉄太郎
- 魚網 石本鑽太郎
- 山村流の舞 台北検 政吉
- 表千家茶道 田沢熊古
- 洋食仏蘭西式 岡本己之吉
- 太鼓 台北検 頼子
- 真道流生花 佐藤関左
- 俳優立役 市川滝之助
- 猟銃 蛭田萬次郎
- 狂言 竹内虎雄
- 魚釣 高萩春吉
- 観世流謡曲 高雄晋
- ベースボール 平岡寅之助
- 常磐津 常磐津歳悦

●久田流茶道 小川佐助

●手品 三好重次郎

●洋食米国式 谷口喜助

●二絃琴 藤廬舍蘆令

●遠信流生花 浜田千里

●喜多流謡曲 桂六兵衛

●花火 中坊荒太郎

【明治36 (1903-11-15) 『台湾日日新報』

●タレ義太の凹タレ 聞きに来るより見に来る人の多いは女義太夫の常にて、是を高座から見下ろせば眼尻と云はず涎と云はず、壁に貼つてあるビラまでが蕨熨斗の二本棒を垂らし居る故、女義太夫の事をタレ義太といふにや。其詮穿はあと廻しとして新起横街二丁目に竹本南龍といふがあり、朝から稽古にやアデッサアデッサの声を四隣に響かせ、五行本に打対つて弟子の南吉(一八)といふを仕込み居るが、此南吉といふは福岡県三井郡国分村西久留米千四百四十番戸石井太作(六九)の娘つる(四一)の、其又娘にて本名を石井くま野といひ、幼少より南龍の弟子となり、此処彼所を興行にあるき、母と祖父との三人口を自分の口一ツから出る声にて養ひ居たる処、

昨年(さくねん)の十月頃(じふしやう)師匠(しやう)の南龍(なんりゆう)が勧めにより台湾(たいわん)といふ国(くに)は木(き)に餅(もち)が生(な)つて居(ゐ)る。それで頬(ほ)ベタを叩(たた)くやうなよい処(ところ)と聞(き)ではお伴(ばん)れなすつてくださいと木餅(きもち)よく承(うけ)諾(だく)し、其代(そのか)りには月々(つきづき)の仕送(ししやう)り、何分御面倒(なにぶんごめんどう)を見てくだされと渡台(たいたい)させたる次第(しだい)なるが、根(ね)が襟持(えりも)ちの南龍(なんりゆう)それを見習(みなら)ひし南吉(なんきち)は百行(ひやくかう)の基(もと)といふ孝行(かうかう)の心(こころ)はなく、五行本(ぎやうほん)に對(むか)ふかたはら親不孝(おやふかう)の聲(こゑ)を出(だ)して頻(しき)りに男(をとこ)にもたれ掛(か)りしなれたたれ込み、誰々(たれたれ)といふ差別(さべつ)なく巫山(ふざん)戯廻(ごまわ)るは、所謂(いはゆる)タレ義太(ぎだ)の本分(ほんぶん)を尽(つく)すものなれども、内地(ないち)に残(のこ)りし母(はは)と祖父(そふ)はそれが為(ため)送金(そうきん)をせぬので、耐(た)つたものにあらず。搗(か)か加(か)へて本年(ほんねん)八月頃(はつご)より祖父(そふ)の太作(たさく)は老病(らうびやう)にかゝり、母(はは)のおつるも眼病(がんびやう)の疲(つか)れに是(これ)も又臥戸(ふしど)を並(なら)べて呻吟(びやうぎん)する身(み)となりしより、度々(たびたび)書面(しよめん)を出(だ)して送金(そうきん)方(かた)をいひ越(こ)せば、病氣(びやうき)の爲(ため)にお喰(く)ひなさるはソリヤ当然(あたなりまへ)。妾(わがし)かとて高座(かうざ)の上(うへ)で唸(うな)つて世渡(よわた)りして居(ゐ)ますと膠(べ)なき返事(へんじ)をやつたので、二人(ふたり)の病人(びやうにん)は大(おほい)に哭(なげ)き、此上(このうへ)警察(けいさつ)の御苦勞(ごくろう)を仰(あや)いでも娘(むすめ)を帰国(きこく)させねばならぬと、此由(このよし)を旧街(きうかい)派出所(しやうしゆ)へ願(ねが)ひ越(こ)したるより、昨日(けふ)南龍(なんりゆう)と南吉(なんきち)を召喚(せうくわん)して懇篤(こんとく)説諭(せつゆ)を加(く)へられ、兩人(ふたり)とも大凹(おほいこ)たれて愁嘆場(しゅうたんば)を演(えん)じ、受書(うけしよ)を出(だ)して帰宅(きたく)せりとぞ

【明治36 (1903-11-21) 『台湾日日新報』

●台北座の素人浄瑠璃 本日より三日間、台北座演劇の休業を期として天狗連の相生、柳枝、寿楽が発起となり素人浄瑠璃会を催す由にて、毎日午後四時開演、木戸場代無料にて、其乱表は左の如し

▲廿一日 『岸姫の三』（中村駒之丞）、『日吉の三』（十三）、『忠臣蔵四』（寿楽）、『鈴が森』（柳枝）、『吃又平』（澤村源之助、糸風雷二郎）、『白石噺』（片岡扇平）、『嘉平次住家』（国松）、『勘作住家』（嵐三司）、『鏡山長局』（実川八百七）『百度平住家』（相生）、大切『忠臣蔵』惣掛合

▲廿二日 『鏡山又助』（十四）、『合邦』（十三）、『近江源氏』（寿楽）、『弁慶上使』（柳枝、鰻谷）（国松）、『先代萩御殿』（小柳）、『膝栗毛赤阪』（八百七）、『柳』（相生）、『蝶花形八ツ目』（阪東五郎）、大切『布引の四』惣掛合

▲廿三日 『佐倉曙義作内』（十四）、『志度寺』（十三）、『忠臣蔵山科』（都雀）、『妹背山芝居』（寿楽）、『明烏揚屋』（柳枝）、『毛谷村六助』（国松）、『賢女鑑片岡』（小柳）、『松王下屋敷』（相生）、『阿漕』（五郎）、大切『本蔵下屋敷』惣掛合、糸（鐘龍）（八重松）（重八）

□明治36（1903.11.25）『台湾日日新報』

●読者文芸

秋季浄瑠璃文句読込 榴亭
秋立つや夕顔棚のこなたより
荳狩や皆親々に誘はれ
荳狩や取つた取つたと大音上
沙魚釣や腹がへつても飢じうない
三十になるやならず唐がらし

□明治36（1903.11.26）『台湾日日新報』

●十把一束

▲大阪で一時代越路の名を博した竹本重八は今何うして居るんだ。願くば本島タレ界の為に蹶起せよ（堂摺生）

●読者文芸

秋季（浄瑠璃文句読込）榴
逢坂の関路をあとに渡る雁
雁鳴くや一夜明石の風待に
小倅もお役にたつて鳴子曳
新米や難波の浦を船出して
稚拾ひ御台若君もろともに

□明治36 (1903-12-01) 『台湾日日新報』

●北門亭の大寄と新伯知 本日より北門街の北門亭にては桂文字助、馬尻、喜位人、源平の落語、小八重の義太夫、吉川正一の西洋奇術、及び誠玉の講談、田中芳之の劍舞、及び二輪加を興行する由。又過日來同亭にて好評を博せし東京新講談士松林新伯知の講談は、二十九日を以て三日の日延も終へたるが、本日よりは基隆の有志に招聘され、同地福楽座に於て『北清戦史 北京籠城談』、『川上正劇オセロ』、『絲之錦世処難』及び『桜田門外血染之雪』を向ふ三日間講演する由。

□明治36 (1903-12-02) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃狂 二三日前の事 西門外街なる竹本八重松方の格子先で漬物の御用はよろしうと呼ぶ声の聞えしも折から稽古中の事として、八重松は要りませんと答へたる儘、頻りに稽古をして居たる処稍あつて、格子戸をガリりと明け入来るものあり。へー私は只今の漬物屋でゐますが、什麼にも此義太三味線の音色を聞きましては、足が先へ進みませぬから荷を半町余前に置いて戻つて来ました。一段お稽古を聞かせて頂く訳にはありませんまいかと、絶る如くに頼むより八重松も偏な男だナとは思ひ乍ら商売柄として膠なく云はず。マアお上りなさ

いと云はれて件の漬物屋は大に喜び草鞋を解いて上り込み折しも稽古して居る白牡丹太夫の淨るりを頻りと感に入りつてほめそやし居たる間、纏て一段了りしかば、漬物売はにじり出で、実の処私は野澤常子といふお師匠さんへ、こゝ二十日程前から入門致しましたが、今聴かして頂いて居ると、どうも貴女の方がお上手なやうに思はれますが、一体全体本当の処はどちらがお上手でゐりますか。へいへい成程、それは貴女が御辞退で訳らんと仰しやりますが、どうもお上手なやうに思はれます。何は兎まれ此私にも一段語らせて載きたうゐりますと、最早見台の前へ据り込み、懷中から取出したる『太功記十段目尼ヶ崎』を枕から呷り出したので、八重松も詮方なく弾いてやると、漬物はよろしうの声其儘で手古変挺な節廻しに、八重松を初め稽古に求合して居たもの迄噴飯さんにも噴出されず、擧げられるより苦しさに袖を脚、舌を噛み股を抓つて耐ゆるを漬物屋は一向平氣漸く一段を語り仕舞ふ内、はや日は暮れか、りしかば、八重松は漬物の荷を氣遣ひも若し盗まれてもしてはなぬからと注意すれど、ナニさ浄瑠璃の為に盗まれるなら、漬物荷の一荷や二荷、厭ふ事ではゐりませんが、最前も申た如く、貴女と常子さんとは全くどちらがお上手でゐりますと、夫れ承るまではこゝにお邪魔を致しますと、ドツカと座つて動かぬにぞ、

八重松も困じ果て遂に要らぬ漬物を買つて、漸くに帰らしめたりといふ。そこで一口嚙を一つ浮んだからお披露しやう「此漬物屋は余ツ程浄るり天狗と見えるが、実際自分に上手だと思つて居るでせうか「イ（一字闕）自分には決して上手だと思つて居ないさ」「それはなぜ」「デモ漬物の荷を半町も先へやつて置いたぢやないか……」

明治36（1903-12-03）『台湾日日新報』

●梨園雜組「中略」▲百々蔵が義太夫の名は八百松と云ふのぢやが随分奇体な名ぢや。又岡之助は三雀と云ふて師匠の名を其儘用ゐて居る。まだ夫れ斗りぢやない。此頃から初め出した女形の多見松は梅幸と名乗つて菊五郎の二代を極め込んで居る

明治37（1904-01-16）『台湾日日新報』

●若松連の浄瑠璃会 曩頃渡台したる野澤三次郎 初目得して、若松連にては今朝二日間北門亭に於て素人浄瑠璃会を催す由にて、木戸銭は一切無料との事なるが、其語り物は左の如し

『賢女鑑』（小柳）、『玉三』（花笑）、『先代御殿』（不二）、『鈴ヶ

森』（一声）、『柳』（栄）、『阿波鳴戸』（南木）、『三勝酒屋』（十三）、

『太十』（松鶴）、『本蔵下屋敷』（相生）、『忠四』（寿楽）、以上

十六日▲『玉三』（叶）、『新口村』（花笑）、『勘作内』（松鶴）、『弁慶上使』（不二）、『又助内』（十四）、『合邦』（十三）、『千種香』（小福）、『松王下屋敷』（相生）、『吉原揚屋』（柳枝）、以上十七日、三味線（三次郎）

明治37（1904-02-10）『台湾日日新報』欄外記事

●北門亭の義太夫会 昨今両日北門亭に於ける素人義太夫、本日の語物は左の如し『版面切のため不可読』

『三勝酒屋』（重八）、糸（三次郎）其他

明治37（1904-03-16）『台湾日日新報』

●恤兵献金の浄瑠璃会 来る十九日午後一時より同十一時まで淡水館楼上に於て、恤兵献金の目的にて当地の女義太夫、竹本八重吉が発起となり、浄瑠璃大会を催す由にて献金の方法は、凡て其語るものが分担献金し來聴者は、一切無料との事なれば、是までの慈善興行とは大に趣を異にするものありといふべし

明治37（1904-06-05）『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会 来る六、七日の二日間、台北座に於ける

老松連 浄瑠璃大会は下足料三銭、木戸場代無料にて、午後六時開会の筈なるが、語り物は左の如し

『鈴が森』（柳香）、『弁慶上使』（米八）、『先代御殿』（栄）、『尼ヶ崎』（小柳）、『柳』（春香）、『玉三』（二三）、『野崎』、『紙治茶屋場』（柳枝）、『岸姫の三』、『堀川』（相生）、『日吉の三』、『本藏下屋敷』（十三）、『重の井子別れ』、『揚巻助六太文字屋』（重八）

□明治37（1904.06.25）『台湾日日新報』

●十把一束 ▲市川男升の由良の助を見ましたが、蓋し従来台北に於ける由良の助中の上乗なるものでせう（贗州）▲新聞が何程 紳士の賭博など、喧ましく云はうと、警察が小兒騙しのやうな虚嚇を幾許やらうと、實際我々を捕縛することは得為ないから少しも惧くないと云つて居る賭博紳士があります（光一法師）▲賭博と義太夫に熱心なる一紳士は近頃新占領地へ渡航し、淫売屋を開かんとの計画がある由なれば御注進申す。詳細は篤と御探索ありたし（無髯便士）

●都連浄瑠璃会 本日午後六時より北門亭に於て都連の浄瑠璃会を催すよしにて、木戸下足は勿論無料にて語物は『八陣』（小八重）、『三代記八』（都喜和）、『二度目清書』（都松）、

『日吉丸三』（都鳥）、『太功記十』（二司）、『千代萩御殿』（都水）、『柳』（松鶴）、『梅よし』（鶴子）、『三日太平記』（不二）、『明鴉』（梅枝）、『布引四』（相生）、三味線（竹本八重松）等

□明治37（1904.07.14）『台湾日日新報』

●台北座浄瑠璃大会 昨十三日より明十五日まで三日間、台北基隆聯合素人浄瑠璃大会を台北座にて催す由にて、為に錦升一座の演劇は右三日間休業する筈なりと

□明治37（1904.08.20）『台湾日日新報』

●追善浄瑠璃会 本日正午十二時より北門街武藏屋に於て竹本八重吉が亡父母の遠忌追善の為、鞍馬連総取持にて浄るり会を催す由にて、其番組は左の如しといふ

『式三番』（八重吉）、『千両織』（とよ）、『二度目』（叶）、『天網島』（松の江奴）、『尼ヶ崎』（台北検おちやら）、『三莊太夫』（同園香）、『一の谷陣屋』（花蝶）、『松下住家』（台北検住栄）、『鏡山又助』（秀八）、『堀川』（梅八）、『伊賀八』（呂三）、『日吉丸三』（寄石）、『柳』（鈍八）、『阿漕』（冬木）、中入後、『御所桜上使』（蘭風）、『六助住家』（二葉）、『四段目』（古亭）、『臺坂』（二重）、『合邦下の巻』（十三）、『壇浦兜軍記掛合』遊君あこや（古亭）

岩永（蘭風）重忠（一重）、榛沢六郎（十三）、三味線（八重吉）、ツレ（幸女）、琴胡弓（台北検査く）、糸（松の江しを）（幾久ひさ）（日高堂きぬ）（初音さく）（竹本鐘龍）

□明治37（1904.09.04）『台湾日日新報』

●狂歌紙礫 第十集の六

『素人浄瑠璃』

うまいぞと夕顔棚のこなたより疼もエホンと太功記かな 書生

法師

情の機微を穿つた丈に此疼人をして失笑せしむる殊にエホン

とはよき思ひ付なり（風）

目で聞けば色もくつきり素人の黒人よりはずつと上るり 御園

有武

之をめき、といふ（手）

素人の上るり聞けばことさらに可笑しみのあるチャリ

弥次喜多 漢唐太古

甚だ面白い併しちやりの弥次喜多はちとくだい赤坂の段位で

よからん（風）

不孝なる若ものどもが打よりて二十四孝をかたる浄るり 背高

入道

よろし不孝な声は古いものだが（風）しろ人といへど皆色お
とこのつもり（書）

梅忠をかたる素人が見台を叩いて出すは金切の声 手爾波丸

三百両とでもはめてやらうか（書）黒人ならポチになるとい

ふ処だな（風）

□明治37（1904.09.06）『台湾日日新報』

●狂歌紙礫 第十集の六

『素人浄瑠璃』

聞人のらむうゝ目見てちりぬるはア、是非もなや素人浄るり

風山堂

此退屈をどうするどうする（風）

素人の橋弁慶は牛若の飛ばぬ先から五六枚飛ぶ 銭内侍

何となく垢抜けて居る（風）謡と間違つてはいけぬぞ（書）

素人の浄るり聞けば注進の女童せとなりける哉 琴古生

よし（風）だが息丈はせき切つて居るよ（書）

乗り出して語れど駒に乘らぬ故悪落をしつ素人浄るり 有馬坊

抑揚なり（書）

サワリ場も声 伝兵衛の素人に聞えまさんと耳を堀川 手爾波

丸

舌頭老獺些のサワリをも見出し得ず（風）此よみ口猿ものなり（書）

素人のかたる三勝義理で聞けば客も今更かへられもせず 失名氏

かくて独り言にならでめでたし（風）義理にも我慢にも替えられぬ程の迷惑（書）

可笑しさはふと、せうづのほたりがるお国訛も出語りの屁幕風山堂

思はず失笑（手）

□明治37（1904-10-08）『台湾日日新報』

●送別義太夫会 当地義太夫師匠仲間にて古顔株の竹本八

重松は近頃脳病の気味にて兎角果敢果敢しからねば、養生の為

め、来る廿五日一先づ内地へ引揚ぐることに、為したるにつき、

八重松派の都連は云ふに及ばず、其他の答連、若松連間にも

同人送別の為め、義太夫大聯合会を催さんと発起するものあり

て、程よく話も纏まりたれば、弥来る十日より三日間台北座

劇場に於て三派合同の義太夫会を開く筈にて天狗連は復習に忙

はしと云へり

□明治37（1904-10-09）『台湾日日新報』

●八重松の送別義太夫会 同会は明日よりの筈なりしが都合により延期し日限未定なりといふ

●十把一束（中略）▲台北料亭のよし尽し。琴水は待遇がよし。丸中は趣向がよし。魚金は安気でよし。松の江は隠くれるによ

し。竹の家は御世辞がよし。吾妻は宴会によし。花屋は夜具が

よし。初音は朝戻りによし。瓢亭は喰物がよし。鳥半は安上げ

によし。日本亭は眺めがよし。朝妻はつれ込みによし。一すじ

は秘密によし。武蔵屋は夫婦連れによし。江戸長は早い事によ

し（よしよし爺）

□明治37（1904-10-22）『台湾日日新報』

●追善浄瑠璃大会 当市の竹本鐘龍が亡父鐘太夫の十七回忌

追善の為、来る二十三、二十四、二十五の三日間、台北座に於て

浄るり大会を催す由にて、鞍馬連、都連、つぼみ連、老松連、

雀連等、専ら補助する由なり

□明治37（1904-12-02）『台湾日日新報』

●答連の義太夫会 本月三四の両日北門亭にて催す。答連納会の番組は左の如し。又傍聴は無料なりとす

▲三日、『先代萩』(笑)、『志度寺』(三洋)、『菅四』(魁)、『二度目』(一枝)、『日吉丸』(十一)、『蝶花形』(亀鶴)、『新二村』(花笑)、『玉三』(松鶴)、『御所桜』(一声)、『阿漕浦』(十四)、『酒屋』(十三) ▲四日、『太功記』(二鳳)、『一の谷』(松雀)、『勘作』(都水)、『寺子屋』(枝雀)、『又助内』(不二)、『皿屋敷』(十四)、『本蔵下屋敷』(十三)、『帶屋』(堂司)、『袖萩』(梅枝)、『鳴戸』(南木)

□明治38 (1905-02-11) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃会 本日午後六時より本社に隣れる倶楽部に於て浄るり会を催す由にて、出しものは左の如しと

▲『玉藻前三段目』(金露)、『鎌倉三代記』(曙)、『先代萩御殿』(都水)、『本蔵下屋敷』(十一)、『弁慶上使』(松鶴)、『三十三間堂柳』(南木)、『三日太平記』(不二)、『百度平』(一声)、『八陣本城』(梅枝)、『播州皿屋敷』(十四)、『合邦下の巻』(十三)

□明治38 (1905-03-11) 『台湾日日新報』

●基隆の花柳界 去月末の調査に依るに基隆街に於ける花柳界の景況は左の如し

内地人 本島人 計

貸座敷	一二	一
料理店	二四	一 二五
飲食店	三二	三四 六六
娼妓	九四	五 九九
芸妓	一六	一六
酌婦	二五	二五
仲居	一一	一一

●素人義太夫会 蒼連にては今明両日午後六時より北門亭にて他連聯合の例月会を催す由にて、番組は『千代萩』(二鳳)、『志度寺』(三洋)、『廿四孝』(都水)、『浜松小屋』(枝雀)、『日高川』(貴司)、『御所桜三』(松鶴)、『玉藻前三』(十四)、『本蔵下屋敷』(十三) 以上 今晚 ▲『橋弁慶』(九三)、『浜松小屋』(花笑)、『本蔵下屋敷』(十一)、『柳』(南木)、『先代萩』(不二)、『お千代半兵衛八百屋』(十四)、『日吉丸三』(梅枝)、『百度平』(相生)、『野崎村』(柳枝)、『以上明晩

□明治38 (1905-06-01) 『台湾日日新報』

●寄贈 基隆停車場待合所内小林末吉氏より金一円五十銭。城內府中街金子圭介氏より金十円。在台北素人義太夫蒼連より

金十二円五十銭。孰れも台北行旅病人救護所へ寄贈したり

□明治38 (1905-06-24) 『台湾日日新報』

●台北座の素人浄瑠璃 二十四、二十五日の両日、午後六時より台北座に催す苔連の浄るり会は、木戸場代共に無料にて、其番組は下の如しと

『先代萩』(一鳳)、『浜松の段』(花笑)、『桂川帶屋』(貴司)、
『菅原四』(都鶴)、『二度目』(枝雀)、『御所桜』(不二)、『日吉丸三』(一声)、『安達原三』(梅枝)、『染分手綱子別れ』(柳枝)、
『箱根滝の段』(三五太夫事白鳳軒) 以上二十四日夜。『加賀見山五』(一福)、『太功記十』(三洋)、『柳』(花笑)、『三勝半七』(貴司)、
『菅原四』(枝雀)、『日吉丸三』(不二)、
『御所桜』(梅枝)、
『百度平』(一声)、
『新吉原揚屋』(柳枝)、
『三日太平記』(白鳳軒)、
『三味線』(竹本重八) (豊竹東太夫)

□明治38 (1905-08-24) 『台湾日日新報』

●素人義太夫会 素人天狗の苔連にては今回茶座劇場を借受け、浄瑠璃大会を催す事となり、期日は昨今両夜にて午後六時より開会し木戸銭無料との事なるが、同連には今回白鳳軒といふが加はりたる由にて、同人は西門外街の齒科医にて、内地に

ては商売人の中に加はり居たる事ありて、全く素人離れを為し居る点あり。台湾にては一寸珍らしき名人なりとて、まだ開会せぬ前より非常なる評判なりと。さて今夜の番組は左の如し

『朝顔宿屋』(南木)、
『柳』(松鶴)、
『蝶花形八』(亀鶴)、
『十種孝新吉原』(花笑)、
『先代御殿』(都鶴)、
『寺子屋』(魁)、
『三勝酒屋』(貴司)、
『尼が崎』(梅枝)、
『弁慶上使』(一声)、
『鈴が森』(不二)、
『合邦の下』(白鳳軒)、
糸(東太夫)

□明治38 (1905-11-15) 『台湾日日新報』 漢文版

●桃園慈善会 桃園之婦人慈善会支部之音楽会。於去十日十一日両日間。開設諸桃園街林家之租館内。大覚熱鬧。台北樂師村田、鈴木、田島、及北川夫人該氏。出赴該地。以參奏樂器。是日幻照活動写真。置蓄音器。活人画。則以桃園紳士夫人装之。十日入場者。約千七百名。活人画、則扮作桃太郎。桜井駄木幡里等。一時觀者。男々女々。南北東西。疊如墻垣。肩磨踵接。幾無立錫地。至十一日。則來觀者更多三回入場者。約有二千人。記者午後四時三十九分。從艫舦乘汽車向該地出發。迨至桃園。已經開會。竹内庁長適登壇演說。畢、村田氏独奏尺八(狀若洞簫二回有嘹海天鶴之致。鈴木氏之洋琴。与北川夫人之琴合奏。声韵悠揚。翕如也。繼而田島之明笛。与鈴木氏之洋琴。及北川

夫人之三絃和之。繹如也。奏至無心処。万籟無聲。清風払々。非下里曲所可希及。衆皆忘機。不知曲終。恍恍如入清虛之境。等為葛天氏之民。直不可思議。至蓄音器者。又為本島人所注目。詫為奇異者也。猶不但此。如內地人之落語、筑摩川、勸進帳、更堪唱采。如寺子屋之淨瑠璃、亦堪令人嘖目。活人画者。第一桃太郎。田舎造一茅屋。裡有翁媼兩人。発見桃中一小兒。兩相驚愕。第二小楠公在仏間欲自殺。其母欲止之之狀。大覺逼真。第三為仲國横吹短笛。衣裳修偉。內有妖艷如花之少女。按小督之局琴。既聞笛聲。即使侍女持燭迎仲國。宛然如觀一幅土佐図。又有士富裾野之曾我氏兄弟報仇一劇。係芳年氏以伝神之華写之。神情栩栩欲活。此間本島人最傾心者。乃為活動写真。至於喝采不已。及午后十二時始散會。按此慈喜會。係不發售入場券。乃以同街為中心点。在其約一里半許之地方。募集寄附金。然後对此寄附金。而配布三千五百枚之入場券。故入場者。遠出予定額以上。實該地未曾有之盛會也。

※淨瑠璃をレコードで放送し、「本島人」が聴いたと記述されている珍しい記事。

●明治38 (1905.11.18) 『台湾日日新報』

●送別 淨瑠璃會 台北素人義太夫四天王の一人たりし笠松柳

枝太夫が今回当地を引揚げ、大連地方へ出立するにつき、平素鼻突き合はせし天狗連中にては、送別会として来る十九日午後五時より、新起横街台北座にて素人淨瑠璃會を催す筈にて、實際一文の錢をも取らぬ由。番組は、

『御祝儀』（福寿）、『太功記七』（二葉）、『布引四』（二重）、『平治内』（是調）、『日蓮記三』（都水）、『朝顔宿屋』（松鶴）、『三勝酒屋』（不二）、『紙治内』（一声）、『本蔵下屋敷』（相生）、『合邦下』（十三）、『安達三』（梅枝）、『野崎』（柳枝）、『菅原四』（白鳳軒）、大切掛合『妹背山々の段』小葉（二重）、桔梗（福寿）、雛鳥（相生）、久我之助（柳枝）、定高（白鳳）、大判事（十三）、糸（東、重八、春花、三次郎）

□明治39 (1906.01.07) 『台湾日日新報』漢文版

●高等文官招宴総督 去三日之夜。在台北高等文官。仮民政長官々邸。設席招待総督。総督始終高談壯論。嗣後長谷川技師長起為総代。曰。閣下久出征。凱旋未幾。席不暖煖。而遠勞婦任。閣下之（厘の中に林？）念本島。誠令感激不能措也。茲開粗宴。蒙屈駕光臨。是固不足以酬盛意。然聊以表微忱而已。又祝総督健康。齊唱万歳。総督亦起而還礼。略曰。〔総督の答辞…中略〕文学種々実例。極有興趣。自是有合奏音曲義太夫等之余興。宴

終。総督在楼上休憩一時間。閑談陣中事云。

□明治39 (1906-02-23) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃大会 本日午後四時より台北座に於て基隆雀連、台北蒼連、及天狗連合併にて浄るり大会を催す筈にて、其語物左の如しと

『御祝儀』(宝入船)、『三日太平記』(梅士)、『明烏山名屋』(梅枝)、『朝顔日記』(花笑)、『沼津』(南木)、『鳴門』(鳴子)、『太功記十』(弥生)、『加賀見山又助』(吾才)、『御所桜三』(三洋)、『新吉原揚屋』(貴司)、『忠臣蔵本蔵』(亀鶴)、『合邦』(白鳳軒)、『千両職猪名川内』掛合、猪名川(都水)、大阪屋若者(一声)、鉄ヶ嶽(松鶴)、角力使(三声)、おとわ(不二)、三味線(三次郎)、『菅原寺子屋』掛合、松王(十三)、千代(花遊)、玄蕃(弥生)、百姓子供(十雀)、御台(吾勇)、菅秀才(三声)、戸浪(一声)、源蔵(糸雀)、三味線(三治郎)、『忠臣蔵一力の段』掛合、平右衛門(十雀)、九太夫(糸雀)、伴内(吾勇)、力弥(三声)、おかる(相生)、重太郎(三治郎)、弥五郎(花笑)、喜多八(都八)、亭主(貴司)、仲居(大勢)、由良之助(十三)、三味線(東)、鳴物(楽屋)、唄(小福)

□明治39 (1906-03-09) 『台湾日日新報』

●東北飢饉救恤浄瑠璃大会 東北三県窮民救恤の爲 竹本八重吉が発企となり、鞍馬連中に於て、来る十日、十一日の両日午後六時より、台北座に於て浄るり大会を催す由にて、其番組は左の如しと

『紙治炬燵』(万朝)、『日吉丸三段旦』掛合、久吉(吾妻三すじ)、は、吉春(同勝迨)、竹松(松の江奴)、『三十三間堂平太郎内』(児島つる)、『新吉原揚屋』(同きく)、『太功記七』(幾久あつこ)、『日蓮記勘作内』(同ひさ)、『三勝半七』(一九久)、『一の谷三段目』(笑燕)、『彦山六助住家』(秀八)、『松王屋敷』(台北 ■■■)、『千代累物語』(児島秀八)、『十種香』(四楽)、『玉藻前三』(錦)、『御所桜三ツ目』(吾福)、『三代記三浦別』(三国)、『阿漕平治内』(不二)、『染分手綱三吉別れ』(豊泉)、『本蔵下屋敷』(寄石)、『佐倉宗五郎』(呂三)、『布引四段目』(一三三三)、『福島さかろ松』(冬木)、『沼津千本松』(十三)、『菅原四ツ目』(二葉)、『和泉三郎館』(蘭風)、『あこや三曲』(古亭)、『壺坂寺沢市内』(一重)、『堀川猿廻し』掛合、おつる、伝兵衛(豊風)、母(呂三)、お俊(古亭)、与治郎(一重)、三味線(八重吉)、ツレ(台北お鶴)、琴、胡弓(同きく)

明治39 (1906-09-14) 『台湾日日新報』

●朝日座の人形浄瑠璃 疾くにも乗り込むべき同座人形浄瑠璃の一座は盆興行の為に援止められて止むなくも渡台の遅延せし由なりしが、再昨日の福岡丸にて其前持らへとして人形側の十数名先駆して渡合し、目下座内の飾り付け其他に従事し居れるが、太夫連の一行が次便にて来北次第直ちに盛んなる開場式を挙げ、引続き足拍子勇ましく開場の運びに至るべしと云ふ

明治39 (1906-09-21) 『台湾日日新報』

●女浄瑠璃操人形の初日 朝日座の女浄瑠璃操人形は昨日太夫と人形使との町廻りをなし、午後五時より鱗落しをなし、愈よ本日午後六時より初日を出す由なるが、興行は二日替りとなし、木戸は大人十五銭、小人八銭、場代は割一等人二十銭、二等一人十銭にて、今明晩の出し物は左の如し

『式三番叟』(御祝儀)、『由良の港山の段』(小富)、『屋島合戦三段目』(小富士)、『奥州秀衡三段目』(葉龍)、『阿波の鳴門八ツ目』(小龍)

明治39 (1906-09-22) 『台湾日日新報』

●朝日座の人形浄瑠璃 名代男

幾ら巧く語つても床語りは番附に入れぬと云つた位のもので、今東京で三味線弾をして居る鶴澤儀鳳が、未だ豊竹和国太夫と云つて芝居町に出て居た頃は、相当の語り手と云はれたものであつたが、寄席は朱引内を禁まはれ、場末ばかりを打つことを余義なくせられた、斯う云ふ風で義太夫の本業とは人形に合して語つてを意味し、文楽が斯道に重きをなして居るのも畢竟これが為めであるのだ、然るに台湾にはこれまで一度も此の本業語りが来ず、今度の朝日座の一座が草分けと云ふ訳合である、如何にも床語りとしては九重太夫のやうな老巧者も来、又た白鳳軒のやうな本業の型を語る人も居るが、併し目前人形に合して同時に耳目を楽ましむる本趣向で遣つて貰へるとすれば、太夫が女太夫などと贅沢も云はれず、是非に一度は聴きに出掛けて、久し振りでの枯腸を満たすべきである

義太夫は大阪が本場であるが、而かもその本元は阿波である、お刺けに大阪は近來ケレンを交へるやうになつたが、流石阿波の浄瑠璃は堅い、いでや鱗落し当夜の語り口を評さうか、先づ小富の『御殿』は口を抜して『上使入』から語つたが、年の割には甘く将来望みがある。小富士の『堀川』は大人大きく語る積りであらうが、何うも幅が足らぬ、尤もこれは声の上から云ふことで、義太の質は決して悪くない、取前の葉龍の

『安達三』は大したヨガラセを遣られた、大向から堂摺の声頻りに掛つたのは宜べなりである、中吉と評して置く。取語りの小龍の『質屋』は流石楽なこと、而かも新内出ではあるまいかと思はれる程浄瑠璃が綺麗であつた。元より訛るやうなことなく艶もあり、先づは上吉と申す。元来女太夫の三味線は総体調子の高いものであるが、此の一座のは彼の八重松の如く高からず、彼の八重吉の如く低からず、能くその中庸を得ては居るが、何うも撥放れが綺麗でない、今一度聴くまで巧妙の褒め言葉はお預りとして置く。

次ぎは人形の番、昔から云ふことだが、文楽の人形は、人形に魂が入つて、夜中光秀と秀吉が喧嘩をする程度に上達して居るが、此の一座は無論それまでには行かねど、人形が汗を掻く丈の車輪には遣つて除けた、即ち鯉若のお染は格好に勝り、幸八の袖萩は科に勝り、文五郎の久作は軽しと云ふよりも荒きに勝つて居つた、その他黒ん坊連は御苦勞御苦勞で御免を蒙つて置く

書割は流石大野の仕事、綺麗この上なし、間々道具で手の來たのは御手柄御手柄

□明治39 (1906-10-09) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃会 当地の天狗連と基隆の雀連合併にて明日明後十一の二日間、北門街鳥留の楼上(元武蔵屋大広間)に於て、浄瑠璃大会を催すべき由なるが、時間は午後五時開始にて、其語物連名左の如し

『四ツ谷怪談伊右衛門内』(一声)、『安達原三』(一二三)、『大閤記十』(梅枝)、『本藏下屋敷』(基十雀)、『鈴ヶ森』(花糸)、『八陣八ツ目』(花笑)、『忠臣蔵六』(南木)、『加賀見山又助内』(基弥生)、『新吉原揚屋』(木の葉)、『菅原四段目』(三笑)、『妹背山御殿』(貴司)、『柳平太郎住家』(貴昇)、『御所桜三』(松鶴)、『日吉丸三』(基糸雀)、『三勝半七酒屋』(相生)、『志度寺』(十三)、三味線(野澤三次郎)

●朝日座 替り芸題九日十日の分、『妹背山二段目』(小富)、
一『あこぎ平治内』(小富士、人形治郎造文五郎、内室幸八)、
一『日蓮記三段目』(葉龍、お伝鯉若、上人文五郎)
一『布引小桜ぜめ』(小龍、行綱鯉若、小桜親玉、平治文五郎)
一『忠臣蔵三段目』惣掛合(判官喜若、師直喜樂、勘平文五郎、おかる親玉、伴内鯉若)

□明治40 (1907-06-19) 『台湾日日新報』

●台南の義捐演芸大会

北部陸勇線前進隊慰問のために開かれたる台南の義捐演芸会は愛国婦人会、台湾慈善婦人会、篤志看護婦人会等の在台南各會員諸媛四十四名の發起に係かり、又一面官民中重立ちたる人々七十余名の声援とありて、既記の如く本月十五日の夜より三夜間、台南座に於て挙行さる。一度此舉あることを知りたる市内の官民は、上となく老幼となく皆大いなる同情を以て迎へ、十四日即ち開演の前日に於て、已に早くも千二百余円の入場券は売尽され、其他郭炭来氏の二百四十円及無名氏の五十円等を始めとして、単に寄付のみを申込み来るもの多数にして、人氣は頓に昂騰せり。愈々初日即ち十五日の夜に於ける開演に際しては、午後六時と云ふに已に陸統乎として観覧者は押かけ来り、約一時間を過ぐるの頃は場内全く立錐の余地なきまでに詰め掛け、総員大約七百余名と註せられ、遊廓検査小供連の『式三番』に依て開演し、次に城内外の老妓連の手並みを誇れる素ばやし（正札）唄立吉、三味線三太郎、小鼓奴太鼓金六、一曲を奏したる後、村上庁長夫人は三婦人会を代表して、左の祝辞を述ぶ。拍手は急霰の如くに起りて満場為に轟々然たり。夫れより貴婦人連（夏の曲）の弾琴あり。以下『春の梅』『鶯遷閣』『鎌倉三代記三浦別れ』（遊廓検査）、『藤栗毛』『柿盗人』（有志男連）、『供奴』（台南検査）、『忠臣蔵

一力茶屋場』（遊廓検査）、『千本校道行』（男女有志）等の順序に依て演ぜられたるが、何れも大出来にして、僅々兩三日間の稽古としては誠に天晴なるものなりし。又観客何れも満足の体に見受けられたり。翌十六日の夜も前同様にして、貴婦人連の出物は千鳥の曲弾琴に代へて梅香、金時、立吉（地方）等の『山姥』吾妻太夫（浄瑠璃）、勝次（舞）、三太郎以下四人（地方）等の『北州』を加へたるに過ぎざりし。其他観覧者及場内の光景も前夜と大差なく、場内外の設備は極めて質素なる中に、何処となく壮雅のところありて、入口には大アーチを飾付け、場内も亦却々に手の入りたる飾付けをなしたれば、直に荒涼たる台南座も一見見まがふ程の光景を呈したりし（台南特派員報）

※続いて發起人一同挨拶が載る。翻刻省略。

●夜会の余興 十七日の総督官邸夜会の余興は第一番目『乗合萬歳』舞（一字調）龍、いと子。地方近、糸滝尾繁之助▲第二番目義太夫歌舞伎十八番『勸進帳安宅閑所の段』弁慶竹本大島太夫、（一字調）樗山城太夫、義経つばめ太夫、海尊鞍登太夫。三味線鶴澤仲助、連れ弾き仲治、仲太郎、勝之助▲第三番目『お兼晒し』舞邑子、光菊、梅八、歌小福、小蝶、鈴（二字調）。三味線千代、邑、きく。太鼓勇子。二挺

小太郎▲第四番目ヴァイオリン 彈奏田中正風▲五番目劍舞
田中正風▲第六番目『五人ばやし引拔夏船頭』舞三ね子 鈴子
糸子、鈴奴、三次。歌滝尾、才三、六べ。三味線いと、こい、
繁之助。太鼓、滝龍。笛近といふ顔触れであつた▲芸妓の手踊
はいつも処々で定評もあるから、改めて言はず。こ、には唯
新来の義太夫と劍舞とを聊か紹介しやう▲久しく太極に渴して
居た処へ大隅太夫に重ぐ大島がやつて来たといふ評判は、船が
まだ基隆棧橋へ着かぬ前から人々の口に伝へられて居たので、
当夜参会的面々は固唾を呑み呼吸を殺して聞惚れて居たのも
無理はない。殊に出し物が出し物だけに一層我人の耳を楽しま
した▲先づ大島太夫からいふと成程姿勢態度の沈著充分にあ
り。音吐亦朗々として如何な大席でも一人で背負つて行くに余
りある美声「旅の衣は篠懸の」の出の如きは、久し振りで
成田屋の舞台を観るやうな気がした。山城の富樫、これは大島
に比べれば音声は稍下るが何処までも左衛門然たる態でやつ
て退けたは嬉しかつた。その問答の辺り表情 確かに声の外に
活躍して聞えた、つばめの義経 鞍登の海尊いづれも申分ない。
さて仲助の糸、これはまた其の技 神に入つたとしてもいふもの
か。撥の冴えから手の調子、全く以て多く聞かれぬ妙腕である。
流石は団平の遺弟子だけがあると、敬服に禁へなかつた。唯団平

は人に優れた沈著家であつたのに、彼れは少々気合が掛かり過
ぎるやうに思はれた。けれども此の瑕は彼れの妙技に何等の難
もつけざらしめた。連れ弾の撥 亦大席でなければ聴かれぬ
妙があつた。要するに将来は知らず、今日までには斯かる
名人上手の渡台が無かつたので、待ち焦がれた聴衆の受けはお
話にならず、其の幕となつた時の如きは、さしも物事に騒がぬ
紳士連も、此時ばかりは殆ど狂喜の態で拍手喝采。漸く止んだ
かと思ふと、後はアアといふ感嘆の声。暫くは動揺めき亘つ
た。序ながらお近の笛、是亦舞塵の妙を現した▲次に
田中正風氏のヴァイオリン、中々お手に入つたもの。日比谷辺
りで何の位ヤンヤを言はせたものやら。次に同氏の劍舞、初め
に『曾我兄弟』、二番目に『川中島』を演じたが、二番とも
吟詩も劍舞も一人でやつたには感心した。劍の捌き、吟声いづ
れも嘆賞に値あるが、扇の扱と身振とは、何だかにやけてお座
がさめた。殊に三味線入りの劍舞は、大向ふの受け甚だ宜しく
なかつた(一里者)

●朝日座の淨瑠璃 総督府始政記念会余興出演の為 東京より
有名なる竹本大島太夫、鶴澤仲助の一行が渡台せるを此儘に帰
すを遺憾として、当地の吾妻、魚金、日本亭の三大料亭が請元
となり、昨日より五日間、朝日座に於て興行する事となり、既

に昨夜は鞍登太夫の『十種香』、山城太夫の『油屋』、津ばめ太夫の『弁慶上使』、大島太夫の『堀川』等到大喝采を博し、

到底台湾では聞かれぬ浄るりに孰れも腹を膨らしたる由なるが、今晚二目の物語は左の如く。又木戸は三十銭場代は特別一円五十銭、一等一円、二等八十銭、割二十銭なりと

『御祝儀宝入船』(入登太夫)、『伊賀越道中双六円覚寺段』(竹本松島太夫)、糸(鶴澤仲吉)、『八陣守護城正清本城段』(竹本鞍登太夫)、糸(鶴澤勝三郎)、『本蔵下屋敷段』(竹本山城太夫)、糸(鶴澤仲太郎)、『碁太平記新吉原揚屋段』(竹本つばめ太夫)、糸(鶴澤仲治)、『西国三十三箇所壺坂寺沢市住家段』(竹本大島太夫)、三味線(鶴澤仲助)、ツレ(鶴澤仲太郎)

□明治40(1907.06.22)『台湾日日新報』

●台北倶楽部の義金淨瑠璃 今度始政紀念祭余興出演の為東都より竹本大島太夫一座が渡台せるを機とし、婦人慈善会にては浄るり会を催し、其揚り高を隘勇前進隊の慰問義金に充つる考なりしが、大島太夫の一座が帰国日取切迫し居るより台北倶楽部有志者に委嘱し、明二十三日午後六時より台北俱樂部に於て右の一座を招し、浄るり会を催す事となり、一枚一円宛の切符二百枚限りを発布したるが、大島太夫は此

美拳を賛成し、一座に対する謝金の如きは悉く寄付する筈なりといふ

●十把一束 朝日座の大島太夫は艶物許りを演じて居るが、什麼かといへば艶物には幅がありすぎるから、チト時代物を語つたら甚麼かと思ふ。又津葉女太夫は本筋の浄るりとして歓迎するが、惜い事には声を潰して居るから、聞き人も又胸が苦しいやうな処がある。山城太夫の世話物と来たら実に感心。是一ツで満腹する餠がある(ヨウヨウ連)

●朝日座の今晚の物語左の如し

御祝儀『宝入船』(竹本松島太夫)(鶴澤仲吉)、『彦山権現毛谷村六助住家』(竹本鞍登太夫)(鶴澤勝之助)、『阿波鳴戸十郎兵衛住家』(竹本山城太夫)(鶴澤仲太郎)、『忠臣蔵六段目勘平腹切』(竹本津ばめ太夫)(鶴澤仲治)、『桂川連理柵』(竹本大島太夫)(鶴澤仲助)、大切御好につき歌舞妓十八番義太夫『勧進帳』(太夫総掛合)三味線(仲助)(仲治)(仲太郎)(勝之助)●大島一座を聞く 吾輩は数年前の朝太夫を、下足札で煙草盆叩きながら天下一品と崇め奉つた程の頗る義太通なることを憚ながら一寸断つて置く。偕て一昨夜朝日座の物語、つばめ太夫の『宿屋』と大島太夫の『宿屋』(※「酒屋」の誤記であらう)は少からず吾輩を促したので、アノ百万の蒸気ポンプで

浴せかけられる様な雨の中、御苦勞様にも南門外の寓居から飛び出した、つばめの『朝顔』は余が予想の頗る大なりし丈、少なからず落胆した。聞けば太夫は咽喉を痛めて居るとのことだから、無理もないが、要するに徹頭徹尾声が足りない、肝心なところに少しも身が入らぬ、ドーしても吾人が胸臆に潜む或ものに触る、ことを得ぬ。御気の毒ながら頗る不感服仕つた、大島太夫の三勝半七は半兵衛と宗岸の語り別け、ドーも明瞭でない、ソレに時々余計な言葉を加へたりするなどは耳障りなること限りなく、半兵衛が吠がつて咳込むところなどは、あまりに故意とらしい、「今頃は半七さん」、以下さわりの分は少々聞くに足れりと思ふ。尤も之も或は吾輩一人かも知れぬ、要するに不出来であつた、大切の『勸進帳』の総掛合、吾妻の芸者三人は天神様の成損ね見た様な恰好して、笛吹いたり鼓打つたり、甚だ賑かではあつたが、之も好か悪いかは言はぬが花として置く。聞けば一座は檜舞台では第三流とやら斯く言ふのは少々酷かも知れぬが、吾人は一座に対する要求の大なりし丈、ソレ文失望の度を強からしめた訳だ、然し天狗連の素人義太の外には滅多に聞かれぬ台北の天地だけ、毎夜の大入は魂消たものなり（おの字）

●朝日座の浄瑠璃 島田法官部長談

島田法官部長は厳正、不レ可レ侵好法官であつて、青年時代より今日の栄職に登る迄の間には、頗る大波瀾ある歴史を有して居つて、特に今日の学生諸君の爲めには立志談的の事蹟ある人で、不日記者は其小伝とも云ふべきものをものして之れを江湖の学生諸君に問はんと欲して居るが、此人又至つて或理由よりして浄瑠璃に堪能であつて、台北に於ける斯界のオーソリチーたる人は人も許し、恐らくは自己自身も許して居らるゝであらう。今此適評者たる氏の談片を得たれば、茲に掲載する事とした、一座は勿論聴者の参考となるは、蓋し少なからずと信せん先づ大島太夫一行を総評すると、台湾では実に空前であつて斯界に渴して居つた吾々は、少なくとも十年は寿命が延びたやうな心地がする。即ち或る点迄は其技倆を認めるに吝かならぬのだ▲乍併彼の太夫を以て、撰津大隅を除けば之れを推すなどと過賞しては大反対である。先づ彼の特長から云へば、声の丈夫と腹の強いのは如何にもドツサリたる資格を供へて居るが、其欠点から言ふと元来浄瑠璃は所謂美文であるから、其文勢に添はねばならぬ。然るに彼は非常に單調で一氣呵成で、只聴者をして厭はしめざる、所謂人氣一片であると云はねばならぬ。換言すれば汪洋たる大河のその如く悠々として迫らざる処もあれば、激流奔湍碎けて散ずる其飛沫は人をして思は

ず悽然たらしめ、或は鉄腸を割き、或は涙窩を開かしめ、或は又恍然自失せしめねばならぬ苦の者だ。然るに聴者をして一句一章を味しむるの余地、毫も留めざるに至りては、決して大家と賞するに足らぬ▲又浄瑠璃系統から云ふと彼は決して大阪系統ではない。換言すれば本筋ではない。東京の素人を相手に、只ドースル連を喜ばしむるのみで、断じて破格である▲以下二枚目三枚目に至りては却て純粹の大阪系統、所謂正格であつて、上がたらぬとか腹が弱いとか、何れも自然の欠点は免れぬが、却て敬服するの価値ありだ▲三味線仲助はなかなか感心な腕前を持つてゐる。如何にも立三味線として毫も不服はない。団平の門人だと言ふが、弾き振りから掛声に至る迄よく似て居る。之れは争はれぬ証拠である▲乍併初日の時に三味の糸を切り、狼狽を極めて替三味線さへも用意せず、不得已連引きの三味を奪つて続けたなどは、如何にも聴者に不礼なるのみならず、軽卒の誹は免れぬ。もしも此時連引きが居なかつたならばどうする積か。実に冷汗背に流れた▲終りに不思議なのは、何故に二枚目三枚目は世話時代をやつて居るのに、ドツサリが世話許りをやるのか。之では資格顛倒で実力の判断はつかぬ。之れは自尊心の上から註文の如何に関らず、是非時代も語つて聴者に実力を示すの義務がある云々

明治40 (1907.08.09) 『台湾日日新報』

●義捐義太夫会決算 曩に有志者に於て、隘勇線前進隊慰問義捐の目的を以て、台北クラブにて開会したる大島一座の義太夫会は収入百二十五円、支出百三十四円二十六銭五厘にして、内百円は義捐金に充て、他は雑費に使用したるが、不足金九円二十銭余は有志者に於て寄付せられたりと

明治40 (1907.08.17) 『台湾日日新報』

●老松連の浄瑠璃会 老松連にては今回芸妓となりし同連の師匠竹本重八に花を添へんとて、本夜七時より一力楼上にて浄瑠璃会を催す由なるが、其語り物は左の如し

『日蓮記勸作住家』(都水)、『菅原寺子屋』(十三)、『紙治茶屋場』(柳枝)、『鏡山又助住家』(鱗)、『十種孝』(雨凌)、『御所桜弁慶上使』(不二)、『忠臣蔵六ツ目』(三洋)、『梅忠新の口村』(貴昇)、『一の谷熊谷陣屋』(勝木)、『鎌倉三代記三浦別れ』(松鶴)

明治40 (1907.09.20) 『台湾日日新報』漢文版

●北投淡水観月列車 鉄道部訂以來二十一及二十二之両日。運転其中秋観月之列車。其場所廿一夜為北投及淡水、廿二夜則僅在北投、往復車資。北投二十銭。淡水二十五銭。雖可各乘列車

以行。然至適意而歸。応乗淡水十時出發之臨時列車。他如通用之車票。則北投限二日間。淡水限一日間。其赴北投者。即一泊乃歸。仍無妨碍也。○北投之設備 自停車場迄溫泉場。各處皆点有枝灯。照耀道路。浴場及茶店。則滿飾紅灯。由北投俱樂部始。多有眺望絕佳之處。其間各置坐椅數十隻。以便休息。且設飲食路店數軒。材料既皆新鮮。價格尤極低廉。可以供客之需。外此余興所関。則北投俱樂部。有芸妓開演手踊及淨瑠璃(曲名)等。此事該地支庁長自為中心点。民間有志者。亦訂各表大熱心以歡迎之。○淡水之設備 于停車場棧橋。約備端艇五艘。以小輪船曳之。而至于海水浴場。凡午后抵淡水駅之乘客。皆妥為引導之。該浴場亦置有坐椅數十隻。及草席約百枚。以為觀客之便。又設飲食店二所。材料之新鮮与價格之低廉。亦与前同。其余興之所計畫。尚將放煙火至數十發云。

□明治40 (1907.11.29) 『台湾日日新報』

●送別 淨瑠璃會 女太夫の利物にして珍重されたる竹本重八が、今度帰国するに就き、来る二十九、三十の両日午後五時より、朝日座に於て浄るり會を催す由にて、其語物は左の如しと

『鈴ヶ森』(一声)、『太十』、『壺坂』(国芳)、『関取二代鏡』(一鳳)、『柳』(小柳)、『八陣』(梅枝)、『朝顔宿屋』(寿)、『皿屋敷』、『三

日太平記』(白鳳)、『御殿』(小嵯峨)、『菅四』(都鶴)、『日吉丸』(榮旭)、『忠四』(十三)、『逆櫓』(相生)、『沼津』(常盤)、『忠六』(山水)、『日蓮記』(都水)、『安達の三』(三洋)、『野崎』、『三勝』(柳枝)、『蝶花形』(龜鶴)、『柳』(叶)、『陣屋』(三笠)、『安達の三』(团治)、『太十』(松鶴)、『鳴門』(南木)、『すし屋』(三ヶ月)、『二十四孝』(雨綾)、『陣屋』(勝木)、『又助住家』(鱗)、『御所桜』(肥声)、『揚屋』(瓦笑)、『堀川』(鈴八)、『明烏山名屋』、『梅忠新口村』(竹本重八)、『総掛合』(茶屋場)、『由良之助』(十三)、『力弥』(国芳)、『平右衛門』(相生)、『伴内』(梅枝)、『おかる』(柳枝)、『九太夫』(白鳳軒)、『千崎』(松鶴)、『矢間』(一声)、『竹森』(都鶴)、『仲居』(龜鶴)、『亭主』(勝木)

□明治40 (1907.12.11) 『台湾日日新報』

●北埔義金淨瑠璃大会 当地素人義太連の有志発起となり、十一、十二の両日午後六時より、朝日座に於て浄瑠璃大会を催し、其の収入金を以て北埔事変遭難者に義捐せんとし、一人十五銭の入場料にて、お聴に達する由、而して初日二日目の語り物は左の如し

『妹背山御殿』、『忠臣蔵二段目』(寿)、『太平記十』、『日吉丸三』(治鶴)、『加賀見山又助内』、『先代萩御殿』(南木)、『百度平』、『

『忠臣蔵六』（一声）、『彦山毛谷村』、『お染久松質店』（初下り

照月）、『お俊伝兵衛堀川』、『聚楽町梅の由兵衛』（国芳）、『布

引四』、『岸姫松三』（相生）、『忠臣蔵赤垣出立』、『壺阪』（鐘龍）、

『沼津』、『忠臣蔵四』（十三）、三味線（照月）（鐘龍）、初日目

掛合、『朝顔日記宿屋』、みゆき（国芳）、岩代（照月）、駒沢（一

声）、下女（治鶴）、徳右衛門（相生）、三味線（鐘龍）、二日目

掛合、『太功記十段目』、は、（南木）、みさを（一声）、重次郎

（治鶴）、初菊（国芳）、久吉、光秀（相生）、三味線（照月）

明治40（1907.12.19）『台湾日日新報』

●浄瑠璃大会の義金 去る十一十二の両日、朝日座に於て催

したる当地素人連の浄瑠璃大会は、其の趣旨北埔事変遭難者へ

の義金を得ん為めにありしを以て、其の純益金五十七円三十八

銭を、本社へ託送方申込み来れり

明治41（1908.01.12）『台湾日日新報』

●互友連浄瑠璃会 本日午後六時より府前街遠藤写真店に於

て同連の浄瑠璃会ある由、其語り物左の如し（聴手随意）

『儀作内』（一声）、『ちやり野良子屋』（梅枝）、『柳』（柳枝）、『御

殿』（南木）、『逆櫓』（相生）、『鈴ヶ森』（亀鶴）、『玉三』（勝木）、

三味線（竹本鐘龍）

明治41（1908.01.14）『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会 蒼連改め東寧連の素人浄瑠璃会は、本日午後

六時より新起街一力に於て開催する由、其語物は左の如し

（参聴随意）

『酒屋』（二口）『亦助住家』（都八）、『御殿』（都鶴）、『妹背山

御殿』（可朝）、『本蔵下屋敷』（鱗）、『沢市内』（不二）、『柳』（小

嵯峨）、『十種香』（山水）、『国性爺楼門』（三洋）、『朝顔浜松』（亀

鶴）、『玉三』（勝木）、『松王屋敷』（松鶴）、『弁慶上使』（肥声）、

『五郎助住家』（清花）、掛合『太十』光秀（可朝）、十次郎（亀

鶴）、初菊（小嵯峨）、操（鱗）、皐月（都鶴）、久吉（清花）、

三味線（東太夫）

明治41（1908.02.16）『台湾日日新報』

●稽古屋観 李士太郎

（浄瑠璃東太夫）

突き当りの欄間には黒塗の連名札が掲げられてある、蒼連改め

東寧連と書いた札を第一番に不二、三洋、松鶴、亀鶴、可笑、

鱗、米花、小蝶、南勢、喜楽、小嵯峨、都鶴、などの連名がズ

ラリと並べられ、更に黒札四枚を隔て、毎月休み日、十日廿日の札が敷りとなつて居る。

向うに閉て切つた障子の奥には次の間も、或は次の次の間もあるかは知らぬが、見た処四畳半と他に畳一枚と半間の押入があるのみで頗る手狭のやうだ。

四畳半の中央にブラ下る洋灯の下、壁を小楯に主人の豊竹東太郎、三味線膝に見台引付けて、ムンズと座を構へた横には西門外街の世話方、何でも屋の安さんと云ふ男、箱火鉢の薬缶から急須に湯をついで、大に幹旋して居るその向う側には詰めかけた連中三名、壁に凭れて兀然たり、伸せば手の届く上り端、勝手元の側には張り替への三味胴が十重二十重の金剛縛り、恰かも戒具を施された四人の如くに転がつて居る連中の一人は見台に向つて座を直した、名は都鶴、頭髮の疎い一寸見は老人のやうな、その癖若い人、此家では古い唸り人であるさうな、三味線の糸はテンと弾かれた、此の処語ります浄瑠璃の芸題は『箱根靈驗滝の場』だ。「忠孝の身にも因果は廻り来る片輪車の飯沼を乗せて綱手を初花が」静かに語り出される、却々調子のいい語り口だ「勝五郎さん此処ら辺りは山家ゆゑ」可愛らしい初花の詞が路次の奥まで透る様で、座は森として来る。「法事を手がかりに敵の安否をア、コリヤ壁に耳」

此辺から稽古本の紙幾枚かゝ刎ねられ「後に立切る障子をさつと」と滝口上野の出に文句を飛ばす、折から遅がけながら連名の筆頭不二太夫が聊か酔ふた赤い顔を油をぎらして這入つて来た、都鶴さんは最う車輪の体、滝口、初花、勝五郎早蕨、以上四名の口跡、使ひ分けも鮮やかに滝口の引込みとなり。又紙を飛ばして筆助の二度目の出になる。師匠の東太夫、此時頃の辺りへ手をやつて蚊を払ふ、都鶴さん益々大得意「一向奴めはとんと訳が分らない夢ではないか、と呆れ顔」この「夢でないか」の処を「あき——い、れエ——がア、ほ」と三度計り語り直し「武運も光る玉櫛笥」惜い惜いと漸く一段を終つた、「却々結構ですナア」と不二君が賞讃する、都鶴さん会釈して引下ると東太夫一寸一服、さし代つて見台に向つたは張物屋、喜楽さんの『皿屋敷鉄山館』だが、これは日が浅いと見えて師匠に随いて唸つて居る。紙なら四五枚処で退却する、今度は不二さんの番で、既に出来て居る『阿波十』のお浚へだ。今日は酔つて居りますからと「順札歌」を抜きにし、お鶴の詞になつて大分咽喉が乾いたらしく、ガブガブと湯を呑み初めたが、声は全く涸いて仕舞ひ、頗る苦しさうだ。兎に角語り終つてホツと一息「明日の晩が思ひやられる」と自らの御懸念、蓋し明夜はいづつかの井筒館で連中の会があるのださうな、連中はそろそろ座を立ち

初めた、向うの壁を見ると小間物屋、てんぐの柱磨が掛けてある。浄りの稽古場に天狗屋の引札、面白い配合だ、若い連中の一人は、ドレー風呂お先へ失敬と出で去った。僕も続いてお暇ま……三尺の路次を突とお通へ出ると陰暦十三夜の月は寒むさうに冴えて電線を渉る風の音、思ふに今し方出て行つた男は、湯気立籠る栢榴口を晴れの床として、その声その節廻し、三助の你やが眼を丸くする程度に大発揮をして居るであらう

□明治41 (1908-02-19) 『台湾日日新報』

●基隆雀連の浄瑠璃会 同地雀連にては昨今の兩日公会堂に於て浄瑠璃会を開催せる由なるが、三味線は三次郎にて各料理店の芸妓連も之に加はる筈なりと云ふ。其語物は

『安達ヶ原三』(可笑)、『三日太平記九』(ねぶか)、『忠臣蔵三』

『福雀』、『日吉丸三』(呉服)、『紙治内の場合』(小ふじ)、『野崎村』

『京糸』、『玉藻前三』(大石)、『太功記十』(弥生)、『鏡山又助内』

『吾才』、『本蔵下屋敷』(十雀)、『阿波鳴戸八』(かしく)、『大

日本旭旗揚旅順攻撃』(小)、『壺坂沢市内』(松雀)、『彦山九

ツ目』(糸雀)、『千本校三』(吾勇)、『二十四孝十種香より狐火

まで』総掛合(小ふじ、若奴、小妻、琴治)、『以上十八日分』

『の谷能谷陣屋』(一聞)、『鏡山又助内』(福雀)、『梅の由兵衛内』

(小妻)、『菅原松王屋敷』(ねぶか)、『中将姫雪責』(春助)、『太功記十』(駒之助)、『三十三間堂平太郎内』(大石)、『賢女鑑十』(弥生)、『日吉丸三』(吾才)、『忠臣蔵六』(糸雀)、『紙治内の場合』(松雀)、『お俊伝兵衛堀川』(小)、『阿漕浦平治内』(十雀)、『四ツ谷怪談伊右衛門内』(かしく)、『百度平内』(吾勇)、『伊勢音頭』総掛合(糸雀、小、やよひ、吾勇、かしく、十雀)、『以上十九日分』

□明治41 (1908-02-21) 『台湾日日新報』

●聯合浄瑠璃会 基隆台北の素人連聯合して二十一、

二十二、二十三の三日間、新起横街台北座に於て浄瑠璃大会を

催す由、開会時間は午後六時よりで、木戸場代無料。出席人名

左の如し

一声、梅枝、柳枝、相生、南木、勝木、松鶴、小柳、小勢、亀

鶴(以上台北)。吾勇、十雀、大石、弥生、糸雀、小、(以上

基隆)

而して大切掛合としては初日『伊勢音頭油屋』中日『菅原

寺子屋』三日目『お染久松野崎村』なりと

□明治41 (1908-03-06) 『台湾日日新報』

●東寧連の浄瑠璃会 当地東寧連の連中数名は、今明両日午後六時より、朝日座に於て浄瑠璃会を催す由にて、その語り物番組は左の如くなりと

『阿波鳴門八ッ目』、『鎌倉三代記』（一水）、『加賀見山又助内』、『壁錢別場』（一笑）、『日吉丸三段目』、『岸姫松三段目』（米花）、『先代萩御殿』（都鶴）、『太功記十段目』、『蟻七上使』（可笑）、『由良港汐汲』、『三十三間堂』（だるま）、『菅原四段目』、『本藏下屋敷』（鱗）、『忠臣蔵二番目』、『信功記』（南勢）、『阿漕平治内』、『加賀見山又助内』（於多福）、『壺坂花の山』、『御所桜三段目』（不二）、『壺坂花の山』（小嵯峨）、『百度平内』（小蝶）、『忠臣蔵六ッ目』、『国姓爺』（三洋）、『皿屋敷』、『太功記七ッ目』（喜楽）、『朝顔日記浜松』（亀鶴）、『壁仇討十一段目』、『三日太平記』（白鳳軒）、三味線東太夫、小蝶

□明治41（1908.03.14）『台湾日日新報』

●基隆の浄瑠璃会 来る十六日、基隆日本亭に於て雀連の浄瑠璃会を催す由にて、其語り物は左の如くなりと

『太功記十段目』（紅雀）、『三日太平記三』（ねぶか）、『本藏下屋敷』（福雀）、『忠臣蔵裏門』（小）、『玉藻前三段目』（大石）、『賢女鏡十』（弥生）、『日吉丸三ッ目』（吾才）、『鏡山又助住家』

（十雀）、『忠臣蔵六ッ目』（糸雀）、『二代鏡秋津島内』（かしく）、『お俊伝兵衛堀川』（吾勇）、『三勝半七酒屋』（松雀）、大切『忠臣蔵茶屋場』総掛合、三味線三次郎

□明治41（1908.03.27）『台湾日日新報』

●朝日座の素人浄瑠璃会 本日午後五時より朝日座に於て西門外街の安原会主となり、東寧連の特別温習会を開催する由、今其の語り物を聞くに左の如し

『御所桜の三』（一笑）、『合邦下の巻』（巴昇）、『加賀見山の五ッ目』（米花）、『本藏下屋敷』（十二）、『寺子屋』（都鶴）、『日吉の三』（於多福）、『壁の仇討十一冊目』（鱗）、『岸姫の三』（不二）、『壺坂沢市内』（小嵯峨）、『平衛門の切腹』（喜楽）、『三日太平記九ッ目』（亀鶴）、『逆櫓』（白鳳軒）、三味線（東太夫）等

□明治41（1908.05.01）『台湾日日新報』

●鞍馬連の浄瑠璃会 明二日午後六時より、西門街法曹俱樂部に於て鞍馬連浄瑠璃会を催す由にて、其語り物は

『梅川忠兵衛新の口村』（都水）、『松王下屋敷』（五二九）、『二度目清書』（二葉）、『白石嘶揚屋』（古亭）、『箱根滝の段』（蘭風）、

掛合『堀川の段』、母（呂三）、おつる（蘭風）、伝兵衛（同）、おしゆん（都水）、与次郎（古亭）、糸（八重吉）、ツレ（千賀子）

□明治41（1908-05-12）『台湾日日新報』

●朝日座の浄瑠璃会 同座には昨今の両日、基隆雀連の温習会
ある由し

『宿屋』（梶子）、『大日本旭の旗上げ旅順攻撃の段』（小）、『赤垣出立』（弥生）、『忠六』（糸雀）、『菅四』（十雀）、『鳴戸の八』（かしく）、『百度平内』（吾勇）、掛合『油屋』、貢（糸雀）、喜助（かしく）、北六（叶）、お鹿（吾勇）、岩治（弥生）、おこん（小）、万野（十雀）、三味線野澤三次郎

□明治41（1908-05-15）『台湾日日新報』欄外記事

●合同浄瑠璃会 当地東寧連と桜鳴連合同し、十五、十六の両日朝日座に於て開催する筈にて、其語物左の如し
〔数行版面範囲外〕

『吉原』（友枝）、『本蔵下屋敷』、『重の井子別』（松鶴）、『御所桜三段目』、『忠臣蔵四ツ目』（白鳳軒）、糸（東太夫）（小蝶）

□明治41（1908-05-29）『台湾日日新報』

●朝日座の娘浄瑠璃 次興、行物 仕入の爲め、目下内地へ赴き居る三戸朝日座主は、今度大阪にて娘浄瑠璃の一座を約束し、近日同道帰合し、来月早々蓋を開ける由なるが、真打の小浪は京阪中にて美貌、美声の評あるものにて、顔振れは左の通りなりと

豊澤町之助（一六）、竹本亀之助（一六）、豊竹尾の治（一四）、竹本咲栄（一八）、竹本千代治（二二）、豊竹光玉（二三）、竹本小浪（二七）、三味線豊澤町七

□明治41（1908-06-09）『台湾日日新報』

●朝日座、今晚の語り物は左の如し

『近江源氏八つ目』（亀之助）、『伊賀越沼津の里』（尾の治）、『彦山権現九つ目』（浪亀）、『二十四孝四段目』（浪栄）、『阿波鳴門八つ目』（光玉）、『安達原三段目』（小浪）

●朝日座の娘義太夫 名代男

評者は遅れ走せに朝日座の三日目を見聞に行つた、亀之助の『大江山』と尾の治の『合邦』とが済んで、今や浪亀が盛んに『酒屋』を語つて居る、弾語りでないだけに難有い、聴て惜し惜しで御簾が下りた、次ぎに代つて頭れたのは美貌を以て名あ

る浪榮『日吉の三』と云ふ出し物で大車輪、簪落ち、リボン飛

び、束髪崩れて散し髪、チオイチヨイと利かすケレンに、無性

に聴者を唸らせ、非常の喝采に送られて高座を退くや、次に踊

れて語り出したは光玉の『堀川』節廻しも巧みにて、お剩けに

大汗の景物さへ添へたれば、聴手一同は大満足の体、殊に猿廻

しになつてからの連弾きには、甘い甘い連発銃、パチパチの

拍手豆を炒る如し、次ぎに「待つて居ました」の声に迎へられ

たは取語りの小浪『腰越状三段目和泉三郎の館』語り口の確か

りしたのと、声の宜いのとで随分大いものも行けることを示め

し、肩衣一つピリツともせぬ。ドツサリにお目留められませう

と云つた塩梅、ヤンヤと云はせて打出したと褒め上げたら、

読者は定めし多寡が垂れ義太、評者を以て肩入れの一人に数へ

んが、女に免れぬ仮名読み違へ絶句もなく、訛りもなかつたは

實際だ、別けて町造の勉強は三段も三味線も勤め、しかも功妙

の撥に語り手を導く処、同じ物でも楽に語らするの徳ありて、

久し振りで溜飲を下げる、これを要するに此の一座の

客種は、三四郎連四分に、助右衛門連三分、残り三分は堂摺連

と見ば大差なからう

●朝日座娘義太夫の打揚げ 初日以来大人気なりし朝日座の娘義太夫も既に興行二十日に及たれば、愈よ明二十五日を以て打揚(版面切のため不可読)

□明治41(1908-06-26)『台湾日日新報』

●●●●● 歡迎余興 来二十七夜。訂在新築彩票局為新方伯及令夫人開歡迎会一事。聞其余興如左。即六玉川為台北檢。六歌仙為高砂

檢。淨瑠璃芳衛総踊為台北檢。石橋為艋舺檢是也。

※「彩票局」は「彩票局」の誤、官宮宝くじ。「新方伯」は直前の記事に「大島方伯」とあるため、先月(明治41年5月)に着任したばかりの民政長官・大島久満次。

□明治41(1908-09-19)『台湾日日新報』

●鞍馬連淨瑠璃大会 明日午後六時三十分より法曹俱樂部に於て鞍馬連の淨瑠璃大会開かる、由、語物の順序は左の通りなりと

『御祝儀宝入船』(可)、『壺坂』(二重)、『毛谷村』(古亭)、『忠臣蔵四』(蘭風)、『二度目清書』(二葉)、『八陣』(都水)、『布引四』(一二三)、『平次住家』(冬木)、『三日太平記』(呂三)

□明治41(1908-06-24)『台湾日日新報』欄外記事

□明治41 (1908.10.03) 『台湾日日新報』 漢文版

●●●南部撮要 (九月三十日発)

▲大懇話会 愛国婦人会台南委員部。為冀会移之発展。此次将開會員大会。訂来二日以新設劇館南座為会場。定是日下午五勾鐘。開大懇話会。聞台湾支部長大島信子。亦欲与会焉。余興即高松最新式活動写真及義太夫等々。此外参会者。擬供以茶菓並鮎醋飯等。会費分文不要云。

□明治41 (1908.11.10) 『台湾日日新報』

●共進会の浄瑠璃 本日は共進会、臨時余興として午後六時

より浄瑠璃を余興場に催す由にて。其語り物は左の如しと

『大閤記十段目』(鳳玉)、『忠臣蔵六段目』(米花)、『鈴ヶ森』(亀鶴)、『先代萩御殿』(松鶴)、『八百屋』(南木)、『百度平』(一声)、

『寺子屋』(十三)、中入後『御所桜』(肥声)、『三勝酒屋』(相生)、

『璧仇討』(白鳳)、掛合『本蔵下屋敷』(南木) (松鶴) (一声) (亀

鶴)、糸(かね龍) (東太夫)

□明治41 (1908.11.18) 『台湾日日新報』

●鞍馬連浄瑠璃会 本日は午後六時より西門街法曹俱樂部にて

開催、語物左の如し

『壺阪沢市内段』(都水)、『玉藻前三段目』(五二九)、『岸姫松三段目』(呂三)、『佐倉曙儀作内』(呂三)、『忠臣蔵四段目』(蘭風)、『彦山九ツ目』(古亭)、『大功記十段目前』(二重)、『同十段目奥』(二葉)、三味線(八重吉)

□明治41 (1908.12.04) 『台湾日日新報』

●天狗連浄瑠璃大会 柳枝、十三、相生、白鳳軒、其の他当地在住天狗連は忘年会の爲め、来る六日より三日間朝日座に於て浄瑠璃聯合大会を催す由にて、中には新顔の若手太夫、一三三といふが加はりて、大に聴衆を堂摺らせる由

●給仕日誌(木曜日)

六日から素人浄瑠璃連の忘年うなり会を催すとのことだが、気の早いこと夥だしい、恐らく今年の忘年会の先だらうなア

□明治41 (1908.12.06) 『台湾日日新報』

●朝日座の浄瑠璃大会 今六日午後六時より三日間、朝日座に於て開催さる、臺北浄瑠璃聯合大會の語り物は左の如し

▲初日『弁慶上使』(一鳳)、『彦山権現の九』(米花)、『二度目

の清書』(珍寶)、『三日太平記の九』(雷雀)、『皿屋敷』(鱗鳳)『鏡山又又住家』(東福)『太功記尼ヶ崎』(松鶴)、『志度寺』(白

鳳軒』『寺子屋』（柳枝）、『合邦』（相生）

▲二日目『忠臣蔵六段目』（常盤）、『紙治内』（一聲）、『日吉丸三段目』（東福）、『朝顔日記濱松』（亀鶴）、『先代萩御殿』（三洋）
『鏡山五段目』（肥聲）、『菅原四ツ目』（松鶴）、『玉葉の前三度目』（相生）、『御所櫻三段目』（白鳳軒）、『白石嘶揚屋』（柳枝）

▲三日目『基盤太平記揚屋』（鱗鳳）、『鏡山五段目』（米花）、『伊賀越六段目』（常盤）、『忠臣蔵六段目』（三洋）、『阿波鳴門子別れ』（一聲）、『弁慶上使』（肥聲）、『菅原寺子屋』（一鳳）、『白木屋鈴ヶ森』（亀鶴）、『太十』（柳枝）、『お俊伝兵衛堀川』（相生）、『合邦玉手物狂ひ』（白鳳軒）、『千両幡』掛合（白鳳軒、相生、柳枝、一聲）

□明治41（1908.12.12）『台湾日日新報』漢文版

●慈善演芸 汎愛慈善会。本日及明日将在鉄道旅館。開会演芸。其首日演芸種目。係開会之詞。及事業幻燈。活動写真。歌唱田村（伊藤欣造氏）熊坂（松本鉄治氏）淨瑠璃（鞍馬輩）講談（秦秦斎柏葉）落語（同上）三曲（生田流 笹川夫人 白井夫人 賀田夫人 竹因夫人）奏樂洋琴（西時愚提礼斯氏）（同夫人）演説（村田誠治氏）予定午後六時開会。至十一時閉会。当夜鉄道旅館。修飾美麗。且開放任來会者縦覧云。

□明治41（1908.12.16）『台湾日日新報』

●鞍馬連淨瑠璃会 今晚六時より法曹俱樂部に於て鞍馬連の淨瑠璃会あり。又幕間には新起街の上田屋が蓄音機を据ゑて種々の謡曲をお慰みに供ふといふ。さて芸題は

『玉三』（五二九）、『古八』（都水）、『鏡山又助内』（冬木）、『大功記七ツ目』（二葉）、『伊賀越六ツ目』（古亭）、『千本桜鮎屋』（蘭風）、『本蔵下屋敷』（呂三）、大切『関取千両幟』掛合、猪名川（五二九）、女房おとわ（都水）、鉄ヶ嶽（呂三）、三味線（竹本八重吉）

□明治42（1909.3.04）『台湾日日新報』欄外記事

●鞍馬連淨瑠璃会 明晩六時より、法曹俱樂部に於ける鞍馬連淨瑠璃会の語物左の如し

【以下版面外】

□明治42（1909.06.19）『台湾日日新報』

●一昨日の城内 一昨日は始政紀念日として官衙は素より各会社・商店も業を休みて祝意を表したれば日中の暑にも恐れず市中も賑合ひ種々の催しも人出多かりし
（四項目略）

▲市場の出入 始政紀念の祝意を表して煙花の打揚げ、八角堂には素人淨瑠璃、其他さまざまの夜店、軒を連ねて人の足止をなしたること、て、宵の中より構内は人波を打つて身動きもならぬ混雑を呈せり。中にも氷店の如きは早や八時より売り切れとなり、どしどし客を断る好景氣にて、何の店も相当の売行きを見、商人大喜び、見物大熱々の体なりし

●朝日座 今晚の語物

『加賀見山又助住家』(浪之助)、『太十』(浪亀)、『酒屋』(浪栄)、『熊谷陣屋』(千浪)、『百度平』(小浪)、新内『関取千両幟猪名川内』(玉菊)

□明治42 (1909-07-09) 『台湾日日新報』

●基隆の女義太夫 此程まで朝日座にて興行せし女義太夫一座は一昨夜より基隆公会堂にて、向ふ一週間興行を始めしが、其収益の一部は同会堂へ寄付する筈なりと

□明治42 (1909-08-17) 『台湾日日新報』

●南部だより 南部演芸界を大観すれば、彼の台中の台中座は姑く措き、嘉義以南は高松同仁社の興行独占と云ふも過言にあらず、即ち嘉義には嘉義座を、台南には南座を、打狗には

打狗座、阿緱には屏東座を新築し、最も巡業の便を得たり▲右の内、南座の建築は稍や、他のものと異なるも嘉義座、打狗座、屏東座は殆んど同型同規模の劇場にて、何れも定員八百と称し、其地方に比し不足なき建築なり▲目下南部の興行は嘉義座の活動写真、台南座の新演劇、南座の娘義太夫、打狗座の奇術、及び喜劇並びに幕間の活動写真にて、屏東座は休業中なるが、尚ほ此の他にも時々同仁社の手に寄席の色物などの一座を連れ来り、台南公館に興行することあり。兎に角台中以南は入れ物には不自由を感じざるに至り、各種の娯楽趣味を供給せらるるに至りぬ▲台北にては榮座の新俳優に對し退去及び戒告をなしたる由なるが、台南座出勤の菊田逸郎と云ふ新俳優も今回其筋の注意を受け、台南を退去せざるを得ざることとなり、十三日出発、台北に赴きたり。同人、台中座鱗落しの際招かれたる金重会の殘党にて、以来台南に腰を据ゑ居る内、芸娼妓は元より終には有夫の婦と關係し、良家の家庭を紊したるの罪に坐したるもの、由なり

□明治42 (1909-08-22) 『台湾日日新報』

●義捐素人淨瑠璃會 大阪大火義捐の爲め、明後二十四日より三日間、朝日座に於て慈善素人淨瑠璃會を催ふす由にて、

入場券は一枚十五銭均一。語物は

『平治住家』（一声）、『宗五子別れ』（梅枝）、『岸姫松兵衛館』（米花）、『加賀見山又助住家』（常盤）、『日吉丸五郎助住家』（珍宝）、『皿屋敷鉄山館』（鱗鳳）、『玉三』（花笑）、『染分手綱沓掛村』（雷雀）、『阿波十』（語蝶）、『壺坂沢市内』（小嵯峨）、『藤栗毛並木』（吾勇）、『太十』（燕司）、『蝶花形八ッ目』（三洋）、『朝顔浜松小屋』（亀鶴）、『宗五郎子別れ』（勝木）、『松王屋敷』（松鶴）、『弁慶上使』（肥声）、補助、『本蔵下屋敷』（柳枝）、『酒屋』（相生）、『合邦住家』（白鳳軒）、三味線（東太夫、松助、アイ）尚ほ大切掛合は初日『寺小屋』、二日目『忠臣蔵六ッ目』、三日野『目崎村』なりといふ ※「野目」は誤植

□明治42（1909.09.01）『台湾日日新報』

●義捐浄瑠璃 延期に延期を重ねし大阪火災義捐素人浄瑠璃大会は、愈々準備整ひたれば、来る一日より三日間、毎夜朝日座に於て開催する事となり、演題は既報の分と多少の変更ありたり。左の如し

『阿漕平治内』（一声）、『岸姫松』及『毛谷村住家』（米花）、『日吉丸三段目』及『二度目清書』（珍宝）、『玉藻前』（花笑）、『千本桜すしや』及『沓掛』（雷雀）、『壁滝』（鱗）、『日吉丸三』及

『杉の森』（語蝶）、『壺坂』及『合邦』（小嵯峨）、『太十』及『駒才三鈴森』（燕司）、『蝶花形』（三洋）、『浜松』及『五右衛門釜入』（亀鶴）、『宗五郎』及『百度平』（勝木）、『太十』及『先代萩』（松鶴）、『弁慶上使』及『亦助住家』（肥声）、『四谷怪談皿屋敷』及『秋津島切腹』（白鳳軒）、掛合、初日目『忠臣蔵本蔵下屋敷』本蔵（松鶴）、伴左衛門（雷雀）、三千歳（亀鶴）、家来（燕司）、若狭之助（小嵯峨）。同二日目『菅原四段目』松王（肥声）、玄蕃（亀鶴）、源蔵（勝木）、戸浪（松鶴）、千代（小嵯峨）、百姓（燕司）。同三日目『忠臣蔵六ッ目』勘平（一声）、かや（三洋）、郷右衛門（米花）、弥五郎（亀鶴）、角兵衛（雷雀）、種ヶ島六（小嵯峨）、減法弥八（肥声）、三味線竹本松助、同たつ女、豊竹東太夫

□明治42（1909.09.18）『台湾日日新報』

●愛国婦人会活動写真 愈々来る二十一日より、台北演芸場に於て開催する愛国婦人会の活動写真は、最初一週間を成るべく内地人の趣味に適合する写真を選び、跡の一週間を以て本島人の嗜好に適合する写真を選択する由なるも、強ち内地人当ての興行本島人当ての興行といふ區別なければ、そは観覧者の随意なるべきが、凡て

活動写真には瓦斯や器械の音が囁きと、光線の発射が眩しとの欠点免れずして、婦人などの中には長時間の映写を嫌ふ向もあれば、耳を休め眼を休める一策として、且つ其趣味を多からしめんが為め、旧劇の映写には、特に前後に義太夫を語らせ、此間に耳と眼とを休め、扱愈々舞台懸りとなる頃より写真を描写し、活動と相俟ちて興味を深からしめ、尚映写終りて後も、義太夫を継続して其一幕を完了せしむる筈なりと。入場券は一等一円、二等五十銭、三等三十銭にて、殊に小供の観覧料は一層安く、一等三十銭、二等二十銭、三等十銭の割合なり。尚前号に紹介せし写真説明の続きは左の如し

〔以下ルビ無し小活字〕

▲裾野の夜嵐 是れは誰も知る曾我兄弟の敵討にて討入より五郎の捕はれる処までを写し其前後を義太夫にて繋ぎ鳴物仮声入りなり

▲執達吏の呆れ顔 これは差押へられたる家財を二階の窓から運ぶ写真なり

▲三人皇女 仏国古代の三人皇女が互に皇后の位を争ふといふ極彩色入りの長尺ものなり

▲ほと、ぎす これは徳富蘆花の脚本新劇ほと、ぎすの全編にて矢張り鳴物声色入りなり

▲水兵の悪戯 死んだ振りせる水兵を見て後難を虞れ余所へ運び置くを又発見者が余所へ移し斯の如くして全市中を運び送る滑稽物なり

▲児島高德 史劇なり桜樹を削りて「天勾踐」を書く処より大立廻りまで鳴物入にて映写するよし

●演芸雑俎 大稻埕に今度新らしく建つた滅法美しい支那劇場淡水戲館は、明後二十日が舞台開きと極まつた。同日の昼間は台北の重立つた官民約数百名を招待して観覧に供するといふこととで、今日あたりそれぞれ案内状を發した筈。而して記念の絵葉書を配るさうだ。普通興行は午後六時からで、木戸場代凡てを含んで一等一円二等五十銭三等二十銭といふ大勉強。舞台は榮座と同じ八間舞台で、観覧席は全部藤椅子、又は丸椅子を据ゑ、尚ほ千二百余名は楽に詰まる広さである。兎に角昨年以來、久しく杜絶えて居た支那劇のことだから初日勿々囃を受けるだらう▲朝日座も一昨晩から源氏節岡本美根二が真で、娘義太夫竹本國芳の返り咲き。それに当地の芸人が加勢しての諸芸大寄せ、早口、手品、落語などといふ賑かな取合せで、初日の晩は八分通りの入り。大部評判が好さうに見た。國芳は以前とは違ひ、場数をこなした丈けあつて、若いに似合はず、喉も出来、調子も好く、語口に余裕が出た丈け、修業が積んだ

福籤等為余興。亦一時之盛會也。

証拠。此分で行けば将来有望。美根二の源氏節は只老熟、音曲は遠がに耳を傾くべしである。其他の連中は台北では古い古い馴染。只引つ束ねて御苦労さと申し置く

明治42 (1909-11-02) 『台湾日日新報』欄外記事

●鞍馬連の淨瑠璃會 本日午後六時より小〔以下版面外〕

明治42 (1909-12-11) 『台湾日日新報』

●朝日座の淨瑠璃 今明両夜、朝日座にて東寧連本年の納會として素人淨瑠璃大会を催す。其の語物は

『御祝儀宝の入船』、『百度平』、『四ッ谷怪談』(一声)、『彦山權

現』、『岸姫松』(米花)、『弁慶上使』、『三日太平記』(鹿生)、『三十三

間堂』、『合邦住家』(小嵯峨)、『太功記十段目』、『沼津の段』(燕

司)、『鈴ヶ森』、『三勝半七酒屋』(佐藤)、『本藏下屋敷』、『日

吉丸』(亀鶴)、『又助住家』、『弁慶上使』(肥声)、三味線東太夫、

松助

明治43 (1910-01-11) 『台湾日日新報』漢文版

●巾幗初會 去九日午前九時。篤志看護婦人会台北支會。在赤

十字社支部医院樓上。舉行新年初會式。以義太夫三曲。及其他

明治43 (1910-01-13) 『台湾日日新報』

●無絃琴 筑士太夫の名に素人淨瑠璃の真打と聞えた島田

法官部長は、今度昇進した内祝と云ふので、一昨夜花屋に

宴會を開いて、多数の知人を招待されたさうな▲日頃交際円満

を以て官民の間に知人の多い部長のことで、其來賓も各方面

に涉つて、殊に初めから胡坐式でと云ふ主人の挨拶であつた為

めに、頗る打解けて近來の盛興を尽した▲來賓の多くは、

義太夫同好の士であるし、主人の手前に對しても、是非一席を

所望せざるを得ない、実は宴會席上の義太夫は、余り沢山聞さ

れては、却て興が覚めると云ふので、中には今夜は屹度中であ

れることと覺悟をして居た連中もあつたらしいが、案外にも

義太夫だけは全く出なかつた▲強ひて主人にと異口同音に所望

はしたが、部長は飽まで之を固辭して、実は地を弾くものが無

いからと逃げたものである、這般の消息になると、部長は何処

までも卓越した通人である▲近日内地から、太棹の名人が來

さうな、素義太の連中は昨今頻りに待構へて居るので、斯道は

是より益々紳士界に振ふことであらう

□明治43 (1910-03-02) 『台湾日日新報』 漢文版

●日本医学会彙報

〔3項目略〕

▲確定余興 一日夜於公会堂開大阪高等医学校歡迎演芸会。選

南北校書精粹者三十六名。為新案舞蹈、並淨瑠璃、新劇等。二
日夜為有志者歡迎觀劇会。閱覽帝國座演芸。

□明治43 (1910-05-01) 『台湾日日新報』

●芳野座建築由来記

恋に上下の隔てなしといふ、上下を
上下と訓んで、直ちに女義太夫に應用すれば、眼と眉毛を一所
に寄せ口を歪め、齒を剥き出すも愛嬌の内なりと長らく狭斜の
遊びにも飽いた某弁護士、東京の某亭で不図タレ義太の国芳と
いへるを見馴め段々素性を探つて見ると、台湾には永らく居つ
て不日台北へ戻る女との事に、益膝をす、め其下心で毎日通
ひ、祝儀を撒いて居れば先方にも其殿ぶりが目につき、譬ふれ
ば『一条大藏卿』に髻をつけ、『網島』の治平を赤作りに仕立
たやうなお方だと、是まで身に触れた事のない風が襟元から立
ちそめ、其人の面影が忘れず、『菅原伝授』のいろは送りな
らぬ、恋のいろはを心に描きて、『お駒才三』の心の駒と、
三味線の象牙駒までが諸共に狂ひ出し、女の一念『矢口の渡』

最新なれば『法界坊』の法界愷氣も構ふものかと、或日浅草の
料亭で出逢つたを幸ひ、『布引』ならぬ袖曳て、滝なす涙に
真実をこめ、四十八手は知らねども『八陣』はお手のもの、
『朝顔日記』の露の情け、色よい返事をしてたべと、からみつ
いたる『桂川連理の柵』しがみつき、君と『妹背山』になるな
らば『千代萩の御殿場』ならねど、腹が減つてもひもじくない
『兜軍記』の琴責も水責火責は愚な事、『石川五右衛門』の釜責
に遭ひ、命の『玉藻の前』御所望ならば進ませう、此事に若
し偽りあらば『彦山権現』『金比羅御利生』どんな罰でもうけ
まする。斯ういひ出して聞かれぬ日には妾しは今から髪を切り、
『尼ヶ崎』となつて行ひすましますと、名題尽しに口説き立て
られ、弁護士某は大に恭悦、国芳の背を撫でて、夫れ聞くら
は和女の心『鏡山』にかけて見るよりも、よく訳つた、此上
は台湾へ伴ひ帰り、此世はおるか『二代鏡』や『三代記』
『妹背の門松』『野崎村』決して嘘を申さうか、乃公の言葉に詐
りあらば、『四段旦』の如く切腹せん。心配するなど携へ帰り、
今は自宅へ『腰越状』を据ゑさせ、扱こそ『三十三間堂』の大
きさはなくも一万余円を投じ、棟木を立て、国芳の芳の字に我
が姓の野の字を加へ、芳野座と命名して建築する事とはなりけ
る

□明治43 (1910-07-02) 『台湾日日新報』欄外記事

●芳野亭の素人淨瑠璃 新起横街芳野亭にては、今二日及び明三日の二日間午後六時よ

〔教行版面範圍外〕

段目 (白鳳軒)、三味線 (竹本国芳、鶴澤三次郎)

□明治43 (1910-07-27) 『台湾日日新報』漢文版

島内電報

▲討蕃演芸会 当地開演三社駢合討蕃慰問演芸会。經由昨日午後五時。開于台中座。先由台湾新聞社長山移氏起述開會之詞。次小学校生徒唱歌。次筑前琵琶、薩摩琵琶、義太夫、及本島人琴笛合奏、以及芸妓四十名手舞。共十余番。以十一時半散會。入場者約九百人。真未有之盛會也。(念六日由台中發)

□明治43 (1910-07-28) 『台湾日日新報』漢文版

島内電報

▲台中慰問演芸 台中座第二日慰問演芸会。於昨日午後六時開演。山移台湾新聞社長叙述。即將前夜所未畢演者演畢。淨瑠璃、合奏、琵琶清樂、手踊等演奏十數番。皆博大衆非常喝采。抵十二時散會。入場者約有千人。滿座無立錫余地。較前夜尤盛況

也。(二十七日台中發)

□明治43 (1910-07-30) 『台湾日日新報』漢文版

内外要電

▲討蕃慰問演芸 本社主催之東京十五新聞社贊助之討蕃隊慰問第一演芸会。訂來三十一日在木挽町歌舞伎座開演。有市村座年少俳優素踊。女義太夫真打総出演。以蒐集滿都人氣。

□明治43 (1910-10-02) 『台湾日日新報』

●演芸会收入金寄贈

阿緱庁下蕃薯寮街有志者主催に係る、同地演芸会開催の收入金二百六十円を、今回討蕃隊慰問金として愛国婦人会台湾支部へ寄贈し来れり

演芸界

●女義太夫 芳野亭竹本千代登一座の今明両夜の語り物は左の如くなりと

二日『御所校弁慶上使』、三日『壺坂靈驗記沢市宅』(国芳)、二日『朝顔日記宿屋』、三日『腰越状泉三郎館』(錦木)、二日『妹背山御殿』、三日『日蓮記勘作住家』(花千代)、二日『三勝半

七酒屋」、三日「菅原寺子屋」(団菊)。二日「阿波鳴戸順礼歌」三日「日吉丸三」(千代登)

□明治43(1910-1004)『台湾日日新報』

●筑前琵琶の送別会「高島旭仙の台湾巡業。討蕃隊慰問演奏、同好会組織を手がけ、素人を教授。このたび台湾を去ってアモイ・広東・香港方面へ向かう。義太夫ではないため翻刻を省くが、音曲芸能の外地進出の事例として興味深い。」

演芸界

●娘義太夫を聴く

芳野亭へ新来の娘義太夫千代登一座の初日を聴いた。『御祝儀宝人船』と云ふ浄瑠璃は、人から聞き伝へては居るが、不幸にして未だこれを高座の御簾内に聴くべき熱心が無く、例に依つて後れ走せ花千代の「宗吾郎」から聴いた素人評だ

▲花千代の「佐倉曙」当人は未だ若い黒田清輝式の美人であるが、却々活潑な愛嬌者で潤沢仕た咽喉一杯、縦横に語り科し、大車輪の体は頗る達者と云はねばならぬが、何処かに未だ味の足らぬ節が見える。併しこの「佐倉曙」は箱入の一つださうで満場の拍手喝采

●国芳の「太十」芳野亭国芳嬢の語り口は、三次郎の三味線と相俟つて世既に定評あり。その表情に富みたる高座のスタイルは恍惚として聴者を酔はしめ人氣山の如し

▲団菊の「三十三間堂」次座としてお聴に達せられ、団菊の「三十三間堂」は語り口に於て確かに成功し、咽喉に於て聊か不成功と云はねばならぬ。最も咽喉を痛めて居るのか知らぬが折々苦しく聴かれたり。併しながらタレ義太一流の耳障りなるケレンなるもの少しも無く、鳥渡底の方に皮肉を見せる語り口は、其沈着と共に堂々乎として、声は即ち玉に疵。但し美貌は一行中の第一位で、高座は為に四分の利益がある

▲千代登の「先代萩」ドツサリの千代登丈は年配と共に引締つて、流石は座長として重きを為す価値がある。其語口は往年渡台した小波に髣髴たるもので「お末が業」から「雀の唄」さては奥の「誠に国の礎」に至るまで、頗る巧い調子で聴者も大得心なれど、強て云へば演劇で云ふ臭味が聊か見える様だ、重い貫目と咽喉の調子が自由な所、丈の身上である

▲咲造の三味線 頗る確かな三味線ではあるが、素人には少々撥の当方が強い様に思はれる。併し此調子で弾かれたら太夫の方で楽に語られる事受合だ。三味線から身体が踊るのか、身体から三味線を揺り出して鳴らすのか。其辺は疑問として文楽の

人形然たる身振は、我れには有せ敷島の道として近い内に「櫓の曲弾」が聴きたいものだ（奎太郎）

□明治43（1910-10-05）『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 ●芳野亭千代登一座の娘義太夫は好評にて、本夜より更に大切に掛合を加ふる筈にて、本夜（五日目）の語り物左の如し

『三十三間堂平太郎住家』（国芳）、『二十四孝十種香』（千代玉）、

『腰越状三段目』（錦木）、『利生記百度平』（花千代）、『太功記

十段目』（团菊）、『安達原三段目』（千代登）、大切掛合『桂川

帶屋』（長吉国芳、儀兵衛花千代、母おとせ团菊、おさぬ錦木、

長右衛門千代玉）

□明治43（1910-10-07）『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 ●芳野亭千代登一座の娘義太夫本夜（七日目）の語り物左の如し

『三勝半七酒屋』（国芳）、『安達ヶ原三段目』（千代玉）、『八陣

八ッ目』（錦木）、『鈴ヶ森』（花千代）、『玉藻前三段目』（团菊）、

『松王下屋敷』（千代登）、大切物掛合『一力茶屋場』（由良之助千代登、平右衛門錦木、おかる团菊、伴内国芳、九太夫花千代）

□明治43（1910-10-08）『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 ●芳野亭、今晚の語り物は左の如くなり

『菅原寺子屋』（国芳）、『由良港山の段』（千代玉）、『御所桜三

段目』（錦木）、『壺坂沢市内』（团菊）、『鎌倉三代記八ッ目』（花

千代）、『伊勢音頭油屋』（千代登）、大切『忠臣蔵茶屋場』（惣

掛合）

□明治43（1910-10-11）『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 ●芳野亭千代登一座の娘義太夫、本晩の語り物は左の如し

『朝顔日記宿屋』（国芳）、『宗五郎子別』（千代玉）、『鈴ヶ森』（錦

木）、『二十四孝四段目』（团菊）、『鏡山七つ目』（花千代）、『お

千代半兵衛八百屋の段』（千代登）、大切惣懸合『お染久松野崎

村』（おみつ花千代、久松千代玉、久作国芳、お染团菊、母錦木）

□明治43 (1910-10-12) 『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 芳野亭娘義太夫、本夜の語り物左の如し

『白石嘶茶屋場』(国芳)、『播州皿屋敷』(千代玉)、『先代萩御殿場』(錦木)、『菅原松王下屋敷』(花千代)、『腰越状三つ目』(团菊)、『中将姫雪責の段』(千代登)、『大切総懸合お駒才三白木屋の段』(喜造国芳、丈八花千代、お駒团菊、庄兵衛錦木、稚丁千代玉)

□明治43 (1910-10-13) 『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 芳野亭娘義太夫、今晚の語り物は左の如し

『鎌倉三代記八つ目』(千代玉)、『菅原松王下屋敷』(錦木)、『三勝半七酒屋の段』(花千代)、『安達原三段目』(团菊)、『お染久松野崎村』(国芳)、『岸姫松飯原館』(千代登)、『大切総掛合忠臣蔵本蔵下屋敷』(本蔵国芳、三千歳团菊、播右衛門錦木、下部花千代)

□明治43 (1910-10-14) 『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 芳野亭、娘義太夫、本晩の語り物左の如し

『先代萩御殿場』(千代玉)、『お千代半兵衛八百屋の段』(錦木)、『日吉丸三段目』(团菊)、『伊勢音頭油屋の段』(花千代)、『二十四孝十種香の段』(国芳)、『三十三間堂原太郎内』(千代登)、大切総掛合『忠臣蔵本蔵下屋敷』(本蔵国芳、三千歳团菊、伴右衛門花千代、下部錦木)

□明治43 (1910-10-20) 『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 引続き芳野亭にて好評を博し居たる千代登一座の娘義太夫は、愈々来る二十二日限り千秋楽として台中へ乗込む由なるが、今晚の語り物は左の如くなり

『恋女房重の井子別』(千代玉)、『日吉丸三段目』(錦木)、『二十四孝十種香』(团菊)、『菅原寺子屋』(花千代)、『加賀見山七つ目』(千代登)、『お駒才三鈴ヶ森』(国芳)、『太功記』(総懸合) ●芳野亭の次興行 別項の如く、千代登の娘義太夫打上後は、二十三日より引続き内地初渡台の三遊派落語、娘新内、二輪加等、合同一座にて開演の筈

□明治43 (1910-10-30) 『台湾日日新報』

演芸界

●女義太夫一座 芳野亭にて久しく喝采を博せし竹本千代登一座は、其後新竹竹塹俱樂部に乘込非常な人氣にて、初日より毎夜大入を占めしが、高松同仁社が本日より同俱樂部にて、例の台湾正劇を興行するにつき、二十七日限打揚げ、二十八日台中へ向ひ同地にて、本日より興行の筈

明治43 (1910.11.08) 『台湾日日新報』欄外記事

●台南公館の娘義太夫 娘義太夫千代登一座は、七日より台南公館にて初目見得、お聴に達しまする初日の語物は「以下版面範囲外」

明治43 (1910.11.09) 『台湾日日新報』漢文版

●台南演芸 娘義太夫千代登一座。自七日始。在台南公館開演。第一日即頗見盛況。

明治43 (1910.12.26) 『台湾日日新報』

●七面棒 一昨夜府前街を通ると千代登一座が朝陽亭の二階に繰込んで盛に義太夫を語つて居る▲下手と言つても矢張り義太夫を常食として居る人間は兎角上手なものだ。素人がアレ丈

になるには十五年もかゝるだらう▲之に就て思ひ出すのは
昨今 台北に於ける娯樂の流行である。即ち樂は近きにあるにも拘らず。皆遠きに求めて居る傾向があるではないか▲旭仙の筑前琵琶を聞けば、無暗矢鱈に其真似をしたがつて、マー先生教へて下さいなどと出懸けて行く。骨董屋が来れば、我も我もと通を振り舞して、何んとか蚊とか理屈を言ひ、揚句のはてには偽物を買せられて喜んで居る。国芳の義太夫を聞けば、我輩も一つやつて見やうと、飛んでもない所に力を入れる。其癖、碌なことも語り得ないじやないか▲それから謡曲の流行は、又何と云ふさまか猫も杓子も驚鳥式の声を張り上げて、近所隣の迷惑も何んの其の、一向御構ひなしで、謡曲をやると御腹が減つて身体がよくなるなどと理屈を附けて一生懸命になつて居るその他浪速節玉突など、数へ立てたら数限りもない程、妙な娯樂が流行つて居るだらう▲併し七面棒子をして言はしむれば、義太夫は国芳の徒に、琵琶は旭仙の徒に、謡曲は桂光風の徒に一任すべし。人各本分あり。紊りに他の真似をなすべからず。須く自己の職業に精勵して以て楽しみとなすべしである。

明治44 (1911.01.03) 『台湾日日新報』漢文版

●陣中之元旦 此日南投番界討伐隊。各著武裝。於蕃山雲霧之

中。歛擎祝杯。望東三呼万歲。全線和氣雍々。在本部則久保前進隊長。率幕僚一同。共拳國運擴張之寿盃。余興則以筑前琵琶義太夫其他數種之高音器。陣中新年之祝賀會。如此亦可謂盛矣。

□明治44 (1911-01-14) 『台灣日日新報』

演芸界

●義太夫初大会 明十五日午後六時より、女紅場にて東寧連義太夫大会を催し、其の語物は

『御祝儀』（入登）、『紙屋治兵衛内の段』（一声）、『日吉丸』（米花）、『鈴ヶ森』（■枝）、『三日太平記』（筑紫）、『玉藻前』（蝶■）、『野崎村』（月松）、『酒屋の段』（小嵯峨）、『岸姫松』（亀鶴）、『■の谷』（鵬声）、『御所桜三段目』（相生）、『忠臣蔵四段目』（和楽）、『儀作内の段』（白鳳軒）、三味線（東太夫）

□明治44 (1911-02-02) 『台灣日日新報』 漢文版

台政要聞

●共進會彙報 其一

▲紀共進會各館 台南嘉義阿緞三庁農會所聯合南部物產共進會。既於昨日始開催。其期為三星期。茲以其設備各級略紀於左。〔中略〕

▲協賛會余興日程

〔二月一日・二日・三日略〕

▲同四日（星期六）是日除生花大会而外。由午後一時迄夜半。并在新公館樓上開歌留多大会。樓下広間。則由午後一時迄五時。有芸妓舞蹈。其繼之者。夜間六時迄十時。復有子弟戲及子弟淨瑠璃會。其余興所開。皆發一例通行券。大人三十錢。童子十五錢。晝夜皆可觀覽。又在夜間者。每人各徵席料五錢。

□明治44 (1911-02-03) 『台灣日日新報』 漢文版

台政要聞

共進會彙報 其二

▲協賛會余興日程

▲同五日（星期日）是日仍在新公館樓下為芸妓舞蹈。並子弟戲子弟淨瑠璃會。

〔中略〕

▲同十八日（星期六）是日午後一時迄五時新公館樓下有芸妓舞蹈。夜間六時迄十時。復有子弟戲及子弟淨瑠璃會。聞舞蹈芸妓中有奇術者五名。有支那人槍術者亦數名云。

□明治44 (1911-02-11) 『台灣日日新報』

●素人／浄瑠璃盛況

去る四日夜開演すべかりし素人浄瑠璃大会は、時間の都合にて延期せられ居たりしが、昨今の両夜新公館にて開かれ、昨夜は十数番の後、師匠野澤吉六「壺坂」を語りたるが、同人は盲人なるを以て、自身の境遇と語物と一致し、大喝采を博したり。其他の台南の木の葉連には、素人離れせし上手あるのみならず、芸妓側よりも御影花壇の五郎、歌仙の駒吉、亀甲屋の春香、山吹の頓兵衛など太掉専門のもの加はる事として、堂摺連の肩を、もあり、かたがた盛況なり（十日台南発）

□明治44（1911-02-26）『台湾日日新報』

演芸界

●活動館 娘義太夫、千葉一座今晚の語り物は

『玉藻前三段目』（梅玉）、『忠臣蔵六』（小三咲）、『佐倉曙儀作内』（小町）、『御所桜』（梅之助）、『おしゆん伝兵衛堀川』（光玉）、『太功記』（千葉）

●娘義太夫素人合評 ※竹本千葉の顔写真あり

▲千葉嬢 際立つて甘い処も見えないが、平凡の裡に聴衆を魅する腕前があるのは、遠が一座の頭領 ▲光玉嬢 甲の声は飽く迄伸びて健やかなものだか、甲から乙に移る処が寸斗苦し

い。然かし嬢ありて一座の声曲を保つて居るかの感じがする
▲梅之助嬢 年輩も恰度宜いが節廻しも中々老熟で確実したものだ。然し嬢には声に一種の疾があるのは惜しい。（拾得）

▲梅之助嬢 語り口は先頃芳野亭に興行つた千代登に似て居る。寧ろ彼女以上伸びの伸びた声曲を有つて居る丈、将来は有望だ ▲光玉嬢 先年来た時よりは、語り口に渋いところも出来、落付きも増した。殊に初日の『三十三間堂』はシンミリ聞かれた ▲千葉嬢 仇つばい顔丈けが真打で、声曲は未だ若いといふの外なしたが、又若い中にもシツカリした所もないではないと、花を持たせて置く。三味は三次郎と町造、一座に取ては先づ申分がない。（次郎兵）

□明治44（1911-03-01）『台湾日日新報』

●素人義太夫 新起横街芳野亭に於て、今夜より三日間連夜素人義太夫の大会を催し、当地デン界の素人名人は挙つて顔を揃へる筈なりと

□明治44（1911-03-05）『台湾日日新報』

●愛国婦人／演芸会 昨日の活動館 愛国婦人会台湾支部では、昨日午後一時から会員の為に特に

演芸会を活動館で開催した。その前日雛祭のお客様に忙殺された奥さんと令嬢達は、主人公が役所から半退けの御帰宅を待構へて、骨休めかたがた誘ひ合して詰めかけられ、開会前早くも場内の一部は令嬢、夫人で充たされた。聴て時刻が移るや、井村主事は舞台に現はれ、開会の挨拶がある。之に引続いて開演、第一は娘義太夫で小三咲の『太功記十段目』、操と母の皐月が光秀に対して大に順逆を説き「夫を思ふ貞節心操の鑑」と曇り無き美声で語り終ると、今度は藁々斎柏葉の落語「子は鎗」。これは上下に隔のない夫婦、親子の恩愛で、滑稽な中にも折々シンミリさせ、酒癖などには奥さん達も思はず失笑された。之に続いて娘義太夫梅之助が隠し芸なる壮士踊り、頗る活潑なる日露戦役が演ぜられ、其次には光玉の義太夫、『三勝半七酒屋の段』で真なるお園の心事を流暢に語り尽し、大に聴者の同情を惹きたり。最後の一席として再び柏葉登場、戊申御詔勅に基き、勤儉講談『塩原多助の伝』を講演し、之をもつて閉会を告げたるは、同五時頃にして盛会なりき

●台南雑信 (一日)

▲肥後琵琶師来る 旅館旭館主人桜田氏等の手にて、今度三名の琵琶師(内一名は筑前琵琶)を熊本より招聘し、本夜当地

の聴巧者十数名を旭温泉に招待し、手見せの弾奏をなしたるが、如何さま薩摩琵琶にもあらず、筑前琵琶にもあらず。間々義太夫及び浪花節の如き節も出で、琵琶の製式も違ひ、一種とくつ特別のものにて芸術上の地位高きものなるかには疑ひなき能はざるも、聴くべき物として耳を楽ましむることは確かなるのみならず、演者の声調頗る美事なる上に、弾奏も巧妙にて、二日夜より台南座に於て興行すること、なれり

演芸界

●三次郎送別会 当地おかめ連の浄瑠璃師匠を勤め居たる鶴澤三次郎は、今回引揚帰国するに付、デン界重なる人々の発起にて、本日芳野亭に於て其の送別大会を催すべく、語物は左の如し

『御祝儀寿三番』(当司美咲)、『新の口村』(曙)、『壺匠』(尺八入雨堂)、『義士銘々伝赤垣出立』(勝木)、『千本桜すし屋』(松鶴)、『三十三間堂平太郎内』(駒助)、『三勝半七酒屋』(相生)、『出世太功記光秀切腹』(白鳳軒)、『日吉丸三段目』(秀吉)、『鈴ヶ森』(国芳尺八雨堂、大切『野崎村』掛合(国芳、駒助、秀吉、相生、三味線三次郎、連弾秀吉、ゑん、六べ、小竹、万流、貞奴、駒助、尺八雨堂)

基隆雀連も加はる筈なれども、これは語り物未定なり。三味線

は吾妻、鐘龍、三次郎等なりと

●活動館の操人形 活動館の娘義太夫千葉の一座は、昨夜限り千秋楽として基隆へ乗込み、其後へは操り人形山本三之助一座にて開場。其芸題は大略左の如きものにて順次取替へ出演し、人形山本三之助出語を為すべしと

『佐賀夜桜鍋島猫騒動』、『実録先代萩』、『小間物屋彦兵衛』、『丸橋忠弥』、『松前屋五郎兵衛』、『宮本武勇伝』、『又意外』、『己が罪』、『琵琶唄』、『刑事の誉』、『書生の犯罪』、『人命犯』、『三方一両損』、『掛取万歳』、『大工調べ』、『五万円』、『女天下』、『川開』、『中幕物として』、『御所桜弁慶上使』、『伊賀越沼津』、『日吉丸三』、『野崎村』、『玉藻前三段目』、『壺坂』、『先代萩』、『山本一流獅子の曲』

ここにち

▲浄瑠璃会 午後六時より、芳野座に於て鶴澤三次郎の送別会を兼て開く

□明治44 (1911-04-18) 『台湾日日新報』

●台中雜信 (十五日発)

▲素人浄瑠璃会 十五日午後七時より松本弁護士宅に於て、台中文楽会員の素人浄瑠璃会ありたり。各々得意の語り物に聴者を驚かし、盛会を極めたり

□明治44 (1911-04-20) 『台湾日日新報』漢文版

●台中雜信 (十六日発)

▲浄瑠璃会 十五夜七時。松本弁護士宅。有台中文楽会員之子弟浄瑠璃会。(一種雅歌) 各鳴其所得意。亦極盛。

□明治44 (1911-06-14) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃 芳野亭にて開催の筈なりし素人浄瑠璃は都合に依り取消し、更に本日午後六時より活動館に於て開催。語り物左の如くなりと

『玉藻前三』、『お俊伝兵衛堀川』(相生)、『忠臣蔵三』(菊水)、『加賀見山又助内』(肥声)、『御所桜三』(艶次)、『三勝半七酒屋』(■亀)、『日吉丸三』(魁)、『菅原四』(幸柎)、『鈴ヶ森』(勝次)、三味線(東、鐘龍)

□明治44 (1911-06-15) 『台湾日日新報』

●活動館崩潰 一昨日午後六時四十分頃、撫台街活動館にて、轟然たる異様の音響起りたれば、附近の人々等は何事の椿事出来かと驚き駆けつけ見るに、同館内舞台の周囲約二十四坪程の屋根墜落し、殆んど同館の三分一以上崩潰したるものにて、幸ひに同館は目下休演中なりしを以て、人畜の被害はなかりしも、その損害の程度は約七八百円以上になる由にて、修繕を施すべき可取壊しにすべきかは、問題中なり。原因と云ふべきは未だ判明せざるも、先頃同館に支那奇術師一行の演技したる際、天井に重き梁木を吊り上げ、其儘放任しゐたるに、自然緩みが出来、前記の始末となりたるならんとの説なり

●素人浄瑠璃中止 昨夜活動館に於て開かるべき筈なりし素人浄瑠璃は別項、活動館崩壊の為、遂に当分お流れとなり、追て更に日を定めて開催すべしと

□明治44 (1911-06-21) 『台湾日日新報』 漢文版

時事小言

▲内地摂津大掾。新任東京音楽学校之邦楽調査係。開大掾義太夫也。義太夫雖卑俗。不失為平民的之趣味。大掾能精之。故可委以調査。明治之世。自頒行憲政。益見同仁一視。独樂不若与衆樂。邦樂之調査必要也。挟一芸一技。猶可以卓然樹立於世。而

況士之抱奇才者哉。

▲台湾之音樂當調査乎。當改良乎。曰當調査當改良者。不僅音樂一門。習慣上當調査者多。精神上當改良者多。無適當之人物。則不能行適當之調査。冀適當之改良。故吾人每絶叫曰。台灣島民之向上。非教育不足以勝此大任。國語學校例年生徒募集殊少。國贊而外。高等學校及其他実業專門學校不可不設。盛世之時。野無遺臣。固為美事。使其子弟有美質者。皆得受相當教育。遂相當發達。然後進而為世用。猶善中之善者也。

▲清国自兩戰役敗北以來。國民之覺醒進步匪尠。国内有小、中、高等諸學校。留學外國者多。■新知識以歸。視南洋諸島勞動者之援金。其貢獻於國家。猶出一籌。彼等人士穩健者多。運動憲政。近乃設立朱福一團政黨。讀其政綱規約。亦有可觀。或曰支那人種能理論不能実行。雖然理論者実行之前提。目清国之覺醒。誰曰不可。本島人當研究向上之道。為我國家報効。母落支那人之鞭後也。

□明治44 (1911-06-26) 『台湾日日新報』

●東海岸南下録 (八) 墾丁にて 益子生

(恒春種畜場の新元技師、高田局長、佐藤阿緞庁長官と同宿。三人が詠んだ短歌が素人義太夫に關係するため、抄出して翻刻)

珍しくも高田局長が

芸のある友のつどいて一つ宿

うたい語りて夜やあかさん

客人がうたい語るはよけれど

主人は味噌の心配やせん（長官）

こんていの長は我家の心地せん

味噌の心配するも当然（新元技師）

●昨日の稲荷祭 △鎮座敷と大祭△ △華やかな神様△

〔余興のみ翻刻〕

▲余興 模擬店が片附く間に、先づ高砂検の『葛の葉』で余興の幕が開かれた。小力の安名、糸子の葛の葉、小柴の奴与勘平、小鈴の奴弥勘平。桃太郎、糸枝、小太郎、鈴奴の歌。すづめ、近栄、糸奴の三味線、今、えん、近二の鳴物のうち、糸子の葛の葉が一番好い出来であつた。二番目は台北検の演物、『今様小鍛冶』、つゝみの末吉、太鼓のとん子、三味線品権三、小吉、重勇、唄、金之助、とよ吉、弘菊、繁蝶、メ吉、踊り子つた子の国貞、千駒の宗近、峰菊の明神のうち、つた子の国貞は殊に振つたものであつた。三番目、艦艇遊郭の『橋弁慶』で玉子の牛若丸、ぼんたの弁慶、東太夫の義太夫、

なかなかこつてはゐたが、斯様いふ場合には些と不釣合の演物ではなかつたかと思ふ。尤も穴守稲荷だけに三検番とも大車輪に勤めてゐたのは嬉しかつた

□明治44（1911-09-22）『台湾日日新報』漢文版

●台中慈善演劇 台中有志者。倡開風水害慈善演芸会。定自來月二日起三日間。在台中座舉行。其演芸種類。即筑前琵琶、尺八琴、三味線、義太夫、劍舞、茶番、狂言、素人演劇、蓄音機等。而入場券一等一元五十錢。二等一元。三等五十錢。收入純益金將寄附新聞社募集義金二云。

□明治44（1911-11-17）『台湾日日新報』

●阿緞雜信（十二日）

●素人淨瑠璃● 近來花柳界に義太夫の流行、日を逐うて盛んにして、魚虎の女將千歳の門下生のみを以てするも、十有余名を数ふること、なりたるより、十一十二兩日の夜、劇場阿緞座にて是等連中のお淺ひ会を催ふし、料亭井筒、東月、宝來樓の紅裙連、此処を先途と嬌喉を絞り、白翠園の太棹、小翠、基隆の駒之助の（後身）等の飛入りもあり、勿論未だよしあしの沙汰にはあらねど、地方の人氣を萃めたれば、兩夜共立錐の余地

なかりしは御盛んのこと、いふべし

明治44 (1911.11.25) 『台湾日日新報』 漢文版

●家族共楽会概況 大昨日之本社家族共楽会。本擬古亭庄之清涼亭。因大雨驟下。仍移艋舺芳野亭。飯劇場一座。為演芸之処。社員及家族環坐若觀劇者。十時開會。團長今井社長述開會之辭。模擬店正午開始。余興奇術。落語。筑前琵琶。喜劇浪花節滑稽忠臣藏。義太夫。喜劇悲劇。円山公園。芸妓小菊住宅等。又和文記者扮支那革命大本營悲劇。黃黎党首及漢口美人。最博一同喝采。式終爆竹三發。社員家族。各抽福引。極終日之歡適而後散。

明治44 (1911.11.27) 『台湾日日新報』

●素人淨瑠璃納会 本日午後五時より、新起横街魚金樓上に於て、素人淨瑠璃東寧連納会を開催する由にて、傍聴隨意。その番組、左の如し

『お染久松野崎村の段』(相生)、『御所桜三弁慶上使の段』(肥声)、『太功記十段目』(魁)、『朝顔日記宿屋の段』(勝美)、『玉藻前三段目』(鱗鳳)、『三日太平記九ツ目』(藤枝)、『お駒才三鈴ヶ森の段』(花笑)、『志度寺』(三洋)、『菅原伝授四段目』(達摩)、

『壺坂』(菊八)、『日吉丸三段目』(富代)、『忠臣蔵本蔵下邸』(金之助)、『二十四孝』(福治)、総掛合『千両幟』、三味線(東太夫)

明治44 (1911.11.30) 『台湾日日新報』

●素人淨瑠璃会 ▲廿七日の晩 素人淨瑠璃が魚金に有ると云ふから駆け附けて見たら、丁度簾中で語つて居つたのは『菅原の寺小屋』、うまいと思ふたら其筈 真打の相生太夫であつた。今聞いた儘を並べて見やうなら、前座として罷り出たのが勝美太夫とて、小林工務所の主人である。語り物は『朝顔宿屋の段』。氏は今度が初舞台とのこと、何うかと思つたら案外スラスラと遣つて退けた。声に於ては恐らく当夜の白眉だらう。勝美君、継続勉強し賜へ。次が『太十尼ヶ崎』魁太夫の龍木さん。此芸題は大分語り悪いさうだが、先づは無難で拍手の裡に引込む。○三洋太夫の牛乳やさん、髻と云ひ体格と云ひ、押出しは当夜の第一等、頗る立派なものだ。芸題は『志度寺四ツ目』、語り工合から声まで申分ないとは見物人(聞き手に非ず)の評を其儘。肥声太夫の『弁慶上使の段』は人が来て遺憾ながら聞洩したが、次は『玉三小坂部曲の段』、太夫は鱗鳳と云うて、八甲庄の橋本さん。優男の美声と来て居るから丁度語り物に適まつて居た。魚金の富代姐さんは『日吉丸三の切』、菊八姐さ

んが『壺坂山寺の段』、何れ劣ぬ梅桜。世に云ふ海山千、其千枚張りて人を恐れぬ遣り工合。成程うまいと感心した。茲等が当夜の花だらう。『鈴ヶ森』は可笑太夫、吾妻の帳場だと聞いたが、別段批評の点はない。露骨に云へば今少し勉強をして欲しいとは僕計の考なさうな。代り合まして罷りつん出たのは例の金之助姐さん、見台据ゑて真面目の姿はススキー煽つて管捲く時とは大分違つて居る。『本蔵下屋敷』は能く当つたが、僕は『寺小屋』のよだれくりでも聞かしてもらひたかつた。藤枝太夫の『三日太平記』、何うしても素人とは思へない。古著屋をやめて模範家で義太夫のお師匠様はどうですか。真打として悠々構へたのが相生太夫、語り物は『お染久松野崎村』。流石は真打、天晴々々。福治姐さんの『二十四孝』。取止めだと云ふ。其の故を問へば『満洲へ知れませう』とは何の事やら。場内に張り出された「何々姐さんへ」とか「勝美文へ」とか寄附品積んで山の如し。中に「万金丹一万粒、姐さん輩と勝美丈へ」は頗る振つて居つた(松坊)

明治45 (1912-01-12) 『台湾日日新報』

●南座の素人浄瑠璃会 台北の東太夫来南せしに付ては、来る十二、十三の兩日、南座に於て台南天狗連の義太夫会を催

ふす筈なるが、同日は遊検の頓半、御影の五郎、桔梗屋の春香等の芸妓連も出演の筈にて、尚ほ同太夫一行は、打狗、鳳山、九曲堂、阿緱、蕃薯寮及び各精糖会社所在地等をも廻る筈なりと

明治45 (1912-01-15) 『台湾日日新報』

演芸界

●追善浄瑠璃会 豊竹三玉の追善として十五、十六、十七の三日間、午後五時より八甲庄日蓮宗布教所に於て素人浄瑠璃各連聯合大会を催すべく、其出演左の如し

十五日 『御祝儀宝の入舟』(登山)、『朝顔日記浜松』(笑昇)、『御所桜弁慶上使』(静)、『忠臣蔵三段目』(如月)、『皿屋敷鉄山館』(我楽)、『三日太平記光秀切腹』(真砂)、『三勝半七酒屋』(亀鶴)、『野崎村』(柳枝)、『膝栗毛赤坂並木』(白鳳軒)

十六日 『四ツ谷怪談伊右衛門住家』(一声)、『義士銘々伝赤垣出立』(勝木)、『三日太平記松下住家』(藤枝)、『三十三間堂平太郎住家』(喜楽)、『御所桜弁慶上使』(岬)、『佐倉宗五郎義作切腹』(みよし)、『日吉丸五郎助切腹』(松鶴)、『加賀見山又助住家』(肥声)、『忠臣蔵本蔵下屋敷』(相生)

十七日 『太閤記十段目』(花笑)、『菅原四段目』(花遊)、『三

勝半七酒屋』（長枝）、『玉藻前三段目』（鱗鳳）、『義士銘々伝赤垣出立』（嵯峨）、『加賀見山又助』（魁）、『忠臣蔵勘平切腹』（三洋）、『皿屋敷鉄山館』（松香）、『お半長右衛門帯屋』（和紫白鳳軒掛合）、『先代萩御殿場政岡忠義の段』（五角）

花柳界

●福治の足洗ひ 検番明書中、其二の席を離れず、追に腕のある女は異つたものと料士をして驚嘆せしめた魚金の福治拍子は、この全盛を名残りとして、今度断然廃業すると云ふ。而して曰く「東京の妹から金を送つて来ましたさかい、借金を返して帰ります」と。真相は知らず。兎に角お芽出たい事だ

明治45 (191201-19) 『台湾日日新報』

●素人義太夫大人 八甲庄日蓮宗布教所内に開催せし追善素人義太夫は、十五、十六十七の三日間大入叶にて「イヨ一提灯ヤー」「ヘイ金貸しも致します」杯と高座と聴衆との飛んだ掛合あり。師匠三玉婆さん、大喜びなりき。

●十把一束 ▲霧島通りの長屋の妻君は声自慢の義太夫を夜更け迄やられるので、裏通りの人々迄が迷惑してゐる（裏の人）

明治45 (191201-20) 『台湾日日新報』

演芸界

●淡水の素人浄瑠璃 淡水の素人浄瑠璃歛音連にては、来る二十一日午後五時より、同地公会堂に於て初会を催す筈にて、其語り物左の如くなり

『三勝半七酒屋』（笑楽）、『朝顔日記宿屋』（春笑）、『御所桜弁慶上使』（三笑）、『菅原伝授手習鑑寺子屋』（雪溪）、『忠臣蔵二段目の清書』（錦声）、『鎌倉三代記三浦別』（■玉）、『玉藻前三段目』（梅枝）、『皿屋敷鉄山館』（一声）、『八陣正清本城』（弥生）、『三十三間堂平太郎住家』（基楽）、『箱根靈驗記滝の段』（白鳳軒）、三味線（豊竹三玉）

明治45 (19120207) 『台湾日日新報』

演芸界

●素人浄瑠璃会 八甲庄日蓮宗布教所内に於て開催中なる素人義太夫は、六日限りにて打止めの筈なりしが、好人氣の爲め、更に今晚まで延期する由にて、その語物は左の如しと

『桜丸切腹』（白鳳軒）、『合邦内の段』（美好）、『志度寺の段』（松香）、『岸姫松三の切』（岬）、『又助住家』（三玉）、『平太郎住家』（喜楽）、『沢市内の段』（小嵯峨）、『本蔵下屋敷』（相生）、大切

『野崎村の段』（総掛合）、三味線東太夫、鐘龍、三玉、三次郎

□明治45（1912-02-13）『台湾日日新報』

●一昨日の円山

※義太夫にかかわる部分のみ翻刻

▲豊川稲荷 一汽車の度毎に吐出される台北の紳士淑女、坊ちゃん、嬢ちゃん、お鍋、権助、你や等は、先づ豊川稲荷へと志す。「開運豊川陀尼尊天」の赤青、藍、黄白、茶杯の色々の旗が立つて景気を添へて居る。稲荷堂では今お経の最中「ナンナンナンナムニヤムニヤムニヤムニヤ」何んだか一向分つたものじや無い。他の建物の方で余興が始まつて『靈馬の漣』とかの題で筑前琵琶をやつて居た。夫れから此度が義太で「え、此のところお聴に達します外題『朝顔日記 宿屋の段』」、語り具合もまづかつたが、ズラリならべた生花もまづいな

●最近の澎湖島

▲素人義太夫会 二月三日夜、横山庁長主人となり、官邸素人義太夫会を開く。太夫は足立要塞司令官、沢田医院長、其他数名なりしが、来会者は林郵便局長、田村庶務課長、斎藤警務課長、平井財務課長、平野税関支署長、其他百余名にして非常の盛会なりき

▲浪速節来る、二月初旬より吉川梅雀一行、娯宮に來り、料亭吐月に於て講演したるが、娯樂機關に乏しき同地のこと故非常の大人氣にて、毎夜百余名の入場者ある由

□明治45（1912-03-06）『台湾日日新報』

演芸

●娘義太夫 芋助一派の喜劇で興行を続けて來た芳野亭へは、今度其上置とし女形二名を加へる他、別働隊として京阪に名のある娘義太夫の若手連数名を国芳が引率して渡台することとなり、既に四日神戸発の信濃丸に乗込んだと云へば、堂摺連も気が採める事なるべし

□明治45（1912-03-15）『台湾日日新報』

●朝日座 上村一座の人情浄瑠璃本夜の替り芸題は、前「生写朝顔日記」切「伽羅先代萩御殿の段」にて、其太夫如左

秋月巴之助屋敷（浪尾太夫、糸浅次郎）、小瀬川の段（鳥勢太夫、糸千賀平）、摩合ヶ嶽の段（綱登太夫、糸仙右衛門）、浜松小屋の段（春木太夫、糸千賀平）、徳右衛門宿屋より大井川迄（浜太夫、糸仙右衛門）、深雪岡助道行の段（懸合）、千代萩御殿（内匠太夫、糸勝次）

□明治45 (1912-03-16) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭 本夜よりの替り芸題は一番目『二人娘』三場、二番目『大冒険鼻』二場にて、中幕『恋娘昔八』鈴ヶ森

(団加津、糸三次郎)、『先代萩御殿場』(国芳、糸三次郎)、喜劇の配役左の如し ※配役翻刻省略。

●朝日座 人形浄瑠璃 本日の替り芸題は、『近江源氏先陣館』、『艶姿女舞衣』、『酒屋』、『肥後の駒下駄五条鰯屋の段』等にて、太夫左の如し

和田兵衛隠家の段(綱太夫、糸千賀平)、佐々木盛綱陣家の段(内匠太夫、糸勝治)、三勝半七酒屋の段(浜太夫、糸仙右衛門)肥後駒下駄鰯屋の段(春木太夫、糸浅次郎)

□明治45 (1912-03-18) 『台湾日日新報』

演芸

●人形浄瑠璃 朝日座の上村源之丞一座は、開演以来雨の為に余り捗々しい人氣が無いが、人形の立派な事は一般の認むる処である。その人形の活動は或点に於て確かに芝居以上の趣きを見せ、恰度歌麿の絵の様なものがある。『酒屋』のお園の如き、人間以上の色気と艶がある。併し如何も余り土地に適應しない様

なのは気の毒な事だ

●朝日座 十八日替芸題。前『奥州秀衡有髪婿』、中『箱根靈驗記十一段目』、切『都五条牛若弁慶仕合段』にて、重なる語場は

池田駅宿屋の段(春木太夫、千賀平)、藤原秀衡館の段(内匠太夫、勝治)、後藤昌司館の段(綱登太夫、千賀平)、箱根靈驗

記三人上戸段(浜太夫、仙右衛門)、都五条橋段(かけ合)

●芳野亭 国芳の帰来と団加津の加入、五郎丸と十三里の復帰とに依つて、芳野亭の人氣は大したものだ。蓋し其人氣たるや芋助一派の奮闘的よりも、二女義の乱れ髪にあるらしく、中幕頃を計つて、特に客足が繁くなる様だ

十把一束

▲朝日座の人形は舞台は感心だが淨るりは詛まりだらけね(人形新)

□明治45 (1912-03-26) 『台湾日日新報』

演芸

●漸く賑ふ 現在の演芸界は恰度更衣時期で、朝日座では活動写真、栄座では二代目の雲右で開場。孰れも繋ぎの興行で

あるが、この繋ぎの間には反つて多くの変化が起り、先客様は

入れ替り的に眼先きの変つた興行が行はれる、現に活動写真

少国民君の人氣を引付けて、ブーカドンドンの大当り、雲右で

も批評の如何に關らず、これも相當の御入來があり、殊に

芳野亭の如きは引続き大に當つて居る様だ処で

●榮座では、本月末に新劇一行の乗込みを終り、來月一日より

開演する運びとなる筈だ。又一方

●朝日座は活動写真を打揚げ次第、直ちに大阪文樂連の淨瑠璃

を懸ける筈だ。尤もこの文樂の太夫連は、さる地方の同好

天狗連が大に力瘤を入れたので、渡台する事となつたさうだ。

その太夫の顔触れは津国太夫、其太夫、鶴尾太夫以下数名で、

三味線は大四郎、六之助、六藏等である。遅くも一兩日中には

開演すべしと云へば、定めしデン通連の大人氣あるべし

□明治45 (1912.03.28) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭 本夜よりの替り芸題は『相競争ひ』三幕

『靈魂不滅』二幕にて、義太夫及役々左の如し

『お染久松野崎村』(団加津、糸三次郎)、『菅原伝授手習鑑寺子

屋』(国芳、糸三次郎)

※配役翻刻省略。

●朝日座 津国太夫一座の淨瑠璃、本夜の語り物左の如し

『御所桜弁慶上使の段』(国子太夫、糸六之助)、『玉藻前道春館

の段』(里太夫、糸六之助)、『盛衰逆逆櫓の松の段』(其太夫、

糸大四郎)、『日吉丸小牧山城中の段』(鶴尾太夫、糸六三)、『菅

原伝授手習鑑寺子屋の段』(津国太夫、糸大四郎)

□明治45 (1912.03.29) 『台湾日日新報』

演芸

●朝日座の淨瑠璃 其初日は余り大入でも無かつたが、客の多

くは斯道で苦勞をして居る。所謂自称天狗連丈けに、孰れも

熱心に耳を傾けて居た。一般の評判を聞くと追がに確かりとし

た語り口で、二人として落が無いと大に感寸満足して居た様だ。

聞く処に依るとこの太夫の一行が神戸で乗船の際、艀船が顛覆

し、見送りの婦人連迄で海に落ち、既に一命危ふかりし処を、

漸く救ひ上げられたさうで、命懸けて來たのだとは、遠路如何

にも御苦勞様である、本夜の語り物は左の如くだ

『三十三間堂』(国子太夫)、『忠臣蔵六ツ目勘平切腹』(里太夫)、

『本蔵下屋敷』(其太夫)、『お駒才三鈴ヶ森』(鶴尾太夫)、『太

功記十段目』(津国太夫)

十把一束

▲雲声、雲吉、不知火、福右衛門、雲丸、小雲、龍城、如雲、雲林の外に桃中軒と号して巡業するものあらば、雲入道に關係なき者也。星、巴、風、柳、誠、以下皆然り。詳細は福岡市外八反田桃中軒へ（岡本家）

明治45（1912.03.31）『台湾日日新報』

●津国太夫を聴く

▲朝日座では二十七日の晩から大阪文楽若手連の浄瑠璃で開演した。男義太夫としては四年前に大島太夫一座が見えた計りで、当地の素人義太夫連の爲めには、恰も浪党が燕平や雲柳に依つて溜飲を下げてると同様、慥からず医渴の思ひで歓迎されたらしい。でなくとも真の浄瑠璃を味はんとせば団加津とやら国芳とやらの挑発的語り振を見るより、矢張り男太夫のドツシリとした処を僕は好む。

▲近頃 東京 義太夫組合の古老連は、稍もすれば男義太夫が不振の状態に傾きつつあるを慨き、是が振興策として大阪文楽式の後進養成所を設置せんと内議中だとか、兎も角大阪の文楽はデン界の淵藪、こゝで咽喉を締らへた。今度の一座、亦必ずや聴くべきものあらんと、遅がけ乍ら飛出す。

▲成る程若手揃だ、其太夫の『弁慶上使』は中程から聴いたのだが、例のおわさのサワリは惜しいかな、今些し艶を保たしたかつた、然し熱心な処は買はざあなるまい。

▲次は鶴尾太夫が六之介の糸で『朝顔』を語る、頗る沈著た語り口声に、幅のないのが憾だが、得意は世話物らしい。「露の干ぬ間」の琴唄も悪くなし。「語らう間さへ夏の夜の」のサワリに入つてからは一段フツクリを持前の涼しい音を流して大向ふの天狗連を納得させ、又『天井川の場合』も極めて力が這入り、大喝采

▲切はイヨー待つてましたの津国太夫の『合邦』と、追がは真打だ前に語つた鶴尾太夫と彼あも総ての点に段が異うかと、兎耳して聴く、冒頭からシツトリと客に堅睡を吞ませ、語る程に聴くほどに合邦も母もお辻も益々活きて来る。「幽霊もさぞ空腹からう」の合邦の詞は真情が溢れ、母の欣々しつ、娘お辻との対話も温か、殊に手負ひになつてのお辻の述懐からは何とも云ぬ妙味を含み、又「南無まいだあ、南無まいだあ」は悲痛深刻だつた。斯して終まで客を起せぬ技倆は、確かに当地のデン界を唸せることだらう。大四郎の糸は音光沢もあり撥も軽い。

（烏天狗）

演芸

●芳野亭 里の家新喜劇 替芸題、三十一日より一番目

『親心』二幕、二番目『見合』二幕、中幕『忠臣蔵六ツ目』(竹本団加津)、八陣六ツ目正清本城(竹本国芳)等にて喜劇の配役左の如し ※配役翻刻省略。

●津国太夫一座 大阪文楽座若手、竹本津国太夫一座は昨晚限り千秋楽を告げ、基隆座に乘込み、明一日初日開演

□明治45 (19120413) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭 十三日の語り物左の如し

『御所桜三段目弁慶上使の段』(勝子)、『朝顔日記宿屋の段』(団加津)、『忠臣蔵八つ日本蔵下屋敷の段』(は昇)、『三十三間堂棟木由来平太郎住家の段』(国芳)、『絵本太功記尼ヶ崎の段』(勝玉)

●芳野亭の娘義太夫

阪神娘義太夫なるもの組織されたので、二日目、即ち十日の夜、一寸聴いて見た。恰度新来の勝子と云ふ当座の年少者が『朝顔日記』の浜松を力一ぱい語つて居たが、然しまだ磨き初めの玉だ。末頼母しいには違ひないが、歳の割には好く語つて

居る。次は団加津の『本蔵下屋敷』であつたが、当人天性艶物を語る事が出来るを自覚して語つて退けつゝ、あるは、聴者の多く認める処である。然し未だ海の物とも山の物とも定まらねば、熱心に奮励してよからう。其の次は新顔のは昇、『阿漕ヶ浦平治住家』を無難に語り終つたが、一段中抜く事約中ばと云うてよい程の抜き語りだ。其れも時間と声の都合上、万已むを得ぬ事と察して置く。次ぎは国芳の『太功記十段目』、艶のある声で語り出した時は満場国芳の態度に視線は寄つたが、無暗に扇で見台を叩いたり、平手を打つたり、首をいやに前に突き出したりする巧者は今は面白く思はぬ。併し当座で艶物を語る人は国芳の外にない事は確に認めて置くが、殊更に悪い癖を慎しんで語つてもらひたい。其次ぎが新渡台の勝玉で、題物は『伊賀越道中双六 沼津の里』を鏗のある声で語り出した時は、其態度がドツシリして居るので、真打の価値は充分あるが、『沼津』で平作が「左様なれば帰ります」からは一段好く聴かれた。アノ悲しい声で物語に移つたとき、沁々と親子の者を眼前に髣髴たらしめたゞけは感心する。又御臨終で御座りますかと云ふた一声が、聴客の腸をえぐらしめたと同時に満足の二字はありありと頭の中から湧いて来た。真打は真打だけであると感心して置く。何にがさて、聴客は皆な義太夫に素養のある人

ばかりだから、語る人も聴く人も一生懸命で、気持ちよく思は
しめて居た。糸は湊菊を改めた港玉で、四五年前とは腕も余り
変つて居ない様に思はれたが、妖艶な処は已に褪めた今、慾を
言ふならば神戸より国玉を呼び寄せて、上置きとしたれば、
此上もなき一座と思ふ（鯨太郎）

□明治45（19120417）『台湾日日新報』
演芸

●芳野亭 十七日の語物、左の如し

『菅原手習鑑寺子屋の段』（勝子）、『三十三所つば坂霊現記沢市
内の段』（団加津）、『彦山権現六助住家の段』（は昇）、『朝顔日
記宿屋の段』（国芳）、『一の谷熊谷陣屋の段』（勝玉）

●基隆座 此程より例の阿波人形上村源之丞一座にて興行中
なるが、同地素人浄瑠璃雀連より、毎夜一幕つつの助語りを出
す為め、相当の人氣を呼び、昨夜は吾勇の『赤垣徳利の段』、
また今十七日は吾妻の米八、愛之助が『桃太郎』、奈良江、
小富士などの連三味線にて『野崎村』を演ずる由なれば、引続
き好人氣となるべしと

演芸

●芳野亭 二十日の語物、左の如し

『忠臣蔵三ツ目けんか場』（勝子）、『摂州合邦ヶ辻合邦内の段』（団
加津）、『朝顔宿屋の段』（は昇）、『御所桜弁慶上使の段』（国芳）、
『三勝半七酒やの段』（勝玉）

●淡水素人浄瑠璃会 同地観音連素人浄瑠璃例会は、二十日
午後六時より、川口屋旅館に於て開催。語物は左の如し

『宝の入舟』（入登）、『二度目清書』（三笑）、『日吉丸三段目』（弥
生）、『安達原袖萩祭文』（二声）、『太功記十段目』（香玉）、『御
所桜弁慶上使』（雲漢）、『菅原寺子屋』（錦声）、『璧仇討滝の段』
（松玉）、『三十三間堂平太郎住家』（笑玉）、『加賀見山又助住家』
（梅枝）、『八陣正清本城』（可幾久）、（三味線）豊竹三玉

□明治45（19120430）『台湾日日新報』

十把一束

▲中毒生に答ふ。能く泣き大口開いて笑ふは旧式にして、高尚
なるものにあらず。殊に素人浄瑠璃の趣味は泣入、笑声の研究
にあらざるなり（喜多六）

□明治45（19120420）『台湾日日新報』

□明治45（19120605）『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭 五日より芸題替。最初娘義太夫出語。一番目『無言の夫婦』二幕、二番目『嫉妬の競争』四場にて、役割は(※芝居の配役紹介、翻刻省略)

●同娘義太夫は、五日語物、左の如し

『白石嘶吉原揚屋』(勝子)、『先代萩御殿』(団加津)、『お染久松野崎村』(は昇)、『菅原手習鑑寺子屋』(国芳)、『摂州合邦辻』(勝玉)、糸(港玉)

□明治45 (1912-06-07) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭の義太夫 今夜の語り物は左の如し

『日蓮記勸作住家』(勝子)、『安達ヶ原袖萩祭文』(団加津)、『彦山権現六助住家』(は昇)、『お染久松野崎村之段』(国よし)、『伊賀越六ツ目沼津里の段』(勝玉)、三味線(糸湊玉)

□明治45 (1912-06-08) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭 八日より替狂言は娘義太夫を初めとし一番目『無理心中』三場、切狂言『お染久松野崎村』茶番一場にて

配役は(※芝居の配役紹介、翻刻省略)

●同娘義太夫の八日語り物は

『御所桜弁慶上使』(勝子)、『阿漕平治』(団かつ)、『忠六勘平腹切』(は昇)、『摂州合邦』(国芳)、『日吉丸小牧山』(勝玉)

□明治45 (1912-06-15) 『台湾日日新報』

●バラック売店の余興 新公園内バラック商店にては既報の如く売店繁昌策として、愈々本夜より余興を開始する筈にて、其種類は浪花節、義太夫、能狂言、仕舞、剣舞、其他にして、尚各商店にては店頭で電気仕掛の造り物を陳列すべしと

演芸

●芳野亭 本夜より『代診』及『恋の失敗』六場にて義太夫其他の配役左如(※芝居の配役紹介、翻刻省略)

日吉丸小牧山城中(勝子) 三十三間堂平太郎住家(団加津) 先代萩御殿場(国芳) お俊伝兵衛堀川(勝玉)

□明治45 (1912-06-21) 『台湾日日新報』

演芸

●バラック街余興 降雨のため中止中なりし。バラック街の

余興は二十一日より再び開始の筈にて、素人浄瑠璃番組は左の如し

△二十一日 『箱根霊現記』（菅谷）、『御所桜三の切』（勝治）、『三

日太平記』（艶治）、『千代萩竹の間』（菊水）、『鏡山又助』（我笑）、

『弥治喜多赤坂』（和楽）、『布引四段目』（相生）、糸（かね龍）

●芳野亭 本夜より『嫉妬』二幕『野晒』三場にて、義太夫語りのおまじひやくこう語物及配役等、左の如し

『日吉丸小牧山城中』（勝子）、『朝顔日記宿屋』（団加津）、『蝶

花形小坂部館』（国芳）、『菅原寺子屋』（勝玉） ※配役翻刻省略。

□明治45（1912.07.06）『台湾日日新報』

演芸

●昨今の演芸界 浪曲界の明星雲右、南去して以来台北の劇界は至つて寂寞たるものだ。朝日座、栄座、芳野亭共に拍子抜けのした様に動いて居る。一日も早く推移向上した社会に伴ふ発展が必要であらう

●芳野亭 同亭の喜劇一行もだんだん上達の域に達して来た様だが、もう少し気障なクスグりを少なくして、筋で笑はす様にすればいいのだが……女義太夫も中々評判がい。今度 国芳は鼻が悪くて台北医院に入院したので、一寸義太夫は淋しからう。

本夜よりの語物及び替狂言は次に

▲義太夫 『三十三間堂平太郎住家の段』（勝子）、『明烏雪の曙山名屋の段』（団加津）、『尼ヶ崎の段』（勝玉）

▲喜劇 『ホワイトドッグ』（二場）、『紅ハンカチーフ』（二場）、『女中のお目見得』（二場）

(2) 大正

□大正1 (1912-09-10) 『台湾日日新報』 欄外記事

●義金浄瑠璃会 風水被害救 (版面切のため不可読) たるが、

■らに■■■の素人浄るり■は、十日、十一日、十二の三日間■

■て (版面切のため不可読) 義金募集の浄瑠璃大会を催す由に

て初日の語物は左の如し

(版面切のため不可読)

□大正1 (1912-09-12) 『台湾日日新報』

演芸

●朝日座義金浄瑠璃 十二日、三日目の語物は左の如く、これにて千秋楽

『御祝儀宝入船』(叶)、『岸姫松飯原館』(冬木)、『佐倉曙儀作内』

(美好)、『忠臣蔵六段目』(三洋)、『腰越状泉鋪』(我笑)、『御

所桜三段目』(肥声)、『太功記十段目』(柳枝)、『三十三所壺坂』

(菊八)、『三十三間堂平太郎内』(金之助)、『璧仇討滝の段』(翁

軒)、『伊賀越平作内』(和楽)、『盛衰記三段目』(相生)、『大切』

『西織稲川内』(師匠連総出)、『三味線師匠連』、『櫓太鼓曲弾』

□大正1 (1912-11-10) 『台湾日日新報』

●乃木大将 / 浄瑠璃募集 大阪市の株式会社近松座にては

乃木大将及び夫人の忠烈貞淑の事蹟を浄瑠璃に著作し開演せ

ば、更らに世道人心に裨益する処多大なる可しとて、今回

懸賞を以て操り人形演劇用新作浄瑠璃 (三幕物) を広く募集

すること、なれり。其期限は本年十二月二十五日限り。同座

文芸係宛て送付す可く、応募原稿は斯道大家に委嘱して審査

せしめ、甲賞には金三百円、乙賞には百円、丙賞には五十円を

呈すべしと

□大正1 (1912-11-26) 『台湾日日新報』

演芸

●全島素人義太夫会 故白鳳軒追善供養の爲め、来る二十六

日より二十八日迄三日間、栄座に於て全島素人浄瑠璃大会を

開催する筈にて、乱表左の如し

『壺坂』(一声)、『玉藻前三段目』(十三)、『本蔵下屋敷』(十雀)、

『三日太平記』(藤枝)、『忠臣蔵三段目』(鱗鳳)、『熊谷陣屋』(鹿

生)、『四ツ谷』(かしく)、『新吉原』(花笑)、『又助内』(我笑)、

『三日太平記』(艶二)、『御所桜三段目』(燕)、『義経腰越状』(組

次)、『弁慶上使』(弥生)、『御所桜三段目』(不二)、『皿屋敷』(冬

本、『玉藻前三段目』(玉角)、『平作住家』(吾才)、『合邦内』(相水)、『太十』(魁)、『御所桜三』(三松)、『璧仇討』(三洋)、『忠六』(山水)、『三勝酒屋』(亀鶴)、『忠三』(菊水)、『合邦』(久木)、『忠三』(如月)、『柳』(喜楽)、『惣五子別れ』(美好)、『日吉丸三』(松鶴)、『紙治』(松雀)、『忠四』(糸雀)、『彦九』(勝木)、『陣屋』(菅枝)、『蝶花形八ツ目』(口三)、『太十』(梅枝)、『吃又』(和楽)、『大文字屋』(相生)、『又助』(肥声)、『赤垣』(吾勇)、『柳』(■■■)、『先代萩』(金の助)、『紙治』(菊八)、『三勝酒屋』(鈴八)、『三味線』(■東) (竹本八重) (竹本鐘龍) (豊竹三玉)

□大正1 (1912.1.28) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭 今二十八日より (三日間)、『替り芸題左の如し』

(一番目)『だぶつ寅』二場、(二番目)『芝居の稽古』四場 (大詰め)『命の安売』二場

〔配役省略〕

おなじみの女義太夫 (二日間)の語り物左の如し

『玉藻前三段目道春館の段』、『伊賀越三ツ目沼津里平作内の段』、『一の谷三段目熊谷陣屋の段』(竹本勝玉) (三味線竹本国芳)

●栄座の義太夫大会

白鳳軒 浦部氏の追善供養とありて、二十六日より二十八日まで三日間、栄座に開催の全島義太夫大会は、毎夜非常の人氣なるが、舞台の右側に白鳳軒の祭壇を設け、生前由縁の者は入替り焼香を絶たず。扱二十六日夜の重なる太夫の語り口、一口づつの評を下さんに△梅枝の『尼ヶ崎』一と通り△吾勇の『赤垣』手に入つたもの△寿々女の『弁慶』は今一息の修業が肝心△鈴八の『酒屋』其咽喉といひ其態度といひ、コセツカず例の『今頃は』からは艶麗大喝采△時間の都合で相生の本蔵は、遺憾乍ら聞くを得ざりしは残念 (鳳梨子)

□大正1 (1912.1.29) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃 本日夕刻より、八甲庄日蓮宗布教所に於て素人浄瑠璃の催あり。其の語り物左の如し

『御所桜弁慶上使』(艶次)、『伊賀越道中双六七』(梅枝)、『妹背山鱧七上使』(菊水)、『鏡山又助住家』(我笑)、『合邦辻合邦内』(久木)、『赤垣源蔵』(勝木)、『忠臣蔵六』(三洋)、『大日記十』(松鶴)、『日吉丸三』(三松)、『二代鏡秋津島内』(和楽)、『平仮名盛衰記逆櫓』(相生)、『紙治炬燵』(愛水)、『三十三所壺坂』(一声)、『先代萩御殿』(組次)、『お俊伝兵衛堀川』(総

かけ合)、糸鐘龍

□大正 1 (1912-12-18) 『台湾日日新報』

演芸

●素人義太夫納会 十八日午後六時より八甲庄日蓮宗布教所に於て、素人連中浄瑠璃納会を催す筈にて、其語物乱表は

『御所核三』(義昇)、『皿屋敷』(つばめ)、『柳』(喜楽)、『菅原四つ目』(松風)、『酒屋』(長枝)、『本蔵下屋敷』(美好)、『志渡寺』(松香)、『御殿』(五角)、『忠六』(東山水)、『弁慶』(三笑)、『赤垣』(勝木)、『又助』(肥声)、『源蔵戻り』(松鶴)、『四ッ谷』(二声)、『忠四』(相水)、『帶屋』(和楽)、『道春館』(冬木)、『合邦』(三洋)、『三味線』(三玉)

□大正 2 (1913-01-30) 『台湾日日新報』

●義太夫の稽古に費ふ 北門街三丁目西村雜貨店の店員

長谷川勝次は、昨年八月中得意先より九田余受取り、義太夫の稽古代に入れ込み、その後桃園土名武陵街得源港方に雇はれ、西村より横領の告訴を受け、当地警務課に身柄押送取調中なるが、僅かの金なれば、示談になりさうなり

□大正 2 (1913-02-19) 『台湾日日新報』

●素人義太夫 十九、二十、二十一の三日間市場内同好会演芸場に於て、台北、基隆素人義太夫大会を催すべく、木戸無料にして、その語りもの左の如し

『壺坂』(二声)、『上かんや』(梅枝)、『本蔵下屋敷』(藤枝)、『皿屋敷』(冬木)、『白木屋』(和楽)、『璧滝の場』(我笑)、『三日太平記九』(艶次)、『阿漕浦』(組次)、『千両幟』(弥生)、『お俊伝兵衛堀川』(吾勇)、『岸姫三』(相生)、『忠六』(三洋)、『柳』(三松)、『太十』(魁)、『佐倉曙』(三好)、『合邦』(久木)、『日吉丸三』(喜楽)、『忠三』(菊水)、『鈴ヶ森』(亀鶴)、『菅四』(勝木)、『日蓮記三』(松鶴)、『先代萩御殿』(糸雀)、『鏡山又助内』(肥声)、『三味線』(東、鐘龍、三玉、勝玉、八重)

□大正 2 (1913-03-16) 『台湾日日新報』

頓狂詩

答機山人 埃山人

在島三年頻売油。時向見台声如牛。
休笑浄瑠璃無節。圭角禁物当世流。

〔在島三年頻りに油を売り、時に見台に向かひて声牛の如し。
笑ふを休めよ浄瑠璃に節無きを。圭角は禁物、当世の流。〕

□大正2 (1913-03-20) 『台湾日日新報』

●打狗だより

▲素人淨瑠璃会 打狗にては昨今花柳界、其他にて素人淨瑠璃流行しつゝあり。二十二日より二日間打狗座にて天狗会を催す由し

□大正2 (1913-03-27) 『台湾日日新報』 欄外記事

▲素人淨瑠璃会 打狗燕連の淨瑠璃会は二十一、二日打狗座

にて開催したるが、土地にては始めての催ふしなるのみか、太夫は大小天狗十余名中には三日月八重豊、新玉、鳳山亭等の芸者連ありし為め一層人気を引立て、二日間の入場者約二千名を算し、非常の盛況なりき

□大正2 (1913-03-31) 『台湾日日新報』

●淨瑠璃大会 久しく当地にありて義太夫の師匠たりし豊竹

東太夫は、病氣の為今回業を廃するの已むなきに至りしより、デン界の諸氏発起となり、同人の為に本明夜朝日座に於て盛んなる淨瑠璃大会を催す事となりしが、兩夜の語り人は当地を始め基隆淡水方面の素人連を網羅し、尚台北検及び基隆の芸妓連十数名も出演し、且つ目下滯北中なる竹本隅子太夫も特に出演

する事となり、三味線は峯子、八重吉、鐘龍、三玉、勝玉、国芳、千歌、東太夫等勤むべしと云へば近來稀なる大会合と云ふべし

□大正2 (1913-05-06) 『台湾日日新報』 欄外記事

▲追善淨瑠璃会 四、五、六の三日間、台南座にて故竹本越津追善淨瑠璃会開催

□大正2 (1913-07-03) 『台湾日日新報』

演芸

●栄座の大隅 何が大隅と団平の一行、請元が丸中の後援が料理屋組合、思ひ切つて派手に行くのは当然の事だ。先づ栄座の表構へを見ると積樽やら鳥渡した植込みを拵らへ頗る賑やかに出来て居る、偕て場内はと見ると、棧敷廻りに藤棚の造り花を回らし、欄干には波模様の幕に金銀の人氣玉を水玉に擬して吊り並らべ、紅ばかしやら水色ばかしの岐早提灯にズラリと電灯を入れ、柱は紅白或は白と浅黄の段だら巻きである。舞台は又た大した凝り方で正面に常脚縁附きの家形を組み、上下は庭先きの植込み、上手には透し障子の伝ひ廊下を見せ、下手には灯入りの石灯笼、其他宜しく配置あり。寄贈の花籠を上下に

陳列する等、念の入り過ぎた程濃厚とした舞台の造り方は先づ眼を驚かすに足るべきものだ。そして初日の入場者は平場の第一線を検査の美人連が占領して花と計り居流れ、第二線、三線と平場一面は裕くりと坐つて殆んど詰まつて居る。棧敷も一ぱい。二階廻りも略つと埋まつて、先づ目測七百は動かぬ処の頭数であるが、官吏側のお歴々は余り見受けぬ代りに民間の大人連は殆んどお顔揃への体、その一粒選り的な客種は、蓋し興行初まつて以来のものであつた

●栄座 大隅一行、三日目(三日)の語り物は左の如し

『伊賀越円覚寺の段』(鷹太夫、糸団藏)、『先代萩竹の間』(明石太夫、糸小団)、『璧仇討天神堤の段』(三太夫、糸小団)、『梅の由兵衛聚楽町の段』(里太夫、糸団市)、『義経千本桜鮎屋の段』(静太夫、糸広市)、『金比羅利生記志渡寺の段』(錦太夫、糸仙市)、『近頃河原達引堀川猿廻しの段』(大隅太夫、糸団平、ツレ仙市)

●大隅の初日を聴く

○事故遅参の為に記者は静太夫の『三十三間堂』から聴いたが、声量も充分あり、艶もあり、一杯に語り科して遂に弛るみも見せねば、調子の崩れる事もない。節廻しも自由自在で得心させだが、難を云へば聊か落附が無く、重味に於て欠くる処のある

様に思はれた。大車輪の語り口は蓋し大受けなり、奥の木遣りもサラサラとして味あり大に宜し。

●●●錦太夫の『合邦辻』 大隅の中堅に其人ありと伝へられた錦太夫。遠がに確かりとしたものだ。声量も、調子も、色気も、艶も、悉く揃つて居る。調子の高い三味線に乗つて、平気で語り科す処、尚大なる余裕あるを示して居る。そして落附きもあり、溢れる程の情もある。「面恥気なる玉手御前」からの艶麗なる、「ヤイ儼れにはまだ咄さねど」の合邦の意気込み、さては奥になり「ヤア恋路の闇に迷ふ我身」から手負ひになつての物語りに至つて、殆んど凄絶と云ふべしだ。要するに昔し氣質の合邦とオドオドする母親と、主人公たる色気沢山のお辻とを遺憾なく活躍させ、奴入平の如きも又た独特の妙味を見せた、否聴かした。而かも技巧に落ちて小さくなる様な事もなく、何処までも大きな浄瑠璃であるのは、台湾初まつて以来のものと云つても決して過当ではあるまい。今日までこの一段ほど一生懸命に身を入れて聴かれた浄瑠璃は無かつたのである。宜なる哉、満場の聴者は、殆んど感に堪へて拍手を打つ機会に失つた様である。三味線の仙市とは殆んど競争的で、弾き負かさうとすれば、何糞と踏応へる。お蔭で吊り込まれて、聴者も汗ビツシヨリは豪気なものだ。

●●●大隅太夫の『野崎村』元氣のいゝ調子の高い錦に引代へ、これはズンと低い調子、年齢の為ではあらうが、其処に又味があるのであらう。麒麟も老ゆれば驚馬に劣る、当年取つて六十六歳の太隅、この麒麟將に老いたりとも雖も、決して驚馬とはなつて居らぬ。音声の洪つて来たのや、齒に洩れるのや、稍聴き辛らい点の出て居ぬでは無いが、元来太隅は音声や艶で語つた人でない、況んや今日の大隅に於てをやで、調子は低くもあれ音声枯れて居ても、語る処は依然として道がは大隅である。言葉は殆んど地で行き盲目の病人たる母親を髣髴させ、立派な久作を現出する点に至つては無類と云ふべく、派手な艶つばい語り口を嬉ぶ連中には、この洪い洪い型を語つて聴かせると云ふ大隅の淨瑠璃は、或は案外に思はれたかも知れぬ。劇で云へば所謂正劇の真髓とも云ふべきもので、或る一派には面白くも思はれねば、又たその妙味をも感得されぬのである。この点に於て多くは云はず、この淋びし一段の中に多くの聴き処がある事を認めねばならぬ。団平の三味はこれも云ふわけが野暮なり。先づ勿体ないと云つて然るべく、仙市の連れ弾きも冴たものなり。(魔雲坊)

▲榮座へ義太夫を聞に行くとか客の中に、太夫の語る事を知つた面して小声にて語つたり、又他の迷惑も不顧大声に咄し合てる奴がある。是等の馬鹿者の頭上へ一撃鉄槌を打込たく、癪に障る(都柳)

□大正2(1913.7.96)『台湾日日新報』

頓狂詩

難支城 望蜀山人

大隅奈何雖有名。余入場料高可驚。

元來義太狂我輩。毎夜聴聞難支城。

〔大隅奈何に名有りと雖も、余りに入場料の高きには驚くべし。

元來義太狂の我輩も、毎夜の聴聞には城を支へ難し。〕

以娘鳴 同人

淨瑠璃大阪本場。東京斯界以娘鳴。

由來男許夜明国。寧望女義太興行。

〔淨瑠璃は大阪が本場、東京の斯界は娘を以て鳴る。

由來男ばかりで夜の明けぬ国、寧ろ女義太の興行を望む。〕

消極的 同人

從來榮座消極的。常以田舎芝居鳴。

焉知敏見機森田。這般奮発人皆驚。

〔從來榮座は消極的、常に田舎号之居を以て鳴る。

焉んぞ知らん、機を見るに敏なるの森田、這般の奮発には人皆驚く。〕

慰精神 同人

無味乾燥殖民地。我倦讀書苦措身。

幸於朝日榮兩座。演芸余光慰精神。

〔無味乾燥の殖民地、我は読書に倦みて身を措くに苦しむ。

幸ひ朝日榮の兩座に於ける、演芸の余光にて精神を慰めん。〕

□大正2 (1913-07-19) 『台湾日日新報』

●盆供養淨瑠璃 十九日八甲庄日蓮宗布教所に於て、盆供養淨瑠璃会を開催し、富子、兼子、三松、藤枝、松鶴、勝木、三洋、三味線、竹本勝玉、大切総掛合あり。晴雨に拘らず開催する由

□大正2 (1913-07-28) 『台湾日日新報』

演芸

●大隅の一行 団平、錦太夫、以下大隅の一行は榮座のお名残打揚げ後、直ちに基隆に至り、同地基隆座に於て二十八二十九の兩日開演の上、一行は来月一日の船にて一先づ帰阪すべく

確定せし由。基隆座の入場料は一等一円、二等七十錢、三等四十錢とせり

欄外記事

●素人淨瑠璃会 討蕃将卒及び警察隊留守居家族慰安の便法として稻丸会主催の下に、今明の両夜六時より八甲庄日蓮宗布教所内に於て左の通り、素人淨瑠璃会を開くべしと〔版面切のため不可読〕(藤枝)『恋娘昔八丈白木屋の段』(和楽)、『日吉丸三段目』(花笑)、『太功記十段目』(我笑)、『忠臣二度目の清書』(ねぶか)、『伊勢音頭油屋の段』(相生)、『忠臣蔵六段目』(愛水)、『伊賀越沼津里の段』(三洋)、『阿波の鳴門』(三松)、『本藏下屋敷の段』(松鶴)、『菅原寺子屋の段』(勝木)、『玉藻前三段目』(二三)、『三味線野澤兵三、兵の助、政子、芳子

□大正2 (1913-08-02) 『台湾日日新報』

●大隅太夫死す

台南医院へ入院治療中なりし大隅太夫は一時小康を伝へられたるも、何分老体とて衰弱の度甚だしく、主治医が殆んど詰切りの手厚き治療も、其甲斐なく遂に三十一日の夜死去し、折角内地より急行せる子息にも今生の面会叶はざりしは遺憾至極と

云ふべく、遺骸は防腐法を施し、一日夜子息著南の上同地にて火葬に附し、遺骨として持ち帰るべき筈なりと云ふが、同行の請元なる当地丸中三谷新八氏は、遺骨の台北著を待つて、本願寺に於て鄭重なる回向を営むべしと

演芸

●基隆の大隅一行 団平、錦太夫以下大隅の一行は二十八、二十九の両夜、基隆座に於て開演せるが、非常なる好況にて、両夜共一二等客四五百名宛の入場あり。団平の糸と錦の語り口を始めとして孰れも満足を与へ、一行掉尾の太当にして喜び居たるが、その二日目九時過ぎ、静太夫が舞台にて『三十三間堂』を語り居る折から「アカンコイ」との電報先づ著し、続いて又もや「大隅危篤誰れか直ぐ来れ」などと頻頻として著電あり。大当りの喜びは忽ちに悲みとなり、悲喜交々至るの有様なりしといふ

●素人浄瑠璃 本二日より四日まで、毎夜八甲庄日蓮宗布教所内に於て当地素人連の浄瑠璃会を催すべく、その出演者は肥声、松鶴、藤枝、不二、愛水、三松、我笑、勝木、三洋、一二三、花笑、相生、和楽、魁、菊水、麟風、久木、組次、美好、冬木、燕、艷次、梅枝、一声、半吉、ねぶか、亀鶴、

楽間、小林、柳枝、叶、二調等の大顔合せなれば、定めし大人気なるべし

□大正2 (19130804)『台湾日日新報』漢文版

●新評林

○憶大隅
薄研鱧鯛酒一壺。鳳梨雖美失疎虞。浄瑠璃作無常響。落日聞鵲憶大隅。

〔薄く鱧鯛を研り酒一壺。鳳梨美なりと雖も疎虞に失ふ。浄瑠璃は無常の響を作す。落日鵲を聞きて大隅を憶ふ。〕

□大正2 (19130908)『台湾日日新報』

演芸

●新起連浄瑠璃会 素人浄瑠璃新起連は、明九日鉄道ホテル内にて大会を開催する筈

□大正2 (19130915)『台湾日日新報』

●淡水／観月浄瑠璃会 今十五日午後六時より淡水の同好者は、同地演武場に於て観月浄瑠璃会を催す由。番組左の如し『宝の入舟』（入登）、『朝顔日記宿屋』（春笑）、『御所桜三段目』

（三笑）、『阿波鳴門順礼歌』（弥生）、『三日太平記』（錦声）、『菅原四段目』（台北ねぶか）、『千代萩竹の間』（同菊水）、『撰州合邦辻』（同松鶴）、『三勝半七酒屋』（愛水）、大切掛合『千両のばり』鉄ヶ嶽（錦声）、稲川（三笑）、おとわ（弥生）、呼出し（愛水）

□大正 2 (1913.09.21) 『台湾日日新報』 欄外記事

●素人浄瑠璃 当地素人浄瑠璃稲丸連は、二十二日午後六時より新起横街魚金に於て小会を催すべく、その番組は左の如し
『加賀見山又助住家』（半吉）、『菅原伝授寺子屋』（常盤）、『千代萩竹の間』（菊水）、『太功記尼ヶ崎』（藤枝）、『合邦辻内』（松鶴）、『日吉丸三』（花笑）、『紙治炬燵』（愛水）、『合邦辻奥』（相生）、『白石嘶揚屋の段』（里太夫）、（三味線野澤兵三）

□大正 2 (1913.10.16) 『台湾日日新報』

演技

●素人義太夫会 久しく内地へ帰還し居たる鶴澤三治郎は更に修業の上中老格に昇進して来台せしを以て、同好の天狗連にて昇格祝を兼ね、本日午後六時より八甲庄日蓮宗 布教所に於て素人義太夫会を開くべく、その語物は左の如し

『壺坂』（一声）、『日吉丸』（松鶴）、『三十三間堂』（三松）、『漕平治』（勝木）、『菅原寺子屋』（梅枝）、『鈴ヶ森』（かね子）、『逆艦』（三洋）、『秋津島』（和楽）、三味線（三治郎）

□大正 2 (1913.10.22) 『台湾日日新報』

演技

●芳野亭の上棟式 新築中の新芳野亭は、愈々来る二十五日上棟式を行ふ筈にて、当日は祝ひの為め五十銭以下、小銀貨入りの餅を蒔くべしと、また昨日より取替へたる新写真は左の如し 【活動写真番組省略】

●素人浄瑠璃会 二十二日午後六時より、八甲庄日蓮宗 布教所に於て稲丸連素人浄瑠璃大会を開催す

□大正 2 (1913.12.08) 『台湾日日新報』

演技

●芳乃亭 阪神娘義太夫、渡台遅れし為め、素人を交へたる当地の義太夫連に活動写真を附け加へて余興とし、十日十一日両日開場式を挙行する由

●素人浄瑠璃 師匠八重吉、鐘龍、三玉連の素人浄瑠璃納会を、今明両日八甲街日蓮宗布教所内に於て開くべく、その

語り物左の如し

『百度平』（和楽）、『岸姫三』（組治）、『菅四』（愛水）、『赤垣出立』（艶次）、『毛谷村』（松香）、『玉三』（美好）、『柳』（久木）、『阿漕』（我笑）、『朝顔宿屋』（亀鶴）、『日吉丸三』（半吉）、『佐倉の子別』（吾勇）、『棚ヶ崎』（梅枝）、『三日太平記』（叶）、『松王下屋敷』（魁）、『熊谷陣屋』（二調）、『新口村』（貴猿）、『阿波十』（松葉）、『御殿』（吾狗）、『志度寺』（梅花）

□大正2 (1913-12-17) 『台湾日日新報』

演芸

●芳乃亭の娘義太夫 渡台延期せし京阪娘義太夫の一行は、愈々本日入港の備後丸にて到着。明夜より芳乃亭に於て開演の筈なり

□大正2 (1913-12-18) 『台湾日日新報』

演芸

●芳乃亭の娘義太夫 予期の如く昨日の備後丸にて仙千代外十余名の一行、芳乃亭へ乗込み、本夜より開演すべく、その語り物左の如し

『阿波鳴戸八ッ目』（富子）、『太功記十段目』（玉葉）、『梅野由

兵衛』（此菊）、『御所桜三段目』（国松）、『沼津里平作内』（勝玉）、『本蔵下屋敷』（光雪）、『三十三所壺坂寺』（仙千代）、三味線豊竹満菊、連引国松

□大正3 (1914-01-18) 『台湾日日新報』

演芸界

●素人淨瑠璃 十八十九の両日、午後五時より鉄道ホテルに於て、素人淨瑠璃初会あり。その語り物左の如し

『鳴門』（つばめ）、『寺子屋』（松風）、『堀川』（まつば）、『惣五郎』（美好）、『五郎助』（半吉）、『志渡寺』（松香）、『酒屋』（久木）、『五郎助』（白蝶）、『柳』（喜楽）、『太十』（梅枝）、『忠六』（愛水）、『寺子屋』（五角）、『壺坂』（組次）、『帯屋』（和楽）、三味線三玉

□大正3 (1914-01-23) 『台湾日日新報』

演芸界

●素人義太夫聯合大会 今二十三日より三日間市場内活動常設館に於て、素人義太夫大会を催す由にて、其の語り物は

『伊勢音頭』（相生）、『千本桜』（松鶴）、『彦山権現九』（勝木）、『中将姫雪責』（三松）、『台所記棚ヶ先』（梅枝）、『紙治』（一声）、

『菅原寺子屋』(常盤)、『日吉丸三段目』(花笑)、『本藏下屋敷』

(藤枝)、『忠臣蔵四段目』(南鳳)、『一の谷陣屋』(ねぶか)、『三十三

間堂』(昇)、『伊賀越沼津』(三洋)、『鈴ヶ森』(兼子)、『三勝

半七酒屋』(米子)、『秋津島』(和楽)、『岸姫松三段目』(亀鶴)、『

箱根権現』(我笑)、『三十三間堂』(組次)、『赤垣源藏』(艶次)、『

合邦下の巻』(久木)、『日吉丸三段目』(半吉)、『朝顔日記』(冬

木)、『佐倉宗五郎』(美好)、『柳』(喜楽)、『志渡寺』(松香)、『合

邦辻』(松葉)、『日吉丸』(白蝶)、『忠臣蔵六』(愛水)、『先代

萩御殿』(五角)、『岸姫松』(叶)、『御所桜三』(二調)、『三日

太平記』(魁)、『一の谷陣屋』(鹿生)、『加賀見山又助住家』(朝

平)、『泉三郎館』(呂三)、『忠臣蔵四』(簡風)、『三勝半七酒屋』

(不二)、『外台北検総連中』(三味線八重吉)、『三玉』(鐘龍)、『三治郎

□大正 3 (1914.01.25) 『台湾日日新報』

演芸界

●義捐義太夫大会

二十三日より市場内常設館にて開催すべ

き筈なりしも、場所の都合により新起街弘法寺に於て、在台北

師匠連の発起にて今回の大惨害たる鹿兒島県下へ義捐の爲め、

今二十五日より二日間聯合大会を催す由

□大正 3 (1914.02.08) 『台湾日日新報』

演芸界

●淡水の素人浄瑠璃

淡水演芸会にては本日午後五時より

淡水俱樂部に於て春季大会を催すべく、其語り物左の如し

『御所桜』(三笑)、『三日太平記』(錦声)、『阿波鳴門』(弥生)、『

一の谷』(ねぶか)、『新口村』(花笑)、『鮮屋』(松鶴)、『紙治

炬燵』(愛水)、『忠四』(南鳳)、『油屋』(相生)、『三味線』(三三

郎)

□大正 3 (1914.02.18) 『台湾日日新報』

演芸界

●送別浄瑠璃会

芳乃亭に在りし娘義太夫国松の帰国に付

き、その送別の爲め今明両夜八甲庄日蓮宗布教所に於て、当地

素人連の浄瑠璃大会あり。その語り物左の如し

『酒屋』(相生)、『寺子屋』(松鶴)、『大文字屋』(叶)、『三十三ヶ

所』(不二)、『一の谷』(ねぶか)、『岡崎の段』(鈴八)、『日吉

丸三』(花笑)、『紙治』(愛水)、『柳切』(吾妻)、『新之口村』(勝

好)、『松王郎』(魁)、『さかろ』(南鳳)、『弁慶』(常盤)、『一

の谷奥』(二調)、『お半長右衛門』(三吉野)、『合邦』(藤枝)、『柳』

(愛蝶)、『御所桜』(かねこ)、『又助』(朝平)、『三味線』(三治郎)

八重吉、国松)

□大正 3 (1914.02.27) 『台湾日日新報』

演芸界

●素人義太夫大会 台北、基隆、淡水の素人義太夫春季聯合大会を、明二十八日より五日間、芳乃亭にて開催する由

□大正 3 (1914.03.04) 『台湾日日新報』

演芸界

●素人義太夫大会 芳乃亭の素人義太夫は、一日より引続開催中なるが、本日よりの語り物左の如し

『本蔵下屋敷』、『油屋』、『百度平』、『布四』、『野崎』(相生)、『逆槽』、『寺子屋』、『忠四』(南風)、『帶屋』、『阿漕』、『布四』(三吉野)、『柳』、『日吉丸』、『新口村』(花笑)、『すしや』、『寺子屋』、『太十』(松鶴)、『十種香』、『壺坂』、『酒屋』(不二)、『本蔵』、『鈴ヶ森』、『合邦』(藤枝)、『又助内』、『本蔵』(朝平)、『三日太平記』、『沼津』(魁)、『八陣』、『一の谷』(二調)、『大文字屋』、『岸姫』(叶)、『御所』、『赤垣』(艶次)、『柳』、『合邦』(久木)、『いざり』、『蝶八』(我笑)、『秋津島』、『忠四』(和楽)、『御所』(かね子)、『沼津』、『宿屋』(三洋)、『皿屋敷』、『陣屋』(ねぶか)、『壺坂』、『

『岸姫』(組次)、『赤垣』、『壺阪』(吾勇)、『岸姫』、『玉三』(三岬)

□大正 3 (1914.03.05) 『台湾日日新報』

演芸界

●素人義太夫会 過日來より芳乃亭にて開催し居る素人義太夫会、当夜は五日目のこと、て台北天狗連中の四天王と称する人々の顔合せをなす由なれば、定めて盛会を極むるならん。其の語物は

『布引滝』(三好野)、『百度平』(相生)、『忠臣蔵六』(松鶴)、『鈴ヶ森』(花笑)、『太功記十』(藤枝)、『御所桜三』(兼子)、『忠臣蔵四』(南風)

□大正 3 (1914.04.20) 『台湾日日新報』

演芸界

●芳乃亭 本日より取り替へたる新写真真は三崎座附き俳優中村歌扇、市川千升にて出演せる旧劇『先代萩御殿場より床下の場』にて義太夫竹本鐘龍の出語りあり。尚ほ新派『新牡丹灯笼』を呼物とし、重なる新写真真は左の如し

〔活動写真のうち義太夫以外省略〕(旧劇)『先代萩上下二巻』

竹本鐘龍太夫出語り、声話色鳴物入り

□大正3 (1914.06.10) 『台湾日日新報』

●素人義太夫会 今十日より三日間八甲庄日蓮宗布教所に於て素人義太夫会を催す由。其の語物は

『正清本城』(ねぶか)、『又助』(半吉)、『鎌倉三代記』(明石)、
『合邦辻』(まつば)、『三日太平記』(貴富)、『松王下屋敷』(魁)、
『御所桜三』(吾妻)、『又助』(勝次)、『柳』(三松)、『日吉丸三』
(琴水)、『柳』(鬼笑)、『菅原四』(松鶴)、『玉三』(白蝶)、『御
殿』(久木)、『日吉丸三』(司)、『酒屋』(冬木)、『沼津』(如月)、
『岸姫』(艶次)、『儀作』(美好)、『合邦辻』(藤枝)、『御殿』(五
角)、『志渡寺』(松香)、『本蔵下屋敷』(吞声)、『紙治』(愛水)、
『赤垣源蔵』(吾勇)、『四ッ谷』(一声)、『野崎村』(和楽)、『逆
鱗』(三洋)、三味線(竹本三玉)

□大正3 (1914.06.12) 『台湾日日新報』

●新刊紹介

▲浄瑠璃 (一の二) 十銭毎月一回発行 徳島市富田浦町浄瑠
璃社

□大正3 (1914.06.19) 『台湾日日新報』

●国姓爺後日物語(十八) (劇と史実) 台■

※鹿島校巷の脚本『国姓爺後日物語』(愛国婦人会台湾支部発行、
東京堂発兌、一九一四) に対する批評か。

演芸界

◎芳乃亭 本日より全部取り替へたる新写真には中村歌扇一座の
出演にて旧劇『壺坂靈驗記』義太夫竹本鐘龍出語り、尚ほ新派
悲劇『旧山河』上下、泰西人情劇『バウンドレリソード』上
中下等の外、主なる新写真は左の如し

『カバフト旅行』(実写)、『新馬鹿大将成功の巻』(滑稽)、『著
色少女の真心』(お伽劇)

◎素人浄瑠璃大会 本日より二日間、八甲庄日蓮宗 布教所
に於て素人義太夫会を催す由。其の語物は

『御祝儀宝の入舟』(登昇)、『阿波の鳴戸』(兼子)、『玉藻前二
段目』(森川)、『日吉丸三』(琴水)、『御所桜三段目』(三松)、『先
代萩御殿』(しんど)、『三勝半七酒や』(藤枝)、『日吉丸三ノ奥』
(魁)、『大功記十段目』(寿)、『菅原四段目』(松鶴)、『三勝半
七酒やの奥』(不二)、『一の谷熊谷陣屋』(ねぶか)、『朝顔日記
大井川』(三洋)、『日吉丸三段目』(花笑)、『佐倉宗五郎子別れ』

(一声)、『平仮名盛衰記逆鱗の松』(三吉野)、『酒屋おこん十人斬』(相生)、『安達原三段目』(梅枝)、『阿漕が浦平次住家』(勝木)、『本蔵下屋敷』(二調)、『岸姫松三段目』(叶)、『佐倉宗郎儀作切腹』(吾勇)、三味線鶴澤政七

□大正3 (1914-07-03) 『台湾日日新報』

演芸界

◎新起連の物語 今回八重吉門下新起連は弘法寺護国十善会へ金員寄付の目的を以て、四日五日の両日、浄瑠璃会を催す由なるが、重なる物語は左の如しと

『泉三郎館の段』(二調)、『志度寺の段』(検峰菊)、『三日太平記』(叶)、『絵本太功記十』(寿)、『伊賀越八ツ目』(検、鈴八)、『於染久松』(呂三)、『百度平住家』(三吉野)、三味線竹本八重吉

□大正3 (1914-07-06) 『台湾日日新報』

●義太夫日曜会 台北素人義太夫三玉連は毎日曜日、師匠三玉の宅に会合して日曜会を開く由、因に今回は初会の事として、準備の都合上、本日開催の筈

□大正3 (1914-07-11) 『台湾日日新報』

●新刊紹介

▲浄瑠璃(一の三) 十一銭、徳島市富田浦町浄瑠璃社

□大正3 (1914-07-11) 『台湾日日新報』

演芸界

◎素人義太夫大会 今十一日より十二日迄二日間、八甲庄日蓮宗布教所に於て、鶴澤政七帰還送別浄瑠璃会開催す。語りものは左の如し

『御祝儀宝の入舟』(入登)、『鎌倉三代記』(兼子)、『日高川』(つばめ)、『又助住家』(半吉)、『弁慶上使』(琴水)、『中将姫雪責』(三松)、『三勝半七』(冬木)、『赤垣源蔵』(吾勇)、『布引四段目』(コックリ)、『太功記十』(艶次)、『伊賀越沼津』(藤枝)、『日吉丸三』(魁)、『忠臣蔵六』(松鶴)、『三勝半七奥』(久木)、『後藤兵衛』(我笑)、『鈴ヶ森』(花笑)、『岸姫松三』(叶)、『菅原四段目』(ねぶか)、『藻玉前三段目』(三洋)、『逆鱗の松』(三吉野)、『いざりの仇討』(和楽)、『伊勢音頭油や』(相生)、外数名。三味線竹本八重吉、竹本三玉、竹本鐘龍、竹本勝玉、鶴澤政七

□大正3 (1914-07-20) 『台湾日日新報』

演芸界

◎素人浄瑠璃大会 鶴澤政七送別浄瑠璃素人大会、延期の処
愈々二十日二十一日の両日間、八甲庄日蓮宗布教所にて開催す
る由

『御祝儀』（入登）、『油屋』（寿加）、『三浦別』（兼子）、『御所様』（琴水）、『鳴戸内』（三松）、『酒屋』（不二）、『玉三』（三洋）、『御殿』（久木）、『赤垣』（団次）、『合邦』（和楽）、（廿一日）『布引四』（コツクリ）、『太十』（ふたば）、『沼津』（藤枝）、『堀川』（魁）、『紙治内』（寿）、『岸姫』（叶）、『腰越状』（二調）、『鰻谷』（三吉野）、三味線竹本八重吉、竹本鐘龍、鶴澤政七（二十一日）
※「廿一日」は「廿日」の誤植か。

□大正3（19140812）『台湾日日新報』

演芸界

◎新高館 本日より写真全部取替たるが、其呼物としては
（旧劇）『恋女房染分手綱 重の井三吉別れの場』（浄瑠璃入）、（新派）『月の影』上下二巻全十五場（以上囃子鳴物声色入）、実写『モンテビデオ港の■景』（泰西■劇）『伊国ミラノ会社作墓前の秘密』上下二巻、（日本喜劇）『正一位稻荷大明神』（西洋滑稽）『番人の箱詰』（同）『水騒ぎ』

◎素人義太夫会 南門外に於て料理仕出し及び蒲鉾製造業主
魚平事^{うへへことわらく}和楽は、今回府中街三丁目四番戸^{こんくわいふちうがいてうめぼんこ}（庁の横丁）に移転し、
益々発展営業すべく、其開業に先だち明十三日祝賀を兼ね素人
義太夫会を催す由。其主なる出演左の如し

相生、三吉野、叶、一声、梅枝、松鶴、不二、愛水、美好、吾
勇、三洋、組市、艶治、久木、我笑、藤枝、魁、二調、和楽、
其■数名

□大正3（19140819）『台湾日日新報』

演芸界

◎素人浄瑠璃大会 十九日より三日間、勸工場階上に於て
素人浄瑠璃大会を開く

『八陣ハツ目』（ねばけ）、『柳』（喜楽）、『三日太平記』（貴富）、
『堀川』（松葉）、『太十』（明石）、『柳』（亀笑）、『又助』（時次）、
『菅四』（冬木）、『日吉丸』（司）、『岸姫』（■次）、『弁慶上使』（琴
水）、『菅四』（松風）、『玉三』（白蝶）、『儀作』（美好）、『忠三』
（如月）、『志渡寺』（松香）、『又助』（半吉）、『忠六』（三洋）、『皿
屋敷』（吾妻）、『酒屋』（亀鶴）、『日吉丸』（花笑）、『柳』（不二）、
『揚屋』（久木）、『忠三』（我笑）、『御殿』（五角）、『太十』（梅枝）、
『六助』（藤枝）、『弁慶』（二調）、『下屋敷』（松鶴）、『堀川』（魁）、

『四ツ谷』(一声)、『日吉丸』(鈴弥、『忠三』(吾勇)、『忠四』(三吉野)、『忠六』(愛水)、『菅四』(和樂)、『柳』(きかく)、『帶屋』(相生)、『酒屋』(寿)、『志度寺』(峰菊)、糸三玉、糸鐘龍、同八重吉

□大正3 (1914-08-27) 『台湾日日新報』

演芸界

◎素人浄瑠璃会 二十七、八の両夜午後六時より勸工場階上にて開会。語り物と語り手は

『二十四孝』(小鹿)、『太功記十段目』(朝平)、『三十三間堂平太郎内』(亀笑)、『日吉丸三段目』(花笑)、『弁慶上使』(琴水)、『岸姫松三段目』(冬木)、『本藏下屋敷』(藤枝)、『松王下屋敷』(魁)、『太功記杉の森』(二調)、『惣五郎子別れ』(美好)、『三十三間堂平太郎内』(検査きかく)、『撰州合邦ヶ辻』(検査鈴弥)、『三勝半七酒屋の段』(相生)、『三味線』(三玉、八重吉)

□大正3 (1914-10-02) 『台湾日日新報』

◎素人浄瑠璃大会 来る二三四の三日間、八甲庄日蓮宗

布教所に於て故竹本鐘龍十五周年追悼のため、台北淡水の素人連の浄瑠璃大会を催す由

□大正3 (1914-10-21) 『台湾日日新報』

演芸界

◎素人義太夫会 竹本八重吉師の義太夫会は、二十一日二十二日の両日、午後六時より新起横街丸新前藤本氏宅にて催す由

『三十三間堂』(當代)、『加賀見山又助』(秀八)、『菅原松王内』(すゞめ)、『三勝半七』(寿)、『彦山権現六助内』(きかく)、『合邦ヶ辻』(鈴弥)、『菅原寺子屋』(六助)、『二度目清書』(峰菊)、『布引の四』(〇〇坊)、『太功記尼ヶ崎』(魁)、『太功記妙心寺』(二調)、『三日太平記九』(叶)、『新吉原揚屋』(小嵯峨)、『勢州阿漕浦』(三吉野)、『伊勢音頭油屋』(相生)、『忠臣蔵本藏下屋敷』(掛合(相生) (三吉野) (二調)、『関取千両幟』(掛合(相生) (三吉野) (六助)

□大正3 (1914-10-23) 『台湾日日新報』欄外記事

演芸界

◎素人浄瑠璃 二十四五両日、新高館に於て素人浄瑠璃の催しあり。語り物如左

『八陣』(ねぼけ)、『弁慶』(琴水)、『岸姫』(冬木)、『下屋敷』(鱗司)、『朝顔』(久木)、『儀作』(天好)、『志度寺』(松香)、『菅四』

●(松鶴)、『忠四』(和楽)、『帶屋』(相生)、三味線(三玉、同■)

□大正3 (1914.10.31) 『台湾日日新報』

演芸界

◎素人義太夫大会 本日午後二時より午後七時迄、淡水俱樂部に於て、台北淡水合併素人義太夫大会あり。その語物は

『御祝儀』(入登)、『菅原四』(橘)、『安達原三』(一声)、『御所桜弁慶上使』(三笑)、『先代萩御殿』(メ奴)、『三日太平記』(錦声)、『玉藻前三』(岬)、『合邦』(里雀)、『梅川忠兵衛新口村』(愛水)、『関取二代鑑』(和楽)、『酒屋』(相生)、大切かけ合『大功記十段目』光秀(岬)、婆(里雀)、操(愛水)、十次郎(相生)、初菊(和楽)、三味線(竹本鐘龍)

□大正3 (1914.11.26) 『台湾日日新報』

演芸界

◎素人義太夫大会 本日より三日間、台北素人義太夫界の老練株相生が会主となり、新高館にて開催する由。三味線は鐘龍、勝玉、八重吉、三玉等にて、大切に掛合ありと

□大正3 (1914.11.28) 『台湾日日新報』

●聯合／素人淨瑠璃会

晩秋の折から台北、基隆、淡水の素人淨瑠璃の大大狗、小天狗共が鞍馬山ならで新高館に立籠り、何れも其技を競う由なれば、初日早々牛若ならぬ年若の僕が飛び込むと、恰度検査の美形六助、鈴弥に八重吉が高座に列んで居た。確に『柳』の木遣りを歌つて居たが訳もなく、大向うの大当りにて引き退ると、今度はお馴染の松鶴翁の『菅原四段目』を語る。素人として洩い処がある。之れは老熟せる結果ならんと感ず仕る外なし。次に『御所桜三段目』を岬と云ふ人、熱心に車輪に面白く語つて聴かせた。要するに此人声量充分なるため大きく語り、却々巧者なる語口にして達者なもの、天狗中でも先づ大天狗株とや申さん。大当り大当り。其次『本蔵下屋敷』は鈴弥で奥に重きを置きて、唯々美しき咽喉をして聴者を酔はましめたり。ツレ六助、御苦労に存ず。『三十三所壺坂』は一声にして音調の乱れざるを以て、其人の価値あり。盲人沢市を楯にしてお里なる人を能く活躍せしめたる其技、又凡ならずと褒めて置く。其次ぎに三吉野の『帶屋』で、アノ多くの人物を眼前に髣髴たらしめ、親子の情緒纏綿たる中に儀平の洒脱、長吉の輕妙は僕が沁々

感心はしたが、然し此の浄瑠璃中、長吉の恋物語の一節に改良を加へる価値は充分であると認めた。此人最も得意の語物として何処でも能く語るが、改良せざる以上は酒席の他にて濫りに語るべきものでない事を、予め自覚されたし。大切に『妹背山』の掛合があつたが聴かずに失敬した。盛況なる会であつて今晚の語物は左の如くである(僕)

『御祝儀宝入舟』(入登)、『太十』(明石)、『本蔵下屋敷』(鱗)、
『玉三』(美好)、『寺子屋』(松香)、『壺坂』(二調)、『紙治』(峯
菊)、『酒や』(寿)、『合邦』(菊水)、『鰻谷』(藤枝)、『柳』(久
木)、『百度寺』(相生) 大切掛合『阿古屋琴責』(峯菊、相生、
三吉野、六助) 三味線(八重吉、鈴弥)

□大正 4 (1915.01.30) 『台湾日日新報』

演芸界

◎浄瑠璃初会 当地素人義太夫の一部は、明三十一日より二日間、勸工場楼上に於て、毎夜六時より初会を開くべく、当年八十一歳の錦老人上床する由。其語り物は左の如し
(五行不明)

『玉三』(美好)、『志渡寺』(■■■)、『又助』(■■■)、『二度目』(明
石)、『日吉丸』(■■)、『忠四』(錦)、『酒屋』(相生)

□大正 4 (1915.03.10) 『台湾日日新報』

演芸

◎素人義太夫 本日午後六時より、城内勸工場二階に於て勝玉連の素人義太夫温習会を催す由。其語り物は

『合邦内』(藤枝)、『御所桜』(かね子)、『熊谷陣屋』(ねぶか)、
『白石揚屋』(小ぎく)、『平作内』(三洋)、『三勝半七』(三松)、
『本蔵下屋敷』(菊水)、『日吉丸三』(松鶴)

□大正 4 (1915.04.24) 『台湾日日新報』欄外記事

演芸界

◎素人義太夫大会 本日より新高館にて台北素人義太夫聯合大会を開く由。其語り物は左の如し

『忠四』(ねぼけ)、『赤垣』(艶次)、『太功記十』(かね子)、『四
ツ谷怪談』(冬木)、『二度目の清書』(明石)、『新吉原』(久木)、
『玉藻前三』(勝二)、『玉藻前三』(白蝶)、『三勝半七』(寿)、『松
王下屋敷』(魁)、『合邦』(松葉)、『沼津』(藤枝)、『三十三間堂』
(小菊)、『赤垣』(勝木)、『忠臣蔵三』(菊水)、『菅原四』(勝司)、
『鳴戸』(三松)、『河漕平治』(我笑)、『忠臣蔵六』(三洋)、『安
達三』(司玉)、『合邦』(松鶴)、『新吉原』(巴笑)、『赤垣』(美

好)、『布引滝』(松香)、『紙治』(一声)、『岸姫松』(組次)、『忠臣蔵七』(和楽)、三味線三玉、勝玉、鐘龍、八重吉

□大正4 (19150521) 『台湾日日新報』

秘密の糸

(一) 義太夫の縁

かやうにして彼女は台湾の果てまでも流れ落ちるやうな身になった。誰一人として知る辺もないやうな、そして氣候と習慣とを異にした土地で、彼女は津田の家から鈴弥と名乗つて出た。そしてそれから七八年の歲月といふものが、兎にも角にも彼女の上へ大きい運命の転回を与へることなしに過ぎて行つた。賑やかな芸者、年増芸者として彼女の名は可なりに台北の花柳界に聞えたものとなつた

それは丁度、一昨年の十一月も末近い頃であつた。常夏の台湾の空にも初秋らしい風が立つて、どうかすると襦袢の襟を掻き合せるやうな薄ら寒さを覚えるやうな日、北の国の寒い寒い凍るやうな所から、南国へ渡る候鳥のやうに、台北の土地へ来た美しい一群の若い女があつた。それは北海道の小樽で芸者をしてゐた女達で、今も梅屋敷にゐる政弥、花香、静香、

政奴、それから竹の家にゐる舞妓の手丸などであつた。彼等は凍てつくやうな天地から逃れて、南へ南へと船路の進むまゝに、一枚々々着物を薄くして、さまざまな想像を頭の中に描きながら来たのであるが、丁度その女達と一緒に、加藤といふ齡の頃は五十ばかりの、頭の禿げた親爺が、その妻のお金といふのを伴れて、やはりこの台北へ来たのであつた

この加藤といふ男が、何故その女達と一緒に北海道から遙々台湾へまで来たのか? それは彼が静香や政奴や手丸の父親であるからである(勿論お金とは腹違いであるけれど)。娘達を遠い台湾へ遣つては、加藤も自分一人だけ冷たい孤独な北国に留まつてゐる訳にもゆかなかつた。彼は小樽で義太夫の師匠として可なりに売つてゐた地位をも捨て、三人の娘の後を追つて来たのである

然し、台湾へ来ても、彼はこれといふ職業をも得ることが出来なかつた。暫くの間はたゞぶらぶらして遊食してゐたのであつたが、何時までもさうした生活が続けられるものでもないのので、到頭娘の縁故から梅屋敷に泣きつき、梅屋敷の主人の大和辰之助の世話で、漸く台北検査の帳場に住み込むことになつた

かうして幾らか自分の生活の保障が得られるやうになると、

加藤はやがて新起街の竜木で義太夫の師匠をしてゐる八重吉の所へ繁々出入りするやうになつた。八重吉といふのはもう六十六ばかりの婆さんで、その門下には鈴弥を初め、やはり津田の六助、きかく、すゞめ、すゞ、それから竹の家の峰菊などが錚々たるものとして名を知られてゐる

これ等の門下生はみな峯々の喉自慢家であつた。何かの機会があれば、必とそれを捕へてお温習をやることを忘れない。読者の中では、彼等が新高館などで、しやばつた声を張り上げてゐたのを聞いた人もあること、思ふ。そしてさういふ場合、加藤はいつも真打格で、最後に出るのが常であつた

義太夫が取りもつ縁——加藤と鈴弥との間は義太夫を通して親密な仲になつた。殊にお温習の会などのことは主としてこの二人が取り極めるので、二人はその相談をするのだと言つては、よく新起横街の金勢の座敷で会ふのであつた

□大正 4 (1915-11-25) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃月並会 明二十五日、午後六時三十分より西門外街栄座前俱樂部に於て、勝玉連素人浄瑠璃会を開催し、語り物は各々得意の物を登場する由

□大正 4 (1915-12-07) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃大さらひ 今明七八の両日午後六時より、年末納会として勝玉連素人浄瑠璃大会を城内勸工場階上に於て開催の由。尚は太夫連協議の上、競争的懸賞を附し、飛入連も有り

□大正 4 (1915-12-12) 『台湾日日新報』

演芸界

●素人浄瑠璃大会 今十二日午後六時より晴雨に不拘、台北勸工場に於て、古池田(勝木)氏の迫害素人浄瑠璃大会を開催する由なるが、当日の出演者は斯界の老練家全部顔揃と云ふことなれば定めし聞ものならんが、語物左の如し

『四ツ谷』(一声)、『御所桜』(かね子)、『八陣』(梅枝)、『寺小屋』(松鶴)、『鳴門』(三松)、『御殿』(菅枝)、『忠六』(三洋)、『儀作』(三好)、『合邦』(寿)、『下屋敷』(柳枝)、糸(三玉、勝玉)

□大正 4 (1915-12-16) 『台湾日日新報』

十把一束

▲十二日の夜、台北勸工場二階の浄瑠璃会場に於て、足駄をお取違への方は(義太夫)

□大正 5 (1916-01-19) 『台湾日日新報』 欄外記事

●素人浄瑠璃初会 今十九日午後六時半より西門外街栄座前倶楽部に於て、勝玉連素人浄瑠璃会を開催する由

□大正 5 (1916-01-25) 『台湾日日新報』

演芸界

□素人義太夫初会 今二十五日より三日間 台北勸工場に於て、素人義太夫初会を催す由。其語物は

『忠三(ねげけ)、壺坂(かね子)、五郎助(白蝶)、『袖萩(松葉)、『太十(ねぶか)、『鈴ヶ森(勝二)、『陣谷(五角)、『揚屋(小菊)、『忠三(菊水)、『忠六(三洋)、『日吉丸(半吉)、『滝(我笑)、『鈴ヶ森(亀鶴)、『鳴戸(三松)、『日吉丸(琴水)、『太十(寿)、『下屋敷(魁)、『六助(藤枝)、『太十(梅枝)、『又助(隣鳳)、『赤垣(艶治)、『揚屋(久木)、『下屋敷(美好)、『志渡寺(松香)、『合邦(松鶴)、『鈴ヶ森(一声)、『柳(巴昇)、『酒屋(柳枝)、『忠四(和楽)、『三味線(三玉)

□大正 5 (1916-07-24) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃 明二十五日午後六時より、八甲庄公会堂に於て

つるさは 鶴澤一平連中の素人浄瑠璃あり。来聴随意にして其の乱表左の如し

『御祝儀宝入船』(入登)、『鳴門八ツ目』(古菊)、『勘平切腹』(我笑)、『梅川忠兵衛新口村』(菊水)、『太功記十段目』(艶次)、『小春治兵衛紙屋』(三七十)、『御所桜三段目』(相生)

□大正 5 (1916-08-12) 『台湾日日新報』

頓狂詩

能投機 烏有子

活動生花浄瑠璃。諸芸大会同時始。納涼売出能投機。争先集寝兒杓子。

〔活動・生花・浄瑠璃、諸芸の大会同時に始まる。

納涼売出し能く機に投じ、先を争ひて集まらん寝兒も杓子も。〕

□大正 5 (1916-11-14) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃大会

●素人浄瑠璃大会 明 十四日及十五日の両日、八甲庄日蓮宗布教所に於て午後六時より、当地素人浄瑠璃各連中聯合の大会を催はすべく、会主は豊竹三玉にして、鶴澤一平、其他各師匠総出の応援、其

の語物左の如し

『四ツ谷怪談伊右衛門内』（二声）、『伊賀越遠眼鏡の段』（梅枝）
 『三十三ヶ所壺坂沢市内の段』（巴昇）、『安達原三段目』（白蝶）、
 『明烏山名屋の段』（二重）、『彦山権現六助内の段』（藤枝）、『お
 染久松野崎村の段』（柳枝）、『玉藻前三段目』（鱗鳳）、『忠臣蔵
 四段目』（和楽）、『金刀比羅利生記百度平内の段』（叶）、『鏡山
 又助内の段』（勝次）、『日吉丸三段目』（花笑）、『お駒才三鈴ヶ
 森の段』（かね）、『菅原寺子屋の段』（鹿生）、『忠臣蔵勘平切腹
 の段』（我笑）、『御所桜三段目』（改玉）、『赤垣源藏出立の段』（艶
 次）、『楠昔嘶どんぶりこ』（ねぶか）、『松王下屋敷の段』（組次）、
 『朝顔日記浜松小屋の段』（松葉）、『三勝半七酒屋』（冬木）、
 『三十三間堂平太郎内』（小峨我）、『白石嘶新吉原揚屋の段』（小
 菊）、『一ノ谷三段目』（吾角）、『太功記十段目』（寿キ）、『伊勢
 物語三段目』（相生）、『忠臣蔵五段目』（山水）、『仙代萩御殿の
 段』（三洋）、『合邦辻下の巻』（魁）、『阿波鳴戸八ツ目』（三松）、
 『恋の飛脚新口村の段』（菊水）、『三日太平記九ツ目』（亀鶴）、『朝
 顔日記宿屋の段』（久木）、『時雨の炬燵紙治の内の段』（三七十）、
 『本蔵下屋敷』（美好）、『播州皿屋敷』（松香）、『蝶花形八ツ目』
 （栄旭）、『三十三所壺坂寺の段』（菅枝）、『腰越状泉三郎館の段』

（呂二）

□大正5 (1916-11-24)『台灣日日新報』漢文欄

◎ 学生活動電戲

新取締規則嚴重厲行鏡面檢閱。慮其有害於風紀衛生也。顧近今台灣內地人劇界狀況。新派俳優浪花節講談。落語。娘淨琉璃等。感受活動写真压迫。有凋落之運。榮座朝日兩座經營困難。勢不得不讓世界館。芳野亭諸活動写真呈滿員之盛況也。學校生徒及青年子弟姪等。流行猶甚。非教師父兄。可能制止。為惟世界館主。有見及茲。曩由內地移入理想的教育鏡面。經市內小公學校長檢閱鑑定無碍。会期二十三日上午九時至十一時半。二十五日下午一時半至四時。二十六日上午九時至十一時半。会场不販菓餅之類。觀覽料學生四錢。父兄十錢外。不敢一厘。演題若実写飛行機製作実況。法騎渡河。非洲獵豹。印度風俗。猿及蛇虺。毛虫化蝶等。兼可以資精神上之開發云。

□大正5 (1916-12-16) 『台灣日日新報』

●新刊紹介

▲義太夫集（上巻、海賀変哲編） 俗曲文庫の第三編にして最も人口に膾炙せるもの三十番を収録し章句を厳密に校訂し合の手の外に特殊の節は洩れなく之を挿入せるのみならず巻末には

辞句略解を附したれば従来のものに比して読者に便すること多大ならん（定価金五十五銭、東京市日本橋区本町三丁目博文館）

□大正 5 (1916.12.19) 『台湾日日新報』 挿絵

素人浄瑠璃大会 △栄座に於ける▽

※高座のスケッチ。太夫・花香（女）、三味線・一平（男）・小種（女）

□大正 6 (1917.02.01) 『台湾日日新報』

□素人浄瑠璃大会 今明両日、八甲公会所に於て素人浄瑠璃大会を開催する由なるが、其の語り物左の如し（いろは順）

『紙治』（一声）、『太十』（呂三）、『八陣八ツ目』（梅枝）、『忠臣蔵二段目』（鱗鳳）、『お駒才三』（柳枝）、『又助内』（桜玉）、『三日太平記』（大和）、『寺子屋』（艶次）、『中将姫雪責』（組次）、『日吉丸』（源正）、『玉三』（鴻）、『赤垣源蔵』（小峨我）、『お俊伝兵衛』（照蝶）、『鳴戸』（三笑）、『沼津』（三澤）、『本蔵下屋敷』（美好）、『鏡山長局』（菅枝）

□大正 6 (1917.02.06) 『台湾日日新報』

●素人義太夫大会 当地素人義太夫春季大会を今六日、午後六

時より、向ふ三日間毎夜南門外龍口亭にて開催する由にて、入場無料なりと

演芸界

□●●● 過日来、例の浄瑠璃中の傑作『壺坂』を出演し大入を占めたる同座は、本日より第十三回替り狂言の芸題前『兎搦曾我敷皮』四幕切『お染久松野崎村の場』一幕にて役割は左の如し

※配役翻字省略。

□大正 6 (1917.06.24) 『台湾日日新報』

演芸界

□基隆の素人義太夫 台北基隆の素人義太夫連は二十四日午後七時より、基隆公会堂に於て納涼浄瑠璃会を開催し、野澤一平師匠も出演の筈なるが、何人に限らず来聴随意なりと

□大正 6 (1917.07.25) 『台湾日日新報』

●素人義太夫会 本日午後六時より江瀬街埋立地新小松楼上にて鶴澤一平師の主催にて、素人浄瑠璃会開催す。来聴随意、

語りもの
語物左の如し

『伊勢物語』（相生）、『又助内』（梅笑）、『古八』（藤枝）、『勘平内』（我笑）、『明島』（花笑）、『沼津六』（吉永）、『楠三』（ねぶか）、『酒屋』（寿）、『壺坂』（小菊）、『堀川』（魁）、『梅忠』（菊水）、『太十』（久木）、『紙治』（三十七）

□大正6（1917-07-28）『台湾日日新報』

■素人淨瑠璃会 二十八日、二十九日両日、府前街四丁目丸福前神島表具店楼上にて開会す。語りもの左の如し

『四つ谷怪談』（一声）、『台処記棚ヶ先』（梅枝）、『お染久松野崎村之段』（柳枝）、『菅原伝授手習鑑四ツ目』（相生）、『加賀見山又助内之段』（梅笑）、『忠臣蔵六段目』（我笑）、『日吉丸三段目』（花笑）、『楠三の口とんぶりこ』（寐鱗）、『平仮名盛衰記逆槽之段』（改玉）、『加賀越八段目岡崎之段』（菅枝）、『松王下屋敷』（魁）、『古手屋八郎兵衛』（藤枝）、『三勝半七酒屋の段』（鱗鳳）、『明烏山名屋の段』（菊水）、『壺坂寺沢市内』（小菊）、『伊賀越六段目沼津之段』（三洋）、『阿波鳴戸十郎兵衛内』（かね子）、『忠臣蔵本蔵下屋敷』（美好）、『金比羅利生記志渡寺之段』（楽間）、『玉藻前道春館之段』（中村）

□大正6（1917-08-27）『台湾日日新報』

●素人義太夫会 台北義太夫界の古老として美音家たる久木氏は今回内地帰還に付、同志者相謀り二十七、二十八両日間、南門外龍口亭に於て送別演芸会を開催する由にて、尚ほ同会の為め知己諸氏よりの寄贈品多く、両夜共福引の余興ありと。因に芸題左の如し

（三味線）豊澤三省、竹本鐘龍、竹本三玉、豊竹よし子（朝顔日記）久木、（楠昔噺）ねぶか、（太功記十段目）梅枝、（新吉原揚屋）柳枝、（新野口村）、菊水（布引四段目）相生、（菅岡）鱗鳳、（沼津里）和楽、（御所桜）改玉、（柳）井筒、（日吉丸）築司、（三勝酒屋）大和、（堀川おしゆん伝兵衛）三十七、（三日太平記）花笑、（又助住家）梅花、（合邦奥）松葉、（佐倉宗五郎子別）美好、（阿波十）三松、（志渡寺）松香、（忠国）我笑、（中条姫）組次、（本蔵下屋敷）藤枝、（壺坂）小菊、（合邦内）魁、（関取二代鏡）菅枝、（玉三）白蝶、（三勝酒屋）かね子、（四谷怪談）一声、（朝顔日記）桜玉、（太功記十段目）中糸、（本蔵下屋敷）藤司、（平仮名盛衰記）三洋

□大正6（1917-08-29）『台湾日日新報』欄外記事

●素人義太夫会 南門龍口亭に昨日迄開演中なりし久木送別演芸会は近頃になき盛況を呈し、尚各商店よりの寄贈品も多きより、尚一日の日延をなし、余興の福引ありと。本日語りものは左の如し

『朝顔日記』（久木）、『三勝酒屋』（相生）、『沼津里』（改玉）、『四ッ谷怪談』（一声）、『壺坂』（小菊）、『阿波十』（かね子）、『柳』（三松）、『玉三』（鱗鳳）、『太十』（魁）、『谷渡り』（うぐひす）

□大正6 (1917-09-03) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会 今三日及び明四日の二日間台北検査階上に於て、午後正六時より、鶴澤一平連の素人浄瑠璃会を催ほす。両日の語りものは左の如し

▽三日の分 『御祝儀宝入船』（入登）、『梅川忠兵衛新口村』（勝好）、『三十三所壺坂沢市内』（山根）、『本蔵下屋敷』（梅笑）、『玉藻前三段目』（我笑）、『佐倉曙儀作内』（菊水）、『才三お駒鈴ヶ森』（花笑）、『伝兵衛お俊堀川』（魁）、『大功記十段目』（花香）、『天網島紙治内』（三七十）

▽四日の分 『梅野由兵衛聚楽町』（勝好）、『大功記十段目』（山根）、『忠臣蔵六つ目』（我笑）、『加賀見山又助内』（梅笑）、『久松お染野崎村』（花香）、『梅川忠兵衛新口村』（菊水）、『三十三

所壺坂沢市内』（魁）、『浦里時治郎山名屋の内』（花笑）、『恨鰐鞘八郎兵衛内』（三七十）、大切掛合『布引四段目』紅葉局（勝好）、藤作（我笑）、又五郎（梅笑）、平治（菊水）、小桜（花笑）、松浪検校（三七十）、三味線（鶴澤一平、ツレ同小種、ツレ同梅三）

□大正6 (1917-09-08) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会 今明両日午後六時より、八甲俱樂部に於て三省連の素人浄瑠璃会あり。語りものは左の如し

一 『御祝儀宝入船』（入登）、『お駒才三鈴ヶ森』（梅子）、『大功記十段目』（中司）、『阿波鳴門八つ目』（ねぼけ）、『鏡山又助内』（橘昇）、『三勝半七酒屋』（大和）、『朝顔日記宿屋』（桜玉）、『弁慶上使』（改玉）、『玉三』（竹司）、『撰州合邦ヶ辻』（美好）、『菅原伝授寺子屋』（鱗鳳）、『壺坂沢市内』（昔枝）、『桜曙儀作内』（一声）、『松王下屋敷』（組次）

十把一束 ▲此間龍口亭素人義太夫会で語られた橘昇君の義太夫には感心しました。一層勉強して台湾の花形たらん事を希望す（義太夫狂）

□大正6 (1917-09-19) 『台湾日日新報』

●追善浄瑠璃

基隆末広館主の一年祭に際し、友人知己相図り、来る二十日基隆座に於て、追善浄瑠璃大会を開催する事となり、夫々へ案内状を發したるが、当日主なる語物左の如し

『たむけ』（入登）、『壺坂寺』（松雀）、『鏡山古郷錦繪』（弥生）、『佐倉曙』（十一）、『弁慶上使』（立石）、『阿波鳴戸』（大石）、『忠臣蔵』（福德軒）、『布引四』（若衆）、『酒屋』（松花）、『八陣』（東）、『箱根靈驗記』（松香）、『勢州阿漕ヶ浦』（十雀）、『水掛村』（吾勇）、『合邦ヶ辻』（十三）、三味線、鐘龍、梅香、大阪、掛合『本藏下屋敷』若狭之助（弥生）、三千歳姫（松雀、下部（吾勇）、番左衛門（十雀）、本藏（十三）、三味線（鐘龍）

□大正 6 (1917-09-20) 『台湾日日新報』

地方近事 基隆

▲追善浄瑠璃 故末広館主 糸雀事一年祭に相当するに付き、生前同人の好める浄瑠璃に因み、友人柴田弥三郎、片山松之助、足利藤吉氏等の發起にて、二十日午後五時より基隆座にて追善大会を開催し、夫々出演者多数なりしと（十九日）

□大正 6 (1917-09-28) 『台湾日日新報』

●追善義太夫会 生前斯界の美音者として大人氣を博せる故

愛水の三年忌に相当せるを以て、今回知友連中の催しにて、本日本後五時より淡水街淡水俱樂部に於て、追善義太夫大会を催はす由。語りものは左の如し

錦声（二度目）、相生（布川）、山口やすよ子（安達原）、和楽（沼津）、菊水（梅忠）、ねぶか（阿漕）、改玉（日吉丸）、小菊（壺坂）、三笑（佐倉曙）

□大正 6 (1917-12-01) 『台湾日日新報』漢文版

●慈善演劇

今秋九月杪十月初。東京大阪地方。遭暴風雨來襲其慘慘非筆舌所能罄。各界仁人。胥謀所以拯救。嘉義素人義太夫研究会。亦謀于廿七八兩日午後五時起。仮座戲園嘉義座開慈善演劇會。每夜各演十八番。發起人代表者山本久藏、安倍馬治兩氏。極力招徠。觀客甚衆。所得戲資。分贈災黎云。

□大正 7 (1918-01-15) 『台湾日日新報』

あんげい

□素人義太夫会 十五日十六日の兩日午後六時より、新起街古道具屋跡に於て素人義太夫開會。番組左の如し

『双蝶々』(菅板)、『日吉丸』(改玉)、『朝顔日記』(大和)、『岸姫』(組次)、『太十』(中司)、『梅忠』(菊水)、『勘平切腹』(三洋)、『紙治』(三七十)、『寺小屋』(寿)、『四度寺』(楽馬)、『千両のぼり』(桜玉)、『忠四』(和楽)、『壺坂寺』(一声)、『三勝酒屋』(三笑)、『平次住家』(ねぶか)、『阿波十』(小菊)、『野崎』(柳枝)、『お俊』(魁)、『御所桜』(かね子)、『鈴ヶ森』(梅子)、三味線豊澤三省

□大正7 (19180524) 『台湾日日新報』

□打狗浄瑠璃大会 大阪文楽座で声名を博した竹本十組太夫の娘で、父の歿後は竹本綱巴津の門に入りて、浪花の女義太界に持て囃された竹本巴津昇が今度打狗に来たので、土地の有志の後援に依り、二十四、二十五の両日間打狗公館で放楽の浄瑠璃大会を催はすべく、其演物は左の如し

△初日芸題 『御所桜弁慶上使』(小玉)、『玉藻前三段目』(梅先)、

『阿波鳴戸巡礼歌の段』(巴津昇)、『千代萩御殿場』(九重)、『本蔵下屋敷』(巴津昇)

△二日目芸題 『太功記十段目』(小玉)、『朝顔日記浜松小屋』(梅光)、『朝顔日記宿屋の段』(巴津昇)、『璧仇討三人上戸』(九重)、

『お染久松野崎村』(巴津昇)

□大正7 (19180528) 『台湾日日新報』

地方近事 打狗

▲浄瑠璃大会 竹本巴津昇の浄瑠璃大会は予報の如く、二十四、五の両日間打狗公館にて開催したるが、両夜共土地の天狗連を始め、梅屋敷の芸妓連が加はりし為め、大入りの盛況を呈したりと(二十六日)

□大正7 (19180808) 『台湾日日新報』

地方近事 台中

▲俱樂部の浄瑠璃 台中俱樂部にては六日午後七時半より鶴澤一平太夫一行を聘し、浄瑠璃演奏会を催し、会員及び家族を無料入場せしめたるが、雨天にも拘らず聴集者多数なりき(六日)

□大正7 (19180814) 『台湾日日新報』欄外記事

演芸

□素人義太夫会 十四、五の両日、八甲庄日蓮宗布教所に於て、故三好常次郎追善の為め、素人義太夫会を開く由なるが、語物は左の如し

『鎌三』(文司)、『浜松』(ねぼけ)、『宿屋』(白蝶)、『二度目清

書（真砂）、『酒屋』（冬木）、『菅四』（鱗鳳）、『箱根』（松香）、
『沼津』（三洋）、『酒屋』（柳枝）、『沼津』（一声）、『儀作』（菊水）、
『鳴門』（小菊）、『鈴ヶ森』（花笑）、『下屋敷』（■）、『百度平』（藤
枝）、『壺阪』（かね子）、『先代萩』（三松）、『忠四』（和楽）、『壺
阪』（組次）、『阿漕』（ねぶか）、『八陣』（菅枝）、『五良助』（改
玉）、『野崎』（大和）、『新野口』（一二三）、『宿屋』（中司）、『合
邦』（松葉）、『野崎』（相生）、三味線三玉、三省

□大正7（1918-09-19）『台湾日日新報』

家光公 斯波南叟口演 第三十席 相撲浄瑠璃

※家光と秀長の家督争いを諷して、小野お通が惟喬惟仁即位争
いの相撲を浄瑠璃に語るといふ場面。

□大正7（1918-09-21）『台湾日日新報』

●追善浄瑠璃大会 明二十二日午後五時より基隆座に於て、故
大商組組長柴田氏百箇日に相当せるより、生前浄瑠璃を嗜好せ
るに因み、追善大会を催す由。尚故人及び同好有志の追善句は
左の如し

くりかへすことの葉もなし秋の暮 弥生

柴山の孤島に草の風透けり

雀連中

梢にもはなれて行やうめもとき 梅鶯連中
馴れ染し港の岸も声遠く 竹本鐘龍

手に持てるをしき一枝放ちけり 豊澤梅香

ひとり寐のくれて淋しき秋の里 小松利三郎

秋風にさそはれ行や深水草 宇田伊代吉

身につけてことほりふかし秋の暮 藤川与一郎

歌塚の雨に淋しきみなとぐち 広木秋太郎

想思樹の細きにも似す秋の声 足利藤吉

□大正7（1918-12-09）『台湾日日新報』

ゑんげい

□素人義太夫納会 新起街新起湯、向ひ建具屋浅原方に於て、
素人浄瑠璃納会を催す由にて、語物左の如し

『太十』（ねぼけ）、『上使』（かね子）、『浜松』（改玉）、『二度目』

（真砂）、『柳』（文司）、『五良助』（記玉）、『宿屋』（白蝶）、『野

崎』（太郎）、『壺坂』（小菊）、『八陣』（菅枝）、『酒屋』（柳枝）、

『小坂部館』（三洋）、『岸姫』（冬木）、『菅四』（鱗鳳）、『忠六』（我

笑）、『鈴ヶ森』（花笑）、『六助内』（藤枝）、『滝』（松香）、『鳴門』

（三松）、『四ツ谷』（一声）、『梅忠』（菊水）、『堀川』（魁）、『本

蔵下屋敷』（相生）、三味線（豊竹三玉）

□大正7 (1918.12.14) 『台湾日日新報』 欄外記事

ゑんげい

□素人浄瑠璃大会 今十四日午後六時半より、新起街魚金裏、芸妓富丸宅に於て、台北素人浄瑠璃大会開催の由。大切には『実録先代萩対決』総掛合との事なり

□大正7 (1918.12.16) 『台湾日日新報』

●素人義太夫会 今明両日魚金向ひ古物競売所に於いて素人義太夫大会を開催する由なるが、語り物は左の如し

『白石噺新吉原』(梅子)、『三十三間堂』(小柳)、『関取千両幟』(一一三)、『三勝半七』(中司)、『壺坂沢市』(兼子)、『朝顔宿や』(桜玉)、『八陣政清本城』(菅枝)、『志渡寺』(松香)、『新口村』(菊水)、『阿漕浦』(藤蟻)、『忠六』(我笑)、『鳴門』(三松)、『岸姫』(竹司)、『中将姫』(組次)、『お駒才三』(麟鳳)、『野崎村』(柳枝)、『四つ谷怪談』(一声)、『お俊佐兵衛』(魁)、『弥次郎兵衛喜多八』(和楽)、『布四三人上戸』(相生)、『中切に筑前琵琶を演ず。三味線』(豊澤三省)

□大正8 (1919.01.20) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会 今明両日市内北門街鉦力屋菅方にて

素人浄瑠璃大会を開催す。来聴隨意なりと。読物左の如し

『浜松』(ねはけ)、『三代記』(文司)、『二度目』(真砂)、『弁慶上使』(冬木)、『玉三』(白蝶)、『壺坂』(小菊)、『梅忠』(菊水)、『蝶花形』(三津)、『いざり』(松杏)、『安達三』(菅枝)、『沼津』(相生)、『菅原四』(麟鳳)、『沼津』(一声)、『宿屋』(かね子)、『又助』(我笑)、『鳴戸』(三松)、『太十』(清花)、『日吉』(喜楽)、『日吉』(花笑)、『酒屋』(柳枝)、『柳』(山玉)、『壺坂』(粹石)、『堀川』(魁)、『忠四』(和楽)、『皿屋敷』(ねぶか)、『杉の森』(組次)、『三味線』(三玉)

□大正8 (1919.01.23) 『台湾日日新報』 欄外記事

●義太夫天狗会 台北素人浄瑠璃界に於て優に玄人の累を■

し、或は之を凌ぐとの定評のある五六の自称名人は、本日午後六時より料亭一〔版面切のため不可読〕を求む可く、所謂天狗競演会を催す由。語り物は左の如し
『二度目』(美佐子)、『御所』(冬木)、『儀作』(菊水)、『壺坂』(一声)、『忠四』(和楽)、『酒屋』(相生)、『三味線豊竹三玉

□大正8 (1919.02.07) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃大会 ▽台北の素人天狗連

来る七、八、九の三日間城内東本願寺に於て新年聯合素人淨瑠璃大会を開催する由。今回は特に内地新来の老練家の新顔も加はり、市内全部の素人天狗連六十七人が各自得意の語物を選び、精々唸るべしと

□大正 8 (1919-02-15) 『台湾日日新報』

●淨瑠璃会 総評 ▽台北の素人天狗会 連日の大会幹旋方の奔走、真に御苦勞千万。但し斯道の為め感謝に堪へず。将来共御配慮を願つて置いて、偕て三日間を通じ諸氏の奮闘振りに

は、ほとほと感服、面白く拝聴しました。就ては無遠慮ながら一寸批評を加へる事を許して頂きたいと思ひます

◆兼子嬢、近來頗る上達、些のあぶな氣無きに至りしは修業の効か。唯女性の為め時々上走る声の出るのは致方なし。可成太く力を入られたし

◆鱗鳳氏、君は時々不出來の事あるも、先夜の『三勝』は近來の上出來。兎に角氣性より割り出すものか、性急にして落附を欠くは遺憾なり。彼の二調氏の類ならんには残念なり

◆菊水氏、熱心だけありて近來めきめき上達したるは嬉し。得意の『二の口村』は誠に結構。唯一言を呈せんに、少しも風采と云ふ事に頓着せず。胸を明け放し体を左右に振り、宛然

芝居の鱗七を見るが如きは感服せず。床に上りし以上は沈着の態度と鷹揚の語口とを研究されたし

◆三松氏、『阿波の鳴門』が三松か、三松が『鳴門』かと云ふ程成功せるものなり。生來の美音にてお弓親子の情愛をしんみりと演出し、ハンカチーフを絞らしめしは、三日間を通じて第一位に押す可きか。これと反し御殿に対しては遺憾の点少なからず。要するに君の美音が類をなして所謂惡と云ふ点は零なり。

『御殿』は政岡の忠義、栄御前の威嚴、八汐の真惡と三段に談つて欲しかりき。此点は層一層の研究を望む

◆藤枝氏、相變らず御勉強の事と見へ、『合邦の奥』は面白く拝聴せり。目下台北に於ける花形として数へらる、一人ならん。唯時々言葉などに稍々早すぎる点あり。如何にや

◆住登氏、押出し、態度、將た音声とも仲々立派なる太夫と見えしも、余りに評判高かりし為め、却つて期待を裏切られし感ありたり。但台北斯界の重鎮たるは云はずもがなである

◆組治氏、得意の語り物『飯原兵衛館の段』は先づ他に類なしと云ふ可きか。之れに対して愚評を下すは礼に非ざるべし

◆一声氏、初めて『沼津』を聞きたり。申分無き出來なり。これ等の大家に対して愚評は慎むも、望むらくは将来語り惜みをなさず、進んで出演、後進を指導されたい

◆柳枝氏、斯界元老の一人悪からう筈も無く、『本藏下屋敷』

『白石噺』共感服せり。夫れにつきて思ひ出すは二十年前東京にて紋左衛門より四代目播磨太夫となられし太夫は、台北斯界連中の君にして君の浄瑠璃を聞きて播磨の昔を偲び、常に楽しみ居る次第なり。茲に感謝の意を表す

◆終りに附言したきは三日間中驚かされし事二回あり。一二三と云ふ名によつて例のお爺さんかと思ひしに、実物は若い人になかなか、これは捨物か。今一つは呂三氏は中村代議士方に居る、老人ならんと思ひしに、これ亦同名異人なりき。妄評多謝（一老爺投）

□大正 8 (1919-02-19) 『台湾日日新報』

頓狂詩

天狗 望蜀山人

読浄瑠璃会総評。技巧何難弟難兄。名雖称素人天狗。長足進歩実可驚。

〔浄瑠璃会の総評を読むに、技巧は何れも弟たり難く兄たり難し。名は素人天狗と称すと雖も、長足の進歩実に驚くべし。〕

□大正 8 (1919-03-07) 『台湾日日新報』

●三玉連浄瑠璃会 ▽七八両日一力亭にて

台北の素人浄瑠璃三玉連は今回華やかなる緞帳、御簾、引幕等を新調したるを以て、右披露を兼ね月並会を七八の両日、新起街一力楼上に於て開催し、御得意の美音を聞かせる由。同好者の来聴を希望すと。但語物は左の如し

『忠三（ねぼけ）、三十三間堂（喜楽）、寺子屋（鳳玉）、弁慶上使（太郎）、二度目清書（真砂）、平太郎内（山玉）、壺坂寺（粹玉）、鎌三（文司）、又助（三昇）、沼津（一声）、酒屋（麟鳳）、下屋敷（菊米）、玉三（我笑）、皿屋敷（松香）、日吉丸（白蝶）、壺坂寺（三津）、堀川（相生）、忠臣蔵六（呂三）

□大正 8 (1919-04-18) 『台湾日日新報』欄外記事

●浄瑠璃例会 本明両日間午後七時より、新起街魚金前競売場に於て、三玉連浄瑠璃会を開催する由にて、語物左の如しと

『御祝儀宝入舟（入登）、日吉丸三段目（喜楽）、赤垣源藏出立（三昇）、時雨炬燵紙治内（一声）、播州皿屋敷（文司）、壁仇討（我笑）、太功記十段目（ねぼけ）、白石噺揚屋（美玉）、三十三間堂柳（山玉）、一谷陣屋（麟鳳）、安達原三

段目』(菅枝)、『お染久松野崎村』(三津)、『先代萩御殿』(白蝶)、『朝顔日記宿屋』(粹玉)、『玉三』(真砂)、『阿波鳴戸十郎兵衛内』(三峯)

□大正8 (1919.04.26) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会

本日午後七時より、新起街料亭一力の楼上に於て晴雨に係らず勝玉連月並会を開催する由、何人も随意入場差支へなしと。今回は二三の新顔もあれば定めて盛会ならん。語物は左の如し

『宝入船』(入登)、二ノ谷(相生)、『鎌三』(富貴子)、『柳』(天野)、『御所桜』(かね子)、『沼津』(隅登)、『鈴ヶ森』(みさ子)、『毛谷村』(菅谷)、『寺子屋』(鬼城)、『吉日丸』(一二三)、『先代』(峰菊)、『合邦』(竹司)、『八陣』(組弥)、『百度平内』(三松)、『酒屋』(柳枝)、『太十』(常盤)

□大正8 (1919.05.06) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃例会

来る六七日午後七時より、新起街一力に於て若松連浄瑠璃例会開催する由にて。番組左の如し

『岸姫』(竹司)、『日吉丸三』(叶)、『鈴ヶ森』(みそ子)、『酒屋』(中司)、『八陣八』(小柳)、『聚楽町』(一二三)、『弁慶上使』(か

ね子)、『又助住家』(改玉)、『紙治』(大和)、『太十』(小林)、『二代鏡』(菅枝)、『御殿』(三松)、『玉三』(鱗鳳)、『矢口』(組次)、『野崎村』(柳枝)、『逆櫓』(相生)、『合邦』(三笑)

□大正8 (1919.05.26) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会

▽山城館にて

台北素人三玉連の浄瑠璃会は本日午後六時より山城館にて開催され傍聴無料なりと。殊に今回は素人中の名人と云はれし三七大夫の出演あり。大切には三玉、三昇、鳳玉の掛合にて『壁の仇討三人上戸』を出演すべしと

□大正8 (1919.06.07) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会

台北三玉連一部の素人浄瑠璃連は、今七日午後六時より南門外の公会堂に於て素人浄瑠璃会を開き、入場随意にて成るべく多数の来聴を希望すと

□大正8 (1919.06.15) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会

南門方面の素人義太夫三玉連の人々は、本十五日午後七時より、

南門外公会堂俱樂部に於て、淨瑠璃大会を催し。一般の來聴を望むと

□大正 8 (1919-06-17) 『台湾日日新報』

地方近事 員林

▲素人淨瑠璃会 員林街は淨瑠璃の極めて盛んなる処なるが十五日午後六時より停車場前村田商會に於て、素人淨瑠璃會を開き、寺林可祝、高梨梅枝、森田米香、川口錦昇、中村大樂、光石古吉野、竹内豐玉、福富浪花、村田蕉玉、曾我部吾妻らの天狗連登場し、何れも大喝采を博したるが、今後時時之を開催すべしと(十五日)

□大正 8 (1919-06-19) 『台湾日日新報』

演芸界

□素人淨瑠璃 本日午後七時より、新起街一力に於て一平連中の素人淨瑠璃あり。番組、左の如し

『又助住家』(託玉)、『阿漕浦平次住家』(我笑)、『明鳥』(花笑)、『本蔵下屋敷』(梅笑)、『壺坂』(魁)、『野崎村』(花香)、『岸姫』(一平)、三味線(一平、小種)

□大正 8 (1919-07-25) 『台湾日日新報』

●素人淨瑠璃會

二十六、二十七兩日、南門公会堂に於て、午後六時より三玉連の淨瑠璃納涼大会を開催し、例によつて天狗連の鼻の高さを競争すべし。來聴隨意なりと

□大正 8 (1919-07-28) 『台湾日日新報』

演芸

□素人淨瑠璃會 二十八二十九の二日間、古亭庄に於て若松連素人淨瑠璃會を催はす由

□大正 8 (1919-09-15) 『台湾日日新報』

頓狂詩

仿猿劇 頓珍寒士

浪花節又義太夫。新旧混同称幕無。畢竟人間仿猿劇。兎角批評為者愚。

〔浪花節又義太夫、新旧混同して幕無しと称す。

畢竟人間猿劇を仿ふも、兎角の批評は為す者が愚。〕

□大正 8 (1919-10-21) 『台湾日日新報』

地方近事 嘉義

▲素人淨瑠璃會●

来る廿日廿一日の両日間嘉義座に於て素人淨瑠璃會を開催せる由なるが、出演者は永島質屋、田中洗濯屋、薛香豆屋、音吉畳屋、其他台南台中よりの応援もある筈。尚ほ右終りて大切には素人芝居の『忠臣蔵五段目』『壺坂』等を演ずる筈なるが、当日は公開するを由(十九日)

□大正8(1919-11-06)『台湾日日新報』

●田新総督を訪ふ

▽令嗣篤氏其平生を語る

▽囲碁好き隠芸は義太夫

◇新総督田健治郎男の平常をと思ひ、本日(十月三十日)午前

十一時頃麻布広尾の私邸に男爵を訪問した、(中略)

◇玄関に訪れ刺を通ずると、取次ぎの案内で奥十畳の間に通された。処が其処には既に令嗣篤氏が待ち顔であつた。不取敢

祝詞と共に来意を述べると、氏は初対面ながら恰も旧知の如く、始終笑を含みながら打解けて語る、(中略)

何か総督には隠芸と云つた様なものはと問を発すると、あります、あります、これはまだ誰も知つて居ないだらうと思ひます、と答へて、さも云ひ難さうに大笑して、後は又中絶してしま

つた、更に問ひを發して促がすと、詮方なげにそれは

◇義太夫です。時折外出先から酔つて帰つた時などは、口三

味線でも何でもかまはず、目の前にある火鉢鉄瓶などを叩いて

調子を合せ、独りで唸つて居ます。どうせ場所所で談る様な

義太夫じゃありませんと、哄笑しつゝ、ある折柄玄関に人のけは

ひがした、篤氏は早くもそれと察し今父が帰つた様です、

御紹介致しましやうと立つて行く、時計を出して見ると恰度

十二時が五分過ぎて居る、待つ間程なくフロック姿の

◇田総督が現はれた、(中略)折柄来客があつたので総督は

一寸と挨拶して立たれた、後は又篤氏が引繼いで四方山の話に

移つたが、余り長座しては失礼と思つて十二時半頃辞した

□大正8(1919-12-10)『台湾日日新報』欄外記事

演芸

□淨瑠璃大会 今十日午後正六時より基隆座に於て、雀連の

古老として十余年、斯道に尽瘁せる松雀勇退の送別として

淨瑠璃會を開く由にて、当日の語りもの左の如し

『御祝儀宝の入船』(入登)、『三の寿式三番叟』(若三、小半、

鈴八)、『八陣』(土雀、柳)(小半)、『二十四孝』(若三)、『又

助』(三雀、三代記)(三雀、太十)(鈴八)、玉三(大石)、

●素人浄瑠璃会 台北府中街旧台北庁舎跡、関柔道館に於て、
本月二十五日より四日間、三玉師匠送別浄瑠璃大会を開催す
と。談物左の如し

『いざり十』（ねぼけ）、『朝顔』（おどけ）、『妹背山』（とぼけ）、
『柳』（文路）、『御殿』（関戸）、『日吉』（可丈）、『玉三』（可笑）、
『沼津』（鳳玉）、『忠六』（三洋）、『壺坂』（三吉）、『岸姫』（艶
次改七五三雀）、『野崎村』（柳枝）、『御所桜』（七五三登）、『紙
治』（二声）、『朝顔』（白蝶）、『安達』（山玉）、『白石嘶』（清花）、
『忠六』（記玉）、『寺小屋』（三昇）、『鈴ヶ森』（麟鳳）、『皿屋敷』
（真砂）、『御所桜』（都）、『志渡寺』（松香）、『鳴門』（三松）、『下
屋敷』（菊水）、『壺坂』（小菊）、『儀作』（組次）、『滝』（我笑）、
『酒屋』（相生）、『朝顔』（かね子）、『鈴ヶ森』（竹司）、『柳』（太
郎）、『八陣』（菅枝）、『日吉丸』（寿）、『堀川』（魁）、『寺古屋』
（藤枝）、『梅忠』（花笑）、『二度目』（みさ子）、『二代鑑』（和楽）、
『志渡寺』（峯菊）、『太十』（石磊）

□大正 9 (1920-04-25) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会

今明二十五、二十六の両日、八甲庄日蓮宗妙見寺に於て
素人浄瑠璃春季大会開催の由。因に人名 語り物左の如し

相生、柳枝、隅登、魁、藤枝、菅枝、三松、竹司、三友、
二三、峯菊、竹子、かね子、みさ子、『三勝半七』、『野崎村』、
『忠六』、『壺坂』、『菅四』、『三十三間堂』、『二十四孝』、『鳴戸』、
『合邦』、『太十』、『岸姫』、『日蓮記』、『玉三』、『阿漕ケ浦』

□大正 9 (1920-05-21) 『台湾日日新報』欄外記事

演芸

□花声会の義太夫 廿一日新起街西本願寺別院に於て、宗祖
大師降誕会余興として催はるる、義太夫会の語りもの、差の
如し

『御祝儀宝の入舟』（入登）、『三十三間堂』（七五三嬢）、『お駒
才三鈴ヶ森』（竹司改め七五三柳）、『太十』（艶次改め七五三雀）、
『鳴門八ツ目』（七五三子）、『日吉丸三の切』（琴馬）、『寺小屋』
（組次改七五三寿）、『沼津』（七五三登）、大切東上る新内節『千
両轢』掛合（七五三子、七五三登）、櫓太鼓入り、三味線曲弾
十八弾

□大正 9 (1920-06-21) 『台湾日日新報』

●素人連浄瑠璃会 ▽八甲庄法華寺で

本日より引き続き三日間、午後六時より八甲庄法華寺に於て、

故井部茂吉追善淨瑠璃大会を開催する由なるが、久々に斯道の老練家、若手、花形等、在台北の天狗連、殆んど総出にて各自の十八番物を出演すべしと。因に傍聴は無料

□大正9 (1920.09.26) 『台湾日日新報』欄外記事

演芸界

●娘義太夫 大阪娘義太夫、竹本弥栄子の一行は一昨日の笠戸丸にて着台。本日より先づ二日間新竹座にて開演。其の初日の語り物、左の如し

『御祝儀宝の入舟』(入登)、『信功記上かん屋』(竹本弥広)、『日吉丸三段目』(竹本湊栄)、『佐倉之曙宗五郎住家』(付「ママ」本春子)、『安達原三段目』(竹本源之助)、『朝顔日記宿屋三段』(竹本君広)、『三十三間堂平太郎住家之段』(竹本龍光)、『太閤記十段目』(竹本弥栄子)、『大切総掛合白石嘶揚屋之段』

□大正9 (1920.09.28) 『台湾日日新報』

●栄座の娘義太夫

▽竹本弥栄子の一座

娘義太夫Ⅱそれは随分久しぶりに聞く声である、今は某君の夫人となつて居る芳乃亭の国芳時代には折々高座に見るべき

機会もあり、栄座へも何やらの一座がかゝつた事もあつた、以来それが久しく忘れられて居た形である、然るに今度山本営業部の手で大阪娘義太夫、竹本弥栄子の一行が渡台して今夜から栄座で開演する、この弥栄子は未だ若い滴るやうな女、呂昇の門下で師匠順業中はそのキリ三を語つて居た花形だつたと云ふ事だ一行は七八名で、機を得て君広、龍光、弥栄子の三人を聴いたがいづれも相当によく語る、僕の聴いたのは君広の『朝顔の宿屋』、龍光の『菅四』、弥栄子の『壺坂』であつた、君広の声は頗る豊富であるが少し若々しい、それは未だ年が若い為である語り口は確かりして居るが言葉より節に於て優れて居た、又た龍光の『菅四』は流石に幅物を語る鼻れとして上乘のものである、お千代の戻りから語つたが重味のある立派なものだ、松王夫婦の口説きには思はずホロリとさせられた、但し暫らく休んだ為か裏声が少しく割れて聞えたがこれは敢て問題にならぬ程度であつた、要するに淨瑠璃聴きの聴くべきものである座長弥栄子は愛嬌で捏上げたやうな若い別嬪だ、それが呂昇の門下丈に弾語りで、夢が浮世から谷底まで一段語つたが流石に達者なものだ、声も沢山あるし三味線も確かである、始めの内は少しく上りの気味であつたが奥に進むほど力が入つて来て山の段など殊に面白く聴いた思ふに堂摺連

の一問題たるべき事を保証する（みの字）

【写真】 栄座に開演の竹本弥栄子

エンゲイ

□ 栄座の娘義太夫 大阪娘義太夫竹本弥栄子一座は、本夜より栄座に開演。入場料は特等一円五十銭、一等一円二十銭、二等八十銭、三等四十銭にして、初日の語り物左の如し

【御祝儀宝入船】（竹本入登）、【忠臣蔵六段目勘平腹切】（竹本弥栄玉）、【日吉丸三段目小牧山城中】（竹本湊栄）、【新版歌祭文野崎村】（竹本源之助）、【御所桜三段目弁慶上使】（竹本君広）、【三十三間堂棟木由来平太郎住家】（竹本龍光）、【太功記十段目尼ヶ崎】（竹本弥栄子）

□ 大正 9 （1920-09-29）『台湾日日新報』欄外記事

エンゲイ

□ 娘義太夫二日目 栄座弥栄子一座、本夜の語り物左の如し

【御祝儀宝入船】（入登）、【先代萩御殿】（湊栄）、【佐倉宗五郎子別】（春子）、【廿四孝十種香】（源之助）、【朝顔日記宿屋の段】（君広）、【日吉丸三段目】（龍光）、大功【三十三所花山赤坂寺

之段】（弥栄子）余興、総掛合

□ 大正 9 （1920-10-06）『台湾日日新報』

● 追善浄瑠璃会 来る六、七、八の三日間府後街旧庁舎後関道場にて故三省師追善の爲め、浄瑠璃会を催す由

□ 大正 9 （1920-11-02）『台湾日日新報』

演芸

□ 娘義太夫 栄座に開演中の娘義太夫、竹本弥栄子の一行は相変らず人気を呼んで居るが、今夜から当地お馴染の竹本勝玉師匠が一座に加はつて一段語事となつた、それで勝玉連の応援総見、否総聴などて、今明二日間は錦上更に花を添へるだらうが、本夜の語り物は左の如くである

【八陣八ッ目】（湊栄）、【佐倉宗五郎子別】（春子）、【岸姫松三段目】（源吾）、【先代萩御殿】（君広）、【忠臣蔵本蔵下屋敷】（勝玉）、【玉藻前三段目】（龍光）、【伊勢音頭油屋の段】（弥栄子）

□ 大正 9 （1920-11-05）『台湾日日新報』欄外記事

演芸

□ 義太夫 今迄左程上手とも美声とも思つて無かつた連中

も、弥栄子一座の高座に加はつて競技の咽仕合をしたので

吃驚。勝玉と云ふのはあれ程上手だとは思はなかつたんで、

今更のやう鯨子張つて聴いて居るものが多かつたには、勝玉師

も一寸悦しかつたらう。話は違ふが此の勝玉師に比敵する例の

龍光だか、今迄誰人も氣附かないで居たが、実は非常な近視眼

で見台の本が読めない、だから従つて本の必要を感じ無い。其

れでも最初のうちこそ一二枚捲くても見るが、後は其儘恰度

浪花節を語ると同じ調子ですとは楽屋裡の話

□大正 9 (1920-11-05) 『台湾日日新報』

●義太夫会

▽三玉連 月例会

今夜南門公会堂にて、三玉連の義太夫会開催さる。来聴隨意

なりと

『弁慶上使』(田舎)、『播州皿屋敷』(真玉)、『玉藻前三の切』(可

笑)、『沼津里の段』(鳳玉)、『岸姫松三段目』(艶次)、『弁慶上

使』(一二三)、『八陣八つ目』(三峯)、『三勝半七酒屋』(相生)

『合邦ヶ辻』(雷雀)、『志度寺』(松香)

□大正 9 (1920-11-25) 『台湾日日新報』

●基隆小信

▲淨瑠璃会 基隆雀連は二十五日午後六時より基隆座に於て

淨瑠璃温習会を催す由。来聴を希望すと

□大正 9 (1920-12-11) 『台湾日日新報』

●素人義太夫納会

十二日午後六時より新起横街芳野亭三友社にて、勝玉連素人

義太夫納会を開催する由

□大正 9 (1920-12-15) 『台湾日日新報』欄外記事

●忘年義太夫会

台北三玉連の主催にて忘年義太夫会を十五、十六両日、午後五

時より旧庁舎跡閑柔道道場に開催する由、一般の来聴を歓迎す

と

□大正 10 (1921-01-18) 『台湾日日新報』

無線電信機に／「君が代」や「義太夫」が聞る

京城の無線電信機に十五日の午後六時頃、突如として珍らしい

声が聞えた。それは恰かも無線電話の如く「君が代」の奏楽や

ら義太夫を呻る声が明らかに聞えて来たといふ。斯かる声は

世界^{せかい}広^{ひろ}しと雖^{いまだ}も未^{いま}だ曾^{かつ}て何^{いづ}処^くの無^む線^{せん}電^{でん}信^{しん}界^{かい}にも無^ない事^{こと}で、実^{じつ}に無^む電^{でん}界^{かい}の新^{しん}レコ^レードだ^だとあつて科^く学^{がく}上^{じやう}からも大^{だい}問^{もん}題^{だい}を惹^ひ起^きするであらうとの事^{こと}である(十六日京城^{きやうけい}発^{はつ})

□大正10 (1921-04-23) 『台湾日日新報』

素人^{しろうと}淨^{じやう}瑠^る璃^り会^{かい}

今^{こん}明^{めい}両^{りやう}日^{じつ}南^{なん}門^{もん}外^{ぐわい}公^{こう}会^{かい}堂^{だう}に於^{おい}て、素^{しろうと}人^と淨^{じやう}瑠^る璃^り三^{さん}玉^{ぎよく}連^{れん}の月^{げつ}例^{れい}会^{かい}を、毎^{まい}夜^や六^{ろく}時^じより開^{かい}催^{さい}。一^い般^{ぱん}の来^{らい}聴^{ちやう}を期^き待^{たい}す

□大正10 (1921-06-18) 『台湾日日新報』

素人^{しろうと}淨^{じやう}瑠^る璃^り

十^{じゅう}八^{はち}、十^{じゅう}九^{きゅう}の兩^{りやう}日^{じつ}午^ご後^ご六^{ろく}時^じから龍^{りゆう}口^{こう}街^{がい}南^{なん}門^{もん}公^{こう}会^{かい}堂^{だう}で、三^{さん}玉^{ぎよく}連^{れん}の素^{しろうと}人^と淨^{じやう}瑠^る璃^り月^{げつ}並^{びやう}会^{かい}を催^{さい}す由^{よし}で、来^{らい}聴^{ちやう}を欲^く迎^いえ

□大正10 (1921-07-16) 『台湾日日新報』

素人^{しろうと}義^ぎ太^{たい}夫^ふ会^{かい}

台^{たい}北^{ぺい}義^ぎ太^{たい}夫^ふ界^{かい}の權^{けん}威^ゐ一^{いっ}平^{へい}師^しの門^{もん}下^か、天^{てん}狗^ぐ連^{れん}は十^{じゅう}七^{しち}日^{にち}午^ご後^ご六^{ろく}時^じから撫^ぶ台^{たい}街^{がい}二^にノ角^{かく}元^{げん}天^{てん}野^や商^{しょう}会^{かい}跡^{あと}に於^{おい}て、天^{てん}狗^ぐ会^{かい}を開^{ひら}く由^{よし}、語^{かた}り物^{もの}は左^さの通^{とほ}り

『阿^あ漕^{そう}ヶ浦^ほ』(我^{われ}笑^{わら})、『紙^し治^ぢ』(鳳^{ほう}玉^{ぎよく})、『菅^{すげ}四^し』(艶^{えん}次^じ)、『玉^{たま}三^{さん}』(竹^{たけ}司^し)、『鳴^{なり}戸^こ』(越^{えつ}次^じ)、『合^が邦^{ぱう}』(雷^{らい}雀^{さく})、『下^げ屋^や敷^し』(真^ま玉^{ぎよく})、三^{さん}味^み

線 (二平)

□大正10 (1921-11-07) 『台湾日日新報』

栄^{さか}座^{えざ}の娘^{むすめ}義^ぎ太^{たい}夫^ふ

去^き年^{ねん}は弥^や栄^え子^この一^{いっ}行^{かう}が目^め見^み得^えを^をした^が、久^{ひさ}し振^{ぶり}で又^{また}大^{おほ}阪^{さか}か
ら播^{はり}重^{ちゆう}の若^わ手^てが乗^{のり}込^こんて来^きた。可^かなりデ^でン^んデ^{えん}党^{たう}の多^{おほ}い事^{こと}とて、
すでに前^{まへ}景^{けい}氣^きが有^あり、その初^{しよ}日^{にち}の栄^{さか}座^{えざ}はなかなかの盛^{せい}況^{けい}で、斯^{しやう}道^{だう}
既^{すで}に前^{まへ}景^{けい}氣^きが有^あり、その初^{しよ}日^{にち}の栄^{さか}座^{えざ}はなかなかの盛^{せい}況^{けい}で、斯^{しやう}道^{だう}
の素^{しろうと}人^と天^{てん}狗^ぐ連^{れん}が鼻^{はな}つき合^あさん計^{けい}りに詰^{づめ}か^かけて居^ゐた。御^お祝^{しゆ}儀^ぎの
『宝^{たから}の入^{いり}船^{ふね}』から愛^{あい}子^こ、友^{とも}司^し、清^{きよ}花^{はな}迄^{まで}は、語^{かた}ま^まする太^{たい}夫^ふ余^よりド
ツとせないので、野^や次^じは滅^{めつ}茶^{ちや}々^々に殴^{たた}き附^{つけ}て仕^し舞^まが、四^し人^{にん}目^めの
長^{なが}清^{きよ}からグツと引^ひ締^しつて来^きて、流^{りゅう}石^{せき}の野^や次^じも沈^{しん}黙^{もく}して耳^{みみ}を傾^{かたむ}
る、続^{つづ}いてキ^きリ三^{さん}の住^{ぢゆう}助^{すけ}の『三^{さん}十三^{じふ}三^{さん}間^ま堂^{だう}』は確^{しつ}かりしたもので
あるが、声^{こゑ}が美^{うつく}し過^{ひき}ぎ^ぎして清^{きよ}元^{げん}でもと思^{おも}は^はせる。靠^{もた}れの文^{ぶん}昇^{せう}の
『弁^{べん}慶^{けい}上^{じやう}使^し』は幅^は物^{ぶつ}語^ごりとして得^{とく}心^{しん}され^た、御^{おん}大^{だい}末^{まつ}千^{せん}代^{だい}の『壺^{つぼ}阪^{はん}』、
流^{りゅう}石^{せき}に聴^き込^こへがある、厭^{いや}味^みが無^なくて気^き持^{もち}がよ^いいが、慾^{よく}を云^いへば
少^{すこ}し突^つ込^この気^き合^あが足^たらないやうだつた。兎^とに角^{かく}も大^{だい}小^{せう}の天^{てん}狗^ぐ連^{れん}
頗^{すこ}ぶつて感^{かん}寸^{すん}な仕^{つか}ら^{まつ}れたらしく、何^{なん}でも飛^と入^{いり}に靠^{かか}れ^る處^{ところ}を一段^{だん}と
申^ま込^こんだ某^{なんが}太^{たい}夫^ふもあつたさうだが、聴^{きこ}込^こんで来^きる内^{うち}に怖^{おそ}氣^きが出^で
て飛^と入^{いり}中^{ちゆう}止^しとなつたと云^いふ咄^{はな}し、要^えするに弥^や栄^え子^こ等^らの比^ひではな
いと一^{いっ}般^{ぱん}頗^{すこ}る好^{かう}評^{へう}であつた。又^{また}三^{さん}線^{せん}は各^{おの}々^{おの}達^{たつ}者^{しや}だが小^こ住^{すみ}の

授^{つづ}は恐^{おそ}らく台湾^{たいわん}では稀^{まれ}なものであらうと、これらも上^{ぜう}々^{ぜう}の評^{へう}

(甲水)

【挿絵】 竹本末千代スケッチ

□大正10 (1921.12.08) 『台湾日日新報』 欄外記事

素人浄瑠璃会

台北素人浄瑠璃^{たいはいくしろうとぜうるりくわい}として大小天狗^{だいせうてんぐ}を網羅^{もうら}する三玉^{ぎよく}会^{かい}では、本年^{ほんねん}の納会^{なうかい}を八、九の両日午後六時^{れうじつご、じ}から、南門公会堂^{なんもんこういどう}に開催^{かいさい}し、大に掉尾^{てうび}の勇^{ゆう}を鼓^こし、親不孝^{おやふかう}声^{こゑ}を張り上げ、漬物^{つけもの}の相場^{さうばく}を狂^{くる}はす由^{よし}。因^よに入場料^{にふうりょう}はロハなるも仁丹^{じんたん}の御用^{ごよう}意然^{いしか}るべしと

□大正11 (1922.03.19) 『台湾日日新報』 欄外記事

演芸

□追善浄瑠璃会 台南近松会^{たいなんちんかまつくわい}では故近松翁^{こちんかまつおう}二百年忌追善浄瑠璃^{ねんきつみぜんぜうるり}会^{かい}を十八、十九の二日間新泉座^{かんしんせんざ}で開催^{かいさい}

□大正11 (1922.05.19) 『台湾日日新報』

還暦浄瑠璃会 二十一日栄座^{えいざ}に於て

台北浄瑠璃界^{たいはいくしろうりかい}の横綱格^{よこづなかく}として知られた相生太夫^{あひおひたひふ}の還暦祝^{くわんれきいはひ}の爲^{ため}に、来る二十一日午後五時^{きふご、じ}から栄座^{えいざ}に於て、素人浄瑠璃^{しろうとぜうるり}大会^{たいくわい}

を開^{ひら}くが、当日^{たうじつ}は基隆^{きふりん}から雀連^{すずめれん}の応援^{おうえん}もあり、入場勝手次第^{にふでうかつてしだい}といふので、デン党^{でんとう}は押寄^{おしよ}する事^{こと}であらうが、其^その乱表^{らんへう}は左^{ひだり}の如^{ごと}くで、三味線^{しまいせん}は一平^{いへい}、寛次郎^{くわんじらう}、柳玉^{りゅうぎよく}、鐘龍^{かねりう}、三吉野^{みよし}、三玉^{さんぎよく}の各師匠^{しせうれん}連^づが勤^{つと}むると云^いふ

『百度平住家』(菊水)、紙治内の段^{しちぢの} (東玉)、『松王下屋敷』(鳳玉)、『伊加越沼津』(藤枝)、『鈴ヶ森』(竹司)、『平次住家』(我笑)、『尼ヶ崎』(組次)、『弁慶上使』(三鶴)、『本藏下屋敷』(真砂)、『日吉丸五郎助内』(貴昇)、『合邦内』(美登郎)、『沓掛村』(長勇)、『平太郎住家』(七五三登)、大切掛合^{たいせつかけあひ}『布引滝松浪琵琶の段』、平次(福水、藤作(吾勇)、又五郎(大石)、■鳥(組次)、小桜(すゞめ)、検校(相生)

□大正11 (1922.06.03) 『台湾日日新報』

素人義太夫会

来る三、四、五の三日間^{さんまいゆふ}毎夕六時^{まいじふ}から元八甲庄日蓮宗法華寺^{もとやちまづにちれんしうはつけじ}で故^こ井波^{みなみ}■茂吉追善浄瑠璃会^{もきちつみぜんぜうるりくわい}を開催^{かいさい}する由^{よし}。木戸^{きど}は勿論^{もちろん}無料^{むれうた}但雨天^{うてん}なら順延^{じゆんえん}

(初日) 若手連『宿屋』(鳳玉)、『酒屋』(藤枝)、『赤垣』(艶次)、『壺坂』(貴昇)、『新口村』(菊水)、『太十』(松鶴)、『儀作』(真玉)、『日吉』(中間)、『忠三』(花玉)

(二日目) 老人連 『堀川』(松香)、『野崎村』(相生)、『四ッ谷』(一声)、『酒屋』(柳枝)、『三十三間堂』(東玉)、『岸姫』(組次)、『太十』(七五三登)、『鳴戸』(光玉)、『梅忠』(梅枝)

(三日目) 中老連 『弁慶』(司玉)、『三十三間堂』(山玉)、『日吉』(貴昇)、『下屋敷』(加玉)、『玉三』(竹司)、『三日』(雷雀)、『沼津』(琴馬)、『安達』(新玉)

□大正11 (1922-08-04) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

八甲町法華寺に於て四日、五日の両夜、三吉野睦会連の素人浄瑠璃会開催。一般の来聴を希望すと。尚語物は差の如し

◆四日

『御祝儀寿式礼』(入登)、『太閤記十』(小高)、『三代記三浦別れ』(三峰)、『本蔵下屋敷』(古鶴)、『利生記百度平』(菊水)、『伊賀越六沼津里』(藤枝)、『三勝酒屋』(鳳玉)、『盛衰記逆櫓松』(相生)

◆五日

『式三番叟』(入登)、『日吉丸三』(工藤)、『仙代萩御殿』(古菊)、『壁仇討滝ノ段』(艶次)、『加見山又助住家』(三峰)、『勢州阿

漕浦』(ねぶか)、『廿四孝勸助住家』(三洋)

□大正11 (1922-08-16) 『台湾日日新報』

素人義太夫大会

来十七、十八両日、栄座に於て勝玉連義太夫納涼大会開催の筈にて、下足共一切無料の由。当日は連中沢山に付午後五時開演すといふ。其語物左の如し

(初日) 『寿式三番叟』(芸妓十名出演)、『新口村』(牛若)、『日吉丸』(勝若)、『壺坂』(新喜楽千駒)、『沼津』(竹乃家竹奴)、『岸姫』(日本亭吉奴)、『本蔵』(美登里)、『柳』(新喜楽千葉)、『合邦』(竹乃家峰菊)、『忠四』(勝三)、『宗五郎』(住登)(二日目) 『寿式三番叟』(芸妓十名出演)、『合邦』(牛若)、『柳』(錦糸)、『弁慶』(新喜楽千昇)、『日吉丸』(万屋住栄)、『三代』(新喜楽千歌)、『又助』(可笑)、『壺坂』(竹乃家勇吉)、『太十』(勝美)、『鳴門』(三松)、『野崎村』(相生)

□大正11 (1922-10-14) 『台湾日日新報』欄外記事

義太夫会 本日午後六時より南門外公会堂に於て、竹本乙鶴門下の素人浄瑠璃会を開くと入場無料大雨は順延

□大正11 (1922.11.01) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

本日午後六時より南門公会堂に於て陸連素人浄瑠璃会を開く由。談物は左の通り。但来聴歡迎

『日吉丸三』(くらま)、『二度目清書』(三光)、『朝顔宿屋』(松風)、『先代御殿』(小菊)、『又助住家』(三峰)、『沼津の里』(藤司)、『義作住家』(菊水)、『志渡寺』(艶次)、『廿四孝三』(三洋)、『勘平腹切』(組次)、『長局の殿』(琴馬)、『蝶花形八』(延寿)

□大正11 (1922.11.04) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

本四日午後六時より、新富町不動明王社(元下塚池地の端)に於て、乙女会素人浄瑠璃会開催。来聴歡迎すと。談物は左の通り。但し雨天順延

『三十三間堂』(友鶴)、『大功記十段目』(真玉)、『蝶花形八ッ目』(延寿)、『加賀見山又助住家段』(三光)、『梅の由兵衛聚楽町段』(大和)、『千代萩御殿』(永楽)、『忠臣蔵勘平切腹』(三洋)、『賢女鏡片桐忠義之段』(乙鶴)

ウエルカム

▲本月中旬 栄座で三吉野氏の義太夫会がある由。久方振に氏の『帶屋』か『鎌腹』を聞きたいものぢや(一昔生)

□大正11 (1922.11.11) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

大阪源之丞人形芝居一座の語手として、既に定評ある三吉野太夫は台湾に縁故者ある関係から過般渡台し、陸会なる義太夫一派を組織し、毎日毎日デ、ンデ、ンの稽古中の処、大小天狗連、デットしちや居られず。愈々十六、七両日栄座にて浄瑠璃大会を開催すると

□大正11 (1922.11.15) 『台湾日日新報』

陸会の発会式 栄座の浄瑠璃大会

台北に於ける義太夫同好者で、今回陸会と云ふのを組織し、三吉野が会主となつて、その発会式として十六、十七日の両日、午後四時から、栄座で天狗連の大会を開催せるが、其語物番組は左の如くである

▲十六日初日 『仮名手本忠臣蔵大序』(三吉野)、『本蔵松伐』(乙鶴)、『殿中刃場』(菊水)、『足利裏門之場』(三峰)、『扇ヶ谷花籠』(三楽)、『判官切腹』(艶次)、『山崎鉄砲場』(い京)、『お

かる身売』(松風)、『勘平切腹』(組次)、『山科隠家』(琴馬)、『同奥』(三洋)、切『力茶屋場』総掛合、由良之助(琴馬)、平右衛門(艶次)、せかる(松風)、九太夫竹森(組次)、伴内、矢間(菊水)、力弥、千崎(延寿)

▲十七日二日目 『御祝儀宝入船』(三吉野)、『鈴ヶ森』(千歳)、『阿古屋琴責』(い京)、『菅原四段目』(一叟)、『日吉丸三』(鞍馬)、『忠臣二度清書』(三光)、『二十四孝十種香』(延寿)、『朝顔日記宿屋』(古菊)、ツレ三味線芳子、ツレ琴清子、ツレ琴光子、『加賀見山又助内』(三峰)、『お駒才三白木屋』(菊水)、『布引滝三人上戸』(藤司)、『加賀見山長局之段』(琴馬)、切『力茶屋場』(総掛合)

□大正11 (1922.1.22) 『台湾日日新報』

地方近事 嘉義

▲浄瑠璃会 竹本相之助主催で相生会なるものを組織し、其の披露として、来る二十二日二十三日の両夜、嘉義座で浄瑠璃大会を開催する筈

□大正11 (1922.12.06) 『台湾日日新報』欄外記事

ゑんげい

□素人浄瑠璃 本夜五時から旧世界館で勝玉連の素人浄瑠璃納会を開くが、下足煙草盆無料で、随意入場。その語り物は左の如し

『太十』(勝紫)、『壺坂』(千駒)、『日吉丸』(錦糸)、『朝顔』(竹奴)、『玉三』(可笑)、『二十四孝』(千葉)、『御所桜』(千昇)、『本藏下屋敷』(駒栄)、『三勝』(■■■)、『先代萩』(三柏)、『菅四』(住登)

義太夫納会

台北市新富町の素人義太夫乙鶴連では、今夜六時から警察官練習所裏手の不動堂に於て、左の順序により義太夫納会を催す由(傍聴随意)

▲『太功記』(三洋) ▲『安達ヶ原』(至玉) ▲『千代萩』(延寿) ▲『又助住家』(永楽) ▲『朝顔日記』(三光) ▲『鎌倉三浦別れ』(龍勢) ▲『三十三間堂』(友鶴) ▲『忠臣蔵』(近糸) ▲『阿波鳴戸』(真玉) ▲『太功記』(長谷川) ▲『御所桜』(大和)

□大正12 (1923.01.01) 『台湾日日新報』

賀正 児童と児童劇意義 教育上に於ける効果

台北師範附属主事 渡辺節氏談

※演劇類型の解説のなかで、「我國の浄瑠璃劇や支那劇や西洋では小楽劇」を「ドラマとオペラの中間物」と定義。また、詩を「抒情詩」「叙事詩」「劇詩」に分類した場合、「日本の浄瑠璃劇」は叙事詩と劇詩の中間になるとする。

□大正12 (1923.01.20) 『台湾日日新報』

地方近事 苗栗

▲素人浄瑠璃会 十七日午後七時から、苗栗俱樂部に於て川崎、六車竹内氏等の発起に係る素人浄瑠璃開催六車、秋山、豊島等出演、新竹から久保、藤井等の天狗連、藤原中桜の応援に人氣を博し、各自筒一ぱいをさらけ出したので、満堂を唸らせ、玄人跳足の評出で、野次安西氏の嬉しがる事、酒と共に限りなく、翌日に越ゆる事三十分で終つた

欄外記事

浄瑠璃大会

来る二十、二十一の両日、午後五時より、新富町不動尊に於て、乙鶴連春季浄瑠璃大会開催の由、来聴歓迎すと。語物左の通り

『安達三ツ目』(大和)、『先代萩』(近糸)、『勘平切腹』(清司)、

『蝶花形八ツ目』(松鶴)、『太十』(至玉)、『十種香』(延寿)、『千両幟』(友鶴)、『三勝』(永楽)、『鳴戸』(真玉)、『三浦別れ』(龍勢)、『二度目清書』(三光)、『寺小屋』(三洋)、『三十三間堂』(豊司)、『弁慶上使』(多美夫)、『鏡山又助住家』(乙鶴)

□大正12 (1923.01.22) 『台湾日日新報』

素人義太夫

義太夫三味線の泰斗竹澤弥七師の高弟にて、京阪神地方に於て名声噴噴たる竹澤力造師を最近招聘せる台北美登里会にては、二十二日午後四時より北投神泉閣に於て、新年宴を兼ねたる浄瑠璃初会を開催する由なるが、当日語り物左の通り

『御祝儀』(入登)、『日吉丸前』(一瓢)、『同奥』(仁光)、『炬燵』(鳳玉)、『壺阪』(鳳業)、『饅頭娘』(我笑)、『弁慶』(かね子)、『御殿』(染卜)、『油屋』(雷雀)、『吃又』(相生)、『太十』(旭昇)、『下屋敷』(美登志)、『儀作』(菅枝)

□大正12 (1923.02.04) 『台湾日日新報』欄外記事

新竹地藏尊奉納の為 浄瑠璃大会

新竹街老義会員等は今度、浄瑠璃大会を催し、広く一般の喜捨を受け、真言宗布教所境内に石地藏尊を奉納すべく發起し、来

る八日午後三時から新竹座で浄瑠璃大会を開くこと、なつたが、木戸銭、下足料は一切之を受けないで、多数の来聴を希望
■■■■。尚趣意に賛し喜捨の■■志ある向は新竹寺前藤原岩吉氏夫人迄申越されたしと。当夜の番組左の如し

▲『御祝儀』竹千代師 ▲『玉三』竹玉 ▲『酒屋』竹鈴 ▲
▲『太士』竹雀 ▲『日吉』竹若 ▲『鈴ヶ森』竹光 ▲『又助』
竹声 ▲『梅忠』竹豊 ▲『菅四』竹寿 ▲『忠六』竹風 ▲
『安達三』(飛入) ■■廻家本店ほんた

□大正12 (1923-02-10) 『台湾日日新報』

新竹近信

▲素人義太夫会 老義会主催の素人浄瑠璃大会は、八日午後六時から新竹座で催されたが多数の入場者あり、盛況であつた。尚ほ其趣旨に賛し、各方面からの喜捨があつたから、目的の地蔵尊奉納が出来ると会員一同は感謝してゐた

□大正12 (1923-03-10) 『台湾日日新報』 欄外記事

義太夫／琵琶／演奏会

義太夫三味に趣味を持ち研鑽の結果、愈々師匠より名目を授けられたる中本中司氏は、台北琵琶聯合会、基隆雀連、台北三

玉天狗連の後援にて、十一日午後三時より鉄道ホテルにて披露大会を開演する由。入場希望の方は千歳町長命軒本町二ノ二山田靴店へ申込み度く、無料にて入場券を贈呈すと

□大正12 (1923-03-12) 『台湾日日新報』

名披露目浄瑠璃会

三味線屋の玉屋の妻君が上京して、竹本東畠の許で修業を積み竹本東畠の名を貰つたその名披露目の浄瑠璃会が、十三、十四日の両夜榮座で開催される。それで在台北の師匠連が補助をして各連中から出演するが、両夜の出演者は

鳳玉、竹司、艶次、大和、古菊
延寿、三光、三松、峰菊、七玉
三登、東栄、可笑、三洋、三峰
菊水、美登志、松風、清司、住登
等の大人数である

□大正12 (1923-04-12) 『台湾日日新報』

素人義太夫大会

十二、十三の両日南門公会堂に於て陸連の月並会を相催す由、入場無料来聴を望むと(両日の語物)

『妹背山三』（い京、『大十』（くらま）、『いざり』（艶次）、『紙治』（古菊）、『義作』（菊水）、『酒や』（松風）、『陣や』（三峰）、『八陣』（三光）、『合邦ヶ辻』（藤司）、『布引三』（延寿）、『布引四』（琴馬）、『鳴門八』（組次）、『二十四孝四』（三洋）、『いざり』（東）

□大正 12 (1923-04-26) 『台湾日日新報』 欄外記事

浄瑠璃大会 竹澤力造師の名披露
昨年未神戸より竹澤力造師を招請せる美登里会は、其名披露の爲、愈々二十六、七両日、午後正五時より晴雨を論ぜず、榮座に於て浄瑠璃会開催すべく、成るべく多数の來聴を希望すと。其語り物左の如し

▲二十六日 『御祝儀』（入登）、『本蔵』（仁光）、『壺阪』（鳳菊）、『日吉丸』（かね子）、『太十』（艶次）、『油屋』（雷雀）、『忠六』（古鶴）、『夕顔棚』（旭）、『鳴戸』（美登里）、『千両幟』（清司）、『合邦』（花香）、『逆櫓』（相生）、大切掛合『寺子屋』（総出）糸力造、一平、乙鶴、千代寿
▲二十七日 『御祝儀』（入登）、『忠三』（一瓢）、『野崎』（鳳玉）、『三勝』（都一）、『日吉丸』（花笑）、『八陣』（染卜）、『弁慶』（大和）、『白石嘶』（勇吉）、『菅四』（■登志）、『岡崎』（菅枝）、『太

十』（七五三登）、大切掛合『十種香』（勇吉、越次、かね子、小浜）、糸力造、東咲、乙鶴

□大正 12 (1923-05-02) 『台湾日日新報』 欄外記事
勝玉送別大会

台北の義太夫師匠竹本勝玉は今回斯道研究の爲に内地へ帰るのすが、勝玉連主催で一日、二日の両夜榮座で送別浄瑠璃会を催すが、木戸下足無料で、語物左の如し

『宝入船』（入登）、『又助』（勝柴）、『白石』（千歌）、『壺阪』（千駒）、『柳』（錦糸）、『本蔵』（住登）、『玉三』（可笑）、『日吉』（寿）、『三勝』（峰菊）、『忠四』（勝楽）、『菅四』（千昇）、『野崎』（竹奴）、『新口村』（千葉）、『壺阪』（三松）

□大正 12 (1923-05-04) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

四日新富町不動尊堂五日（古亭町）了覺寺に於て、乙鶴連に依り素人浄瑠璃会開催一般の來聴を望むと。語り物は左の如し
▲『宝の入船』（入登）▲『阿波鳴戸』（真玉）▲『弁慶上使』（多美次）▲『太功記十段目』（鶴昇）▲『三十三間堂』（豊司）▲『関取千両幟』（清司）▲『梅野由兵衛』（大和）▲『仙台萩御殿』

〔延寿〕 ▲『忠臣蔵二度目清書』（三光）

□大正12（1923-05-19）『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

二十、二十一日両日午後六時より、台北市南門公会堂に於て美登里会月例浄瑠璃会開催する由にて、多数の来聴を希望すと其語り物左の如し

『御祝儀』（入登）、『忠三』（一瓢）、『本蔵』（仁光）、『壺坂』（鳳菊）、『炬燵』（鳳玉）、『三勝』（都一）、『日吉』（花笑）、『八陣』（染卜）、『円覚寺』（雷雀）、『菅四』（古鶴）、『太十』（旭）、『白石嘶』（勇吉）、『柳』（美登里）、『阿漕』（美登志）、『杓掛』（菅枝、糸（力造）

□大正12（1923-06-09）『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

九、十両夜、元八甲庄日蓮寺に於て、三玉連の素人浄瑠璃会あり。語り物は左記の通り

『儀作』（一声）、『酒屋』（鳳玉）、『鈴ヶ森』（千歳）、『又助』（中司）、『下屋敷』（加玉）、『赤垣』（艶次）、『忠臣講釈』（光玉）、『沼津』（寿）、『鳴戸』（栄玉）、『弁慶』（貴昇）、『加賀見山』（明玉）、

『皿屋敷』（司玉）、『日吉』（土口）、『志度寺』（松香）、『三十三間堂』（錦糸）

□大正12（1923-07-21）『台湾日日新報』

素人義太夫会

三吉野睦連中は二十一日の両夜、南門公会堂にて義太夫会を開くと、語り物左の通り

『二十四孝狐火』（三洋）、『お駒才三白木屋』（菊水）、『奥州安達原祭文』（琴水）、『妹背山竹雀』（い京）、『日吉丸五郎助内』（くらま）、『三勝酒屋』（三光）、『金刀比羅御利生百度平』（組次）、『おしゆん猿廻し』（藤司）、『三十三間堂柳』（左菊）、『布引実盛物語』（延寿）、『三勝半七酒屋』（松風）、『又助住家』（土江）、『矢口の渡頓兵衛内』（三峰）

□大正12（1923-08-04）『台湾日日新報』

素人義太夫会

四日午後五時から南門公会堂で開かれるが、語り物は

『又助住家』（大和）、『棟木の由来』（友鶴）、『三浦別れ』（多美次）、『酒屋』（永楽）、『尼ヶ崎』（鶴昇）、『竹の間』（清司）、『片岡忠義』（寿美礼）

□大正12 (1923.08.19) 『台湾日日新報』

素人義太夫会

台北陸会連中は十九、二十日の両夜、午後六時から台北市内法華寺にて、素人義太夫大会を開催する由。来聴無料。語物は左の通り

『布引三』(延寿)、『阿古屋』(い糸)、『おしゆん伝兵衛』(藤司)、
『太十』(くらま)、『城木屋』(菊水)、『百度平』(組次)、『忠九』
(三洋)、『すし屋』(艶次)、『弁慶上使』(土口)、『沼津』(琴馬)、
『忠六』(松風)、『矢口渡』(三峰)、『酒屋』(三光)、『阿漕』(三楽)

□大正12 (1923.09.03) 『台湾日日新報』

浄瑠璃会延期

三、四両日、若竹町法華寺に於て素人浄瑠璃会開催の筈なりしも内地不慮の災厄突発に付、此際遠慮の意味を以て無期延期すといふ

□大正12 (1923.10.27) 『台湾日日新報』欄外記事

素人義太夫会

台北陸会の天狗連は二十七、八の両日午後五時より南門公会堂

に於て義太夫会を開くと。語り物は左の通り

『賢女鑑片岡忠義』(乙鶴)、『梅の由兵衛迎駕籠』(大和)、『彦山権現六助内』(松風)、『本朝二十四孝笥掘』(三洋)、『関取千両幟』(清司)、『矢口渡頓兵衛内』(三峰)、『蝶花形小阪部館』(い京)、『仙台萩御殿』(土口)、『義民伝義作切腹』(菊水)、『千本桜すしや』(艶次)、『伊賀越沼津の里』(藤司)、『四ッ谷怪談伊右衛門内』(巴城)、『安達原三』(琴馬)、『三勝酒屋』(三光)、『鉄山皿屋敷』(組次)

□大正12 (1923.11.03) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

南門公会堂にて、三日午後六時より、素人浄瑠璃会を開くと来聴無料。談物は左の通り

『御祝儀宝の入船』(入登)、『太功記十段目』(東柳)、『於染久松野崎村』(東遊)、『八陣八ツ目政清本城』(東昇)、『鏡見山又助住家』(東月)、『三拾三間堂平太郎住家』(東榮)、『一の谷熊ヶ谷陣屋』(東司)、『太功記十次郎物語』(東秀)、『おしゆん伝兵衛猿廻し』(七五三登) (糸東咲ツレ峰菊)

□大正12 (1923.11.04) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

四日午後五時より台北栄町二丁目新高喫茶店楼上に於て美登里会月例浄瑠璃会開催するに付、多数の来聴を歓迎すると語物左の如し

『御祝儀』（入登）、『野崎』（鳳玉）、『壺坂奥』（鳳菊）、『三勝』（都一）、『鈴ヶ森』（花笑）、『妙心寺』（雷雀）、『先代萩』（古鶴）、『太子』（旭）、『壺坂前』（雛美）、『伊賀八』（菅枝）

□大正12（1923.11.09）『台湾日日新報』

素人義太夫会 台北の素人義太夫界に、野澤乙鶴と云ふのがあ
るが、其人が今度名披露をする意味で、十日十一日の両日午後
五時から、栄座で素人義太夫会を開催するが、補助として乙鶴、
力造、三玉、東咲、勝玉、三吉野の各連中が応援すると

□大正12（1923.11.17）『台湾日日新報』欄外記事

追善義太夫

十七日午後五時から万華女紅場で故葉玉吉次郎氏の追善
義太夫会を開く由で、木戸無料。来聴を歓迎すと。語物左の如
し

『御祝儀宝の入船』（入登）、『白石嘶揚屋』（友鶴）、『千両幟』（清

司）、『鎌倉三代記』（多美次）、『加賀見山又助』（寿美礼）、『千
代萩御殿』（延寿）、『梅の由兵衛』（大和）、『三十三間堂』（豊司）、
『勘平切腹』（三洋）、『蝶花形』（乙鶴）

□大正12（1923.11.18）『台湾日日新報』欄外記事

素人義太夫会
十八日午後六時より、古亭庄細井植木屋に於て、素人義太夫
会開催。一般の来聴を希望すると。語物は左の通

『御祝儀宝の入船』（入登）、『八陣記正清本城』（三光）、『腰越
状泉三郎館』（三洋）、『一の谷熊谷陣屋』（三峯）、『源平布引滝
琵琶』（藤？司）『忠臣赤垣出立』（菊水）、『日蓮記勘作住家』（琴
馬）、『関取千両幟猪名川内』（古菊）、『敵討志渡寺の段』（艶次）、
『忠臣蔵勘平切腹』（松風）

□大正12（1923.11.22）『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

二十二日午後五時より、晴雨を論ぜず、台北南門公会堂に於て
美登里会連中の浄瑠璃例会を開催する由。来聴随意。其語り物
左の如し

『御祝儀』（入登）、『紙治』（鳳玉）、『合邦』（鳳菊）、『三勝』（都

一）、『日吉丸』（かね子）、『妙心寺』（雷雀）、『竹の間』（古鶴）、
『弁慶』（旭）、『須磨の浦』（美登志）、『鳴戸』（美登里）、『沓掛
村』（菅枝）

□大正12（1923.12.01）『台湾日日新報』欄外記事

義太夫大会 台北師匠連の台北の素人義太夫は、日に月に盛ん
になって来たが、未だ師匠連の技は聴いても語りを聞く事は
滅多に無かつたが、今度フトした事から話が纏り、台湾演芸社
主催で一日午後五時から三日間、台北榮座で各連合同大会をす
る事となつた。入場料は三十銭で東光石嶺一固づつを呉れる
相だ

□大正12（1923.12.07）『台湾日日新報』

南瀛詩壇

倉岡竹塢先生招飲席上聴浄瑠璃贈呈 鷹取岳陽

燕都猶似醉悲歌。奈此胆寒情熱何。

聴到英雄紅恨曲。淚痕更較酒痕多。

〔燕都猶ほ悲歌に酔ふに似たり。此の胆寒く情熱きを奈何せん。

聴到す英雄紅恨の曲。涙痕更らに酒痕に較べて多し。〕

無限深情。十倍哀糸豪竹之感。 潤菴漫評

〔無限の深情、哀糸豪竹の感に十倍す。〕
※燕都＝帝都 哀糸豪竹＝哀しい琴の音と、力強い笛の音。巧
みな楽器演奏で人心を感動させること。

□大正12（1923.12.14）『台湾日日新報』

義太夫納会

十五日午後六時より、台北末広町学校横神代邸に於て美登里会
浄瑠璃納会開催するに付、多数の来聴を歓迎すと。其語り物
左の通り

『御祝儀』（入登）、『野崎』（鳳玉）、『合邦』（鳳菊）、『鈴ヶ森』（花
笑）、『新口村』（かね子）、『弁慶』（旭）、『毛谷村』（美登志）、『儀
作』（菅枝）、『本蔵』（相生）

□大正12（1923.12.22）『台湾日日新報』欄外記事

義太夫忘年会

二十二、二十三両日午後五時より、台北榮座に於て睦、美登里
の両聯合掉尾の義太夫忘年会を開催する由。木戸無料。語り物
左の如し

『御祝儀』、『太十』、『寺子屋』掛合（六名出演）『野崎』、『三勝』
（鳳玉）、『沼津』、『堀川』（藤枝）、『日吉』、『朝顔』（かね子）、『忠

六『我笑』、『阿漕』、『千本桜』（艶次）、『十種香』（延寿）『布四』、『先代萩』（相生）、『一の谷』（三峰）、『儀作』、『赤垣』（菊水）、『彦九』、『本蔵』（美登志）、『三勝』（松風）、『伊賀八』、『太十』（菅枝）

□大正13（1924.01.13）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃大会

十三日午後五時より、乙鶴連義太夫初会を南門公会堂に催す。
入場無料。語り物は

△『蝶花形ハツ目』大和△『鎌倉三代記三浦別』多美江△『先代萩御殿』清司△『忠臣二度目の清書』三光△『日吉丸稚の桜三ツ目』松風△『二十三間堂』豊司△『三勝半七酒屋』栄楽△『忠臣蔵六ツ目勘平切腹』三洋

□大正13（1924.01.30）『台湾日日新報』

台北素人浄瑠璃会

三十日午後六時から、台北市内栄町の新高菓子店で、素人浄瑠璃初会を開く

□大正13（1924.02.26）『台湾日日新報』欄外記事

浄瑠璃大会 二十六、七日栄座で

台北で多年義太夫界に尽して居る竹本勝玉師匠は、昨春以来約一年間野澤勝助師に就いて練磨し、益々腕を磨いて来たが、今度勝助師を台北に迎へ謝恩の意味で、二十六、七の両日午後四時から、栄座で浄瑠璃大会を催す事となつたが、二十六日の番組は左の通りである

『寿式三番叟』（入登）、『日吉丸』（連中掛合）、『先代萩』（池田一二三、糸勝玉）、『酒屋』（竹の家峰菊、糸勝玉）、『岸姫』（中村東司、糸東咲）、『二十三間堂』（高田錦糸、糸勝玉、ツレ勝好）、『朝顔日記』（新喜楽千駒、糸勝玉）、『太十』（梅屋敷花香、糸一平）、『御所桜』（吉田貴笑、糸三玉）、『お俊伝兵衛』（佐藤藤司、糸三吉野、ツレ里次）、『寺子屋』（中山東松、糸東咲）忠臣蔵九段（勝玉、糸勝助）

□大正13（1924.02.27）『台湾日日新報』欄外記事

浄瑠璃大会二日目

栄座における竹本勝玉主催の義太夫大会、二日目の物語は左の通りである

『式三番叟』（かしく）、『白石嘶』（掛合）、『八陣ハツ目』（勝柴、糸勝玉）、『太十』（龍木寿、米勝玉）、『又助住家』（石井大和、

糸乙鶴）、『蹺仇討』（有吉至玉、糸一平）、『野崎村』（竹の家竹奴、糸勝玉）、『竹の間』（笠原士口、糸三玉）、『阿波の鳴門』（小松崎三松、糸勝玉）、『合邦辻』（さくら、糸勝玉）、『沼津』（大串住登、糸勝玉）、『平太郎住家』（新喜楽千葉、糸勝玉ツレ千駒）、『すしやの段』（山田艶次、糸三吉野）、『猿廻し』（勝玉、糸勝助ツレ峯菊）

□大正13（1924.03.06）『台湾日日新報』欄外記事

素人義太夫会

七日午後五時より、台北鉄道ホテルに於て、美登里会連の淨瑠璃例会開催する由。入場無料多数の来聴を歓迎すと。其語り物左の通り

『日吉丸』（かね子）、『阿漕』（美登志）、『梅忠』（花笑）、『太功記』（鳳菊）、『炬燵』（鳳玉）、『油屋』（雷雀）、『壺阪』（雛美）、『伊賀八』（菅枝）、『四谷怪談』（長勇）、『逆櫓』（相生）

□大正13（1924.03.15）『台湾日日新報』

演芸

□東咲連義太夫会

十五日午後六時から南門公会堂で開催するが、出し物は在の通

りである

『御祝儀宝の入船』入登▲『御殿場』東一▲『五郎助住家』東玉▲『尼崎の段』東遊▲『菅原四段目寺子屋』東松▲『岸の姫松飯原館』東司▲『壺坂沢市内より切まで』七五三登

□大正13（1924.04.17）『台湾日日新報』

栄座娘義太夫

大正九年に初渡台して頗るの好評を博した女義の竹本弥栄子一行が、又復十五日より栄座で開演することになったが宣伝の良しきを得なかつたのか、殆ど義太夫定連ばかりの顔振れであつた。『御祝儀宝の入船』は御座附で、『太功記』の湊栄迄は語るで無く読んで居る。『朝顔』で君広が一寸目立つた。『八陣』の仙国これもまア唄てる一本調子に妙な、まりがあるが疵。『忠臣蔵六段目』に龍光のモタレだが、以前よりより以上の肥満の巨軀に対し、至つて声音の低いことが非常に聴客に不満であつた。次の御大竹本弥栄子十八番もの、『壺坂』の弾語り、流石三味線の鮮と声の綺麗なのに知らず知らずホロリとさせて、棧敷面では手巾を顔に当てた婦人もあつたが、以前と違って非常に艶ぼく、ケレン沢山で彼女の三味では恐らく語手は無からうとは一般の評だ。最後の総掛合の『野崎村』は

御商売人であるなあと感心する。意気のシツクリ合ふこと丈であつた

□大正13 (19240525) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会 二十五日午後六時より、台北表町二丁目閑道場に於て、一平連浄瑠璃会開催する由。来聴随意。其語り物左の通り

『御祝儀』(入登)、『先代萩』(義石)、『日吉丸』(錦糸)、『又助』(土口)、『阿漕』(三楽)、『儀作』(菊水)、『紙治』(鳳玉)、『合邦』(魁)

□大正13 (19240529) 『台湾日日新報』欄外記事

三玉門下の浄瑠璃大会

台北に古くから居る豊竹三玉師匠が、渡台三十年となるので其記念浄瑠璃会を三十日から六月一日まで、三日間毎夕五時から栄座で華々しく開演する事となつた。後援者は斯界の師匠連と所謂御旦那様十数人が後押しであるから、相当に盛んにとだらう。初日の語物は左の通り

『寿式例三番叟』(かしく)、『忠臣二度目清書』(光玉)、『鏡山又助住家の段』(三峰、糸中司)、『朝顔日記宿屋の段』(桜玉、

糸三玉) 一『先代萩政岡忠義の段』(ちとせ)、『菅原伝授子屋の段』(松香、糸三玉)、『日吉丸稚桜五郎助内の段』(貴昇、糸ちとせ)、『三日太平記松下住家の段』(雷雀、糸三玉)、『阿漕ヶ浦平治住家の段』(菊水、糸一平)、『伊賀越平作内の段』(琴馬、糸芳子)、『八陳記政清本城の段』(梅枝、糸三玉)、『お染久松野崎村の段』(柳枝、糸三玉)

□大正13 (19240713) 『台湾日日新報』

素人義太夫会

十三、十四の両日、南門公会堂に於て、勝玉連素人浄瑠璃納涼大会を開催すると。語物は左の通り

『宝入船』(入登)、『忠六』(浪速)、『御所』(勝美)、『壺坂』、『柳』(三松)、『沼津』、『本蔵』(住登)、『御所』、『鈴ヶ森』(一二三)、『太十』、『先代』(寿)、『三勝』、『合邦』(峰菊)、『梅由』(千駒)、『朝顔』(竹奴) 糸(勝玉、勝好、勝登)

□大正13 (19240726) 『台湾日日新報』欄外記事

あんげい

□素人浄瑠璃会 東咲連が納涼会として、二十六日午後六時から、西門公会堂で開催する。語り物は左通り

『御祝儀』（入登）、『野崎』（東二）、『本蔵下屋敷』（東秀）、『千代萩』（東玉）、『又助住家』（東松）、『新口村』（東遊）、『酒屋』（東鳳）、『岸の姫松三の切』（東司）、『尼ヶ崎』（七五三登、糸（東咲）

□大正13（1924.07.27）『台湾日日新報』欄外記事

素人義太夫会 本日朝刊掲載の西門公会堂義太夫会は、南門公会堂に訂正

※訂正元の記事は（大正13（1924.07.26））

□大正13（1924.09.04）『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

四日午後六時から、台北若竹町法華寺に於て、素人寄合浄瑠璃会開催する語り物は左の通り。但し雨天順延

『御祝儀』（入登）、『玉三』（巴■）、『先代萩』（千歳）、『菅四』（柳枝）、『日吉丸』（花笑）、『合邦』（雷雀）、『本蔵』（相生）、『赤垣』（艶司）、『又助』（菅枝）、素人三味線（千■、千代■）

□大正13（1924.09.23）『台湾日日新報』

素人義太夫会

二十三、二十四の両日、午後六時より本町一の吉田屋楽器店新築楼上に於て、素人義太夫天狗聯合会を催す由。同好者は随意。来聴を希望すと

□大正13（1924.09.28）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃 二十八日午後六時から、台北市若竹町法華寺にて、左の番組で東咲連素人浄瑠璃会を開催。来聴歓迎の由

『御祝儀宝の入船』入登、『鈴ヶ森』東昇、『梅川忠兵衛二ノ口村』東遊、『本蔵下屋敷』東寿、『日吉丸三の切』東玉、『菅原四段目』東松、『一の谷三ノ切』東司、『朝顔日記』東鳳、『をしゅん伝兵衛堀川の段』七五三登、糸東咲

□大正13（1924.10.19）『台湾日日新報』欄外記事

義太夫月例会

台北市三吉野睦会では、十九日夜、八甲町法華寺に於て月例義太夫会を開くと。語物は左の通り

『御祝儀宝の入船』（入登）、『一の谷須磨の浦』（むつみ）、『三日太平記嘉平治内』（三昇）、『三十三所壺坂』（河梟）、『一の谷熊谷陣屋』（五角）、『御所桜弁慶上使』（高砂）、『朝顔日記宿屋』（友鶴）、『太功記局の注進』（三之）、『太功記尼ヶ崎』（い京）、『四

ツ谷怪談物語』（藤司）、『先代萩御殿』（輝昇）、『日蓮記勸作住家』（琴馬）、『二代鑑秋津島内』（菅枝）、『安達原一ツ家』（三洋）

□大正13（1924.10.30）『台湾日日新報』欄外記事

南門義太夫大会 南門方面の娯楽機関として有志後援の下に

生れた南門義太夫研究会は、来た十月三十日午後六時から南門公会堂に於て第一回演奏大会を催す事となつたが、曲目

▲『宝の入船』▲『太功記十段目』▲『朝顔日記宿屋』▲『三十三

間堂平太郎』▲『千代萩、御堂』▲『御所桜弁慶』▲『加賀山

又助』

□大正13（1924.11.25）『台湾日日新報』欄外記事

睦連義太夫会 台北市内三吉野睦会では、二十五日午後六時

から、義太夫の納会を南門公会堂に開き、一般の来聴を希望する。因に談り物は左の通り

『信功記信長傘の舞』（三福）、『一の谷須磨の浦』（むつみ）、

『三十三所壺坂』（河梟）、『一の谷熊谷陣屋』（五角）、『三日太

平記九段目』（三昇）、『朝顔日記宿屋』（友鶴）、『伊賀越沼津』（藤

司）、『伊賀越岡崎』（菅枝）、『加賀見山長局』（琴馬）、『義士伝

天川屋』（三洋）

□大正13（1924.11.28）『台湾日日新報』

素人義太夫納会

二十八、二十九の両日本町吉田屋演芸場に於て、勝玉連の義太夫納会を開催する。語物は左の通り

▲二十八日

『柳』（入登）、『二十四孝』（新喜楽千駒）、『太功記』（三松）、『日吉丸』（二三）、『本蔵』（竹の家峰菊）、『宿屋』（新喜楽千駒）、

『御所三』（寿）、『寺子屋』（栄玉）、『三勝』（藤玉）、『一の谷』（住登）

▲二十九日

『壺坂』（入登）、『先代』（新喜楽千駒）、『太功記』（寿）、『梅由』（新喜楽千駒）、『鳴門』（三松）、『三勝』（二三）、『箱根』（栄

玉）、『本蔵』（藤玉）、『忠六』（住登）

□大正13（1924.12.01）『台湾日日新報』

三玉連義太夫納会

一、二の両日、南門公会堂で午後六時より、素人義太夫三玉連の納会を開催する

▲一日『安達三』（光玉）、『柳』（喜玉）、『日吉』（松玉）、『又助』（寿玉）、『箱根滝』（栄玉）、『先代』（土口）、『沼津』（鳳玉）、

『寺子屋』（松香）、『紙治』（一声）

▲二日『日吉』（花王）、『弁慶』（鶴水）、『玉三』（加玉）、『先代』（千歳）、『安達三』（梅枝）、『皿屋敷』（東寿）、『岸姫』（貴昇）、『赤垣』（艶司）、『本蔵』（柳枝）

□大正13（1924.12.07）『台湾日日新報』

東映連義太夫納会

東映連では六日夜、南門公会堂で、本年の浄瑠璃納会を催すと。語物左の如し

『御祝儀』（入登）、『鈴ヶ森』（東輝）、『鳴戸』（東里）、『又助』（東寿）、『日吉丸』（東玉）、『菅四』（東松）、『岸姫』（東司）、『太十』（東艶）、『酒屋』（東鳳）、『沼津の里』（七五三登）糸東映、七五三登

□大正13（1924.12.08）『台湾日日新報』

一平連義太夫納会

素人義太夫一平連は七日午後六時から、本町二丁目吉田屋楽器店楼上にて納会を開催すると。語物左の通り

一、『宝の入船』（入登）一、『太十奥』（土口）一、『太十口』（小菊）一、『新吉原』（芳子）一、『岸の姫松』（二枝）一、『阿漕

の浦奥』（菊水）一、『日吉丸奥』（錦糸）一、『又助住家』（一景）一、『三浦別』（一徳）一、『酒屋』（一正）一、『玉三』（一平師）

□大正14（1925-01-21）『台湾日日新報』

【写真説明】

（上）大阪府知事の案内で文楽座で人形を見て居る米大使バンクロフト氏

□大正14（1925-01-25）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

二十五日午後五時半から若竹町法華寺に於て、美登里会連中の浄瑠璃初会開催する由、其語りもの左の通り（但し雨天順延）『御祝儀』（入登）、『八陣』（都一）、『本蔵』（千歳）、『弁慶』（かね子）、『忠六』（雷雀）、『玉三』（三峰）、『三勝』（相生）、『日吉丸』（松風）、『安達』（至玉）、『又助』（菅枝）、糸（久幸）

□大正14（1925-02-15）『台湾日日新報』

陸連義太夫会

台北三吉野陸会では、十四日午後六時から市内八甲町法華寺に於て、義太夫温習会を開催すると。語物は左の通り

『御祝儀宝の入船』（入登）、『一の谷須磨の浦』（六ツみ）、『三
日太平記九』（三昇）、『一の谷熊谷陣屋』（五角）、『千本桜すし
屋』（友鶴）、『三勝半七酒屋』（呂京）、『おしゆん伝兵衛堀川』（藤
司）、『伊賀越岡崎』（菅枝）、『布引滝松波琵琶』（琴高）、『彦山
権現六助内』（三洋）、『伊賀越津の里』（三吉野）

□大正 14（1925-02-19）『台湾日日新報』欄外記事

素人義太夫／聯合春季大会

台北の素人 義太夫天狗連の鼻くらべをなすべく、春季聯合
大会を、十九二十の両日華々しく栄座に開演する由。入場料は
下足共無料。三味線は竹本久幸、竹本東咲、野澤三吉野、鶴澤
一平の四師匠が勤めると

番組乱表

『松王屋敷』（艶司）、『一口村』（東遊）、『寺子屋』（東松）、『又
助住家』（菅枝）、『堀川』（藤司）、『寿司屋』（友鶴）、『長局』（琴
馬）、『太十』（久玉）、『逆槽』（相生）、『二代鑑』（菅枝）、『太十』
（花香）、『阿漕ノ浦』（菊水）、『壺坂』（小菊）、『又助住家』（一
徳）、『五所桜』（かね子）、『日吉三』（松風）、『忠六』（雷雀）、『壺
坂』（龍鵬）、『日吉三』（司玉）

□大正 14（1925-04-19）『台湾日日新報』
今日の催し

睦会送別義太夫会 三吉野睦会では、十九日午後六時から八
甲町法華寺で浜中河梶氏の送別義太夫会を開くと。語り物は左
の通り

『御祝儀』（入登）、『三十三間堂』（豊司）、『熊谷陣屋』（五角）、
『酒屋』（河梶）、『弁慶上使』（支鶴）〔友鶴カ〕、『布引』（藤司）、
『合邦』（艶司）、『本蔵下屋敷』（琴馬）、『仙台鰻谷』（巴城）、『萩
工橋』（先代萩土橋）〔菅枝〕、『雪責』（三洋）、『軍法富士見西行』
（三吉野）

□大正 14（1925-05-02）『台湾日日新報』

南門義太夫会

南門義太夫研究会では、五月二日午後六時より、南門公会で、
素人淨瑠璃会を開くと。語り物は

一、『大序宝の入船』一、『朝顔宿屋』一、『太功記尼ヶ崎』一、
『安達ヶ原三段』一、『加賀見山又助住家』一、『御所桜弁慶
上使』一、『三勝半七酒屋』一、『先代萩御殿』

□大正 14（1925-06-07）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃大会

六日より九日迄四日間、毎日午後六時より、台北末広町二丁目元盲啞学校跡に新設せる末広会館に於て、始政三十年記念祝賀として各連聯合の素人浄瑠璃大会を開催する由

□大正 14 (1925-10-03) 『台湾日日新報』

今日の催し

追善義太夫会 三日午後六時より古亭町了覚寸に於て、故中本仲司氏の追善供養浄瑠璃会を催し、十数番の語り物ありと

□大正 14 (1925-10-24) 『台湾日日新報』 欄外記事

浄瑠璃会 養気俱樂部では二十三日（金曜日）午後六時より、小南門俱樂部に於て、鶴澤一平連を招聘し、浄瑠璃会開催する

□大正 14 (1925-11-23) 『台湾日日新報』

素人義太夫会

二十三日より二十五日まで三日間台北市内末広町会館にて竹本七五三登様の送別素人浄瑠璃会を開催する。出演者多数

□大正 14 (1925-11-27) 『台湾日日新報』

浄瑠璃納会

二十六、七日の二日間、栄座にて野澤三吉野陸連の義大夫納会の二十七日の語物は

『御祝儀』（可祝）、『尼ヶ崎』（菅枝）、『四谷怪談』（藤司）、『玉藻前』（豊司）、『三十三間堂』（花次）、『由良港山之段』（友鶴）、『合邦』（艶司）、『鰻屋八郎兵衛』（巴城）、『源平布引松波琵琶』（琴馬）、『恋女房染分手綱』（三吉野）で、入場無料。但し下足料五銭

□大正 14 (1925-12-06) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃納会

七日午後六時から末広町末広会館で、鶴澤一平連の素人浄瑠璃納会を催す由。語物は

▲『御祝儀、宝の入船』（入登）▲『日吉丸三段目』（総員掛合）▲『御所桜三段目』（静）▲『太功記妙心寺』（二枝）▲『先代萩御殿』（錦糸）▲『鳴戸八つ目』（芳子）▲『太功記十段目』（士口）▲『炬燵紙治内』（鳳玉）▲『忠臣蔵本蔵下屋敷』（二平）

□大正 15 (1926-02-04) 『台湾日日新報』

【写真】節分のお化け

- (1) 松花楼の花売 (2) 新喜楽の越後獅子 (3) 梅本の春駒 (4) 義太夫東咲連 (5) まんかの老妓連 (6) 巴楼芸妓 (7) 小永楽のお染、久松 (8) 見はらし支店の兵隊

※節分の集団仮装写真。

□大正15 (1926-03-02) 『台湾日日新報』

陸連浄瑠璃会

専売局養気俱樂部に於て、三吉野陸連の浄瑠璃会を、三月二、三兩日毎夜六時から催すことになった。出演者は大凡専売局員であるとのこと。番組左の通り

二日 『御祝儀』 入登

『御所桜』 十三二

『柳』 茂美治

『忠王御殿』 豊司

『由良港山』 友鶴

『本蔵下屋敷』 吉峰

『すしや』 巴城

『袖萩祭文』 琴馬

『太功記十』 永楽

三日 『御祝儀』 入登

『太功記』 舟木

『柳』 千司

『又助住家』 山星

『三勝酒屋』 三石

『矢口渡し』 三峰

『日吉丸三』 ○○

『忠臣蔵四』 藤司

『沼津里』 菅枝

『彦山ノ九』 三洋

□大正15 (1925-04-28) 『台湾日日新報』

義太夫陸会は、春季大会を来る五月二、三日毎夜、末広町会館に開催することになった。傍聴無料で、一人でも多く聴いて欲しいと

□大正15 (1926-05-02) 『台湾日日新報』

陸会の浄瑠璃

台北陸会では一日、二日の兩日、末広館に於て春季温習美太夫会を開く由。語り物は左の通り

初日『御祝儀三番叟』（可祝）、『玉藻前忠王館』（豊司）、『太功記尼ヶ崎の段』（三福）、『三十三間堂柳の段』（三能羽）、『加賀見山又助内』（可笑）、『三勝半七酒屋の段』（三石）、『四ッ谷怪談伊右衛門内』（巴城）、『日蓮記勘作住家』（琴馬）、『昔八丈白木屋の段』（菅枝）、『花の雲佐倉曙宗五郎住家』（三吉野）
二日目『御祝儀宝の入船』（入登）、『三十三間堂柳』（三豊）、『妹背山竹に雀』（花次）、『御所桜弁慶上使』（多三司）、『千本桜すし屋』（友鶴）、『青山鉄山皿屋敷』（三峰）、『伊賀越沼津の里』（藤司）、『金刀比羅御利生志渡寺』（艶司）、『中将姫雪責の段』（三洋）、『ひらがな盛衰記逆槽の松』（三吉野）、三味線（野澤三吉野、同三十次、同花次）

□大正15 (1926.05.19) 『台湾日日新報』

義太夫大会 二十日基隆で
既報。基隆浄瑠璃同好雀連主催の故料理屋組合長十雀事、足利藤吉氏追善浄瑠璃大会は、準備整 愈々二十日午後正五時より、基隆劇場に於て盛大に挙行することになったが、大小天狗連並に日本亭、巖亭、依姫楼等の芸妓連の力演で、其の番組は次の通りであると

▲『おしゆん伝兵衛堀川』、福語 ▲『八陣』、いさわ ▲『御所桜』、

みなと ▲『三勝半七酒屋の段』、高雀 ▲『日蓮聖人』、雀 ▲『壺坂』、巖雀 ▲『儀作住家』、菊水 ▲『柳』、新松 ▲『日吉丸』、喜雀 ▲『忠臣蔵』、福徳軒 ▲『合邦』、若衆 ▲『太功記』、鈴八 ▲『忠臣蔵』、小安 ▲『赤垣源蔵』、吾勇 ▲『お染久松野崎村』、相生 ▲『志度寺』、十三 ▲中入 ▲『玉三』、大石 ▲『本蔵下屋敷掛合』
(吾勇、十三、長勇、相生、大石、三味線竹本鐘龍師琴仁木八重子) ▲『沓掛村』、長勇 ▲『お半長衛門桂川道行』掛合(倉子小房、静香、糸勇、小笑、好江、文福、千成、小勇、清子、豆力、春枝、三味線竹本鐘龍師、政栄、小安、ゆか世話、玉幸、菊江)

□大正15 (1926.05.30) 『台湾日日新報』

勝玉連浄瑠璃会

二十九日三十日午後正六時より、新世界前末広会館に於て勝玉連素人義太夫会開催の由。兩日語り物左の如しである
『七福神』（入登）、『又助』、『御所三』（新喜楽千昇）、『酒屋』（藤玉）、『御所三』、『柳』（幾久万知子）、『鈴ヶ森』（綾登）、『玉三日吉丸』（二枝）、『白石』、『新ノ口』（新喜楽千房）、『朝顔』（竹の家竹奴）、『太十』（寿）、『忠四』（勝楽）、『先代』、『壺坂』（三松）、『寺子屋』、『忠六』（住登）、『下屋敷』（勝玉）、『十種香掛

合』(幾久万知子、新喜楽千房、三松)、糸(勝玉、勝好、藤枝、琴子、峰千代)

□大正15 (1926-06-06) 『台湾日日新報』

義太夫聯合大会

台北市内の義太夫師匠連は、五日夜から三日間、栄座に聯合大会を開催する事となつた。番組は左の通り

五日語物 『御祝儀』(入登)、『御殿』(千歳)、『宿屋』(三能羽)、

『おしゆん』(藤司)、『太十』(土口)、『御所桜』(まち子)、『鈴ヶ

森』(平和)、『太十』(千昇)、『皿屋敷』(組次)

六日語物 『御祝儀』(入登)、『酒屋』(三石)、『忠六』(可昇)、

『宿屋』(静)、『由良港』(友鶴)、『合邦』(花香)、『講釈七』(巴

城)、『本蔵』(栄玉)、『四谷』(菅枝)

七日語物 『御祝儀』(入登)、『御殿』(土口)、『忠六』(宝珠)、

『日吉』(至玉)、『竹雀』(花次)、『岸姫』(喜昇)、『御所桜』(か

ね子)、『矢口渡』(三峰)、『合邦辻』(艶司)

三味線 (三玉、勝玉、久幸、一平、三吉野)

□大正15 (1926-07-03) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

台北市内有志より成る素人浄瑠璃研究会にては、三、四の両日午後七時より、南門公会堂に於て、第一回大会を開催する由。語り物左の如し(但抽籤順)

三日

『又助』(三光)、『本蔵』(栄玉)、『太十』(艶司)、『長局』(琴馬)、

『鈴ヶ森』(平和)、『菅四』(菅枝)、『日吉』(竹枝)、『先代』(柳

枝)

四日

『日吉』(一枝)、『中将姫』(三松)、『儀作』(組次)、『太十』(梅

枝)、『酒屋』(菊水)、『鈴ヶ森』(綾登)、『紙治』(一声)、弁慶

(一二三)

□大正15 (1926-07-25) 『台湾日日新報』

浄瑠璃大会 専売局小南門俱樂部では、二十五日午後七時か

ら竹本勝玉師を招き、浄瑠璃大会を開く。一般の入場を歓迎す

□大正15 (1926-08-14) 『台湾日日新報』

素人義太夫会

台北の素人義太夫会では、十四日から五日間、毎夜午後六時から、市内本町一ノ一五常磐生命保険会社三階にて温習会を開

く由。入場料は無料で、その上毎夜六時から七時半迄に來た聴衆には景品を出す。十四日の語順 左の通り

『阿漕』（三楽）、『柳』（三の葉、酒屋）（三石）、『壺坂』（一景）、『忠六』（東松）、『弁慶』（かね子）、『本蔵』（栄玉）、『先代』（組次）、『妙心寺』（雷雀）

□大正15 (1926-08-15) 『台湾日日新報』

素人義太夫会 市内本町常磐生命階上に開催される台北素人義太夫会、十五日夜の読物、左の通り

『日吉』（静）、『忠六』（加昇）、『合邦』（松葉）、『太十』（梅枝）、『先代』（土口）、『酒屋』（竹司）、『菅四』（柳枝）、『野崎』（相生）

□大正15 (1926-08-16) 『台湾日日新報』

台北素人義太夫会

十四、十五、十六、十七、十八の五日間、毎夜午後六時から台北本町一丁目常磐生命の三階で開会するが、十六日の語物は、『弁慶』（土口芳子）、『百度平』（琴馬寿）、『忠六』（綾登琴子）、『宿屋』（静芳子）、『本下』（加玉三富久）、『合邦』（一徳芳子）、『玉三』（三峯昇龍）、『紙治』（菊水芳子）、『又助』（菅枝千代寿）だが、晴雨に拘らず開会し、來客に景品を出す

□大正15 (1926-09-30) 『台湾日日新報』 欄外記事

一平連浄瑠璃会

一平連の浄瑠璃会が三十日午後六時■■■■■■会館■■催されるが、その語物は

『お俊伝兵衛』（花香）、『合邦ヶ辻』（一徳）、『太功記十段』（芳子）。『本下』（三楽）、『朝顔日記』（静）、『弁慶』（土口）、（三味線一平師、芳子、小大事、住■■■■）

□大正15 (1926-10-08) 『台湾日日新報』

送別義太夫大会

素人義太夫の重鎮たる大草巴城氏が、内地引揚の為め、送別義太夫会を九、十兩日毎夜、末広会館で開催することになった。主催は三吉野睦連一派で、九日の番組、左の通り

『御祝儀宝の入船』（入登）、『玉藻前道春館』（豊司）、『太功記尼ヶ崎』（三千歳）、『仙代萩御殿』（三能羽）、『忠臣蔵勘平切腹』（加

昇、堀川）（東）、『撰州合邦辻』（三石）、『箱根権現滝』（艶司）、『義士伝弥作鎌腹』（巴城）、『義士伝義作切腹』（組次）、『関取

二代鑑』（菅枝）

□大正15 (1926-10-09) 『台湾日日新報』

文楽の人形台覧 瑞典皇儲及妃殿下

二日、高野登山を遊ばされた帰途、御来阪。大阪倶楽部に於ける中川大阪府知事招待の午餐会へ成らせられた

(写真は同倶楽部で御らんに入れた文楽座の人形芝居の人形を御興深く見入らる、両殿下)

□大正15 (1926-10-10) 『台湾日日新報』

送別義太夫会延期

九日より末広会館にて開演する素人義太夫睦会三吉野連の送別義太夫会は、風雨激しき為め中止し、開演を雨天順延と決定した

〔欄外記事〕

義太夫 台北素人義太夫睦会三吉野連の送別義太夫会は雨天の為め延期したが、十日夜開催十一日も、引続き開演すると

□大正15 (1926-11-06) 『台湾日日新報』 欄外記事

素人義太夫大会 六日、七日、八日三日間、八甲町八甲事務所に於て、晴雨に拘はらず午後六時より、台北各連素人義太夫大会開催の由。出演者左の如し

栄玉、一声、平和、藤玉 組次、柳枝、菅枝、千歳、三峰 一枝、松香、一二三、梅枝、艶次 三光、綾登、三松、静、巴、松風、土口、錦糸、菊水、小菊 藤枝、三石、三ツ葉、琴馬、駒玉、かね子 (三味線) 栄枝、呂玉、三富久、寿、千代寿、芳子 琴子

□大正15 (1926-11-30) 『台湾日日新報』

大阪文楽座全勝 二階建百七十二坪の建物

【大阪二十九日発】 大阪文楽座は二十九日失火、全焼した同座は明治三十一年十月前の興業地西区松島から移転したもので、焼失建坪は二階建百七十二坪七百五十人収容し得る大建物で、同座は市街建築法に依り、今後焼跡に再建築は許されぬ模様である

更に―平野町に飛火

【大阪二十九日発】 鎮火したと見えた文楽座の火は午後零時四十五分、平野町四丁目料理店堺卯楼裏手に飛火し、倉庫二棟を焼き、更に高安病院長の邸宅に延焼し、之を焼尽し、一時御霊神社を全焼して、漸やく下火となった。原因は漏電らしく、文楽座の名物の人形は全焼した。損害莫大の見込である

□大正15 (1926-12-01) 『台湾日日新報』

文楽座失火原因判明

【大阪三十日発】文楽座の火災に就き、最初より出火原因を不審と睨んだ所轄船場署にては、関係人を召喚。嚴重取調べた所、大道具方山本亀吉(二九)が屋根裏にて、仕事中燐寸を摺つて、三階の天井裏に捨てた所、其れが造花及道具に燃え移つたので驚き水を取りに行つた所、既に火の海と化し、手の付け様がなかつたもので、失火罪として取調中である。堺卯樓火事は全く文楽座の飛火である事判明した

□大正15 (1926-12-01) 『台湾日日新報』 漢文欄

文楽座及御霊神社皆全焼

本早十時三十分。東区平野町御霊神社内文楽坐失火。挙坐化為烏有御霊神社亦被燃及。同神社社殿拝殿。亦全焼(大阪二十九日發延着)

失火原因

文楽座火災。最初出火原因。視為不審。經所轄船場署。召喚関係人嚴重訊問。乃知為大器具家山本亀吉。(二九)在屋蓋後作事中。打火柴。以其殘枝葉于三層天井後。移燃及造花並器具等。

一時大驚。取水欲救之。已化為火海遂一時着手不及。有伝為堺卯樓火事者実即文楽座之飛火也。(三十日大阪發)

□大正15 (1926-12-02) 『台湾日日新報』

総損害高 六十万円 文楽座失火で

【大阪三十日發】焼失した文楽座の損害は松竹から五万円の届出があつたが、御霊神社其他は未だ不明なるも、全額六十万円に達する見込であると。尚文楽座道具方山本兼吉は失火罪として告發された

□大正15 (1926-12-03) 『台湾日日新報』 欄外記事

義太夫納会

三日四日晴雨に拘らず、午後五時より新世界館前、末広会館に於て勝玉連素人義太夫納会開催の由。語り物は(御所)入登、(野崎)白石、幾久、まち子、(日吉丸)一二三、(鳴門)駒玉、(熊谷)宝珠、(二十四孝)炬燵、新喜楽千房、(妙心寺)玉三、一枝、(野崎)寿、(松王)鈴ヶ森、綾登、(寺子屋)太十、(忠四)勝楽、(御所)沼津、住登

□大正15 (1926-12-05) 『台湾日日新報』

素人義太夫納会／三吉野陸連

三吉野陸連の素人義太夫納会は、来る五、六兩日、南門公会堂で、毎夜六時より開演する。入場料無料。番組は

五日 『御祝儀宝入船』(入登)、『千代萩御殿』(菊馬)、『玉藻前三段目』(豊司)、『二谷熊谷陣屋』(巴)、『撰州合邦ヶ辻』(三石)、『志渡寺の段』(艶司)、『お駒才三白木屋』(菅枝)
六日 『寿式札』(可四九)、『撰州合邦ヶ辻』(寿司)、『千代萩御殿』(三能羽)、『三勝半七酒屋』(友鶴)、『矢口渡頓兵衛』(三峰)、『忠臣蔵勘平切腹』(藤司)、『金比羅利生記』(琴馬)

□大正15 (1926-12-13) 『台湾日日新報』

義太夫納会 台北野澤一平連の義太夫納会は、十二日午後六時から、常盤生命保険社楼上で開かれるが、当夜の語物は、左の通りである

『勘平腹切』(土口)、『紙治』(鳳玉)、『日吉』(松風)、『合邦』(一徳)、『先代萩』(錦糸)、『伊勢音頭』(花香)、『朝顔日記』(静)、『太十』(大力)、『阿漕』(我笑)、『本蔵下』(三栄)、『壺坂』(一景)

(3) 昭和

□昭和2 (1927-01-01) 『台湾日日新報』

趣味の人々／人には無くて七癖／お役人の天狗の鼻競べ

人生一番無邪氣で厭味のないのは、一技一芸を持つてゐる人たちの所謂天狗党の鼻競べであらう、殊にお役人などと来たら、へいそむりにも苦虫を嚙んだ様な顔附をして御座らねばならぬのだから、此の部類の人たちに多少でも骨相を崩させるのは鼻くらべでもしたりさせたりするのが一番捷徑、本紙の一隅に天狗党の土俵を築いたのも其のため、恐らく功德はあらたかであると思ふ。

台湾なら碁は無敵／勝負事大好／本山警務局長
ムエキな易に凝る／変つた趣味／佐藤警務課長
義太夫唸る迄／鼓事務官

本喰虫に甘んじてる／原口統計官
大抵やるが水準以下／碁は得意／能沢土木課長
いまはゴルフ／昔はかるた／木下内務局長
妙案の浮ぶ散歩／山登も好き／小林保安課長

【本山の談話の抜粋】

謡曲かネあんなことはやらうと思つたこともない
殊に義太夫に至つては聴いて居ても首を引き締めらる様な気がして趣味所のさわぎぢやないネ、

【鼓の談話】

僕が義太夫をウナリ出す様になつたに就ては一つの妙な思出話があると前置して鼓一葉太夫は静かに語り出す

「最早かれこれ五六年も前のことだ、僕が総督府の駐在員として府下大井町に居た時分、鉄道線路を隔て、向ひの崖の上に第百銀行の重役で喜多某と言ふ人が住んで居た所が、此の人仲々の変り者でその広い立派な庭園内へ東屋を拵へたり。一寸した舞台などを作つたりして之を附近の人々に解放し、時々東京迎から一流所の色んな芸人を招んでは友人知己や近隣の人々を招てきかせて居たが、それが何時しか粹人倶楽部と云ふものになつて仕舞つた。そんな倶楽部へ入る資格なんかは一寸もないんだが招かれるまゝ、一度顔を出した所が、頭深みにはまつて謹厳なる態度で稽古を初め、先づ『壺坂』から始めて『弁慶』、『朝顔日記』、『大功記』、『逆鱗』と言つた順序で上げて行つたが、さて始めの中さわりがどうのこうのと氣にして居る頃はよかつたが、少し義太夫の真諦がわかり出して来ると非常にむづか

しいものになって了つて、今では途方に迷つてゐるという有様だ

【原口の談話抜粋】

趣味も環境に支配されるもので、ドイツへ行つてからは音楽趣味に転じた。無器用で僕にはどんな簡単な楽器もならせ得なかつたが、ドイツの学生生活に附物の歌劇だけは毎晩の様に見に行つたのでおかげで音楽とか劇と言ふものに対する趣味だけは充分体得出来た

【能沢の談話抜粋】

げすだと冷されるかも知れないが、八八もやればマーヂヤンも相当にやる。だが、妙なもので此の頃の様に、之を悪用する人が沢山ふえて来ると、折角面白い遊びだと思つても、ウツカリ人前で「僕も八八をやるよ」なんて大げらに言ひ出さうものなら、あいつも嗅いぞ、なんて痛くもない腹を探られる様な気がして、遂やれなくなつて仕舞ふ、恰度シヤミセンが或る一派の人々に殆ど独占されて居る為に、折角之に興味を感じて習ひたいと思ふ人達迄、遠慮して仕舞やうに自分さへ正しければよいとは言ふものの、そこには矢張社会生活をして居る人間の

弱さと言ふものかネ、「中略」「謡曲は何です?」「僕の郷里金沢は宝生の本場ですから、国では非常に盛ですが、僕はつひこれを覚える機会を失つて仕舞ひました。惜しい事をしたと思つても今更始ると言ふ氣にもなれず、マア僕等の様な年中忙しい仕事をして居る人間にはそんな凝つた趣味を要求したつて無理ですよ「劇に対する趣味は?」「い、ですネ、然し台湾に居ては始まりませんナ、「中略」旧劇は好きで上京した度に一度や二度歌舞伎を覗かない事はないが、さりとてセリフを覚えて居て大向をウナラせる程の熱心さもない、マア僕も大抵な趣味は解するが水準以下さね

【木下の談話抜粋】

凝つた趣味としては謡曲の味も一通り知りたと思つて一週間ばかり人真似をしてウナツて見たが、何だか馬鹿馬鹿しくなつてそれつくりプツつり止めて仕舞つた

□昭和2(1927-02-19)『台湾日日新報』

二の午 曹洞宗布教所内豊川稲荷の二の午祭りは、十七日舉行されたが、夜間は淨瑠璃、琵琶等があつて賑かだつた

□昭和2 (1927-04-06) 『台湾日日新報』欄外記事

素人義太夫会／六七の両日

六日七日の両日台北市古亭町了覺寺に於て午後六時より素人義太夫会開催の由。雨天順延。番組左の通り

六日語り物 『御祝儀』(入登、御所)(呂正)、『儀作』(菊水)、

『陣屋』(宝珠)、『又助』(三光)、『本蔵』(栄玉)、『先代』(築水)、

『太十』(艶司)、『沼津』(一声)

七日語り物 『御祝儀』(入登、太十)(いろは)、『寺子屋』(梅

枝)、『儀作』(お玉)、『松王』(綾登)、『三勝』(三石)、『鳴門』

(三松)、『赤垣』(組次)、『百度平』(竹司)

三味線 栄枝、三ふく、呂玉、琴子、小菊

□昭和2 (1927-05-20) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

十九日、二十日両夜、丸三呉服店楼上にて、素人浄瑠璃会を開催する由、一般の来聴を希望すると

十九日 『日吉丸』(いろは)、『合邦』(鳳玉)、『忠六』(巴)、『又

助』(鐘登)、『木下』(雷雀)、『儀作』(千歳)、『仙代』(土口)、

『妙心寺』(菅枝)

二十日 『大功記』(いろは)、『忠六』(鐘登)、『御所桜』(土口)、

『阿漕』(美登志)、『玉三』(三峰)、『酒屋』(鳳玉)、『太十』(鶴司)、『油屋』(雷雀)

□昭和2 (1927-05-25) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会／末広会館にて

二十四日、二十五日両日、市内末広会館にて素人浄瑠璃大会を開く。尚午後八時迄の来場者には丸三呉服店より寄贈の福引券を呈すと

□昭和2 (1927-07-10) 『台湾日日新報』

けふの催し

▲素人浄瑠璃会 午後六時より市内末広会館にて

□昭和2 (1927-07-21) 『台湾日日新報』

浄瑠璃会の延期

二十日夜、末広会館に於ける素人浄瑠璃会は都合にて延期すと

□昭和2 (1927-07-26) 『台湾日日新報』漢文版

挙地藏尊夏祭

新竹西門弘法寺。於廿四日。在寺裡举行奉誦法会及誦經。更於

下午六時起舉行地藏尊夏祭。七時起演出各種余興。有素人劇義太夫等。至十時告畢。

【昭和2 (1927-07-30)】『台灣日日新報』

素人淨瑠璃會

台北市素人淨瑠璃會では、来る三十、三十一の兩日、市内大同會事務所に於て、素人淨瑠璃大會を催す由

【昭和2 (1927-08-06)】『台灣日日新報』

淨瑠璃會 專売局養氣俱樂部にては、六日土曜の午後六時より

小南門俱樂部階上に於て、竹本勝玉師を招き、淨瑠璃會を開催する由。一般の來聴差支なしと

【昭和2 (1927-08-28)】『台灣日日新報』

素人淨瑠璃會

本二十七日、二十八日の兩日午後七時より柴町大同會事務所に於て、素人淨瑠璃會を催す由。來聴隨意

(二十七日)『儀作』(蘭玉)、『日吉』(錦糸)、『太十』(平和)、『壹坂』(光玉)、『菅四』(梅枝)、『陣屋』(茂登)、『紙治』(一声)

(二十八日)『鳴門』(筑水)、『日吉』(喜玉)、『太十』(竹司)、『柳

(小松)、『弁慶』(貴昇)、『忠六』(大路)、『酒屋』(柳枝)

台北唯一の劇場／榮座の大改変／名も共榮座と改め／経営者が代る

台北の榮座は今迄台灣劇場會社直営の下に營業して居たが、現下財界不況等のため欠損続き其の上小宮社長の辞意も固く會社側重役協議を凝した結果、賃貸をなし、確定的収入で欠損の整理することに決定したが、これを機とし篠塚永樂主人が借受けることとなり、本月二十日契約成立し、九月一日から共榮座と改名し、篠塚氏が経営することになった。尚同氏経営の料理屋喫茶店は今後家族に委せ、御大自ら劇場経営に専念従事する由、篠塚君なら適材適所と云ふべく、台北の民衆娛樂に一進展を見せて欲しいものである

榮座 初日以来満都の人氣を呼び、連日大入の連鎖劇中村かなめ一派は、謝恩興行として既報せし如く、二十六日正午から一座総出にて円山公園劍潭寺附近にて撮影せし、時代猛闘連鎖劇『孔雀の光』を二十八日より三十日まで三日間上演する

悲劇『御用船』三幕 情炎秘史『孔雀の光』四幕六場

【昭和2 (1927-09-23)】『台灣日日新報』

台中素人浄瑠璃大会

【台中電話】 台中の遊廓方面が中心となり、素人浄瑠璃同好者連が天狗会と称するものを組織し、竹本、豊澤両師を聘し、熱心に稽古中であつたが、来る二十三日の両日午後六時より台中座に於て、最初の素人浄瑠璃大会を開き、無料公開の上聞づらうと耳に達するさうである

昭和2 (1927-09-24) 『台湾日日新報』

義捐浄瑠璃会

【高雄電話】 長崎、熊本両県下の暴風雨並に嘉義地方の震災義捐金募集の為、高雄の有志相図り、近く素人浄瑠璃大会を開催すべく相談中である

昭和2 (1927-09-25) 『台湾日日新報』

送別浄瑠璃会

二十五、二十六、二十七日の三日間毎日午後七時から晴雨に拘はらず末広会館に於て斯界の重鎮住登氏夫妻内地帰還送別浄瑠璃大会を開催する由。ちなみに当日午後七時迄の来館者に限り、福引券を進呈す

昭和2 (1927-09-28) 『台湾日日新報』

台北の浄瑠璃会／二十八日夜／末広会館で
台北素義会主催の大串住登氏送別浄瑠璃会は、毎夜大入満員の盛況であるが、引続き二十八日も午後六時から、市内末広会館で、勝玉連総出にて花々しく最後の幕を開く相だ。語物は左の通り

『御祝儀』（入登）、『堀川』（勝玉勝好琴子）、『新口村前』（小金）、『日吉丸』（糸栄）、『玉三』（二枝）、『新口村奥』（綾登）、『紙治』（千房）、『壺坂』（まち子）、『忠四』（勝楽）、『酒屋』（三松）、『菅原』（住登）、糸（勝玉師）

昭和2 (1927-10-23) 『台湾日日新報』

素人義太夫大会 来る二十四、二十五両日午後六時より末広町末広会館に於て、素人連浄瑠璃大会を開催する

昭和2 (1927-11-12) 『台湾日日新報』 欄外記事

素人浄瑠璃会 十二、十三両日、午後六時より南門公会堂に於て、素人浄瑠璃会を開催する。一般の来聴を歓迎すると

法華宗御会式

来る十二月十三日、市内老松町三丁目本門法華宗立正閣では
先祖日蓮聖人会式法要を修行す。十二日は午後三時宝塔
除幕式、同六時法要、引続き余興として子供舞あり。翌十三日
は午後六時より説教あり。終つて素人浄瑠璃の余興あり。多数
の参会を希望すと

【昭和2 (1927-11-16)】『台湾日日新報』

高雄風水害義捐金／十四日発送済

高雄の長佐、熊本両県人会主催の長崎、熊本両県風水害並に
台南州下震災義捐金募集の素人浄瑠璃会収入は、七百七十一
円五十銭。此内から会場費、印刷費、花火代、其他一切の費用
を差引いて、残金五百三十円を左記の如く、十四日大坪与一氏
より、夫れ夫れ送付した

金二百十五円長崎県、金二百十五円熊本県、金百円台南州

【昭和2 (1927-11-26)】『台湾日日新報』

三玉連浄瑠璃納会

二十六、二十七両夜、午後六時より末広町末広会館に於て、三
玉連素人浄瑠璃納会を開催

【昭和2 (1927-12-01)】『台湾日日新報』

地方だより

嘉義
義太夫披露 嘉義君葉会主催、三吉野吉之助師披露浄瑠璃さら
へ会は、二十七、廿八の両日、消防組集会所にて開催され、盛
会を極めた

【昭和2 (1927-12-11)】『台湾日日新報』

台北みどり会／素人浄瑠璃会／あす北投に開催
台北みどり会連素人浄瑠璃会は、十二日午後六時から北投
筑前座新座敷にて、晴雨に拘らず開催する。多数の来聴を望む
と

【昭和2 (1927-12-12)】『台湾日日新報』

勝玉連浄瑠璃納会／末広会館で

台北市の勝玉連浄瑠璃納会は、十二、十三の両日、午後六時か
ら、末広会館に於て華々しく開催される。語り物は左の通り

『御祝儀』（入登）、『先代萩御殿』（勝子）、『新口村』（新喜楽千
勝）、『御所桜三段目』（竹のや糸栄）、『忠信道行』（掛合（忠信、
糸栄、静、まち子。竹のや、峰千代）、『野崎村』（幾久、まち子）、

『朝顔宿屋』（新喜楽千房）、『梅野由兵衛聚楽町』（綾登）、『十種香』（三松）、『加賀見山長局』（勝楽）、大切総掛『合壇浦兜軍記琴責の段』（捧澤、糸栄。岩永、綾登。重忠、三松。阿古屋千房。三曲、峰千代）

□昭和2（1927.12.13）『台湾日日新報』

末広館で開催する勝玉連の浄瑠璃会は十二日夜だけであると

□昭和3（1928.02.27）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会／廿六七両夜

台北みどり会にては、二十六、七日の両夜、午後六時から市内末広町末広会館で、浄瑠璃初会を催す。談り物左の通り

（二十六日）『御祝儀』（入登、『柳』（三能羽）、『忠六』（可笑）、『玉三』（三峰）、『合邦』（一徳）、『御所桜』（土口）、『妙心寺』（雷雀）、『日吉丸』（菅枝）

（二十七日）『御祝儀』（入登、『日吉丸』（三木）、『又助』（力士）、『白石噺』（千歳）、『阿漕』（美登志）、『炬燵』（鳳玉）、『忠四』（艶司）、『沼津』（琴馬）、（三味線）千歳、大力、千代寿、（後見）鶴澤亀助

□昭和3（1928.04.29）『台湾日日新報』

送別素人浄瑠璃会

二十九、三十日の両日、午後六時より台北市末広会館に於て、大路氏送別浄瑠璃大会を開催すると。両日の番組左の如し

【二十九日】『酒屋』（三松）、『棚ヶ先』（梅枝）、『弁慶』（三峰）、『二度目』（綾登）、『先代御殿』（錦糸）、『又助内』（多美次）、『志度寺』（大路）、『皿屋敷』（組次）

【三十日】『又助内』（三光）、『日吉』（貴昇）、『鈴ヶ森』（平和）、『沼津』（竹司）、『玉三』（二枝）、『赤垣』（大路）、『弁慶』（艶司）、『酒屋』（柳枝）

□昭和3（1928.05.05）『台湾日日新報』

送別浄瑠璃 来る五、六日午後六時より、栄町大同会事務所に於て、大路氏送別浄瑠璃大会を開くと

尚武義太夫会／聴衆には福引進呈
五日より三日間、毎夜午後六時より、市内本町一六軒隣り常盤生命保険会社三階に於いて、鶴澤亀助師及び高雄東京堂後見で尚武義太夫会を開催するが、入場無料。午後七時半迄の来場者には福引券を進呈。同夜直ちに品物と引替へるとの事で、

多数の来聴を希望すると

□昭和3 (1928.05.18) 『台湾日日新報』

名披露浄瑠璃大会

京阪地方にて名声ある鶴澤亀助師を招聘せる台北鶴亀会は、当十八、十九、二十の三日間、正六時より晴雨に拘らず、末広町末広会館に於て、各連の応援を得て名披露浄瑠璃大会を開催する。時間履行に付、早くから来聴を希望すると

□昭和3 (1928.06.09) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

九日午後六時より、南門公会堂に於て、素人浄瑠璃研究会を開催する。多数御来聴を希望すると

□昭和3 (1928.07.07) 『台湾日日新報』

浄瑠璃大会／今明両日

台北の浄瑠璃師匠、勝玉連の浄瑠璃大会は、七、八の両日、午後六時から台北末広町の末広会館で開催する

初日の語りものは『二十四孝』、『紙治』、『棟木の由来』、『吉日三段目』、『酒屋』、『太十』、『御所三』、『判官切腹』大切総掛合

『堀(堀川カ)』で、八日は、『鈴ヶ森』、『新口村』、『壺坂』、『太十』、『阿波鳴戸』、『合邦』、『宿屋』、『日吉丸三段目』、『寺子屋』、『忠臣蔵』大切総掛合『帯屋』で、千房、まち子、千勝なども加入して居る

□昭和3 (1928.07.20) 『台湾日日新報』

素人義太夫会

台北みどり会では二十一日午後六時半から、末広会館に於て、義太夫会催す由。多数の来聴を希望すると。語物左の通り

一、『又助住家之段』(一徳)、一、『合邦ヶ辻』(鳳玉)、一、『阿波鳴門』(千成)、一、『忠臣蔵四段目』(艶司)、一、『太功記妙心寺』(雷雀)、一、『三勝半七酒屋之段』(相生)、一、『忠臣蔵勘平腹切』(菊水)

□昭和3 (1928.09.25) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

二十五日午後正六時より、南門公会堂に於て、勝玉連浄瑠璃例会を開催。語り物左の通り

『御祝儀』(入登)、『酒屋』(梅玉)、『忠四』(勝栄)、『鳴門』(竹

の家竹吉、『先代』（幾久万知子）、『松王屋敷』（綾登）、『朝顔』

（三光）、『壺坂』（三松）、『合邦』（美登志）、糸（勝玉）

□昭和3（1928.10.05）『台湾日日新報』

長唄や義太夫の西洋音楽的独唱／永井郁子さんの新しい試み／
伴奏は杵屋佐吉君の三味線

【東京特電四日発】日本歌謡の大衆進出に精進してゐる永井郁

子さんは、先に伴奏楽器もピアノの代りに尺八、琴をつかひ
立派に成功を取めたが、今度更に長唄と義太夫の西洋音楽的
独唱を試みやうと思ひついて研究中である。この伴奏は義太夫

は太棹を、其他も皆三味線によるものである。三味線にはこの
方面の新人杵屋佐吉君に諮つたところ、二つ返事でやりませう

といふことで、先づ長唄の手ほどき「よいやまち」を手がける

ことになつたが、この十二月ごろには『勸進帳』や『道成寺』

を郁子さんがステージに立つて独唱し、佐吉師が椅子に腰かけ

て伴奏するといふ。佐吉師は語る

日本音楽は声よりし、節廻しに重きを置くから、直に声がかれ
たり、くづれたりします。そこで長唄を西洋式の発声法でやる
と、裕とりがある異つたものができて面白からう。在来の日本
音楽の改作するのは反対する人があるかも知れぬが、屹度改

良されると思ひます

□昭和3（1928.10.11）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会 十一日午後六時半より、栄町大同会事務所に
於て、素人浄瑠璃会を開催する

□昭和3（1928.10.14）『台湾日日新報』

鶴亀浄瑠璃会
同会では十四、十五の両日、午後六時から台北南門公会堂にお
いて大会を開催するが、多数の来聴を歓迎すると

□昭和3（1928.11.23）『台湾日日新報』

素人義太夫会／来る二十三日午後六時より本町常磐生命保険
会社三階に於いて素人義太夫会を開く

二十四日から正式放送 Ⅱ台北放送局発表Ⅱ

ラヂヲファンお待ちかねのゼーエフエイケイ放送の中継ぎ放送
は、機械の故障や施設不完備の為、永らく試験中にあり、それ
も最近では中絶されて礪石セツトの失望、やる方々もあつ
たが、二十二日夜の放送試験の結果、好成績を納めたので、

二十三日夜、今一度試験の上、二十四日夜より愈々正式に放送する旨、昨夜放送局から発表した

□昭和3 (1928.12.08) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会 八、九両日、午後六時より、台北檢番樓上に於て、故井野氏追善を兼ね、勝玉連浄瑠璃納会を開催する。多数の来聴を歓迎すると。語り物は左の通り

〔初日〕『御祝儀』（入登）、『新口村』（友鶴）、『岸姫』（竹の家内竹吉）、『野崎』（万知子）、『安達』（綾登）、『百度平』（三松）、『寺子屋』（寿玉）、『本下』（勝榮）

（二日目）『御祝儀』（入登）、『酒屋』（梅玉）、『十種香』（三松）、

『先代』（錦糸）、『油屋』（美登志）、『忠四』（勝榮）、『梅忠』（千勝）、『朝顔』（千房）、『太十』（翠香）

□昭和3 (1928.12.15) 『台湾日日新報』

万華浄楽会納会／頗る賑ふ

勝玉師匠について居る万華浄楽会では、十四日午後二時から万華女紅場で、今年の納会を開いたが、竹の家の竹吉、幾久の万知子、新嘉楽の千房も加入し盛会であつた

素人浄瑠璃会

当十五、十六両日、午後五時より、ホテル横裏日の丸会館に於て、鶴亀連浄瑠璃納会開催する。成るべく多数の来聴を望むと。語り物左の通り

▲初日『御祝儀』（入登）、『鳴戸』（三能羽）、『忠六』（松風）、『布四』（琴馬）、『炬燵』（鳳玉）、『忠四』（艶司）、『白木屋』（和楽）、切掛合『野崎村』

▲二日目『御祝儀』（入登）、『弁慶』（松風）、『合邦』（三次）、『梅由』（千歳）、『妙心寺』（雷雀）、『沼津』（菊水）、『酒屋』（相生）、切掛合『本蔵下屋敷』（糸）大力千歳

□昭和4 (1929.01.19) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会 当十九、二十両日、午後六時より明石町鉄道ホテル裏横、日の丸会館に於て、菊水氏送別鶴亀連浄瑠璃会開催する

『御祝儀』（入登）、『鳴戸』（三能羽）、『酒屋』（松風）、『忠六』（土口）、『合邦』（鳳玉）、『松王屋敷』（艶司）、『沼津』（和楽）、『先代秋』（千歳）、『寺小屋前』（菊水）、『油屋』（雷雀）、大切掛合『本蔵下屋敷』『寺小屋』（総出）（糸）大力、千歳

□昭和4 (1929.01.19) 『台湾日日新報』

中村鴈治郎の『阿波十郎兵衛』／今夜六時半から二時間／大阪放送局より全国放送

▲午後六時二五分 (大阪放送局より有線中継にて全国に放送)

放送舞台劇

『阿波十郎兵衛』

(二幕四場)

中村鴈治郎

序幕開始

▲午後七時一四分

序幕終了

(大阪中継幕間台北放送局よりレコード放送)

▲午後七時三五分

第二幕開始

▲午後八時三五分

第二幕終了

阿波十郎兵衛について

▲大阪中座の中村鴈治郎一座の有線中継は、予ねて本紙上に報道した如く、大阪放送局が三年來の懸案であつて、広江常務、煙山放送部長、松竹の白井社長、今井人事部長らの斡旋諒解の

下に放送するに至つたものである。成駒屋鴈治郎が六十八歳の高齢ながら老練さを示す大がかりのものである

▲『阿波十郎兵衛』は、明和五年六月一日即ち今から略二百六十年前大阪竹本座で興行せられ、近松半二外四名の合作。筋は阿波の国牧野郡宮島浦の庄屋の十郎兵衛の説話と、姫路の大名榊原式部大輔政峰といふ人が、十代目高尾の色香に溺れ、太夫を身受けした一件と。かの近松門左衛門の作。夕霧伊左衛門の情事との三つを巧みに組んだものである

▲ポイントは順礼歌の段。阿波十郎兵衛夫婦が主人に対する勘気に許しを得んものと、家宝国次の名刀を詮議するため「よしあしを何と浪花の玉造」あたりに浪人し、辻強盗となり、遂に夫婦は熊野路に落行く。そして所謂とんどろ大師(ママ)に於てお鶴とお弓との邂逅になる、心して聞くものは一掬の涙なきを得ない

JPAK (十九日)

▲午前十時三〇分

家庭料理講座 (笹倉定次)

(西洋料理献立、六人前宛)

【放送内容省略】

▲午後八時四五分

絃索四重奏【演目省略】

義太夫『日吉丸』 台北検査芸妓竹吉、三味線竹本勝玉師

島内各地天気実況、天気予報、ニユウス、明日のプログラム

□昭和4 (1929.01.20) 『台湾日日新報』

けふの催し

△素人浄瑠璃会 午後六時より於鉄道ホテル裏日の丸館

□昭和4 (1929.01.25) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃大会

市内、素人浄瑠璃同好者の春季大会が本二十五日から六、七の三日間、毎日午後六時開始で、本町常盤生命楼上で催される語物は

▲二十五日『日吉丸』、『沼津』、『阿漕』、『梅由』、『香掛』、『儀作』、『御殿』

▲二十六日『本下』、『鳴戸』、『日吉丸』、『酒屋太十』、『岸姫』、『玉三』、『志度寺』

▲二十七日『菅四』、『太十』、『忠六』、『合邦』、『又助』、『儀作』、『弁慶』

□昭和4 (1929.02.02) 『台湾日日新報』

先代追善のため来台した四代目大隅太夫／一日各方面へ挨拶廻り

大正二年来台、各地巡遊中、台南に於て病を得、惜くも其地に客死した三代目竹本大隅太夫の第十七回忌の法会を営む可く、当時師匠と行を共にし遺骨を携へ帰国し、其後四代目大隅太夫を襲名した当時の静太夫が、鶴澤道八、其他の一門を引連れ、三十一日の船で来台し、一日各方面を歴訪したが、四、五、六、七の四日間、楽々園に於て開催される台北義太夫会主催の追善義太夫大会に応援出演する事となつた。尚当時大隅太夫の遺言を預つて帰阪した今井梅軒氏が同伴来台。万般の世話を焼て居るが、四代目大隅太夫の来台と云ふ段取をつける迄には中々苦心したと談つて居たが、大阪でも近く三代目の追善興行をやるので、その結果兎に角終焉の地で、法会を営むのが当然であらうと云ふので、松竹でも承知したものであると大隅太夫に感想を叩けば謙遜しながら

十七年ぶりに参りましたので、すべてのものがころりと變つて居ります。町の立派になつた事も驚く許り。それに各方面の方々から予想以上の御後援を戴きまして、誠に有難く思つて居ります。何分この上とも御後援と談つて居た

【写真】来社せる大隅太夫の一行

□昭和4 (1929.02.05) 『台湾日日新報』

楽々園 市内楽々園に於ける追善義太夫大会、二月五日の二日目 語物は

一、『御祝儀』(隅寿太夫)、一、『忠六』(隅尾太夫)、一、『鳴戸』(三能羽)、一、『又助』(三峯) 一、『酒屋』(三笠) 一、『聚楽所』(千歳) 一、『松屋敷』(綾登) 一、『玉三』(綱次) 一、『妙心寺』(雷雀) 一、『先代萩』(源平太夫絃金弥) 一、『合邦』(隅榮太夫絃道造) 一、『布四』(竹本大隅太夫、絃鶴澤道八) 此中『布四』は大隅の最も得意とするものにして、絃の妙手道八の絃は聴客をして必ずや激賞せしむるものあらん

□昭和4 (1929.02.06) 『台湾日日新報』

追善義太夫大会／大隅太夫を聴く
三代目大隅太夫の追善義太夫大会が、愈々四日から楽々園に開催された。開場定刻前早くも楽々園は大入満員。身動きも出来ぬ有様。あ、狭いナーと云ふ感は誰もが抱いたことであつた。それに御客の大半が中年以上、モガやモボの姿は葉にしたくも見えないのは、時代の反映か。素人連は二十分宛で新陳代謝。八時半迄に此方は終つて、いよいよ源平太夫の『白石嘶』が始まる。艶のある美声。力士としてよりは太夫と

しての存在が認められた。お客も茲で溜飲が下つたと見え、やんやの喝采、次いで隅榮太夫の『本下』も悪からう筈がなく、愈々最後が大隅太夫の『壺坂』。絃は道八師。「夢か浮世か浮世か夢か」の語り出しからが普通の行き方と違つて、大きく声を張り上げ、まづ聴衆の度肝を奪つて場内水を打つたやう。次第にひき入れられて恰も夢心地。絃の妙手も感嘆の外なく、流石に関西に覇を唱へるだけはあると思はせた。兎に角台湾では二度と聴けぬ聞き物と推賞するを憚らぬ

【挿絵「落款「するは」？」】楽々園スケッチ 大隅太夫 道八師

楽々園 大隅太夫出演の追善義太夫大会、初日は七時半に大入満員の盛況にて、身動きも出来ない入であつた。三日目の語物として二月六日の出演ものは

一、『御祝儀』(隅寿太夫)、一、『朝顔』(隅尾太夫)、一、『忠四』(和楽)、一、『太十』(新) 一、『本下』(美登志)、一、『御所』(竹司)、一、『三日丸』(艶司)、一、『儀作』(菊水)、一、『酒屋』(源平太夫、絃金弥)、一、『日吉丸』(隅榮太夫、絃道造)、一、『菅四』(竹本大隅太夫、絃道八)

絃は呂玉、大力、小菊、千代寿、勝玉などが勤めるが、大隅太

夫の『菅四』と云へば、文楽に於ても現在にては此大夫以上に語り得るものなしと云ふ定評あるもので、定めし聴客は底力ある大隅の語りと、道八の絃の妙手に酔はさる、ならん

□昭和4 (1929.02.07) 『台湾日日新報』

追善義太夫会／千秋楽の語物

毎夜大入満員の盛況を見つ、ある楽々園の追善義太夫大会も、愈々七日を以て千秋楽と云ふことになつて居る。其語物は

一、『御祝儀』(隅寿太夫、一、『忠三』(隅尾太夫)、一、『菅四』(二口)、一、『玉三』(一枝)、一、『忠六』(巴)、一、『鳴戸』(小松)、一、『酒屋』(相生)、一、『御殿』(大路)、一、『忠四』(勝栄)、一、『酒屋』(源平太夫、絃金弥)、一、『又助』(隅栄太夫絃道造)、一、『堀川』(竹本大隅太夫、絃道八)

大隅太夫が語物の中、最も十八番とする『堀川猿廻し』を語るが、絃の道八とツレの金弥の絃との呼吸は、必ず絃の妙味を聴かすことならん。建碑式は雨天の為め十日と云ふことになつたさうだ。それを終つて十一日朝、台南に向け出発し、南部巡演二十日基隆で開演の予定であると

□昭和4 (1929.02.09) 『台湾日日新報』

大隅太夫歓迎会／昨夜梅屋敷に

今回大隅太夫の來台せるを好機とし、台北紳士の浄瑠璃に興味を有する人々は倉岡台北医院院長、鼓弁護士、辻本山下支店長其の他計十名あまりの發起にて、八日午後六時より梅屋敷に於て歓迎宴を催ほした。先づ同家大広間の西寄に床をしつらへ、後ろい金屏風を廻し、百目蛸燭をともして全く浄瑠璃の舞台となし、大隅太夫及び糸の鶴澤道八氏着座するや、辻本氏立つて一場の挨拶を為し、それより大隅太夫は「菅原伝授手習鑑寺小屋の段」を語つた。語り手もひき手も、素より文楽座の一流中の一流として悪からう筈なく、武部源蔵夫婦の苦心から松王丸の首実験、松王夫妻の悲歎場など、如何にも真に迫るは言はずもがなで、一座の人々唯だもううボーツとして魂を奪はる、ばかりであつた。大喝采の裡に語り終るや否や宴を開き、大隅太夫と道八氏両氏を主賓として種々芸談等に花を咲かせ、午後九時半盛會裡に参会したが、当夜の出席者は豊田、丸茂両局長、高橋知事、高木、河村、三好諸氏、その他六十余名で、近來稀に見る興味深き会合であつた

養気倶楽部浄瑠璃大会

専売局養気倶楽部では、来る十日午後一時から小南門倶楽部に於て、大隅太夫、鶴澤道八師を招き、浄瑠璃大会を開くこと、なつた

□昭和4 (19290210) 『台湾日日新報』

嘉義でも大隅太夫／十二日開催

【嘉義電話】 嘉義街内同好者の主催により、会員組織の下に十二日午後五時より、嘉義座に於て、三代目大隅太夫追善浄瑠璃会を開催するが、会員二券は松本金物店、岡村理髮店、朝日堂菓子店の三箇所にて発売し、当夜の語物は次の通りである

『傾城恋飛脚新口村の段』 隅寿太夫、『思臣蔵六段目勘平切腹の段』 隅尾太夫、『三勝半七酒屋の段』 源平太夫、『菅原伝授手習鑑寺小屋の段』 隅恵太夫、『絵本太閤記十段目尼ヶ崎の段』 大隅太夫

屏東から

▲大隅太夫来るッ。先づ素義連が甦へつた沢市のやうに、有難や有難や。堂摺連は「待つてましたッ」が、さあ御聴きに達します場所の段になつて、劇場は支那芝居で空かず図書館、と

言つても屏東のは名だけで、実は公会堂だが▲其れにしてもデデンチンデデン、チンチンチンチンチンチンて彼の微妙な音律をコンクリーの高天井周囲は悉く硝子窓では釣合が取れない計りでなく、折角の絃も節も咽喉も台なし、と言つて他に適當な場所で思案投げ頸脛、計り▲を耳にした龍楫消防組長「諾ッ俺れが引受けてやらう」で其の経営の料亭井筒の公休を日延て、十四日は大広間を開放となつて遙々頼つて来た此一行を此の土地で抱擁する事が出来、久しく潤はなかつた此の種の大ものに依つて、人々も情想味に浸られ得ると言ふもの

□昭和4 (19290217) 『台湾日日新報』

大隅太夫一行の奉仕的義太夫会／台北市の社会事業助成会基金募集を援助して

今回台北市に台北市社会事業助成会が組織され、その基金を汎く募集することになつたが、文楽座附大隅太夫、鶴澤道八師が目下来台中なるのを好機として、早速援助方を相談した所、両師は社会事業の意味に於て喜んで出演することになつた。之れがため台北市社会事業助成会では同会主催台北市社会課後援の下に両氏の帰北後、二日乃至三日義太夫大会を開催することに決定し、素人も多数出演する模様である

□昭和4 (1929.02.21) 『台湾日日新報』

大隅太夫一行社会奉仕／共楽座で義太夫会

既報の台北市社会事業助成会主催大隅太夫、鶴澤道八師出演の義太夫大会は、二十三日(土)、二十四日(日)の両夜共楽座に於て開催することに決定した。此催しは今回成立を見た台北市社会事業助成会の基金募集の意味に於て企てられたもので、大隅太夫一行は特に奉仕的に出演する運びに至つたもので、入場料は青券二円、白券一円である。而して此会は台北市方面委員、台北市社会課の後援になつてゐる

ウエルカム

▲大隅太夫の返り興行を、又も狭い場所で行るのは太夫を侮辱するものだ。是非共楽座でやつてほしい(熱狂生)

□昭和4 (1929.02.23) 『台湾日日新報』

大隅太夫義太夫大会／廿三日語物

台北市社会事業助成会基金募集を援助する大隅太夫一行の義太夫大会は、二十三日、二十四の両日、愈々共楽座に於て開催する、が、初日の語り物左の通り

一、『恋娘昔八丈、お駒才三鈴ヶ森の段』、竹本隅寿太夫、糸鶴

澤道造

一、『御所桜堀川夜討三 弁慶上使の段』、竹本隅尾太夫、糸鶴澤金弥

一、『加賀見山田錦絵草履打の段』、竹本源平太夫、糸鶴澤金弥

一、『生写朝顔日記宿屋の段』、竹本隅栄太夫、糸鶴澤道造

一、『撰州合邦ヶ辻合邦内の段』、竹本大隅太夫、糸鶴澤道八掛合

一、『義経千本桜道行の段』、静御前、竹本隅栄太夫、忠信、竹本隅尾太夫、糸鶴澤金弥、同道造

□昭和4 (1929.02.28) 『台湾日日新報』

基隆の浄瑠璃塚／次回大隅太夫の一行が／人形を携へて再渡台の際／除幕式を行ふ筈

【基隆電話】二十六日基隆座に開催された大隅太夫一行の義太夫会は、談り手が談り手の上に肝入が明比実平、松田消防の両顔役とあつて同座未曾有の盛況を呈した。因に同日は年こそ異なれ、基隆義太夫界の草分け明比実平氏の前代と日本亭先代足利藤吉氏の命日に当るので、大会肝入役の明比家当主実平氏は先代を思ふ孝心から、基隆で物故した義太夫友達の遺族を語り、吾妻の故中根幸太郎、広木組故広木秋太郎氏、それに

故三代大隅太夫を併せ、供養を意味する浄瑠璃塚を久宝寺境内に建設する事とし、義太夫大会当日夕刻、実平氏施主となり、予定地に仮塚を立て、久宝寺小林老師を導師とし、日蓮宗堀部老師も立会ひ、大隅太夫一行各遺族及故人の知己と共に読経焼香して、懇にその霊を弔つたが、大隅太夫もこれは浄瑠璃道の美拳だとして、その主唱者に感激し、この次には人形を携へて再び渡台するから、その節改めて自ら本塚の除幕式を挙げたいと約束したと

英皇帝御名代の宮の旅情を御慰め申すべく／歌舞伎や鮎漁を御覧に入れる準備中／大阪では文楽へ御案内

【東京特電 二十七日発】 英国皇帝陛下の御名代として、五月二日御来朝になるグロスター公殿下の御接伴については、既に接伴委員も仰せつけられ、宮内省 陸海軍、外務省英国大使館等に於て、御入京より八日間国賓としての御接伴をはじめ、日光、箱根及び関西地方御遊覧のプログラム等、作成中であるが、宮内省山県儀式課長、英国大使館デビンソン氏と打合せの結果、東京御滞在中の一夕、我歌舞伎劇をも御覧に入れる予定で、帝劇が歌舞伎座か、その狂言によつて何れかを台覧遊ばさる、事になるであらう。その外毎年宮内省で行はれてゐる古風

な狩猟の内鴨猟は既に時期が後れるので出来ないが、五月一日に鮎漁が解禁となるから、関西地方へ向はせらる、砌り長良川の鮎漁を遊ばされる事に内定し、大阪では日本名物の文楽を御覧になるであらう

※義太夫ではないが参考記事二本

歳悦師匠引退披露／準備進む

台北検査常磐津師匠歳悦の引退披露興行は、三月七日午後五時から共楽座で、華々しく蓋を開けるが、当日の出演者は台北検査芸妓多数と、万華よりさだ、だるま、千代子の三妓が加入し、目下其稽古の為に検査楼上は賑つて居るが、決定した演しものは

『子宝』、『夕月』、『将門』、『栗餅』、『松島』、『辰橋』、『うつば』、『素囃子』、『新浦島』、『三保の松』、『元禄花見踊』で、『うつば』、『三保の松』は番外で、出演者は古老株に成る梅の家、日本亭松竹、小永楽、児島、薦喜楽、中惣竹富つねの各女将が久し振りに腕を見せるさうだ

共楽座 浪花節五座長大会は相変らず好人気、三日目二十七日の説物と出番、左の通り

『大石江戸探り』（菊一文字）『慶安武士続き』（福造）、『兄弟の真心』（綾子）、『名優澤村淀五郎』（虎吉）、『陸奥と伊東』（一声）

尚、人気投票高は昨夜までの締切

一番目（虎吉）二一九九票、二番目（一声）二一〇三票、三番目（菊一文字）一七二六票、四番目（福造）一五〇七票、五番目（綾子）一三三四票

□昭和4（1929-04-11）『漢文台湾日日新報』

浄琉璃会

台中天狗会。主開之浄琉璃大会。去八日夜公開於台中座。入場者頗多。

□昭和4（1929-05-11）『漢文台湾日日新報』

素人浄琉璃会 十、十一両日午後六時より、南門公会堂に於て勝玉連浄琉璃会を開催するから、多数の来聴を希望すると

□昭和4（1929-06-02）『台湾日日新報』

素人義太夫 台北市素人義太夫睦会では、一日午後七時から南門公会において、同会連中のさらひ会を催すと。尚芸題は左

の通り

『三十三間堂柳』、『太功記十尼ヶ崎』、『菅原寺子屋』、『三勝半七酒屋』、『太功記孫市切腹』、『二度目清書寺岡切腹』、『撰州合邦ヶ辻』、『国姓爺合戦』

□昭和4（1929-06-03）『台湾日日新報』

素人浄琉璃会 台北市の素人浄琉璃天狗連は三日、四日、五日の三日間毎夜六時から、市内本町常盤生命三階に於て、浄琉璃会を開催する。傍聴無料

□昭和4（1929-06-19）『台湾日日新報』

素人義太夫会／聴衆へ福引

台北万華共立検査後援の素人義太夫会は、十九日午後六時から、女紅場で開くが、当日の来聴者は四百五十人に対し福引券を出すさうで、一等は白米一俵以下、十等まで、多数の来聴を希望して居るが、語りものは

『忠三』、『木下酒屋白石嘶』、『弁慶』、『玉三』、『二十四孝合邦岸姫寺子屋』、『源藏生立』、『堀川』

で幾久のまち子、竹の家峰千代なども応援して居ると

□昭和4 (1929-07-10) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会／十、十一両日

台北の素人天狗連相会し、十、十一の両夜六時から楽々園に於て、素人浄瑠璃会を開くと。入場無料。読物は左の通り

十日『宿屋』（三峰）、『合邦』（貴昇）、『忠六』（可笑）、『松王』（綾登）、『百度平』（竹司）、『酒屋』（三松）、『沼津』（二声）

十一日『亦助』（三木）、『酒屋』（土口）、『宿屋』（小松）、『梅由』（梅玉）、『忠四』（美登志）、『忠六』（菅枝）、『合邦』（宝珠）、

『菅四』（組次）

□昭和4 (1929-07-24) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

台北義太夫連の若手同志が魁倶楽部を創立し、其第一回浄瑠璃試演会を、二十四日午後六時から楽々園に於て開く由。入場無料。語り物左の通り

『忠三落合』（綾子）、『壺坂』（光玉）、『弁慶』（稔）、『太十奥』（翠香）、『鈴ヶ森』（勝司）、『寺小屋』（寿玉）、『又助』（三木）、『阿漕』（客員美登志）、『伊勢音頭和洋合羽』（全員）、糸（勝玉）、千代寿、美汀子、光玉

□昭和4 (1929-08-31) 『台湾日日新報』

基隆の義太夫及三曲演奏会日取

【基隆電話】基隆在郷軍人分会主催、基隆振出の台北基隆合同素人名人義太夫及三曲演奏大会は、三十一日と九月一日の両日基隆座で開催の筈の所、九月一日は震災記念日なるを以て遠慮し、三十一日限りとすることに變更した

□昭和4 (1929-09-01) 『台湾日日新報』

関西浄瑠璃会の重鎮

來台せる 竹本越名太夫（右から二人目）

鶴澤寛市（右端）

其他の一行六日初日を出す筈

【両名含め4名の写真入り】

□昭和4 (1929-09-06) 『台湾日日新報』

越名太夫／浄瑠璃会／六日楽々園で

六日より九日まで四日間、台北末広町楽々園にて開催する文楽竹本越名太夫一行の浄瑠璃会、初日語り物左の通り

『御祝儀』（入登）、『白木屋』（如楽（和楽力）、『太十』（翠香）、『二の谷』（一星）、『新口村』（松島屋愛丸）、『本下』（千歳）、『炬

燧』（鳳玉）、『寺子屋』（竹本龜太夫、三味線野澤吉左）、『酒屋』

（竹本越名太夫、同鶴澤寛市）

□昭和4（1929.09.13）『台湾日日新報』

新竹

新竹の浄瑠璃△△△△△竹本越名太夫一行の新竹に於ける浄瑠璃大会は

十二日午後六時から新竹座にて開演さると

□昭和4（1929.09.21）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

台北素人浄瑠璃天狗連は二十一、二十二の兩日午後六時から

市内南門公会堂に於て晴雨に拘らず浄瑠璃会を開くと入場
無料、語物左の通り

（初日）一、『御祝儀』（入登、一、『日吉』（静、糸甫）、一、『播

皿』（光玉、糸同人）、一、『忠六』（可笑、糸甫）、一、『亦助』（三

木、糸光玉）、一、『太十』（斗志男、糸甫）、一、『酒屋』（土口、

糸甫）、一、『合邦』（鳳玉、糸甫）

（二日目）一、『御祝儀』（入登、一、『壺坂』（光玉、糸同人）、

一、『亦助』（可笑、糸甫）、一、『御殿』（三木、糸甫）、一、『弁

『玉三』（静、糸光玉）、一、『仕度寺』（志度寺）（一声、糸呂玉）
高雄の越名太夫

【高雄電話】高雄素人義太夫連の後援で十九日夜高雄館で開演

された越名太夫の浄瑠璃は、素人連も加はり殊に大隅以来の聴
物として開演前から聴衆は詰かけ大入の盛況であつた

□昭和4（1929.10.05）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃大会／南門公会堂で

来る十月五、六兩日、午後六時より市内南門公会堂に於て素人
浄瑠璃大会を開催する由。語り物左の通り

（五日）『堀川』（富士）、『太功記十』（三光）、『太功記奥』（南玉）、
『阿漕浦』（菊水）、『合邦口』（竹司）、『合邦奥』（菅枝）

（六日）『三勝半七』（竹司）、『日吉丸』（平和）、『宗五郎内ノ段』
（菊水）、『梅ノ由兵衛』（梅玉）、『菅原四』（綾登）、『壺坂寺』（一
声）

□昭和4（1929.11.03）『台湾日日新報』

台北素人浄瑠璃会

台北素人浄瑠璃会では十二月二日午後六時から、本町常盤

生命三階に於て、高雄の江崎夫人〔歓迎力〕浄瑠璃会を開催する
ると

□昭和4 (1929.11.06) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会 五日午後六時より本町常盤生命三階にて甫、
呂玉の糸にて、左の番組にて、開演多数来聴を希望すと

△『御祝儀』(入登)、『鈴ヶ森』(平和)、『太十奥』(斗志男)、『日
吉』(梅玉)、『朝顔』(小松)、『酒屋』(土口)、『太十』(一玉)、
『忠三』(菅枝)

□昭和4 (1929.11.10) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会 十一日午後五時より台北南門公会堂に於て北
投台北合同素人浄瑠璃会を開催するに付、多数の来聴を歓迎す
と。其語り物左の通り

『御祝儀』(入登)、『鳴門』(美能羽)、『先代萩』(北投松助)、『八
陣』(同音丸)、『白石揚屋』(同愛丸)、『■■■』(同一鳳)、『日
吉丸』(同一星)、『酒屋』(雷雀)、『赤垣』(和楽)

※演目一ヶ所不明。一字目は「安」に似る。二字目は「錦」「越」
「鶴」か。

□昭和4 (1929.11.16) 『台湾日日新報』

素人義太夫納会

十六、十七両日市内本町常盤生命保険会社の三階にて、毎夜六
時より鶴澤一平連義太夫納会を開き■■■■〔午後力〕七時迄に
来場の方には福引券進上■■〔同力〕夜金品進呈、■■■■■■
■■入場無料で同好一統の■■■■〔来聴力〕を■■■■■■〔希望すと
力〕※不鮮明につき判読困難

□昭和4 (1929.12.04) 『台湾日日新報』

義太夫納会

大力連義太夫納会は、四日午後六時より末広町楽々園にて開演
することになった。番組は左の如く。多数来場を希望すと

『御祝儀』(入登)、『酒屋』(千歳)、『太十』(三能羽)、『壺坂』(嘯
月)、『合邦』(艶司)、『弁慶』(雷雀)、『布四』(琴馬)、『寺子屋』
(和楽)、大切掛合『本蔵下屋敷』(連中)、三味線大力師

□昭和4 (1929.12.08) 『台湾日日新報』

義太夫睦会納会

三吉野師一派の睦会義太夫納会は、南門公会堂で七、八両日
開催さるが、八日の番組は左の如くで、多数来聴希望

▲『宝入船』（入登）▲『太功記孫市切腹』（七二八）▲『同尼ヶ崎』（嬰木）▲『寺子屋』（五色）▲『酒屋』（南枝）▲『百度平住家』（三石）▲『安達三』（琴馬）、三味、三吉野連中

□昭和5（1930.1.23）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会 素人浄瑠璃会は二十五、六両日午後六時から、南門公会堂で開催する語り物は、左の通りである

一、『梅の由兵衛』綾登 一、『御所桜三』平和 一、『合邦辻』宝珠 一、『太功記十』梅玉 一、『岸の姫松』竹司 一、『三勝酒屋』土口 一、『堀川猿廻し』貴昇 一、『勘平切腹』菅枝 一、『太功記十』南玉 一、『松王屋敷』綾登 一、『鈴ヶ森』栄枝 一、『赤垣源蔵』菊水 一、『朝顔日記』小松 一、『三十三間堂』美登志 一、『合邦辻』一声 一、『志度寺』大路 一、『寺小屋』三松 一、『日吉丸』竹司、（三味線）一、呂玉 一、甫 一、麗子 一、栄枝 一、美玉 一、小菊 一、千代寿

□昭和5（1930.2.16）『台湾日日新報』

素人義太夫会／十五、十六の両日午後正六時より南門外公会堂にて素人合同義太夫会を時間厲行で開演するから、多数の来聴を希望すると

□昭和5（1930.3.08）『台湾日日新報』

睦会浄瑠璃会 三吉野浄瑠璃会では本月八、九の両日午後六時より、南門公会堂に於て、素人浄瑠璃会を左の番組で開催する由、多数の来聴を希望すると

（八日）『佐倉宗五郎』七二八、『菅原寺小屋』五色、『弁慶上使』嬰木、『酒屋』南枝、『加賀見山又助』多美治、『日蓮記勘作』琴馬、『お駒才三』白木屋三吉野

（九日）『岸の姫松』南枝、『太功記十』嬰木、『すし屋』友鶴、『三十三所壺坂』嘯月、『阿波鳴戸』五色、『太功記杉の森』七二八、『お俊伝兵衛』藤司、『お染久松質店』三吉野

□昭和5（1930.4.20）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会／南門公会堂で

浄瑠璃三玉師匠門下一同は、来る二十、二十一の両日午後六時半より、南門公会堂に於て素人浄瑠璃大会を催す由で、多数来聴を希望すと、語り物左の如し（抽籤に依る）

▲二十日『揚屋』（千歳）、『菅四』（南玉）、『酒屋』（梅玉）、『日吉』（艶司）、『太十』（三石）、『沼津』（竹司）、『赤垣』（大路）、『野崎』（柳村）、『合邦』（一声）

▲二十一日『太十』（竹司）、『宿屋』（鳳玉）、『先代』（土口）、

『赤垣』（菊水）、『儀作』（蘭玉）、『陣屋』（宝珠）、『弁慶』（貴昇）、
『菅四』（組次）、『本蔵』（和築（和楽力）） ▲糸三玉、呂玉、甫、
千歳、栄枝、美玉、麗糸

□昭和5（1930-05-31）『台湾日日新報』

浄瑠璃大会／三吉野睦会浄瑠璃会では五月三十一日、六月一日
の二日間、毎日午後六時より、南門公会堂に於て左の通り会員
浄瑠璃会を催す由、多数の来聴を希望すると

（三十一日）『御祝儀宝の入船』（可祝）、『御所桜弁慶上使』（嬰
木）、『菅原寺小屋』（五色）、『岸姫松飯原館』（南枝）、『忠臣二
度目清書』（嘯月）、『千両幟猪名川内』（七二八）、『忠臣蔵山科
嫁入場』（琴馬）、『忠臣蔵山科奥本蔵物語』（三吉野）

（六月一日）『式礼三番叟』（入登）、『佐倉の曙儀作切腹』（七二八）、
『三十三間堂柳』（嘯月）、『三日太平記松下内』（南枝）、『阿波
鳴戸順礼歌』（五色）、『八陣記正清本城』（嬰木）、『源平布引の
滝松波琵琶の段』（琴馬）、『鰻谷恨の鯨鞘古手屋八郎兵衛』（三
吉野）

□昭和5（1930-06-07）『台湾日日新報』

京都大形浄瑠璃

高雄共楽連、同料理屋組合、下村吞海氏等の後援で七日午後五
時から高雄劇場で開演するが、出し物は次の通りである

△『御祝儀三番叟』△『お駒才三鈴ヶ森の段』△『御所桜弁慶
上使三段』△『八陣政清守護城之段』△『忠臣蔵八ツ目本蔵下
屋敷之段』△『鎌倉三代記三浦別之段』

□昭和5（1930-06-12）『台湾日日新報』

勝玉連浄瑠璃会／十二日より十五日まで四日間、毎夜正六時か
ら栄々園で勝玉連福引景品附追善浄瑠璃会を催すが、出演多数
に付、成べく早くから多数の来聴を希望すと。其語り物左の通
り

初日『御祝儀』（三峰）、『赤垣』（菊水）、『合邦』（宝珠）、『梅由
（友鶴）、『本蔵邸』（礁風）、『壺坂』（彫司）、『鳴門』（竹の家玉
江）、切掛合『一力茶屋』（菅枝、綾子、彫司、三峰、礁風、友
鶴、三松、美登志）、糸（勝玉、小菊、千代寿）（池田社中）

□昭和5（1930-07-13）『台湾日日新報』

一平会連の義太夫会／台北市義太同好者から成る一平会では、
来る十四、五両日午後六時から本町常盤生命三階に於いて、
義太夫会を開き一般に公開すると

□昭和5 (1930-08-09) 『台湾日日新報』

納涼素人浄瑠璃会／八、九両日午後六時より南門公会堂に於て開催。入場無料。多数来聴を乞ふと。語り物左の如し

八日 (初日) 『千代萩』 升司、『合邦』 宝珠、『梅の由兵衛』 梅玉、

『妙心寺』 綾登、『儀作』 菊水、『阿波鳴門』 小松、『沼津』 組次

『炬燵』 一声

九日 (二日目) 『尼ヶ崎』 南玉、『菅原』 柳枝、『太功記』 南玉、

『壁』 (壁) 仇討 大路、『合邦』 貴昇、『沼津の里』 菅枝、『千代

萩』 土口、『岸姫松』 竹司

三味線 呂玉、甫、小菊、麗糸、栄枝、寿玉

□昭和5 (1930-08-12) 『台湾日日新報』

中継放送変更／義太夫野崎村

十一日の中継プログラム次の通り変更

義太夫『新版歌祭文』野崎村の段

浄瑠璃 竹本素女

ツレ弾き 豊竹和歌吉

□昭和5 (1930-10-04) 『台湾日日新報』

三吉野浄瑠璃会

三吉野の睦会では四、五両日午後六時より、南門公会堂に於て左の番組で浄瑠璃会を開催し、多数の来聴を希望すると

四日『御祝儀』入登、『寺岡切腹』ひさこ、『蝶花形』八五色、『千

両轍』七二八、『弁慶上使』松司、『玉藻前三』嘯月、『千本す

し屋』嬰木、『三日の丸』南枝、『阿漕浦』琴馬、『弥作鎌腹』

三吉野、

五日『三番叟』可祝、『妹背山四』春枝、『岸姫』南枝、『八陣

記八』嬰木、『玉藻前奥』嘯月、『本蔵下屋敷』松司、『皿屋敷』

七二八、『寺子屋』五色、『加賀見山尾上自害』琴馬、『赤垣源

造出立』三吉野

□昭和5 (1930-10-08) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会／台北義太夫天狗連の主催で中秋聯合義太会を来る

七、八両日夕方六時より、本町二丁目常盤生命三階にて開演する

ことになった。入場無料の上、福引を午後七時迄来場の方に

贈呈すると。番組は

▲七日『日吉』(土口)、『合邦』(可笑)、『壺坂』(南玉)、『酒

屋』(鳳玉)、『百度平』(竹司)、『新の口』(一声)、『沼津』(組

次)

▲八日『弁慶』(竹司)、『妙心寺』(菅枝)、『又助』(土口)、『太

十』(三光)、『本下』(雷雀)、『白石』(柳枝)、『酒屋』(梅玉)、
絃は素人婦人連数名出演

□昭和5 (1930.12.07) 『台湾日日新報』

けふの催し／▲義太夫納会 午後六時より寿町西門公会にて
義太夫納会 六、七日の両夜正六時から、寿町西門公会で
勝玉連義太夫納会を催す。入場無料。多数来聴を歓迎すと。
語り物左の通り

【初日】『御祝儀』(入登)、『鈴ヶ森』(勝登)、『忠六』(長楽)、『壺
坂』(松月)、『朝顔』(新喜楽千房)、『野崎』(三笠)、『長局』(美
登志)、『日蓮記』(三峰)、『壁』(菅枝)

【二日目】『御祝儀』(登山)、『玉三』(三峰)、『二度目』(勝登)、
『柳』(品子)、『宿屋』(都鳥)、『本下』(礁風)、『松王』(彫司)、
『太十』(友鶴)、『重の井子別れ』(三松)、糸(勝玉千代寿)

□昭和6 (1931.02.01) 『台湾日日新報』

義太夫初会 一月二日三日両夜、正六時から、末広町楽々園で
勝玉連義太夫初会を開催するが、多数出演の為時間厲行する
から、成べく早く多数の来聴を希望すると。両夜の語り物左の
通り

『御祝儀』(入登)、『沼津』(登照)、『紙治』(友鶴)、『松王邸』(彫
司)、『忠六』(長楽)、『谷組打』(勝登)、『寺子屋』(綾登)、『合
邦奥』(三峰)、『重の井子別れ』(三松)、『日吉』(都鳥)、『安達』
(美登志)、『合邦中』(三笠)、『弁慶』(品子)、『壺坂』(松月)、
『先代萩』(新喜楽千房)、『本蔵下邸』(礁風)、『勘平切腹』(大
阪清玉)、『判官切腹』(菅枝)、糸(勝玉、呂玉、千代寿)

□昭和6 (1931.02.12) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃大会

来る二月十二、十三、十四、三日間楽々園に於て午後正六時より
開演、語り物

初日

一、『太十』三光 二、『酒屋』三石 三、『布四』美登志 四、
『合邦』千歳 五、『菅四』菅枝 六、『又助』土口 七、『紙治』
梅玉 八、『岸姫』組次

二日目

一、『弁慶』平和 二、『沼津』藤枝 三、『酒屋』菊水 四、『儀
作』蘭玉 五、『合邦』一声 六、『松王』大路 七、『野崎』
柳枝 八、『新口』貴昇

三日目

一、『鳴門』小松 二、『又助』三峰 三、『合邦』宝珠 四、『本下』綾登 五、『忠四』和楽 六、『玉三』竹司 七、『忠六』南玉 八、『菅四』三松

□昭和6 (1931-02-14) 『台湾日日新報』

けふの催し／▲素人浄瑠璃大会 午後六時より末広町楽々園にて

□昭和6 (1931-03-07) 『台湾日日新報』

義太夫会開催／七日八日の両日南門公会堂に於て、晴雨に拘はらず、正六時より浄瑠璃大会開催の由、語り物左の如し
七日『御祝儀』入登、『先代』竹司、『弁慶』三石、『壺坂』南玉、『本下』菊水、『鳴門』三松、『菅四』柳枝、『沼津』一声
八日『鈴ヶ森』登上、『御所三』平和、『壺坂』組次、『合邦』宝珠、『日蓮記』綾登、『松王』大路、『紙治』梅玉、『太十』菅枝

□昭和6 (1931-03-15) 『台湾日日新報』

けふの催し／▲三吉野睦会義太夫 南門公会堂に於て

□昭和6 (1931-03-25) 『台湾日日新報』

義太夫大力連の素人大会／義太夫大力連素人春季大会は、廿五廿六、廿七の三日間末広町楽々園にて、午後六時より無料公開。芸題は左の通り

初日 一、『御祝儀宝の入船』(入登) 一、『太功記尼ヶ崎の段』(大鶴) 一、『菅原寺子屋の段』(可笑) 一、『忠臣蔵本蔵下屋敷の段』(松風) 一、『紙屋治兵衛内の段』(鳳玉) 一、『合邦ヶ辻合邦内の段』(藤司) 一、『梅野由兵衛内の段』(和楽)

二日目 一、『太功記尼ヶ崎の段』(三能羽) 一、『三勝半七酒屋』(松風) 一、『合邦ヶ辻合邦内の段』(可笑) 一、『千代萩政岡忠義の段』(土口) 一、『金毘羅利生記百度平内』(千歳) 一、『忠臣蔵判官切腹の段』(艶司)

三日目全部掛合 一、『朝顔日記宿屋の段』(掛合会員一同) 二、『忠臣蔵勘平腹切の段』(同) 三、『阿波鳴戸巡礼の段』(同) 四、『太功記十段目』(同) 五、『沼津の里平作腹切の段』(同) 三味線(大力、千歳)

□昭和6 (1931-04-08) 『台湾日日新報』

勝玉連義太夫大会／九、十両日の午後正六時より晴雨を論ぜず、末広町楽々園で勝玉連春季義太夫大会を開催し、多数出演する

から、成るべく早く来聴を希望すると。語り物左の通り

▲初日『御祝儀』（品子）、『十八段掃寄』（美登志）、『由良港』（勝登）、『日吉』（都鳥）、『太功記十』（松月）、『本蔵下邸』（綾登）、『寺子屋』（礁風）、『安達祭文』（三峰）、『紙治内』（菊水）、『合邦』（宝珠）

▲二日目『御祝儀』（三峰）、『鈴ヶ森』（勝登）、『三勝酒屋』（菊水）、『弁慶上使』（品子）、『勘平切腹』（長楽）、『梅野由兵衛』（友鶴）、『お染久松』（三笠）、『松王邸』（美登志）、『千本桜』（菅枝）、『毛谷村六助』（大路）、糸（勝玉、呂玉、栄枝、寿玉、千代寿）

□昭和6（1931-04-19）『台湾日日新報』

豊竹三玉隠退浄瑠璃大会／十九日より楽々園で

渡台以来三十年間台北に居住して、義太夫界の先輩として重きをなしてゐた豊竹三玉氏は、最近三年ばかり病氣の為に静養中であつたが、愈々今回斯界を隠退する事となつたので、同氏の伝授を受けた名士や関係者、門弟等後援の下に十九日より二十三日まで五日間、毎夕午後六時より台北市内楽々園で隠退浄瑠璃大会を開く。入場無料である

□昭和6（1931-06-20）『台湾日日新報』

三吉野睦会の素人浄瑠璃会

三吉野睦会では来る二十一、二十二の両日、南門公会堂で素人浄瑠璃会を開く。番組は左の通り

△二十一日 一『御祝儀』入と、一『玉三』嬰木、一『紙治』南枝、一『本蔵』ひさ、一『飯原館』五色、一『矢口渡七』二八、一『忠四』司、一『彦山瓢箪棚』三吉野
△二十二日『三番叟』、一『五色』、一『勘平切腹』一口、一『三勝』、一『熊谷陣屋』一、一『七二八』、一『布引三人上戸』琴、一『彦山六助内』三吉野

□昭和6（1931-08-11）『台湾日日新報』

納涼義太夫大会

十二、十三両日午後六時半から、台北市末広町楽々園で勝玉連納涼義太夫大会を催すと。入場無料。語り物左の通り

十二日（初日）

『御祝儀』（入登）、『本下』（「藤？」司、「梅忠？」（小松）、『酒屋』（友鶴）、『「野崎？」』（千房）、『寺子屋』（三笠）、『太「十？」』（士口）、『「菅枝」』
十三日（二日目）

『御祝儀』（登山）、『太十』（友鶴）、『御所桜』（品子）、『先代萩』

（松月）、『■屋』（■■■）、『梅由』（綾登）、『妙心寺』（■■■■）（美登志？）、『松王邸』（■玉）、（糸 竹本勝玉、呂玉、千代寿

□昭和6（1931-08-25）『台湾日日新報』

『■屋』のお絹 沼田笠峰

夏の読み物としては、余りにも暑苦しいだらうが、七月に文楽座人形浄瑠璃芝居を見たから、その時の感想の一端を書いて見たい。

××

と言つても、もとより人形芝居の批評をするのではない。それは舞台が違ふし、また自分の趣味にインダルヂすることになるから、専門に属することは避けるつもりである。現代の新しい婦人たちの中では、文楽座人形芝居などに興味をもつ人は、極めて少いであらう。手ツ取り早い映画全盛時代に、人形芝居は余りにも時代離れがして居る、ジャズに昂奮を求める現代の若い婦人達に、浄瑠璃のメロディーは余りにも耳遠いものであるかも知れない。恐らくは文楽座が何んでもあるかを知らない人の方が、現代にふさはしいのであらう

××

併しそれほど古風なものであるだけに、これを愛好するもの、

所謂ファンに取つては、その芸術味ゆたかな技巧を見るのが、たまらなく嬉しいのである。私は不幸にも、この七月に久々で見た時には、楽」を見る機会を得なかつたが、この七月に久々で見た時には、人形の遣ひ様がよほど進歩して、その技巧が著しく細やかになつたやうに思はれた『道行初音の旅路』の静御前「人形遣ひ吉田文五郎」と忠信「吉田栄三」との所作などには、すつかり陶醉させられてしまつた。人形に魂が入つたと言はうか、妙技神に迫ると言はうか、実にその感興は筆にも言葉にも現はしがたいものがあつた。

××

斯うした古典的芸術は、なるべく現代の若い人々にもそれを味はせるやうにしたいと思ふが、それは自己の趣味に偏することになるかも知れない。それで感想を述べると言つても、おのづから浄瑠璃の文句、又は脚本そのものに就いて記すより他にはない。

××

二回目狂言で見た『桂川連理の柵』は、帯屋の主人長右衛門とその隣の信濃屋の娘お半とが、心中するまでの経過を取扱つたものである。いふまでもなく、お半と長右衛門とはその年齢が余りに違ひ過ぎてまるで親子の様なので、昔から不釣合な恋と

して普く知られてゐるのである。

××

併し、もしこれを現代の恋として見たらどうであらうか、お半の無自覚は暫く論外として、単に年齢の差といふ点だけなら、決して珍らしくない。むしろ現代ではさういふ不自然な恋の三角関係の例が多過ぎる位である。もとより時勢が違ふからではあるが、長右衛門の妻お絹はどこまでも良人をかばつて「わたしや疾うから知つては居れど悟気どころか顔へも出さねば、気の毒がらすが笑止なと舅御と、いぢ悪い姑御の耳へ入るかとそれが悲しさ、私も女のはしぢやもの、大事の男を人の花、腹も立つし、りんきもしやうとまんざら知らぬでなけれど（中略）はかない女の心根を不慙と思うて何時までも見捨てず、添うて下さんせ」と涙ながらにかき口説いて居る。もしこれが現代の夫人であつたら何と云つてその良人をたしなめるであらうか。長右衛門はお絹の可憐な心根に対して、うしろから手を合せて拝みつゝ感謝して居るが、このお絹が正面からガミガミと我鳴り立てたら、男の気持ちはどうねぢられて行くだらうか。

××

女子を奴隷視する封建時代の道徳は、もはや遠い過去のものとなつて居るが、夫婦の間の心意〔氣〕を思ふとき、私はやつ

ぱりお絹の心を讚美せずには居られない。勿論お絹を讚美するからとて、長右衛門やお半を咎めずに置かうといふのでは決してない。

前の大錦が義太夫語りに……／津太夫の元で勉強中／近く文楽に出演

【大阪電信】やがて文楽座の床に現はれるであらうと噂される前の大錦事細川卯一郎君は、その後も津太夫指導のもとに血の出る様な

稽古を続けてゐるが、その熱心さと上達の早いのは周囲のものはじめ、師の津太夫も舌を捲いて驚嘆してゐる。先月文楽座が上京して明治座に出演した際にも、大錦は終始床の近くに座を占めて、みんなの語り口に耳を傾け、津太夫が宿に帰るとすぐ、その後を追つて

語り口の批判と教授を受けた時など、流石の津太夫もたちだちの態だつた。大錦が既に完成の域に達したものは『朝顔日記』『寺小屋』『弁慶上使』があり、目下は『太閤記十段目』の稽古中である。後援者白井松竹社長、中村雁次郎等は一日も早く文楽へ演るやう奨めてゐるが、師の津太夫は大事を踏んで今年一杯みつちり勉強してからと押へてゐる。だが周囲の事情を綜合す

ると案外早く

文楽へ出勤するやうになるかも知れない。芸名は相撲の名をそのまゝ、竹本大錦太夫と名乗る事になるらしい

□昭和6 (1931-08-31) 『台湾日日新報』

義太夫琵琶大会 義太夫、筑前琵琶、合同納涼大会が三十一日より九月三日まで、毎夜六時から榮座で開かれる(入場無料)

□昭和6 (1931-10-04) 『台湾日日新報』

三吉野陸会の浄瑠璃会

台北市内児玉町の三吉野陸会では三四、五の三日間午後六時から、南門公会堂に於て浄瑠璃会を開く。その番組左の如し

三日(初日)

『玉藻前道春館』嬰木、『忠臣寺岡切腹』ひさひ、『播州青山鉄山館』七二八、『岸の姫松飯原館』南枝、『金刀比羅利生記百度平内』五色、『四ツ谷怪談伊右衛門屋敷』藤司、『忠臣蔵九山科隠家』三吉野
四日(二日目)

『蝶花形小阪部館』五色、『時雨炬燵紙治』南枝、『一の谷須磨の浦』ひさひ、『御所桜弁慶上使』嬰木、『千両幟猪名川内』

七二八、『伊賀越沼津の里』藤司

『日蓮記勘作住家』琴馬、『忠臣蔵九本蔵切腹』三吉野
五日(三日目)

『加賀見山又助内』豊泉、『日吉丸五郎助内』小泉、『千本桜寿司屋』愛丸、『太功記尼ヶ崎』一口、『三十三所壺坂の段』一鳳、『三勝半七酒屋』一星、『おはん長右衛門帯屋』三吉野

JFAK 十月四日

▲午後八時 義太夫(大阪) 竹本清緑

▲午後八時四十分 筑前琵琶(台北) 『浜松城』法池山松長旭
瑠

□昭和6 (1931-11-22) 『台湾日日新報』

義太夫納会 二十三、二十四の両日午後正六時から、末広町楽々園で勝玉連義太夫納会を開催するが、入場下足共無料。出し物は左の通り

『御祝儀』(入登、『酒屋』(登照)、『紙治内』(友鶴)、『百度平』(彫司)、『三浦別』(勝登)、『先代萩』(松月)、『松王郎』(綾登)、『安達前』(三松)、『安達奥』(三峰)、『妙心寺』(美登志)、『合邦』(三笠)、『宿屋』(品子)、『寺小屋』(礁風)、『又助』(新喜

楽千奴）、『柳』（同千房）、『堀川』（菅枝）、『忠臣蔵七段目』（男連掛合）、『白石噺』（女連掛合）、糸（勝玉、呂玉）

□昭和6（1931.11.25）『台湾日日新報』

台北素人天狗連の浄瑠璃納会

二十五、二十六日午後五時より二日間、楽々園に於て台北素人天狗連浄瑠璃納会開催。来聴無料。語り順左の如し

初日、『御祝儀宝の入舟』入登、『六助住家』（大路）『熊谷陣屋奥』（菅枝）、『合邦奥』（喜昇）、『伊賀越沼津』（組次）、『松王屋敷』（蘭玉）、『太十』（士口）、二日目、『合邦』（竹司）、『熊谷陣屋前』（宝珠）、『先代御殿』（小松）、『菅原四段目』（綾登）、『四ッ谷怪談』（一声）、『紙治』（梅玉）、三味線（呂玉、寿玉、栄枝）

ウエルカム

▲栄座や常設館にゐるお茶子は断然廃すべきだ。彼等は一種の寄生虫、警察よ注意されたい（不愉快生）

□昭和6（1931.11.27）『台湾日日新報』

三吉野睦会の浄瑠璃会

台北南門の三吉野睦会では二十八、二十九の両日、南門公会堂で年末見台納め浄瑠璃会を催す。芸題左の通り

二十八日 一、『本蔵下屋敷』（瓢）一、『源蔵出立』（南枝）一、『阿波鳴門』（五色）一、『玉三道春館』（嬰木）一、『矢口ノ渡』（七二八）一、『三勝半七酒屋』（友鶴）一、『忠丸山科住家』（琴馬）一、『璧仇討滝の水』（三吉野）二十九日 一、『千本桜寿司屋』（嬰木）一、『太七杉の森』（七二八）一、『一の谷須磨の浦』（瓢）一、『三勝半七酒屋奥』（南枝）一、『利生記百度平』（五色）一、『おしゆん伝兵衛堀川』（藤司）一、『四ッ谷怪談』（雷雀）一、『阿漕浦平次内』（三吉野）、三味線（三吉野）

□昭和7（1932.02.17）『台湾日日新報』

義太夫大会

当十七、十八、十九の三日間、毎夜正六時から南門公会堂で空谷綾登氏内地引揚送別義太夫大会を開催するから、多数の来聴を希望すると。其語り物左の通り

初日『御祝儀』（入登）、『菅四』（礁風）、『岸姫』（竹司）、『合邦』（宝珠）、『日蓮記』（綾登）、『弁慶』（品子）、『太十』（士口）、『一の谷』（蘭玉）、『鈴ヶ森』（三松）二日目『御祝儀』（登山）、『腰越状』（菅枝）、『沼津』（登照）、

『太子』（組次）、『合邦奥』（三笠）、『安達』（綾登）、『新口村』（貴昇）、『志津寺』（大路、掛合『阿波鳴門』（小松、甫）

三日目『御祝儀』（宝山）、『太子奥』（三峰）、『沼津』（一声）、『弁慶』（南玉）、『三人上戸』（美登志）、『梅由』（梅玉）、『本藏下邸』（綾登）、掛合『千両幟』（小松、甫、栄枝）

三味線（勝玉、呂玉、甫、千代万、栄枝、寿玉）

□昭和7（1932.02.25）『台湾日日新報』

義太夫大会

二十六、二十七の両日、午後六時から西門市場内台北稻荷神社社務所楼上で、初午祭奉納義太夫大会を開催する由。来聴随意。其語り物左の通り

▲初日『御祝儀』（三峰）、『弁慶』（白峰）、『阿漕』（美登志）、『忠四』（菅枝）、『野崎』（宝珠）、『酒屋』（梅玉）、『新口村』（綾登）、『合邦奥』（三笠）

▲二日目『御祝儀』（美登志）、『梅忠』（貴昇）、『朝顔』（品子）、『沼津』（登照）、『寺子屋』（礁風）、『安達』（三峰）、『合邦』（松風）、『酒屋』（榊枝〔柳枝カ〕）、三味線（勝玉、呂玉〔呂玉カ〕）、千代寿、寿玉）

□昭和7（1932.04.03）『台湾日日新報』
ラヂオ欄

今明日番組 J・F・A・K／四月三日（日）

午前の部〔省略〕

午後の部

【0:20放送開始、6:45-7:30「屏東の夕ぐし」、7:50-「台南の部」】

【八・四〇】▲義太夫（台南）『忠臣蔵二度目清書 寺岡物語之段』浄瑠璃山本勝寿、三味線鶴澤安松

【九・〇五】▲長唄〔以下略〕

【写真】
義太夫

『忠臣蔵二度目清書 寺岡物語の段』

浄瑠璃 山本勝寿氏

□昭和7（1932.04.13）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／四月十三日（水）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部【7:30】

【七・三〇】 掛合義太夫（大阪）「未定」

【八・三一】 奉天より奉天放送局（以下略）

掛合義太夫【午後七時三十分】（大阪）

残念ながら本日の掛合義太夫は、まだ出演者及芸題共決定なく、
ために書き得ぬ次第ではあるが、大阪の本場からの義太夫故、
内容は立派である事は間違ひない

□昭和7（1932-04-17）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／四月十七日（日）

午前の部【省略】

午後の部

【二・二〇】 昼間娯楽時間（レコード演奏） 義太夫『明烏六花曙』

（浦里時次郎吉原揚屋の段） 浄瑠璃竹本鍛太夫、三味線豊澤新

左衛門、ツレ弾野澤吉男

【二・〇〇】 氣象予報（台南のみ） 台南測候所発表（以下略）

夜間の部【省略】

昼間娯楽時間【午後零時二十分】

義太夫／『明烏六花曙』

浦里時次郎吉原揚屋の段』

浄瑠璃 竹本鍛太夫

三味線 豊澤新左衛門

ツレ弾 野澤吉男

この浄瑠璃は昭和六年七月三日、江戸三河島近くの田浦で蔵前の伊勢屋といふ町人の次男伊之助が、吉原の遊女三芳野と心中した事件を、初代鶴賀若狭掾が脚色して自ら節付した新内節で、弘化四年大阪で歌舞伎劇で上演された時、鶴賀馬蝶が出語りで非常に好評であつた所から、嘉永六年二月大阪新築地の綱太夫座の手■興行で義太夫に改作し『明烏六花曙』の外題で上場し、口を竹本田喜太夫、切を竹本咲太夫が語つたものである。新内節の方では単に浦里の時次郎が痴情関係から吉原を出奔するのであるが、義太夫では時次郎が金岡の書いた臥龍梅の一軸を詮議のため廊に入込み、いつしか浦里と馴染んだのを、亭主が一軸を盗み取つた犯人であるだけに、夫を楯にして浦里を折檻すると、手代の彦六が己惚から浦里の縄を解き鼻毛を抜かれるといふ滑稽な筋を取入れて潤色し、江戸より寧ろ上方気分の方の情緒が濃厚に漂つてゐる、

雪はまだ残りて寒き春の風、吹晴れぬ身の浦里が湯上り姿その儘に、禿の緑打つれて上る二階の部屋の内、それと緑が煙草盆煙草に憂さは晴らしても晴れぬ思ひの時次郎、誰が恋人と夕間暮堰かれて今は山名屋の浦里にさへ怨めしく、人目の関を忍ぶ身の雪の夜道を迷ひ来て、塀の外面にしよんぼりと、お辰も流石物馴れし世間話を取混せて、「いや申し浦里様、モウ世間の事といふものは其の身にならねば知れぬもの、私も昔を思出せば満更恚うでもなかつたが、アアト、恚ういへばどうかかう可笑い咄するやうなれど、どうした事やら常々から、お前のことが気に懸つて、サ、アノお前に聞いて貰ひ度いと思つてゐた咄、まあ一寸聞いて下んせ、あの私がやうな見つともない女子でも喻へにもいふ鬼も十八とやらで、どないか思つてくれたが今の主ぢや、ホホモモウ色々口説かれ、マアママア今のが済んだと思はんせ、サア深うなつて来て、もう何の事はない指切髪切りといふ様になると友達に怗した事で金が要る、二歩貸せ三步貸せサア了ふた、コリアマア小遣の錢箱にしられたわいと思ふたれど、サア迷うたが因果、エ、儘よ若い時は二度はないと仕面工面して、到頭小袖箆筒も何時の程。状の取遣沢山に紙屑が一杯詰つた揚句には、心中に出ようと、(中略^{ママ})」お辰は部屋を振返り、コレ緑勝手に廻ると隙があるこの切戸からゆく

程に、ナしつぱりと締めてたもと、小蔭に忍ぶ時次郎を無理に押遣る切戸口、ばつたり締めて左あらぬ顔傘振かたげ小提灯、提げてお辰は急ぎ行く、涙ながらに時次郎いつまでくとき歎いても帰らぬ今の我身の不運、逆も生きては居られぬこの身 and 女も供にと云ひたいが二人一緒に死すならば、跡で可愛やこの緑はどうなるものぞ、不愍やな、今死ぬる身を存へて我亡き跡で一片の回向を頼む浦里と、聞く程せきくる涙ながらそりや余りぢや情ない今宵別れて私が身や可愛緑は何とならうと思はんす、死なねばならぬ覚悟なら三途の川もコレこの様に親子手を執り諸共と(中略^{ママ})是こそ真に日頃尋ぬる金岡が一軸、エ、忝けないと人なきを幸ひに我が手に入れしも和女のお蔭コレ恚う／＼と囁き合ひ庭に折しも足音に機転の浦里行灯の火吹き消す合図に彦六が探り足してコレコレお浦是さへあれば一飛にそ様と一緒に抜さうぢや抜けさうぢやい、幸裏の切戸から二人は先へ出給へ、我等は最前見て置いたあの床の間の掛物をせしめて来る内此の銀子を必ず屹度預けると財布を渡し彦六が奥へ行く跡浦里の緑を背に時次郎何処を指してゆく空や、はや東雲の明烏飛ぶが如くに遠近や後の噂や残るらん

□昭和7(1932.04.21)『台湾日日新報』

素人義太夫会

二十二、二十三両日午後六時半から末広町楽々園で勝玉連 ■■

〔春季力〕義太夫会を開催する。入場無料。成るべく多数の来聴を希望すると。両日の語り物左の通り

『御祝儀』（入登）、『弁慶』（■■■〔白力〕）、『堀川猿廻し』（友鶴）、

『寺子屋』（長■■）、『八陣』（勝登）、『先代萩』（三松）、『野崎』（三

笠）、『太十』（松月）、『百度平』（美登志）、『日吉丸』（品子）、『又

助』（新喜楽千奴）、■■■■〔梅由力〕（新喜楽千房）、『儀作』（菅

枝）、糸（勝玉、千代寿）

ラヂオ欄

清元【午後八時四十分】

『夢見草葉蔭一声——高尾縁切——』

浄瑠璃 清元吉栄太夫

三味線 浪越秀美

□昭和7（1932-05-02）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／五月二日（月）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・三〇】義太夫『艶姿女舞衣（酒屋の段）』浄瑠璃梅本梅玉、

三味線村崎呂玉

【九・二〇】時報〔以下略〕

義太夫

【午後八時三十分】

『艶姿女舞衣

（半七酒屋の段）』

浄瑠璃 梅本梅玉

三味線 村崎呂玉

三勝半七の物語り、今日は始めからさわりの所まで語られる事になつてゐる。此の曲は元禄八年十二月六日大阪長町四丁目美濃屋平左衛門の娘さん（芸名を三勝と云つて舞妓）が、大和五条新町赤根屋半七（放蕩のために大阪に漂浪して豆腐屋となつた独身物）と痴情のため、大阪下難波村墓所南石垣の下で情死した事実を、宝永六年八月大阪豊竹座で（笠屋三勝二十五回忌）と名題をつけて浄瑠璃に脚色して興行した。これが頗る評判だつたので、安永元年十二月笠屋を再び美濃屋に

改めて『艶姿女舞衣』といふ外題で興行したのが此の曲の最初で、全部を三巻物とし、上の巻は生玉の段、中の巻は新町橋の段、長町の段、下の巻は今宮戎の段、上塩町の段で、この上塩町の段が酒屋の段である、作者は竹本三郎兵衛、豊竹応律、八民半七である、酒屋といふ酒屋の半半七がお園といふ女房があるのにもかかはらず昔馴染の美濃屋の三勝といふ芸妓に迷ひ、遂に人殺しまで行ふ、お園の父宗岸は聲の放蕩を怒つて一度娘を連れ戻したが、再び考ふる所があつて酒屋に復帰させやうとすると、半七の親の半兵衛が拒む所から事件が展開されて、お園の貞節や、捨児のお道の守袋から現はれた遺書で一家が悲嘆するといふ人情の機微を穿つた場面が、それからそれと続く名作である

□昭和7 (1932.05.17) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 五月十七日 (火) / J・F・A・K

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・三〇】義太夫『伊賀越道中双六 平作腹切の段』、浄瑠璃

山田組次、三味線吉田大力

【九・二〇】時報 (以下略)

義太夫 (台北) 【午後八時三十分より】

▼『伊賀越道中双六 平作腹切の段』

浄瑠璃 山田組次

三味線 吉田大力

山田氏は既に台北にあつて二十数年、義太夫界の大先達である、三味の吉田大力さんは既にそのしつかりした腕前、音色等定評のある人

この出しものは、天明四年二月竹本座に上場、作者は近松半二と近松加作の二人で安永七年に近松東南作の『乗合合羽』を更に仕組んだものである。此の敵討ちは寛永十一年十一月七日伊賀上野の鍵屋の辻にあつた事実で、日本三大敵討の一つとなつてゐる。それは一方河合方には旗本が加担し、和田方には大名が四頭まで加勢したといふ、言はば大名旗本の喧嘩ともなつたので徳川幕府もこれには手古摺つたといふのである。敵の沢井股五郎は、実は河合又五郎、和田志津馬は渡辺数馬、唐木政右衛門は荒木又右衛門、およねの瀬川は唯筋に取入れたもので、享保三年頃京都生れの大森たかといふ女が吉原に来て瀬川

義太夫（台北）【午後八時四十五分より】

▼『傾城恋飛脚』（新口村の段）

浄瑠璃 葉玉友鶴

三味線 竹本勝玉

近松巢林子の『冥土の飛脚』を菅専助、若竹笛躬が改作したもの浪花淡路町の飛脚屋渡世の亀屋忠兵衛は北の新地へ通行の際、鼻紙■（袋力）を落した時、通りかかりの遊女■屋の梅川が拾ひ、これを渡したのが縁の初めで、忠兵衛は日頃の品行方正も梅川に打ち込んで了った。そしてやがて金に窮し西国方から廻った封印金を一時融通して遂に入牢となり、忠兵衛は牢死した。そして梅川は尼となつたといふ事である。それを脚色したものである

□昭和7（1932.05.31）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／五月三十一日（火）

午前の部（省略）

午後の部（省略）

夜間の部

【七・三〇】義太夫（台南のみ）『御所桜堀川夜討（弁慶上使の段）』

と名乗つたが、夫の敵を討つたといふ事蹟があるので作者はこれを取入れたものらしい。股五郎は志津馬の父靱負を殺して逐電した。志津馬は唐木政右衛門の助太刀を得て又五郎の行方を捜し廻つた。沼津の平作爺さんは、志津馬が吉原で深く馴染んだ瀬川といふ遊女の父である。同じく股五郎を探してゐると、泊り合せたのが平作の忤の十兵衛で、今は股五郎方の者、印籠からそれと知り親子の名乗もならず平作は腹を切つて漸く股五郎の在家を知るといふ筋である。今晚語られるのはおよね独り物おもひから平作臨終十兵衛出立の段切までである

□昭和7（1932.05.26）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／五月二十六日（木）

午前の部（省略）

午後の部（省略）

夜間の部

【八・四五】義太夫、『傾城恋飛脚 新口村の段』浄瑠璃葉玉友鶴、

三味線竹本勝玉

【九・二〇】時報（以下略）

浄瑠璃竹本司加、三味線石持咲一

【八・〇五】台湾音楽（台南のみ）〔以下略〕

義太夫（台南のみ）【午後七時三十分より】

▲『御所桜堀川夜討（弁慶上使の段）』

浄瑠璃 竹本司加

三味線 石持咲一

此の浄瑠璃は文耕堂、三好松洛の合作の『御所桜堀川夜討』の第三段目の切で、梶原景高、土佐坊昌俊の二人が、源義経の問罪使として上洛し、義経の正妻卿の君が、平時忠の女であるので、義経が反逆人で無い証拠に、卿の君の首を討てと難題を言ひかけたので卿の君が妊娠中を預かつてゐる侍従太郎の邸へ弁慶が上使に赴く。侍従夫婦は卿の君を討つに忍びず腰元の信夫の身代に立てやうとすると、その母の針妙おわさが拒み、其の身の素性を語るうち、襖越しに聴いた弁慶は信夫こそ十八年前播磨の福井村で一夜の契りを結んだ時、おわさとの間に出来た子といふ事を知り、不意に突き殺して、本心を明しその首を討つて身代りに立てるといふ筋である（写真上竹本司加、下石持咲一）

□昭和7（1932-06-05）『台湾日日新報』

義太夫（台北）【午後八時十分より】

▲『仮名手本忠臣蔵（二六段目、勘平腹切の段）』

浄瑠璃 渡 清玉

三味線 竹本勝玉

此の浄瑠璃は、勘平が軍用金の調達に悩んでゐるのを察し、女房のお軽が身売して百両を手に入れやうとして舅の与一兵衛が祇園町に赴き、半金を得て帰るさ、山崎街道で定九郎の爲めに斬り殺されて金を奪はれる。そんな事とは知らず勘平は猪に出会ひ発砲すると、その弾丸が定九郎に中つたので余儀なく其の財布を手にして帰ると、我家では一文字屋が来て約束でお軽を拉し去る。そこへ獵師共が与一兵衛の死体を担ぎ込む、姑の感違ひから勘平が舅殺しだと詰られてゐる所へ、郷右衛門と弥五郎が訪れて不忠呼ばはりをするので、遂に勘平は腹を切つて一切を自白すると、其の身の潔白が明らかとなり、死して連判に加はるといふ悲壮な筋である

□昭和7（1932-06-08）『台湾日日新報』

ラデオ欄

今日の番組 J・F・A・K／六月八日（水）

午前の部〔省略〕

午後の部

【〇・二〇】昼間娯楽時間 レコード演奏（台北のみ）台湾苦楽滑稽談〔以下略〕

【〇・二〇】昼間娯楽時間 レコード演奏（台南のみ）義太夫

『源平布引滝（松波琵琶の段）』浄瑠璃竹本大隅太夫、三味線

鶴澤道八

【一・一〇】気象予報（台南のみ）台南測候所発表〔以下略〕

夜間の部〔省略〕

新内（台北）【午後七時五十分より】

▲『弥次喜多』

浄瑠璃 鶴賀秀美太夫

三味線 富士松富士三郎

□昭和7（1932.06.09）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／六月九日（木）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・五〇】掛合義太夫『関取千両幟（猪名川内の段）』猪名川

（水野小松）おとわ（金柿栄枝）鉄ヶ嶽使（笠原甫）三味線（村崎呂玉）

【九・二〇】時報〔以下略〕

掛合義太夫【午後八時五十分より】（台北）

掛合／『関取千両幟（猪名川内の段）』

配役

猪名川

水野小松

おとわ

金柿栄枝

鉄ヶ嶽、使 笠原 甫

三味線

村崎呂玉

珍らしい掛合義太夫で、この浄瑠璃は近松半二外五名の合作になるもの、大阪の商人鶴屋礼三郎が新町大阪屋の遊女錦木に溺れたが悪人団右衛門、九平太、鉄ヶ嶽等の奸計にかかつて窮地に陥つたのを礼三の最有力士猪名川夫婦の俠気によつて錦木の身請を済ませる、ところで近江の郷士三輪弥太夫の女お才は許婚の夫がある身で礼三と私通したため勘当されたのを千田川に隠まれる、錦木は猪名川の女房おとはに対する義理として

再び茶屋奉公の身となり、礼三は鉄ヶ嶽を切つたため前途を悲しみ、遂に錦木と情死まで企てたが結局人々の尽力で目出度納まるといふ筋で今晚放送されるのは、初めから、「帯引締て夫の跡慕うてこそは、行く空に」、までである

□昭和7 (1932.06.13) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

常磐津（台北）【午後八時五十五分より】

『権八小紫／廓仇夢』

浄瑠璃／三味線 梅本梅寿

上調子 岸澤さん

□昭和7 (1932.06.14) 『台湾日日新報』

竹本七五三登氏／歓迎義太夫会

以前台北に在住してゐたことのある義太夫の竹本七五三登氏が今回来台したので、十四日から十六日まで三日間毎夜午後六時半から市内末広町楽々園で歓迎義太夫大会を開催する事となつた。入場無料

□昭和7 (1932.06.15) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／六月十五日（水）

午前の部（省略）

午後の部（省略）

夜間の部

【七・五〇】△義太夫、『四谷怪談伊右衛門住家の段』、浄瑠璃

■豊司、三味線野澤三吉野

【八・三〇】人情噺（以下略）

義太夫（台北）【午後八時五十分より】

▼『四谷怪談（伊右衛門住家の段）』

浄瑠璃 ■■勝司

三味線 野澤三吉野

久し振りの野澤三吉野さんの■■〔糸力〕で語られる浄瑠璃夏つたの怪談の随一である『四谷怪談 伊右衛門住家の段』

□昭和7 (1932.06.24) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／六月廿四日（金）

午前の部（省略）

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・〇〇】義太夫（台北のみ）『近頃河原達引（お俊伝兵衛）』

浄瑠璃竹本七五三登太夫、三味線野澤三吉野

【八・〇〇】台湾講古（台南のみ）三国誌（第三席）黄福

【八・四〇】映画物語、時代劇『め組の喧嘩』玉井潤、伴奏細田

管絃樂團〔以下略〕

義太夫【午後八時】（台北のみ）

▲『近頃河原達引（お俊伝兵衛）』

浄瑠璃 竹本七五三登

三味線 野澤三吉野

竹本七五三登師は最近内地より来られた人で、野澤三吉野の糸で語る

□昭和7（1932.07.14）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／七月十四日（木）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【七・三〇】義太夫（台北のみ）『梅野由兵衛、迎駕籠、聚楽町の段』

浄瑠璃竹廻家友奴、三味線吉田大力

【七・三〇】講演（台南のみ）『盂蘭盆に就いて』掬月晴臣

【八・〇〇】連続講談（東京）（台北のみ）『野狐三次』第四席神

田伯治

【八・〇〇】常磐津（台北のみ）『大森彦七』〔以下略〕

義太夫【午後七時三十分】台北

『梅野由兵衛／迎駕籠』

聚楽町の段』

浄瑠璃 竹廻家友奴

三味線 吉田大力

西国の藩士であつた梅の由兵衛が旧主が紛失した宝刀を購ふために、百両の金子に困つて女房小梅の弟である長吉が七十両の金子を持つて泊つたのを幸ひに、女房を酒買ひに出した留守中に長吉を殺して金を奪ふと、長吉は初めから死を賭して由兵衛夫婦を救ふために訪ねたのだと本心を明かすといふのである。作者は原田由良之助添削者並木宗輔である

□昭和7 (1932-07-17) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／七月十七日(日)

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【七・三〇】ヴァイオリンとピアノ(大阪)(台北のみ) 曲目未定
ヴァイオリン、アレキサンダー・モギレフスキー、ピアノ、
レオ・シロタ

【七・三〇】義太夫(台南のみ) 『仮名手本忠臣蔵六段目勘平切

腹の段』(浄瑠璃、丸玉勝朝。三味線、安松太夫)

【八・〇〇】吹奏楽(台北のみ)〔曲目略〕

【八・〇〇】長唄(台南のみ) 『巽八景』〔以下略〕

義太夫(台南のみ) 【午後七時三十分】

『仮名手本忠臣蔵 一六段目勘平切腹の段』

浄瑠璃 丸玉勝朝

三味線 安松太夫

勘平が軍用金の調達に悩んでゐるのを察し、女房のお軽が
身売して百両を手に入れやうとして舅の与一兵衛が祇園町に赴

き半金を得て帰るさ、山崎街道で定九郎のために斬り殺されて
金を奪はれる、そんな事は知らず勘平は猪に会い発砲すると
その弾丸が定九郎に中つたので、余儀なく其の財布を手にして
帰ると、我家では一文字屋が来て約束でお軽を拉し去る。そこ
へ狛師共が与一兵衛の死骸を担ぎ込む、姑の感違ひから勘平が
舅殺しだと詰られてゐる所へ、郷右衛門と弥五郎が訪れて不忠
呼ばはりをするので遂に勘平は腹を切つて一切を自白すると、
其の身の潔白が明らかになり、死して連判に加はるといふ悲壮
な筋である

□昭和7 (1932-07-18) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／七月十八日(月)

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【七・三〇】尺八合奏(名古屋) 『曲目未定』

【八・〇〇】未定(大阪)

【八・三〇】放送舞台劇『梶谷笠』〔以下略〕

人形浄瑠璃（大阪）【午後七時五十分より】

大阪四ツ橋文楽座より中継

『傾城阿波の鳴門』

Ⅱ 順礼歌の段Ⅱ

浄瑠璃 竹本南部太夫

三味線 野澤吉弥

世界に誇るわが国独特の古典芸術人形浄瑠璃を文楽座から中継するものである。語るのは今文楽で中堅の南部太夫である。近來の名演であらう。此の浄瑠璃は明和五年六月大阪竹本座で上演された『傾城阿波鳴門』の八段目で、作者は近松半二、八民平七、寺田兵蔵、竹田文吉、竹本三郎兵衛の五人である。大體の趣向は、阿波徳島の藩主三木家のお家騒動で、忠義の家老桜井主膳が悪人小野田郡兵衛のために主家の重宝国次の名刀を盗まれて困難したが、旧臣十郎兵衛お弓夫婦及び藤屋伊左衛門等の艱難辛苦によつて悪人から再び名刀を取返し、主家が安泰になるといふ筋で、宝永七年七月近松門左衛門が書卸した『夕霧阿波鳴門』の翻案である。十郎兵衛が我子のお鶴を殺した出所は、その当時阿波の浪人某が大阪玉造辺に仮住居して家計の道なきままに詐欺強請夜盗、追剥等とあらゆる悪業をして

多くの人を悩ましたが、或時順礼の子が金を持つてゐるのを知つて欺いて家に連れ帰り、深夜縊り殺し、窃に其死骸を猪飼野の畑中へ埋め隠した。然るにこれが露顕して召捕れ重罪に処せられたといふ実説を取入れたので、此の浄瑠璃は全部十段続きであるが、この順礼歌の件だけが特に名高いのである

□昭和7（1932.07.19）『台湾日日新報』

ラデオ欄

新内【午後九時】…台北：

『関取千両幟』

…猪名川内の段…』

浄瑠璃 岡本美根太夫

ツレ弾 岡本七五三吉

□昭和7（1932.08.05）『台湾日日新報』

ラデオ欄

今日の番組 J・F・A・K／七月五日（金）

午前の部（省略）

午後の部（省略）

夜間の部

【八・三〇】義太夫『本朝二十四孝 十種香の段』浄瑠璃小松崎
三松、三味線竹本勝玉

【九・二〇】時報〔以下略〕

義太夫【午後八時三十分】—台北—

『本朝二十四孝（十種香の段）』

浄瑠璃 小松崎三松

三味線 竹本勝玉

此の浄瑠璃は近松半二、三好松洛、竹田小出雲等の合作で、
武田と上杉の確執を書いたもので、趣向の多い非常に複雑した
筋である

□昭和7（1932.08.10）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

清元【午後八時五十三分】—台北

『紫雲鐘供養（道成寺）』

浄瑠璃 清元吉栄大夫

三味線 浪越秀美

□昭和7（1932.08.13）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／七月十三日（土）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・二〇】義太夫（レコード）『御所桜堀川夜討、弁慶上使の段』

：浄瑠璃竹本大隅太夫、三味線鶴澤道八

【九・二〇】時報〔以下略〕

義太夫【午後八時二十分】（台北）

…レコード演奏…

▲『御所桜堀川夜討（弁慶上使の段）』

浄瑠璃 竹本大隅太夫

三味線 鶴澤道八

□昭和7（1932.08.16）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／八月十六日（火）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・〇〇】義太夫（東京）竹本素女

【八・一〇】掛合噺「キッコーマン醬油製造元野田醬油株式会社提供前段

【九・〇〇】掛合噺（キッコーマン醬油製造元野田醬油株式会社提供）後段 一心亭豆八、一心亭太助（以下略）

義太夫【午後八時より】（東京）

出し物未定 竹本素女

竹本素女師は子供の時分から大に技を磨いて、最初竹本長広の門下となり娘義太夫として大に認められてゐたが其の後鶴澤道八、竹本越路太夫にもついて名を挙げ今は立派な一方の旗頭である艷物が得意である

□昭和7（1932.08.21）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／八月廿一日（日）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【七・〇〇】台湾人形戯『奇縁録』主演陳招仁、助演奇文閣団員

【七・三〇】ラヂオ風景（大坂）『未定』

【八・三〇】義太夫『艷姿女舞衣』三勝半七酒屋の段：浄瑠璃竹本七五三吉、三味線竹本七五三登太夫

【九・二〇】時報（以下略）

義太夫【午後八時三十分】—台北—

『艷姿女舞衣

—三勝半七酒屋の段—

浄瑠璃 竹本七五三吉

三味線 竹本七五三登太夫

此の曲は元禄八年十二月六日大阪長町四丁目美濃屋平左衛門の娘さん（芸名を三勝と云つて舞妓）が、大和五条新町赤根屋半七（放蕩のために大阪に漂浪して豆腐屋となつた独身もの）と痴情のために大阪下難波村墓所南石垣の下で情死した事実を、宝永六年八月大阪豊竹座で『笠屋三勝廿五回忌』と名題をつけて浄瑠璃に脚色して上演したこれが頗る好評だったので、安永元年十二月、笠屋を再び美濃屋に改めて『艷姿女舞衣』といふ外題で興行したのが此の曲の最初で、全部が三巻物、上の巻は生島の段島の内茶屋の段、中の巻は新町橋の段、長町の

段、下の巻は今宮戎の段、上塩町の段、この上塩町の段の切が酒屋の段である。作者は竹本三郎兵衛、豊竹応竹、八民半七である。酒屋といふ酒屋の半七がお園といふ女房があるのにもかかはらず昔馴染の美濃屋の三勝といふ芸子に迷ひ、遂に人殺しまで行ふ。お園の父宗岸は聲の放蕩を怒つて一度娘を連れ戻したが再び考ふる所あつて酒屋へ復婦させやうとすると、半七の親の半兵衛が拒む所から事件が展開れて、お園の貞節や捨子のお道の守り袋から現はれた遺書で一家が悲嘆するといふ人情の機微を穿つた場面がそれからそれと続く名作である

台湾人形戯

【午後七時より】（台北）

▲奇縁録 主演陳招仁、助演奇文閣団員

□昭和7（1932.09.05）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／八月五日（月）

午前の部（省略）

午後の部（省略）

夜間の部

【七・三〇】義太夫—人形浄瑠璃大阪大阪文楽座より中継『未定』
浄瑠璃竹本大隅太夫、三味線鶴澤道八

【八・三〇】台湾講古『買義』趙福（以下略）

人形浄瑠璃（大阪）【午後七時三十五分】

『此幻影血桜日記』

—文楽座より中継—

竹本鉦太夫 外

我国芸術の粹である、文楽座の人形浄瑠璃で同座の重鎮竹本鉦太夫師その他の出演である

□昭和7（1932.09.13）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／九月十三日（火）

午前の部（省略）

午後の部（省略）

夜間の部

【七・三〇】乃木將軍紀念放送（東京）（台北のみ）△浪花節『最後の乃木將軍』東家楽燕△筑前琵琶『九月十三日』高峰筑風

【七・三〇】義太夫（台南のみ）『伊賀越道中双六』平作腹切の

段 浄瑠璃 竹本勝玉、三味線 ■■■■■■（福島原？澤）

【八・三〇】講談（蜂ブドー酒、レッキス本舗近江屋利兵衛商店提供）『太閤と曾呂利新左衛門』読切 邑井貞吉（以下略）

義太夫（台南のみ）

【午後七時三十分】

伊賀越道中双六 — 平作腹切の段 —

浄瑠璃 竹本勝玉

三味線 ■■■■■■（福島原？澤）

日本三大仇討ちの一つ、伊賀上野で荒木また衛門の助太刀で行はれたもの、それを仕組んだものである。沼津の段といふのが今晚語られるのである

□昭和7（1932.09.23）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

明日の番組 J・F・A・K／九月廿三日（金）〔省略〕

二十四日（土曜日）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・三〇】義太夫（味の素本舗鈴木商店提供）『菅原伝授手習鑑』

寺子屋の段（前段） 竹本組春

【九・〇〇】義太夫（味の素本舗鈴木商店提供）『菅原伝授手習鑑』

寺子屋の段（後段） 竹本組春

【九・三〇】時報（以下略）

二十四日の放送（二十四日本欄休載の爲め繰上掲載）

東都／女流義太夫界の立物／竹本組春師を招聘

J・F・A・K 特別サービス／二十四日から三日間

講談 邑井貞吉師のあとを受けて、プログラム特別サービスとして、今東京で評判の竹本組春師の義太夫を提供する事になった菅原伝授手習鑑 — 寺小屋の段 —

【午後八・三〇】竹本組春

此の浄瑠璃は■■■■（道真公？）の■■■■（飛梅？）の故事と、梅は飛びの歌を骨子として作つたもので、作者竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作この寺子屋は特に竹田出雲の作である、作は延享三年八月竹本座に上場した、当時竹本座は不入りであったが、この浄瑠璃で盛返し翌四年三月まで大入りを打続けたものである、『仮名手本忠臣蔵』に次いでの名作

である

□昭和7 (1932.09.25) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／九月廿五日 (日)

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・三〇】義太夫 (ラヂオ受信機製造元七欧無線電機商会提供)

『壺坂』 前段…竹本組春

【九・〇〇】義太夫 (ラヂオ受信機製造元七欧無線電機商会提供)

『壺坂』 後段竹本組春

【九・三〇】時報 (以下略)

義太夫【後八・三〇】—台北—

『壺坂 前段及後段』

(ラヂオ受信機製造元七欧無線電機商会提供) 竹本組春

昨晩に引続いて特別サービスの一つである、豊竹呂昇の得意もので『三つ違ひの兄さん』と云うて暮してゐる中に、情なやかなさんは……』といふ沢市の浄瑠璃で有名の曲、組春師の呂昇

に劣らぬ名調子のさわりは聴きものであらう

□昭和7 (1932.09.26) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／九月廿六日 (月)

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・三〇】義太夫 (森永ミルク森永ドライミルク製造元森永練

乳株式会社提供)『増補生写朝顔話』(朝顔日記) 前段…竹本組

春

【九・〇〇】義太夫 (森永ミルク森永ドライミルク製造元森永練

乳株式会社提供)『増補生写朝顔話』(朝顔日記) 後段…竹本組

春

【九・二〇】時報 (以下略)

義太夫【後八・三〇】

増補生写朝顔話 —朝顔日記—

(森永練乳株式会社提供) 竹本組春

此の浄瑠璃は、天保三年正月、大阪稻荷境内竹本愛太夫一座で

上演した山田案山子遺稿の『生写朝顔日記』の四段目である秋

月弓之助といふ九州辺の国家老の娘深雪が■■■「京都？」在住

中、宇治の蛭狩で宮城阿曾次郎といふ美男の■■■と契りを結び、

■■■の幾日かを過ごす中に秋月一家は■■「急？」に本国に引揚

ぐる事になり、深雪と阿曾次郎は明石の浦で本意ない別れを惜

む、その際深雪は朝顔の歌を記した扇を後日の証に阿曾次郎の

船に投げ入れて■■を■■いた、其の後阿曾次郎は任官し駒沢次郎

左衛門と改めて江戸へ出立する、一方帰国した深雪は男の事が

忘兼ね、本国を出奔して都へ上ると男は去ったので、其の行方

を追ふうちに盲目となる駒沢は同役の岩代と共に東海道を下り

島田宿の宿屋で偶然盲目姿の深雪に邂逅したがそれと明さず出

立する、後で知った深雪は直ぐその後を追ったが一足違ひで大

井川で川止めとなり失望の結果入水して果てやうとした時、宿

屋の亭主と下部の関助が駆け付けて助け宿屋の亭主は深雪が祖

父の家臣といふ事が分り、駒沢が恵んだ眼薬は甲子生れの人間

の生血で服■■すれば癒えるといふので、甲子生れの亭主が切腹

して深雪の眼が開くといふのである

【写真あり、不鮮明】

□昭和7 (1932.10-06) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／十月六日(水)

午前の部(省略)

午後の部(省略)

夜間の部

【七・三〇】人形浄瑠璃(大阪)(大阪文楽座より中継)竹本土

佐太夫外

【八・三一】満洲より(奉天)

【八・四五】謡曲(喜多流)『巴』大村武(以下略)

人形浄瑠璃(大阪)【午後七時三十分】

(大阪文楽座より中継)

▲芸題未定

竹本土佐太夫外

現在義太夫界の巨星として錚々たる名声を謳はれて、斯界稀に

見る美音の持主として、芸風も完成の域にある竹本土佐太夫師

その他の出演にて文楽座からの人形浄瑠璃の中継である

□昭和7 (1932.10-08) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／十月八日（土）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・四五】義太夫『日吉丸稚桜』浄瑠璃…富田品子、三味線…

竹本勝玉

【九・二〇】時報〔以下略〕

義太夫【午後八時四十五分】（台北）

『日吉丸稚桜』

浄瑠璃 富田品子

三味線 竹本勝玉

此の浄瑠璃は、秀吉が木下藤吉郎時代に、堀尾茂助の案内で問道から進み、斎藤龍興が居城である美濃の稲葉山の城砦を陥れたといふ事と、清正が鍛冶屋の倅で、幼少で父を失ひ母の縁で秀吉の許に養はれ、遂に其の臣下となつて武名をあらはしたといふ『絵本太功記』の一節を綜合してこしらへたもので、享保元年十月大阪豊竹座で上場され、作者は近松柳、近松梅枝軒、近松加造、近松風寿の四人である、洵いうちに色気のあ

るのが此の浄瑠璃の特色である

三吉野義太夫会 三吉野睦連は八、九の両日午後六時より南門公会堂にて左記番組の義太夫大会を催すと、今回は新作時局ものもあり多数の来聴を希望すると

◇初日（八日） △沼津の里平作切腹（七二八） △彦山権現六助住家（嬰木） △時雨炬燵治兵衛内（南枝） △一の谷嫩軍記須磨の浦（瓢） △阿波鳴戸順礼歌（五色） △新作皇国の精華血染のハンカチ弥谷住家の段（三吉野）

◇二日目（九日） △岸姫松飯原館（南枝） △忠臣二度目清書（瓢） △朝顔日記宿屋（五色） △玉藻前三道春館（嬰木） △お俊伝兵衛堀川（七二八） △新作噫肉弾 勇士江下武二住家の段（三吉野）

※「血染めのハンカチ」…三勇士のひとり・江下武二が、久留米駅から出征の際に家谷計男少年から激励され、小指を切った血染めのハンカチを少年に渡して覚悟を示したという美談。

□昭和7（1932.10.11）『台湾日日新報』

新竹

義太夫 新竹玉声会の義太夫温習会は八日午後七時から倶楽部にて開催太田弁護士、永井台湾等官民有力者の出演があったので非常に盛会であつた

□昭和7 (1932.10.24) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

きよもと…(台北) …【午後九時】

『月花茲友鳥(山姥)』

浄瑠璃 清元吉栄太夫

三味線 新喜楽千弥

上調子 日本亭桃丸

□昭和7 (1932.10.26) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／十月廿六日(水)

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・五〇】義太夫(台北のみ)『伊賀越道中双六』(沼津里の段)

浄瑠璃丹羽一声、三味線金柿栄枝

【八・五〇】義太夫(台南のみ)『菅原伝授手習鑑』(寺子屋の段)
浄瑠璃黒星夢路、三味線杉藤安松

【九・三〇】時報〔以下略〕

義太夫(台北のみ)【午後八時五十分】

▼『伊賀越道中双六』

浄瑠璃 丹羽一声

三味線 金柿栄枝

天明四年二月竹本座へ上場された近松加作■■■人の作になるものの、日本三大仇討ちの一つ、伊賀の上野で渡辺数馬が河合又五郎を討つた事実によつて作られたもので、渡辺数馬は和田志津馬、荒木又右衛門は唐木政右衛門となつてゐる

義太夫【午後八時五十分】(台南のみ)

▼『菅原伝授手習鑑』

―寺子屋の段―

浄瑠璃 黒星夢路

三味線 杉藤安松

道真公の飛梅の故事と、梅は飛びの歌を骨子として作つたもので、作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作、

この寺子屋の段は特に出雲の筆である

□昭和7 (1932.11.07) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／十一月七日 (月)

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・五五】義太夫 (レコード) 『本朝二十四孝』十種香の段、

浄瑠璃竹本鍛太夫、三味線豊澤新左衛門

【九・二〇】時報 [以下略]

義太夫 (台北)

(レコード演奏)

【午後八時五十分】

▼本朝二十四孝

十種香の段

浄瑠璃 竹本鍛太夫

三味線 豊澤新左衛門

□昭和7 (1932.11.21) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／十一月廿一日 (月)

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・三〇】義太夫…浄瑠璃北村三峰、三味線竹本勝玉『摂州合邦辻

邦辻 合邦内の段』

【九・二〇】時報

義太夫 (台北)

【午後八時三十分】

『摂州合邦辻

(合邦内の段)』

浄瑠璃 北村三峰

三味線 竹本勝玉

此の義太夫は遥曲の『弱法師』から出たものである、御家騒動であつてしかも夢幻劇である、『弱法師』の作者は結城元雅であるが浄瑠璃の出来たのは安永二年二月で作者は菅専助、若竹笛躬の二人、全部上下二段になつてゐるが合邦内の段はそ

の内下の段である

□昭和7 (1932.11.25) 『台湾日日新報』

義太夫納会 二十六、二十七日午後五時半から南門公会堂に於て素人義太夫納会を開催するから多数の来聴を希望すると。番組左の通り

(初日)『御祝儀』(入登)、『朝顔』(甫)、『沼津』(組次)、『沓掛』(菅枝)、『梅忠』(貴昇)、『揚屋』(柳枝)、『太十』(土口)、『寺子屋』(梅玉)、(二日目)『御祝儀』(登山)、『鳴門』(甫)、『太十』(竹司)、『志度寺』(小松)、『本下』(宝珠)、『合邦』(一声)、『百度平』(琴馬)、『儀作』(■玉)、三味線(呂玉勝玉、麗子)

□昭和7 (1932.11.29) 『台湾日日新報』

勝玉連義太夫納会

二十九、三十日両日、午後五時半から台北末広町楽々園に於て、勝玉連義太夫納会を開催し、入場下足共無料の上、景品を進呈する由

(初日)『御祝儀』(入登)、『二度目清書』(勝登)、『太十』(新喜楽千奴)、『炬燵』(鬼笑)、『寺子屋』(礁風)、『安達』(三峰)、『柳』(新喜楽千房)、『梅由』(梅玉)、『松王』(三松)

(二日目)『御祝儀』(登山)、『太十奥』(三峰)、『本下』(礁風)、『又助』(勝登)、『一の谷』(寿)、『弁慶』(三松)、『梅忠』(玉枝)、『鳴門』(友鶴)、『八陣』(菅枝)

□昭和7 (1932.12.03) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／十二月三日(土)

午前の部(省略)

午後の部(省略)

夜間の部

【七・四五】『忠臣蔵花暦』(東京) 第三義太夫『仮名手本忠臣蔵

四段目』浄瑠璃初代長広事竹本旭嬢

【八・三一】満洲より(奉天) [以下略]

義太夫(東京)

【午後七時四十五分】

『忠臣蔵花暦』

『仮名手本忠臣蔵—四段目—』

浄瑠璃／初代長広事 竹本旭嬢

竹本旭嬢師は初代長広と云つて東都義太夫界の女流の随一であ

る。この四段目は塩谷館の段である

□昭和7 (1932.12.04) 『台湾日日新報』

三吉野義太夫納会

三日、四日両日午後六時より南門公会堂で左記要領により三吉野睦連の義太夫納会がある。多数の来聴を希望すると

△三日初日 『本蔵下屋敷』瓢、『佐倉曙儀作腹切』七二八、『毛谷村六助内』嬰木、『赤垣源蔵出立』南枝、『百度平内』五色、『布四琵琶の段』三吉野

△四日二日目 『八陣八ッ目』嬰木、『酒屋の段』五色、『三日の九』南枝、『勘平切腹』瓢、『沼津』七二八、『お染久松質屋の段』三吉野

□昭和7 (1932.12.05) 『台湾日日新報』

三味線音楽の戸籍調べ／角木泥土

日本音楽の粋は未だ何といつても三味線音楽であります。三味線音楽の中でも今最も隆盛を極めてゐるのは長唄であり、その他にも三味線音楽があるが以下その戸籍調べをしてみよう
長唄節

これは正確には江戸長唄といふべきで江戸の歌舞伎劇に使用す

る長篇の謡物の意味である。これの発達したのは享保の末から延享にかけてで起原は元禄の頃三味線の渡来からこれが芝居に取入れられ盲人の組歌、端歌などから長唄が出来て京長唄、大阪長唄、江戸長唄などといはれてゐたが、江戸には大阪から入つたもので、現在のは此の江戸長唄の延長で、開祖は杵屋勘五郎といふ人であります。これが宝暦明和の頃に至つて富士田吉次が出て一中節、豊後節から長唄に転じその他松尾五郎次郎萩江露友、坂田仙四郎等の名手が輩出し浄瑠璃の流れを汲んで成功■端緒に付き安永天明頃に至つて唄に中村兵治、松永忠五郎、富士田音蔵、三味線に杵屋佐吉、同正次郎が出て茲に長唄の歌謡界に於ける確乎たる地位を築くに至り豊後節、常磐津、富本と共に歌舞伎の所作事の地を演り、文政から天保にかけて空前の隆盛を見明治に入つてからは他諸流が衰微したのに反して益々繁栄し、特に明治三十五年吉住小三郎、稀音家六四郎の提携、長唄研精会を起し歌舞伎と別れてからは一層家庭音楽としての隆盛を極めるに至つた。此の長唄の家庭音楽として喜ばれる第一は取材の範囲が広く、歌詞が高尚な事で次は他の三味線音楽に比して拍子がシツカリして居り、リズムも明快で且つ刺戟的なのがあり、万人向である点がそれぞれ重要な役割を持つてゐるのである、それに

唄は唄だけ三味線は三味線だけでも相当興味があるといふ事も見逃せない所である。尚歌詞は二千番もあるが現に行はれてゐるのは三百位である、長唄の流派とその系統は次の通りである

(唄の家) 芳村家、吉住家、富士田家、松永家、松島家

(三味線の家) 六左衛門家、六三郎家、文四郎家、栄藏家、勝の字家、佐吉家、岡安家、弥の字家、正治郎家、今藤家、柏家(囃方の家) 田中家、望月家、福原家、梅屋家、住田家、堅田家

次に

義太夫節

であるが、これは貞享年代竹本義太夫が大坂道頓堀、竹本座の人形芝居に上せたのが最初である。従つてこれは人形劇と盛衰を共にして来たので、元禄から宝暦までに大成し文化以来衰勢の道を辿つてゐる。此の間に浄瑠璃は次第に人形劇から離れ、素語りのみも行はれ今日に至つてゐるが、今日でも人形劇中心に語られるのが本格で大阪の文楽座はこの唯一の聖堂である

常磐津

起原は宮古路節―豊後節を語つた宮古路豊後掾の弟子宫古路文字太夫が大坂から下つた師匠の浄瑠璃が江戸に於て風紀取

締から禁止されて後も江戸に止つて解禁運動を続け同時に名も常磐津文字太夫と改めて以来のもので実は豊後節の変名したものである

清元節

起原は初代富本斎宮太夫の子延寿太夫が文化の末年に創始したに始まる。従つて清元は富本節から分派したもので宗家は高輪派と称しこれから梅吉派が分れ、更に大正十一年に待遇問題から梅吉派を含む清元派が別れた各派の代表者は

(高輪派) 清元延寿太夫、同栄寿太夫、同栄次郎、(清元派) 清

元梅吉、同喜久太夫

歌沢節

歌沢節は江戸時代の端歌から改編されたもので嘉永安政の幕末時旗本の隠居笹本金平(笹丸)が御家人柴田金助、たみ屋虎右衛門と共に当時の諸派歌謡の長所をとつて一流をたてたのものである。協議の上笹丸が初代歌沢笹丸を名乗つて二代目を虎右衛門に名乗らせ柴田は別に歌から欠字を除つて初代哥沢芝金を名乗つた。これが後の「寅派」と「芝派」とに別れ、技の争ひとともに家名を争ひ今日に至つてゐる(終)

□昭和7 (1932.12.07) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／十二月七日 (水)

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【七・〇〇】『忠臣蔵花暦』大阪 第七、人形浄瑠璃、文楽座より中継

【八・〇〇】琵琶 (東京) 『未定』

忠臣蔵花暦

【午後七時より】(大阪)

▼人形浄瑠璃

(文楽座より中継)

毎晩連続の『忠臣蔵花暦』も第七日は大阪よりの中継で、大阪自慢の文楽座からの人形浄瑠璃の中継である

□昭和7 (1932.12.10) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／十二月十日 (土)

午前の部〔省略〕

午後の部

【〇・二〇】昼間娯楽時間 (レコード演奏) 義太夫『心中天網島 (新地茶屋の段)』浄瑠璃豊竹つばめ太夫、三味線豊竹仙糸

【一・〇〇】気象通報 (台南のみ)〔以下略〕

夜間の部

【八・四五】義太夫『恋飛脚大和往来 (梅川忠兵衛新口村の段)』

浄瑠璃竹本七五三吉、三味線竹本七五三登

【九・二〇】時報〔以下略〕

義太夫【後八・四五】—台北—

『恋飛脚大和往来 (梅川忠兵衛新口村の段)』

浄瑠璃 竹本七五三吉

三味線 竹本七五三登

近松某林子の『冥土の飛脚』を管専助、若竹笛、躬が改作したもので安永二年十二月堀江豊竹座に上場された。浪花淡路町の飛脚屋渡世の亀屋忠兵衛は北の新地へ通行の際、鼻紙袋を落した時、通りかかりの芸者榎屋の梅川が拾ひ、これを渡したのが縁の初め、忠兵衛が牢死したのは三十五歳、梅川はその時二十四歳、後発心して近江の矢橋へ帰り梅川庵の小庵を建立し

厄^{あま}となつて六十六歳^{さい}で死^しんだとの事^{こと}である

昼間娯楽時間

【午後零時二十分】（台北）

▼義太夫^{ぎだいふ}『心中天網島（新地茶屋の段）』

浄瑠璃 豊竹つばめ太夫

三味線 豊竹 仙糸

此^{この}の情死^{ぜうし}は享保五年十月十五日明方大阪網島大長寺^{おおい}の墓場^{はかば}にあつた事実談^{じじつだん}である、劇聖近松門左衛門^{げきせいちんまつもんざゑもん}は直ぐさま筆^{ふで}をとつて同じ年の十二月に竹本座^{ちくまつざ}で演^{えん}じ多大^{おほい}の好評^{こうへう}を受けた。この小春治^{こはるぢ}兵衛^{べゑ}が心中^{ちゆうしゆう}した時近松^{ちんまつ}は住吉^{すまぎ}の茶屋^{ちや}にゐて、浪華^{なわば}からこの事^{こと}を急使^{きうし}で知らせて来て取急^{とくきふ}ぎ書いてくれと頼^{たの}まれて、すぐ様^{うらやま}「謡^{うたひ}の本^{ほん}は近衛流^{このえりう}、野郎帽子^{やろうぼうし}は紫^{むらさき}の…」とつづけたのは有名な話^{はなし}。此^{この}の新地茶屋^{ちや}の段^{だん}は後に増補^{ぞうほ}されたものである

□昭和7（1932.12.13）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／十二月十三日（火）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【七・三〇】『忠臣蔵花暦』（大阪）義太夫^{ぎだいふ}『七段目掛合』文楽座若手連中

【八・三〇】ヴァイオリン演奏（台北）〔以下略〕

『忠臣蔵花暦』

【午後七時三十分】（大阪）

▲義太夫^{ぎだいふ}『七段目掛合』文楽座連中

此^{この}の掛合^{かけ}は特に文楽座^{ぶんらくざ}の若手連中^{わかしん}の出演^{しゅえん}である

□昭和7（1932.12.14）『台湾日日新報』

【後八・五五】—台北—

『春夜障子梅^{はるのよひしやうじのうめ}』

（夕霧伊左衛門）』

浄瑠璃 清元吉栄太夫

三味線 梅屋敷たね

三味線 丸新しん

□昭和8（1933.01.08）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／一月八日（日）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【七・〇〇】義太夫（東京） さはりの夕べ 竹本小津賀、竹本

静香、竹本素昇、竹本染登

【八・三〇】時報 〔以下略〕

義太夫

【午後七時より】（東京）

さはりの夕べ

東京の女流義太夫界の左の腕達者連が義太夫さはりの夕べとして七時から八時半までの放送である

竹本小津賀、竹本静香、竹本素昇、竹本染登

□昭和8（1933-01-09）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／一月九日（月）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・三一】義太夫（台北） 三十三ヶ所花の山『壺坂靈験記 沢

市内の段』、浄瑠璃斎藤松月、三味線竹本勝玉

【九・二〇】気象通報 〔以下略〕

義太夫（台北）

【午後八時三十一分】

三十三ヶ所花の山

『壺坂靈験記

沢市内の段』

浄瑠璃 斎藤松月

三味線 竹本勝玉

三つ違ひの兄さんと云うて暮してゐるうちに——といふ最もよく知られた浄瑠璃である

□昭和8（1933-01-17）『台湾日日新報』

清元（台南のみ）

【午後九時より】

『深山桜及兼樹振』

浄瑠璃 雛千代

三味線 駒奴

□昭和8 (1933.02.02) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日のプログラム 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波

七二〇

午前の部 (省略)

昼間の部 (省略)

夜間の部

【八・三一】義太夫 (台北) 『仮名手本忠臣蔵 判官切腹の段』

鶴澤友京

【九・二〇】気象通報 (以下略)

演芸ヴァリエテ

「由良之助は未だ来ぬか」

『仮名手本忠臣蔵／判官切腹の段』

義太夫 鶴澤友京

此の浄瑠璃は四段目で、元禄十四年三月十一日夜、浅野内匠頭 (塩谷判官) が江戸芝愛宕下町の田村右京太夫の邸 (鎌倉扇ヶ谷の下屋敷) で切腹仰せ付けられ、検使に大目付莊田下総守

(葉師寺) 副使として目付多門伝八郎、大久保権右衛門 (この二人を一人として石堂) が田村邸に赴き、夕七つ時滞ほりなく相済み、死骸は弟大学引取つて芝泉岳寺に葬つた事実を前半として、同年四月十八日、播州赤穂で脇阪淡路守 (石堂) 木下肥後守 (葉師寺) の二人が出張して首尾よく城を受取つた事実と、江戸の兇変が本邸へ報ぜられて、大石 (大星) を初めとして家中の銘々が数回にわたつて大評定を遂げた事実などを、一日の中に掲まげて脚色したものである。出演者友系師は、現在文楽の重鎮竹本津太夫の相三味線鶴澤友治郎師の門に十三の時から入つて、今日まで二十数年此の道にあり、師友治郎師の秘蔵弟子として重宝がられ、少壮組の牛耳をとつてゐる人で、今小暇を得て台湾に遊びに来られたのである

□昭和8 (1933.02.03) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日のプログラム 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波

七二〇

午前の部 (省略)

昼間の部

【〇・二〇】昼間娯楽時間 (レコード演奏) 義太夫 『三十三間堂

棟由来 平太郎住家の段」、浄瑠璃竹本鍛太夫、三味線豊澤新左衛門

【一・〇〇】気象通報（台南のみ）〔以下略〕
夜間の部〔省略〕

昼間娛樂時間

◆義太夫（午後零時廿分）
緑丸の可憐で泣かせる

『三十三間堂棟由来／平太郎住家の段』

レコード演奏 浄瑠璃 竹本鍛太夫

三味線 豊澤新左衛門

延宝九年に宇治加賀掾が書き卸した『熊野権現』を改作した山本河内掾の作『都三十三間堂棟由来』を藍本とした『祇園女御九重錦』の三段目の切である。種々の因果説を附合した仏教主義の夢幻劇で「和歌浦には名所がござる、一に権現、二に玉津島」の音頭が入つてゐて、よく膾炙された曲である

□昭和8（1933.02.05）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日のプログラム 台北（AK）周波六七〇／台南（BK）周波

七二〇

午前の部〔省略〕

昼間の部〔省略〕

夜間の部

【七・一〇】人形浄瑠璃（大阪）『河原達引（堀川の段）』大阪文楽座より中継

【八・三〇】時報（東京）〔以下略〕

浪花の古典芸術／文楽の中継

お俊・伝兵衛の情事

『近頃河原達引

（堀川の段）』夜7時10分

浄瑠璃 竹本津太夫

三味線 鶴澤綱造

ツレ彈 鶴澤綱右衛門

近松半二の作と云はれてゐるこの浄瑠璃は津太夫得意の出しもの。天明二年に竹本八重太夫が江戸に下つて語つた時は未曾有の評判であつたといふ出所は沢山あるが、いろいろの所から當時の心中ものを作り出したもので、頭に近頃とあるは當時の事実を取材にしたので、際物として語られたによるものである

津太夫師は文樂樂座の重鎮、大正十三年に紋下の栄位を贏てゐる

□昭和8 (1933-02-09) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

演芸之賑

美形競演

常磐津／『妹背山女貞苦』

(御殿の場)』

浄瑠璃 稲六貞子

梅屋敷繁の助

竹廻家友奴

日本亭政千代

三味線 見晴千代子

上調子 梅屋敷花奴

□昭和8 (1933-02-14) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日のプログラム 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波

七二〇

午前の部 (省略)

昼間の部 (省略)

夜間の部

【七・五〇】義太夫 (大阪) 『未定』浄瑠璃竹本東広、三味線豊

澤仙平

【八・三〇】時報 (東京) [以下略]

義太夫 (大阪) (午後七時五十分)

▲未定

浄瑠璃 竹本東広

三味線 豊澤仙平

常磐津 午後八時五十五分 (台北)

伊賀越道中双六 (伊賀越)

沼津の里／平作印籠の場

浄瑠璃 常磐津文字正

三味線 瓢亭しん

□昭和8 (1933-02-16) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日のプログラム 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波
七二〇

午前の部〔省略〕

昼間の部〔省略〕

夜間の部

【八・三一】義太夫 (台北) 『絵本太閤記 十段目尼ヶ崎の段』

浄瑠璃竹本源平太夫、三味線竹本左近

【九・三〇】気象通報〔以下略〕

「夕顔棚のこなたより」で御存じの

『絵本太閤記 十段目』

義太夫 『尼ヶ崎の段』

夜八時三十一分 (台北)

浄瑠璃 竹本源平太夫

三味線 竹本左近

織田信長に対する光秀の反逆を取扱ったもので、尼ヶ崎の段は廻国に出た光秀の母皇月閑居の場で、旅僧に化けて探りに来た木下藤吉 (ママ) を刺すつもりで、光秀は母皇月を刺してしまふ場面である

竹本源平太夫と左近師は去る十四日来台した太夫で、直ちに

AKより放送するものである、此の作者は近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒等で寛政十一年に豊竹座で上演したのが初めてである

□昭和8 (1933.02.25) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

新内【午後七時三十分】 (台南のみ)

『若葉草』

浄瑠璃 お石

三味線 一葉

□昭和8 (1933.02.26) 『台湾日日新報』

歡迎義太夫大会 予て馴染のある大阪文楽座出勤竹本源平太夫が女義竹本左近と来台したので当地素義聯合主催で二十七、二十八の両夜六時から楽々園で歡迎義太夫大会を開く。語り物左の通り

△初日 『御祝儀』 (入登)、『又助』 (勝登)、『白石揚屋』 (登照)、『壺坂』 (彫司)、『弁慶』 (南玉)、『太十』 (まさ子)、『合邦』 (松風)、『三勝酒屋』 (源平太夫)、『お初仇討』 (左近)

△二日目 『御祝儀』 (登山)、『二度目』 (勝登)、『酒屋』 (菊水)、

『百度平』（五色）、「本下」（礁風）、「御所桜」（品子）、「合邦」（鳳

玉）、「太功記」（源平太夫）、「阿波鳴門」（左近）

三味線（左近、一平、三吉野、勝玉、千蔵、甫）

□昭和8（1933.02.27）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北（AK）周波六七〇／台南（BK）周波七二〇

午前の部（省略）

昼間の部（省略）

夜間の部

【七・〇〇】義太夫（大阪）『恋娘昔八丈（鈴ヶ森の段）』浄瑠璃

竹本南部太夫 三味線野澤吉弥

【七・五〇】講演（東京）『仇討伝の四』神田伯治（以下略）

義太夫／『大岡政談』／『恋娘昔八丈／鈴ヶ森の段』／夜七時・

大阪

浄瑠璃 竹本南部太夫

三味線 野澤吉弥

松貫四、吉田角丸の作で、安永四年に出来たものである、享保
年江戸新材木町の白子屋騒動を取扱つたものである、大岡政

談の一つである

□昭和8（1933.03.01）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北（AK）周波六七〇／台南（BK）周波七二〇

午前の部（省略）

昼間の部（省略）

夜間の部

【八・三一】義太夫（台北）『伽羅先代萩（政岡忠義の段）』竹
本左近

義太夫（台北）

【午後八時三十一分】

『伽羅先代萩
めいはいくせんたいはきはき

（政岡忠義の段）』

竹本左近

万治年間に伊達家に起つたお家騒動を骨子として作つたもの、
作者は松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸の三人、全部九段物で、
これは六段目の切りである。伽羅とは結構の意、それをめいば
くと読ませてゐる、先代は仙台のこと、萩は宮城野の名物であ

る

□昭和8 (1933-03-03) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

新内

『明烏夢泡雪／浦里雪責の段』

夜八時三十一分・台北

浄瑠璃 岡本美根太夫

三味線 岡本七五三吉

□昭和8 (1933-03-05) 『台湾日日新報』

けふの催し

△初午祭奉祝義太夫大会、午後七時から、西門市場内稲荷社務

所にて

ラヂオ欄

今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部 (省略)

昼間の部 (省略)

夜間の部

【七・二五】人形浄瑠璃 (大阪) 『出し物未定』大阪文楽座より
中継

【八・三〇】時報 (東京) [以下略]

古典日本の姿！ 浪花の誇り！／文楽の人形浄瑠璃／夜7時25分 大坂より

『壇の浦兜軍記／阿古屋琴責の巻』

畠山重忠 竹本文字太夫

遊君阿古屋 竹本南部太夫

岩永左衛門 竹本鏡太夫

榛沢六郎 竹本陸路太夫

三味線 野澤勝平

ツレ弾 鶴澤友二

琴、胡弓 鶴澤綱治

□昭和8 (1933-03-14) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部 (省略)

昼間の部 (省略)

夜間の部

【七・〇〇】義太夫（大阪）『未定』豊竹団司、豊澤小住

【七・三〇】台湾講古（台北のみ）〔以下略〕

義太夫

夜七時より（大阪）

▲未定

浄瑠璃 豊竹団司

三味線 豊澤小住

□昭和8（1933-03-14）『台湾日日新報』

義太夫競演会の感ある三吉野師還暦祝賀会

◇……十三、四両日栄座で

義太夫師匠野澤三吉野師は渡台二十二年をけみす古顔であるが、此度還暦を迎ふる齡となつたので門下連中睦会世話方となり還暦祝賀義太夫大会を十三、四両夜、栄座に於て開催することになつた、本島の男性義太夫師としては鶴澤一平師と双壁であり、今日の本島義太夫界隆盛を導いた功労者である三吉野師の事として今回の大会に於ても各師連献心的後援出演あり、台湾義太夫競演会の感がある。番組は次の通りである

十三日 『御祝儀宝の入船』（入登）、『矢口』（七二八）、『寺子屋』

（五色）、『柳』（田鶴子）、『壺阪』（松月）、『蝶花形八』（土口）、

『揚屋』（松風）、『お駒才三』（菊水）、『恋飛脚』（七五三吉）、『桂

川連理柵』（三吉野）

十四日 『式礼三番叟』（可祝）、『嘉平次』（南枝）、『彦山権現』

（嬰木）、『尼ヶ崎』（瓢）、『恋飛脚』（貴昇）、『菅原四』（竹司）、

『弁慶上使』（新）、『合邦』（可笑）、『伊賀越』（鳳玉）、『熊谷陣

谷』（雷雀）、『忠臣蔵判官切腹』（三吉野）

□昭和8（1933-04-11）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北（AK）周波六七〇／台南（BK）周波七二〇

午前の部（省略）

午後の部（省略）

夜間の部

【六・三〇】人形浄瑠璃（大阪）——文座より中継——『出しもの未

定』豊竹古鞠太夫外

【八・三〇】時報（東京）〔以下略〕

文楽／人形浄瑠璃舞台中継

出し物未定（夕六時半）

豊竹古鞠太夫その他

新内【夜八時五十五分】（台北）

『朝顔日記／宿屋の段』

浄瑠璃 岡本美根太夫

三味線 岡本七五三吉

□昭和8（1933-04-14）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北（AK）周波六七〇／台南（BK）周波七二〇

午前の部【省略】

午後の部

夜間の部

【八・三一】義太夫（台北）『恋飛脚大和往来、梅川忠兵衛新口村の段』、浄瑠璃吉田貴昇、三味線竹本勝玉

【九・二〇】気象通報【以下略】

義太夫（夜八時三十一分・台北）

『梅川忠兵衛 新口村の段』

恋飛脚大和往来

浄瑠璃 吉田貴昇

三味線 竹本勝玉

□昭和8（1933-04-21）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北（AK）周波六七〇／台南（BK）周波七二〇

午前の部【省略】

午後の部

【〇・二〇】昼間娯楽時間（レコード演奏）義太夫、『傾城阿波鳴門、巡礼歌の段』、豊竹昇之助、三味線豊澤東重

【一・〇〇】気象通報（台南のみ）【以下略】

夜間の部【省略】

お昼の楽しみ

涙の義太夫

『傾城阿波鳴門』

新口村の段』

浄瑠璃 豊竹昇之助

三味線 豊澤東重

此の浄瑠璃の大体の趣向は、阿波徳島の藩主三木家の御家騒動で、忠義の家老松井主膳か悪人小野田重兵衛のために主家の重宝国次の名刀を盗まれて困難したが、旧臣十郎兵衛、お弓夫婦及び藤屋伊左衛門等の艱難苦心によつて悪人から再び名刀を取返し、主家が安泰になるといふ筋である

□昭和8 (1933.04.21) 『台湾日日新報』夕刊

会事

▲義太夫会 豊竹富光の義太夫会は、二十二日午後六時より南門公会堂で催され、出演者は全部で七名である

□昭和8 (1933.04.22) 『台湾日日新報』

けふの催し

△豊竹富光義太夫会、午後六時から南門公会堂にて

□昭和8 (1933.04.24) 『台湾日日新報』

清元 (夜八・三二)

『明烏花濡衣』

浄瑠璃 花奴

三味線 秀美

□昭和8 (1933.04.25) 『台湾日日新報』

万華浄楽会の義太夫会

二十五日昼間／入場者に景品付

万華浄楽会主催春季義太夫会が二十五日午前十一時から万華芳明館で開催されるが、当日は入場者に抽籤により景品もある入場無料

◇番組◇

『御祝儀宝の入船』 入登

『先代萩政岡忠義』 瑞穂

『太功記十尻ヶ崎』 柳司

『忠臣蔵六勘平切腹』 寿

『御所桜弁慶上使』 新高

『忠臣蔵本蔵下郎』 新玉

『菅原伝授松王郎』 松玉

『白石嘶揚屋』 友鶴

『合邦辻合邦内』 源平太夫

『加賀見山お初仇討』 竹本左近

◇景品◇

一等一本 金側腕時計 一箇

二等二本 反物 一反宛

三等二本 反物 一反宛

四等四本 下駄 一足宛

五等五本 ハンカチ 半打宛

六等二十本 友鶴コーヒー券 三枚宛

□昭和8 (1933-05-07) 『台湾日日新報』

ラデオ欄

今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【六・三〇】人形浄瑠璃 (大阪) 文楽座より中継『未定』豊竹古

勒太夫他

【七・三〇】合唱と管絃楽 (東京) ▲ブラームス誕生百年祭 (以下略)

今日の聞きもの

文楽座の／人形浄瑠璃

出し物未定／夕六時三十分

豊竹古勒太夫外

□昭和8 (1933-05-21) 『台湾日日新報』

ラデオ欄

今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【六・三〇】女義太夫の夕 (東京) (台北のみ) 未定

【六・三〇】独唱と斉唱 (台南のみ) 台南西本願寺新生日曜学校

【七・三〇】台湾講古 (台北) (以下略)

寄席芸集

女義太夫の夕

夜 六時三十分より／七時三十五分まで

演題未定 東京より (台北のみ)

□昭和8 (1933-05-24) 『台湾日日新報』

ラデオ欄

今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・三一】義太夫（台北）『勢州阿漕浦 平治住家の段』野澤

三吉野

【九・三〇】気象通報〔以下略〕

義太夫（台北）

午後八時三十一分

▼『勢州阿漕浦

平治住家の段』野澤三吉野

此の浄瑠璃は寛保元年九月、大阪豊竹座で上場した『田村磨鈴鹿合戦』の四段目の切で、作者は浅田一鳥、豊田正蔵である。全曲は五段続きで、天智天皇の御代に逆賊藤原千方が高円山に隠遁し、妖術を学んで百八十余歳の長寿を保ち、火鬼水鬼を使って三種の神器を奪ひ、桓武天皇の皇弟水上皇子及び藤原小黒丸等と与党として、忠義の英傑坂上田村麿を滅し、天下を覆へさんと企てたが、田村磨は謀計を以て神器を奪還し、妖賊の心胆を寒からしめ、鈴鹿山で兇徒を討ち滅すといふのが大体の筋である。阿漕の平治が殺生禁断の場所に網を入れて、十束の

宝剣を得るといふ事は実説ではなく、例の作り物語りで、この根柢は「伊勢の海阿漕が浦にひく網のたびかさなればあらはれにけり」といふ古歌と謡曲の『阿漕』とを結び合はせて脚色したもので、悪者の平瓦の治郎蔵が平治の父の旧臣で、平治の科を引受けるといふのも旧道徳主義から割出した慣用手段である

□昭和8（1933-05-30）『台湾日日新報』

勝玉連義太夫会

三十、三十一の両日午後六時から末広町楽々園で、勝玉連義太夫会を開催する。入場下足無料。其番組左の通り

△初日『御祝儀』（三峰）、『本下』（彫司）、『弁慶』（勝登）、『十

種香』（美人座登志子）、『宿屋』（美人座嘉代子）、『鳴門』（白峰）、

『先代萩』（松月）、『壺坂』（静原）、『安達』（三松）

△二日目『御祝儀』（三松）、『二度目』（勝登）、『鳴門』（新喜

楽千房）、『宿屋』（品子）、『御所桜』（新喜楽千奴）、『壺坂』（彫

司）、『酒屋』（友鶴）、『儀作』（菊水）、『梅由』（梅玉）、三味線

（勝玉、呂玉、千代寿）

□昭和8（1933-06-08）『台湾日日新報』

ラデオ欄

今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・三一】義太夫 (台北) 『恋娘昔八丈、鈴ヶ森の段』…浄瑠璃竹本メ吉、三味線竹本メ登太夫

【九・〇五】ハワイアン・ギター (台北) (レコード) 〔以下略〕

義太夫

午後八時三十一分 (台北)

▼『恋娘昔八丈 鈴ヶ森の段』

浄瑠璃 竹本メ吉

三味線 竹本メ登太夫

松貫四、吉田角丸の作で、享保年中江戸新材木町に白子屋といふ材木商があつて、主人庄三郎の娘お熊が、家産の傾いた為め持参金付の髻又四郎を迎へ、お熊はなほ手代忠八と通じてゐた。後に又持参金付の髻を取らんとして又四郎をなきものにしやうとして発覚、大岡越前守の裁判となりお熊は鈴ヶ森で斬罪梟首となつた事実を脚色したもので、全部で七段あるが、内最もよく語られるものは城木屋の段とこの鈴ヶ森の段である

□昭和8 (1933.07.01) 『台湾日日新報』

浄瑠璃大会 大阪浄瑠璃界に名ある鶴澤友栄師は過般台北義太夫同好連の招聘で来台したが友声会主催となり、同師の名披露浄瑠璃大会を七月一日より三日間榮座にて毎夕正六時より開演することになった。素人連の出演ながら三日共出演者は異なり、左の番組にて台北在住師匠連も応援し、最後の掛合物に至つては凝つたものである。入場は無料(写真は友栄師)

◇一日 『御祝儀』(入登)、『先代萩御殿』(友路)、『酒屋』(梅玉)、『忠臣蔵六』(寿)、『紙治内の段』(勇耕)、『堀川』(七二八)、『野崎村』(藤司)、『壺坂』(南玉)、『新口村』(一声)、『引窓』(菊水)、掛合『曾我対面』

◇二日 『御祝儀』(入登)、『朝顔宿屋』(友二三)、『弁慶上使』(松風)、『小坂部館』(五色)、『太功記十』(龍玉)、『新口村』(友鶴)、『堀川』(鳳玉)、『鰻谷』(貴昇)、『鈴ヶ森』(七五三吉)、掛合『野崎村』

◇三日 『御祝儀』(入登)、『合邦』(藤司)、『儀作』(菊水)、『弥作鎌腹』(雷雀)、『宿屋』(静)、『沼津里の段』(松風)、『順礼歌』(友路)、『寺子屋』(土口)、『日吉丸三』(琴馬)、掛合『先代萩対決』

夜八・三二 竹本東猿

□昭和8 (1933-07-20) 『台湾日日新報』
ラヂオ欄
今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇
午前の部 (省略)
午後の部 (省略)
夜間の部

【八・三一】義太夫 (夏季特別サービス) 竹本東猿、第一日『伽羅先代萩 政岡忠義の段』

【九・二〇】氣象通報 (以下略)

此度は女義太夫

夏季特別サービス

第四回 (向ふ七日間)

今東都にあつて女義太夫として元老株、若い時から大阪でその名を知られた竹本東猿師が、夏季特別サービスの第四陣として、いよいよ本日より放送される

初日は／

『伽羅先代萩』

政岡忠義の段』

万治年間に伊達家に起つたお家騒動を骨子として作つたもの、作者は松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸の三人、全部で九段もの、これは六段目の切りである
筋は余りにも有名であるが、中でも政岡が千松の死骸に取すがつて悲嘆にくれる「思ひ廻せば此の程から」以下は最も聴き所であらう

【写真…竹本東猿】

□昭和8 (1933-07-21) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・三一】義太夫 (夏季特別サービス) 竹本東猿 第二日：三十三所花の山―『壺坂靈験記―沢市内の段』

【九・二〇】氣象通報 (以下略)

女房の真情で泣かす

『壺坂靈駢記』

義太夫 沢市内の段』

夜八・三二 竹本東猿

竹本東猿師得意中の得意の出しもの「三つ違ひの兄さんというて暮してゐるうちに情なやこなさんは生れもつかぬほうさうで」——といふ沢市の眼を癒さんものと壺坂の観音に祈る女房の真情は義太夫好きの者の涙して聴く所

□昭和8(1933-07-24)『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北(AK) 周波六七〇/台南(BK) 周波七二〇

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・三二】義太夫(夏季特別サービス)(台北)『絵本大功記』尼ヶ崎の段』 竹本東猿

【九・二〇】気象通報〔以下略〕

義太夫／

『絵本大功記』

『尼ヶ崎の段』

夜八・三二 竹本東猿

作者は近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒、此の大功記は安土の城が初段で、天正十年六月一日から十三日迄の出来事を十四段に分けてあるが、就中今晚演じられる十段目尼ヶ崎の段は最も人口に膾炙して居る

【梗概】尼ヶ崎の閑居に光秀の母皐月と妻操は謀叛人を子に持ち夫に持った身の因果を嘆き、一子十次郎は許婚の初菊とつきぬ名残を惜んで、初陣の門出を急ぐ、そこへ旅僧に身をやつした久吉は、一夜の宿を求めて様子を窺ふ、跡をつけた光秀は夕顔棚の下から、ぬつと現はれて竹槍を以つて襖越しにこれを刺したが、あつと玉ぎる女の悲鳴は母の声

□昭和8(1933-08-01)『台湾日日新報』

義太夫大会 台北淨瑠璃界の人氣者浜田七郎翁が昨今病床に親しむやうになつたので、素義連一同は翁の渡台三十五年記念といふことで、義太夫大会を八月一日より三日間、毎夜六時半より西門町台北稻荷神社社務所で開演する事になり、三吉野、友糸、一平、七五三登、勝玉の諸師、其他全部出演応援することになった。番組左の如し

△一日『御祝儀』（入登）、『寺子屋』（組次）、『妙心寺』（菅枝）、
『阿漕平治』（菊水）、『玉三』（琴馬）、『鈴ヶ森』（七二八）、『日
吉三』（松丸）、『沼津』（藤司）△二日『御祝儀』（入登）、『宿屋』
（静）、『太十』（田鶴子）、『紙治』（鳳玉）、『寺子屋』（五色）、『岸
の姫松』（竹司）、『弁慶上使』（七五三吉）△三日『御祝儀』（入
登）、『玉三』（三峯）、『宿屋』（品子）、『弁慶上使』（勝登）、『寺
子屋』（土口）、『合邦』（宝珠）、『鰻谷古八』（貴昇）、『二谷陣屋』
（雷雀）

□昭和8（1933-08-05）『台湾日日新報』

清元◆保名

夜八時・台北

『深山桜及兼樹振』
みやまのはなしとかねえだふり

浄瑠璃 メ丸

富春

梅丸

三味線 千弥

上調子 桃丸

□昭和8（1933-08-06）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北（AK）周波七六〇／台南（BK）周波七二〇

午前の部（省略）

午後の部

【一・五九】正午の時報△気象通報（台北のみ）台北測候所発
表△放送局編輯ニュース△昼間娯楽時間（レコード演奏）（台
北のみ）△独唱 一、『蚤の歌』（詳細略）二、『巡礼の唄』（詳
細略）三、『祈り』（詳細略）四、『悔改めの門を開かせ給へ』（詳
細略）五、歌劇『アイダ 神々しきアイダ』（詳細略）六、歌
劇（真珠取り）『夢の如き歌声』（詳細略）△義太夫ぎだいふ『本朝
二十四孝、十種香の段』浄瑠璃竹本鍛太夫、三味線豊澤新左衛
門

△昼間娯楽時間（レコード演奏）（台南のみ）△長唄『汐汲』（詳
細略）△ジャズ 一、『南京豆売り』（ルムバ）、二、『あなたを忘
れずに』（ワルツ）（詳細略）三、『靈感』（タンゴ）、四、『古き恋』
（タンゴ）（詳細略）△落語『田楽喰ひ』桂春团治
【一・〇〇】気象通報（台南のみ）〔以下略〕
夜間の部（省略）

ボーカル NO.1 集 [No.1 の誤植か]

昼間娯楽／台北のみ

▲独唱【詳細略】

▲義太夫

『本朝二十四孝、十種香の段』

浄瑠璃 竹本鍛太夫

三味線 豊澤新左衛門

□昭和8 (1933.08.31) 『台湾日日新報』

※夜間の部 2031.21.30 春風やなぎ・柳家つばめ・メ・柳幾代の
『流行小唄』に義太夫文句入り吹き寄せあり。義太夫演奏では
ないため省略。

□昭和8 (1933.09.03) 『台湾日日新報』

友声会温習会 台北浄瑠璃友声会にては二、三両夜本町常盤生
命三階にて大温習会を催す、雨天順延、番組は

▲初日 『合邦』(一声)、『宿屋』(友二三)、『忠四』(藤司)、『太
十』(龍玉)、『酒屋』(雷雀)、『二ツ玉』(菊水)、『陣屋』(菅枝)、
掛合『野崎村』

△二日 『竹に雀』(友栄)、『堀川』(友路)、『古八前』(友玉)、
『対面』(南玉)、『本下』(蘭玉)、『古八奥』(貴昇)、『寺子屋』(士

口)、『沼津里』(松風)、絃友糸、友玉、友二三、友栄

□昭和8 (1933.09.27) 『台湾日日新報』

追善義太夫大会

二十七日から三十日迄、四日間毎夕六時から南門公会堂で故金
柿大路氏追善のため素人義太夫会を開催。入場無料、語りもの
は

△二十七日 『志度寺』(栄枝)、『竹雀』(友栄)、『松王』(蘭玉)、
『矢口』(三峰)、『鳴門』(田鶴子)、『新の口』(一声)、『二ツ玉』
(菊水)、『酒屋』(七五三吉)

△二十八日 『本下』(小路)、『鳴門』(友二三)、『野崎』(柳枝)、
『合邦前』(藤司)、『堀川』(友路)、『寺小屋』(梅玉)、『先代』(竹
司)、『沼津』(琴馬)

△二十九日 『合邦前』(友玉)、『酒屋』(三石)、『合邦奥』(宝
珠)、『岸姫』(組次)、『沼津』(松風)、『壺坂』(南玉)、『日吉丸』
(貴昇)、『鎌腹』(雷雀)

△三十日 『菅四』(南玉)、『陣屋奥』(菅枝)、『三吉子別』(三
松)、『太十』(龍玉)、『忠六』(可笑)、『寺小屋』(士口)、『酒屋』
(鳳玉)、『沼津』(七五三登) △三味線三吉野、七五三登、友糸、
勝玉、富光、大力、七五三吉、友玉、寿玉

□昭和8 (1933-10-31) 『台湾日日新報』

ラヂオ

常磐津／夜八・三／レコード演奏

『三保の松富士晨明／(三保の松)』

浄瑠璃 常磐津松尾太夫

三味線 常磐津文字兵衛

上調子 常磐津梅次

□昭和8 (1933-11-01) 『台湾日日新報』

竹本鐘龍師引退の慰安義太夫会

竹本鐘龍師は、渡台以来三十余年間義太夫界に尽し、今回引退することとなった。台北素義連が一日から四日迄(毎夕六時から)南門公会堂で、同師引退慰安義太夫会を開催

△初日 『御祝儀』、『朝顔日記』、『鰻谷』、『太功記』、『揚屋』、『野崎村』、『御所桜』、『合邦』、『酒屋』

△二日目 『御祝儀』、『勘平腹切』、『太功記』、『先代萩』、『合邦』、『熊谷陣屋』、『玉藻前』、『赤垣出立』、『御所桜』

△三日目 『妹背山』、『曾我対面』、『太功記』、『天の網島』、『鏡山』、『酒屋』、『寺子屋』、『酒屋』、『合邦』

△四日目 『御祝儀』、『寺子屋』、『太功記』、『御所桜』、『百度平内』、『堀川』、『阿波鳴戸』、『酒屋』、『先代萩』

□昭和8 (1933-11-26) 『台湾日日新報』

今日の番組 二十六日／日曜日

午前の部(省略)

午後の部

【一・五九】正午の時報、氣象通報(台北のみ) 台北測候所発表、放送局編輯ニュース、昼間娯楽時間(レコード演奏) 義太夫：『天網島時雨炬燵—紙治の段』：浄瑠璃竹本鍛太夫、三味線豊澤新左衛門△ヴァイオリン独奏 一、『朧月夜』(詳細略)二、『アレグロ』(詳細略)三、『ペルペテウム・モビール』(詳細略)四、『ジヨスリンの子守唄』(詳細略)五、『カルメン幻想曲』(詳細略)

【一・〇〇】氣象通報(台南のみ) [以下略]

夜間の部(省略)

和洋取り混ぜの昼間娯楽

義太夫

浄瑠璃 竹本鍛太夫

三味線 豊澤新左衛門

『天網島』、時雨炬燵』

(紙治内の段)

【解説】此の情死は享保五年十月十五日の明方大阪網島大長寺の墓場にあつた事実談である、それを近松門左衛門がその年の十二月に竹本座で心中天網島と外題して上場したのが初めてである。小春治兵衛が心中した時には近松は住吉の茶屋に遊んでゐたさうで、この事を齎した急使が来たので、直ぐ様「走り書き」と書き出して「謡の本は近衛流野郎帽子は紫の」とつつけたのは有名な話である

ヴァイオリン独奏 (以下略)

□昭和8 (1933.11.29) 『台湾日日新報』

勝玉連義太夫納会

二十九日より三日間毎夜五時半から京町朝日小会館で勝玉連義太夫納会を開催し、入場無料で多数の来聴を歓迎すると。其語り物左の通り

初日 (二十九日) 『御祝儀』、『寺子屋』、『忠六』、『酒屋』、『御所桜』、『新口萩』、『堀川』、『先代萩』、『忠四』△二日目 (三十日) 『御祝儀』、『揚屋』、『本下』、『妙心寺』、『御所桜』、『太十』、

『合邦奥』、『酒屋奥』△三日目 (一日) 『御祝儀』、『重の井』、『先代萩』、『百度平』、『弁慶上使』、『宿屋』、『合邦奥』、『白石嘶』、『梅田』、三味線 (勝玉、友玉、寿玉、北投小春)

□昭和8 (1933.12.03) 『台湾日日新報』

ラヂオ JFAK 台北 周波七六〇 JFBK 台南 周波七二〇
ラヂオ／今日の番組

午前の部 (省略)

昼間の部

【一・五九】正午の時報、気象通報 (台北のみ) 台北測候所発表、放送局編輯ニュース、昼間娯楽時間 (レコード演奏) 浪花節『頼朝の恋』春野百合子、歌舞伎小唄『直侍』(木村富子作詞、柏伊三郎作曲) 台詞市村羽左衛門、唄浅草メ香、義太夫『伊賀越 平作内の段』竹本東広

【二・〇〇】気象通報 (台南のみ) (以下略)

夜間の部 (省略)

日本趣味の昼間娯楽
浪花節・歌舞伎小唄 (略)

義太夫

『伊賀越一平作内の段』

竹本東広

沼津の平作爺さんは和田志津馬が吉原で深く馴染んだ瀬川と云ふ遊女の父である。同じく股五郎を捜してゐると、泊り合せたのが平作の悻の十兵衛で、今は股五郎方のもの。印籠からそれと知り親子の名乗りもならず、平作は腹を切つて漸く股五郎の在所を知ると云ふ筋である

□昭和8 (1933-12-05) 『台湾日日新報』

友声会浄瑠璃納会 鶴澤友糸連の友声会は、五、六両日午後

六時から京町朝日小会館で納会開催。入場無料

語物初日、『御祝儀』（入登）、『太十』（友栄）、『先代萩』（友二三）、『鰻谷』（貴昇）、『一の谷』（龍玉）、『沼津』（松風）、『忠六』（吉（土口か））、掛合『忠臣蔵七段目』由良之助（友糸）、おかる（南玉）、平右衛門（菊水）、糸（友玉）、囃子（梅村操）二日目、『朝顔』（南玉）、『阿漕浦』（菊水）、『竹雀』（友栄）、『紙治』（梅玉）、『野崎』（藤司）、『明烏』（友路）、『本下』（蘭玉）、『陣屋』（雷雀）、糸（友糸）、友玉、友二三

□昭和8 (1933-12-10) 『台湾日日新報』

ラヂオ JFAK 台北 周波七六〇 JFBK 台南 周波七二〇

ラヂオ／今日の番組

午前の部（省略）

昼間の部（省略）

夜間の部

【七・四〇】義太夫（東京）『仮名手本忠臣蔵、七段目（一力茶屋の段）』

【八・三〇】時報（東京）〔以下略〕

ラヂオ名物

今日は義太夫

『仮名手本忠臣蔵（第六回）

一力茶屋の段（七段目）』

夜七時四十分・東京から

配役

由良之助 竹本旭嬢

おかる 豊竹昇之助

平右衛門 竹本東広

九太夫 竹本広春

伴内 竹本久国

力弥 竹本旭次

三味線 豊澤仙平

外はやし連中

【梗概】敵を欺く為めの計略に大星由良之助が祇園の力で遊蕩に耽つてゐると同志の矢間、千崎、竹林等が平右衛門を伴つて容子を見に來たり、九太夫が伴内など案内して這入つて來るが、由良之助はあくまで酔ひ崩れてゐると力弥が御台かほよの文を持參して來たので灯影でそれを読まうとするとお軽が覗き読みするので、由良之助は急にお輕に戯れて身受けすると言ひ出す、お輕の兄の平右衛門は由良之助の心中を察してお輕を斬らうとすると由良之助がこれを支へて本心を明かし、お輕に力を添へて縁の下に忍んでゐた九太夫を刺し殺すと、前に入りこんだ三人侍も初めて大星の苦肉の策を知つて感心すると云ふのである

□昭和8 (1933-12-22) 『台湾日日新報』

常磐津

『新荷雪間の市川』

(新山姥) 夜八時三十一分

台北

浄瑠璃 岸澤古民

三味線 梅本梅奴

上調子 梅本梅恪

□昭和9 (1934-03-10) 『台湾日日新報』

三吉野睦会の浄瑠璃会

三吉野睦会浄瑠璃会は、十日(土曜)十一日(日曜)の両日、毎正六時より南門公会堂に於て開催。入場無料

△初日語物『御祝儀』(入登)、『日蓮記』(嬰木)、『勘平切腹』

(瓢)、『御所桜』(多美次)、『判官切腹』(南枝)、『百度平』(五

色)、『堀川』(七二八)、『阿漕浦』(琴馬)、『逆櫓』(三吉野)、

糸(才五郎)

△二日目『酒屋』(五色)、『揚屋』(南枝)、『梅由』(嬰木)、『太

士』(瓢)、『沼津口』(七二八)、『沼津奥』(琴馬)、『忠九』(三

吉野)、糸(才五郎)、三味線 野澤三吉野 鶴澤才五郎

□昭和9 (1934-03-24) 『台湾日日新報』

勝玉連義太夫会

二十四、二十五の両日午後六時から、台北建成小学校西隣大稲

捏倶楽部で勝玉連季義太夫会を開催する。入場無料多数来聴を歓迎すると。其語り物左の通り

『御祝儀』（入登）、『御所桜』、『寺子屋』（北投一口）、『鳴門』、『太十』（白峰）、『先代』、『鳴門』（友鶴）、『本下』、『酒屋』（彫司）、『鈴ヶ森』、『太十』（勝司）、『沼津』、『合邦』（基隆東）、『安達』、『壺坂』（三松）、『柳』、『梅忠』（松月）、三味線（勝玉）

□昭和9（1934-05-29）『台湾日日新報』

豊竹三玉師の追善浄瑠璃会 栄町朝日小会館階上に於て多年台北浄瑠璃界に尽した故豊竹三玉師の追善浄瑠璃会を、二十九、三十日の二日間毎夕六時より開催。入場無料

初日語物『御祝儀』（入登、『鳴戸』（友栄、『鰻谷』（藤司）、『菅四』（松風）、『合邦』（二声）、『沼津』（貴昇）、『酒屋』（土口）、『本下』（玉珠）、二日目『肉付面』（菅枝）、『忠七』（南玉）、『太十奥』（三峰）、『先代萩』（友路）、『合邦』（鳳玉）、『忠四』（蘭玉）、『酒屋奥』（雷雀）

□昭和9（1934-07-26）『台湾日日新報』

関西女義太夫一行来台

関西女義太夫大阪因会最高幹部合同一行は、来る八月一日よ

り五日間、台北榮座に於て開催。顔触れは

竹本国香、竹本国秀、竹本雛若

豊竹昇鶴、竹本久国、竹本雛駒

三味線豊澤萬之助

今回の義太夫は十年來の事で而も一流幹部で美人揃ひの事とて華やかに感じられる。台北検査と台北素人義界因連の後援あり。前景気盛んである

※「国香」は「国雪」の誤力

□昭和9（1934-07-27）『台湾日日新報』

廿六日より四日間／浄瑠璃大会／於朝日小会館
既報の如く台北素義因会創立記念浄瑠璃大会は、二十六日から四日間、栄町朝日小会館で開催されるが、番組は左の通りである

初日

一、『御祝儀宝の入船』	入登
一、『中将姫（雪責め之段）』	琴馬 糸才五郎
一、『加賀見山（又輔住家之段）』	組次 糸千歳
一、『菅原伝授（寺子屋之段）』	朝日 糸才五郎
一、『撰州合邦ヶ辻（合邦内之段）』	鬼笑 糸勝玉

一、『加賀見山（長局之段）』

美登志 糸勝玉

一、『伊賀越道中双六（沼津里之段）』

七二八 糸三吉野

二日目

一、『御祝儀宝の入船』

入登

一、『朝顔日記（宿屋之段）』

梅玉 糸才五郎

一、『御所桜（弁慶上使之段）』

貴昇 糸勝玉

一、『恋女房染分手綱（三吉愁嘆之段）』

三松 糸勝玉

一、『撰州合邦ヶ辻（合邦内之段）』

可笑 糸大力

一、『大功記十段目（尼ヶ崎之段）』

市丸 糸大力

一、『安達原三段目（袖萩祭文之段）』

三峰 糸勝玉

一、『先代萩（御殿之段）』

友鶴 糸勝玉

二日目

一、『御祝儀宝の入船』

入登

一、『明烏（山名屋之段）』

松風 糸才五郎

一、『義士忠臣蔵（本蔵下邸之段）』

菊水 糸勝玉

一、『恋飛脚大和往来（新口村之段）』

鳳玉 糸大力

一、『菅原伝授（寺子屋之段）』

長楽 糸勝玉

一、『阿波鳴戸（順礼歌之段）』

品子 糸勝玉

一、『一の谷嫩軍記（熊谷陣屋之段）』

雷雀 糸勝玉

一、『御所桜三段目（弁慶上使之段）』

多美次 糸大力

四日目

一、『御祝儀宝の入船』

入登

一、『恋飛脚大和往来（新口村之段）』

松月 糸勝玉

一、『吃の又平（四ツ目之段）』

菅枝 糸才五郎

一、『阿波鳴戸（順礼歌之段）』

栄玉 糸栄玉

一、『絵本太功記（尼ヶ崎之段）』

勝司 糸勝玉

一、『御所桜（笹片袖之段）』

勝登 糸勝玉

一、『伊勢音頭（酒屋之段）』

千歳 糸大力

一、『艶容女舞衣（酒屋之段）』

土口 糸才五郎

□昭和9（1934.8.02）『台湾日日新報』

大阪女義太夫

竹本雛駒一座

初日、二日目番組

この程来台せる大阪女義太夫竹本雛駒一座は、八月一日より栄座に於て毎夜語り物を替へ上演するが、初日二日目の番組は左の通りである

△初日 『一の谷須磨の浦』—勝登、『三十三間堂柳』—国雪、『日吉丸五郎助内』—雛若、『お染久松野崎村』—昇鶴、『撰州合邦ヶ辻』—久国、『三十三所壺坂』—雛駒、糸—豊澤鳶の助

△二日目『迎駕梅の由兵衛』―勝登、『忠臣蔵勘平切腹』―国雪、『和田合戦市若初陣』―雛若、『岸の姫松飯原館』―昇鶴、『おはん長右衛門帯屋の段』―久国、『先代萩御殿』―雛駒、糸―豊澤萬の助

□昭和6 (1931.08.25)『台湾日日新報』

新竹の素人浄瑠璃公開

【新竹電話】新竹市の浄瑠璃同好者十数名は、二十七日午後六時半より新竹座に於て、一般に公開批判を乞ふこととなつてゐる。同夜は入場料は勿論お茶代その他の小物代も一切無料の由

□昭和9 (1934.09.15)『台湾日日新報』

鶴澤才五郎名披露浄瑠璃会

市内佐久間町南門公会堂に於て十五日より四日間、鶴澤才五郎名披露の浄瑠璃会を、毎夕六時半から開催する。入場無料語物は

△初日『御祝儀』(入登)、『本下』(七二八)、『梅由』(勝登)、『寺小屋』(松風)、『鰻谷』(貴昇)、『忠四』(南枝)、『合邦』(鬼笑)、『酒屋』(一声)

△二日目『寺小屋』(三尾)、『合邦』(嬰木)、『日吉丸』(多美次)、

『松王屋敷』(蘭玉)、『沼津』(鳳玉)、『明烏』(雷雀)、『中将姫』(琴馬)

△三日目『酒屋』(千歳)、『忠五』(菊水)、『安達』(栄玉)、『恋女房』(三松)、『一の谷』(瓢)、『猿廻』(藤司)、『梅由』(梅玉)△四日目『百度平』(五色)、『鳴戸』(朝日)、『酒屋』(士口)、『野崎』(友鶴)、『朝顔』(品子)、『布引』(菅枝)三味線 三吉野、勝玉、友玉、大力、才五郎

□昭和9 (1934.11.10)『台湾日日新報』

浄瑠璃納会 十日、十一日の両日午後六時より南門公会堂で大力連納浄瑠璃会を開く由(入場無料)

△初日語物『合邦』(可笑)、『御所桜』(多美次)、『鈴ヶ森』(市丸)、『阿波鳴戸』(栄玉)、『新吉原』(松風)、『梅由』(千歳)、『日吉丸』(琴馬)

△二日目『日吉丸』(栄玉)、『忠六』(松風)、『又助』(多美次)、『菅四』(可笑)、『新の口』(鳳玉)、『沼津』(藤司)、『長局』(琴馬)、糸 吉田大力 中尾千歳

□昭和9 (1934.11.23)『台湾日日新報』

義太夫納会

二葉連 二十三、二十四日の両日、毎夕六時から、南門公会堂で南門二葉連納会を開く。入場無料。語物左の如し

△初日『八陣』（嬰木）、『源藏出立』（南枝）、『菅原』（五色）、『寺小屋』（松風）、『猿廻し』（七二八）、『壺坂』（つるえ）、『忠九』（琴馬）

△二日目『重の井』（つるえ）、『伊賀越』（七二八）、『日吉丸』（五色）、『野崎』（南枝）、『合邦』（嬰木）、『鏡山』（瓢）、『布引』（菅枝）、―三味線鶴澤才五郎、ツレかよ子、つるえ

勝玉連 廿三、廿四日の両日毎夜六時から文化村城東倶楽部で勝玉連義太夫納会を開く。入場無料。語り物左の通り

△初日『御祝儀』（美登志）、『太十』（友鶴）、『十種香』（松月）、『鳴門』（品子）、『安達』（三峰）、『宿屋』（勝司）、『重の井子別』（三松）、掛合『野崎村』（総出）

△二日目『御祝儀』（勝司）、『弁慶』（三峰）、『寺子屋』（一口）『谷組打』（南玉）、『酒屋』（友鶴）、『新口村』（静糸）、『二ツ玉』（菊水）、掛合『茶屋場』（総出）糸（勝玉、友玉、千代寿）

□昭和9（1934.12.12）『台湾日日新報』

新声会浄瑠璃納会

十二、十三の両日午後六時から南門公会堂に於て、新声会浄瑠璃会開催。多数来聴を希望すると

△十二日語り物

『朝顔』（勝司）、『竹の間』（友栄）、『新口』（貴昇）、『酒屋』（友鶴）、『忠四』（蘭玉）、『妙心寺』（雷雀）

△十三日語り物

『弁慶』（友栄）、『太十』（龍玉）、『御殿』（勝司）『須磨浦』（南玉）、『阿漕』（菊水）、『太十奥』（三峰）、『百度平』（一声）、三味線友玉、千代寿、勝玉

□昭和10（1935.02.01）『台湾日日新報』

二葉連の義太夫初会

二月一二日の両日午後六時から、南門二葉連の義太夫初会が南門公会堂で開演される

□昭和10（1935.03.10）『台湾日日新報』

けふの催し

△浄瑠璃会 十、十一の両日午後七時より本町一九館にて

□昭和10（1935.04.18）『台湾日日新報』

送別義太夫大会

市野美登志氏送別義太夫大会が、十八日から二十一日まで四日間、毎夕六時から栄町朝日小会館で催される。語物は左の如し

◇初日『御祝儀』（入登）、『三日九』『艶司』、『又助』（千奴）、『梅由』（可笑）、『二度目』（友栄）、『布四』（美登志）、『本下』（南玉）、『菅四』（長楽）、『宿屋』（千房）、『沼津』（一声）

◇二日目『御祝儀』（入平）、『鳴津』（白峯）、『安達』（三峯）、『一の谷』（瓢）、『新の口村』（松風）、『阿漕』（要木）、『日吉』（品子）、『壺坂』（静糸）、『八陣』（勝司）、『忠九』（琴馬）

◇三日目『御祝儀』（入昇）、『先代萩』（三松）、『鳴門』（勝登）、『又助』（千歳）、『梅忠』（貴昇）、『忠四』（美登志）、『炬燵』（鳳玉）、『忠六』（多見次）、『堀川』（蘭玉）、『白木屋』（三吉野）

◇四日目『御祝儀』（入楽）、『弁慶』（松濤）、『合邦』（藤司）、『十種香』（松月）、『菅四』（一口）、『野崎』（友鶴）、『明烏』（雷雀）、『安達』（栄玉）、『二ツ玉』（菊水）、『布四』（菅枝）

◇三味線鶴澤才五郎、同竹本勝玉、村崎友玉、吉田大力、市野千代寿

□昭和10 (1935-08-03) 『台湾日日新報』

義太夫会 二葉連義太夫会は三、四両日午後六時より、南門公

会堂に於て南門二葉連の納涼義太夫会開催。入場無料

□昭和10 (1935-10-11) 『台湾日日新報』

勝玉連義太夫会 始政四十周年を記念して勝玉連は十一、十二の両日、午後六時から南門公会堂で義太夫会を開く（入場無料）。語り物は左の如し

△初日『御祝儀』（入登）、『鎌三』（勝登）、『鳴戸』（友栄）、『日吉』（秀豊）、『梅忠』（勝司）、『沼津』（松風）、『堀川』（蘭玉）、掛合『須磨の浦』（南玉、龍玉）

△二日目『御祝儀』（入登）、『朝顔』（勝司）、『菅四』（松濤）、『梅由』（勝登）、『三日九』（龍玉）、『太十』（白峯）、『先代』（南玉）、『本下』（一口）、三味線—竹本勝玉、友玉

□昭和10 (1935-10-12) 『台湾日日新報』
今日の催し

△勝玉連義太夫会 午後六時より南門公会堂にて

□昭和10 (1935-11-19) 『台湾日日新報』

政談演説で義太夫一席／新手の策戦

【新竹電話】新竹市議候補石井員夫氏は普通の政談演説では人

が寄らないとあつて珍妙な演説会を発売し、新竹署の許可を得たので、十九日夜七時から鉄道クラブに於て開催することとなつたが、まづ露払いとして有本兼治氏が義太夫太閤記を語り、次いで石井氏が支那漫遊中上海に於て爆弾に遭難した一くさりを述べ、ちよつびり選挙に触れ肩の凝らぬやうに聞かせようと云ふ趣向で、この催しに成功すれば旭町クラブに於ても催す筈である

□昭和10 (1935-12-07) 『台湾日日新報』

三吉野陸連義太夫納会 三吉野陸連義太夫納会は七、八の両日、午後六時半から南門公会堂で開演する。語物は初日『御祝儀』(入登)、『酒屋』(五色)、『儀作腹切』(七二八)、『熊谷陣屋』(瓢)、『合邦』(嬰木)、『近江八』(つるえ)、『古八』(三吉野) 二日目『寿司屋』(嬰木)、『本下』(瓢)、『堀川』(七二八)、『菅四』(五色)、『壺坂』(つるえ)、『二十四孝勘助内』(三吉野) 糸三吉野

□昭和10 (1935-12-08) 『台湾日日新報』

本日の催し

△三吉野陸連義太夫納会 午後六時半より南門公会堂にて

□昭和10 (1935-12-15) 『台湾日日新報』
今日の催し

△新声会勝玉会合同義太夫納会 午後六時から栄町理容会館で勝玉会新声会の合同浄瑠璃納会 台北勝玉会新声会合同浄瑠璃納会は十二月十五、六の両夜午後六時から、栄町理容会館(天野医院隣)に於て催されるが、同好者多数の来聴を歓迎する由

演芸

竹本勝玉の義太夫大会／十五日より理容会館で

竹本勝玉師は渡台二十五年を記念して二月十五日より五日間毎夕六時より市内新公園前理容会館に於て「義太夫大会」を開催する。初日より三日目までの語物番組は左の通り

初日『傾城阿波鳴戸』(入登)、『朝顔日記』(長門)、『伊賀越』(吾妻)、『金毘羅御利生』(嬰木)、『仮名手本忠臣蔵』(常竹)、『絵本太功記』(巴)、『増補忠臣蔵』(朝日)、『明烏雪曙』(つるえ)、『仮名手本忠臣蔵』(菅枝)

二日目『絵本太功記』(富村)、『御所桜』(平和)、『傾城阿波鳴戸』(友栄)、『先代萩』(品子)、『三日月太平記』(龍玉)、『撰

州合邦ヶ辻（つるゑ）、『鎌倉三代記』（栄玉）、『菅原伝授手習鑑』（蘭玉）、『恋女房染分手綱』（三松）

三日目 『日吉丸稚桜』（勝登）、『御所桜』（秀豊）、『菅原伝授手習鑑』（長楽）、『増補忠臣蔵』（瓢）、『蝶花形』（すみはる）、『仮名手本忠臣蔵』（南玉）、『近頃河原達引』（七二八）、『仮名手本忠臣蔵』（菊水）、『御所桜』（雷雀）

□昭和11（1936-02-18）『台湾日日新報』

演芸

竹本勝玉の義太夫番組／四日目と五日目

既報竹本勝玉師の渡台二十五年記念義太夫大会の四日目、五日目の番組は次の通り

十八日（火曜日）

『彦九』（友栄）、『三勝半七酒屋の段』（松濤）、『朝顔日記』（勝登）、『鎌倉三代記』（栄玉）、『千代萩』（友路）、『菅原伝授手習鑑』（円治）、『近頃河原達引』（鳳玉）、『古手屋八郎兵衛』（貴昇）、『迎籠梅野由兵衛』（梅玉）

十九日（水曜日）

『御祝儀』（友栄）、『松王』（勝司）、『日吉丸』（松濤）、『菅四』（一口）、『合邦』（藤司）、『堀川』（友路）、『一之谷嫩軍記』（樵風）、

『撰州合邦ヶ辻』（艶司）、『加賀見山』（文華）

□昭和11（1936-05-16）『台湾日日新報』

三吉野陸会、浄瑠璃会 三吉野陸連浄瑠璃会は十六、七日の両日、午後六時半から南門公会堂で開催されるが、苦題は左の通り
初日 『御祝儀』、『加賀見山』（又助往来）、『太功記十段目』、『義士（赤垣出立）』、『朝顔日記』、『恋女房染分手綱』、『加賀見山（長局）』

二日目 『御祝儀』、『伊賀越』、『阿波鳴門』、『忠臣蔵（判官切腹）』、『金比羅利生記』、『三勝半七』、『日吉丸』

□昭和11（1936-10-16）『台湾日日新報』

友伊久氏披露義太夫大会 義太夫友愛会では今回義太夫三絃界の権威、鶴澤友次郎師の門人鶴澤友伊久師を聘し義太夫の稽古を始めたので十七、十八、十九、二十の四日間毎夜六時から新公園前の理容会館に於て、友伊久師披露義太夫大会を開催することとなった（入場無料）

□昭和11（1936-11-18）『台湾日日新報』

追善義太夫会 丹羽一声氏追善義太夫会は、来る十八、九両日、

午後六時から新公園前の理容会館に於て開催する。語物十八日
『志渡寺』（金柿）、『酒屋』（竹司）、『太十』（龍玉）、『日吉丸』（梅
豊）、『日蓮記』（清玉）、『炬燵』（鳳玉）、『忠六』（雷雀）、掛合
『二ツ玉』、十九日『合邦』（鳳玉）、『先代』（南玉）『弁慶』（友
栄）、『鳴戸』（友路）、『沼津』（藤司）、『儀作』（蘭玉）、『新ノ口』
（貴昇）、掛合『野崎村』

□昭和11（1936-12-05）『台湾日日新報』
義太夫の聯合納会 鶴澤友伊久 竹本勝玉両師の聯合納会は、
六日午後六時から南門公会堂で開催（入場無料）。プログラム
次の通り

『御祝儀』（入登）、『日吉丸』（梅豊）、『一の谷』（龍玉）、『毛谷
村』（友栄）、『先代萩』（南玉）、『太十』（大力）、『木下』（松濤）、
『明烏』（清玉）、『壺坂』（友路）、『白木屋』（菊水）、『河庄』（鳳
玉）、『堀川』（蘭玉）、『忠四』（菅枝）、『酒屋』（雷雀）、『千両
幟』（掛合）、『忠七』（掛合）、糸、友伊久、勝玉

□昭和12（1937-02-10）『台湾日日新報』

会事

△新竹素人義太夫大会 十二日午後六時半より新竹クラブ日本

間（新竹電話）

□昭和12（1937-04-16）『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・三〇】義太夫（大阪）

【八・〇〇】講演（台北）〔以下略〕

大阪七、三〇

義太夫／『磐城恋飛脚』／新口村の段

浄瑠璃竹本清糸さんは、大阪播重座の真打で義太夫界の花形と
して名声噴々たり糸の豊澤仙平さんも同じく播重座に属し
義太夫三絃界で令名を謳はれてゐる、演し物は義太夫愛好家には
余りに膾炙されてゐる名曲傾城恋飛脚新口村の段

浪華淡路町の飛脚屋渡世の亀屋忠兵衛は北の新地へ通行の際
鼻紙袋を落した時通りがかりの芸者榎屋の梅川に打込んで終つ
た。そしてやがて金に窮し西国方から廻つた封印金を一時融通
した。遂に入牢を被仰付けられたのが宝永七年十二月で、忠兵

衛は十日許りで牢死、梅川は尼になつたと云はる。この新口村の段は捕手に囲まれた二人が危い所で落ちのびる所である

□昭和12 (1937-03-06) 『台湾日日新報』

今日の催し

△素人浄瑠璃会 午後六時理容会館

素人浄瑠璃会

台北素義連は六七の両日午後六時から新公園前の理容会館に於て、春季素人浄瑠璃会を開催する由。入場料は無料。一般多数来会を希望してゐる。尚プログラムは次の通りである

六日語物『柳』(友子) 掛合(『曾我』)、『堀川』、『油屋』(『弁慶』)、『赤坂』

七日『忠臣蔵』三段目から、七段目まで

因みに糸は竹本勝玉、吉澤友玉、鶴澤伊久師である

□昭和12 (1937-03-07) 『台湾日日新報』

今日の催し

△素人浄瑠璃会 午後六時 理容会館

□昭和12 (1937-04-23) 『台湾日日新報』
ラヂオ

清元(台北のみ/九・〇〇)

『深山桜及兼樹振』
みやまのはなとけふみえだかり

浄瑠璃 清元吉栄太夫

三味線 清元弥生

□昭和12 (1937-05-06) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・五五】義太夫(東京)

【八・三〇】時報(東京)〔以下略〕

義太夫／『日本振袖始／大蛇退治の段』
ぎだいいふ

七・五五 東京から

此の曲は近松門左衛門作の浄瑠璃で、初演は享保三年二月大阪竹本座、素戔鳴尊が木花開耶姫（ヤ）姫に恋してこれを奪はんとする隙に乗じて、悪鬼は岩長姫に化けて十握の宝剣を奪ひ去る。尊

は宝剣を尋ねて出雲の簸の川原に到り、そこで大蛇の犠牲になる稲田姫を救ひ、八岐大蛇を酒の計略で退治し、その腹を裂いて宝剣を取戻し稲田姫を妻にし給ふ……と云ふ筋の曲、出演者は次の通り

岩長姫実は大蛇―豊竹つばめ太夫、稲田姫―竹本越名太夫、素
戔鳴尊―竹本叶美太夫、三味線野澤勝平

□昭和12 (1937-05-07) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・三二】義太夫^{ぎだいいふ}（台北）

【九・〇〇】ジャズ（台北）〔以下略〕

義太夫^{ぎだいいふ}（台北八・三二）／加藤三吉郎

△『中将姫古跡の松（雪貞の段）』

△『三略巻五条橋弁慶』

□昭和12 (1937-05-12) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・三〇】人形浄瑠璃（大阪）

【八・三〇】時報（東京）〔以下略〕

土佐太夫引退興行／人形浄瑠璃／七・三〇文楽座より中継

竹本土佐太夫は現在日本義太夫^{ぎだいいふ}界の巨星として錚々たる名声を謳はれ斯界稀に見る美音の持主として其の芸風は今日完成の境地に達し、老来益々渾然たる芸能に聴く者をとう然^{（ママ）}たらしめてゐたが、今回功成り名遂げ斯界を引退する事になつたので今夕師自ら文楽座に思ひ出の最後の出演となつたのである

演し物は師の十八番の一つ『桂川連理柵／帶屋の段全曲一時間に亘る熱演』

『桂川連理柵／帶屋の段』

浄瑠璃 竹本土佐太夫

三味線 野澤吉兵衛

此の浄瑠璃が最初に上演されたのは安永五年十月大阪堀江へ

の側芝居での操浄瑠璃、作者は菅伝助^(註)或は近松東南の作として

上場された又後天明元年四月江戸市村座で桜田治助作で『お半

長右衛門道行瀬川の仇浪』と題して上演された

全部は上下二巻からなり、上巻は六角堂の場で、下巻がいの

帯屋の段である

鳴物 福原百之助社中

△『松廼羽衣』

□昭和12 (1937-05-16) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・四五】義太夫^{ぎだいふ}（東京）

【八・三〇】時報（東京）〔以下略〕

『道行萍翫鷗』（お染）

義太夫^{ぎだいふ}（東京七・四五）／『近頃河原達引／堀川の段』

浄瑠璃 清元喜久太夫／外二名

三味線 清元梅吉 一名

浄瑠璃 竹本鍛太夫

三味線 豊澤新左エ門

豊澤新太郎

□昭和12 (1937-05-15) 『台湾日日新報』

ラヂオ

常磐津（東京／八・〇〇）

浄瑠璃 常磐津松尾太夫

同 常磐津宮尾太夫

三味線 常磐津文字兵衛

上調子 常磐津八百八

この曲はお俊伝兵衛の心中情話を脚色した浄瑠璃、三巻物でこの堀川の段は中の巻である。

井筒屋伝兵衛が命にかけて惚れた祇園近江屋の抱お俊を横合から出て張り合つたのは勢州亀山の家中横淵官左衛門と云ふ悪侍伝兵衛に三百両の偽金を掴ませて八橋の鏑を奪つた上に四条

河原で散々に擲つたり蹴つたりの非道にさすがの伝兵衛も憤怒に堪へず遂に官左衛門をその場に殺害して人殺しの科人となる。お尋ね者の伝兵衛が落ちて行つたのはお俊の兄猿廻し与次郎とて堀川の片辺に盲目の老母を養ふ律義者の佗住居、既にお俊と謀し合せて心中の覚悟である。与次郎は最初こそ門口を閉ざして男を入れずお俊に去り状まで書かせたが死ぬ程思ひつめた兩人の仲、兄の情で心中を合点して兩人を落してやり門出の祝儀にお初徳兵衛の猿舞をはなむけとする。やがて聖護院の森にお俊と相抱いて死なうとした伝兵衛は官左衛門の悪事露顕して殺し得となり兩人は天下晴れて夫婦となると云ふのが此の曲の大筋である。

□昭和12 (1937-07-01) 『台湾日日新報』

人形浄瑠璃南部太夫一行来台

古典的芸術として独り大阪にのみ存在する文楽新義座の人形浄瑠璃南部太夫一行は愈々七月十八日入港の蓬萊丸で来台、十九、二十日の両日榮座で開演する由

□昭和12 (1937-07-07) 『台湾日日新報』

ラデオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・〇〇】人形浄瑠璃（大阪）：豊竹呂太夫、友右衛門

【八・〇〇】落語名作選第二夜（東京）〔以下略〕

人形浄瑠璃（大阪七・〇〇）

『菅原伝授手習鑑』

四ツ橋文楽座から中継

浄瑠璃 豊竹昌太夫

三味線 豊澤友衛門

松王首実験の段

この浄瑠璃は延享三年八月竹本座初演に初まり作者は竹田出雲並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作で、この『寺小屋』は竹田出雲の作と伝へられてゐる、初演当時竹本座はこの浄瑠璃で異常な盛況を見翌年三月迄大入続で竹本座の衰運を挽回し得たと云ふ名作

菅公の御世継菅秀才は芦生の里に寺小屋を開いてゐる武部源蔵が我子の如くにして囲まつてゐる、源蔵は今の妻戸浪と恋に落ちその為菅公のお館を勘当になつたのであるが菅公にその才能

を惜しまれて筆法伝授を受けた大恩は一身を賭しても忘れなかつたのである、この菅秀才のことがいつか時平公の耳に入りその首打つて渡せと厳命をうけて源藏はとぼとぼと我家へ帰つて見ると一人今日入門した伶俐な子供があつた、夫婦はお主のために代へられぬとその子の首を打つて身替りに立てた檢視の役は松王丸であつた、病にまぎらして咽ぶのも道理、その首の子は現在の我子女房の千代と謀つてお主のため我子を犠牲に身替に立てたのであつた、松王丸の本心も見え菅秀才は御台と共に河内国へ落ちて行かれるといふのであるが、哀音迫るいろは歌の野辺の送りには誰でも瞼に涙を宿す親子恩愛の情味が流れてゐる

□昭和12 (1937-07-09) 『台湾日日新報』

ラヂオ

一中節 (東京／七・〇五)

『小町少将道行』

浄瑠璃 菅野序遊

三味線 菅野序園

□昭和12 (1937-07-18) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・三一】義太夫(台北)

【九・二〇】氣象通報：台北觀測所発表〔以下略〕

義太夫(台北八・三一)

『奥州安達ヶ原』

浄瑠璃 豊竹つばめ太夫

三味線 豊澤猿糸

今回来台した義太夫界の錚々豊竹つばめ太夫と豊澤猿糸さんの出演放送、つばめ太夫は本年三十四歳の新進第一人者として義太夫界に声名を謳はれてゐる人で、小学校在学中既に豊竹古朝太夫師の下に入門、天授の技は日ならずして師匠を驚嘆せしめ大正末年二代目つばめ太夫を継承、豊澤猿糸は明治三十六年松葉屋の名跡を譲られ、三十七年二月恩師の歿後一時文楽座を退き堀江座に出たが、後再び文楽座に帰り、大正十一年正月豊澤猿糸を襲名、披露に『加賀見山』を弾き一躍斯界に認められ今日に至つた

『奥州安達原』の書卸しは宝暦十二年九月の大阪竹本座作者は竹田和泉、近松半二等、前九年の役の安倍貞任宗任兄弟を主題として、これに謡曲の『安達原』『善知鳥』の趣向を加味した全五段物で就中この第三段目の僭仗館袖萩祭文が最も有名親しまれてゐる

□昭和12 (1937-07-21) 『台湾日日新報』

人形浄瑠璃日延べ 栄座で開演中の大阪文楽新義座の人形浄瑠璃は非常な人気を呼んでゐるが後援会では二日間では物足らずとて二十一日まで日延開演することになった、二十一日の語物は『御祝儀宝入船』『日吉丸稚桜(小牧山城中の段)』『三十三間堂棟由来(平太郎住家の段)』『三十三所花の山(壺坂寺の段)』『菅原伝授手習鑑(寺小屋の段)』『肉弾三勇士(廟行鎮の段)』

□昭和12 (1937-07-28) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・五〇】義太夫(大阪)

【八・三〇】時報(東京)〔以下略〕

義太夫(大阪七・五〇)

浄瑠璃 竹本叶太夫

三味線 鶴澤友造

『二葉楠』

久子の方意見の段』

義太夫愛好家にお送りする竹本叶太夫の久方振りの出演、糸は鶴澤友造さん、曲は、『二葉楠 久子の方意見の段』である

□昭和12 (1937-08-05) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・〇〇】義太夫(東京) 日吉丸稚桜

【七・三〇】水十夜(第四夜)〔以下略〕

義太夫(東京七・一〇)

『日吉丸稚桜』

〔小牧山城中の段〕

浄瑠璃 竹本米太夫

三味線 竹澤仲造

此の浄瑠璃は、秀吉が木下藤吉郎時代に、堀尾茂助の案内で、間道口から進み、斎藤龍興が居城である美濃の稲葉山の城砦を陥れたといふ事と、清正が鍛冶屋の悴で幼少で父を失ひ母の縁で秀吉の許に養はれ遂に其の臣下となつて武名を顕はしたと云ふ『絵本太功記』の一節を綜合してこしらへたもので享保元年十月大阪豊竹座で上場され、作者は近松柳、近松梅枝軒、近松加造、近松万寿の四人である

□昭和12 (1937.11.03) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼

【一・五〇】義太夫 (東京)

【二・二五】講談 (東京) 〔以下略〕

夜〔略〕

義太夫 (東京一・五〇)

浄瑠璃 竹本小土佐

三味線 豊澤美佐尾

△『菅原伝授手習鑑 (寺小屋の段)』

□昭和13 (1938.01.20) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・〇〇】義太夫 (大阪)

【八・三五】和洋合奏 (東京) 〔以下略〕

義太夫 (大阪八・〇〇)

浄瑠璃 竹本角太夫

三味線 豊澤新造、外

△『義経千本桜道行初音旅 吉野山の段』

此の浄瑠璃は、延享四年十一月大阪竹本座で上演した『義経千本桜』の四段目で、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳の三名である、この浄瑠璃は無論夢幻劇で五段よりなつてゐる、この千本桜が江戸で芝居として上場されたのは延享五年五月中村

座であつた

□昭和13 (1938.02.01) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・五五】義太夫^{ぎだいふ} (大阪)

【九・三〇】時報 (東京) 〔以下略〕

義太夫^{ぎだいふ} (大阪八・五五)

『傾城阿波の鳴戸』

浄瑠璃 豊竹昇之助

三味線 豊澤力松

この浄瑠璃は、明和五年六月大阪竹本座で上演された『傾城阿波鳴戸』の八段目で作者は近松半二、八民平七、寺田兵蔵、竹田文吉、竹本三郎兵衛の五人である。大体の趣向は、阿波徳島の藩主三木家の御家騒動で、忠義の家老桜井主膳が悪人小野田郡兵衛の為に主家の重宝国次の名刀を盗まれて困難したが、旧臣十郎兵衛、お弓夫婦及び藤屋伊左衛門等の艱難苦心によつて

悪人から再び名刀を取返し主家が安泰になるといふ筋で、宝永七年七月近松門左衛門が書卸した『夕霧阿波鳴戸』の翻案である。十郎兵衛が我子のお鶴を殺した場所は、其当時阿波の浪人某が大坂玉造辺に仮住居して家計の道なきままに詐欺強盗夜盗追剥等とあらゆる悪業をして多くの人を悩まして居たが、或時順礼の子が金持て居るのを知つて、欺いて家に連れ帰り、深夜縊り殺し、窃かに其死骸を猪飼野の畑中へ埋め隠した。然るにこれが露顕して召捕られ重罪に処せられたといふ実説を取り入れたので、此の浄瑠璃は全部十段続きであるがこの順礼歌の件だけが特に名高く専ら上場されてゐる。

□昭和13 (1938.03.07) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・四〇】人形浄瑠璃^{マア} (大阪) (大阪新町演舞場より中継)

【九・三〇】時報 (東京) 〔以下略〕

人形浄瑠璃

八・四〇／大阪から

△『妹背山婦女庭訓（山の段、背山の段）』

大判事…竹本相生太夫

三味線…鶴澤道八

久我之助…竹本源太夫

三味線…野沢吉佐

妹山の段

定高…豊竹つばめ太夫

三味線…竹澤団二郎／外四名

此の曲は明治八年正月書卸されたもので、作者は近松半二、松田ばく、栄善平、近松東南の四名で、外に後見として三好松洛が行年七十六才と肩書して名を出してゐる

この浄瑠璃は王朝時代の入鹿の暴政を背景にしたもので、武士の意地つくから紀州背山の領主大判事清澄と、大和妹山の領主太宰の山式国人の後室が、国境の吉野川を境にして互に反目して軋轢をつづけてゐたが、清澄の倅久我之助清船は何時しか国人の遺子雛鳥と恋愛関係を結ぶ、然るに当時国勢を左右してゐた、入鹿が其の権政を恃んで雛鳥を後宮に迎へやうとし其の手段として清船に難題を言ひかけて自滅させる、雛鳥も入内を拒

み、清船に操を立てて母の手にかかつて蕾の花を散らすといふ筋である

□昭和13（1938.04.17）『台湾日日新報』

人形浄瑠璃／大阪文楽「新義座」／廿、廿一の両日栄座で世界に誇る本邦唯一の国粹芸術人形浄瑠璃は古い伝統と歴史を持つてゐる大阪文楽が其の代表的なものである。此の最高の芸術殿堂より伸び行く芸術的使命に目覚めて、敢然脱退した竹本南部太夫、並に野澤勝平新進気鋭の二団は、全島義太夫界の理解ある同情と支援のもとに昨年渡台し、圧倒的人気を博し、年年衰へ行く歌舞伎及浄瑠璃の為に心強き記録的成績を残したが、本年は愈々内容を充実し、再度渡台を決行し、来る二十日より二日間、栄座に於て公演することになった、一行は竹本南部太夫、竹本陸路太夫、竹本美叶太夫、竹本隅栄太夫、竹本越名太夫等の義太夫連に野澤勝平、野澤勝芳、野澤網延、野澤徳若等の三味線連の一行にお馴染みの桐竹門造が指導する乙女人形の二団を加へたる四十余名の大一座である、尚今回は特に支那事変で感激を与へた有名な山中尉の母を浄瑠璃化した軍国美談『代唱万歳母書簡』を座員総出にて掛合演出するさうである

□昭和13 (1938.10.10) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・五〇】人形浄瑠璃（大阪）（大阪四ツ橋文楽座より中継）

【九・三九より四〇分】の時報（東京）〔以下略〕

人形浄瑠璃

（大阪／八・五〇）大阪四ツ橋文楽座より中継

浄瑠璃 （マ）
竹古朝太夫

三味線 鶴澤清六

『玉藻前囃袂』

この浄瑠璃は宝暦元年正月大阪豊竹座で上演した『玉藻前囃の袂』三段目で、作者は浪岡橋平、浅田一鳥、安田蛙桂である。大体の構想は、殺生石の伝説を題材として鳥羽帝の御兄薄雲王子の反逆で妖狐の化現と、玉藻前とを取合せて作り上げたもので、此の三段目道春館と四段目の十住住家が最も現はれてゐる。

〔写真…豊竹古朝太夫〕

□昭和13 (1938.11.10) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・五〇】人形浄瑠璃（大阪）（大阪四ツ橋文楽座より中継）『恋娘昔八丈鈴ヶ森の段』…浄瑠璃—豊澤駒太夫、三味線—鶴澤清

二郎

【九・三九】九・四〇時報（東京）〔以下略〕

人形浄瑠璃

大阪・午後八時五〇分

—大阪四ツ橋文楽座より中継—

お駒才三／『恋娘昔八丈』／鈴ヶ森の段

浄瑠璃 豊竹駒太夫

三味線 鶴澤清二郎

□昭和14 (1939.01.09) 『台湾日日新報』

独逸人が独逸語で／忠臣蔵を演出

俳優の足袋、大さ十六文／浄瑠璃語りもつけ大成功

【ベルリン中西特派員発】押し迫つた歳の暮であつた、日独協会から突然全く突然に「忠臣蔵劇招待券」が郵送された。日本でも義士祭のある十二月中旬だ、一体誰がやるのか、どんなにしてやるのか。どこの言葉で等々、疑問が次から次へ起つて来る

どんなことがあつても万障繰合せて出席する氣になつたのである。場所は

伯林の 西部シヤロツテンブルグ区のツリプユーネ劇場、と云つても、精々二百人這入れるか這入れないかと云つた小劇場ではあるが、中に這入ると、小さいながら舞台もあり、中央には花道までがチャンと作つてある

プログラムを貰つて見ると

日本歌舞伎を独逸語に翻訳して日本式に生かせて演出する、日独協会主催、ベルツ・エルウイン・トク演出、独逸演劇学校生徒出演、ウエルネル・カーレ監督

衣裳 鬘は純日本物使用、浄瑠璃ギーゼ氏、日本式拍子木ノイマン氏ハヤノ・カンペイ、ボルド氏、オカル、リュディングハウゼ嬢等々役割、第一幕山崎街道、第二幕山崎村与市兵衛宅（翌朝）忠臣蔵説明書出演は三日間、等其他

やがて定刻になるとベルツ氏の説明があつた。

日独文化協定が出来た。独逸人は日本人を真実に知らなければならぬ、外面はもとより日本人の精神をも識らなければならぬこの意味から本劇を独逸語で独逸人の手により演出し、独逸人自身で出演することを企てて独逸演劇学校の後援を得た。さていよいよとなると諸種の難問題に遭遇した、第一に

浄瑠璃 と云ふものを独逸語に訳して節をつけて見ると、初めはとんでもないものになつた。しかし熱心は成功の母で、とにかく何とか、日本式に感ずるやうになつた、次に生活状態の全然異なる独逸人には、日本式にすわることや、座したまま立ち上ることが困難だ。最も困つたことは三十分以上も浄瑠璃語りの男は座り通しであるから、稽古のときいつも足がシビれてあとから大変である、殊に女型になる女優は五十人もの学生からより抜いた、たつた二人しか立ち座りすることが出来るものがなかつた。次に困つたことは男優全部が六尺豊かの大男で、折角出来た舞台の家の中で、立つと髷が天井にスレスレでヒヤヒヤさせる。またゲルマン族で

髪の毛の色が茶乃至ブロンドが多い、日本の鬘をつけると、頭が黒くて、目のあたりがどうもつり合はない。足袋の如きはたいてい十五文十六文と云ふので、足袋や草鞋は二足をきり合

せて一足にすると云つたかくれた苦心がある、元来日本の俳優は全部の行動に形があつて幕あけから幕降りまでの一挙足一挙手総て形通りの踊である。日本人は十年も踊を稽古して舞台に出るが、我々は僅々三週間か五週間の稽古で、その感を出させようと云ふのだから無理だ。しかし、俳優諸君の熱心からとにかく、大体日本劇の外輪廓だけは出来た積りである云々の前口上があつて幕が上つた。

袴姿の大男が腕のあたりまでしかないチンチヨクリンの袖に膝のあたりまでしかない袴をつけてヒヨツコリ出て来て、浄瑠璃の御簾の中にすわつた。内部から電灯がついてハツキリとはしないが、浄瑠璃語り者の感が出る、山崎街道の勘平の猿師姿

定九郎 は鼻の高い四角な顔でスラリとした大男だ。ちやうど写楽の錦画から飛び出したやうな感がした、勘平は日本の芝居で見る勘平と違はない。全部のセリフは独逸語であるからちよつと変な気持であるが、すぐに劇の中に溶け込んでゆく。第二幕でのおかるは日本娘のやうな、それよりもつと美しいおかるである、おかるの母もよく出来てゐた。一文字屋のサイベイはキセルを口にくはえて文句を云ふのだが、何だかソグハゲした

子供が 始めて煙草を飲むときのやうに地についてゐない。借用証文をさかさにして読み上げたり、懐の中に入れるとき、首のすぐ下辺へ証文を入れたりするのが目障りになるが、草履や足袋は立派にはきこなしてゐる、思つたよりは上出来で、日本の田舎芝居よりは遙かによい。少くともその特徴を取り入れてゐるところは実に感心した。決して可笑しいものではない。今暫らく専門家が振付けをすれば上等の部に属するであらう。唯全体として受ける感は何となく一平の

漫画を 見るやうだ。どこかに真実がこもつてゐる為であらう。

短時間にあれだけこなした独逸人の研究的の觀察については驚くの外はない。さうして兎に角自分のものとしてこなしてゐるだけに滑稽味がなく、劇中に真面目にとけ込んで行くやうな感がする。いづれにしても一同は熱心な研究的なもので

熱演の 一語をもつて讚美するに足りる。恐らく今後どこかの一流の劇場で出演すれば、異国情緒の多分にある。しかも独逸語で日本式に演出するのだから、どこでも大人気にうけることであらう。オペラに出るマダム・バッツフライなどは、ただ音楽ばかりが日本味があるもので、これに比ぶればこの『独逸忠臣蔵』は確かに日本歌舞伎を表現してゐるものである

□昭和14 (1939.07-11) 『台湾日日新報』

故水野一水君追善義太夫会 十、十一、十二の三日間、毎夕七時から東本願寺別院にて追善義太夫会を開く。語物左の如し

△初日『二十四孝』(静枝)、『壺坂』(多見次)、『儀作』(窓月)、『太十』(梅豊)、『安達』(松月)、『帯屋の口』(菊水)、『帯屋の奥』(鳳玉)、『野崎村』(掛合) △二日目『野崎村』(嵐玉)、『鈴ヶ森』(耕人)、『御殿』(一笑)、『忠六』(友栄)、『長局』(千歳)、『沼津』(吾妻)、『妙心寺』(雷雀)、『下屋敷』(掛合) △三日目『八百屋』(菊水)、『酒屋』(鳳玉)、『松王』(品子)、『明烏』(勝司)、『壺坂』(万知子)、『先代』(多見次)、『忠四』(嵐玉)、『太功記』(掛合)

□昭和14 (1939.12.14) 『台湾日日新報』

新興新映画

娘義太夫

脚本／演出 野淵昶

撮影 竹野治夫

【配役】

豊竹小仙……………高山広子

落合小次郎……………市川男女之助

まち子……………松浦妙子

豊竹昇之助……………歌川絹枝

同仙之助……………梅村蓉子

仙之助一座菊助……………高松昌子

同メ虎……………香陵不二根

同小豊……………小川操

同綱之助……………不二初子

同京之助……………山田俊子

まちこ乳母おしま……………郡光子

髪結女……………東明喜子

梗概 頃は文久の初年——ここは近松物の物語りに悲しい蜩

川のほとり、近くの寄席万亭の娘浄瑠璃はねたのであらう、降りつくづく長雨に曾根崎のさんざめきもひつそりと静まつた夜更け——と、河岸にもやえる苦舟から突然猛々しい船頭の怒声が聞えて若い男が泥濘の道に投出されて来た——蘭法医を志し笈を負うて上阪した丹波の落合小次郎であつた、泥塗れになつたターヘルアナトミア(解体新書)を大事さうに拾ひあげて口惜しさに泣いてゐた

数日後——黄昏の瀬戸内海を播州へ急ぐ船があつた、旅に出

た娘義太夫の華かな一行を乗せた船である、長い水■の果てに沈み行く陽を眺めて、小二郎は限らない運命の不思議さと、自分を救つて呉れた一座の花、豊竹小仙の美しい姿を思ひつづけてゐた、小仙も亦自分の周囲に嘗て見ぬこの純朴な青年の汚れなき瞳と、阿蘭陀文字に熱情を捧げ理想に燃える小次郎の男々しい気魄に何時とはなしに心惹かれるものがあつた——小仙の母仙之助は芸で磨きあげた厳しい人であつた、割れ返る人氣の中に『二十四孝』を語る小仙の浄瑠璃に早くも心の乱れを知つて「芸人の世界に色恋の入るときは芸も身も滅びるのが慣ひだ」と稽古の撥によせて堅く誡めるのであつたただ剽軽者の三味線弾き昇之助だけが人に隠れて二人の仲をあれこれと同情し一人で氣を揉むのであつた——盆踊りの夜、一座の厄介者扱ひの小次郎は居たたまれぬ思ひに小屋を飛び出した。追ひ縋つた小仙は身を切る辛さをして造つた旅費を小次郎の手に握らせ、芸人の身は覚束なくとも自分の誠心はきつとあなたを人の世の為に尽す立派な蘭医学者にして見せると勵し誓ひ合つた空しく三年の月日が流れたが——小仙は矢張り侘しい流転の身であつた、華かな誘惑にも身を持して一途に遥かな小次郎に思ひをはせる小仙に浮気な人氣は日に薄れて今は誰も顧る者もなかつた——江戸に出た小次郎は伊東玄朴の象先塾に入門し、その秀で

た学才を認められて、塾頭になる日も近かつた、玄朴の愛娘まちは、ひそかに小次郎に想ひをはせる身であつた、玄朴はこの事を喜び、行先は小次郎をまち子と、めあわせ、後継者と目してゐたが、嘗つて仙之助との間に出来た小仙が小次郎の身に関はりあるとは知る由もなかつた

雪の降る或る夜、蜷川に浮かぶ船風呂の小座敷に一人うどんを啜つてゐる小仙の胸には、嘗ての日泥塗れの小次郎を救つたことが思ひ出されて仕方がなかつた。窮屈さうに坐つて泣くみ乍ら美味さうにうどんを何杯も貪り食つた小次郎の純朴だつた姿が昨日のことのやうに思へるのであつた——と剽軽者の昇之助が「小仙はん、何ぼんやりしてんね、吉報や、吉報や小次はんにも逢へる、江戸の旅決まりはつた」と、うどん鉢蹴散らす勢ひで駆け込んで来た

日々と続く東海道——大井川、藤枝を過ぎて江戸上りの娘義太夫豊竹仙之助の一行が賑かに行く、自づと足早やになる小仙に追付いた昇之助が「そない早う歩かんかて目ざす所は江戸や、どつちに着くがな」と、是も明るく明日の小仙の幸福を思つて揶揄するが、扱て——夢に見る小次郎の立派になつた姿を見て、手を取り合つて泣かん日は何時のことであらうか

小次郎とまちは子の結ばれる日は来た。義理と恩愛に錯綜する

運命の前には所詮小仙も悲しい女であつた。両国の小屋には小仙を祝ふ無数の幟がはためいて、客足を呼ぶ締め太鼓に、場内は破れかへる景気である。総てを諦めた小仙は神憑かれた如くに近松の悲しき物語『酒屋』を語り続けるのだつた。あかあかと面映ゆる灯に、肩衣姿美しく、『廿四孝』を語る小仙の美声に、魅せられた聴衆の中に、人目を惹く伊藤玄朴、小次郎、まち子の姿があつた

□昭和15(1940)『台湾日日新報』

俳優協会附属の歌舞伎義太夫聯盟

全国歌舞伎に附随する義太夫の太夫、三味線を一団とする組合は震災後連理会の名称で組織されて居たが一昨年事変勃発の際同会積立金全部を陸海軍に献金し、同時に同会を解散して以来今日に至つたが、今回新興行取締規則改正に依つて組合設定が必要となつたので、大日本俳優協会附属の下に帝都劇場に關係する太夫、三味線を以て「歌舞伎義太夫聯盟」を組織した、事務所は本郷区龍岡町二二、巖太夫宅に置くが、役員は互選によつて左の如く決定した

常務委員(豊竹巖太夫)、委員(竹本米太夫、同一登太夫、野澤吉作、竹澤仲造)、監事、会稽(竹本鏡太夫)

2 台湾日日新報浄瑠璃・義太夫記事一覧

(1) 明治

記事年月日	記事名	芸能	種別	記者	興行年月日	都市	町名	劇場	出演者 (浄瑠璃のみ)	演目	備考
1898/10/21	台北の諸興行物つき	女義	雑報	雀の丞							明治31年時点の台北興行界。竹本八重吉だけが上流から下流までの客を寄せ、他の演芸は下流向けののみ。4月から始まった共楽会が中流以上の娯楽場となるよう望む。
1898/10/20	本日十字館	女義	予告		1898/10/20	台北		十字館	竹本八重吉一座	新作道化俄「交際家の大失敗」新作音曲俄「打つ太鼓越路の御々舞」、女浄瑠璃(昔原四段目寺子屋の段(梅虎)、盛衰記三段目逆僧の段(八重松)、忠臣講釈喜内住家の段(八重吉))	軍人幹部送別会の余興
1898/10/14	淡水館に於ける上長官送別会	女義	雑報		1898/10/12	台北		淡水館	竹本八重吉一座	虎丸・誠玉等の講談、八重吉の浄瑠璃等	
1898/9/17	十字館本日芸題	女義	予告		1898/9/17	台北		十字館	竹本八重吉一座	道化俄(無銭遊興、道化浄瑠璃(堀川、浄瑠璃(蝶八(梅虎)、六助住家(八重松、平太郎住家(八重吉))	
1898/9/17	本日共楽会	芸妓	予告		1898/9/17	台北		淡水館	玉ずし鈴八	義太夫、琴、手踊(忍夜恋曲者、吹寄、清元)	
1898/9/13	十字館の替狂言	女義	予告		1898/9/13	台北		十字館	竹本八重吉一座	道化俄(平和の仇討、捕へて見れば主人なり、浄瑠璃(松王館の段(梅虎)、轡随院長兵衛(八重松、千本桜すしやの段(八重吉))	
1898/7/19	素人浄瑠璃温習会	素義	雑報		1898/7/16	台北	府直街	阪友亭		梅四、可水、友魚など	
1898/6/7	共楽会	女義	雑報		1898/6/4	台北		共楽会場	竹本八重吉一座	千代萩の御殿(梅虎、お駒才三白木屋の段(八重松、おしゆん伝兵衛堀川の段(八重吉)、桂寿・吉川虎丸の落語講談	八重吉一座は今度の台南丸で渡台、船中で共楽会塚本幹事の知遇を得て出演、大評判
1898/5/8	新竹通信寄席	女義	予告		1898/5/5より	新竹	後車路	元栄亭		女義太夫、軽口、昔噺、新内、音曲囃	
1898/3/31	台北のもろもろ	門付	雑報			台北					台北では流しの義太夫が一段に一円もかかる
1898/1/16	鍾龍の娘義太夫評	女義	芸評	はなふさ				幸亭	鍾龍		大阪出身の女義
1897/7/15	素人浄瑠璃会	素義	雑報		1897/7/13	台北	府前街	丸三商行	天狗連	鎌倉三代記(喜楽、大功記尼ヶ崎(友魚、亦助住家(語勇、千阿職(松葉、合邦辻(可水、寺子屋(梅枝)等	
1896/8/16	娘浄瑠璃	女義	雑報		1896/8/11より	台北	北門街	一龍亭	竹本一座	阿漕浦平治住家	人形入り
1896/7/16	女義太夫	女義	雑報			台北	北門街	一龍亭	阿波の娘浄瑠璃		
1896/7/16	記事年月日	芸能	種別	記者	興行年月日	都市	町名	劇場	出演者 (浄瑠璃のみ)	演目	備考

9/28 00/	3/27 00/	3/27 00/	同	5/9 9/9	2/10 9/9	2/7 9/9	10/28 9/8	10/28 9/8	10/28 9/8	10/28 9/8	10/28 9/8	10/28 9/8
会素人浄瑠璃	会浄瑠璃温習	会余興評	評淡水館余興	裏口からの月会	館今晚の十字	基隆通信寄席の大入	本日の寄席	本日の寄席	見立興評「食物」	評共楽会余興	館今晚の十字	興共楽会の余
素義	素義・女義	女義	女義？	女義？	女義	女義	女義	女義	芸妓	芸妓	女義	芸妓
雄報	雄報	芸評	芸評	芸評	予告	予告	予告	予告	芸評	芸評	予告	予告
			娼法芸者 反対老人						はまのや	雀之丞		
9/26 00/30	3/26 00/	3/24 00/	5/6 9/9	5/6 9/9	2/10 9/9	15日間 1/29 9/9より	10/28 9/8	10/28 9/8	10/26 9/8	10/26 9/8	10/26 9/8	10/21 9/8
台北	台北	台北	台北	台北	台北	基隆	台北	台北	台北	台北	台北	台北
府前街	艇舫											
吉川亭	○源座	淡水館	淡水館	淡水館	十字館	五光亭	幸亭	十字館	淡水館	淡水館	十字館	淡水館
基隆・台北の天狗連	り竹本八重松、 の芸娼妓及び素人浄	竹本八重松、 艇舫各様	竹本清登太夫	竹本清登太夫	竹本八重吉一座	金蝶	才吉、小文字、 代、歳八重、鐘龍	竹本八重吉一座	艇舫の小高	艇舫の小高	竹本八重吉一座	艇舫の小高
		落語、踊、浄瑠璃（太功記十段目）、壮士踊り、 新内、舞、講談、踊		瑞璃	新作道化俄三笠山、同人情俄浮世の軽業、浄る り千本松すしやの段（梅虎、伊勢音頭油屋の 重吉）八重松、古手屋八郎兵衛古手屋の段（八 重吉）	講談、義太夫、新内、浄瑠璃	勝半七酒屋の段（春登代、人情嘶（しん喬）、 梅川二の口村（歳八重、若旦那遊山話（万朝）、 忠臣蔵三ツ目（鐘龍、懸取万才（文字助、さ か様踊（正玉）	新作道化女房の一心一幕、いぬ芝居五幕、忠臣 蔵八ツ目日本蔵下屋敷（梅虎、お染久松野崎村 の段（八重松）、玉藻前二ツ目道春館の段（八 重吉）	三十三間堂様の由來平太郎住家より木遣音頭ま で	三十三間堂様の由來平太郎住家より木遣音頭ま で	新作道化俄「疑心暗鬼を生ず」、音曲俄「打つ や太鼓越路の獅子舞」、女浄瑠璃（一の谷三段 目熊谷物語りの段（梅虎）、金比羅御利生記百 度平住家（八重松）、三日太平記松下嘉平治住 家の段（八重吉）	新作道化俄「疑心暗鬼を生ず」、音曲俄「打つ や太鼓越路の獅子舞」、女浄瑠璃（一の谷三段 目熊谷物語りの段（梅虎）、金比羅御利生記百 度平住家（八重松）、三日太平記松下嘉平治住 家の段（八重吉）
			義太夫老功骨折つたものなり 見れば大枝が十八番丈ありて八 重吉に劣らぬ処あり			大林伯寿の講談・金蝶の義太夫 大評判			淡白とや称せん甘ひとも不甘と も評しやうなき「刺身の妻」			

10/16 1901/	10/16 1901/	3/29 1901/	2/19 1901/	2/19 1901/	1/13 1901/	12/13 1900/	12/12 1900/	11/19 900/	11/19 900/	10/19 500/	9/28 1900/
(つゞき) 淡水館月例 会余興	夫頼子の義太 女義	雀連の素人 素義	寄新起亭の大 女義	基隆の素人 素義	義太夫の行 旅病人 素義	浄瑠璃温習 会一口評 芸妓	淡水館浄瑠 璃会一口評 芸妓	亭今晚の新起 女義	璃吉川亭浄瑠 素義	物新起亭の語 女義	の新起亭今夜 の語物 女義
芸評	雄報	雄報	予告	雄報	雄報	芸評	芸評	予告	予告	予告	予告
不明		3/27 1901/	2/19 1901/より	2/16 1901/				11/19 900/	11/19 900/13/	10/19 500/	9/28 1900/
台北	台北	基隆	台北	基隆	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
			新起街		艇舁			新起街	府前街	新起街	新起街
淡水館		福楽座	新起亭	福楽座		淡水館	淡水館	新起亭	吉川亭	新起亭	新起亭
りは頼子・留吉	橋弁慶・か代(半右九、 染八(弁慶)、おちか 八重吉)(三味線)踊	頼子、竹本八重吉	大枝	雀連	和歌太夫			豊鶴、若玉、大枝、小 若?		若玉、亀鶴、小若?	若玉、亀鶴、小若?
慶	常磐津(辰橋)、道化俄(忠臣蔵五段目)、橋弁		落語(小芝楽)新内(豊鶴)落語(文字助)新 内(若玉)素はなし(福三)新内(飛鶴)新作 落語(権兵衛)源氏節(若伴)義太夫(大枝) 即席(光芝)新内(小若)人情講談(誠玉)大 切娘連中手踊狂言			狐火(花吉)、新吉原(市六)、鈴が森(為八、 千代萩御殿場(おもん)、蝶花形(住三)、梅忠 (小半)、二度目(か代)、三味線(梅八)、三日 太平記(成駒)、六助住家(住来)、紙治(すゞ め、油屋(万野・成駒、おこん・住三)	太十(秀八)三浦別れ(春路)、平太郎住家(歌 吉、三十三間堂の下の巻(綾子)、琴賀(留吉)、 琴胡弓つや、利生記(幾久)判官切腹(小男)、 忠臣蔵茶屋場(惣掛合)	御祝儀(入登太夫)白石囉(豊鶴)浦里詫住居 (若玉)三日太平記(大枝)千両職(誠玉) 由井浜千軒長者(小若)落語(文字助)	菅原伝授手習鑑四ツ目(錦石)三十三間堂棟木 由來(柳枝)忠臣蔵六ツ目下屋敷(十三)伽羅先 代萩(相生)忠臣蔵六ツ目(竹本一三五太夫)	嘶(文字助)かさね土橋(小若)講談義士銘々 伝(誠玉)	御祝儀(入登太夫)町實礼掛(豊鶴)日高川(若 玉)滑稽落語(竹馬)小(四字不明)心中(亀 鶴)講談馬術三幅対(誠玉)国分寺三庄太夫(小 若)音曲落語(文字助)
	西檢の芸妓頼子、竹本八重吉に 弟子入りし、下手な義太夫で夫 を苦しめる。	満場立維の余地なき大入り		近來稀れる大入	伊予松山の蔵元当主、浄瑠璃稽 古に入れあげて破産。和歌太夫 を名乗り台湾へ興行に來たがマ ラリアにかかり、艇舁支署の御 厄介に。御当地でも随分浄るり や清元が流行する様子ですが、 芸事に身を持ち崩してはいけな い。						

10/16 9/03 3/	7/14 9/03 3/	同	4/24 1/03 3/	3/9 4/03 3/	2/26 1/03 3/	8/23 1/02 2/	6/8 1/02 2/	5/31 1/02 2/	1/29 1/02 2/	10/16 1/01 1/
会素人浄瑠璃	浄瑠璃会	同	め南龍の夫定	大会素人浄瑠璃	の浄瑠璃本中の梵語	習浄瑠璃大温	軀軀の義太夫温習会	澤重八女義太夫鶴	十把一束	亭今晚の新起
素義	素義	同	女義	素義	義太夫	素義	女義・素義	女義	芸妓	系操り居人形芝
予告	雑報	同	雑報	予告	論説	予告	予告	雑報	投書	予告
					上田恭輔					
10/16 9/03 3/17	7/12 9/03 3/	1/9 2/03 3/	定席	4/5 1/03 3/	2/24 1/03 3/	8/23 1/02 2/	6/7 1/02 2/8			10/16 1/01 1/
台北	台北	基隆	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	
北門街	北門街		北門街	北門街		府中街	大湊口街	石防街		
北門亭	土橋商店	福祿座	北門亭	北門亭	淡水館	家大倉組隣	河原	司二階だるま寿		新起亭
		竹本南龍	竹本南龍	竹本八重松門入社中		竹本八重連中(高砂連)	軀軀の竹本八重松門入社中、基隆の素人連	鶴澤重八		千両織…竹本小八重、白石嘶…竹本若菜、萩祭文…竹本時松、貴…竹本若花
(南本)天網 ※以下スキャン範囲外	十六日 宝入船(福栄)彦山九(松光)賢女鑑(小柳)一の谷陣屋(都)大功記十段目(美笑)おちよ半兵衛(都)安達原三段目(梅枝)忠臣蔵本蔵下屋敷(都)中入後、果物語土橋			御祝儀、八陣本城(小八重)合邦住家(宮本)忠臣蔵三段目(鶴子)毛谷村六助住家(白鳳)明島山名屋(繁)梅忠二の口村(花笑)時雨炬燵紙治内(助六)鏡見山又助住家(可憐)三十三間堂柳(豊)太閤記十(梅枝)弁慶上使(徳勢)惣五郎子別れ(都)安達原三(喜来)本蔵下屋敷(十三)三味線(八重松、大吉、常子)				壺坂靈験記		千両織猪名川内、白石嘶揚屋、袖萩祭文、琴責、東獅子の一曲(新内)(廊文章)
	煙草「花月」売込め祝い		美貌で知られる竹本南龍、基隆のフアンと熱愛			毎月月並温習を催すといふ	基督教青年会講演、2/28まで三回連載。上田は「東西の文学に精通せるドクトル」、下記リンクによれば比較言語学者、児玉源太郎総督秘書、のち満鉄幹部 http://www.shohotoku.com/for/jp/db/jinbu/2904		台北芸妓評「義太夫の旨いは西の染八声のよいのは東のおえん」の染八声のよいのは東のおえん、鶴澤重八の経歴(備後生まれ、重造門下、1898頃東京進出)と渡台。素義・芸妓しかない台湾に「本色の太夫」が来るのは心強いと歓迎。	

同	同	同	同	10 1 ／ 9 20 0 3 ／
同	同	同	同	台北の義太 夫界（上）素
同	同	同	同	素義
同	同	同	同	評判記
商人・冬木太夫（終商 行、武内一声太夫（此 家の番頭）、吉水梅枝 （提灯屋）	官史・如柳（鉄道部の 馬渡殿、松香太夫（同 部の楽馬君）ら。ただ し官紀のため人前では 語らない者多し	若松連・大吉門下。柳 枝・十三・相生らが属 したが、大吉が一家で 出奔し分裂	都連・竹本八重松門下。 首領は都雀（民報社田 中重助）、ほか都太夫 （民報社広告増の宮本 君）、都一（同社の藤 林某）、都八太夫（同 社）、都公（八重松の 夫）、松鶴太夫、鈴木 君（質屋）ら	台北四天王・十三太夫 （日本亭の亭主足利藤 兵衛、若松連⇒都連、 相生太夫（大工の黒田 公。若松連⇒鍾龍門 下）、柳枝太夫（台北 座主笠松の弟。若松連 ⇒庄吉門下、寿楽（奥 州出身の斎藤別当、 都雀（民報社大番頭の 田中重助）を加えて五 天王ともいう
				書き出し「今春以来メッキリ勃 興し出した台北の義太夫界」

同	10 1 9 22 0 3 ／	同	10 1 9 21 0 3 ／
同	夫界(下) 台北の義太	同	夫界(中) 台北の義太
同 妓(芸) り(上)が	素義	同	素義
同	評判記	同	評判記
店、旧名繁六	女将…おちか太夫 島検、台湾一の大天 狗、松之江女将、小六、 幾久女将(旧名助六、 だるま女将(西洋料理 店、旧名繁六)	弁護士…一重太夫(新 民学堂校長中村啓次 郎、古亭太夫(正七 位服部甲子造、鯛二 夫(大川弁護士)、二葉太 夫(花田正何位、鬼 笑(高原繁造)、春山(太 田重助)、松鳳(伊藤 欣蔵)、一三三(寺松 勇次郎)、鹿重(一重 太夫門下)	八光(提灯屋)、花笑(三 味線屋、南木太夫(金 庫屋)、暇遊(芸妓お ことの亭主深見君、 白鳳(近江屋の印判 栄旭(近江屋隣の弟、 屋、藤岡不二太夫(大 倉組社員)、平茶(雑 貨屋)、三日月(色 貨屋)、可笑(古道具 屋)、可笑(古道具屋、 都山太夫(古道具屋、 寿山太夫(松坂君、 錦石(専売局の守衛、 笑(職工)、一鳳(船 大工)、栄(御用商人 北川、十四太夫(日 本亭の板場、十一(日 本亭の板場、寿太夫 (春、春香太夫(高等 待合はてい主人、塚 本小柳太夫(徳永商店、 柳枝太夫の弟子)

11 1 21 0 3 ／	11 1 21 0 3 ／	11 1 21 0 3 ／	11 1 9 0 3 ／	同	同	同	同	同	同	同
同	同	人浄瑠璃 台北座の素	黄菊白菊	同	同	同	同	同	同	同
同	同	素義	素義・女義・義・	男義	女義	同	俳優	芸妓	芸妓	芸妓
同	同	予告	評判記	同	同	同	同	同	同	同
11 1 23 0 3 ／	11 1 22 0 3 ／	11 1 21 0 3 ／								
台北	台北	台北								
台北座	台北座	台北座								
			衛(十三太夫)	男師匠・時太夫(台北座竹本)・東太夫(栄座竹本)・野澤庄吉(栄座?)	女師匠・八重吉、八重松、鐘龍(森梅の妻、常子(鍛冶屋の妻、澤連の師匠)、米八の駒八、六助の玉六、小八重(八重松の義弟子の有望株)、政重(東京新下り)	金(家幸の子)	丞、扇平、岡之助、百々蔵、梅二、眼之助、小	台北座俳優・三司、八百七、鶴三郎	小福、小吉、小仙	芸妓・政吉(呂太夫の娘)、園香(京都出身、住栄(名古屋出身)、留吉(名古屋出身)、お茶良、奴、お染、村八(高砂検)、滝尾(高砂検)
合、糸(鐘龍(八重松)(重八)	佐倉曙義作内(十四)志度寺(十三)忠臣蔵山科(都倉)妹背山芝六(寿楽)明島揚屋(柳枝)毛谷村六助(国松)賢女鑑片岡(小柳)松王下屋敷(相生)阿漕(五郎)大切本蔵下屋敷惣掛	鏡山又助(十四)合邦(十三)近江源氏(寿楽)柳(膝栗毛赤阪(八百七)柳(相生)蝶花形八ツ目(阪東五郎)大切布引の四惣掛合	岸姫の三(中村駒之丞)日吉の三(十三)忠臣蔵四(寿楽)鈴が森(柳枝)吃又平(澤村源之助)糸嵐雷二郎白石嘶(片岡扇平)嘉平次住家(国松)勘作住家(嵐三司)鏡山長局(実川八百七)百度平住家(相生)大切忠臣蔵惣掛合							
			無料							

7 19 14 0 4 /	6 19 25 0 4 /	6 19 5 0 4 /	3 19 16 0 4 /	2 19 10 0 4 /	1 19 16 0 4 /	12 19 3 0 3 /	12 19 2 0 3 /	12 19 1 0 3 /	11 19 26 0 3 /	11 19 15 0 3 /
瑠大会 台北座 浄瑠	会 都連 浄瑠	会 素人 浄瑠	浄瑠 会 恤兵 献金の	太夫会 素義	若松連の 瑠瑠会 浄	梨園 雜組	浄瑠 瑠狂	北門亭の 寄と新伯 知大	十把一 束	タレ義太 の 四タレ
素義	素義	素義	女義	素義	素義	俳優	女義・ 素義・ 義・	女義	女義	女義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	雑報	雑報	予告	投書	雑報
									堂摺生	
7 19 13 0 4 15 /	6 19 25 0 4 /	6 19 7 0 4 8 /	3 19 19 0 4 /		1 19 16 0 4 17 /		二三日 前	12 19 1 0 3 /		
台北	台北	台北	台北	台北	不明	台北	台北	台北		
				北門街			西門外 街	北門街		
台北座	北門亭	台北座	淡水館	北門亭			松方 竹本八 重	北門亭		
	都連 竹本八 重松、小 八重、	竹本八 重、老松 連	竹本八 重吉発起		野澤三 次郎、若 松連	俳優の 義太夫芸 名、多見 松は梅幸	竹本八 重松、白 牡丹太 夫(八重 松の弟子 、漬物屋 、常子 の弟子)	小八重	竹本八 重	
	鈴ヶ森(柳香)弁慶上使(米八)先代御殿(金) 尼ヶ崎(小柳)柳(春香)玉三(一二三)野崎 紙治茶屋場(柳枝)岸姫の三(堀川(相生)日 吉の三 本蔵下屋敷(十三)重の井子別れ、揚 巻助六(文字屋(重八) 八陣(小八重)三代記八(都喜和)二度目清書 (都松)日吉丸三(都鳥)太功記十(一司)三 代萩御殿(都水)柳(松鶴)梅よし(鶴子)千 日太平記(不二)明鶴(梅枝)布引四(相生 三味線(竹本八重松)等				【一部欠】波鳴戸(南木)三勝酒屋(十三) 十(松鶴)本蔵下屋敷(相生)忠四(寿楽)以 上十六日▲玉三(叶)新口村(花菱)勘作内(松 鶴)弁慶上使(不二)又助内(十四)合邦(十三) 十種香(小福)松王下屋敷(相生)吉原揚屋(柳 枝)以上十七日、三味線(三次郎)			大阪で一時女越路の名を博した竹本八重は今何 うして居るんだ願くば本島タレ界の為に賑起 せよ 落語、義太夫(小八重)、西洋奇術、譚談、剣舞 二輪加		竹本南龍(新起横街二丁目)の 弟子・南吉、九州の実家へ送金 を怠り、師弟ともに警察から説 諭される
台北基隆聯合素人浄瑠瑠大会	木戸下足は勿論無料	下足料三銭木戸場代無料	献金の方法は凡て其語るものが 分担饗金し来聴者は一切無料	スキャン枠外のため詳細不明	最近渡台した野澤三次郎を迎え ての浄瑠瑠会		漬物屋が八重松の稽古を聞き、 自分の師匠の常子とどちらが上 手いか問い詰めて八重松を困ら せる			

6 1 9 24 0 5 ／	6 1 9 1 0 5 ／	3 1 9 11 0 5 ／	2 1 9 11 0 5 ／	12 1 9 2 0 4 ／	10 1 9 22 0 4 ／	10 1 9 9 0 4 ／	10 1 9 8 0 4 ／	8 1 9 20 0 4 ／	
台北座の素人浄瑠璃	寄贈	会素人義太夫	浄瑠璃会	蒼連の義太夫会	追善浄瑠璃大会	八重松の送別義太夫会	送別義太夫会	追善浄瑠璃会	
素義	素義	素義	素義	素義	素義 女義	素義 女義	女義・素義	女義・素義・芸妓	
予告	雑報	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	
6 1 9 24 0 5 25 ／		3 1 9 11 0 5 12 ／	2 1 9 11 0 5 ／	12 1 9 3 0 4 4 ／	10 1 9 23 0 4 25 ／	日程未定	10 1 9 10 0 4 12 ／	8 1 9 20 0 4 ／	
台北		台北	台北	台北	台北		台北	台北	
		北門街		北門街				北門街	
台北座		北門亭	部隣の倶楽台日本本社	北門亭	台北座		台北座	武蔵屋	
蒼連		蒼連・他連合同			竹本鐘龍、鞍馬連、都連等 つばみ連、老松連、雀連等	都連（八重松門下）、若松連三派合同	都連（八重松門下）、若松連三派合同	竹本八重吉、鐘龍、鞍馬連	
白鳳軒（三味線） （竹本重八） （豊竹東太夫）	先代萩（一風） 菅原四（都鶴） 二丁目（桂雀） 御所萩三（貴司） 二日吉丸三（声） 安達原三（梅枝） 染分手綱子別れ（柳枝） 箱根境の段（一三五太夫事白鳳軒） 以上二十四日夜 加賀見山五（一福） 功軒十（三洋） 柳（花笠） 三勝半七（貴司） 菅原四（枝雀） 日吉丸三（不） 御所萩（梅枝） 百度平（一） 新吉原揚屋（柳枝） 三日太平記	枝、百度平（相生）、野崎村（柳枝）	11日・千代萩（一風、志度寺）（三洋）、廿四孝（都水）、浜松小屋（枝雀）、日高川（貴司） 御所萩三（松鶴） 玉澤前三（十四） 本蔵下屋敷（十三） ▲12日 橋弁慶（九三） 浜松小屋（花笠） 本蔵下屋敷（十） 柳、南木、先代萩（不） お千代半兵衛八十五（十四） 日吉丸三（梅枝） 百度平（相生）、野崎村（柳枝）	玉澤前三丁目（金露）鎌倉三代記（曙） 先代萩御殿（都水） 本蔵下屋敷（十） 弁慶上使（松鶴） 三十三間堂柳（南木） 三日太平記（不） 百度平（一） 八陣本城（梅枝） 播州皿屋敷（十四） 合邦下の巻（十三）	▲三日 先代萩（笑） 志度寺（三洋） 菅四（魁） 二丁目（一枝） 日吉丸（十） 蝶花形（亀鶴） 新二村（花笠） 玉三（松鶴） 御所萩（二声） 阿漕浦（十四） 酒屋（十三） ▲四日 太功記（一風） 一の谷（松雀） 助作（都水） 寺子屋（枝雀） 又助内（不） 皿屋敷（十四） 本蔵下屋敷（十三） 帯屋（室司） 袖萩（梅枝） 鳴戸（南木）		都連（八重松門下）、若松連三派合同	式三番（八重吉） 千両織（とよ） 二度目（叶） 天網島（松の江奴） 尼ヶ崎（台北楼おちや） 三莊太夫（同園香） 一の谷陣屋（花蝶） 松下住家（台北楼住家） 鏡山又助（秀八） 堀川（梅八） 伊賀八（呂三） 日吉丸三（寄石） 柳（鈍八） 阿漕浦（冬木） 中入後御所萩上使（蘭風） 二葉（四段目） 古亭（重） 合邦下の巻（十三） 増浦兜軍記掛合遊君あこ（古亭） 岩水（蘭風） 重忠（重） 樺沢六郎（十三） 三味線（八重吉） ツレ（幸女） 琴胡弓（台北楼さく） 糸（松の江しを） 幾久ひさ（日高堂さく） （初音さく） （竹本鐘龍）	竹本八重吉が亡父母の遠忌追善
	12円50銭寄附 蒼連から台北行旅病人救護所へ				忌追善	都合により無期延期	竹本八重松10／25内地へ引き揚げの送別		

2 9 0 6 /	1 9 0 5 /	11 18 0 5 /	11 15 0 5 /	8 24 0 5 /
浄瑠璃大会	素義	会送別浄瑠璃	桃園慈善會	素義入夫
素義	不明	素義	ドレコー	素義
予告	雑報	予告	雑報	予告
2 9 0 5 /	1 9 0 5 /	11 19 0 5 /	11 10 0 5 /	8 23 0 5 /
台北	台北	台北	桃園	台北
		新起横街	桃園街	
台北座	仮民政長 官官邸	台北座	館内林家之租	栄座
基隆雀連 天狗連 台北雀連・				
福之助(十三)三味線(東鳴物(楽屋)唄(小	御祝儀(宝入船)三日太平記(梅土)明島山名屋(梅枝)朝顔日記(花菱)沼津(南木)鳴門(鳴子)太功記十(弥生)加賀見山又助(金草)御所松三(三洋)新吉原揚屋(貴司)忠臣蔵本蔵(亀鶴)合邦(白風軒)千両轡猪名川内掛合猪名川(都水)大阪屋若者(二声)鉄ヶ嶽(松鶴)角力使(三声)おとわ(不)三味線(三次郎)菅原寺子屋掛合、松王、十三、千代(花遊)玄蕃(弥生)戸浪(一)源蔵(糸雀)五音菅秀才(三声)戸浪(一)源蔵(糸雀)三味線(三治郎)忠臣蔵一力の段掛合、平右衛門(十雀)九太夫(糸雀)伴内(喜男)力弥(三声)喜多八(都八)亭主(貴司)仲居(大勢)由良	合奏音曲義太夫等之余興	御祝儀(福寿)太功記七(二葉)布引四(二重平治内(是潤)日蓮記三(都水)朝顔宿屋(松鶴)三勝酒屋(不)紙治内(一)本蔵下屋敷(相生合邦下(十三)安達三)梅枝野崎柳枝)菅原四(白風軒)大切掛合妹背山々の段小葉(二重)桔梗(福寿)雛鳥(相生)久我之助(柳枝)定高(白鳳)大判事(十三)糸(糸重八)春花(三次郎)	24日・朝顔宿屋(南木、柳(松鶴)、蝶花形八(亀鶴)、十種孝新吉原(花菱)、先代御殿(都鶴、寺子屋(魁)、三勝酒屋(貴司)、尼が崎(梅枝、弁慶上使(一)鈴が森(不)、合邦の下(白風軒、糸(東太夫)
	児玉総督凱旋祝賀会	笠松柳枝太夫の大連渡航につき送別会	写眞 筑摩川、勸進帳、寺子屋の浄瑠璃、活人画(桃太郎、小楠公、小菅、曾我夜討、活動	尺八・洋琴・琴・笛・三絃の合奏、蓄音器(落語、筑摩川、勸進帳、寺子屋の浄瑠璃、活人画(桃太郎、小楠公、小菅、曾我夜討、活動
			内地人・本島人ともに来会。	白風軒新規参加、西門外街の齒科医、もとは内地で玄人だったこともある素人離れた名人

6/19 1907 /	10/19 906 /	10/19 906 /	9/19 2206 /	9/19 2106 /	9/19 1406 /	3/19 906 /
台南の義捐 演芸大会	朝日座	浄瑠璃会	朝日座の人 形浄瑠璃	女浄瑠璃操 人形の初日	朝日座の人 形浄瑠璃	東北肌腫救 恤浄瑠璃大 会
芸妓	女義・ 人形	素義	女義・ 人形	女義・ 人形	女義・ 人形	素義
雑報	予告	予告	芸評	予告	予告	予告
			名代男			
6/15 1507 /17	10/19 906 /10	10/19 1006 /11	9/19 2006 /	9/19 2106 /22		3/19 1005 /11
台南	台北	台北	台北	台北	台北	台北
		北門街				
台南座	朝日座	鳥留(元 武蔵屋大 広間)	朝日座	朝日座	朝日座	台北座
遊郎検査・ 有志男女	阿波の女浄瑠璃	台北天狗連、基隆雀連	阿波の女浄瑠璃	阿波の女浄瑠璃	阿波の女浄瑠璃 (1906/09/22 による)	竹本八重吉、鞍馬連中
出物には千鳥の曲、遊郎検査は弾琴に代えて山姥、北州を出す	15日・式三番、素ばやし正札、村上行長夫人祝辞、夏の曲(貴婦人連弾琴)、春の梅、鶯遷園(遊郎検査弾琴・鎌倉三代記三浦別れ(遊郎検査・膝栗毛柿盗人(有志男連)、供奴(台南検査・忠臣蔵一力茶屋場(遊郎検査)、千木校道行(男女有志)等、16日・初日同様、ただし貴婦人連出物には千鳥の曲、遊郎検査は弾琴に代えて山姥、北州を出す	妹背山二段目(小富)あき平治内(小富士、人形治郎道文五郎内室幸人)日蓮記三段目(葉龍、お伝雛若、上人文五郎)布引小枝せめ(小龍、行綱雛若、小枝親玉、平治文五郎)忠臣蔵三段目惣掛合(判官喜若、師直喜楽、勘平文五郎、おかる親玉、伴内雛若	御殿(小富)、堀川(小富士、安達三(葉龍、久作(文五郎)、書割・大野 四ツ谷怪談伊右衛門内(二声)安達原三(一二三)大間記十(梅枝)本蔵下屋敷(基十雀)鈴ヶ森(花糸)八陣ハツ目(花笑)忠臣蔵六(南木)加賀見山又助内(基弥生)新吉原揚屋(木の葉)音原四段目(三笑)妹背山御殿(貴司)柳平太郎住家(貴昇)御所松三(松鶴)日吉丸三(基糸雀)三勝半七酒屋(相生)志度寺(十三)三味線(野澤三次郎	式三番(御祝儀)由良の港山の段(小富)屋島合戦三段目(小富士)奥州秀衡三段目(葉龍)阿波の鳴門ハツ目(小龍	紙治炬燵(万朝)日吉九三段目掛合、久吉(吾妻三すじ)は、吉春(同勝治)竹松(松の江奴)三十三間堂平太郎内(児島つる)新吉原揚屋(同きく)太功記七(幾久あつこ)日蓮記掛作内(同ひさ)三勝半七(一九九)一の谷三段目(笑燕)彦山六助住家(秀八)松王屋敷(四北三三)千代累物語(児島秀八)十種香(四北三三)玉藻前(三錦)御所松三ツ目(吾福)三代記三浦別(三國)阿彌平治内(不)染分手綱三吉別れ(豊泉)本蔵下屋敷(寄石)佐倉宗五郎(呂三)布引四段目(二三)福島さかろ松(冬木)沼津千本松(十三)音原四ツ目(葉龍)和泉三郎館(蘭風)あこや三曲(古亭)靈坂寺沢市内(重)堀川猿廻し掛合、おつる、伝兵衛(豊風)母(呂三)お後(古亭)与治郎(一重三味線(八重吉)ツレ(台北お鶴)琴、胡弓(同きく)	
						東北三県窮民救恤

6 1 ／ 22 0 7 ／	6 1 ／ 22 0 7 ／	6 1 ／ 22 0 7 ／	同	同	6 1 ／ 19 0 7 ／	6 1 ／ 19 0 7 ／
朝日座の今 晩の語物	十把一束	璃の義金浄瑠 璃の義金浄瑠	同	同	瑠朝日座の浄 瑠朝日座の浄	夜会の余興
文楽	文楽	文楽	同	同	文楽	文楽
予告	投書	予告	同	同	予告	芸評
	連 ヲウ ヲウ					一里者
6 1 ／ 22 0 7 ／		6 1 ／ 23 0 7 ／	6 1 ／ 19 0 7 ／	6 1 ／ 18 0 7 ／	6 1 ／ 18 0 7 ／ 22 22	6 1 ／ 17 0 7 ／
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
朝日座	朝日座	部台北倶楽	朝日座	朝日座	朝日座	総督官邸
竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座
治（仲太郎）（勝之助）	御祝儀宝入船（竹本松島太夫）（鶴澤仲吉）彦 山権現毛谷村六助住家（竹本松島太夫）（鶴澤 勝之助）阿波喰戸十郎兵衛住家（竹本山城太夫） （鶴澤仲太郎）忠臣蔵六段目勘平腹切（竹本津 ばめ太夫）（鶴澤仲治）桂川連理柵（竹本大島 太夫）（鶴澤仲助）大切御好につき歌舞妓十八 番義太夫勸進帳（太夫総掛合）三味線 仲助（仲 治）（仲太郎）（勝之助）		御祝儀宝入船（入登太夫）伊賀越道中双六円覚 寺段（竹本松島太夫）糸（鶴澤仲吉）八陣守護 城正清水城段（竹本松島太夫）糸（鶴澤勝二郎） 本藏下屋敷段（竹本山城太夫）糸（鶴澤仲太郎） 基太平記新吉原揚屋段（竹本つばめ太夫）糸（鶴 澤仲治）西国三十三箇所遊坂寺沢市住家段（竹 本大島太夫）三味線（鶴澤仲助）ツレ（鶴澤仲 太郎）	鞍登太夫の十種香、山城太夫の酒屋、津ばめ太 夫の弁慶上使、大島太夫の堀川等		乗合萬成、勸進帳安宅問所の段（弁慶竹本大島 太夫、富屋山城太夫、義経つばめ太夫、海尊鞍 登太夫、三味線鶴澤仲助、連れ弾き仲治、仲太 郎、勝之助）お兼晒し、ウァイオリン 弾奏 剣舞 五人ばやし引拔夏船頭
	婦人慈善会主催 監勇前進隊の 慰問義金 午後六時より 一枚 一円宛の切符二百枚限り				当地の吾妻、魚金、日本亭の三 大料亭が請元となり……木戸は 三十銭場代は特別一円五十銭一 等一円二等八十銭割二十銭	総督府始政記念会余興。久しく 太棹に渴して居た処へ大隅太夫 に重ぐ大島がやつて来たといふ 評判は船がまだ基隆棧橋へ着か ぬ前から人々の口に伝へられて 居たので当夜参会の面々は固唾 を呑み呼吸を殺して聞惚れて居 たのも無理はない、殊に出し物 が、出し物だけに一層我人の耳を 惹きつけた。待ち焦がれた幕 衆の受けはお話にならず其の幕 となつた時の如きはさしも物事 と騒がぬ紳士連も此時ばかりは 殆ど狂喜の態で拍手喝采漸く止 んだかと思ふと後はアリアとい ふ感嘆の聲暫くは動揺めき亘つ た。

12/19 07/	12/11 07/	11/29 07/	9/20 07/	8/17 07/	8/9 07/	6/22 07/	6/22 07/
浄瑠璃大会 の義金	北埔義金 瑠璃大会	会 送別浄瑠璃	北投淡水観 月列車	老松連の浄 瑠璃会	義捐義太夫 会決算	朝日座の浄 瑠璃	大島一座を 聞く
素義	素義	女素義・ 素義	不明	女素義・ 素義	文楽	文楽	文楽
雑報	予告	予告	予告	予告	雑報	芸評	芸評
						部長 島田 法官	おの字
同	12/11、12/	11/29、30/	9/21、22/	8/17 07/	6/23 07/		6/20 07/
同	台北	台北	北投	台北	台北	台北	台北
同	朝日座	朝日座	部北投倶楽	一力	台北北クラ	朝日座	朝日座
	台北素人義太夫連有志	竹本重八、素義		老松連	竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座
久吉 光秀(相生・三味線(照月))	線(鐘龍)二日目掛合(太功記十段目は、三味 沢(一)下女(治鶴)徳右衛門(相生)三味 朝顔日記宿屋、みゆき(国芳)岩代(照月)駒 蔵四(十三)三味線(照月)沼津、忠臣 生、忠臣蔵赤垣出立、壺坂(鐘龍)初日日掛合 木(鐘龍)二日目掛合(太功記十段目は、三味 線(鐘龍)一)重次郎(治鶴)初菊(国芳)	妹背山御殿、忠臣蔵二段目(寿)太平記十、日 吉三(治鶴)加賀見山又助内、先代萩御殿(南 木)百度平、忠臣蔵六(一)彦山毛谷村、(聚 楽久松質店(初下り照月)お俊伝兵衛堀川、(聚 楽町梅の由兵衛(国芳)布引四、岸姫松三(相 生)忠臣蔵赤垣出立、壺坂(鐘龍)初日日掛合 朝顔日記宿屋、みゆき(国芳)岩代(照月)駒 蔵四(十三)三味線(照月)沼津、忠臣 生、忠臣蔵赤垣出立、壺坂(鐘龍)初日日掛合 木(鐘龍)二日目掛合(太功記十段目は、三味 線(鐘龍)一)重次郎(治鶴)初菊(国芳)	鈴ヶ森(一)声)太十、壺坂(国芳)関取二代鏡 (一)柳(小柳)八陣(梅枝)朝顔宿屋(寿) 皿屋敷(三)日太平記(白鳳)御殿(小嵯峨)相 四(都鶴)日吉丸(栄旭)忠四(十三)逆櫓(相 生)沼津(常盤)忠六(山水)日連記(都水 安達(三)三洋野崎、三勝(柳枝)蝶花形(亀 安達(三)三洋野崎、三勝(柳枝)蝶花形(亀 十(松鶴)鳴門(南木)すし屋(三ヶ月)太 二十四孝(雨後)陣屋(勝木)又助住家(鱗 御所桜(肥吾)揚屋(瓦笠)堀川(鈴八)明島 山名屋梅忠新口村(竹本重八)総掛合茶屋場 由良之助(十三)力弥(国芳)平右衛門(相生) 千内(梅枝)おかる(柳枝)九太夫(白鳳軒 子崎(松鶴)矢間(二)声)竹森(都鶴)仲居(亀 鶴)亭主(勝木)	木鎌倉三代記三浦別れ(松鶴)	日連記勸作住家(都水)菅原寺子屋(十三)紙 治茶屋場(柳枝)鏡山又助住家(壽)十種孝(南 洋梅忠新の口村(貴昇)一の谷熊谷陣屋(勝 鎌倉三代記三浦別れ(松鶴)		朝顔日記宿屋(づばめ太夫、三勝半七酒屋(大 島太夫、大切勸進帳(総掛合)
純益金57円38銭を寄附	北埔事変遭難者義捐 入場料1 人15銭	竹本重八帰国送別会	親月の余興として「有芸妓手踊 及浄瑠璃(曲名)等」。	今回芸妓となりし同連の師匠竹 本重八に花を添へんとて今夜七 時より	陰陽線前進隊慰問義捐のため 1000円寄附	大島の浄瑠璃は一気呵成の人氣 一片に過ぎず深みがなく、東京 系なので破格。世話ばかりやる のも感心できない。	つばめは咽喉を痛めていて声が つりない。大島は半兵衛と宗岸 の語り分けが不明瞭。勸進帳は、 吾妻芸妓の鳴り物が見苦しい、 総じて不出来

3 1 9 6 0 8 ／	2 1 9 21 0 8 ／	2 1 9 19 0 8 ／	2 1 9 16 0 8 ／	1 9 14 0 8 ／	1 9 12 0 8 ／
瑠璃会 東寧連の浄	聯合瑠璃会	基隆在連の 浄瑠璃会	稽古屋 夫淨瑠璃東太	素人浄瑠璃	互友連浄瑠璃会
素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	雄報	予告	予告
			李大郎		
3 1 9 6 0 8 7 ／	2 1 9 21 0 8 23 ／	2 1 9 18 0 8 19 ／		1 9 14 0 8 ／	1 9 12 0 8 ／
台北	台北	基隆		台北	台北
	新起横街			新起街	府前街
朝日座	台北座	公会堂		一力	店遠藤亨真
東寧連	基隆台北の素人連	雀連、三味線三次郎、芸妓連	鶴、豊竹東太夫、弟子（都喜楽、不二）	蒼連改め東寧連	互友連
夫、小蝶 功記七ツ目（喜楽）朝顔日記派松（三味線）東太 討十一段目（白鳳軒）（三味線）東太	阿波鳴門八ツ目、鎌倉三代記（一水）加賀見山又助内、電錢別場（一笑）日吉丸三段目、岸姫松三段目（米花）先代萩御殿（都鶴）太功記十段目、蟻七上使（可笑）由良港沙汰、三十三間堂（だるま）菅原四段目、本藏下屋敷（鱈）忠臣蔵二番目、信功記（南勢）阿漕平治内、加賀見山又助内（於多福）壺坂花の山、御所松三段目（不二）壺坂花の山、小嶋峨、百度平内、小蝶（忠臣蔵六ツ目）国姓爺三洋、血屋敷、太功記七ツ目（喜楽）朝顔日記派松（三味線）東太	内（福雀）梅の由兵衛内（小妻）菅原松王屋敷（ねぶか）中将姫雪貴（春助）太功記十（助之助）三十三間堂平太郎内（大石）賢女舞十（弥生）日吉丸三（吾才）忠臣蔵六（余雀）經治内（松雀）お後伝兵衛堀川（小、阿漕浦平治内）十雀（四ツ谷怪談伊右衛門内（かしく）百度平内（吾勇）伊勢音頭総掛合（余雀、小、やよい、吾勇、かしく、十雀）（以上十九日分）	安達ヶ原三（可笑）三日太平記九（ねぶか）忠臣蔵三（福雀）日吉丸三（呉服）紙治内（場）小ふじ）野崎村（京糸）玉藻前三（大石）太功記十（弥生）鏡山又助内（吾才）本藏下屋敷（十雀）阿波鳴戸八（かしく）大日本旭旗揚旅順攻撃（小、壺坂沢市内（松雀）彦山九ツ目（余雀、千本桜三（吾勇）二十四孝十種香より狐火まで総掛合（小ふじ、若奴、小美、琴豆）（以上十八日分）一の谷兵衛内（一團）鏡山又助内（福雀）梅の由兵衛内（小妻）菅原松王屋敷（ねぶか）中将姫雪貴（春助）太功記十（助之助）三十三間堂平太郎内（大石）賢女舞十（弥生）日吉丸三（吾才）忠臣蔵六（余雀）經治内（松雀）お後伝兵衛堀川（小、阿漕浦平治内）十雀（四ツ谷怪談伊右衛門内（かしく）百度平内（吾勇）伊勢音頭総掛合（余雀、小、やよい、吾勇、かしく、十雀）（以上十九日分）	箱根靈驗瀧の場（都鶴）血屋敷鉄山館（喜楽、阿波十（不二）	儀作内（二声）ちやり野良子屋（梅枝）柳（柳枝）御殿（南木）逆櫓（相生）鈴ヶ森（亀鶴）玉三（勝木）三味線（竹本鐘龍）
	午後六時より	木戸場代無料 午後六時より	蒼連改め東寧連での豊竹東太夫の稽古風景。		

9 19 0 8 ／	6 19 0 8 ／	6 19 0 8 ／	6 19 0 8 ／	6 19 0 8 ／	5 19 0 8 ／	5 19 0 8 ／	5 19 0 8 ／	5 19 0 8 ／	3 19 0 8 ／	3 19 0 8 ／
鞍馬連・浄瑠璃 大会	鞍馬連・浄瑠璃 大会	歓迎余興 げ	朝日座娘義 太夫の打揚	朝日座今晩 の語り物	朝日座の娘 義太夫	浄瑠璃 朝日座の娘	浄瑠璃 朝日座の娘	浄瑠璃 朝日座の娘	浄瑠璃 朝日座の娘	浄瑠璃 朝日座の娘
素義	芸妓	女義	女義	女義	女義	女義	女義	女義	女義	女義
予告	予告	予告	予告	予告	芸評	予告	予告	予告	予告	予告
					名代男					
9 19 0 8 ／	6 19 0 8 ／	6 19 0 8 ／	6 19 0 8 ／	6 19 0 8 ／	不明(三日 目)	来月早々	5 19 0 8 ／	5 19 0 8 ／	3 19 0 8 ／	3 19 0 8 ／
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	基隆
								西門街		
部 法曹倶楽 部 法曹倶楽	彩票局	朝日座	朝日座	朝日座	朝日座	朝日座	朝日座	部 法曹倶楽	朝日座	日本亭
鞍馬連	台北校					大阪の娘・浄瑠璃 座	東寧連・核鳴連	基隆雀連	鞍馬連	雀連
平記(呂三)	六玉川(台北校)・六歌仙(高砂校)・浄瑠璃芳 衛総踊(台北校)・石橋(福柳校)	御祝儀宝入船(可)壺坂(一重)毛谷村(古亭) 忠臣蔵(蘭風)二度目清書(一葉)八陣(都 水)布引四(二三)平次住家(冬木)三日太	近江源氏八つ目(亀之助)伊賀越沼津の里(尾 の治)彦山権現九つ目(浪亀)二十四孝四段 目(浪米)阿波鳴門八つ目(光玉)安達原三段 目(小浪)	大江山(亀之助)合邦(尾の治)酒屋(浪亀) 日吉の三(浪米)堀川(光玉)腰越伏三段目 和泉三郎の館(小浪)三味線・町造りか	豊澤町之助(一六)竹本亀之助(一六)豊竹尾 の治(四)竹本咲栄(一八)竹本三代治(二二) 豊竹光玉(二三)竹本小浪(二七)三味線豊澤 町七	【数行不明】吉原(友枝)本蔵下屋敷・重の井 子別(松鶴)御所修三段目 忠臣蔵四ツ目(白 風軒 糸(東太夫) (小蝶)	宿屋(梶子)大日本旭の旗上げ旅順攻撃の段 (小)赤垣立(弥生)忠六(糸雀)昔四(十 雀)鳴戸の八(かし)百度平内(吾勇)掛合 油屋・貢(糸雀)喜助(かし)北六(叶)十 鹿(吾勇)岩谷(弥生)おこん(小)万野(十 雀)三味線野澤三次郎	梅川忠兵衛新の口村(都水)松王下屋敷(五・元) 二度目清書(二葉)白石駒揚屋(古亭)箱根 の談(蘭風)掛合堀川の段(母(呂三)おつる (蘭風)伝兵衛(同)おしゆん(都水)次次郎(古 亭)糸(八重吉)ツレ千賀子)	御所桜の三(一笑)合邦下の巻(色界)加賀見 山の五ツ目(米花)本蔵下屋敷(十一)寺子屋 【龍】日吉の三(於多)龍の仇討十一冊目(龍) 岸姫の三(不)壺坂浜市内(小嶋峨)平衡門 の切腹(嘉菜)三日太平記九ツ目(亀鶴)逆櫓 白風軒(三味線(東太夫)等	太功記十段目(紅雀)三日太平記三(おふか) 本蔵下屋敷(福雀)忠臣蔵裏門(小)玉澤前 三段目(大石)賢女鏡十(弥生)日吉丸三ツ目 (吾)鏡山又助住家(十雀)忠臣蔵六ツ目(糸 雀)二代鏡秋津島内(かし)お俊伝兵衛堀川 (吾勇)三勝半七酒屋(松雀) 大切忠臣蔵茶屋 場総掛合・三味線三次郎
	「新方伯」新任の民政長官・大 島久満次 夫妻歓迎余興				「要するに此の一座の客種は、 三四郎連四分は、助右衛門連三 分、残り三分は堂摺連と見ば大 差なからう」	三戸朝日座主が来阪し契約「真 打の小浪は京阪中にて美貌美声 の評あるもの」		午後六時より	西門外街の安原会主となる 午後五時より	

8 19 17 09 /	7 19 09 /	6 19 09 /	6 19 09 /	3 19 09 /	12 19 08 /	12 19 08 /	12 19 08 /	11 19 08 /	11 19 08 /	10 19 08 /
南部だより	基隆の女義	晩の物語	内入 昨日の城	瑞会 鞍馬連浄瑠璃	瑞会 鞍馬連浄瑠璃	慈善演芸	朝日座の浄瑠璃大会	鞍馬連浄瑠璃大会	共進会の浄瑠璃	南部賑要 (九月三十日) 大懇話会
女義	女義	女義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	不明
雑報	予告	予告	雑報	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
	一週間 7/7より	6/19より	6/17より	3/5より	12/16より	12/12、13	確認 ファイル破損のため未	12/19より	11/19より	10/19より
台南	基隆	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台南
								西門街		
南座	堂基隆公会	朝日座	門紅樓	八角堂	法曹倶楽部	鉄道旅館	朝日座	法曹倶楽部	興場共進会	南座
				鞍馬連	鞍馬連	鞍馬連	柳枝、十三、相生、白 天狗連	鞍馬連	素義、豊竹東太夫、竹本鐘龍	
		加賀見山又助住家(浪之助)太十(浪亀)酒屋 浪米 熊谷陣屋(千浪)百度平(小浪)新内 関取千両織猪名川内(王菊)			玉三(五二九)古八(都水)鏡山又助内(冬木) 大功記七ツ目(二葉)伊賀越ハツ目(古亭)千 本桜軒屋(蘭風)本藏下屋敷(呂三三)大切関取 千両織猪名川(五二九)女房おとわ(都水) 鉄ヶ嶽(呂三三)三味線(竹本八重吉)	開会之詞。及事業幻燈。活動写真。歌唱田村伊 藤欣造氏。熊坂(松本鉄治氏)浄瑠璃(鞍馬 輩)講談(秦桑柏葉)落語(同上)三曲生 田流 笹川夫人 白井夫人 賀田夫人 竹因夫 人 奏楽洋琴(西時恩提礼斯氏(同夫人) 演説(村田誠治氏)		壺阪沢市内段(都水)玉藻前三段目(五二九) 重吉)岸姫松三段目(呂三三)依倉曙義作内(呂三三)忠 臣蔵四段目(蘭風)彦山九ツ目(古亭)大功記 十段目前(一重)同十段目奥(二葉)三味線(八 重吉)	大関記十段目(鳳玉)忠臣蔵六段目(采花)鈴ヶ 森(亀鶴)先代森御殿(松鶴)八百屋(南木) 百度平(一重)寺子屋(十三)中人後 御所様 (肥前)三勝酒屋(相生)壁伏討(白鳳)掛合 本藏下屋敷(南木)松鶴(二重)(亀鶴)糸(か ね龍)(東太夫)	高松最新式活動写真、義太夫など
台湾南部の「興行独占」状態	高松同仁社経営、娘義太夫を中 心に興行 ※同記事によれば高松同仁社は 嘉義座・打狗座・屏東座を経営し、 台湾南部の「興行独占」状態	「此程まで朝日座にて興行せし女 義太夫一座」、収益の一部は公会 堂へ寄附予定	始政記念日	スキャン枠外のため詳細不明	午後六時より 幕間には新起街 の上田屋が蓄音機を据えて種々 の謡曲をお慰みに供ふといふ	午後六時開会。至十一時閉会。	忘年会 若手太夫一三三が参加 「給仕日誌」欄で「気の早いこと 夥しい」と揶揄	午後六時より	午後六時より	愛国婦人会台南委員部大懇話会 余興

19 11 10	12 11 10 9	11 10 2 9	9 18 9 0	9 18 9 0	9 10 9 0	8 22 9 0
巾幗初会	瑠璃朝日座の浄瑠璃	瑠璃鞍馬連の浄瑠璃会	演芸雑俎	爱国婦人会活動写真	義捐浄瑠璃	義捐素人浄瑠璃会
不明	素義	素義	女義	不明	素義	素義
雑報	予告	予告	芸評	予告	予告	予告
19 9 10	12 11 10 9	11 10 2 9	9 16 9 0	19 21 9 0	9 10 9 0	8 24 9 0
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
赤十字社 支部医院	朝日座		朝日座	台北演芸場	朝日座	朝日座
	東寧連		竹本国芳			
義太夫三曲及其他福義等為余興	御祝儀宝の入船、百度平、四ッ谷怪談（一）彦山権現、岸姫松（米花）弁慶上使、三日太平記（鹿生）三十三間堂、合邦住家（小嵯峨）太功記十段目、沼津の段（燕司）鈴ヶ森、三勝平七酒屋（佐藤）本藏下屋敷、日吉丸（亀鶴）又助住家、弁慶上使（肥声）三味線東太夫、松助		源氏節（岡本美根二）、娘義太夫（竹本国芳）、諸芸大寄せ（早口、手品、落語など）	活動写真「掘野の夜嵐」（曾我兄弟討入より五郎捕縛まで）の前後を義太夫で繋ぐ ※「掘野の嵐」（Mパター、1909/08/01封切あり。内容未詳。（映画DB、日本映画データベース）	阿漕平治内（一）岸姫松及毛谷村住家 采花（日吉丸）三段目及二度目清書（珍宝）玉藻前（花笑）千本桜すしや及番掛（雷雀）豐満（鱒）日吉丸三及杉の森（語森）壺坂及合邦（小嵯峨）太十及お胸才三鈴森（燕司）蝶花形（三）浜松及五右衛門金入（亀鶴）宗五郎及百度平（勝木）太十及先代萩（松鶴）弁慶上使及亦助住家（肥声）四谷怪談血屋敷及秋津局切腹（白鳳軒）掛合初日忠臣蔵本藏下屋敷本藏（松鶴）伴左衛門（雷雀）二日首原四段目松土（肥声）之助（小嵯峨）同二日首原四段目松土（肥声）玄蕃（亀鶴）源藏（勝木）口浪（松鶴）千代（小嵯峨）百姓（燕司）同三日忠臣蔵六つ目助平（吉）かや（三）洋郷右衛門（米花）弥五郎（亀鶴）角兵衛（雷雀）種々鳥六（小嵯峨）滅法弥八（肥声）三味線竹本松助 同たつ女、豊竹東太夫	平治住家（一）宗五子別れ（梅枝）岸姫松兵衛（米花）加賀見山又助住家（常盤）日吉丸五郎助住家（珍宝）血屋敷鉄山館（麟鳳）玉三（花笑）染分手網番掛村（雷雀）阿波十（語森）壺坂沢市内（小嵯峨）腰栗毛並木（吾勇）太十（燕司）蝶花形八ッ目（三）洋朝顔浜松小屋（亀鶴）宗五郎子別れ（勝木）松王屋敷（松鶴）弁慶上使（肥声）補助、本藏下屋敷（柳枝）酒屋（相生）合邦住家（白鳳軒）三味線（東太夫、松助、アイ）大切掛合は初日寺小屋、二日目忠臣蔵六ッ目、三日目野崎村
篤志看護婦人会台北支会の新年初会式		スキャン枠外のため詳細不明		1週間内地人向け興行の後、1週間本島人向け興行あり（観覧自由。活動写真前後に義太夫を奏するの観客の日と耳を休ませるため。）		大阪大火義捐 入場券15銭均一※9/1（延期）・演目変更

10/9/810 ／	10/9/710 ／	10/9/510 ／	10/9/410 ／	同	10/9/210 ／	7/9/3010 ／	7/9/2810 ／	7/9/2710 ／	7/9/210 ／	5/9/110 ／	3/9/210 ／	1/9/1310 ／
娘義太夫	娘義太夫	娘義太夫	娘義太夫を聴く	同	女義太夫	芸 討番慰問演	芸 台中慰問演	討番演芸会	人淨瑠璃 芳野亭の素	由來記 芳野亭建築	余興／ 衆報／ 日本医学会 確定	無愁亭
女義	女義	女義	女義	同	女義	女義	不明	不明	素義	女義	芸妓	素義
予告	予告	予告	芸評	同	予告	予告	雑報	雑報	予告	雑報	雑報	雑報
			李太郎									
10/9/810 ／	10/9/710 ／	10/9/510 ／	10/9/110 ／	10/9/310 ／	10/9/210 ／	7/9/3110 ／	7/9/2610 ／	7/9/2510 ／	07/9/02、03 1910		3/9/110 ／	
台北	台北	台北	台北	台北	台北	東京	台中	台中	台北		大阪	
									新起横街			
芳野亭	芳野亭	芳野亭	芳野亭	芳野亭	芳野亭	歌舞伎座	台中座	台中座	芳野亭	中之島公会堂		
竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座				竹本国芳	名	南北校書精粹者二十六	筑土太夫こと島田法官部長
大切忠臣蔵茶屋場（惣掛合） 代記八ツ目（花千代）伊勢音頭油屋（千代登） 所桜三役目（錦木）壺坂沢市内（団菊）鎌倉三代記三役目（花千代）伊勢音頭油屋（千代登） 普原寺子屋（国芳）由良港山の段（千代玉） おかる団菊、伴内国芳、九太夫花千代	三勝半七酒屋（国芳）安達ヶ原三段目（千代玉）八陣八ツ目（錦木）鈴ヶ森（花千代）玉藻前二段目（団菊）松土下屋敷（千代登）大切惣掛合一力茶屋場（由良の助千代登、平右衛門錦木、おかる団菊、伴内国芳、九太夫花千代） 普原寺子屋（国芳）由良港山の段（千代玉） 所桜三役目（錦木）壺坂沢市内（団菊）鎌倉三代記三役目（花千代）伊勢音頭油屋（千代登） 大切忠臣蔵茶屋場（惣掛合）	三勝半七酒屋（国芳）安達ヶ原三段目（千代玉）八陣八ツ目（錦木）鈴ヶ森（花千代）玉藻前二段目（団菊）松土下屋敷（千代登）大切惣掛合一力茶屋場（由良の助千代登、平右衛門錦木、おかる団菊、伴内国芳、九太夫花千代） 普原寺子屋（国芳）由良港山の段（千代玉） 所桜三役目（錦木）壺坂沢市内（団菊）鎌倉三代記三役目（花千代）伊勢音頭油屋（千代登） 大切忠臣蔵茶屋場（惣掛合）	三十三間堂平太郎住家（国芳）二十四孝十種香（千代玉）腰盛状三段目（錦木）列土記百華並（花千代）太功記十段目（団菊）安達原三段目（千代登）大切惣掛合桂川常屋（長吉国芳、儀兵衛花千代）母おとせ団菊 おきめ錦木、長右衛門千代玉） 壺坂靈驗記沢市宅（国芳）腰盛状三郎館（錦木）日吉丸三（千代登） 佐倉曙（花千代）太十（国芳・三次郎）三十三間堂（団菊）先代萩（千代登）咲造	興行初日 千代登芸評中に「往年渡した小波」に言及	御所桜弁慶上使（国芳）朝顔日記宿屋（錦木）妹背山御殿（花千代）三勝半七酒屋（団菊）阿波鳴戸順礼歌（千代登） 市村座年少俳優素踊、女義太夫貞打総出演 楽、手踊等演奏十數番 山移台湾新聞社長叙述、淨瑠璃、合奏、琵琶清 12時。 台湾日日新報社主催・東京十五新聞社賛助・討番隊慰問第一演芸会	市村座年少俳優素踊、女義太夫貞打総出演 楽、手踊等演奏十數番 山移台湾新聞社長叙述、淨瑠璃、合奏、琵琶清 12時。 台湾日日新報社主催・東京十五新聞社賛助・討番隊慰問第一演芸会	市村座年少俳優素踊、女義太夫貞打総出演 楽、手踊等演奏十數番 山移台湾新聞社長叙述、淨瑠璃、合奏、琵琶清 12時。 台湾日日新報社主催・東京十五新聞社賛助・討番隊慰問第一演芸会	市村座年少俳優素踊、女義太夫貞打総出演 楽、手踊等演奏十數番 山移台湾新聞社長叙述、淨瑠璃、合奏、琵琶清 12時。 台湾日日新報社主催・東京十五新聞社賛助・討番隊慰問第一演芸会	市村座年少俳優素踊、女義太夫貞打総出演 楽、手踊等演奏十數番 山移台湾新聞社長叙述、淨瑠璃、合奏、琵琶清 12時。 台湾日日新報社主催・東京十五新聞社賛助・討番隊慰問第一演芸会	市村座年少俳優素踊、女義太夫貞打総出演 楽、手踊等演奏十數番 山移台湾新聞社長叙述、淨瑠璃、合奏、琵琶清 12時。 台湾日日新報社主催・東京十五新聞社賛助・討番隊慰問第一演芸会	市村座年少俳優素踊、女義太夫貞打総出演 楽、手踊等演奏十數番 山移台湾新聞社長叙述、淨瑠璃、合奏、琵琶清 12時。 台湾日日新報社主催・東京十五新聞社賛助・討番隊慰問第一演芸会	市村座年少俳優素踊、女義太夫貞打総出演 楽、手踊等演奏十數番 山移台湾新聞社長叙述、淨瑠璃、合奏、琵琶清 12時。 台湾日日新報社主催・東京十五新聞社賛助・討番隊慰問第一演芸会

1 9 14 1 1	1 9 3 1 1	同	12 26 1 0	11 9 9 0	11 9 8 0	同	10 30 1 0	10 20 1 0	10 14 1 0	10 13 1 0	10 12 1 0	10 11 1 0
義太夫初大	陣中之元旦	同	七面棒	台南演芸	台南公館の娘義太夫	同	座女義太夫一	娘義太夫	娘義太夫	娘義太夫	娘義太夫	娘義太夫
素義	ドレコー	素義	女義	女義	女義	同	女義	女義	女義	女義	女義	女義
予告	雄報	同	雄報	雄報	予告	同	予告	予告	予告	予告	予告	予告
1 9 15 1 1	1 9 1 1 1		12 24 1 0	11 07 1 0	11 07 1 0	10 30 1 0	10 9 1 0	10 20 1 0	10 14 1 0	10 13 1 0	10 12 1 0	10 11 1 0
台北	蕃山南投		台北	台南	台南	台中	新竹	台北	台北	台北	台北	台北
			府前街									
女紅場			朝陽亭	台南公館	台南公館	部竹聖倶楽	芳野亭	芳野亭	芳野亭	芳野亭	芳野亭	芳野亭
東寧連(たかさくれん)			竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座
鳳軒(三味線)(東太夫)	御祝儀(入登) 筑前琵琶義太夫其他数種之高音器 丸(米花) 鈴ヶ森(三枝) 三日平記(筑紫) 玉澤前(蝶) 野崎村(目松) 酒屋の段(小睦) 峨岸姫松(亀鳴) 谷(聯声) 御所松三段 日(相生) 忠臣蔵四段目(和樂) 儀作内の段(白)						恋女房重の井子別(千代玉) 日吉丸三段目(錦木) 二十四孝十種香(團菊) 普原寺子屋(花千代) 加賀見山七つ目(千代登) お駒才三鈴ヶ森(國芳) 太功記(総懸合)		先代萩御殿場(千代玉) お千代半兵衛八百屋の段(錦木) 日吉丸三段目(團菊) 伊勢音頭酒屋の段(花千代) 二十四孝十種香の段(國芳) 三十三間堂原太郎内(千代登) 大切総掛合忠臣蔵本藏下屋敷(本藏國芳) 三千歳團菊、伴右衛門花千代、下部錦木	先代萩御殿場(千代玉) 普原松松下屋敷(錦木) 三勝半七酒屋の段(花千代) 安達原三段目(團菊) お染久松野崎村(國芳) 岸姫松版原錦千代登) 大切総掛合忠臣蔵本藏下屋敷(本藏國芳) 三千歳團菊、播右衛門錦木、下部花千代)	白石啗茶屋場(國芳) 播州皿屋敷(千代玉) 先代萩御殿場(錦木) 普原松松下屋敷(花千代) 腰越状三つ目(團菊) 中将姫貴貴の段(千代登) 大切総懸合 お駒才三白木屋の段(喜連國芳) 丈八花千代、お駒開菊、庄兵衛錦木、稚丁千代玉、鎌倉三代記八つ目(千代玉) 普原松松下屋敷(錦木) 三勝半七酒屋の段(花千代) 安達原三段目(團菊) お染久松野崎村(國芳) 岸姫松版原錦千代登) 大切総掛合忠臣蔵本藏下屋敷(本藏國芳) 三千歳團菊、播右衛門錦木、下部花千代)	朝顔日記宿屋(國芳) 宗五郎子別(千代玉) 鈴ヶ森(錦木) 二十四孝四段目(團菊) 錦山七つ目(花千代) お千代半兵衛八百屋の段(千代登) 大切総懸合 お染久松野崎村(おみつ花千代、久松千代玉、久作國芳、お染團菊、母錦木)
	素人音曲の流行に苦言 南投藩界討伐隊の元旦祝宴の余興			初日盛況				22日千秋楽を予告				

3 5	1 9 1 1			3 5	1 9 1 1	3 5	1 9 1 1	2 26	1 9 1 1	2 26	1 9 1 1	2 11	1 9 1 1	2 3	1 9 1 1	2 2	1 9 1 1
人形活動館の操	人形	予告		芸会	素人義太夫 娘義太夫素 人合評	女義	素義	女義	女義	活動館	盛況	素人浄瑠璃	其二	共進会彙報	共進会彙報	共進会彙報	共進会彙報
人形	素義	予告		女義	素義	雑報		予告	芸評	拾得・次郎兵		雜報		予告	素義	素義	素義
	3 5	1 9 1 1		3 4	1 9 1 1	3 3	1 9 1 1	2 26	1 9 1 1		2 9、 10、	2 9 1 1	11	2 5、 2	1 9 1 1	2 4	1 9 1 1
台北	台北			台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台南	台南	台南	台南	台南	台南	台南
					新起横街												
活動館	芳野亭		台南座	活動館	芳野亭			活動館	活動館	新公館樓	新公館樓	新公館樓	新公館樓	新公館樓	新公館樓	新公館樓	新公館樓
山本三之助一座					素人義太夫の大会			竹本千葉一座	竹本千葉一座	野澤吉六、木の葉連、太樟芸者（御影花壇の五郎、歌仙の駒吉、亀甲屋の春香、山吹の頼兵衛など）							
前三段目、壺坂、先代萩、山本一流獅子の曲	佐賀夜桜鍋島猫騷動、実録先代萩、兵衛、丸橋忠弥、松前屋五郎兵衛、又意外、己が罪、琵琶唄、刑事の犯罪、人名犯、三万二両損、掛取万蔵、大工調べ、五万円、女天下、川開、中幕物、三、野崎村、玉藻慶土使、伊賀越沼津、日吉丸三、野崎村、玉藻前三段目、壺坂、先代萩、山本一流獅子の曲	御祝儀寿三番（当司美咲）新の口村（曙）壺坂（尺八入雨堂）義士銘々伝赤垣出立（勝本）千本桜すし屋（松鶴）三十三間堂平太郎内（駒助）三勝半七酒屋（相生）出世太功記光秀切腹（白風軒）日吉丸三段目（秀吉）鈴ヶ森（国芳尺八雨堂）大切野崎村掛合（国芳、駒助、秀吉、相生、三味線三次郎、連弾秀吉、あん、六べ、小竹、万流、貞奴、駒助、尺八雨堂）		開会の挨拶（三村主事）太功記十段目（小三咲、落語子は寝（案々斎柏葉）、壮士踊り（娘義太夫梅之助の隠し芸）、三勝半七酒屋の段（光玉）、勤儉講談塩原多助の伝（案々斎柏葉）	千葉、光玉、梅之助		玉澤前三段目（梅玉）忠臣蔵六（小三咲）佐倉曙儀作内（小町）御所桜（梅之助）おしゆん伝兵衛堀川（光玉）太功記（千葉）	壺坂（吉六）	靖会（6、11時）	芸妓舞踏（午後1、5時）、子弟戯及子弟浄瑠璃会	芸妓舞踏（午後1、5時）、子弟戯及子弟浄瑠璃会（6、10時）	芸妓舞踏（午後1、5時）、子弟戯及子弟浄瑠璃会（6、10時）	芸妓舞踏（午後1、5時）、子弟戯及子弟浄瑠璃会（6、10時）	芸妓舞踏（午後1、5時）、子弟戯及子弟浄瑠璃会（6、10時）	芸妓舞踏（午後1、5時）、子弟戯及子弟浄瑠璃会（6、10時）	芸妓舞踏（午後1、5時）、子弟戯及子弟浄瑠璃会（6、10時）	芸妓舞踏（午後1、5時）、子弟戯及子弟浄瑠璃会（6、10時）
山本三之助出語り		鶴澤三次郎引揚帰国送別会 午後六時より		午後一時より五時頃まで				竹本千葉顔写真あり 3/4 秋葉、基隆へ乗り込み 3/5 記事「活動館の操人形」		吉六は盲人。2月4日から時間の都合で延期							台南嘉義阿緞三庁農会所聯合南部物産共進会。楼上では歌留多大会。通行券大人30銭、童子15銭、席料5銭。9、10日に延期。

11/30 11/1	11/27 11/1	11/25 11/1	11/17 11/1	9/22 11/1	6/26 11/1	6/21 11/1	6/15 11/1	6/14 11/1	4/20 11/1	4/16 11/1	3/5 11/1
会素人浄瑠璃	納会素人浄瑠璃	概況家族共楽会	会素人浄瑠璃(十一日)	劇台巾慈善演	祭昨日の稲荷	時事小言	中止素人浄瑠璃	素人浄瑠璃	浄瑠璃会台巾通信	会素人浄瑠璃	浄瑠璃会
素義	素義	不明	芸妓	不明	芸妓	男義	素義	素義	素義	素義	素義
芸評	予告	雑報	雑報	予告	雑報	雑報	予告	予告	雑報	雑報	予告
松坊											
11/27 11/1	11/27 11/1	11/23 11/1	11/11、12	10/22 11/4	6/25 11/1			6/14 11/1	4/15 11/1	4/15 11/1	3/5 11/1
台北	台北	台北	阿綴	台中	台北			台北	台中	台中	台北
新起横街	新起横街	艇舦						撫台街			
魚金樓上	魚金樓上	芳野亭	阿綴座	台中座	穴守稲荷			活動館	土宅松本弁護	松本弁護	芳野亭
東寧連	東寧連		り 紅裙連 東月、宝来樓の 小翠(基隆の駒之助の 後身 等の飛入りもあ	井筒 東月、宝来樓の 紅裙連 白翠園の太極	高砂候・台北候・艇舦 遊郭				台巾文案会員	台巾文案会員	
治)は取止め	菅原の寺小屋(相生・真打)朝顔宿屋の段(勝美・前座、小林工務所主人、初舞台、太功記十段目(魁、龍本さん)志度寺(三洋、牛乳やさん)弁慶上使の段(肥声)玉三小坂部館(鱗八甲庄の橋本さん)日吉丸三の切(魚金の當代)壺坂山寺(菊八)鈴ヶ森(可笑、吾妻の帳代)本蔵下屋敷(金之助)三日太平記(藤枝、古着屋)お染久松野崎村(相生・真打)二十四孝(福治)は取止め	菅原の寺小屋(相生・真打)朝顔宿屋の段(勝美・前座、小林工務所主人、初舞台、太功記十段目(魁、龍本さん)志度寺(三洋、牛乳やさん)弁慶上使の段(肥声)玉三小坂部館(鱗八甲庄の橋本さん)日吉丸三の切(魚金の當代)壺坂山寺(菊八)鈴ヶ森(可笑、吾妻の帳代)本蔵下屋敷(金之助)三日太平記(藤枝、古着屋)お染久松野崎村(相生・真打)二十四孝(福治)は取止め	奇術。落語。筑前琵琶。喜劇浪花節。滑稽忠臣蔵。義太夫。喜劇悲劇。岡山公園。芸妓小菊住宅等。又和文記者扮支那革命軍大本營悲劇。萬葉堂首及漢口美人。	筑前琵琶。尺八琴。三味線、義太夫、剣舞、茶番。狂言、素人演劇、審音機等	艇舦遊郭の橋弁慶で玉子の牛若丸 ぼんたの弁慶 東太夫の義太夫			玉藻前三、お俊伝兵衛堀川(相生)忠臣蔵三(菊水)加賀見山又助内(肥声)御所後三(艶次)三勝半七酒屋(魚)日吉丸三(魁)菅原四(幸樹)鈴ヶ森(勝次)三味線(東、鐘龍)			
1912/01/15に福治廃業の 記事あり	午後五時より	本家族共楽会	近來花柳界に義太夫の流行日を 送うて盛んにして魚虎の女将千 歳の門下生のみを以てするも十 有余名を数ふ	風水害慈善演芸会。純益金を新 開社募集義金へ寄附。	「なかなか一つではあなが斯様い ふ場合には些と不釣合の演物で はなかつたかと思ふ」	竹本摂津大嬢が東京音楽学校邦 楽調査係に採用されたことを皮 切りに、台湾文化の向上を論じ る	活動館屋根前落(6月13日)に より右記公演中止	芳野亭から変更 午後六時より	漢文で「子弟浄瑠璃会(一種雅 歌)」と表記	2行右に同じ	

3/15 12/2	3/16 12/2	2/13 12/2	2/13 12/2	2/19 12/7	1/20 12/2	1/19 12/2	1/15 12/2	1/12 12/2
朝日座	娘義太夫	素人義太夫	山一昨日の円	会素人浄瑠璃	浄瑠璃の素人	大人素人義太夫	会追善浄瑠璃	浄瑠璃の素人
人形	女義	素義	不明	素義	素義	女義・素義	素義	芸妓・素義
予告	予告	雑報	雑報	予告	予告	雑報	予告	予告
3/15 12/2	3/16 12/2	2/13 12/2	2/19 11/2	2/19 12/7	1/21 12/2	1/15 12/17	1/15 12/17	1/12 12/13
台北	台北	島澎湖	台北	台北	淡水	台北	台北	台南
			円山	八甲庄		八甲庄		
朝日座	芳野亭	庁長官邸	豊川稲荷	日蓮宗布教所	公会堂	日蓮宗布教所	日蓮宗布教所	南座
上村一座	娘義太夫の若手連数名	国芳・京阪に名のある			歎音連		素人浄瑠璃各連聯合大会	東太夫、台南天狗連、芸妓連
合切(御羅先代萩御殿の段)(内匠太夫糸勝次	前【生写朝顔日記】秋月巴之助屋敷(浪尾太夫糸浅次郎小瀬川の段(綱登太夫糸仙右衛門)摩谷々藏の段(綱登太夫糸仙右衛門)浜松小屋の段(春木太夫糸千賀平)徳右衛門宿屋より大井川迄(浜木太夫糸仙右衛門)深雪岡助道行の段(懸合切)御羅先代萩御殿の段(内匠太夫糸勝次	横山庁長、足立要塞司令官、沢田医院長、其他数名	筑前琵琶(霊馬の連、義太夫「朝顔日記宿屋」)	桜丸切腹(白鳳軒)合邦内の段(美好)志度寺の段(松倉)岸松三の切(卿)又助住家(三玉)平太屋住家(喜楽)沢市内の段(小能成)本蔵下屋敷(相生)大切野崎村の段(糸掛合)三味線東太夫、鐘龍、三玉、三次郎	三勝半七酒屋(笑来)朝顔日記宿屋(春笑)御所松弁慶上使(三笑)宮原伝授手習鑑等子屋雪溪(忠臣蔵一段目の清書(錦声)鎌倉三代記三浦別(三玉)玉澤前三段目(梅枝)血屋敷鉄山館(一声)八陣正清水城(晩生)三十三間堂平太郎住家(基楽)箱根靈驗記滝の段(白鳳軒)三味線(豊竹三玉)	殿場政岡忠義の段(五角)	十五日 御祝儀玉の舟(登山)朝顔日記浜松(笑翁)御所松弁慶上使(静)忠臣蔵三段目(如月)血屋敷鉄山館(我楽)三日太平記光秀切腹(真砂)三勝半七酒屋(亀鶴)野崎村(柳枝)勝栗毛赤坂並木(白鳳軒)十六日 四ツ谷怪談伊右衛門住家(二声)義士銘々伝赤垣出立(勝木)三日太平記松下住家藤枝)三十三間堂平太郎住家(喜楽)御所松弁慶上使(岬)佐倉宗五郎義作切腹(みよし)日吉丸五郎助切腹(松鶴)加賀見山又助住家(肥左)忠臣蔵本蔵下屋敷(相生)十七日 太閤記十段目(花笑)菅原四段目(花遊)三勝半七酒屋(長枝)玉澤前三段目(鑓鳳)義士銘々伝赤垣出立(嵯峨)加賀見山又助(魁)忠臣蔵助平切腹(三津)血屋敷鉄山館(松倉)お半長右衛門宿屋(和楽白鳳軒掛合)先代萩御殿場政岡忠義の段(五角)	東太夫は今後、打狗、風山、九曲堂、阿綴、蕃薯寮及び各精糖会社所在地等を巡業
	3月4日神戸戸巻の信濃丸で台北へ乗り込み	来会者は林郵便局長、田村庶務課長、斎藤警務課長、平井財務課長、平野税関支署長、其他百余名	紀元節祭礼余興	6日限りにて打止めの苦なりし、が好人氣のため更に今晚まで延期する由	午後五時より	豊竹三玉追善素人義太夫 聴衆から掛け声「イヨー提灯ヤー」	豊竹三玉追善 午後五時より	

3/31 1/2	3/31 1/2	3/31 1/2	3/29 1/2	3/28 1/2	3/28 1/2	3/26 1/2	3/18 1/2	3/18 1/2	3/18 1/2	3/18 1/2	3/16 1/2	3/16 1/2
座 津国太夫一	芳野亭	聴く 津国太夫を	瑠璃 朝日座の浄	朝日座	芳野亭	朝日座	十把一東	芳野亭	朝日座	人形浄瑠璃	朝日座	芳野亭
文楽	女義	文楽	文楽	文楽	女義	文楽	人形	女義	人形	人形	人形	女義
予告	予告	芸評	予告	予告	予告	予告	投書	評判記	予告	評判記	予告	予告
		鳥天狗					人形新					
4/9 1/2より	3/31 1/2	3/30 1/2	3/29 1/2	3/28 1/2	3/28 1/2	一兩日中に開演			3/18 1/2		3/16 1/2	3/16 1/2
基隆	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
基隆座	芳野亭	朝日座	朝日座	朝日座	芳野亭	朝日座	朝日座	芳野亭	朝日座	朝日座	朝日座	芳野亭
津国太夫一座		津国太夫一座	津国太夫一座	津国太夫一座		大坂文楽連(太夫・津国太夫、其太夫、鶴尾太夫以下数名三味線・大四郎六之助・六蔵等)	上村一座	上村一座	上村一座	上村一座		
	「親心」二幕、「見合」二幕、忠臣蔵六ツ目(団加津)・八陣六ツ目正清本城(国芳)	弁慶上使(其太夫)朝顔宿屋・大井川(鶴尾太夫・六之助)合邦(津国太夫・大四郎)	三十三間堂(国子太夫)忠臣蔵六ツ目勘平切腹森(鶴尾太夫)太功記十段目(津国太夫)	寺子屋の段(津国太夫 糸大四郎)	野崎村(団加津、糸三次郎、菅原伝授手習鑑寺子屋(国芳、糸三次郎、菅原伝授手習鑑)	「相続争ひ」三幕、「霊魂不滅」二幕、お染久松		前「奥州秀衡有義譜」池田駅宿屋の段(春木太夫、千賀上、藤原秀衡館の段(内匠太夫、勝登也、後藤昌司館の段(綱登太夫、千賀上、中箱根靈験記十一段目)三人上戸段(浜太夫、仙右衛門)切「都五条牛若弁慶仕合段」(かけ色)		「近江源氏先陣館」和田兵衛隠家の段(綱太夫、糸千賀上、佐々木盛綱陣家の段(内匠太夫、糸勝治)「艶姿女舞衣」三勝半七四郎の段(春木太夫、糸仙右衛門)「肥後駒下駄」五条蝦屋の段(春木太夫、糸浅次郎)		「一番目喜劇」「一人娘」三場、「一番目喜劇」「大冒険」二場、中森浄瑠璃恋娘昔八丈鈴ヶ森(団加津、糸三次郎、先代萩御殿場(国芳、糸三次郎)
旧合同劇を開始	同日より朝日座では台湾初の新	4年前の大島太夫一座以来待望ひで歓迎されたらしい」	初日は大入りでもなかったが天狗連が熱心に聴いていた。「道がに確かりとした語り口で一人として落が無いと大に感寸満足して居た様だ」			「去る地方の同好天狗連」の後援を受け渡台。27、30日(3/31付記事による)。	国芳の帰来と団加津の加入、二人の女義の乱れ髪により大人気、舞台は感心だが浄瑠璃は訛りだらけ	人形は立派だが人氣が無くて気の毒				

6/21 12 12	6/15 12 12	6/15 12 12	6/8 12 12	6/7 12 12	6/5 12 12	4/20 12 12	4/20 12 12	4/17 12 12	4/17 12 12	4/13 12 12	4/13 12 12
余興 バラック街	芳野亭	店の余興 バラック売	芳野亭・同 娘義太夫	太夫 芳野亭の義	娘義太夫・同 娘義太夫	淡木素人 瑠璃会	芳野亭	基隆座	芳野亭	芳野亭	芳野亭の娘 義太夫
素義	女義	不明	女義	女義	女義	素義	女義	芸妓・素義・人形・義・雑報	女義	女義	女義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告		予告	予告	芸評
											鯉太郎
6/21 12 12	6/15 12 12	6/15 12 12より	6/8 12 12	6/7 12 12	6/5 12 12	4/20 12 12	4/20 12 12	興行中	4/17 12 12	4/13 12 12	4/10 12 12
台北	台北	台北	台北	台北	台北	淡水	台北	基隆	台北	台北	台北
		新公園内									
街バラック	芳野亭	商店 バラック	芳野亭	芳野亭	芳野亭	館川口屋旅	芳野亭	基隆座	芳野亭	芳野亭	芳野亭
	阪神娘義太夫		阪神娘義太夫	阪神娘義太夫	阪神娘義太夫	観音連		上村源之丞一座		阪神娘義太夫	阪神娘義太夫
糸(かね龍)	箱根霊現記(菅谷) 御所松三の切(勝治) 三日 太平記(勝治) 千代萩の間(菊水) 鏡山又助 (我々) 弥治喜多赤坂(和楽) 布引四段目(相生)	浪花節、義太夫、能狂言、仕舞、剣舞其他	御所松弁慶上使(勝子)、阿漕平治(団加津、日吉丸小牧山(勝玉))	日連記動作住家(勝子)、安達ヶ原袖萩祭文(団加津) 彦山権現六助住家(は昇、お染久松野崎村之段(国芳、伊賀越六ツ目沼津里の段(勝玉)) 三味線(港玉)	白石晴吉原揚屋(勝子)、先代萩御殿(団加津、お染久松野崎村(は昇)、菅原手習鑑寺子屋(国芳、摂州合邦辻(勝玉)、三味線(港玉))	陣正清水城(可幾久(三味線、豊竹三玉))	宝の入舟(入登)二度目清書(三笑) 日吉九三段目(弥生) 安達原袖萩祭文(一声) 太功記十段目(香玉) 御所松弁慶上使(雲溪) 菅原寺子屋(錦声) 豊仇討滝の段(松玉) 三十三間堂平太郎住家(笑玉) 加賀見山又助住家(海枝)	忠臣蔵三ツ目けんか場(勝子) 摂州合邦ヶ辻合邦弁慶上使の段(国芳) 三勝半七酒やの段(勝玉)	熊谷陣屋の段(勝玉)	御所松三段目弁慶上使の段(勝子、朝顔日記宿屋の段(団加津、忠臣蔵八ツ目本蔵下屋家の段(は昇、三十三間堂棟木由來平太郎住家の段(国芳、絵本太功記尼ヶ崎の段(勝玉))	朝顔日記浜松(勝子)、本蔵下屋敷(団加津、阿漕ヶ浦平治住家(は昇、太功記十段目(国芳、伊賀越道中又六沼津の里(勝玉)、三味線(湊菊改め港玉))
	雨天中止のところ二十一日より再開	売店繁昌策として余興開始	娘義太夫、無理心中三場、お染久松野崎村茶番一場	娘義太夫、無言の夫婦二幕、嫉妬の競争四場	午後六時より		同地素人浄瑠璃雀連が毎夜一幕ずつ助演するため人気、今十七日は吾妻の米八愛之助が桃太郎奈良江小富士などの連三味線にき野崎村を演ずる由なれば引続き好人氣となるべし				

11/28 19/12	11/28 19/12		11/26 19/12	11/10 19/12	9/12 19/12	9/10 19/12
芳野亭	栄座の義太夫大会		全島素人義太夫会	乃木大将浄瑠璃募集	朝日座義金浄瑠璃	義金浄瑠璃会
女義	素義		素義	文楽	素義	素義
予告	芸評		予告	雑報	予告	予告
	鳳梨子					
11/28 19/12	11/26 19/12		11/26 19/12		9/12 19/12	9/10 19/12
台北	台北		台北	大阪	台北	台北
芳野亭	栄座		栄座	近松座	朝日座	朝日座
勝玉(三味線竹本国芳)	玉澤前三段目追春館の段、伊賀越三ツ目沼津里平作内の段(一)の谷三段目熊谷陣屋の段(竹本)	梅枝の尼ヶ崎、吾男の赤垣、寿々女の弁慶、鈴八の酒屋 相生の本蔵	線(東) 経治(菊八) 三勝酒屋(鈴八) 三味線(三味) 竹本八重(竹本鐘龍) 豊竹(三)	壺坂(一声) 玉澤前三段目(十三) 本蔵下屋敷(十雀) 三日太平記(龜枝) 忠臣蔵三段目(鱈) 熊谷陣屋(鹿生) 四ツ谷(かし) 新吉原(花笑) 又助内(我笑) 三日太平記(鈍二) 御所使三段目(燕) 義経腰越状(組次) 弁慶上使(弥生) 御所使三段目(不二) 皿屋敷(冬木) 玉澤前三段目(玉角) 平作住家(吾才) 合邦内(相水) 太十(魁) 御所使三(三松) 電仇討(三洋) 忠六(山水) 三勝酒屋(龜鶴) 忠三(菊水) 合邦(久木) 忠三(如月) 柳(喜楽) 惣五子別れ(美好) 日吉丸三(松鶴) 祇治(松雀) 忠四(余三) 彦九(勝本) 陣屋(宵枝) 蝶花形八ツ目(口三) 太十(梅枝) 吃文(和楽) 太文字屋(相生) 又助(肥声) 赤垣(吾男) 柳(三) 先代萩(金の助) 経治(菊八) 三勝酒屋(鈴八) 三味線(三味) 竹本八重(竹本鐘龍) 豊竹(三)	御祝儀玉入船(叶) 岸姫松飯原館(冬木) 佐倉曙儀作内(美好) 忠臣蔵六段目(三洋) 腰越伏泉鋪(我笑) 御所使三段目(肥声) 太功記十段目(柳枝) 三十三所壺坂(菊八) 三十三間堂平作内(金之助) 電仇討淹の段(翁軒) 伊賀越平作内(和楽) 盛衰記三段目(相生) 大切千両轆轤川内(師匠) 連絃出三味線師匠連絃太鼓曲	御祝儀玉入船(叶) 岸姫松飯原館(冬木) 佐倉曙儀作内(美好) 忠臣蔵六段目(三洋) 腰越伏泉鋪(我笑) 御所使三段目(肥声) 太功記十段目(柳枝) 三十三所壺坂(菊八) 三十三間堂平作内(金之助) 電仇討淹の段(翁軒) 伊賀越平作内(和楽) 盛衰記三段目(相生) 大切千両轆轤川内(師匠) 連絃出三味線師匠連絃太鼓曲
				丙50円		風水被害救恤義金募集 一部スキャン範囲外

(2) 大正

7/6 19/12	6/21 19/12
芳野亭	芳野亭
女義	女義
予告	予告
7/6 19/12	6/21 19/12
台北	台北
芳野亭	芳野亭
阪神娘義太夫	
	「嫉妬」二幕、「野晒」三場、日吉丸小牧山城中(勝子) 朝顔日記宿屋(田加津) 蝶花形小坂部館(国芳) 菅原子屋(勝玉)
	三十三間堂平太郎住家の段(勝子、明烏雪の曙山名屋の段(田加津、尼ヶ崎の段(勝玉)
	娘義太夫、ホワイトドッグ二場、紅ハンカチーフ二場、女中のお目見得二場。国芳は鼻の治療のため台北医院に入院

7/3 19/13 3/	7/3 19/13 3/	7/3 19/13 3/	7/3 19/13 3/	7/3 19/13 3/	5/6 19/13 3/	3/31 19/13 3/	3/27 19/13 3/	3/20 19/13 3/	2/13 19/13 3/	12/18 19/12 2/	12/12 19/12 2/	
十把一東	大隅の初日を聴く	栄座	栄座の大隅	素義	追善浄瑠璃	浄瑠璃大会	素人浄瑠璃	素人浄瑠璃	素人義太夫	素人義太夫	素人浄瑠璃	
文楽	文楽	文楽	文楽	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	
投書	芸評	予告	雑報	予告	予告	不明	予告	予告	予告	予告	予告	
都柳	魔雲坊											
日	7/1 19/13 3/	7/3 19/13 3/	7/3 19/13 3/	5/4 19/13 6/	3/01 19/31 3/04	19/13 3/	不明	3/22 19/23 3/	2/19 19/21 3/	12/18 19/12 2/	12/12 19/12 2/	
台北	台北	台北	台北	台北	台南	台北	打狗	打狗	台北	台北	台北	
									市場内	八甲庄	八甲庄	
栄座	栄座	栄座	栄座	台南座	朝日座	不明	打狗座	打狗座	芸場 同好会演	教所 日蓮宗布	教所 日蓮宗布	
竹本大隅太夫一行	竹本大隅太夫一行	竹本大隅太夫一行	竹本大隅太夫一行	芸妓連 竹本隅子太夫	台北・基隆・淡水の素人連・台北橋・基隆の素人連	燕連						
野崎村(大隅太夫系団平ツレ仙市)	三十三間堂(静太夫・合邦江・錦太夫系仙市)	達引堀川猿廻しの段(大隅太夫系団平ツレ仙市)	伊賀越四郎寺の段(鷹太夫系団藏) 先代萩竹の間(明石太夫系小団) 雙仇討天神堤の段(三太夫系小団) 梅の由兵衛榮楽町の段(里太夫系三太夫系小団) 義経千本桜野屋の段(静太夫系広市) 金比羅利生記志渡寺の段(錦太夫系仙市) 近頃河原達引堀川猿廻しの段(大隅太夫系団平ツレ仙市)						味線(東、鐘龍、三玉、勝玉、八重)	御所松三(義昇) 皿屋敷(づばめ) 柳(喜楽) 普原四つ目(松風) 酒屋(長枝) 本蔵下屋敷(美好) 志渡寺(松香) 御殿(五角) 忠六(東山水弁慶(三笑) 赤垣(勝水) 又助(肥声) 源藏辰り(松鶴) 四ツ谷(一声) 忠四(相水) 帶屋(和楽) 道春館(冬水) 合邦(三洋) 三味線(三玉)	御所松弁慶上使(艶次) 伊賀越道中双六七(梅枝) 妹背山鯉七上使(菊水) 鏡山又助住家(梅笑) 合邦辻合邦内(久木) 赤垣源藏(勝水) 忠臣蔵六(三洋) 大功記十(松鶴) 日吉丸三(三松) 二代鏡秋津島内(和楽) 平坂名盛衰記逆轉(相生) 紙治炬燵(愛水) 三十三所盛衰(二声) 先代萩御殿(組次) お俊伝兵衛堀川(総かけ合糸鐘龍)	夕刻より
聴衆の私語などを非難				請元が丸中で後援が料理屋組合、思ひ切つて派手に行のは当然の事だ	豊竹東太夫の病氣廃業帰国送別会、近來稀な大会合	スキャン範圍外のため詳細不明	スキャン範圍外のため詳細不明	打狗にては昨今花柳界其他にて素人浄瑠璃流行しつゝ、あり	台北基隆素人義太夫大会 木戸無料	午後六時より		

9 21	1 9 13		9 8	1 9 13	8 4	1 9 13		8 2	1 9 13	8 2	1 9 13	7 28	1 9 13	7 28	1 9 13	7 19	1 9 13	7 6	1 9 13
素人浄瑠璃	淡水観月浄瑠璃会	新起連浄瑠璃会	新評林 大隅 憶	素人浄瑠璃	素人浄瑠璃	一行 基隆の大隅	大隅太夫死す	素人浄瑠璃会	大隅の一行	盆供養浄瑠璃	文楽	文楽	文楽	文楽	文楽	文楽	文楽	文楽	文楽
素義	素義	素義	漢詩	素義	素義	雑報	雑報	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	漢詩	予告	予告	雑報	雑報	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	狂詩	狂詩
																		望蜀山人	
9 22	1 9 13	9 15	1 9 13	9 9	1 9 13	8 2	1 9 13	7 28	1 9 13	7 28	1 9 13	7 28	1 9 13	7 28	1 9 13	7 19	1 9 13		
台北	淡水	台北		台北	八甲庄			台北	八甲庄	基隆	台北	八甲庄							
新起横街																			
魚金	演武場	ル 鉄道ホテ		教所 日蓮宗布	肥声、松鶴、藤枝、不勝木、三洋、一二三、花笑、相生、和楽、魁、次、美好、久木、組、吉、ねぶか、亀鶴、葉、間、小林、柳枝、二調等			稲丸会	基隆座	教所 日蓮宗布	富子、兼子、三松、藤枝、松鶴、勝木、三洋、大								
		新起連																	
宝の入舟（入登）朝顔日記宿屋（春笑）御所桜三段目（三笑）阿波四段目（台北ねぶか）三笑三平記（錦声）菅原四段目（台北ねぶか）三笑三平記（同菊水）根州合邦辻（同松鶴）三勝半七酒屋（愛水）大切掛合（千両のぼり）鉄ヶ嶽（錦声）稲川（三笑）おとわ（弥生）呼出し（愛水）	加賀見山又助住家（半吉）菅原伝授寺子屋（常盤）千代萩竹の間（菊水）太功記尼ヶ崎（藤枝）合邦辻内（松鶴）日吉九三（花笑）紙伯炬燵（愛水）合邦辻奥（相生）白石嘶揚屋の段（里太夫）三味線野澤兵三																		
一部スキャン範囲外			竹本大隅太夫追悼の漢詩1首																

[illegible]

11/28 19/14	11/26 19/14	10/31 19/14	10/25 19/14	10/21 19/14	10/2 19/14	8/27 19/14	8/19 19/14
聯合素人浄瑠璃会	素人義太夫大会	素人義太夫大会	素人浄瑠璃	素人義太夫会	素人浄瑠璃大会	素人浄瑠璃大会	素人浄瑠璃大会
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
僕							
11/26 19/14	11/26 19/14	10/31 19/14	10/24 19/14	10/21 19/14	10/2 19/14	8/27 19/14	8/19 19/14
台北	台北	淡水	台北	台北	台北	台北	台北
				新起横街	八甲庄		
新高館	新高館	部 淡水倶楽	新高館	丸新前藤本氏宅	日蓮宗布教所	上 勤工場階	上 勤工場階
人連 台北・基隆・淡水の素	鐘龍、勝玉、八重吉、三主等			竹本八重吉			
柳（六助、ツレ鈴弥・八重吉）菅原四段目（松大切掛合三十三所壺坂（二声）帯屋（三吉野）	御所松弁慶上使（二笑）先代萩御崎（二奴）三御所松弁慶上使（二笑）王澤前（三）合邦（里雀）梅川忠兵衛新口村（愛水）関取二代鑑（和来）酒屋（相生）大切かけ一大功記十段目（光初（卿）婆（里雀）操（愛水）十次郎（相生）菊（和来）三味線（竹本鐘龍）	御祝儀（入登）菅原四（橋）安達原三（二声）御所松弁慶上使（二笑）先代萩御崎（二奴）三御所松弁慶上使（二笑）王澤前（三）合邦（里雀）梅川忠兵衛新口村（愛水）関取二代鑑（和来）酒屋（相生）大切かけ一大功記十段目（光初（卿）婆（里雀）操（愛水）十次郎（相生）菊（和来）三味線（竹本鐘龍）	掛合（相生）（三吉野）（六助）	三十三間堂（當代）加賀見山又助（秀八）菅原松王内（すゝめ）三勝半七（寿）彦山権現六助内（きかく）合邦ヶ辻（鈴弥）菅原寺子屋（六助）二度目消書（峰菊）布引の四（〇〇坊）太功記尼ヶ崎（魁）太功記妙心寺（二調）三日太平記九（叶）新吉原揚屋（小嶋峨）勢州阿漕浦（三吉野）伊勢音頭油屋（相生）忠臣蔵本蔵下屋敷掛合（相生）（三吉野）（二調）関取千両幟掛合（相生）（三吉野）（六助）	二十四孝（小鹿）太功記十段目（朝平）三十三間堂平太郎内（亀笑）日吉丸三段目（花笑）弁慶上使（琴水）岸松松三段目（冬木）本蔵下屋敷（藤枝）松王下屋敷（魁）太功記杉の森（二調）惣五郎子別れ（美好）三十三間堂平太郎内（檢番きかく）摂州合邦ヶ辻（檢番鈴弥）三勝半七酒屋の段（相生）三味線（三玉、八重吉）	八陣八ツ目（ねほけ）柳（嘉樂）三日太平記貴（時次）菅四（冬木）日吉丸（明石）柳（亀笑）又助（兼）菅四（冬木）日吉丸（可）岸姫（二）岸姫（二）作（美好）忠二（如月）志渡寺（松香）又助（白蝶）吉忠六（三洋）皿屋敷（吾妻）酒屋（龜鶴）日吉丸（花笑）柳（不）揚屋（久木）忠三（我笑）御殿（五角）太十（梅枝）六助（藤枝）弁慶（二調）下屋敷（松鶴）堀川（魁）四ツ谷（二声）日吉丸（鈴弥）忠（吾男）忠四（三吉野）忠六（愛水）菅四（和来）柳（きかく）帯屋（相生）酒屋（寿）志渡寺（峰菊）糸三玉、糸鐘龍同八重吉	富堀川（松葉）太十（明石）柳（亀笑）又助（時次）菅四（冬木）日吉丸（可）岸姫（二）岸姫（二）作（美好）忠二（如月）志渡寺（松香）又助（白蝶）吉忠六（三洋）皿屋敷（吾妻）酒屋（龜鶴）日吉丸（花笑）柳（不）揚屋（久木）忠三（我笑）御殿（五角）太十（梅枝）六助（藤枝）弁慶（二調）下屋敷（松鶴）堀川（魁）四ツ谷（二声）日吉丸（鈴弥）忠（吾男）忠四（三吉野）忠六（愛水）菅四（和来）柳（きかく）帯屋（相生）酒屋（寿）志渡寺（峰菊）糸三玉、糸鐘龍同八重吉
	が会主となり開催	午後二時より七時まで 水合併素人義太夫大会 台北淡	スキャン範囲外のため詳細不明	午後六時より	故竹本鐘龍十五周年追悼	午後六時より	

7 19 24 6 ／	1 25 6 ／	1 19 16 ／	12 19 15 ／	12 19 7 5 ／	11 25 15 ／	5 19 21 5 ／	4 24 15 ／	3 19 10 5 ／	1 30 15 ／	11 28 14 ／
素人浄瑠璃	初会 素人義太夫	初会 素人浄瑠璃	大会 素人浄瑠璃	浄瑠璃大さ らひ	月並会 素人浄瑠璃	秘の糸 (二) 義太 夫の縁 義太 夫の義女 義 義・	大会 素人義太夫	素人義太夫	浄瑠璃初会	聯合素人浄 瑠璃会
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義・	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	雑報	予告	予告	予告	予告
										僕
7 25 16 ／	1 25 6 27 ／	1 19 16 ／	12 19 15 ／	12 19 7 5 8 ／	11 25 15 ／		4 24 15 ／	3 19 10 5 ／	1 31 15 2 ／	11 28 14 ／
台北	台北	台北	台北	台北	台北		台北	台北	台北	台北
八甲庄		西門外街		城内	西門外街			城内		
公会堂	勤工場	楽部	勤工場二 階	上勤商場階	楽部		新高館	上勤商場階	上勤工場 上勤工場 上勤工場	新高館
鶴澤一平連中		勝玉連		勝玉連	勝玉連			勝玉連	台北の素人	台北・基隆 人連 淡水の素 人連
御祝儀玉入船(入登)鳴門八ツ目(古菊)勸平 切段目(我笑)梅川忠兵衛新口村(菊水)太功記 十段目(艶次)小春治兵衛紙屋(三七十)御所 桜三段目(相生)	御祝儀玉入船(入登)鳴門八ツ目(古菊)勸平 切段目(我笑)梅川忠兵衛新口村(菊水)太功記 十段目(艶次)小春治兵衛紙屋(三七十)御所 桜三段目(相生)	御祝儀玉入船(入登)鳴門八ツ目(古菊)勸平 切段目(我笑)梅川忠兵衛新口村(菊水)太功記 十段目(艶次)小春治兵衛紙屋(三七十)御所 桜三段目(相生)	御祝儀玉入船(入登)鳴門八ツ目(古菊)勸平 切段目(我笑)梅川忠兵衛新口村(菊水)太功記 十段目(艶次)小春治兵衛紙屋(三七十)御所 桜三段目(相生)	御祝儀玉入船(入登)鳴門八ツ目(古菊)勸平 切段目(我笑)梅川忠兵衛新口村(菊水)太功記 十段目(艶次)小春治兵衛紙屋(三七十)御所 桜三段目(相生)	御祝儀玉入船(入登)鳴門八ツ目(古菊)勸平 切段目(我笑)梅川忠兵衛新口村(菊水)太功記 十段目(艶次)小春治兵衛紙屋(三七十)御所 桜三段目(相生)	御祝儀玉入船(入登)鳴門八ツ目(古菊)勸平 切段目(我笑)梅川忠兵衛新口村(菊水)太功記 十段目(艶次)小春治兵衛紙屋(三七十)御所 桜三段目(相生)	御祝儀玉入船(入登)鳴門八ツ目(古菊)勸平 切段目(我笑)梅川忠兵衛新口村(菊水)太功記 十段目(艶次)小春治兵衛紙屋(三七十)御所 桜三段目(相生)	御祝儀玉入船(入登)鳴門八ツ目(古菊)勸平 切段目(我笑)梅川忠兵衛新口村(菊水)太功記 十段目(艶次)小春治兵衛紙屋(三七十)御所 桜三段目(相生)	御祝儀玉入船(入登)鳴門八ツ目(古菊)勸平 切段目(我笑)梅川忠兵衛新口村(菊水)太功記 十段目(艶次)小春治兵衛紙屋(三七十)御所 桜三段目(相生)	御祝儀玉入船(入登)鳴門八ツ目(古菊)勸平 切段目(我笑)梅川忠兵衛新口村(菊水)太功記 十段目(艶次)小春治兵衛紙屋(三七十)御所 桜三段目(相生)
午後六時より	午後六時より	午後六時半より	午後六時より	午後六時より	午後六時より	午後六時より	午後六時より	午後六時より	午後六時より	午後六時より

7 25 1917	6 24 1917	2 6 1917	2 6 1917	2 1 1917	12 19 1916	11 24 1916	11 14 1916
会素人義太夫	義太夫 基隆の素人	栄座	大会素人浄瑠璃	大会素人浄瑠璃	大会素人浄瑠璃 に於ける	戯学生活動電	大会素人浄瑠璃
素義	素義	未詳	素義	素義	素義	真活動写	素義
予告	予告	予告	予告	予告	挿絵	雑報	予告
7 25 1917	6 24 1917		2 6 1917	2 1 1917			11 14 1916
台北	基隆	台北	台北	台北	台北		台北
立地 江瀬街埋			南門外	八甲			八甲庄
上 新小松楼	堂 基隆公会	栄座	龍口亭	公会所	栄座		日蓮宗布 教所
鶴澤一平主催	野澤(マメ)一平ほか						豊竹三玉会主、その他 鶴澤一平など各師匠連 中聯合
伊勢物語(相生)又助内(梅笑)古八(藤枝)勘平内(我笑)明鳥(花笑)沼津六(吉水)楠三(ねぶか)酒屋(寿)壺坂(小菊)堀川(魁)梅忠(菊水)太十(久木)紙治(三十七)	壺坂		紙治(一声)太十(呂三)八陣八ツ目(梅枝)忠臣蔵二段目(鶴屋)お駒才三(柳枝)又助内(松玉)三日月太平記(大和)寺子屋(艶次)中將姫雪貴(組次)日吉丸(源正)玉三(鴻)赤垣源蔵(小蔵我)お俊伝兵衛(照蝶)鳴戸(三笑)沼津(三澤)本蔵下屋敷(美好)鏡山長局(菅枝)	四ツ谷怪談伊右門内(一声)伊賀越遠眼鏡の段(梅枝)三十三ヶ所壺坂浜市内の段(色界)安達原三段目(白蝶)明島山名屋の段(二重)彦山権現六助内の段(藤枝)お染久松野崎村の段(柳枝)玉澤前三段目(鶴屋)忠臣蔵四段目(和寒)金刀比羅利生記百度平内の段(叶)鏡山又助内の段(勝次)日吉丸三段目(花笑)お駒才三鈴ヶ森の段(かへ)菅原寺子屋の段(鹿生)忠臣蔵勘平切腹の段(我笑)御所松三段目(改玉)赤垣源蔵出立の段(艶次)楠昔囃どんぶり(こ)ねぶか松王下屋敷の段(組次)朝顔日記浜松小屋の段(松葉)三勝平七酒屋(又)三十三間堂平太郎内(小蔵我)白石断新吉原屋の段(小菊)一ノ谷三段目(吾角)太功記十段目(寿)伊勢物語三段目(相生)忠臣蔵五段目(山水)仙代萩御殿の段(三洋)合邦辻下の巻(魁)阿波鳴戸八ツ目(三松)恋の飛脚新口村の段(菊水)三日月太平記九ツ目(亀鶴)朝顔日記宿屋の段(久木)時雨の炬燵紙治の内の段(三十七)本蔵下屋敷(美好)播州皿屋敷(松香)蝶花形八ツ目(栄旭)三十三所壺坂寺の段(菅枝)腰越状泉三郎館の段(呂三)			
午後六時より	午後七時より	午後六時より	午後六時より 大会 入場無料	出演者いろは順	高座のスケッチ。太夫・花香(女)、三味線・一平(男)・小種(女)	活動写真の庄迫により新派・浪花節・講談・落語・娘浄瑠璃等すべて凋落、栄座・朝日座経営困難となり譲渡。世界館・芳野亭の活動写真は盛況。	午後六時より

[illegible]

8 19 8 18 ／	5 19 28 18 ／	5 19 24 18 ／	1 19 15 18 ／	12 19 17 17 ／	9 19 28 17 ／	9 19 20 17 ／	9 19 19 17 ／	9 19 8 17 ／
部台中浄瑠璃	地方近事 打狗浄瑠璃大会	打狗浄瑠璃大会	素人義太夫会	慈善演劇会	追善義太夫会	地方近事 基隆追善浄瑠璃	追善浄瑠璃	十把一束
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義
雑報	雑報	予告	予告	雑報	予告	雑報	予告	投書
								義太夫狂
8 19 6 18 ／	5 19 24 18 25 ／	5 19 24 18 25 ／	1 19 15 18 16 ／	11 19 27 17 28 ／	9 19 28 17 ／	9 19 20 17 ／	9 19 20 17 ／	不明(此間)
台中	打狗	打狗	台北	嘉義	街淡水	基隆	基隆	台北
			新起街					
部台中倶楽	打狗公館	打狗公館	跡古道具屋	嘉義座	部淡水倶楽	基隆座	基隆座	龍口亭
鶴澤一平一行	連天狗連、梅屋敷の芸妓			嘉義素人義太夫研究会				
		△初日芸題 御所松弁慶上使(小玉)玉藻前三段目(梅先(ママ)阿波鳴戸巡礼歌の段(巴津昇)△二日芸題 千代萩御殿場(九重)本蔵下屋敷(巴津昇)△三日芸題 太功記十段目(小玉)朝顔日記浜松小屋(梅光)朝顔日記宿屋の段(巴津昇) 覽仇討三人上戸(九重) お染久松野崎村(巴津昇)	双蝶々(菅板(ママ)日吉丸(改玉)朝顔日記(大和)岸姫(組次)太十(中司)梅忠(菊水)勘平切腹(三洋)紙治(三七十)寺小屋(寿四度寺(ママ)柴馬)千両のぼり(桜(三)玉忠四(和楽)壺坂寺(二声)三勝酒屋(三笑)平次住家(ねぶか)阿波十(小菊)野崎(柳枝)お俊(魁)御所松(かね子)鈴ヶ森(梅子)三味線豊澤三省	毎夜各演十八番	錦声(二度目)相生(布川(ママ)山口やすよ(安達原)和楽(沼津)菊水(梅忠)ねぶか(阿漕)改玉(日吉丸)小菊(壺坂)三笑(佐倉曙)	龍男(番左衛門(十雀)本蔵(十三)三味線(鍾)	たむけ(入笠)壺坂寺(松雀)鏡山古郷錦鈴(弥生)佐倉曙(十)弁慶上使(立石)阿波鳴戸(天石)忠臣蔵(福徳軒)布引四(若菜)酒屋(松花)八陣(東)箱根野駱記(松香)勢州阿漕(浦十雀)水掛村(ママ)吾男(合邦)辻十二(三味線)鍾鹿梅香、大阪(マ)掛合本蔵下屋敷若松少助(弥生)三才蔵(松雀)下部(吾男)番左衛門(十雀)本蔵(十三)三味線(鍾)	桶昇君の義太夫には感心しました一層勉強して台湾の花形たらん事を希望す
家族無料 雨天だが盛況	午後七時半より 倶楽部会員・		午後六時より	午後五時より 東京大阪水害義捐のため事前演劇会 發起人代表者山本久蔵・安倍馬治	午後五時より 愛水三年忌追善	末広館主糸雀一年祭 友人柴田氏等の発起、午後五時より	末広館主一年祭	

1 / 9 / 23 19 /	1 / 20 / 19 19 /	12 / 16 / 18 918 /	12 / 14 / 18 918 /	12 / 9 / 18 918 /	9 / 21 / 18 918 /	8 / 14 / 18 918 /
会 義太夫天狗	会 素人浄瑠璃	会 素人義太夫	大会 素人浄瑠璃	納会 素人義太夫	大会 追善浄瑠璃	会 素人義太夫
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
不明	1 / 20 / 21 19 /	12 / 16 / 17 918 /	12 / 14 / 18 918 /	不明	9 / 22 / 18 918 /	8 / 14 / 15 918 /
不明	台北	台北	台北	台北	基隆	台北
	北門街		新起街	新起街		八甲庄
	方 鍼力屋菅	所 魚金向ひ 古物競売	妓 魚金義雲 富丸宅	浅 新起湯向 原 ひ建具屋	基隆座	教 日蓮宗布 所
					郎、足利藤吉 連中、梅鷺連中、竹本 利三郎、宇田伊代吉、 藤川与一郎、広木秋太	
竹三玉	二度目(美佐子) 御所(冬木) 儀作(菊水) 壺坂(一声) 忠四(和楽) 酒屋(相生) 三味線豊	白石新吉原(梅子) 三十三間堂(小柳) 関兼千両轍(二三) 三勝半七(中司) 壺坂沢市(兼志) 朝顔宿や(桜玉) 八陣政清本城(普枝) 志渡寺(松香) 新口村(菊水) 阿漕浦(藤枝) 六(我笑) 鳴門(三松) 岸姫(竹司) 中將姫(組次) お胸才三(麟鳳) 野崎村(柳枝) 四ツ谷怪談(一声) お後伝兵衛(魁) 弥次郎兵衛喜多八(和楽) 布四(八上戸(相生) 中切に筑前琵琶を演ず三味線(豊澤三省)	大切・実録先代萩対決総組合	線(豊竹三玉)	生(三味線三玉、三省)	鎌三(文司) 浜松(ねぼけ) 宿屋(白蝶) 二度目清書(真砂) 酒屋(冬木) 菅四(麟鳳) 箱根目清書(松香) 沼津(三洋) 酒屋(柳枝) 花笑(一) 儀作(菊水) 鳴門(小菊) 鈴ヶ森(花笑) 下屋敷(三松) 忠四(和楽) 壺坂(かね子) 先代萩(三松) 忠四(和楽) 壺坂(組次) 阿漕(ねぶた) 八陣(菅枝) 五良助(改玉) 野崎(大和) 新野口(二三) 宿屋(中司) 合邦(松葉) 野崎(相生) 三味線三玉、三省
	一部スキャン範囲外		午後六時半より		午後五時より 氏百箇日 大商組組長柴田	故三好常次郎追善

1919 6/17	地方近事 員林、素人 浄瑠璃会	素義	雑報		6/15	1919 6/15	員林	停車場前	村田商会	寺林可祝、高梨梅枝、 森田米倉、川口錦昇、 中村大栄、光石古吉野、 竹内豊玉、福富浪花、 村田燕玉、曾我部吾妻	内地新栄の老練者の新 顔も加はり市内全部の 素人天狗連六十七人
1919 6/15	会 素人浄瑠璃	素義	予告		6/7	1919 6/7	台北	南門外	公会堂俱 楽部	三玉連	
1919 5/26	会 素人浄瑠璃	素義	予告		6/7	1919 5/26	台北	南門外	公会堂	三玉連の一部	
1919 5/6	浄瑠璃例会	素義	予告		5/7	1919 5/6	台北	新起街	一力	若松連	
1919 4/26	会 素人浄瑠璃	素義	予告		4/26	1919 4/26	台北	新起街	一力楼上	勝玉連	
1919 4/18	浄瑠璃例会	素義	予告		4/19	1919 4/18	台北	新起街	魚金前鏡 売場	三玉連	
1919 3/7	三玉連浄瑠 璃会 七八 両日一力亭 にて	素義	予告		3/7	1919 3/7	台北	新起街	一力楼上	三玉連	
1919 2/15	評 台北の 素人天狗会	素義	芸評	一老爺	2/7	1919 2/7	台北	城内	東本願寺		
1919 2/7	浄瑠璃大会 台北の素人 天狗連	素義	予告		2/7	1919 2/7	台北	城内	東本願寺		

3 24 19 20 ／	2 6 19 20 ／	1 22 20 0 ／	12 10 19 19 ／	11 6 19 19 ／	10 21 19 19 ／	7 28 19 19 ／	7 25 19 19 ／	6 19 19 19 ／
会 浄瑠璃演芸	会 素人浄瑠璃		浄瑠璃大会	訪ふ 田新総督を	地方近事 嘉義素人 浄瑠璃会	会 素人浄瑠璃	会 素人浄瑠璃	素人浄瑠璃
素義	素義		素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	雑報	予告	予告	予告	予告
3 25 19 20 ／	2 6 19 20 ／	1 22 20 0 ／	12 10 19 19 ／		10 20 19 19 ／	7 28 19 19 ／	7 26 19 19 ／	6 19 19 19 ／
基隆	台北	台北	基隆		嘉義	台北	台北	台北
	府中街	府中街				古亭庄	南門	新起街
日本亭	跡閑柔道 道場	台北庁跡 柔道道場	基隆座		嘉義座		公会堂	一力
		若松連	雀連		援 水島質屋、田中洗濯屋、 薛香豆屋、音吉畳屋、 其他台南台中よりの応	若松連	三玉連	一平連
	鈴ヶ森（ねはけ）朝顔（とほけ）いざり小屋（まぬけ）日吉丸（柳枝）沼津（二声）御殿（組次）岸姫（鳳玉）太十（竹司）二度目（真砂）御所（司玉）菅四（節枝）玉三（我笑）玉三（中玉）又助（三昇）御所（都）赤垣（艶次）玉三（白樂）朝顔（かね）二度目（明白）佐倉（菊水）新吉原（小菊）三勝（鶴鳳）忠六（三洋）志度寺（寒間）鳴戸（太郎）柳（十六太）				大切・素人芝居忠臣蔵・壺坂等			又助住家（託玉）阿漕浦平次住家（我笑）明鳥（花笑）本藏下屋敷（梅笑）壺坂（魁）野崎村（花香）岸姫（一平）三味線（一平、小種）
午後四時より 位経王大菩薩祭日余興	午後四時より 備中稲荷山最上	筑前琵琶聯合大会	午後六時より 松雀勇退の送別	新任台湾総督田健治郎の隠し芸 は義太夫			午後六時より 納涼大会	午後七時より

9 / 28 1920 /	9 / 26 1920 /	6 / 21 1920 /	5 / 21 1920 /	4 / 25 1920 /	3 / 25 1920 /
素座の娘義太夫	娘義太夫	素人連浄瑠璃会 八甲庄法華寺で	花唐会の義太夫	素人浄瑠璃会	素人浄瑠璃会
女義	女義	素義	素義	素義	素義
芸評	予告	予告	予告	予告	予告
みの字					
09 / 27 1920 /	9 / 26 1920 /	6 / 21 1920 / 23 /	5 / 21 1920 /	4 / 25 1920 / 26 /	3 / 25 1920 / 28 /
新竹	新竹	台北	台北	台北	台北
		八甲庄	新起街	八甲庄	府中街
新竹座	新竹座	法華寺	西本願寺別院	日蓮宗妙見寺	台北戸倉跡関柔道館
大阪娘義太夫竹本弥栄子一行	大阪娘義太夫竹本弥栄子一行	総出 在台北の天狗連殆んど	花声会	相生、柳枝、偶登、魁、藤枝、菅枝、三松、竹司、三友、一三三、峯菊、竹子、かね子、みさ子	
君広の「朝顔の宿屋」、龍光の「晋四」、弥栄子の「壺坂」	御祝儀宝の入舟（入登）信功（ママ）記上かん屋（竹本弥栄）日吉丸三段目（竹本濤栄）佐倉之曙宗五郎住家（付（ママ）本春子）安達原三段目（竹本源之助）朝顔日記宿屋二段（ママ）竹本君広 三十三間堂平太郎住家之段（竹本龍光）太閤（ママ）記十段目（竹本弥栄子）大切総振合白石嘶揚屋之段		御祝儀宝の入舟（入登）三十三間堂（七五三嬢々）（お駒才三鈴ヶ森（竹司改め七五三柳）太十（艶次改め七五三雀）鳴門八ッ目（七五三）日吉丸三の切（琴馬）寺小屋（組次改七五三）寿沼津（七五三登）大切東上る新内節千両織掛合（七五三子、七五三登）槽太鼓入り三味線曲弾十八弾	三勝半七、野崎村、忠六、壺坂、菅四、三十三間堂、二十四孝、鳴戸、合邦、太十岸姫、日蓮記、玉三、阿漕ケ浦	いざり十（ねほけ）朝顔（おどけ）妹背山（とほけ）柳（文路）御殿（関戸）日吉（可文）玉三（可笑）沼津（鳳玉）忠六（三洋）壺坂（三吉）岸姫艶次改（七五三雀）野崎村（柳枝）御所桜（七五三登）紙治（一吉）朝顔（白蝶）安達（山玉）白石嘶（清花）忠六（記玉）寺小屋（三昇）鈴ヶ森（麟鳳）皿屋敷（真砂）御所桜（爺志渡寺（松香）鳴門（三松）下屋敷（菊水）壺坂（小菊）儀作（組次）滝（我笑）酒屋（相生）朝顔（かね子）鈴ヶ森（竹司）柳（太郎）八陣（菅枝）日吉丸（寿）堀川（魁）寺占屋（藤枝）梅忠（花笑）二度目（みさ子）二代鑑（和栄）志渡寺（峯菊）太十（石磊）
「娘義太夫」それは随分久しぶりに聞く声である」「然るに今度山本営業部の手で大阪娘義太夫竹本弥栄子の一行が渡台して今夜から栄座で開演する、この弥栄子は未だ若い満るやうな女、呂昇の門下で師匠順業中はそのキリ三を語って居た花形だったと云ふ事だ」	9 / 24 着笠戸丸で着台、9 / 26、27 両日開演	故井部茂吉追善	宗祖大師降誕会余興	春季大会	三王師匠送別

8 / 4 1922 /	6 / 3 1922 /	5 / 19 1922 /	3 / 19 1922 /	12 / 8 1921 /	11 / 7 1921 /	7 / 16 1921 /
会 素人浄瑠璃	会 素人義太夫	会 還暦浄瑠璃	会 追善浄瑠璃	会 素人浄瑠璃	太夫 栄座の娘義	会 素人義太夫
素義	素義	素義	素義	素義	女義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	芸評	予告
					甲水	
8 / 4 1922 / 5	6 / 3 1922 / 5	5 / 21 1921 /	3 / 18 1921 / 19	12 / 8 1921 / 9	不明	7 / 17 1921 /
台北	台北	台北	台南	台北	台北	台北
八甲町	元八甲庄					撫台街二ノ角
法華寺	法華寺	栄座	新泉座	堂 南門公会	栄座	跡 天野商会
三吉野陸会連		基隆雀連の応援あり	台南近松会	三玉会	大阪娘義太夫竹本末十代一行	一平連
勘助住家(三洋)	又助住家(三峰) 勢州阿漕浦(ねふか) 廿四孝	初日) 若手連 宿屋(鳳玉) 酒屋(藤枝) 赤垣(艶次) 壺坂(貴昇) 新口村(菊水) 太十(松鶴) 儀作(真玉) 日吉(中間) 忠三(花玉)(二日目) 老人連 堀川(松香) 野崎村(相生) 四ツ谷(一) 酒屋(柳枝) 三十三間堂(東玉) 岸姫(組次) 太十(七五三登) 鳴戸(光玉) 梅忠(梅枝)(三日目) 中老連 弁慶(司玉) 三十三間堂(山玉) 日吉(貴昇) 下屋敷(加玉) 玉三(竹司) 三日(雷雀) 沼津(琴馬) 安達(新玉)	阿漕ヶ浦(我笑) 紙治(鳳玉) 菅四(艶次) 玉三(竹司) 鳴戸(越次) 合邦(雷雀) 下屋敷(真玉) 三味線(二平)	御祝儀玉の入船、愛子、友司、清花(以上演目不明、住助) 三十三間堂、文昇(弁慶上使、末千代(壺坂)	一年ぶりの娘義太夫来台 清花までは野次が飛んだが住助以降は静まり返り、要するに弥栄子等の比ではないと一般頗る好評であつた)	午後六時より
		午後五時より 台北浄瑠璃界の横綱格として知られた相生太夫の還暦祝	午後五時より 近松門左衛門二百年忌追善スキャン範圍外	午後六時より 納会		

11/15 19/22 /	陸会の発会 式 栄座の 浄瑠璃大会	素義	予告		11/11 19/22 /	素人浄瑠璃 会	素義	予告		11/4 19/22 /	ウエルカム	素義	投書		11/4 19/22 /	素人浄瑠璃 会	素義	予告		11/1 19/22 /	素人浄瑠璃 会	素義	予告		10/14 19/22 /	義太夫会	素義	予告		8/16 19/22 /	素人義太夫 大会	素義・ 芸妓	予告	
11/16 19/22 /17	台北	栄座	三吉野、陸会		11/16 19/22 /17	台北	栄座	三吉野、陸会		11月中旬	台北	栄座	三吉野		11/4 19/22 /	台北	社 不動明王	乙女会		11/1 19/22 /	台北	堂 南門公会	陸連		10/14 19/22 /	台北	堂 南門公会	竹本乙鶴門下		8/17 19/22 /18	台北	栄座	勝玉連	
(初) 寿式三番叟(芸妓十名出演)新口村(牛若) 日吉丸(勝若) 壺坂(新嘉楽千胸) 沼津(竹乃家竹奴) 岸姫(日本亭吉奴) 本蔵(美登里) 柳(新嘉楽千葉) 合邦(竹乃家峰菊) 忠四(勝三) 宗五郎(住登) (二日目) 寿式三番叟(芸妓十名出演)合邦(牛若) 柳(錦糸) 弁慶(新嘉楽千昇) 三吉丸(万屋住栄) 二代(新嘉楽千歌) 又助(可笑) 壺坂(竹乃家勇吉) 太十(勝美) 鳴門(三松) 野崎村(相生) 日吉丸三(くらま) 二度目清書(三光) 朝顔宿屋(松風) 先代御殿(小菊) 又助住家(三峰) 沼津の里(藤司) 義作住家(菊水) 志渡寺(艶次) 廿四孝(三洋) 勘平腹切(組次) 長局の殿(ママ) 琴馬 蝶花形八(延寿) 三十三間堂(友鶴) 大功記十段目(真玉) 蝶花形ハツ目(延寿) 加賀見山又助住家段(三光) 梅の由兵衛察察町段(大和) 千代萩御殿(永楽) 忠臣蔵勘平切腹(三洋) 賢女鏡片桐忠義之段(乙鶴) 久方振に氏の帯屋か鎌腹を聞きたいものぢや 大阪源之丞人形芝居一座の語手として既に定評ある三吉野太夫は台湾に縁故者ある関係から過般渡台し陸会なる義太夫一派を組織し…… ▲十六日初日 仮名手本忠臣蔵大序(三吉野) 本蔵松伐(乙鶴) 殿中刃場(ママ) 菊水) 足利裏門之場(三峰) 扇ヶ谷花籠(三楽) 判官切腹(艶次) 山崎鉄砲場(い京) おかる身立(松風) 勘平切腹(組次) 山科隠家(琴馬) 同奥(三洋) 切一力茶屋場総掛合 由良之助(琴馬) 平右衛門(艶次) せかる(ママ) (松風) 九太夫竹森(組次) 伴内、矢間(菊水) 力弥千崎(延寿) ▲十七日二日目 御祝儀室入船(三吉野) 鈴ヶ森(千歳) 阿古屋琴責(い京) 菅原四段目(一豊) 日吉丸三(鞍馬) 忠臣二度清書(三光) 二十四孝十種香(延寿) 朝顔日記宿屋(吉菊) ツレ三味線芳子、ツレ琴清子、ツレ琴光子、加賀見山又助内(三峰) お胸オ三白木屋(菊水) 布引滝三人上戸(藤司) 加賀見山長局之段(琴馬) 切一力茶屋場(総掛合) 午後四時より 台北に於ける義太夫同好者で今回陸会と云ふのを組織し三吉野が会主となつてその発会式として……																																		

3 / 12 9 / 23 3 /	3 / 10 9 / 23 3 /	2 / 10 9 / 23 3 /	2 / 4 9 / 23 3 /	1 / 22 9 / 23 3 /	1 / 20 9 / 23 3 /	1 / 20 9 / 23 3 /	12 / 6 9 / 22 2 /	12 / 6 9 / 22 2 /	11 / 22 9 / 22 2 /
瑠璃会	義太夫／琵琶演奏会	素人義太夫会	浄瑠璃大会	素人義太夫	浄瑠璃大会	地方近事 苗果 素人 浄瑠璃会	素人浄瑠璃	義太夫納会	地方近事 嘉義 浄瑠璃会
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	雄報	予告	予告	予告	雄報	予告	予告	予告
3 / 13 9 / 23 3 / 14	3 / 11 9 / 23 3 /	2 / 8 9 / 23 3 /	2 / 8 9 / 23 3 /	1 / 22 9 / 23 3 /	1 / 20 9 / 23 3 / 21	1 / 17 9 / 23 3 /	12 / 6 9 / 22 2 /	12 / 6 9 / 22 2 /	11 / 22 9 / 22 2 / 23
台北	台北	新竹	新竹	北投	台北	苗果	台北	台北	嘉義
					新富町			新富町	
栄座	ル 鉄道ホテ	新竹座	新竹座	神泉閣	不動尊	苗栗倶楽部	旧世界館	警察官練習所裏手不動尊	嘉義座
松風、清司、住登等	風玉、竹司、艶次、大和、古菊、延寿、三光、三松、峰菊、七玉、三登、東栄、可笑、三洋、三峰、菊水、美登志、	台北琵琶聯合会、基隆後援、台北三玉大狗連	老義会員等	美登里会	乙鶴連	竹内六車、秋山、豊島、(川崎) 安西野次、新竹から久保、藤井、藤原中桜らが来援	勝玉連	乙鶴連	相生会
			▲安達三(飛入) ■通家本店はんだ	御祝儀(入登) 日吉丸前(一懸) 同奥(仁光) 炬燵(鳳玉) 壺阪(風業(ママ) 饅頭娘(我我) 弁慶(かね子) 御殿(栄ト) 油屋(雷彦) 吃又(相生) 太十(旭昇) 下屋敷(美登志) 儀作(音枝)	安達三ツ目(大和) 先代萩(近糸) 勘平切腹(清司) 蝶花形八ツ目(松鶴) 太十(至玉) 十種香(延寿) 千両幟(友鶴) 三勝(永楽) 鳴戸(真玉) 三浦別れ(龍勢) 二度目清書(三光) 寺小屋(鏡三洋) 三十三間堂(豊司) 弁慶上使(多美夫) 鏡山又助住家(乙鶴)	六十(勝紫) 壺坂(千駒) 日吉丸(錦糸) 朝顔(竹奴) 玉三(可笑) 二十四孝(千葉) 御所桜(千見) 本藏下屋敷(駒栄) 三勝(三三) 先代萩(三柏) 菅四(住登)	▲太功記(三洋) ▲安達ヶ原(至玉) ▲千代萩(延寿) ▲又助住家(永楽) ▲朝顔日記(三光) ▲鎌倉三浦別れ(龍勢) ▲三十三間堂(友鶴) ▲忠臣蔵(近糸) ▲阿波鳴戸(真玉) ▲太功記(長谷川) ▲御所桜(大和)		竹本相之助主催で相生会なるものを組織し其の披露として
入門	竹本東映の名披露目「三味線屋「玉屋」の妻、上京し竹本東広に	午後三時より 中本中司の名目披露大会 入場無料 入場券申し込み先・千歳町長命軒・本町二ノ二山田靴店	午後六時より 真言宗布教所境内に石地蔵尊奉納のための喜捨募集 喜捨申込受付・新竹寺前藤原岩吉氏夫人	午後四時より 新年宴を兼ねたる浄瑠璃初会	午後五時より	午後七時より十二時半まで 崎、六車竹内氏等発起に係る	午後五時より	午後六時より	

8 / 4 1 9 2 3 2 3 /	7 / 21 1 9 2 3 2 3 /	6 / 9 1 9 2 3 2 3 /	5 / 19 1 9 2 3 2 3 /	5 / 4 1 9 2 3 2 3 /	5 / 2 1 9 2 3 2 3 /	4 / 26 1 9 2 3 2 3 /	4 / 12 1 9 2 3 2 3 /
会 素人義太夫	会 素人義太夫	会 素人浄瑠璃	会 素人浄瑠璃	会 素人浄瑠璃	会 勝玉送別大	浄瑠璃大会 竹澤力造師 の名披露	素人義太夫 大会
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
8 / 4 1 9 2 3 2 3 /	7 / 21、22 1 9 2 3 2 3 /	6 / 9、10 1 9 2 3 2 3 /	5 / 20、21 1 9 2 3 2 3 /	5 / 4、5 1 9 2 3 2 3 /	5 / 1、2 1 9 2 3 2 3 /	4 / 26、27 1 9 2 3 2 3 /	4 / 12、13 1 9 2 3 2 3 /
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
		元八甲庄					
堂 南門公会	堂 南門公会	日蓮寺	堂 南門公会	堂 古亭町了 覚寺	栄座 4日新富 町不動尊 5日	栄座	堂 南門公会
	三吉野睦連中	三玉連	美登里会	乙鶴連	勝玉連	美登里会	睦連
司 片岡忠義 (多美次) 酒屋(永楽) 尼ヶ崎(鶴昇) 竹の間(清美次) (寿美礼)	又助住家(大和) 棟木の由來(友鶴) 三浦別れ(多美次) 酒屋(永楽) 尼ヶ崎(鶴昇) 竹の間(清美次) (寿美礼)	儀作(一声) 酒屋(鳳玉) 鈴ヶ森(千蔵) 又助(中司) 下屋敷(鳳玉) 赤垣(艶次) 忠臣講釈(光玉) 沼津(寿) 鳴戸(艶次) 弁慶(貴昇) 加賀見山(明玉) 皿屋敷(司玉) 日吉(土口) 志度寺(松香) 三十三間堂(錦糸)	御祝儀(入登) 忠三(一瓢) 本蔵(仁光) 壺坂(鳳菊) 炬燵(鳳玉) 三勝(都一) 日吉(花笑) 八陣(染十) 円寛寺(雷雀) 菅四(古鶴) 太十(旭) 白石斬(勇吉) 柳(美登里) 阿漕(美登志香掛) 菅枝(糸) 力遣	上使(多美次) ▲太功記十段目(鶴昇) ▲三十三間堂(豊司) ▲開取千両輪(清司) ▲梅野由兵衛(大和) ▲仙台森御殿(延寿) ▲忠臣蔵二度目清書(三光)	宝入船(入登) 又助(勝榮) 白石(千歌) 壺坂(千駒) 柳(錦糸) 本蔵(住登) 玉二(可笑) 日吉(寿) 三勝(峰菊) 忠四(勝榮) 菅四(千昇) 野崎(竹奴) 新口村(千葉) 壺坂(三松)	登志 岡崎(菅枝) 白石斬(勇吉) 菅四(美登志) 岡崎(勇吉) 越次 かね子 小浜 糸力造 東映、乙鶴	妹背山三(い京) 大十(ママ) (くらま) いざり(艶次) 紙治(古菊) 義作(菊水) 酒や(松風) 陣や(三峰) 八陣(三光) 合邦ヶ辻(藤司) 布引三(延寿) 布引四(零馬) 鳴門八(組次) 二十四孝四(三洋) いざり(東)
午後五時より	午後五時より		午後六時より 月例会		竹本勝玉内地婦還送別浄瑠璃会	午後五時より 昨年末神戸より 招聘した竹澤力造の名披露	月並会

11 / 22 9 / 23 /	11 / 18 2 / 3 /	11 / 17 9 / 23 /	11 / 9 2 / 3 /	11 / 4 9 / 23 /	11 / 3 9 / 23 /	10 / 27 1 / 23 /	9 / 3 1 / 23 /	8 / 19 2 / 3 /
会 素人浄瑠璃	会 素人浄瑠璃	追善義太夫	会 素人義太夫	会 素人浄瑠璃	会 素人浄瑠璃	会 素人義太夫	期 浄瑠璃会延	会 素人義太夫
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
11 / 22 9 / 23 /	11 / 18 2 / 3 /	11 / 17 9 / 23 /	11 / 10、11 9 / 23 /	11 / 4 9 / 23 /	11 / 3 9 / 23 /	10 / 27、28 1 / 23 /	9 / 3、4 1 / 23 /	8 / 19 2 / 3 /
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
	古亭庄	万華		栄町二丁目			若竹町	
堂 南門公会	屋 細井植木	女紅場	栄座	新高咲茶店楼上	堂 南門公会	堂 南門公会	法華寺	法華寺
美登里会			連中 乙鶴、力造、三玉、東	美登里会		睦会		睦会連中
(美登里) 杏掛村(菅枝)	御祝儀(入登)紙治(鳳玉)合邦(風菊)三勝(都)日吉丸(かね子)妙心寺(雷雀)竹の間(古鶴)弁慶(旭)須磨の浦(美登志)鳴戸	腰越状泉三郎館(三洋)一の谷熊谷陣屋(三峯)源平布引滝琵琶(鹿?)忠臣赤垣出立(菊水)日蓮記勘作住家(琴馬)関取千両轡猪名川内(古菊)敵討志渡寺の段(艶次)忠臣蔵勘平切腹(松風)	御祝儀玉の入船(入登)白石嘶揚屋(友鶴)千助(寿美礼)千代萩御殿(延寿)梅の由兵衛(大和)三十三間堂(豊司)勘平切腹(三洋)蝶花形(乙鶴)	御祝儀(入登)野崎(鳳玉)壺坂奥(風菊)三勝(都)鈴ヶ森(花笑)妙心寺(雷雀)先代萩(古鶴)太十(旭)壺坂前(雛美)伊賀八(菅枝)	御祝儀(入登)野崎(鳳玉)壺坂奥(風菊)三勝(都)鈴ヶ森(花笑)妙心寺(雷雀)先代萩(古鶴)太十(旭)壺坂前(雛美)伊賀八(菅枝)	御祝儀玉の入船(入登)太功記十段目(東柳)於染久松野崎村(東遊)八陣ハツ目致津本城東昇(鏡見山)マコ又助住家(東月)三拾三間堂平太郎住家(東栄)一の谷熊ヶ谷陣屋(東司)太功記十次郎物語(東秀)おしゆん伝兵衛猿廻し(七五三登)(糸東咲ッレ峰菊)	賢女鑑片岡忠義(乙鶴)梅の由兵衛迎駕籠(大和)彦山権現六助内(松風)本朝二十四孝笥(三洋)関取千両轡(清司)矢口湾頓兵衛内(三峰)蝶花形小阪御殿(い京)仙台萩御殿(土口)義民伝義作切腹(菊水)千本桜すしや(艶次)伊賀越沼津の里(藤司)四ツ谷谷談伊右衛門内(巴城)安達原三(琴馬)三勝酒屋(三光)鉄山皿屋敷(組次)	布引三(延寿)阿古屋(い糸)おしゆん伝兵衛(藤司)太十(くらま)城木屋(菊水)百度平(組次)忠九(三洋)すし屋(艶次)弁慶上使(土口)沼津(琴馬)忠六(松風)矢口渡(三峰)酒屋(三光)阿漕(三栄)
午後五時より	午後六時より	午後五時より 故葉玉吉次郎追善	午後五時より 野澤乙鶴の名披露	午後五時より	午後六時より	午後五時より	関東大震災に配慮して無期延期	午後六時より

[illegible]

9 / 28 1924 /	9 / 23 1924 /	9 / 4 1924 /	7 / 26 1924 /	7 / 13 1924 /	5 / 29 1924 /	5 / 25 1924 /	4 / 17 1924 /	3 / 15 1924 /	3 / 6 1924 /
素人浄瑠璃	会 素人義太夫	会 素人浄瑠璃	会 素人浄瑠璃	会 素人義太夫	浄瑠璃大会 三玉門下の	会 素人浄瑠璃	夫 榮姫娘義太	夫会 東咲連義太	会 素人義太夫
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	女義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	芸評	予告	予告
9 / 28 1924 /	9 / 23 1924 / 24 /	9 / 4 1924 /	7 / 26 1924 /	7 / 13 1924 / 14 /	5 / 30 1924 / 6 /	5 / 25 1924 /	4 / 15 1924 / より	3 / 15 1924 /	3 / 7 1924 /
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
若竹町	本町一	若竹町				目表町二丁			
法華寺	樓上 器店新築	法華寺	堂 南門公会	堂 南門公会	榮座	関道場	榮座	堂 南門公会	ル 鉄道ホテ
東咲連			東咲連	勝玉連	三玉門下	一平連	竹本弥栄子一行	東咲連	美登里会連
御祝儀宝の入船（入登）鈴ヶ森（東昇）梅川忠兵衛二（マ）ノ口村（東退）本蔵下屋敷（東寿）日吉丸三の切（東玉）菅原四段目（東松）一の谷三ノ切（東司）朝顔日記（東恩）をしめん伝兵衛堀川の段（七五三登）糸（東咲）	御祝儀宝の入船（入登）鈴ヶ森（東昇）梅川忠兵衛二（マ）ノ口村（東退）本蔵下屋敷（東寿）日吉丸三の切（東玉）菅原四段目（東松）一の谷三ノ切（東司）朝顔日記（東恩）をしめん伝兵衛堀川の段（七五三登）糸（東咲）	御祝儀（入登）玉三（田）先代萩（千夜）昔四（柳枝）日吉丸（花笑）合邦（雷雀）本蔵（相生）赤垣（龍司）又助（雷枝）素人三味線（千代）	御祝儀（入登）玉三（田）先代萩（千夜）昔四（柳枝）日吉丸（花笑）合邦（雷雀）本蔵（相生）赤垣（龍司）又助（雷枝）素人三味線（千代）	御祝儀（入登）野崎（東一）本蔵下屋敷（東秀）千代萩（東玉）又助住家（東松）新口村（東退）酒屋（東恩）岸の姫松三の切（東司）尼ヶ崎（七五三登）糸（東咲）	御祝儀（入登）野崎（東一）本蔵下屋敷（東秀）千代萩（東玉）又助住家（東松）新口村（東退）酒屋（東恩）岸の姫松三の切（東司）尼ヶ崎（七五三登）糸（東咲）	御祝儀（入登）先代萩（義石）日吉丸（錦赤）又助（土口）阿漕（三寒）儀作（菊水）紙治（鳳玉）合邦（魁）	御祝儀（入登）先代萩（義石）日吉丸（錦赤）又助（土口）阿漕（三寒）儀作（菊水）紙治（鳳玉）合邦（魁）	御祝儀（入登）先代萩（義石）日吉丸（錦赤）又助（土口）阿漕（三寒）儀作（菊水）紙治（鳳玉）合邦（魁）	御祝儀（入登）先代萩（義石）日吉丸（錦赤）又助（土口）阿漕（三寒）儀作（菊水）紙治（鳳玉）合邦（魁）
午後六時より	午後六時より 義太夫犬狗聯合	午後六時より 雨天順延	午後六時より 元記事「西門公会堂」7 / 27付記事で訂正	午後五時より 豊竹三玉渡台	午後五時より 豊竹三玉渡台	午後六時より	午後六時より 「宣伝の良しきを得なかつたのか殆ど義太夫定連ばかりの顔振れであつた」、芸評も弥栄子以外は辛口	午後六時より	午後五時より

1/25 1925	12/8 1924	12/7 1924	12/1 1924	11/28 1924	11/25 1924	10/30 1924	10/19 1924
会素人浄瑠璃	夫納会一平連義太	夫納会東咲連義太	夫納会三玉連義太	納会素人義太夫	会睦連義太夫	大会南門義太夫	会義太夫月例
素義	素義	素義	素義	芸妓素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
1/25 1925	12/7 1924	12/6 1924	12/01 1924	11/28 1924	11/25 1924	10/30 1924	10/19 1924
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
若竹町	目本町二丁			本町			八甲町
法華寺	吉田屋樂器店樓上	南門公会堂	南門公会堂	吉田屋演芸場	南門公会堂	南門公会堂	法華寺
美登里会	一平連	東咲連	三玉連	勝玉連	三吉野陸会	南門義太夫研究会	三吉野陸会
幸)	御祝儀(入登)八陣(都)本藏(千蔵)弁慶(かね子)忠六(雷竜)玉三(三峰)三勝(相生)日吉丸(松風)安達(至玉)又助(普枝)糸(久)	御祝儀(入登)錦ヶ森(東輝)鳴戸(東里)又助(東寿)日吉丸(東玉)菅四(東枝)岸姫(東司)太十(東艶)酒屋(東風)沼津の里(七五三登)糸東咲、七五三登	▲一日 安達三(光玉)柳(喜玉)日吉(松玉)又助(寿玉)箱根滝(栄玉)先代(土口)沼津(鳳玉)寺子屋(松香)祇沓(一声) ▲二日 日吉(花玉)弁慶(鶴水)玉三(加玉)先代(千蔵)安達三(梅枝)皿屋敷(東寿)岸姫(貴昇)赤垣(鏡司)本藏(柳枝)" 御祝儀(入登)錦ヶ森(東輝)鳴戸(東里)又助(東寿)日吉丸(東玉)菅四(東枝)岸姫(東司)太十(東艶)酒屋(東風)沼津の里(七五三登)糸東咲、七五三登	▲一日 安達三(光玉)柳(喜玉)日吉(松玉)又助(寿玉)箱根滝(栄玉)先代(土口)沼津(鳳玉)寺子屋(松香)祇沓(一声) ▲二日 日吉(花玉)弁慶(鶴水)玉三(加玉)先代(千蔵)安達三(梅枝)皿屋敷(東寿)岸姫(貴昇)赤垣(鏡司)本藏(柳枝)" ▲二十九日 壺坂(入登)先代(新喜楽千駒)太功記(寿)梅田(新喜楽千房)鳴門(三松)三勝(一二三)箱根(栄玉)本藏(藤玉)忠六(住登)	▲二十八日 柳(入登)二十四孝(新喜楽千房)太功記(三松)日吉丸(一二三)本藏(竹の家峰菊)宿屋(新喜楽千駒)御所三(寿)寺子屋(栄玉)三勝(藤玉)一の谷(住登) ▲二十九日 壺坂(入登)先代(新喜楽千駒)太功記(寿)梅田(新喜楽千房)鳴門(三松)三勝(一二三)箱根(栄玉)本藏(藤玉)忠六(住登)	▲宝の入船▲太功記十段目▲朝顔日記宿屋▲三十三間堂平太郎▲千代萩、御堂(ママ)▲御所松弁慶▲加賀山(ママ)又助 信功記信長衆の舞(三福)一の谷須磨の浦(むつみ)三十三所壺坂(河泉)一の谷熊谷陣屋(五角)三日本平記九段目(三昇)朝顔日記宿屋(友鶴)伊賀越沼津(藤司)伊賀越岡崎(普枝)賀見山長局(琴馬)義士伝天川屋(三洋)	御祝儀宝の入船(入登)一の谷須磨の浦(むつみ)三日本平記嘉平治内(三昇)三十三所壺坂(可鼻)一の谷熊谷陣屋(五角)御所松弁慶上使(高砂)朝顔日記宿屋(友鶴)太功記局の注進(三之)太功記尼ヶ崎(い京)四ツ谷怪談物語(藤司)先代萩御殿(輝昇)日進記勘作住家(琴馬)二代鑑秋津局内(普枝)安達原一ツ家(三洋)
午後五時半より 雨天順延	午後六時より		午後六時より		午後六時より	午後六時より 「南門方面の娯楽機関として有志後援の下に生れた南門義太夫研究会」の第一回演奏大会	

12/6 1925/	11/27 1925/	11/23 1925/	10/24 1925/	10/3 1925/	6/7 1925/	5/2 1925/	4/19 1925/	3/14 1925/	2/19 1925/	2/15 1925/
納会 素人浄瑠璃	浄瑠璃納会	会 素人義太夫	浄瑠璃会	会 追善義太夫	大会 素人浄瑠璃	会 南門義太夫	陸会送別義太夫会	璃 東映連浄瑠	大会 素人義太夫 聯合春季	会 陸連義太夫
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
12/7 1925/	11/26、27 1925/	11/23、25 1925/	10/23、25 1925/	10/3 1925/	6/6、9 1925/	5/2 1925/	4/19 1925/	3/14 1925/	02/19、20 1925/	2/14、マ 1925/
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
		末広町		古亭町	丁目 末広町二		八甲町			八甲町
末広会館	栄座	末広会館	楽部 小南門俱	了覚寺	末広会館	堂 南門公会	法華寺	堂 南門公会	栄座	法華寺
鶴澤一平連	野澤三吉野陸連		鶴澤一平連		各連聯合	南門義太夫研究会	三吉野陸会	東映連	三味線・竹本久幸、竹本東映、野澤三吉野、鶴澤一平の四師匠	三吉野陸会
玉 ▲忠臣蔵本蔵下屋敷(一平)	▲御祝儀、宝の入船(入登)▲吉九三役目(総員掛合)▲御所桜三段目(静)▲太功記妙心寺(一枝)▲先代萩御殿(錦糸)▲鳴戸八丁目(芳子)▲太功記十役目(土口)▲炬燵紙治内(鳳)	御祝儀(可祝)尼ヶ崎(菅枝)四谷怪談(藤司)玉藻前(豊司)三十三間堂(花次)由良港山之段(友鶴)合邦(龍司)鰻屋八郎兵衛(巴城)源平布引松波琵琶(琴馬)恋女房染分手綱(三吉野)				一、大序宝の入船 一、朝顔宿屋 一、太功記尼ヶ崎 一、安達ヶ原三段 一、加賀見山又助住家 一、御所桜弁慶上使 一、三勝半七酒屋一、先代萩御殿	御祝儀(入登)三十三間堂(豊司)熊谷陣屋(五角)酒屋(河泉)弁慶上使(支鶴)(二友鶴)布引(藤司)合邦(龍司)本蔵下屋敷(琴馬)仙台變谷(マ)巴城)萩工橋(二先代萩十崎)(菅枝)雪責(三洋)軍法富士見西行(三吉野)	加賀見山長局 合邦 太功記 菅原伝授少習子屋 一の谷 酒屋 又助 野崎村 糸七五三登 同東映	三味線・竹本久幸、竹本東映、野澤三吉野、鶴澤一平の四師匠	御祝儀宝の入船(入登)一の谷須磨の浦(六ツみ)三日太平記九(三昇)一の谷熊谷陣屋(五角)千本桜すし屋(友鶴)三勝半七酒屋(白呂角)おしゆん伝兵衛仙崎(藤司)伊賀越岡崎(菅枝)布引龍松波琵琶(琴馬)彦山権現六助内(三洋)伊賀越津の里(マ)三吉野)
	午後六時より	入場無料但し下足料五銭	午後六時より 養気倶楽部主催	追善供養浄瑠璃会 故中本仲司氏の	始政三十年記念祝賀 会場は盲啞学校跡 午後六時より	浜中河泉送別義太夫会 午後六時より	浜中河泉送別義太夫会 午後六時より	午後六時より	台北素人義太夫春季聯合大会 入場下足共無料	午後六時より

5/30 1926 /	勝玉連 浄瑠璃会 素義・芸枝 予告	5/19 1926 /	義太夫大 二十日基 で 素義・芸枝 予告	5/2 1926 /	睦会の浄瑠璃 素義 予告	4/28 1926 /	義太夫睦会 素義 予告	3/2 1926 /	睦連 浄瑠璃会 素義 予告
5/29、30 1926 /	台北 新世界前 末広会館 勝玉連	5/20 1926 /	基隆 基隆劇場 等の芸枝連	5/1、2 1926 /	台北 末広館 台北睦会	5/1、6 1926 /	台北 末広会館 睦会	3/2、3 1926 /	専売局 養 気倶楽部 三吉野睦連
二日 御祝儀（入登） 御所桜（十三） 柳（茂美治） 忠王御殿（豊司） 由良港山（友鶴） 本蔵下屋敷（吉峰） すしや（巴城） 袖萩文（琴馬） 太功記十（永楽） 三日 御祝儀（入登） 太功記（舟木） 柳（千司） 又助住家（山星） 三勝酒屋（三石） 矢口渡し（三峰） 日吉丸（三〇〇マ） 忠臣蔵四（藤司） 沼津里（菅枝） 彦山ノ九（三洋） 初日 御祝儀三番叟（可祝） 玉藻前忠王館（豊司） 太功記尼ヶ崎の段（三福） 三十三間堂柳の段（三能羽） 加賀見山又助内（可笑） 三勝半七酒屋の段（三石） 四ツ谷怪談伊右衛門内（巴城） 日連記勘作住家（琴馬） 昔八丈白木屋の段（音枝） 花の雲佐倉曙宗五郎住家（三吉野） 二日目 御祝儀玉の入船（入登） 三十三間堂柳（三豊） 妹背山竹に雀（花次） 御所桜并慶上使（多三司） 千本桜すし屋（友鶴） 青山鉄山血屋敷（三峰） 伊賀越沼津の里（藤司） 金刀比羅御利生志渡寺（艶司） 中將姫雪貫の段（三洋） ひらがな盛衰記逆櫓の松（三吉野） 三味線（野澤二吉野、同三十次、同花次） 御所桜 みなと 三勝半七酒屋の段、高雀 日連聖人、雀 壺坂、巖雀 儀作住家、菊水 柳、若新松 日吉丸喜雀 忠臣蔵、福徳軒 合柳、若衆 太功記、鈴八 忠臣蔵、小安 赤垣源藏、吾勇 又久松野崎村、相生 志度寺、十三 中△ 玉三、大石、三味線竹本鍾龍郎 仁木八重子、相生、大石、三味線竹本鍾龍郎 十三、長男、相生、長男 又お半長衛門 マ桂川道行掛合（倉子小房、静香、糸勇、小笑、好江文福、千成、小勇、清子、豆力春枝三味線竹本鍾龍郎 政栄、小安、ゆかせ話、玉幸、菊江） 七福神（入登） 又助、御所三（新喜楽千昇） 酒屋（藤主） 御所三柳（幾久万知子 鈴ヶ森（綾登） 玉三日吉丸（一枝） 白石、新ノ口（新喜楽千房） 朝顔（竹の家竹奴） 太十（寿） 忠四（勝楽） 先代、壺坂（三松） 寺子屋、忠六（仕登） 下屋敷（勝玉） 十種香掛合（幾久万知子、新喜楽千房、三松） 糸、勝玉、勝好藤枝琴子、峰千代） 午後六時より 料理屋組合長十 雀事足利藤吉氏追善 浄瑠璃大会 春季温習義太夫大会 午後六時より 出演者のほとん どは専売局員									

[illegible]

昭和

台灣總督府官僚の趣味 本山警務局長は義太夫嫌い、鼓事務官は素義芸名「一葉」

午後六時より

2 5	1 9 2 9	楽々園	文楽・素義	予告		2 5	1 9 2 9	台北	楽々園	台北義太夫会主催	一、御祝儀（隔寿太夫 一、忠六（隅尾太夫 一、鳴戸（三節羽）一、又助（三峯 一、酒屋（三笠）一、聚楽所（ママ）（千蔵）一、松王屋敷（綾登）一、玉三（綱次）一、妙心寺（雷雀）一、先代萩（源平太夫絃金弥）一、台邦（隅来太夫絃道造）一、布四（竹本大隅太夫、絃鶴澤道八	追善義太夫大会二日目
2 2	1 9 2 9	ため来台した四代目大隅太夫／一日各方面へ挨拶廻り	文楽	雑報							三代目大隅太夫十七回忌追善のため四代目大隅・鶴澤道八一行が来台	
1 19	1 9 2 9	先代追善の（十九日）J F A K（芸妓）	予告			1 19	1 9 2 8		台北検査芸妓竹吉、三味線竹本勝玉	日吉丸	午後八時四十五分より絃楽四重奏・義太夫	
11 23	1 9 2 8	二十四日から正式放送 〓台北放送局発表〓	ラジオ	予告							J F A K 中継放送を二十四日より正式に開始	
11 23	1 9 2 8	素人義太夫会	素義	予告		11 23	1 9 2 8	台北	常磐生命 保険会社 三階		午後六時より	
10 5	1 9 2 8	長唄や義太夫の西洋音楽的独唱・永井郁子さんの新しい試み／伴奏は杵屋佐吉君の三味線	その他	雑報				東京	永井郁子・杵屋佐吉		義太夫・長唄の西洋音楽的独唱を研究中、伴奏は三味線	
7 20	1 9 2 8	素人義太夫会	素義	予告		7 21	1 9 2 8	台北	末広会館	台北みどり会	午後六時半より	
5 5	1 9 2 8	会／聴衆には福引進呈	素義	予告		5 5	1 9 2 7	台北	常磐生命 保険会社 三階	鶴澤亀助師及び高雄東京堂検見	午後六時より 午後七時までの来場者に福引券進呈	
12 1	1 9 2 7	尚武義太夫	素義	雑報		11 27	1 9 2 7	嘉義	消防組集会所	嘉義君業会	三吉野吉之助師披露浄瑠璃さらへ会	
10 23	1 9 2 7	素人義太夫大会	素義	予告		10 24	1 9 2 7	台北	末広会館		午後六時より	
7 26	1 9 2 7	祭地蔵尊夏	素義	雑報		7 24	1 9 2 7	新竹	弘法寺		午後六時～十時 漢文表記「素人劇義太夫」	

2 / 21 1929 /	2 / 21 1929 /	2 / 17 1929 /	2 / 7 1929 /	2 / 6 1929 /	2 / 6 1929 /
ウエルカム	義太夫会 ／共楽座で	大隅太夫一 行社会奉仕 ／共楽座で	追善義太夫 会／千秋楽 の語物	楽々園	追善義太夫 大会／大隅 太夫を聴く
文楽	文楽	文楽	文楽・ 素義	文楽・ 素義	文楽・ 素義
投書	予告	予告	予告	予告	恭評
熱狂生					
	2 / 23、 24 / 1929 /		2 / 7 1929 /	2 / 6 1929 /	2 / 4 1929 /
	台北		台北	台北	台北
	共楽座		楽々園	楽々園	楽々園
	竹本大隅太夫・鶴澤道 八一行	竹本大隅太夫・鶴澤道 八一行	台北義太夫会主催	台北義太夫会主催	台北義太夫会主催
			隅太夫綾道八	一、御祝儀（隅寿太夫）一、朝顔（隅尾太夫）一、忠四（和楽）一、太十（新）一、本下（美登志）一、御所（竹司）一、三九（艶司）一、儀作（菊水）一、酒屋（源平太夫綾金弥）一、日吉丸（隅榮太夫綾道造）一、菅四（竹本大隅太夫綾道八）三味線・呂玉・大刀・小菊・千代寿・勝玉など一、御祝儀（隅寿太夫）一、忠三（隅尾太夫）一、菅四（二口）一、玉三（二枝）一、忠六（色）一、鳴戸（小松）一、酒屋（相生）一、御殿（大助）一、忠四（勝栄）一、酒屋（源平太夫綾金弥）一、又助（隅榮太夫綾道造）一、堀川（竹本大隅太夫綾道八）	素人連、白石嘶（源平太夫、本下（隅榮太夫、壺坂（大隅太夫）
大隅太夫に狭い会場で興行させるのは「侮辱」、今度はぜひ共楽座でやってほしい	同上（後援に台北市方面委員追加）入場料青券二円、白券一円	台北市社会事業助成会主催・台北市社会課後援	追善義太夫大会千秋楽 十日建碑式、十一日台南へ出発、南部巡演、二十日基隆興行予定	追善義太夫大会三日目	追善義太夫大会初日 午後七時半より「開場定刻前早くも楽々園は大入満員……それに御客の大半が中年以上モガやモボの姿は薬にしたくも見えないのは時代の反映か」。大隅は「流石に関西に覇を唱へるだけはあると思はせた、兎に角台湾では二度と聴けぬ聞き物」

8 / 12 9 / 3 0 /	7 / 13 3 / 0 /	2 / 16 9 / 3 0 /	12 / 9 2 / 8 9 /	12 / 9 2 / 4 9 /	11 / 16 2 / 9 9 /	8 / 31 2 / 9 /	6 / 19 2 / 9 /	6 / 19 2 / 2 9 /	2 / 23 2 / 9 /
野崎村 更／義太夫	中継放送 義太夫会	一平会連の 素人義太夫	義太夫睦会 納会	義太夫納会	素人義太夫 納会	基隆の義太 夫及三曲演 奏会日取	素人義太夫 会／聴衆へ 福引	素人義太夫	大隅太夫義 太夫大合／ 廿三日語物
（女義） ラジヲ	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義・ 芸妓	素義	文楽
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
8 / 11 9 / 3 0 /	7 / 14 3 / 0 15 /	2 / 15 9 / 3 0 /	12 / 9 2 / 7 9 /	12 / 9 2 / 4 9 /	11 / 16 2 / 9 17 /	8 / 31 2 / 9 /	6 / 19 2 / 9 /	6 / 19 2 / 1 9 /	2 / 23 2 / 9 /
	台北	台北	台北	台北	台北	基隆	台北	台北	台北
	本町			末広町	本町		万華		
	三階	常磐生命 会堂	南門外公 堂	楽々園	常磐生命 保険会社 三階	基隆座	女紅場	南門公会	共楽座
弾き豊竹和歌吉	浄瑠璃竹本素女・ツレ	一平会	睦会	大力連	鶴澤一平連	基隆在郷軍人分会主催	台北万華共立検査後援	睦会	
新版歌祭文野崎村の段			▲宝入船（入登）▲太功記係市切腹（七二八） ▲同尼ヶ崎（嬰木）▲寺子屋（五色）▲酒屋（南 枝）▲百度平住家（三三石）▲安達三（琴馬）三 味（ママ）三吉野連中	御祝儀（入登）酒屋（千蔵）太十（三能羽）壺 坂（嘘月）合邦（艶司）弁慶（雷雀）布四（琴 馬）寺子屋（和衆）大切掛合本蔵下屋敷（連中） 三味線大力師			忠三、木下酒屋白石噺、弁慶、玉三、二十四孝 合邦岸姫寺子屋、源蔵生立（ママ）、堀川	一、義経千本松道行の段、静御前竹本隅栄太夫、 忠信竹本隅尾太夫、糸鶴澤金路同道造 三十三間堂柳、太功記十尼ヶ崎、普原寺子屋、 三勝半七酒屋、太功記孫市切腹、二度目清書寺 岡切腹 摂州合邦ヶ辻、国姓館合戦	一、恋娘昔八丈、お駒才三鈴ヶ森の段、竹本隅 寿太夫、糸鶴澤同道造 一、御所桜堀川夜討三弁慶上使の段、竹本隅尾 太夫、糸鶴澤金路 一、加賀兄山田錦絵草履打の段、竹本源平太夫、 糸鶴澤金路 一、生写朝顔日記宿屋の段、竹本隅栄太夫、糸 鶴澤同道造 一、摂州合邦ヶ辻合邦内の段、竹本大隅太夫、 糸鶴澤道八 掛合
	午後六時より	午後六時より（時間勵行）素人 合同義太夫会		午後六時より	午後六時より 七時までの来場 者に福引券進呈	午後六時より 福引実施 幾久 まち子・竹の家峰千代ら応援	午後六時より	午後七時より	

4 19 17 3 2 2	4 19 13 3 2 2	4 19 3 3 2 2	2 19 25 3 2 2	2 19 17 3 2 2	11 19 22 3 1 1	8 19 31 3 1 1	8 19 11 3 1 1
ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	義太夫大会	義太夫大会	義太夫納会	義太夫琵琶大会	納涼義太夫大会
（ド） レコー	ラジオリコー	ラジオリコー	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
	4 19 13 3 2 2	4 19 3 3 2 2	2 19 26 3 2 27	2 19 17 3 2 19	11 19 23 3 1 24	8 19 31 3 1 9	8 19 12 3 1 13
	大阪	台南	台北	台北	台北	台北	台北
			内西門市場		末広町		末広町
			台北稲荷神社事務所上	南門公会堂	楽々園	栄座	楽々園
浄瑠璃竹本綴太夫、三味線豊澤新左衛門、ツレ弾野澤吉男	未定	浄瑠璃山本勝寿、三味線鶴澤安松			勝玉連		勝玉連
明烏六花曙（浦里時次郎吉原揚屋の段）	掛合義太夫（未定）	忠臣蔵二度目清書	▲初日 御祝儀（三峰）弁慶（白峰）阿漕（美登志）忠四（首枝）野崎（宝珠）酒屋（梅玉）新口村（綾登）合邦奥（三笠） ▲二日目 御祝儀（美登志）梅忠（貴昇）朝顔（合邦）沼津（登照）寺子屋（徳風）安達（三峰）合邦（松風）酒屋（樹枝）（柳枝？）三味線（勝玉、呂玉）（呂玉？）千代寿、寿玉	初日 御祝儀（入登）普四（徳風）岸姫（竹司）合邦（宝珠）日連記（綾登）弁慶（品子）太十（土口）一の谷（蘭玉）鈴ヶ森（三松）二日目 御祝儀（登山）腰越状（首枝）沼津（登照）太十（組次）合邦奥（三笠）安達（綾登）新口村（貴昇）志津寺（マ）（大路）掛合阿波鳴門（小松）甫 三日目 御祝儀（宝山）太十奥（三峰）沼津（二声）弁慶（南玉）三人上戸（美登志）梅由（梅玉）本蔵下郎（綾登）掛合十兩幟（小松、甫、栄枝）三味線（勝玉、呂玉、甫、千代万、栄枝、寿玉）	御祝儀（入登）酒屋（登照）紙治内（友鶴）百度平（彫司）三浦別（勝登）先代萩（松月）松玉邸（綾登）安達前（三松）安達奥（三峰）妙心寺（美登志）合邦（三笠）宿屋（品子）寺小屋（徳風）又助（新喜楽千奴）柳（同千房）堀川（首枝）忠臣蔵七段目（勇連掛合）白石噺（女連掛合）糸（勝玉、呂玉） 初日 御祝儀（入登）普四（徳風）岸姫（竹司）合邦（宝珠）日連記（綾登）弁慶（品子）太十（土口）一の谷（蘭玉）鈴ヶ森（三松）二日目 御祝儀（登山）腰越状（首枝）沼津（登照）太十（組次）合邦奥（三笠）安達（綾登）新口村（貴昇）志津寺（マ）（大路）掛合阿波鳴門（小松）甫 三日目 御祝儀（宝山）太十奥（三峰）沼津（二声）弁慶（南玉）三人上戸（美登志）梅由（梅玉）本蔵下郎（綾登）掛合十兩幟（小松、甫、栄枝）三味線（勝玉、呂玉、甫、千代万、栄枝、寿玉）	御祝儀（入登）酒屋（登照）紙治内（友鶴）百度平（彫司）三浦別（勝登）先代萩（松月）松玉邸（綾登）安達前（三松）安達奥（三峰）妙心寺（美登志）合邦（三笠）宿屋（品子）寺小屋（徳風）又助（新喜楽千奴）柳（同千房）堀川（首枝）忠臣蔵七段目（勇連掛合）白石噺（女連掛合）糸（勝玉、呂玉） 初日 御祝儀（入登）普四（徳風）岸姫（竹司）合邦（宝珠）日連記（綾登）弁慶（品子）太十（土口）一の谷（蘭玉）鈴ヶ森（三松）二日目 御祝儀（登山）腰越状（首枝）沼津（登照）太十（組次）合邦奥（三笠）安達（綾登）新口村（貴昇）志津寺（マ）（大路）掛合阿波鳴門（小松）甫 三日目 御祝儀（宝山）太十奥（三峰）沼津（二声）弁慶（南玉）三人上戸（美登志）梅由（梅玉）本蔵下郎（綾登）掛合十兩幟（小松、甫、栄枝）三味線（勝玉、呂玉、甫、千代万、栄枝、寿玉）	十二日（初日）御祝儀（入登）本下（三）藤（三）司（三）梅忠（三）（小松）酒屋（友鶴）（三）野崎（三）（千房）寺子屋（三笠）太（三）（十）（土口）（三）（首枝）十三日（二日目）御祝儀（登山）太十（友鶴）御所桜（品子）先代萩（松月）酒屋（三）梅由（綾登）妙心寺（三）（美登志）松玉邸（三）玉（三）糸竹本勝玉、呂玉、千代寿
12 20 13 00	19 30 20 31	20 40 21 05	午後六時より 初午祭奉納義太夫大会	午後六時より 室谷綾登氏内地引揚送別義太夫大会	午後六時より	午後六時より 入場無料	午後六時半より

8 21 3 2 ／	8 16 3 2 ／	8 13 3 2 ／	8 5 3 2 ／	7 17 3 2 ／	7 14 3 2 ／	6 24 3 2 ／	6 15 3 2 ／	6 14 3 2 ／	6 9 3 2 ／	6 5 3 2 ／	5 31 3 2 ／	5 26 3 2 ／	5 17 3 2 ／	5 2 3 2 ／	4 21 3 2 ／
ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	義太夫会 登氏／歓迎	竹本七五三	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	素人義太夫 会
(女義) ラジ オ	(女義) ラジ オ	(文楽) ラジ オ (ドレ コー)	(素義) ラジ オ	(素義) ラジ オ	(素義) ラジ オ	(素義) ラジ オ	(素義) ラジ オ	素義 義太夫会	素義 義太夫会	(素義) ラジ オ	(素義) ラジ オ	(素義) ラジ オ	(素義) ラジ オ	(素義) ラジ オ	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
8 21 3 2 ／	8 16 3 2 ／		8 5 3 2 ／	7 17 3 2 ／	7 14 3 2 ／	6 24 3 2 ／	6 15 3 2 ／	6 14 3 2 ／	6 9 3 2 ／	6 5 3 2 ／	5 31 3 2 ／	5 26 3 2 ／	5 17 3 2 ／	5 2 3 2 ／	4 22 3 2 ／
台北	東京	のみ 台北	台北	台南	台北	台北	記載	台北	台北	台北	台南	台北	台北	記載	台北
								末広町							末広町
								楽々園							楽々園
夫 浄瑠璃竹本七五三登太	竹本素女	浄瑠璃竹本大隅太夫・ 三味線鶴澤道八	味線竹本勝玉	浄瑠璃小松崎三松・三 味線竹本勝玉	味線瑞丸玉勝朝・三味 線安松太夫	味線瑞田大力	浄瑠璃玉通家友奴・三 味線瑞田大力	浄瑠璃三吉野	浄瑠璃三吉野	浄瑠璃三吉野	浄瑠璃三吉野	浄瑠璃三吉野	浄瑠璃三吉野	浄瑠璃三吉野	勝玉連
【艶姿女舞衣】三勝半七酒屋の段	未定	御所松堀川夜討（弁慶上使の段）	本朝二十四孝（十種香の段）	飯名手本忠臣蔵六段目勘平切腹の段	梅野由兵衛、迎駕籠、聚楽町の段	近頃河原達引（お俊伝兵衛）	四谷怪談伊右衛門住家の段	掛合／関取千両職（猪名川内の段）	掛合／関取千両職（猪名川内の段）	掛合／関取千両職（猪名川内の段）	御所松堀川夜討（弁慶上使の段）	傾城恋飛脚（新口村の段）	伊賀越道中双六／平作腹切の段	艶姿女舞衣（酒屋の段）	御祝儀（入登）弁慶（三三）（白？）堀川猿廻 し（友鶴）寺子屋（長八陣）勝登）先代萩 （三松）野崎（三笠）太十（松月）百度平（美 登志）日吉丸（品子）又助（新喜楽千奴）三三 （梅由？）（新喜楽千房）儀作（首枝）糸勝玉 千代寿）
20 .. 30 .. 21 .. 20	20 .. 00 .. 20 .. 10	20 .. 20 .. 21 .. 20	20 .. 30 .. 21 .. 20	19 .. 30 .. 20 .. 00	19 .. 30 .. 20 .. 00	20 .. 00 .. 20 .. 40	19 .. 50 .. 20 .. 30	竹本七五三登来台歓迎 午後六 時半より	20 .. 50 .. 21 .. 20	20 .. 10 .. （終了不明）	19 .. 30 .. 20 .. 05	20 .. 45 .. 21 .. 20	20 .. 30 .. 21 .. 20	20 .. 30 .. 21 .. 20	午後六時半より

11/25 1932	11/21 1932	11/7 1932	10/26 1932	10/26 1932	10/11 1932	10/8 1932	10/8 1932	9/26 1932	9/25 1932	9/23 1932	9/13 1932
義太夫納会	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	新竹	三吉野義太夫会	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄
素義	(素義)ラヂオ	(文楽)ラヂオ	(素義)ラヂオ	(素義)ラヂオ	素義	素義	(素義)ラヂオ	(女義)ラヂオ	(女義)ラヂオ	(女義)ラヂオ	(素義)ラヂオ
予告	予告	予告	予告	予告	雄報	予告	予告	予告	予告	予告	予告
11/26、27 1932	11/21 1932		10/26 1932	10/26 1932	10/8 1932	10/8、9 1932	10/8 1932	9/26 1932	9/25 1932	9/24 1932	9/13 1932
台北	台北	のみ台北	のみ台南	のみ台北	新竹	台北	台北	招聴(東京)から	招聴(東京)から	招聴(東京)から	のみ台南
堂 南門公会					倶楽部	堂 南門公会					
	線竹本勝玉	浄瑠璃北村三峰、三味	浄瑠璃竹本銀太夫、三味線豊澤新左衛門	線杉藤安松	新竹玉声会	三吉野睦連	線竹本勝玉	竹本組春	竹本組春	竹本組春	浄瑠璃竹本勝玉、三味線(人名不鮮明)
〔初日〕御祝儀(入登)朝顔(串)沼津(組次)香掛(首枝)梅忠(貴昇)揚屋 柳枝(登土)寺子屋(梅玉)(二日)御祝儀(登土)鳴門(串)太十(竹司)志度寺(小松)本下(宝珠)合邦(一声)百度平(琴馬 儀作)三味線(呂玉勝玉、麗子)	撰州合邦辻 合邦内の段	〔本朝二十四孝〕十種香の段	〔晋原伝授手習鑑〕〔寺子屋の段〕	〔伊賀越道中双六〕〔沼津里の段〕	〔忠臣二度目清書(飄)△朝顔日記宿屋(南枝)△玉藻前三道春館(嬰木)△お俊伝兵衛堀川(七二八)△新作喰肉彈三勇士江下武二住家の段(三吉野)〕	△初日(八日)△沼津の里平作切腹(七二八)△彦山権現六助住家(嬰木△時雨畑焼治兵衛内(南枝)△一の谷敏軍記須磨の浦(飄)△阿波鳴戸順礼歌(五色)△新作皇国の精華血染のハンカチ弥谷住家の段(三吉野)△二日目(九日)△岸姫松飯原館(南枝)△忠臣二度目清書(飄)△朝顔日記宿屋(南枝)△玉藻前三道春館(嬰木)△お俊伝兵衛堀川(七二八)△新作喰肉彈三勇士江下武二住家の段(三吉野)	〔日吉丸稚校〕	〔増補生写朝顔話〕〔朝顔日記〕	〔壺坂〕	〔晋原伝授手習鑑〕寺子屋の段	伊賀越道中双六 ― 平作腹切の段―
午後五時半より	20:30-21:20	20:50-21:20	20:50-21:30	20:50-21:30	午後七時より 井台湾等官民有力者出演	午後六時より 新作時局ものあり(肉弾三勇士)	20:45-21:20	森永練乳株式会社提供 前段	七欧無線電機商会提供 前段	00:21-01:30	J・F・A・K 特別サービス 前段 20:30-21:00、後段 21:00-21:30

2 / 19 16 3 3 /	2 / 19 14 3 3 /	2 / 19 3 3 3 /	2 / 19 2 3 3 /	1 / 9 9 3 3 /	1 / 9 8 3 3 /	12 / 19 13 3 2 /	12 / 19 10 3 2 /	12 / 19 10 3 2 /	12 / 19 4 3 2 /	12 / 19 3 3 2 /	11 / 19 29 3 2 /
ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	夫納会 三吉野義太	ラヂオ欄	勝玉連義太 夫納会
(文楽) ラジオ	(女義) ラジオ	(文楽) レコー ド	(文楽) ラジオ	(素義) ラジオ	(女義) ラジオ	(素義) ラジオ	(女義) ラジオ	(文義) レコー ド	素義	(女義) ラジオ	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
2 / 19 16 3 3 /	2 / 19 14 3 3 /		2 / 19 2 3 3 /	1 / 9 9 3 3 /	1 / 9 8 3 3 /	12 / 19 13 3 2 /	12 / 19 10 3 2 /		12 / 19 3 3 2 /	12 / 19 3 3 2 /	11 / 19 29 3 2 / 30 /
台北	大阪		台北	台北	東京	大阪	台北	台北	台北	東京	台北
											末広町
									堂 南門公会		楽々園
浄瑠璃竹本源平太夫、三味線竹本左近	線豊澤仙平	浄瑠璃竹本東広、三味線豊澤新左衛門	浄瑠璃竹本綴太夫、三味線豊澤友糸	鶴澤友糸	線竹本勝玉	竹本小津賀、竹本静香、竹本素昇、竹本榮登	文楽座若手連中	浄瑠璃竹本七五三吉、三味線竹本七五三登	浄瑠璃豊竹つばめ太夫、三味線豊竹仙糸	三吉野睦連	勝玉連
絵本太閤記十段目尼ヶ崎の段	未定	「三十三間堂棟由來」平太郎住家の段	「假名手本忠臣蔵」判官切腹の段	三十三ヶ所花の山「壺坂雲験記」沢市内の段	さよりの夕べ	「假名手本忠臣蔵」七段目掛合	「恋飛脚大和往來」梅川忠兵衛新口村の段	「心中天網島」(新地茶屋の段)	△三月初日 本藏下屋敷瓢、佐倉曙儀作腹切百度平内五色、布四琵琶の段三吉野△四日二日目 八陣八ツ目栗木、酒屋の段五色、三日の九南枝、勘平切腹瓢、沼津七二八、お染久松質屋の段三吉野	「假名手本忠臣蔵」四段目「塩谷館の段」	(初日) 御祝儀(入登)二度目清書(勝登)太十(新喜楽千奴)炬燵(鬼笑)寺子屋(礁風)安達(三峰)柳(新喜楽千房)梅由(梅玉)松王(三松)御祝儀(登山)太十奥(三峰)本下(礁風)又助(勝登)一の谷(寿)弁慶(三松)梅忠(玉枝)鳴門(友鶴)八陣(菅枝)
するものである	19 20 31 21 30	12 20 21 13 00	20 31 21 20	20 31 21 20	19 00 20 30	19 30 20 30	20 45 21 20	12 20 13 00	午後六時より	19 45 20 31	午後五時半より

4 22 3 3	4 21 3 3	1 9 3 3	4 21 3 3	1 9 3 3	4 14 3 3	3 14 3 3	1 9 3 3	3 12 3 3	1 9 3 3	3 5 3 3	1 9 3 3	3 1 3 3	2 27 3 3	1 9 3 3	2 26 3 3	1 9 3 3
けふの催し	義太夫会	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ (女義) レコー	ラヂオ (素義)		ラヂオ (女義)	素義	素義	素義	けふの催し 初午祭奉祝 義太夫大会	ラヂオ欄	ラヂオ (文楽)	ラヂオ欄	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告		予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
	4 22 3 3	1 9 3 3		4 14 3 3	3 13 3 3	3 14 3 3	1 9 3 3	3 13 3 3	1 9 3 3	3 5 3 3	1 9 3 3	3 1 3 3	2 27 3 3	1 9 3 3	2 27 3 3	1 9 3 3
	台北			台北	台北	大阪	台北	台北	台北	台北	台北	台北	大阪		台北	
	堂南門公会				栄座		栄座	事務所 内稲荷社	西門市場						楽々園	
	豊竹富光など7名	浄瑠璃豊竹昇之助、三 味線豊澤東重	浄瑠璃豊竹昇之助、三 味線豊澤東重	線竹本勝玉	浄瑠璃吉田貴昇、三味 線竹本勝玉	浄瑠璃豊竹団司、三味 線豊澤小住	各師門下陸芸連					竹本左近	浄瑠璃竹本南部太夫 三味線野澤吉弥		当地素義聯合主催	
		傾城阿波鳴門、巡礼歌の段	傾城阿波鳴門、巡礼歌の段	恋飛脚大和往來、梅川忠兵衛新口村の段	恋飛脚大和往來、梅川忠兵衛新口村の段	十三日 御祝儀玉の入船(入登)矢口(七二八) 寺子屋(五色)柳(田鶴子)壺阪(松月)蝶花 形八(土口)揚屋(松風)お胸才三(菊水)恋 飛脚(七五三)桂川連理欄(三吉野) 十四日 式礼三番叟(可祝)嘉平次(南枝)彦 山権現(翠木)尼ヶ崎(飄)恋飛脚(貴昇)昔 原四(竹司)弁慶上使(新)合邦(可笑)伊賀 越(鳳玉)熊谷陣谷(ママ)(雷雀)忠臣蔵判 官切腹(三吉野)	未定					「伽羅先代萩」(政岡忠義の段)	恋娘昔八丈(鈴ヶ森の段)		△初日 御祝儀(入登)又助(勝登)白石揚屋 (登照)壺坂(彫司)弁慶(南玉)太十(まきと) 合邦(松風)三勝酒屋(源平太夫)お初仇討(左 近) △二日目 御祝儀(登山)二度目(勝登)酒屋 (菊水)百度平(五色)本下(礁風)御所校(品 子)合邦(鳳玉)太功記(源平太夫)阿波鳴門 (左近) 三味線(左近、一平、三吉野、勝玉、千蔵、甫)	午後六時より 源平太夫・左近 歓迎「予て馴染のある」源平太
同上	午後六時より	12 20 13 00	12 20 13 00	20 31 21 20	20 31 21 20	19 00 19 30	野澤(加藤)三吉野還暦祝賀 指導歴十二年	午後七時より		20 31 (終演記載なし)	19 00 19 50					

8 6	1 9 3 3		8 1	1 9 3 3		7 24	1 9 3 3	7 21	1 9 3 3	7 20	1 9 3 3	6 8	1 9 3 3		5 30	1 9 3 3		5 24	1 9 3 3	5 21	1 9 3 3		4 25	1 9 3 3
ラヂオ欄		義太夫大会				ラヂオ欄		ラヂオ欄		ラヂオ欄		ラヂオ欄			勝玉連義太夫会			ラヂオ欄		ラヂオ欄			万華浄楽会の義太夫会	
(ラヂオ) レコー		素義				(女義) ラヂオ		(女義) ラヂオ		(女義) ラヂオ		(女義) ラヂオ			素義			(男義) ラヂオ		(女義) ラヂオ			素義	
予告		予告				予告		予告		予告		予告			予告			予告		予告			予告	
		8 1	1 9 3 3			7 24	1 9 3 3	7 21	1 9 3 3	7 20	1 9 3 3	6 8	1 9 3 3		05 30 31	1 9 3 3		5 24	1 9 3 3	5 21	1 9 3 3		4 25	1 9 3 3
のみ	台北		台北			台北		台北		台北		台北			台北			台北		東京			台北	
			西門町												末広町									
			所 神社 社務	台北 稲荷											楽々園								館 万華 秀明	
浄瑠璃 線豊澤 新左衛門	浄瑠璃 竹本 太夫					竹本東猿		竹本東猿		竹本東猿		線 竹本 メ登 太夫	浄瑠璃 竹本 メ吉 三味		勝玉連			野澤三吉野					万華浄楽会主催	
本朝二十四孝、十種香の段		珠 鯛谷 古八 (貴井)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)	寺子屋 (土口) 合邦 (宝)
昼間娯楽時間(12時台)の内																								

12 / 10 9 3 3 /	12 / 10 9 3 3 /	11 / 29 9 3 3 /	11 / 26 9 3 3 /	11 / 1 9 3 3 /	9 / 27 1 9 3 3 /
日の番組 ラヂオ／今 組	日の番組 ラヂオ／今 組	夫納会 勝玉連義太	今日の番組 （文楽） レコー	竹本鐘龍師 引退の慰安 義太夫会	追善義太夫 大会
（女義） ラヂオ	（女義） ラヂオ ド）	素義	（文楽） ラヂオ	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告
12 / 10 9 3 3 /		11 / 1 9 3 3 / 29 12 /		11 / 1 9 3 3 / 1 4	9 / 27 1 9 3 3 / 30
東京		台北		台北	台北
		京町			
		館 朝日小会		堂 南門公会	堂 南門公会
力弥 三味線 外はやし連中	由良之助 おかる 平石衛門 九太夫 竹本東広 竹本旭次 竹本久国 竹本辰平	勝玉連	浄瑠璃竹本藏太夫、三 味線豊澤新左衛門	台北素義連	
仮名手本忠臣蔵、七段目（一力茶屋の段）	伊賀越平作内の段	玉、北投小春 邦奥、白石嘶、梅由、三味線（勝玉、友玉、寿玉、	天網島時雨炬燵 紙治内の段	△初日 御祝儀、朝顔日記、饅谷、太功記、揚屋、野崎村、御所桜、合邦、酒屋 △二日目 御祝儀、勘平腹切、太功記、先代萩、合邦、熊谷陣屋、玉澤前、赤垣立、御所桜 △三日目 妹背山、曾我対面、太功記、天の網島、鏡山、酒屋、寺子屋、酒屋、合邦 △四日目 御祝儀、寺子屋、太功記、御所桜、百度平内、堀川、阿波鳴戸、酒屋、先代萩	△二十七日 志度寺（栄枝）竹雀（友栄）松王（蘭玉）矢口（三峰）鳴門（田鶴子）新の口（一声）二ツ玉（菊水）酒屋（七五三吉） △二十八日 本下（小路）鳴門（友二）野崎（柳枝）合邦前（藤司）堀川（友路）寺小屋（梅玉）先代（竹司）沼津（翠馬） △二十九日 合邦前（友玉）酒屋（三石）合邦奥（宝珠）岸姫（組次）沼津（松風）壺坂（南玉）日吉丸（貴昇）鎌腹（雷雀） △三十日 菅四（南玉）陣屋奥（菅枝）三吉子別（三松）太十（龍玉）忠六（可笑）寺小屋（土口）酒屋（風玉）沼津（七五三登）△三味線三吉野、七五三登、友希、勝玉、富光、大九七五三吉、友玉、寿玉
19 .. 40 .. 20 .. 30	昼間娯楽時間（12時台）の内	午後五時半より	昼間娯楽時間（12時台）の内	午後六時より 竹本鐘龍師は渡台以来三十余年間義太夫界に尽し今回引退することとなった 同師引退慰安義太夫会	午後六時より 金柿大路追善

2 1 9 3 5 ／	11 23 9 3 4 ／	11 23 9 3 4 ／	8 2 9 3 4 ／	7 26 9 3 4 ／	3 24 9 3 4 ／
二葉連の義 太夫初会	義太夫納会	義太夫納会	大阪女義太 夫／竹本雛 駒座／初女 義 日、二日目 番組	関西女義太 夫一行来白 女義	勝玉連義太 夫会
素義	素義	素義	女義	女義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告
2 1 9 3 5 2 ／	11 23 9 3 4 24 ／	11 23 9 3 4 24 ／	8 1 9 3 4 2 ／	8 1 9 3 4 5 ／	3 24 9 3 4 25 ／
台北	台北	台北	台北	台北	台北
	文化村				
堂南門公会	部城東倶楽	堂南門公会	栄座	栄座	大桶埴供 楽部
二葉連	勝玉連	二葉連	竹本雛駒一座	関西女義太夫大阪因会 最高幹部合同一行(竹 本国香、竹本国秀、竹 本雛若、豊竹昇駒、竹 本久国、竹本雛駒、 味線豊澤烏之助)	勝玉連
	△初日御祝儀(美登志) 太十(友鶴) 十種香(松月) 鳴門(品子) 安達(三峰) 宿屋(勝司) 重 の井子別(三松) 拵合野崎村(総出) △二日目御祝儀(勝司) 弁慶(三峰) 寺子屋(二 口) 谷(マ) 組打(南玉) 酒屋(友鶴) 新口 村(静糸) 二ツ玉(菊水) 拵合茶屋場(総出) 糸(勝玉、友玉 千代寿)	△初日八陣(嬰木) 源藏出立(南枝) 昔原(五 色) 寺小屋(松風) 猿廻し(七二八) 壺坂(つ るえ) 忠九(零馬) △二日目重の井(つるえ) 伊賀越(七二八) 日 吉丸(五色) 野崎(南枝) 合邦(嬰木) 鏡山(雲) 布引(菅枝) ―三味線鶴澤才五郎 ツレかよ、 つるえ	△初日 一の谷須磨の浦―勝登、三十三間堂柳 ―国雪、日吉丸五郎助内―雛若、お染久松野崎 村―昇駒、摂州合邦ヶ辻―久国、三十三所壺坂 ―雛駒、糸―豊澤烏の助 △二日目 迎駕梅の由兵衛―勝登、忠臣蔵勘平 切腹―国雪、和台合戦市若初陣―雛若、岸の姫 松飯原館―昇駒、おはん長右衛門帯屋の段―久 国、先代萩御殿―雛駒、糸―豊澤烏の助	御祝儀(入登) 御所桜、寺子屋(北投一口) 鳴 門、太十(白峰) 先代(鳴門) 友鶴(本下、酒 屋(影司) 鈴ヶ森 太十(勝司) 沼津合邦(基 隆東) 安達、壺坂(三松) 梅忠(松月) 三 味線(勝玉)	
午後六時より	午後六時より	午後六時より		「十年來」の来白 台北検査・白 北素義界因連の後援	午後六時より

12/15 9/3 5/5	12/8 9/3 5/5	12/7 9/3 5/5	11/19 9/3 5/5	10/12 9/3 5/5	10/11 9/3 5/5	8/3 9/3 5/5	4/18 9/3 5/5
大会 新声会 義太夫 勝玉	三吉野睦連 義太夫 納会	三吉野睦連 義太夫 納会	戦 義太夫 新一の 策	政談演説で 義太夫 一席	勝玉連 義太 夫会	義太夫会	送別義太 夫会
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	雑報	予告	予告	予告	予告
12/15 9/3 5/5	同上	12/7 9/3 5/5	11/19 9/3 5/5	同上	10/11 9/3 5/5	8/3 9/3 5/5	4/18 9/3 5/5
台北		台北	新竹		台北	台北	台北
栄町							栄町
理容会館		堂 南門公会	ブ 鉄道クラ		堂 南門公会	堂 南門公会	館 朝日小会
新声会・勝玉会		三吉野睦連	有本兼治		勝玉連	二葉連	
		初日御祝儀(入登)酒屋(五色)儀作腹切(七二八)熊谷陣屋(瓢)合邦(豊木)近江八つるさ古八(三吉野)二日目寿司屋(豊木)本下(豊堀川(七二八)菅四(五色)壺坂(つるさ二十四孝勘助内(三吉野)糸三吉野	太閤記		△初日 御祝儀(入登)鎌三(勝登)鳴戸(友栄)日吉(秀豊)梅忠(勝司)沼津(松風)堀川(蘭玉)掛合須磨の浦(南玉、龍玉)△二日目 御祝儀(入登)朝顔(勝司)菅四(松濤)梅由(勝登)三日九(龍玉)太十(白峯)先代(南玉)本下(一口)三味線一竹本勝玉友玉	△初日 御祝儀(入登)三日九(艶司)又助(千奴)梅田(可笑)二度目(友栄)布四(美登志本下(南玉)菅四(長楽)宿屋(千房)沼津(二声)△二日目御祝儀(入平)鳴津(ママ)(白峯)安達(三峯一の谷(瓢)新の口村(松風)阿漕(豊木)日吉(品子)壺坂(静糸)八陣(勝司)忠九(琴馬)△三日目御祝儀(入昇)先代萩(三松)鳴門(勝登)又助(千蔵)梅忠(貴舟)忠四(美登志)炬燵(鳳玉)忠六(多見)堀川(蘭玉)白木屋(三吉野)△四日目御祝儀(入楽)弁慶(松濤)合邦(藤司)十種香(松月)菅四(一口)野崎(友鶴)明島(雷雀)安達(栄玉)二ツ玉(菊水)布四(菅枝)△三味線鶴澤才五郎、同竹本勝玉、村崎友玉、吉田大力、市野千代寿	市野美登志氏送別義太夫大会
		午後六時半より	新竹市議候補石井員夫選挙演説の露払い 成功すれば旭町クラブでも催行予定		始政四十周年記念 午後六時より	午後六時より	

2 / 18 9 / 3 6 / 6	2 / 15 9 / 3 6 / 6
五目 義太夫番組 ／四日と 竹本勝玉の 素義	で り理容会館 義太夫大会 ／十五日よ 竹本勝玉の 素義
予告	予告
同上	2 / 15 9 / 3 6 / 19
	台北
	栄町
	理容会館
司) 加賀見山 (文華)	初日 傾城阿波鳴戸 (入登) 朝顔日記 (長門) 伊賀越 (吾妻) 金毘羅御利生 (豊木) 仮名手本 忠臣蔵 (常竹) 絵本太功記 (口) 増補忠臣蔵 (朝 日) 明烏雪曙 (つるゑ) 仮名手本忠臣蔵 (金吾) 二日目 絵本太功記 (富科) 御所松 (平和) 傾 城阿波鳴戸 (友栄) 先代萩 (品子) 三日太平記 (龍玉) 摂州合邦ヶ辻 (つるゑ) 鎌倉三代記 (栄 玉) 菅原伝授手習鑑 (蘭玉) 恋女房染分手綱 (三 松) 三日目 日吉丸権校 (勝登) 御所松 (秀豊) 菅 原伝授手習鑑 (長楽) 増補忠臣蔵 (飄) 蝶花形 (すみはる) 仮名手本忠臣蔵 (南玉) 近頃河原 達引 (七二八) 仮名手本忠臣蔵 (菊水) 御所松 (雷雀)
十八日 (火曜日) 彦九 (友栄) 三勝半七酒屋 の段 (松壽) 朝顔日記 (勝登) 鎌倉三代記 (栄 玉) 千代萩 (友路) 菅原伝授手習鑑 (円治) 近 頃河原達引 (鳳玉) 古手屋八郎兵衛 (貴昇) 迎 龍梅野由兵衛 (梅玉) 十九日 (水曜日) 御祝儀 (友栄) 松王 (勝司) 日吉丸 (松壽) 菅四 (一口) 合邦 (藤司) 堀川 (友路) 一之谷嫩軍記 (樵風) 摂州合邦ヶ辻 (艶 司)	竹本勝玉渡台二十五年記念 午後六時より
同上	

あとがき

本研究課題に申請するきっかけは王冬蘭先生が作ってくださった。満州や台湾といった「外地」での能楽について研究されていた王先生が、『台湾日日新報』を調査するなかで、台湾での歌舞伎、浄瑠璃の記事を見たが、まだ誰も研究していないのではないかと、関連研究者と一緒にチームを組んで研究できないだろうかというご提案いただいた。幸運にも、歌舞伎研究者として日置貴之氏、浄瑠璃・義太夫研究者として川下俊文氏の参加を得、基盤研究Cに応募したところ、運よく採用された。台湾へ二回訪問し、国立台湾図書館の端末で『台湾日日新報』の記事から、「歌舞伎、劇場、演劇、浄瑠璃、義太夫」など、ひとまずのキーワードで検索した記事を大量にPDFファイルでダウンロードし、劇場跡を現地調査するなどして帰国し、データをもとにそれぞれに分析を進めることとし、あらためて台湾での追加調査をする予定であった。しかし、新型コロナウイルスの流行により、一時研究がすすめられなくなったのである。苦肉の策として、オンラインで関連研究者の講演会を行い、想定より多くの方に参加いただき、この課題の関心の高さを再認識することもできた。本書では、その時講演いただいた岩澤氏、蘭田氏に講演録のテープ起こし原稿に基づいて文章を寄稿いただいた。この交流のなかで、有料電子コンテンツ「漢珍知識網」（漢珍數位圖書 <https://www.tbmc.com.tw/>）の存在を教えてください、渡航できない状態でもなんとか資料調査を継続できることを知った時は、胸をなでおろすとともに急速に発達する電子コンテンツの恩恵をひしひしと感じた。

二度目の科研申請では、諸事情により中尾の個人研究としての申請となったが、王先生、日置氏、川下氏とも

に研究協力者として協力いただいた。特に川下氏にはおよそ三年かけて粘り強く義太夫・浄瑠璃記事の翻刻をしていただき、一覧表の整理や入念な注も付けていただいた。厚く御礼申し上げます。資料編は、『明治の能楽』『明治の演芸』などの倉田喜弘氏の仕事に念頭にあり、同様に日治台湾における演劇興行、当該時期の演劇・芸能研究などに関心を寄せる研究者に新たな視座を提示し、研究の進展の一助となれば幸いである。

代表者がいつものように取り掛かりが遅く、年度末に無理なスケジュールで冊子印刷を進めていただくことになったが、快く引き受けていただいた昭栄印刷株式会社の高橋巧氏にも感謝申し上げます。そして貴重な研究成果を本冊子のために提供いただいた岩澤氏、藺田氏、日置氏、川下氏、王先生に重ねて厚く御礼申し上げます。

なお、本研究課題では、本来二〇二五年度が最終年度であったため、当初は最終報告書として浄瑠璃・義太夫だけでなく、歌舞伎、壮士芝居なども含めた資料編と索引をつける計画していた。しかし壮大な計画すぎたようで、結局は浄瑠璃・義太夫の資料編のみとなった。また、このあとがきを記している段階で延長申請をしている。もし申請が認められたら、本書は中間報告書となり、続編として索引と、せめて歌舞伎記事の資料編を完成させて最終報告書として考えている。

二〇二六年三月吉日

中尾 薫

著者紹介（執筆順）

中尾 薫（なかお かおる）

1978年大阪府生。大阪大学大学院人文学研究科芸術学専攻演劇学コース教授。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。早稲田大学坪内博士記念演劇博物館助手、大阪大学文学研究科講師、准教授等を経て2024年10月より現職。専門は、演劇学・芸能史（特に能楽）。主な共著にPellecchia, Diego, Nakao, Kaoru, Shepherd, Simon ` *Noh Japanese Classical Dance-drama*, Methuen Drama, 2025, など。

岩澤 侑生子（いわさわ ゆきこ）

1986年京都府生。俳優、司会、中日翻訳家。京都造形芸術大学（現…京都芸術大学）映像舞台芸術学科卒。新国立劇場演劇研修所7期修了生。2018年に台湾教育部華語文獎学金を得て台湾に留学。2022年台湾淡江大学修士課程修了（文学）。修士論文は『日本統治期台湾における青年劇の研究』、他にも胡弓かなた著『あきたぼういず活動記』に「あきたぼういずの台湾での影響」を寄稿。文化庁令和6年度新進芸術家海外研修制度演劇分野研修員。

蘭田 郁（そのだ いく）

1976年京都府生。大阪大学中之島芸術センター特任研究員。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位習

得退学。博士（文学）。専門は近現代日本の芸能史、民俗音楽。共著『浪花節の生成と展開―語り芸の動態史にむけて』（せりか書房、2020年）、『ちんどん屋・宣伝・広告と芸能のハブとなる生業』（大阪大学出版会、2024年）、論文「明治半ばから大正期初めにおける浪花節芝居（節劇）の展開―都市部の興行と上演形態の変化をめぐる」（『日本伝統音楽研究』第20号、2023年）

川下 俊文（かわした としふみ）

1989年埼玉県生。2022年東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。修士（学術）。日本大学・明星大学非常勤講師。専門は義太夫節浄瑠璃を主とした日本近世・近代文学および芸能史。論文「戦争表象としての愁嘆場―素浄瑠璃『薫梅忠義魁』の成立」（『超域文化科学紀要』20、2016）、コラム「上山草人と三枚の葉書」（『文京区立森鷗外記念館所蔵 森鷗外宛書簡集4（かーこ）編』、文京区立森鷗外記念館、2021）、著書『越中富山の浄瑠璃文化』（共著、1万年堂出版、2024年）など。

日置 貴之（ひおき たかゆき）

1987年東京都生。演劇研究。明治大学情報コミュニケーション学部教授。単著『変貌する時代のなかの歌舞伎 幕末・明治期歌舞伎史』（笠間書院、2016年）、編著『真山青果とは何者か?』（共編、文学通信、2019年）など。

王 冬蘭（おう とうらん）

1951年中国ハルビン市生。1983年中国黒竜江省芸術学校（演劇専攻）卒業、黒竜江省文化芸術幹部学校教員に就任。1985年来日、1995年大阪大学文学研究科芸術学専攻博士課程を修了。後、複数の大学の非常勤講師、帝塚山大学副教授、教授を経て、現在民間の中国語学校の教員。主な著作、翻訳に、『世阿弥』（翻訳、山崎正和著、中国海天出版社、1995年）、『風姿花伝』（翻訳 世阿弥著、中国社会科学出版社、2000年）、『鎮魂詩劇―世界文化遺産 日本古典戯劇「能」概貌』（中国戯劇出版社、2003年）、『能における「中国」』（東方書店、2005年）、「日治時期台北大村武能舞台研究」（論文、『戯劇学刊』第34期、2022年）など。

「日本統治下台湾における歌舞伎・浄瑠璃を中心とする諸芸能興行研究」

JSPS 科研費 23K00117 研究成果報告書

2026年3月31日発行

発行者 研究代表者 中尾薫（大阪大学大学院人文学研究科）

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5

印刷・製本 照栄印刷株式会社

